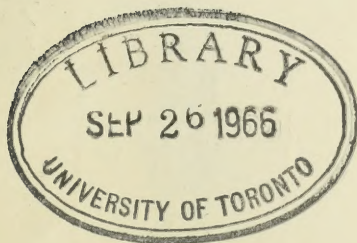
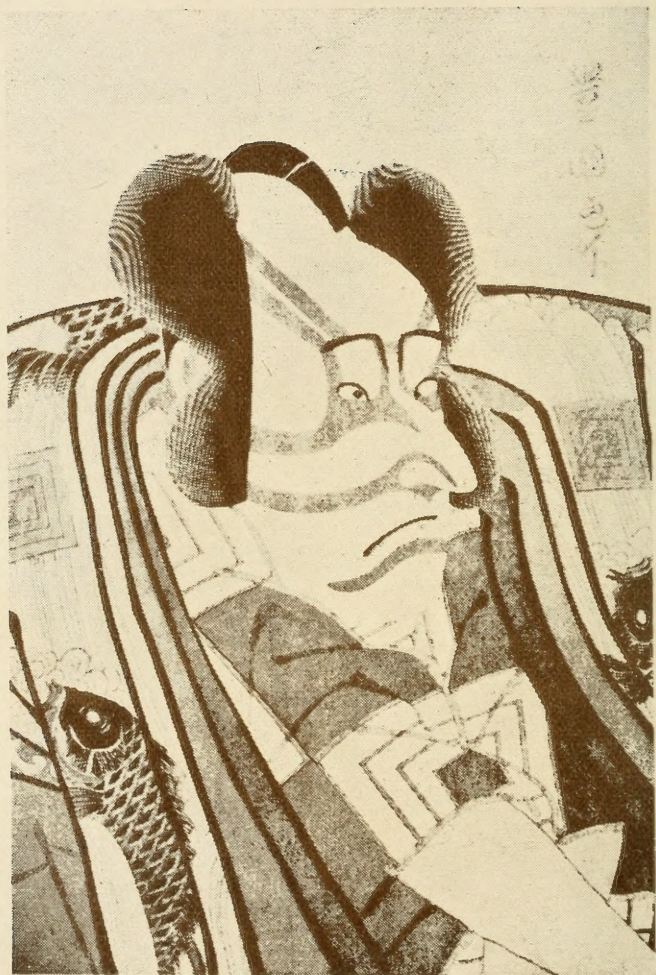
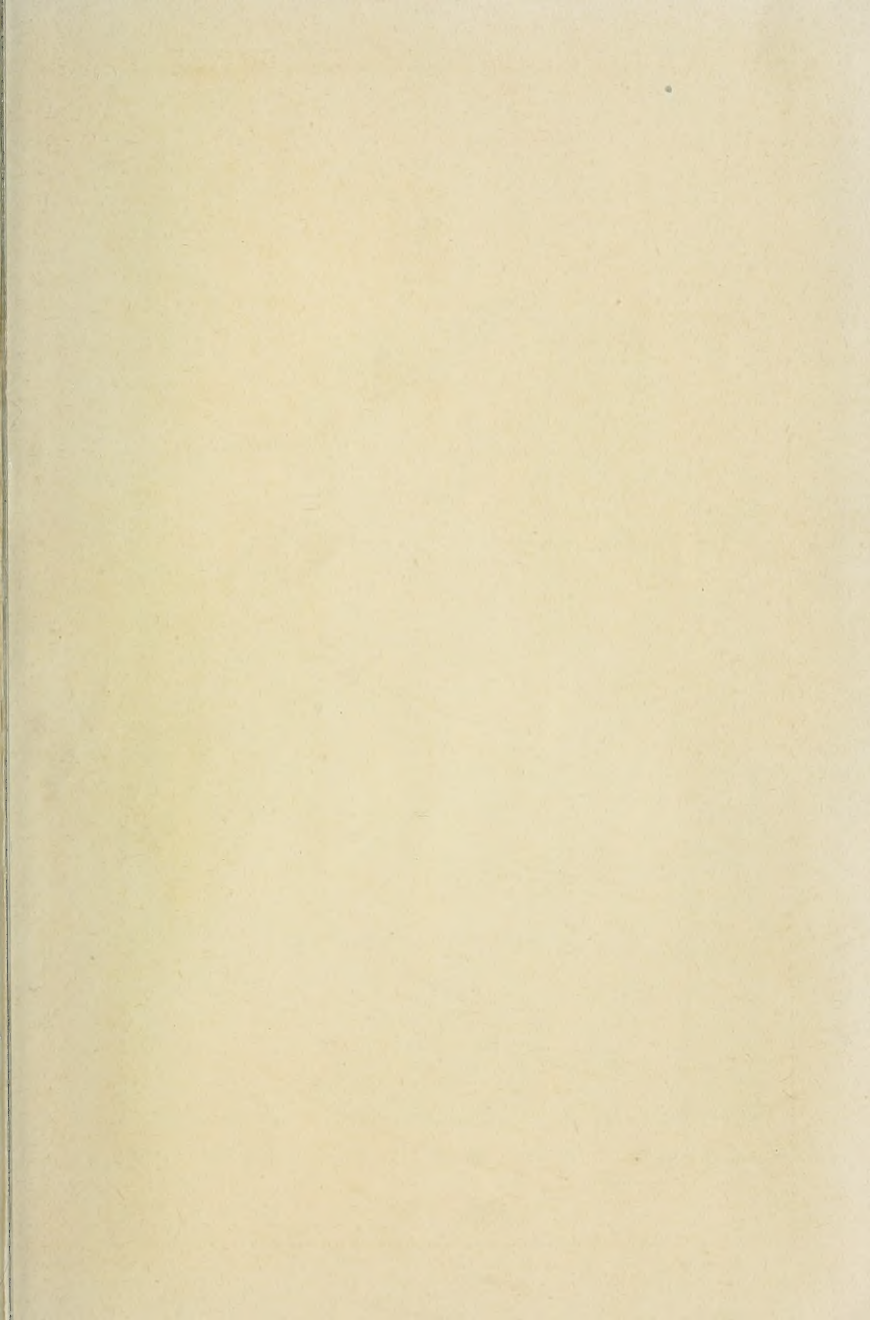
日本戲曲全集
第十六卷

伊達騷動狂言集

東京
春陽堂版

寛政十一年二月中村座上演「大三浦達壽」六世團十郎の荒獅子勇之助

日本戯曲全集第十六卷　目次

伊達騷動狂言篇

應仁記
時代狂言
二河白道
御家狂言
解脫物語
世話狂言

東山殿が茶道好みに政岡が運び手前
の水仕業花の手補に色の毒はなし釜
たる筒井筒外記左衞門が武士の意地
仁木直則が刄傷の事蹟

足利九代風流增補榮

室町筋の當世は浮世戸平が手細工の
浮世莚を敷寢の夢も三郎兵衞隱しか
ねたる絹川堤祐海和尙が六字の名號
赤松山名が念佛の由來

姉高尾は
西方寺の
紅葉塚

妹の累は
龍田川の
紅葉流

伊達競阿國戲場

四番續

文政元年八月中村座所演繪番附の表紙

伊達競阿國戲場

序幕

島原西川屋の場

役名――足利左金吾頼兼。傾城、高尾。同、薄雲。同、高窓。同、高崎。仲居、おやま。山中鹿之助。常陸國幸鬼貫。黒澤官藏。奴、萬平。同、團平。同、栗平。同、喜次平。西川屋女房、おさく。三浦屋佐助。中間、門平。太鼓持ち、鸚鵡市兵衛。鬮取、絹川谷藏。

本舞臺、三間の間、正面、二重舞臺。上の方に西川屋と白抜きに染めたる柿色の長暖簾あり、簾一面に掛け、所々に櫻を植ゑ、垣を結ひ廻しあり、幕の内より、雛の竈、手桶、膳椀、俎板、庖丁を取散らし、爰に、薄雲、高窓、高崎、着流し傾城の形にて、雛の料理拵らへして居る。薄雲は竈に向ひ火を焚いて居る。高窓、高崎は膳椀を洗うて居る。おやま、重を詰めてゐる。この模様にて、騒ぎ唄にて、幕明く。

やま　サア〳〵、やう〳〵重詰めは出來ましたが、おまんまはようござんすかえ。

薄雲　先刻にから此やうに焚いては居れど、どうも水が引かぬわいな。

高窓　そりや大方、水が多うござんしたのであらうわいな。

薄雲　イエ〳〵、本當の米を入れたゆゑ、水は小柄杓に一杯入れたわいな。

高崎　それでは粥のやうにならうわいな。

薄雲　そんなら又、後から米を入れゝばよいではないかいな。

やま　どうしてマア。それでは粥と米と別々になるわいな。

薄雲　さうして、どうしたらよからうぞいな。

高窓　好い事がござんす。それは捨てゝしまうて、仕直しなさんしたがようござんす。

やま　イエ〳〵、それでは、もう追ッつけ殿さんも高尾さんも、お出でなさるに間もないに、折角の料理拵らへが

な。今日の雛の料理拵らへも、殿さん賴さんの思ひ付き。高尾さんと二人で、女夫雛のやうに、この膳に坐りなされるを、樂しみぢやと云うてお出でなさんしたが、此やうに飯が出來いでは、ひよんな事ぢやわいな。

高崎　また高尾さんが笑ひなんすであらうわいな。

やま　わたしは、この七輪に掛けて置いた蕗のおつけ、これさへ仕舞へばようござりますわいな。サア、お膳立もようござんすかえ。どうぞすつぱりと出來てしまうた所へ、お出でなされるやうにしたいものでござんす。

ト向うを見て

オヽ、アレ〳〵、もうあそこへ、殿さんも御機嫌かして、よろ〳〵もの。太夫さんもお出でなさんしたわいな。

薄雲　ドレ〳〵。

ト向うを見て

四人　ほんになア。

ト太鼓入りの出の唄になり、賴兼、羽織衣裳、小さ刀の形、紅染めの手拭にて頭を巻き、誂らへの伽羅の下駄を穿き、扇をかざし、出て來る。後より、高尾、傾城、襠裲の形、駒下駄を穿き、出て來る。後より、照葉、くれなゐ、禿の形にて駒下駄を穿き、出て來る。

後より、山中鹿之助、羽織衣裳にて、賴兼が刀を袱紗にて持ち、出て來る。後より、西川屋の女房おさく、やつし茶屋女房の形にて、出て來る。續いて、門平、奴の形にて出て來る。皆々、花道にとまる。

賴兼　成る程、この島原の櫻時、色を含める仲の町に、太夫と連れ立つ面白さ。この和かみが、どうして忘れられうぞ。なんと太夫、其方はどうぢや。

高尾　サア、わたしは殿さんと此やうに連れ立つも、冥加に餘る有り難さ。ならう事ならいつまでも、お側離れぬわたしが願ひ。

賴兼　又わしを嬉しがらせるのぢやな。

鹿之　アイヤ、我が君へ申し上げまする。あれへ參りしは、仁木どのゝ使ひとござりますれば、人の譏りも如何なれば、少しは御遠慮遊ばされ、然るべう存じまする。

門平　イヤ〳〵、お心遣ひなお使ひではござりませぬ。兎角この里へ參る程の儀でござりますれば、決して我れ我れしきに御遠慮は、恐れ入りまするでござりまする。

さく　御用の筋は存じませねど、只今鹿之助さまのお詞の通り、人の思惑、もしもの事がござりましてはと、お附き申して居るうちも、大抵心遣ひな事ぢやござりませぬ。

マア、それは格別、ちつとも早う。
鹿之　西川屋へお入りあられませう。
頼兼　成る程、石部金吉、イヤ、恐れ入る／＼。然らばあれなる西川屋へ、參上仕るでござりませう。ハヽヽヽ
「サア／＼、太夫、おぢや。
高尾　子供來や。
禿二　アイ／＼。
トまた鳴り物になり、皆々、舞臺へ來る。頼兼、上の方、その次に高尾、少し下がりて、鹿之助、門平、皆皆住ふ。
薄雲　殿さん。
高窓　高尾さん。
四人　今お歸り遊ばしたかいなア。
頼兼　イヤア、君達のお詞にあづかり、お嬉しく存じ參らせ候。今日は太夫を連れて、この島原の仲の町を櫻見物。アヽ、草臥れた／＼。時に、約束の料理は、定めて上鹽梅であらうが。
薄雲　サア、早うお二人へ上げうと思うて、疾に出來て居りますわいなア。
頼兼　ドレ／＼、そんなら早速お膳から改めようか。
ト鑵の釜の蓋を取つて
ヤア、こりや、これを喰うたらば、舌を切られうも知れぬわい。
三人　そりや、なんでえ。
頼兼　悉皆糊ぢやわい。ハヽヽヽ。それはさうと、仁木より參りし使ひとは、なんぞ心がゝりな事ではないか。どうぢや／＼。
門平　イヤ、憚りながら、お心にかゝりまする儀ではござりませぬ。一兩日以前より、御歸館なき殿樣ゆゑ、もしやお立ち辛いにも入らせらるゝか、その樣子とくと伺ひ立歸れと、彈正さまより申し付けられましたるゆゑ、わざ／＼これまで推參仕つてござりまする。鹿之助さま、御前へこの由よろしう仰せ上げられ下さりませう。
頼兼　聞いた／＼。とつくりと承はつた。それで頼兼も落ちついた。罷り歸らば彈正に、決して案じるに及ばぬ、廓が嫌になれば、直ぐに歸ると申せ。大儀であつた。ソレ鹿之助、彼奴には酒でも呑ましてやれ／＼。
鹿之　畏まつてござりまする。コレ／＼、仲居ども、この者を同道してくりやれ。
やま　畏まりました。そんなら、お前、サア、奧へお出でな

されませ。
門平　左樣ならば、御意に甘へまして。
さく　緩りとお上がりなされませ。
門平　然らば御免下されませう。
やま　サア、お出でなされませ。
　ト合ひ方になり、おやま、先に門平、奥へ入る。
頼兼　イヤモウ、寄つて觸る奴等が、皆堅藏には困り切つた。此やうに堅うては、色酒と云ふものが呑めるものぢやない。又この茶屋の女房がやうに、堅うても詰まらぬものぢや。其方もちと氣を輕う物を云やいの。太夫と一つに抱かれて寐て居る枕頭へ來ても、三つ指で左樣然らばでは、氣が詰まつてなるものではない。ちと洒落なりと稽古しや〳〵。
さく　イヤモウ、常から殿樣にも、左樣思し召して下さりまするは、有り難う存じまする。有やうは物事を和らかに、堅い事を申しますまいと存じましても、自墮落な事がどうもなりませぬ。なんぼお客人ぢやと申しましても五日も三日も居續けになりまするは、惡うござりまする。これからは殿樣にも、お居續けは御意見申して、キッとお斷わり申しまする心でござりまする。

鹿之　したり、ハテサテ、おてまへは、斯樣な色里の揚屋の女房に似合はぬ實體なる人。ようぞ居續けの御諫言申しておくりやつた。斯く申す山中鹿之助なぞも、御奉公とは申しながら、心底になき廓の御供仕り、頼兼公と御同席し、遊君と交はり、一酒一肴して酩酊は仕れど、なか〳〵君傾城なぞに性根は奪はれ申さぬて。
さく　傾城に性根を奪はれぬとは、それは誠のお侍ひ樣でござりまする。
頼兼　イヤ、呆れて物が云はれぬ。揚屋の女房の野暮堅いは、因果人ぢやと思うて聞かぬ顏もせうが、鹿之助、其方までが今の話しは、なんの事ぢや。モウ〳〵、拜む程に、その理窟めいた事は、云うてくれるな〳〵。
高尾　ほんに鹿之助さん、お前もなんでござんすぞいな。お屋敷はお屋敷、廓は廓、物事に角のない殿さんを見習うて、ちと丸ならしやんしたがよいわいな。
薄雲　廓の法度と云ふは、身持ちの意見と左樣然らば。
高窓　それ〳〵、律氣は野暮の唐名ぢやわいなア。
高崎　女子の惚れる殿振りで、色事嫌ひとは
三人　オヽ、笑止。
鹿之　默らう。如何に傾城なればとて、斯く云ふ鹿之助を

文政元年八月中村座所演繪番附

嘲弄なすか。いま一言舌頭返さば、手は見せぬぞ。

ト刀を取つて反りを打つ。皆々、驚ろく。

賴兼　コリヤ〳〵、また小言を云ふか。某が前とも憚らず、反り打つて、なんと致す。

鹿之　ハ、、、ハア。

ト平伏す。

賴兼　とゞめて云はねばこの場が濟まぬ。サア〳〵、短氣な事を和らげて、これへ參れ〳〵。イヤモウ、その堅藏には困り入るぢや。イヤ、堅藏と云へば、關取の谷藏は、まだかいの。さて〳〵、遲い事ぢやなア。

さく　サア、遲い所を、早う持つて參りました銚子杯、替らぬわたしがお酌。殿樣始め皆さんを、めれんにせいで置かうか……足利左金吾賴兼公、御酒宴の始まり、その爲口上左樣。

賴兼　イヤ、いつにない女房が、出來ぢや〳〵。どうも云へぬ〳〵。サア〳〵、注げ〳〵。

ト杯を出す。おさく、注ぐ。賴兼、呑み乾し

サア、太夫、こなたへ。

トさす。

高尾　ちよつとぢやわいな。

賴兼　押へか。オヽ、押へとあれば鹿之助、その苦々しい顏付きを、笑ひにせんと云ふより早く、サア、相をしてたも〳〵。

鹿之　ハッ、君命に任せ、一獻下されませうか。然らばお酌を賴み存ずる。

賴兼　そりやこそ酒になり濟ました。打つて置け。

皆々　しやん〳〵しやん。

ト手を打つ。鹿之助、困つたるこなし。

賴兼　極まつては。

皆々　よい。

ト手を打つ。これをキッカケに、早き壬生の鳴り物になり、向うより、萬平、團平、栗平、喜次平、捻切り奴の形にて、四人、壬生の面をかむり、花盗人の心にて出て來る。後より、鬼貫、羽織衣裳、編笠、大小にて出て來る。後より、黑澤官藏、馬乘り袴、ぶッ裂き羽織の形にて、腰へ鞭を差し出て來る。四人の奴は矢張り、壬生狂言にて舞臺へ出て、高尾を引立て行く。皆々驚ろき立ちかゝる。鬼貫、官藏、これを支へる。其うちに四人、高尾を引立て、花道へかゝる。向うより、絹川谷藏、角力取の形、鮫鞘の脇差一本、肩に羽

織を掛け、重れ草履を穿き、花道より出て來り、高尾を圍うて思ひ入れ。これより四人、無理に高尾を引立てようとする事。壬生の鳴り物に合せて、立廻りあつて、トヾ四人を投げ退け、高尾を舞臺へ連れて來て、鬼貫、官藏、兩人を突き退けて、しやんと見得。この時、おさく、嬉しきこなしにて

さく　オヽ、出來た〳〵。絹川の谷藏さん、好い所へようござんした。譯は知らねど、壬生狂言の喧嘩仕掛けとなつたら、どうなると思うた所へ、願うてもない谷藏さん、殿樣にも、さぞお喜びでござりませうなア。

頼兼　これが喜ばいでなんとせう。谷藏とは思はぬ。谷藏大明神。サア〳〵、爰へ來てたも〳〵。

鹿之　頼兼公の御身の上に、もしもの事があれば、我れ我れとても一生懸命、既に刀の柄へ手をかけたる所へ、絹川の谷藏、ようこそこの場へ出て來やつた。理不盡とや云はん、法外とや云やん、餘りと申せば。

谷藏　アヽ、モシ〳〵、何もあなた方の仰しやる事はござりませぬ。慮外ながら私しが參りましたからは、出入りになりましても、議論になりましても、相手は谷藏、外樣より御挨拶なされましては、お歴々のお名の出ます程に、必らず何も仰しやりまするな。時に、お下屋敷から急いで來たに依つて、咽喉が乾いて來た。その丼で一杯やらかしませうか。

さく　サア〳〵、それがよいわいな。

ト　おさく、有り合せたる丼へ酒を注いで出す。谷藏、取つて一息にグッと呑み乾す。四人、愕りして

團平　なんと旦那、御覽じましたか。彼奴が評判の關取、絹川の谷藏でござりまするぞえ。モシ、落ちついたものではござりませぬか。

蔦平　爰へ來た時までは、さのみ怖いとも思はなんだが、ちと樣子が變つて參りました。

栗平　道理で初手から胸騒ぎがすると思つたが、てつきりこんな事にならうと思つた。

喜次　それ〳〵、なんでも波風のないうち、お互ひに

四人　御用心々々々。

鬼貫　エヽ、何を吐かしやアがる。例へ關取であらうが、金剛力士であらうが、わいらが構ふ事はない。コレ、無敵流の達人、ソレ、黒澤官藏、洛中洛外は云ふに及ばず、五畿内五ヶ國に隱れのない、歴とした相手を知らぬか。

四人　成る程、左樣でござりました。

鬼貫　用心する事も、おど〳〵する事もない。落ちついて居ろ〳〵。黒澤氏、なんと左樣ではないか。

官藏　左樣々々、鬼貫公のお心に任せぬ奴は、この官藏が相手に致す。相手にならうとさへ云へば、鞍馬の僧正坊でも、摩利支天でも、後へは引かぬこの官藏。相手になれ、相手にならうと云ふ、身を知らぬ馬鹿者もありもせまいサ。ハヽヽヽ。

ト莨をのんで居る。鬼貫、四人、喜ぶこなしあつて

鬼貫　その大丈夫な魂ひを見込んで、頼んだ高尾が事。某が手に入るやうに、とてもの事に、合點か。

官藏　ハテ、何も云ふ事はござらぬ。この官藏がこの刀、了戒の二尺三寸、伊達には差さぬ侍ひの魂ひ。手練の手の內が見たくば見せやう程に、聞き及んだ關取の絹川、身共が近付きにならう。ちよつとそれへ。

谷藏　成る程、お武家方と云ふものは、立派なものでごんす。刀の切れ味から先へ名乘りかけて、この絹川に近付きになれとは、近付きになるなと云ふ謎かえ。わしも江戸の旦那衆に、取立てられた關取分。この廓で侍ひ衆と出合つて、引けを取つたと云はれちやア、番附や勝負付けの出る度に、人の口の端に乘つて、外聞が惡うごんすから、其許のお側へ參つて、膝と膝とを摺り付けて、お知る人になりますべえか。

官藏　それは幸ひ、お身が側へ身共が行かうか。

谷藏　イヤ〳〵、申さばお歴々樣、此方からお側へお近付きになりませう。御免なされませ。

ト合ひ方。裾を捲つて、眞中へ出る。官藏、刀を引ッ提げ、谷藏が側へ來て

官藏　イカサマ、側でよく〳〵見れば、發明さうなしやツ面だが、可哀や其方も、達引とやら腰押しとやらで、疊の上ぢやア、えゝ死ぬまい。先づ黒澤官藏が手の內、ちよつとした所が。

ト有り合せたる燗鍋を摑み拉いで見せる。皆々愕りする。谷藏、その燗鍋を取り上げ、いろ〳〵にして

谷藏　ハテサテ、強いお力でござりますなア。成る程、無敵流の御手練、イヤ、きついものでござりまする。

官藏　すりや、この官藏には及ばぬか。

谷藏　どう致しまして。

官藏　然らば三浦の太夫高尾は、この官藏が貰つたぞ。

谷藏　サア、そりやア。

官藏　ならぬと吐かしやア、了戒の二尺三寸。

ト刀を引寄せる。

谷藏　モシ〳〵、あなたは劍術の御手練は、きついもんでごんすが、女郎買ひは大きな見損ひだ。必らず腹は立たつしやりますな。女郎買ひばかりは、力業や劍術では行きませぬぞえ。ハテ、先の相手が高が女、酒と云ふものはどこの井戸から湧くものか、蒲鉾や鰹節も、海の中に居る肴だと思つて居る、あづまへのない者を、相手にすれば、男同士の挨拶とは別な世界でごんす程に、こなさんも野暮な事を云はずと、平假名で物を云ひなさい。ハテ、角なしに云ひなさいな。

官藏　詞を交さぬが侍ひの本意。挨拶に相違があれば男女の論はない。ぶッ放してしまふ分の事。武士の家風を立てにやアならぬ。

谷藏　成る程、武家方は武家方で、その風儀もござりませうが、また廓は廓の傾城の風儀があります。其方から嫌味に出て、高尾どのを貰はうと云はつしやれば、金輪際高尾どのを、この絹川の谷藏が、遣る事はならない、と云つたらこなさんも、わしを切らざアなるまい。此方も又、切られて勝つ事も知つて居ますワ。何はどうでも、高尾どのは遣る事はならない程に、サア、切らつしやい切らつしやい。どこを切るのだ……爰か……但し爰を切るか。サア、どこでも切りやれ。赤くなけりやア錢は取らねえ。サア、切れ〳〵。お侍ひ、切らないか。誰れだと思ふ。切つても切れぬ絹川の谷藏、男の中の男でごんす。

ト體を官藏に突きつける。官藏、急いで刀を拔きかける。

鬼貫　コレ〳〵、黒澤官藏、急くまいぞ〳〵。助け置いて妨げになれば、何時ぶッ放さうと心易い事だ。

官藏　でも、餘りと云へば緩怠。たつた一刀に。

鬼貫　ハテサテ、扣へて居やうぞ。

さく　マア〳〵、お前も待ちなんせ。

谷藏　ハテ、打ッちやつて置きなさい。癖になりますワ。

ト谷藏、下の方へ來て、莨をのみにかゝる。官藏、上の床几へ腰をかける。鬼貫、思ひ入れあつて、編笠を取る。

鬼貫　最前より挨拶には及ばねども、左金吾頼兼、其方の爲には現在の伯父、當廳圖幸鬼貫ぢやが、覺えて居るか。

頼兼　サ、その儀は。

鬼貫　よもや知つたとは云はれまい。茲な頼兼の放蕩者。

君傾城に性根を奪はれて、天下の武將と云はるゝか。兼若丸事は、八代の武將義政が實子なれども、未だ幼少なればとて、別腹の弟頼兼へ、足利九代の武將たりと、既に當今の綸旨頂戴濟みたる其うちに、以ての外の身持ち放埒。其まゝに差置きなば、遠くば元弘建武の兵亂の如く、近くは應永年中の赤松滿祐が、義教を弑せし如く、都に騒動起らんは治定。事を好むの左金吾頼兼、伯父の鬼貫へ對して云ひ譯あるか。サア、云ひ譯なくば腹を切れ。サア〳〵、どうだ。

頼兼　したり、また伯父樣は伯父樣だけあつて、天下の大事を思し召され、この頼兼が島原通ひの御諌言、有り難うござりまする。成る程、鬼貫どのゝ仰せの通り、李延年が一説に、一度見れば人の國を傾け、再び見れば人の城を傾け國を傾けんと、サア、人の物を傾けんと、文字に書いてさへ恐ろしい傾城傾國……ハ、、、、御意見なさるゝ伯父御樣には、色事はきつい嫌ひ。正眞の譬へに云ふ、伯父が甥の草を刈るとやら、どこやらで見た高尾の君へ、誰れやらと書いたる文を、さらば御覧に入れ奉らうか。

ト高尾が懷中へ手を入れて、文を引出す。これにて、鬼貫、術なき思ひ入れ。この時、頼兼、文の上書きを見て

ヤ、、、伯父御の文と思ひの外、おはもじ樣へと。

ト高尾、ちやつと取つて懷中する。

高尾　なんぢやぞいなア、阿房らしい。

頼兼　おはもじ樣へとは、ハテ、變つた文の。

ト思ひ入れ。

鬼貫　イカサマ、女にかゝつちやア、取り所なき左金吾頼兼。主が主なれば同じやうに、山中鹿之助の白痴め。頼兼が放埒に諌めを入るゝでもなく、晝夜廓に徘徊して、人に謗られ笑はれても、腹かッさばいてくたばらうと云ふ、侍ひらしい根性のない、人面獸心の鹿之助。斯う云はれても口惜しいとは思はないか。エ、、茲なイケ業曝しめが。

ト蹴倒す。鹿之助、急いたる顔を、頼兼、思ひ入れあつて

頼兼　コリヤ、鹿之助、只何事も、短慮功をなさずぢやぞ。

鹿之　でも、餘りと申せば、如何に頼兼公の伯父御なればとて。

鬼貫　どうした。蹴られたが、それ程無念なか。伯父御樣

のお御足にかゝるを、有り難い事だと思はないで、眼に角をぶッ立つて、どうせうと思ふのだ。それ程口惜しいと思はゞ、まだこの上に、なんぞ教訓の爲に、なんぞ好いものがありさうなものだ……オヽ……、あるぞ〳〵。主を唆かして、傾城狂ひをひろぐ侍ひの見せしめに、頼兼が足にかけたこの泥下駄を以て、うぬが頭へ穿かせてくれべえ。

ト頼兼が穿いたる下駄を取つて見て、恟りして

ヤ、、、この下駄はなんだ。見れば見る程、足利の先祖尊氏公、國阿上人へ寄附ありしところの伽羅の下駄。八代の武將義政まで、寶藏に籠め置きしが、いつの頃よりか引摺り出し、廓通ひに穿き減らすとは、不屆きと云はうか、大外れたと云はうか。茲な頼兼の横道者め。

鹿之　頼兼公、あなたのお召しなされたる高下駄は、御先祖尊氏公、國阿上人へ御寄附なされしところの伽羅の履物。義政公まで八代の間、御寶藏に納めありしを、何者があなたへ差上げましてござりまする。サア、仰せ分けられが立ちませねば、あなたの御身の御難儀になりますぞや。

頼兼　サア、其方へも物語らず、今日の今まで我が足にかけたるこの下駄は、御先祖尊氏公のお物好きにて、國阿上人へ寄附ありしところの名木とは、オヽ、、、某に忠臣無二の仁木彈正左衞門則將が、斯く難儀を負はせんとて、よもや頼兼へ得させまじきに。とは云へ明らさまに云ひ譯しては、則將が身の上。ホヽ、、、ホイ。

ト當惑のこなし。

鬼貫　さちやア云ひ譯はないか。云ひ譯がなけりやア、この下駄は、うぬが盗んだのだな。足利九代の武將、左金吾頼兼とも云はるゝ者が、盗みひろいでも大事ないか。伯父の鬼貫が、義政が前へそびいて行つて、うぬが身持ちを洗つてくれべい。うしやアがれ。

ト頼兼を取つて、上の方へ引立てようとする。谷藏、後より、鬼貫を取つて、下の方へ見事に抛り出す。鬼貫、思ひ入れあつて

ヤア〳〵、うなア絹川の谷藏めぢやアないか。なんで鬼貫を投げ出した。ソレ、團平、喜次平、其奴をやるな。

谷藏　やかましいわえ。足利家の寶藏、伽羅の下駄の盗賊は、絹川の谷藏だ。サア、立寄つて縛ふて。

ト後へ手を廻して思ひ入れ。

官藏　イヤ、關取の絹川谷藏に、この官藏が滅多に縛は

かけさせぬ。
谷藏　なんと。
官藏　例へ伽羅の下駄の盗人にもせよ、島原の廓に於て、繩打つて室町どのゝお館へ引いては、鬼貫公の御名の出る事。また一つには、この谷藏には云ひ分のあるこの官藏、盗人を相手にしては、譬へに云ふ疫病の神で敵とやら。そんな卑怯な官藏ぢやアない。一旦貰ひかけた高尾の身の上、得心せにやア、それからそれまで。侍ひと關取の手練と手練で、勝負をするぞ。
谷藏　ハ、、、伽羅の下駄の盗賊を名乘つて出にやア、御大切なる我が君頼兼公の御難儀ゆゑ、どこがどこまでも盗賊は絹川の谷藏。高尾どのゝ身の上は、この關取が枷になつて、劍術の達人であらうが、大六天の魔王であらうが、やる事はならない。黒澤どのとやら、黒犬どのとやら、さう思つてもらひますべえ。
官藏　よし〳〵。いよ〳〵高尾を遣る事がならぬと吐かしやア、是非に及ばぬ、相手にしてくれる程に、この島原の廓離れて待つて居ろ。
谷藏　相手になれなら相手にならう。島原の外も染まるや藍の花。藍を血汐に染め替へても、高尾どのゝ身の上は、遣る事はならない。
鬼貫　コレ〳〵官藏、あのやうに野太い事を吐かす奴を、手放して置いちやア、どうやら無氣味なものだ。盗人を幸ひに。
官藏　ハテサテ、廓の内は放し囚人。引ッ括るにや及びませぬ。シタガ、鬼貫さまのお心休めに、黒澤官藏が手の内、絹川の谷藏、盗人の極印、しやッ額へ、イヤ斯うして。
ト伽羅の下駄にて、谷藏が額へ疵を付ける。皆々悔り驚ろく。
皆々　ヤア。
ト　おさく、谷藏を見て
さく　ソレ、谷藏さん、お前の額へ疵が付いたぞえ。
谷藏　アノ、この額へ。
さく　疵が付いたわいなア。
ト谷藏、思ひ入れあつて
谷藏　なんのこれしきに。
官藏　まだ〳〵疵どころぢやアない。六段目にやア命がないぞ。なんと鬼貫さま、これでちよつとお氣が晴れましたか。

鬼貫　出かした〳〵。

官藏　サア、谷藏、云ひ譯あらば何時でも來い……鬼貫さま、奥の座敷で一杯やりませうか。

四人　ようございませう。

官藏　ハテ、みじめな鬭取だな。

鬼貫　サア、行きやれ。

ト唄になり、鬱いで居る賴兼、高尾の手を取り、捨ぜりふにて、薄雲、高窓、高崎、おさく、谷藏、奥へ入る。此うち向うより、佐助、羽織、着流しの形にて、出て來て、直ぐに舞臺へ來て

佐助　仲居衆は居ないか〳〵。

ト奥にて

やま　アイ〳〵。

トおやま、以前の形にて、出て來り

オヽ、三浦屋の佐助さんでござんすかいな。

佐助　コレ、おやまどん、此方の内に仁木さまの御家中の門平どのと云ふお人がござるであらう。

やま　アイ、先刻にから奥二階に、寐て居てぢやわいな。

佐助　そんなら、餘り聲高でないやうに、三浦屋から參りましたと云うて下され。

やま　アイ〳〵、さうは云ひませうが、高尾さんの事ぢやアござんせぬかえ。

佐助　ハテマア、なんであらうと、さう云つて下されな。

やま　アイ〳〵、合點ぢやわいな。

トおやま、奥へ入る。佐助、有り合せたる銚子杯を取つて

佐助　イヤ、こいつは有り難い。ちよつと一杯、横番の盜人上戸と出かけうか。

ト云ひながら、一人で無性に呑んで居る。好い程に奥より、門平、以前の形にて、出て來て、佐助を見て合ひ方。

門平　わしに用あると云つて來たは。

佐助　ハイ、私しでござります。

門平　ハア、そんなら貴樣は、三浦屋からござりましたか。

佐助　ハイ、左樣でござりまする。私しは手代の佐助と申します者でござりまする。

門平　それは御大儀。して、高屋太夫身請けの事は調ひましたか。

佐助　先づお喜びなされませ。先程あなた樣より、密かに

遣はされました二千兩の爲替證文。卽ち引替へに致しまして、高尾どのゝ身請け證文。サア／＼、お改め下さりませ。

ト懷より一札を出して渡す。門平、取つて披き

門平　ドレ／＼。これと申すも三浦屋へ、直々掛合つたに依つて、思ひの外早う埒が明いた……ナニ／＼「身請け請文の事、一つ、私し抱へ遊女高尾儀、身の代金千五百兩、御渡し下され、慥かに受取り申し候ふところ實正なり、然る上は親兄弟たりとも一切……」

ト方々へこなしあつて

よし／＼、何を申すも急な事ゆゑ、金子入用は三浦屋次第。これより追ッつけ罷り歸り、旦那へこれをお目にかけ、その上にて右の金子を遣はすであらう。その時預けたる爲替證文は、此方へ返してくりやれと云ふて下され。

佐助　畏まりましてござりまする。然し、斯うは致したものゝ、本人の高尾どのへお話ししませねば、今日直ぐにお屋敷へとては。

門平　イヤ／＼、それは氣遣ひない。斯樣な證文さへ、此方へ取つて置けば、五日三日の間は苦しうない。兎に角この上は高尾太夫事、主人仁木さまへ參る事、得心するやうにお賴み申すと、御亭主へ申して下され。

佐助　それは四郎兵衞も如才はござりませぬ。イヤモウ、親方も殊の外喜んで居られます。どうぞあなた、ちよつとお逢ひなされて下されますまいか。

門平　それも何かと相濟んだ上では、其方の亭主も旦那へお目通りを願うてやらう。サ、何は兎もあれ、人目立つて惡い。ちつとも早く、コレ。

ト囁く。佐助、呑み込んで

佐助　畏まりました。ドレ、お暇申しませうか。

ト合ひ方になり、佐助は向うへ走り入る。門平、一人にて奧へ入る。とバタ／＼の音して、奧より、賴兼、以前の形にて、高尾が胸倉を取つて、出て來る。後より、薄雲、高窓、高崎、照葉、くれなゐ、付いて出て來る。賴兼、高尾を引付け

賴兼　ヤア／＼、おのれは／＼。

皆々　もうようござんすわいなア／＼。

高尾　サア、云ふ事があるなら、急かずと云うたがようござんすわいな。

賴兼　ようござんす。そのようござんすに蕩されて、朱雀の野道を一丈四五尺も踏み減らしたこの賴兼を、ようも

ようも顔の立たぬやうにしをつたな。エヽ。
高尾　なんの事でござんす。なんでお前の顔の立たぬやうにしたぞいの。サア、それ聞きやんせう〳〵。
頼兼　云はいでかい。おのれがやうな奴に、云うて聞かせては腹が癒えぬ。せめてわが身になと云ひ聞かさう。聞いてたも〳〵。
ト薄雲の手を取る。
薄雲　モシ、鬼貫さんの事かいなア。
頼兼　サア、その鬼の事〳〵。
薄雲　モシ、そりやみんなお前さんの廻り氣。外からどのやうに手を替へて云へばとて、お前に眞實惚れて居やんす高尾さん、なんの返事をさんせうぞいな。常から心を知らぬ者かなんぞのやうに、鬼と云ふ字を云はしやんすも、あんまりぢやわいな。
頼兼　そんなら、鬼貫が事は、無い事ぢやと云ふのか。
薄雲　知れた事ぢやわいなア。
ト頼兼が手を振り放す。頼兼、振り放された手の仕様がなさに、照葉を捉へ
頼兼　オヽ、それ〳〵、外の者の知らう筈はない。正直な者は子供ばかりぢや。マア、この頼兼が悪いか、高尾が好いか、正直に云へ〳〵。
照葉　此方の太夫さんは、お前一人が力ぢやぞえ。疑はしやんす心なら
くれ　里の勤めを根曳きなさんせ。
照葉　男の癖に
兩人　オヽ、笑止。
ト一度に頼兼が手を放す。又その手の仕様がなさに、有り合せたる銚子杯を取上げ、手酌に注いでグッと呑み、高尾へ投げつけ
頼兼　島原で全盛の高尾どの、わしがやうな、かいしよの無い客に逢うて居ても、面白うもごんすまい。切れ杯ぢや程に、一つお上がり……オヽ、お上がりと何も慇懃に云ふ事もないわいの。サア、一つ呑め……サア、呑めと云うては、どうやら腹を立つたやうで未練らしい。その杯は切れるのぢや程に、一つお過し……イヤ、お過しと云うては、どうやら亭主方のやうであるに依つて、粗雜と洒落との中を取つて、サア、喰ひ給へ〳〵。
高尾　殿さん、この杯はなんぢやえ。
頼兼　切れ杯でござんす。
ト高尾、頼兼が胸盡しを取つて

高尾　お前は〳〵、如何にわたしが、あなたの自由になる身ぢやと云うても、其やうな心強い事を云はしやんすなア。サア、なんでわたしと切れなさんす。それ聞きたいわいな〳〵。

ト振り廻す。頼兼、突き退け

頼兼　切れてしまふと云ふ譯を、云はいでも慥かな物を見せうか。

高尾　サア、見ようわいな。

頼兼　オヽ見せう。アレ〳〵、あれを見や。

ト花道の方へ指差す。高尾、何心なく、何をえと、花道の方を見ろ。其うちに、高尾が懷中の文を取つて

切れると云ふ譯は、この文。これはなんぢや〳〵。

高尾　エヽモウ、ずんとその文は、返して下さんせいな。

頼兼　オヽ、ちつとさうもござりませい。この頼兼に隱すからは、大方碌な文であるまい。たつた今爰で、高らかに讀んで、間夫狂ひの化けの皮を顯はしてお目にかけうか。

高尾　モシ殿さん、讀みなさんしては、惡いわいなア〳〵。

ト取らうとするを突き退け、直ぐに文を拔き

頼兼　ドツコイ〳〵、コレ〳〵、おはもじ樣へ、累よりと書いてあるこの文……「久しくお便りもなう候ふ儘、わざ〳〵文して參らせ候ふ、この程聞きまし候へば、御前樣事、今日しは頼兼公のお心に入らせられ、一方ならぬやうにお馴染みなされ候ふ由、此方兄まで殊なう有り難がり參らせ候ふ、それに引替へ我が身事、いつぞやお話し申し候ふ人にも未だ巡り逢ひ申さず、心がゝりの月日を送り參らせ候ふ……今しは頼兼公のお心に入らせられ一方ならぬやうにお馴染みなされ……頼兼公のお心に入らせられ……上書きを見れば、おはもじ樣へ累より。オオ、譯があらうと思うたこの文、兄まで有り難がるとの文言。さうとは知らず、疑うたこの頼兼。こりやマア、どうしたらよからうぞ。ひよんな事になつたわいなう。

高尾　切れたがらしやんす頼兼さん、ソレ、切れ杯ぢやぞえ。

頼兼　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵。どうぢやえ。

ト迫り詰められ、頼兼、こなしあつて

頼兼　アヽラ怪しや。今この杯を取ると其まゝ、忽ち醉の醒めたるは心得ぬ。この杯は、なんとしたものであらうぞ。

ト奧にて

鬼貫　その杯は、伯父の鬼貫が取上げてくれうワ。

ト合ひ方になり、鬼貫、以前の形にて、出て來る。後より、あふむ市兵衞、羽織、着流しの形、太鼓持ちにて琉球色みの酒樽を轉がしながら、出て來る。

賴兼　これは有り難いお持たせ。打捨て置かず、賞玩仕らうか。

鬼貫　それは過分。ソレ、鸚鵡、太鼓持ちらしく、機轉を利かせろく。

市兵　機轉を利かせろと、我れは利かせたくつて待つて居りました。抑々この鸚鵡が機轉と申すは、いつかは爰に隱し持つ、握り拳の玄能で……汝元來氣違ひ水、誠の姿を顯はさんと、二つ三つ、五六百。

ト樽の鏡を叩き割つて、手の痛むこなし

アイタ、、、。なんと黑澤流の手の內、御覽じましたか。時に鸚鵡の杯、この大鉢の杯で、一つ上がれと進めけり。イヤア、ハアボウく。

賴兼　どうも云へぬ。鬼貫どのは御亭主役。サアく、お始めなされいく。

鬼貫　成る程、そんなら身共から始めようか。サアく、鸚鵡、この鉢へ酒を注げ。グッと注げく。

ト大鉢を持つ。

市兵　心得たりと云ふ儘に、柄杓押取り、トッテツルガンットッテツルガンツ。

ト柄杓にて酒を鉢へ汲み込み、鬼貫、グッと吞み乾し、賴兼へさす。高尾、思ひ入れあつて、吞んでは惡いと袖を引留めるこなし。

賴兼　イヤく、大事ないく。これを吞まずんばあるべからず。サア、注げく。

ト柄杓にて酒を鉢へ汲み込む。賴兼、グッと乾して市兵衞へさす。

サア、賴兼がさした。一つ吞めく。

市兵　イヤ、これは迷惑。私しは怪しからず食べ醉ひました。

賴兼　待てく。まだ杯も手に取らいで、食べ醉うたとは、どうぢや。

市兵　これはどうでござります。これが醉はずに居られませう。酒樽の鏡を拔いて、その大鉢へ無性に汲み込んだ

その匂ひが、五臓六腑へ沁み渡つて、どうしてこれが受けられませう。

頼兼　呑まぬ酒に酔うたとは、いかい白痴な。と云うて誰れぞになア、合を頼みたいものぢやが……オヽ、それそれ、憚りながら伯父御様、さらばあなたへ上げませうか。

ト鬼貫へさす。鬼貫、思ひ入れあつて

鬼貫　いま身共が方から、さした杯を又か。

頼兼　先づはこれ返杯仕ります。

鬼貫　そんなら受けてもやらうが、左金吾頼兼、なんぞ肴があらうな。

頼兼　何なりとも〳〵。

鬼貫　然らば今、鬼貫が持たせたる伊丹の銘酒、龍田川の肴には、名にしおうたる高尾の紅葉、頼兼が合ひ方の太夫、高尾を肴に挾め。

高尾　エ、。

ト悄りする。これより、頼兼、生酔のこなし。

鬼貫　イヤサ、頼兼、お身の相方が太夫高尾を、この鬼貫にくれろと云ふ事だ。なるか、ならぬか、返事が聞きたい。

頼兼　ヤレ〳〵、酔うた〳〵。杯こそあらうに、水鉢でグッと一息に呑んだに依つて、サア、酔うたワ〳〵……ヤア、伯父御様、色里へ来ても、さりとは野暮なお堅い、怖い顔付きなア。

鬼貫　足利九代の武将にも、おのれがやうな魯鈍な奴があるものかえ。生酔本性違はず、サア、高尾をくれるか。但しならぬか。サア〳〵、返答ぶて。どうだ。

ト詰めかける。頼兼、酔ひたる體にて

頼兼　サア〳〵、此やうに酔うては、堪らぬ〳〵。誰そ枕を持てよ〳〵

ト奥にて

鹿之　畏まりましてござります。

ト合ひ方になり、鹿之助、以前の形にて、城の櫓を枕に仕立てたるを三方に載せ、持つて出て来る。

仰せ付けられましたお枕は、山中鹿之助、持参仕つてござりまする。

頼兼　なんと云うても鹿之助ぢや。サア〳〵、早う〳〵。

鹿之　イザ、お枕を遊ばれませう。

ト出す。頼兼、これを見て

頼兼　こりや、なんぢや。

鹿之　御先祖尊氏公より、連綿たる足利のお家、九代の武

將たる左金吾頼兼公の、御在城を象りし拙者が寸志。イザ、この城をお枕に遊ばされ、然るべう存じ奉りまする。

頼兼　すりや、この頼兼が放埓ゆゑ、城を枕に討死せいか。

鹿之　歎かはしきは我が君。大軍の將と仰がれ給ひ、このお身持ちは何事。哀れ此まゝに差置けば、室町どのゝお館は、奸佞の爲に跡もなく、草葉の露となり果てん。近き愁ひを察し奉り、慮外緩怠を顧みず、お側へ推參仕つてござります。

頼兼　サア、堅いワく。其やうに云うたればとて、意見諫言聞き入れるやうな頼兼でない。先づそれよりは、一寸先は闇の夜と、行きつくまでは色と酒。サアく、一つ呑めく。

ト云ひながら、この城を枕にして寢る。鹿之助、思ひ入れあつて

鹿之　輕々しき身を以て、斯樣なる儀を申し上げるも、お家を御大切に存じまする者は、仁木荒獅子を始め、渡邊親子の人々、寢食を忘れ、頼兼公の御身の上を、お案じ申し上げまする。諸士の心を思し召され、何卒御歸館遊ばされ下されませう。我が君樣……頼兼公……斯くまで申し上げまするに、御挨拶のござらぬは。

ト頼兼が顏を見て、恟りして

さも心よう御寢なつたか。ハテ、正體もなさ御有樣ぢやなア。

鬼貫　ソレ、高尾を、合點か。

市兵　心得ました。

ト市兵衛、高尾にかゝるを、鹿之助、市兵衛を投げ退け、高尾を圍ひ

鹿之　コリヤ、鬼貫公には高尾どのを、なんとなされまするな。

鬼貫　なんとするとは、傾城の高尾があるゆゑに、頼兼が身持ち放埓。鬼貫が請け出して、頼兼を眞人間にせにやアならねえ。

鹿之　伯父御樣の横戀慕を、頼兼公のお爲ごかし。鹿之助この場に罷り在つては、鬼貫公のお心任せにはなりますまい。それとも達てと御意なされば、お相手に罷り成りませうか。

鬼貫　すれば見ん事頼兼が伯父たる、圖幸鬼貫を相手にするか。

鹿之　サ、それは。

鬼貫　どうだ。
鹿之　エヽ、是非もない。
ト口惜しこきなし。
鬼貫　エヽ、面倒な。ソレ、賴兼に心を付けい。
市兵　心得ました。賴兼、觀念。
ト鬼貫、刀にて寢て居る賴兼へ切つてかゝる。賴兼、起き上がつて、市兵衞を投げ退け、起き上がる所をポンと首を切る。合ひ方になり、賴兼、拔身を持つて、思ひ入れ。皆々恟りして
皆々　これは。
賴兼　鹿之助、水。
鹿之　ハツ。
ト手桶を提げ、柄杓にて、賴兼が血刀へ水をかける事あつて、懷中より、袱紗を出し、刀の血を拭ふ。賴兼、思ひ入れ。
賴兼　山中鹿之助。
鹿之　我が君、お心が付きましたか。
賴兼　賴兼が醉覺めの手の內。鬼貫公、伯父御樣、其方樣にもひいやりと。
鬼貫　イヽヤ。伯父御の冷水、呑んだも同然。

賴兼　サア〳〵、太夫はどこへ行た〳〵。オヽ、そこに居やつたか。サア〳〵、寄りかけい〳〵。
ト高尾を引寄せると、奥にて、バタ〳〵の音して、官藏、おさくを手籠めに引立て出て來る。
さく　モシあなた、私しをどうなされまするぞいな。
官藏　どうすると云つて、高尾は鬼貫さまへやらねばならぬ。さう思つて居ろ。
鬼貫　コレ〳〵官藏、高尾が事を、どう致したと申す。
官藏　お聞きなされませ。お心をかけられたる高尾は、外へ身請けの相談が出來ましてござります。
鬼貫　ヤア〳〵、なんと〳〵。
官藏　しかも今日假かの事。身請けの代金まで相濟んで、最早高尾はあつちの者、それでは某が詞が立たぬゆゑ、高尾が變替へさせ、この官藏が存分に致さうと存じて、この家の女房を相手に致しまする。
さく　サア、なんぼどのやうに仰しやつても、今日の身請け沙汰は、お客人と三浦屋の掛合ひなれば、なんにも存じませぬ。あなたの相手になされましたところが、高の知れた女子の事。御勝手になされませ。
鬼貫　なんでもかでも、今となつて高尾を外へ遣つては、

斯く申す鬼貫、武士が立たぬて。

頼兼　アレ〳〵、太夫、この騒動を聞いたか。いよ〳〵それに極まらば、この頼兼はなんとせう。鹿之助、好い料簡はないか。太夫、わが身はマア、どうせうと思うて居やるぞ。

高尾　わたしぢやと云うて、どこへ行く事やら、昨夜にも今朝にも知れてある事なれば、また料簡もあらうのに、ほんに夢見たやうな事ぢやわいなア。

鹿之　身の代まで相濟んだとあれば、是非に及ばぬ事ぢや。

頼兼　コレ〳〵、おさく〳〵、仕様はないか。

高尾　それ〳〵、おさくさん、どうぞ好い智惠はござんせぬかいなア。

官藏　サア、これからは身請けをする奴は、この官藏が相手だ。高尾はどつこへもやる事ぢやござりませぬ。サア、鬼貫さま、お心任せになされませ。

鬼貫　有り難い〳〵。サア、高尾、鬼貫と一緒に來い。

ト連れて行かうとする。高尾、拂ひ退け

高尾　エヽ、アタ嫌らしい。否でござんす。

官藏　否と云つても、應と云つても、身請けすれば、此方の者。これからはこの官藏が引立てる。サア、高尾、來やれ。

ト高尾を引立てうとする所へ、奥より、ツカ〳〵と、門平、出て、官藏を突き倒し、起き上がる所を背打ちに打ち据ゑる。官藏、恟り、思ひ入れあつて

ヤア〳〵、見ればうなア、中間の分際で、この官藏さまを、よう打ち据ゑたな。なんで奥へ出て、妨げをひろぐのだ。返答に依つて命がないぞ。

門平　高尾の君は頼兼公の思ひ人。現在の伯父御様の身を以て、戀慕れゝつのいたづら事。その腰を押すお侍ひ。武士にあるまじき事だと思ふから、仁木彈正左衛門が草履掴みの、この門平が、下司流儀の背打ちの鹽梅、ちとお骨に堪えましたか。

鬼貫　ヤイ〳〵、下郎め、傾城の高尾は一夜妻、この鬼貫が氣に入つたら、酒の相手は愚かな事、金で買はれる身の上を、我が物らしく吐かしたりな。某を庇ふ官藏へ慮外があれば、この鬼貫が眞ッ二つに。

ト抜いて切つてかゝる。門平、身を躱し、ちよつと立廻りあるべし。此うちに、鬼貫、懐中より錦の、袱紗包みを落す。門平、手早く取つて、懐中して、立廻りのとまりに、御教書を差上げ、キッと思ひ入れ。

門平　サア、伯父御樣でも手ざしならぬ、義政公のお墨付。

賴鬼　ヤ、、、なんと。

門平　賴兼公のお心に叶ひし高尾の君、室町のお館へ伴ひ參れと、有り難き義政公のお墨付。イザ、お戴きあられませう。

ト一包みを賴兼へ渡す。賴兼、取つて戴き、上包みを取つて

賴兼　ヤ、、、こりやコレ高尾が身請け證文。

門平　即ち仁木彈正左衞門が寸志の計らひ。

賴兼　エ、、忝ない。

ト鬼貫、官藏、思ひ入れあつて

鬼貫　なんの事だ。彈正左衞門が手から、あの證文が賴兼へ渡つては、もう脈が上がつてしまつた。

官藏　ハテ、お氣遣ひなされますな。又この上にも手段がございます。何かの事は、あの奧の間。

鬼貫　成る程、それは兎もあれ、萬更

官藏　ハテマア、奧へござりませ。下郎め、覺えてうしやアがれ。

ト合ひ方、門平へ口惜しき思ひ入れあつて、心を殘す鬼貫を連れ、奧へ入る。

賴兼　ヤレ〳〵、夢ではないか。此やうな嬉しい事があらうか。思ひも依らず其方の身請け。これと云ふも彈正左衞門、これ程にまでこの賴兼を、大事に思うてくれるかいの。家來とは思はぬ。忝ない〳〵。

高尾　わたしも殿さんに別れたくはござんせん。生きて居ぬ心。いろ〳〵思案した所へ、思ひも依らぬわたしが身請け。

賴兼　サア、これからは心の儘。明日からはわが身は御臺所。

高尾　明日からは、あなたはわたしが殿樣。

賴兼　それ〳〵、太夫と云ふも今日限り。

高尾　殿さんと云ふも云ひ納め。

賴兼　太夫。

高尾　殿さん。オ、嬉し。

ト抱きつく。

鹿之　さぞかし御滿足でござりませう。

賴兼　サア〳〵、そんなら早う高尾を同道して、歸らう歸らう。

門平　イヤ〳〵、それは憚りながら、拙者めに彈正左衞門、

文政元年八月中村座所演繪番附

より申し含め置きましてござりまする。その仔細は、最早高尾どのゝ事は、身請けも濟みました事なれば、我が君御歸館遊ばされし上にて、後より參らるゝ方がよろしからうと存じまする。

頼兼　そんなら太夫を、連れ立つて行く事はならぬか。

鹿之　イヤ〱、申さば一國のお主。身請け濟みましたばとて、高尾どのを御同道遊ばされては、人の口の端も如何なれば。

門平　後々にお案じなきやうには、常から物堅いおさくどのに願ひますれば。

さく　イエモウ、男猫でも滅多に側へ寄せる事ではござりませぬ。

頼兼　そんなら太夫は其方へ預けて。

門平　イザ〱、お越しあられませう。

頼兼　此やうに皆の者が、頼兼が爲を思うて云うてくれる事、聞入れぬも惡い。逢はぬと云うても暫しのうち。明日は早々、室町の館より迎ひを寄越す程に、待つて居や。

高尾　そんなら、ちつとも早う、必らずえ。

頼兼　合點ぢや〱。サア〱、供をせい〱。

さく　左樣ならば、御機嫌よう。

頼兼　太夫、さらば。

ト踊り地になり、頼兼、身請け證文を扇へ付けて、嫉がる鹿之助にしやんと持たせ、先へ立つて、後より、奴を振つて、門平、付き添ひ、向うへ入る。おさく、高尾、後見送り、捨ぜりふにて、奥へ入る。ト上の方より、鬼貫、官藏。下の方より、栗平、喜次平、以前の形にて、窺ひ出て

兩人　鬼貫さま。

鬼貫　コリヤ。

ト思ひ入れ。

栗平　授けられたを知らないで

喜次　まんまと高尾は頼兼どのへ。

鬼貫　彈正左衞門が空事を、誠の事と一杯喰つて、高尾を館へ入れるとは、頼もしい〱。

官藏　鬼貫公の惚れたも僞はり。あの頼兼のうつけ者め、高尾さへ室町の館へ連れて行けば、義政公の不興を受け、押籠められるは案のうち。味ようやらうばつかりに、高尾が身請けを爭つたを、夢にも知らずウカ〱と、喜んで歸つたは、みんな此方の思ふ壺。

鬼貫　時に心かゝりは、最前奥にて官藏より受取つた、仁

木方より參つた書簡、いづれへ取落せしか、皆暮れ見えぬは、慥かにあの女房めが、拾ひ取つたに相違ない。コリヤ、わいら兩人は爰に待ち受け、その書簡をナ。

ト兩人に囁く。栗平、喜次平、呑み込み

兩人　心得てござります。

鬼貫　これより某は館へ立越し、彈正と云ひ合せ、賴兼めを押籠める手段が肝心。

官藏　それ〳〵。兩人、ぬかるな。

鬼貫　然らば官藏。

官藏　ござりませ。

ト時の鐘になり、鬼貫、官藏、向うへ入る。栗平、喜次平、殘つて、兩方へ忍ぶ。奥より、おさく、出て來り

さく　ほんに案じるより產むが易いと、高尾さんの身請けも濟んで、心がきつぱりと晴れたやうぢや。人の事さへ嬉しいもの、さぞや高尾さんは嬉しうなうてなんとせう。それはさうと、先刻に奥に落ち散つたこの手紙、上書きを見れば、鬼貫公へ仁木より。なんでも事ありさうなこの手紙。こりや此まゝにしては置かれぬ。幸ひあの關取の谷藏さんへ。さうぢや。

ト奥へ行かうとする。喜次平、栗平、出て來り

兩人　女め、觀念。

ト切りつける。おさく、恟りして

さく　こりや、先刻の奴さん方。思ひがけない、なんとするのぢや。

栗平　なんとするとは知れた事。何か面白いその手紙。

喜次　どんな色氣か知らないが、おいらもちつとあやかりたさ。

栗平　ちよつぴり中を見よやうと思つて。

さく　それで今のやうに……ハテ、怖い見やうでござんすなア。客人方や女郞衆の、文の取り遣りは茶屋の役。それを外から見られては、茶屋の迷惑。マア、見せる事はならぬわいなア。

喜次　所を斯うして

ト立廻り

栗平　見ようと思つて。

ト立廻り。好き見得になり

三人　どつこい。

ト踊り地になり、三人、手ばしこきタテあつて、トヾおさくが持つたる手紙を引出し、栗平、抛り投げる。これを喜次平取つて、一散に向うへ走り入る。おさく、

栗平、好き見得になり、ごん〳〵にて、この道具、ぶん廻す。

本舞臺、正面、一面の柴垣、石燈籠、植込み、一體奥庭のかゝり、上の柳の立ち木に、紅葉の小袖を掛け、舞臺先、浪板、下草あしらひ、泉水の流れ。この岸に、高尾、白無垢、扱帶の形にて、谷藏これを扼り殺して居る見得にて、道具とまる。

ト高尾、苦しき思ひ入れあつて

高尾　エヽ、情ない絹川どの。この高尾に、なんの誤まり、なんの科あつて、此やうにむごたらしう殺すのぢやぞいなう。

谷藏　恨みは尤も、さりながら、佞人奸者の綱にかゝつて、こなたを室町のお殿へやつては、頼兼公のお爲にならぬ。それゆゑ宥めすかせども、承引なけりやア是非もなく、いま手にかけるは國家の爲。いとしいと思はつしやる頼兼公のお爲だ程に、潔よう成佛して下され、高尾どの。

高尾　イヤ〳〵、なんの浮かまう。成佛せう。いとしいと思ふ頼兼さま、お側に居たい添ひたいと、思ふ願ひも今日叶ひ、身請けせられて嬉しやと、思ふ間もなう此やうに、何ゆゑわしを殺すのぢや。エヽ、恨めしいわいなう。人に恨みがあるものか、無いものか、生き替り死に替り、恨みを云はいで置かうか。

谷藏　恨まば恨め、大事ない。頼兼公の御身の上に、過ちがあつては、この谷藏が身の願ひ……サア、身請けされたが運の盡き。所詮頼兼公とは無い縁と諦らめて、念慮を殘さず成佛さつしやい。利劍卽是彌陀佛一唱正念罪皆消、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト思ひの儘に扼り殺し、行かうとする、髮を取つて居るゆゑ、これを切り、止めを刺し、刀を拭ひ納めて

忠義ゆゑとは云ひながら、思へば不便なこの最期。これも因果か因緣か、いづくの誰れが娘か知らないが、高尾どの、免して下さい。南無阿彌陀佛。

ト手を合せ、口の內にて、回向して

心元なき我が君の御身の上。ソレ。

ト行かうとする。ドロ〳〵になり、高尾が死骸むつくと起き上がる。燒酎火燃え、谷藏、髮引きの見得にて引き戻され、いろ〳〵あつて、トヾ拔いて切り拂ひ、また行かうとする途端に、心火燃え上がる。谷藏、これを見て

ハテ恐ろしい、念慮ちなやア。

ト大ドロ〱にて、しやんと見得。拍子、幕。直ぐにシヤギリ。

二幕目　伏見京橋の場

役名　足利左金吾頼兼。嶌の嘉藤太。鷲澤丹三郎。醫者、大場道益。中間、門平。黒澤官蔵。奴、萬平。同、團平。關取、絹川谷藏。

本舞臺、三間の間、正面、黒幕。東の柱際へ寄せて橋の小口を見せ、下の方に、誂らへの地藏堂、これに人の出入りあり、上の柱、松の立ち木。下の柱、柳の大樹、この橋の袂に、伏見京橋と書きたる高提灯立てあり、この道具よろしく、時の鐘にて、幕明く。

ト花道より、馬士、駄賃馬を引いて出て來る。下座より、夜蕎麥賣り、荷を擔ぎ、出て來る。その外、歸寶り、按摩、旅人の形、思ひ〱の仕出し、出て來て、東西へ別れ入る。此うち、幕明きより、非人四人、菰を着て、左右へ分れ寐て居る。よき程に時の鐘になり、下の方の地藏堂の内より、嶌の嘉藤太、矢張り權僕の形にて、出て來て、方々へ思ひ入れあつて、合圖の礫を打つ。これにて、上の方に居たる非人、菰を取つて黒四天の形にて起きると、殘りの非人、思ひ〱に起き上がる。皆々黒四天の形になり、皆々顔見合せ

四人　嘉藤太どの。

嘉藤　コリヤ。

ト　あたりへこなし。

非一　この度、管領足利頼兼、身持ち惰弱に依つて、近く浴外東求堂へ押籠めんと、山名宗全公の御内意。

嘉藤　併し兼若丸館にあつては、鬼貫公と仁木どのゝ大望の妨げ。それゆゑ某、忍びの術を得たるを幸ひ、何卒兼若君が寢所へ忍び、騙し寄つて害してくれよと、御兩所より密かの頼み事。成就なすまでは、見咎められぬがこの身の肝要。

非二　又その上に仁木彈正どのには、しのだの祕法を以て、折を窺ひ召さるれば、日頃の大望目のあたり。

嘉藤　さりながら兼若丸には、荒獅子男之助と云ふ豪傑者、まつた女ながらも渡部民部が妹の政岡、この兩人晝夜と

も兼若丸が側を離れず、もしや首尾よう込み入つた上、覺り知らば、それと互ひに合圖を定め、目指す敵は子悴一人。この嘉藤太に力を添へて合點か。

四人　心得ました。

嘉藏　館の案内は繪圖にて談ぜん。或ひは百姓又は町人、鳥類音類は云ふに及ばず、一寸の虫とも姿を替へ、隱るる時には芥子にも入り、また顯はれては大海に跨るも、習ひ覺えし忍びの妙術。幸ひ時は子の刻。ハテナア。

ト思ひ入れ。向うを見て

四人　あの人影は。

嘉藤　コリヤ。

ト一人に囁く。呑み込んで三人を連れて橋を渡り入る。嘉藤太、こなしあつて、また地藏堂へ忍ぶ。矢張り時の鐘にて、向うより、鹽澤丹三郎、木綿合羽、大小の形にて、提灯を下げ、出て來る。後より、大場道益、匕首を差したる醫者の形にて、箱を抱へ出て來る。この後より、門平、以前の形にて、窺ひ〳〵出て來て、花道にて

道益　コレサ〳〵、鹽澤氏、如何に急用なればとて、まそつと靜かに行つても大事あるまいではないか。

丹三　成る程、左樣ではござるが、是非今夜中になければならぬその品ゆゑ、手に入つた上からは、心が先へ行くやうでござります。アレ〳〵、向うに見えるが伏見の京橋、あれでなりと息をして行きませう。

道益　それがよい〳〵。

丹三　サア、ござりませや〳〵。

ト兩人舞臺へ來て、提灯を疊み、前へ置き

道益　サア〳〵、爰で一服のんで行きませうか。

ト腰をかける。門平、忍んで二人の樣子を窺ふ。

丹三　ドレ、そんならわしものんで行きませうか。ア、コレ、惡い道連れで迷惑な事だ。

道益　コレ、丹三どの、わしも仁木さまより仰せ下されたとあるゆゑに、あの二條通りの生藥屋まで行つて、掛合うたところが、向うも商賣物と云ふうちにも、大切なる砒霜石、この毒藥をどうして賣るものでござる。ところをやう〳〵に愚老が顏で、手に入れたこの砒霜石。この上は仁木さまにお目にかゝつた上、どのやうな事にお使ひなさるゝか、とんと聞き糺した上でなければ、滅多にこの箱は渡されぬぢや。

ト丹三郎、思ひ入れ。

丹三　モシ〳〵、これはどうしたものだ。お前も平常お出入りの大場道益どのではないか。なんでも仁木どのゝ方から、わしが所への書狀には、急に右の一藥入用に御座候ふ間、大場道益へも御相談あつて、早々手に入れ候ふやう、賴み入るとの文言。ハテ、賴み手が仁木さまだに依つて、おれも働らくと云ふもの。

道益　サア、なんぼ仁木さまでも、外の事と違つて、大切な大毒藥。

丹三　これサ、大きな聲で野暮を云つたものだ。大切な恐ろしい砒霜石でも、服する時は卽ち毒藥。また煎じる時は、その效別なりと、この位の事は知つてもござらう……オヽ、これはさうだ。慥かに仁木どのは先達てより、兩足の痛みゆゑ、いろ〳〵と療治せらるれども、その効も見えぬところに、この間さるお醫者の指圖には、この砒霜石さへあれば、あの方の家にある祕法の藥を調合して、仁木どのへ遣はさるゝやうな話しもあるが、いよいよその藥について、この一藥が入用と見えますわえ。

道益　イヤ〳〵、その醫者の祕法と云ふが、どうも合點がゆかぬ。どう思ひ直しても、この一藥は上げられぬわえ。

丹三　モシ〳〵、今さら爰まで持つて來て、上げられぬと云つて、どう云ひ譯があるものだ。四の五のと面倒だ。いつその事に、わしが持つて行きませう。

ト箱を持つて立ち上がる。道益、支へて

道益　イヤ〳〵、其やうに理非も判らず、持つて行きたがるからは、なんでも怪しい。こりや一物あるに極まつたわえ。

丹三　一物も二物もない。こりやアわしが預かつた。

道益　イヤ〳〵、さう云ふ程猶渡されぬ。此方へ渡せ。

丹三　エヽ、面倒な。退かつしやい。

道益　イヽヤ、放さぬ。

丹三　退きやアがれ。

トこれより丹三郎、持つて行かうとする。道益やるまいとする。立廻りよろしくあつて、トヾ兩方へこの箱を奪ひ合ひ、好き途端に、この前より、嘉藤太、ソロソロ窺ひ出て居て、後より、道益へ一太刀浴せる。道益、アッと倒れる。丹三郎、恟りする。道益、よろめきながら

道益　人殺し〳〵。

ト呼び立てる。丹三郎、方々を窺ふ。嘉藤太、乘りか

天保九年正月市村座所演

澤村訥升の谷藏　十二世市村羽左衛門の頼兼

かり止めを刺す。道益、苦しむ。この時、丹三郎、嘉藤太が額を見て

丹三　ヤア、嘉藤太どの。

嘉藤　コリヤ。

ト思ひ入れ。嘉藤太、丹三郎に死骸をと仕方する。丹三郎、合點して、下の方へ死骸をこかす。此うちに、嘉藤太、刀を納めて

丹三　出かしました。貴殿の働らきゆゑ、安々と手に入る大望の妨げとなる大場道益、見るに忍びずこの一藥。一刻も早く仁木どのへ。併し、もしや折角骨を折つても、正眞か似せ物か、どうぞ試して見たいものだが。

嘉藤　併し、迂濶に開くは油斷の一つ……ドレ。

ト取つて、こなしあつて、箱の蓋を取る。この時、下の松ケ枝にとまりし烏、毒藥に中り、バツタリと落ちる。兩人、愕りして、嘉藤太、ちやつと蓋をして

ソレ、とまり烏が毒に中つて、目前この樣。

丹三　ハテ、爭はれぬものだなア。

トこの時、門平、ツカ／＼と出て、舞臺にある手紙を取つて

門平　この一通が後日の證據。

ト持つて行かうとする。丹三郎、愕り。

丹三　それをやつちやア。

ト取りにかゝる。立廻り。門平、丹三郎を當て、一散に向うへ入る。丹三郎、起き上がつて思ひ入れ。

嘉藤　この一品は仁木どのへ手渡しなさん。先づそれよりは今の密書を。

丹三　合點だ。

トごん／＼になり、丹三郎、向うへ一散に入る。嘉藤太、思ひ入れあつて、下座へ入る。と向うより、團平、萬平、火繩を振つて來る。後より、官藏、着流し、頬冠りにて、出て來て、直ぐに、皆々舞臺へ來る。

團平　官藏どの、最早丑滿。

萬平　なんでも賴兼が忍び駕籠と見たならば。

官藏　兩人は谷藏へかゝれ。賴兼は身が仕事にする。その手段は。

ト兩人へ囁く。

兩人　心得ました。

官藏　忍べ。

兩人　ハツ。

ト官藏は橋の袂、團平、萬平は地藏堂の蔭へ小隱れする。花道より、駕籠舁き、四つ手駕籠を擔ぎ出て來る。この駕籠の棒鼻へ小田原提灯を提げ出て來る。この後より、谷藏、伽羅の下駄を持つて、付いて出て來り、直ぐに舞臺へ來ると、駕籠を立て

駕甲　モシ〳〵、後の親方、爰に何か落ちてある。取つて下さいまし〳〵。

谷藏　何も落ちちやアない。早くやれ〳〵。

駕乙　イエ〳〵、なんでも鼻紙袋が落ちて居ます。ちよつと拾つて下さいまし〳〵。

谷藏　エヽ、やかましい。

ト云ひながら、以前の烏を取上げ

コレ〳〵、ほんにおれも、なんだかと思つた。可哀や烏が落ちて居たワ。

駕甲　ハア、烏かえ。わしやア又、鼻紙袋だと思ひました。

駕乙　成る程、慾張つた棒組みだわえ。

谷藏　待て〳〵。合點のゆかぬ烏の死骸。命を絶つべき疵も見えず、また終る命に極まらば、肉脱するは生ある物の死活の慣ひ。ハテナア。

ト思ひ入れあつて

烏羽玉の一夜を忍ぶ烏羽に、かくと知れかしかくと知れかし。

トいろ〳〵考へ、こなしあつて

サア、駕籠をやれ。

ト行かうとする。この時、團平、棒鼻の提灯を切つて落す。これにて、駕籠舁き、驚ろき

駕舁　人殺し〳〵。

ト云ひながら逃げて入る。谷藏、駕籠を圍ふ。團平、萬平、谷藏にかゝる。立廻りのうち、官藏、駕籠の内より賴兼を引出す。谷藏、これを支へ、賴兼を後へ圍ひ

谷藏　何奴だ〳〵。名乘りもかけす狼藉なす卑怯な奴の。名を名乘れ〳〵。

官藏　聞きたくば名乘つて聞かさう。わいら主從に意趣あるゆゑ、爰に待つて居た黑澤官藏だワ。

谷藏　さてこそなア。

賴兼　その官藏と云ふは、宵に廓に於て某へ慮外した奴。縄かけて、屋敷へ引け〳〵。

谷藏　ようござります〳〵。何もかもこの谷藏にお任せな

されませ……その官藏が友を語らひ、我れ〳〵主從を爰に待伏せなしたは、何意趣あつての事だ。それを吐かせ。

團平　聞きたくば云つて聞かさうが、御主人鬼貫公、兼ねて高尾に心をかけられしところに、賴兼と云ふ者あるゆゑ從はず、その上に身請けして、鼻を明かせしその禮を云ふべいと思つて待つて居たのだ。

萬平　まだその上に、高尾は何者とも知れず、討つて立退いたとの事。鬼貫公の手に入れば、さう云ふ事はあるまいに、戀の敵と云ふは賴兼、とても叶はぬ往生際だぞ。

谷藏　うぬらア、こりやア高尾が事ばかりぢやアあるまい。外に誰れぞ賴んだ者があらうがな。

官藏　いんにや、外に賴まれた事は何もない。例へ高尾がくたばらうが、それに頓着はない。鬼貫どの丶前を請合つた身請けを、賴兼にされちやア、この官藏が武士が立たぬ。今云ふ禮は官藏が、心から出た事だ。外に賴み手はないぞ。

谷藏　イヽヤ、さうぢやあるまい。爰に待ち受けて御主人に手向ひなすは、外に賴み手があらう。その賴み手を云へ。

官藏　イヽヤ、この官藏が心一つだ。

賴兼　これサ谷藏、なんであらうと、屋敷へ引け〳〵。

谷藏　畏まりました。サア〳〵、お構ひなされずに、私しにお任せなされませ……そんならそれにもしてやらうが、高尾が事は何もかも、この谷藏が計らひ。さすれば恨みはおれにある筈だ。この谷藏に云へ。殊に足弱をお供した、弱味へ付け込む卑怯者。サア、官藏、道を明けて通せ。

官藏　細言云はずと賴兼を渡せ。

谷藏　道明けて通せ。

兩人　谷藏、觀念。

ト團平、萬平、谷藏へ切つてかゝる。立廻りにて、團平、高提灯を切り落す。これより、暗き思ひ入れ。谷藏、地藏堂へ賴兼を隱し、團平、萬平、兩人を相手に鳴り物になり、タテあつて、兩人を仕留め、官藏は逃げたる體にして、橋の袂へ忍ぶ。谷藏、地藏堂より、賴兼を出す。

賴兼　オヽ、谷藏〳〵、怪我はないか。どうぢや〳〵。

谷藏　お氣遣ひなされますな。口惜しい事には官藏めを取逃がしました。彼奴を仕留めまして、後よりぼつ付きます程に、御前はこれより南禪寺通りを眞直ぐに、お先へ

お立退き遊ばされませ。

頼兼　そんなら後から早う來てくれよ……谷藏や、なんちやかモウ、暗うて歩かれぬが、提灯はないか。

谷藏　イエ〳〵、明りがあつては、却つて御身のお爲になりませぬ。サア〳〵、早う。南禪寺通りをお忘れなされますな。

頼兼　オヽ、合點ぢや〳〵……谷藏や〳〵、モウ〳〵、足が痛うて、ちよつとも歩かれぬ。そこらに下駄があらう、下駄をくれい。

谷藏　お下駄を召しては參られませぬ。マア〳〵、お待ち遊ばされませ。

ト谷藏、方々尋ねる。此うちに、頼兼、怖きこなし。

頼兼　コレ、谷藏や〳〵。

谷藏　モシ〳〵、お聲が高うござります。

頼兼　よし〳〵。そこに居るか〳〵。

ト谷藏、方々尋ねて、やう〳〵我が草履を持つて

谷藏　憚りながら、これをお召しなされませ。

ト草履を渡す。

頼兼　オヽ、草履がある。よし〳〵。

谷藏　マア〳〵、お待ちなされませ。人目にかゝりましては、お身のお爲になりませぬ。

ト腰より、手拭を出して、頼兼に意氣地なく鼻へ頬冠りをさせる。

頼兼　谷藏や〳〵、早う來てくれいよ。

谷藏　畏まりました。これを眞直ぐにお出でなされまして、左へ〳〵とお出でなされますと、直に南禪寺通りへ出ます。只今私しも後から追ッつきます程に、早うお出でなされませ〳〵。

頼兼　早う來てくれいよ。谷藏、待つて居るぞや。

ト頼兼、意氣地なく悄々と向うへ入る。谷藏、後へ戻り、伽羅の下駄を尋ね、やう〳〵探り持つて、手拭にて腰へ縛り付け、いろ〳〵探り、取り集め、行かうとする。この時、後より、官藏、窺ひ寄つて切りつける。谷藏、かい潜り、立廻りあつて、刀を打ち落し、その刀を取つて、好きキッカケに、ずつかりと一刀なぐる。これにて、官藏、胴切になり、仕掛け物にて、體半身、橋杭へ取りつく。この途端よろしく、谷藏、一散に向うへ入る。ゴン〳〵にて

幕

三幕目　南禪寺前豆腐屋の場

役名――足利左金吾頼兼。豆腐屋三郎兵衛。同妹、累。傾城高尾の亡靈。家主、市郎右衛門。捕り手、兵內。丁稚、豆太。關取、絹川谷藏。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、暖簾口。上に一間の押入れ、出入りあり、この所に六枚屛風を立て、これに三建目の高尾が裲襠を掛け、その前に位牌を直し、香爐、樒を手向けてあり、上の方に、南禪寺と彫りつけたる石燈籠、下に三尺の格子、この前に豆腐船、その外世帶道具いろ〳〵飾りつけ、いつもの所に門口。すべて南禪寺前豆腐屋の體。爰に、講中大勢、百萬遍を繰り居る。市郎右衛門、家主の拵らへにて、鉦を打ち、音頭を取つて居る。三郎兵衛、やつし鉢巻にて、味噌を摺つて居る見得。この百萬遍にて、幕明く。

市郎　傳譽妙心信女、俗名高尾菩提の爲、願以旨功德平等一切、發菩提心卽身成佛、南無阿彌陀佛々々々々々々々々。

三郎　ヤレ〳〵、お家主樣を始め、お店の衆の、いかい御供養でござります。マァ〳〵お茶を一つ上がりませ。

ト茶碗と藥罐を出す。

市郎　なにサ〳〵、措かつしやりませ。心遣ひは御無用でござります。全體今日の佛の近付きの、若王寺のちよんさい坊を賴んで、百萬遍を繰つてもらはうと思ひましたが、これも急に新佛があると云うて、據ろない斷わり。ほんに世の譬への通り、貧僧の重ね齊とやらで、ハ、ハ、ハ、。イヤ、重ね齊と云へば、妹御の累どのは、どこへ行かれました。

三郎　累はまだ寺詣りを致しませぬ。この間葬禮の節、供に立たせませうと存じましたれど、きつう取亂しましたゆゑ初七日に參ると申しましたゆゑ、それで今日、阿房めを付けまして、寺詣りに遣はしましたが、もう戻りさうなものでござりまする。何を申しまするも、私し一人の手先、何を上げまいと自由な事と、麁末に致す事でござりまする。眞平御免なされませ。

市郎　それは、ほんに累どのは奇特な事でござる。追ッつけ戻らるゝ事でござらう。留守中は何をするも、貴樣の手一つ。必らず〳〵心遣ひして下さりますな。時に三婦

どの、累どのも娘盛り。どこぞ相應な所へ片付けさつしやれたらよからう。シタガ、娘ぢやと思うて居るうちに、もう内證は年増だも知れませぬ。ハヽヽヽ。

三郎　イヤモウ、この間も相應な所がござりましたゆゑ、彼れに話しましたが、兎角片付くことを嫌がりまするが、なんぞ内證にあるかも知れませぬて。今では便りに致す兄弟にも別れ……母に遺言もござりますれば、彼れが心任せに致して置きまするが、もし相應な所もござりましたならば、お頼み申しまする。

市郎　成る程〳〵。イヤ、三婦どの、ちとこなたに聞きたい事がござる。寄つてござる講中衆と云うて、お長屋の事、さして遠慮もござるまい。なんでござるてサ。外でもない、この佛の事でござる。

三郎　エ。あれは、なんでござる。私しの直の妹、累が爲には姉の高尾。仔細ござつて、まだお店へ參りませぬうち、島原へ遣はしましたが、段々繁昌いたしまして、行く行くは身の片付きも出來ませうと、思うてゐる間もなう、七日以前に病死いたしましてござりまする。

市郎　その事でござります。さう聞けば病死に違ひもござるまいが、どうやら世間の噂には、角力取の絹川とやらに、無理殺しに。

ト三郎兵衛、講中へ心遣ひの思ひ入れあり

三郎　モシ〳〵、お家主樣、何を仰しやりまする。御存じの通りの身の上ゆゑ、いろ〳〵な取沙汰を申してがなござりませうとて、世間の口には戸が立てられませぬ。ハハヽヽ。わたしとした事が、もうお燗がよからう。

ト竈の側へ立つて行く。

市郎　アヽ、コレ〳〵、三婦どの、必らず構はつしやりまするな。

ト皆々、捨ぜりふにて、いろ〳〵挨拶ある。三郎兵衛、銚子杯を出し

三郎　お詞に甘へまして、何も致しませぬが、ほんの精進酒の一つ吞みとやら。一つ上がつて下さりませ。お家主樣、お前お始めなされて、皆さんへ進ぜて下さりませ。

市郎　これは又迷惑な。併し、志しでござる。皆一つ宛參りませう。

ト捨ぜりふにて、市郎右衛門、杯を取る。三郎兵衛、酌をする。時の鐘になり、花道より、絹川谷藏、前幕の形にて、伽羅の下駄を提げて出て來る。後より、捕り手兵内、窺ひながら出て來り、谷藏、本舞臺へ來る

と、兵内は下の方へ忍ぶ。谷藏、後を見送りながら門口へ當る。

三婦どの、何か門口へ當りましたぞえ。

三郎　イエ、大方犬でござりませう。いつも豆腐の殼を桶に入れて、門へ出して置きまするが、兎角これを食べに參りまする。

ト云ひながら門口へ來り、戸を明けて、谷藏を月明りに透かし見る。内にては酒盛りあるべし。

谷藏　灯火目當に、やう／＼これまで參りました。樣子ござつて殊の外、道を急ぎましたゆゑ、難儀いたします。御無心ながら水を一つ、お振舞ひなされて下さりませ。

ト三郎兵衞、呑み込んで門口をたて、茶碗へ水を汲んで持つて行かうとして、また湯を汲み直して

三郎　熱うござります。靜かに參りませ。

谷藏　忝なうござりまする。

ト呑んで茶碗を戻す。

三郎　見れば、いかう取亂してござるが、樣子ばしあつての事でござるか。

谷藏　御推量の通り、お話し申せば長い事。御主人の爲に

ト思ひ入れあり

何とも申し兼ねましたが、暫しのうち、お内を貸しては下さるまいか。

三郎　隱まうてくれいとか。

谷藏　左樣。

三郎　そりやハヤ、事と品とに依つたら、隱まひますまいものでもなけれど、只御主人の爲とばかり聞いては。と云うて爰は門口。

ト思ひ入れあり

見らるゝ通り客がござる。暫しのうち、その蔭に。好い時分に案内しませう。

ト谷藏、豆腐船の蔭へ隱れる。三郎兵衞、内へ入る。

どうでござりまする、市郎右衞門さま、上がりましたか。

市郎　イヤモウ、最前からお辭儀なしに、譯中も餘程なりました。して、貴樣はどこへござつた。

三郎　門の豆腐の殼を片付けて居りましたて。

市郎　時に、もう大分食べました。お取りなさい／＼。ほんにわしとした事が、ちと用がござつた。お暇申しませう。

三郎　申し／＼、今お歸りなされては惡うござります。な

文政元年八月中村座所演繪番附

んでござります、累が申すには、お前方がお出でなされたら、お留め申して置いてくれい、ちとお話し申したい事があると申して居りました。妹が歸りまするまで、もう一つ上がつて、奥でお待ちなされては下さりますまいか。

市郎　大方それは石碑の事でがなござらう。そんなら斯うしませう。講中を殘して置いて、ちと用事もあれば、もう歸りませう。

ト門口へ來る。三郎兵衞、谷藏へ心遣ひの思ひ入れにて、無理に引留める。

三郎　申し〳〵、今お歸りなされては、惡うござりますと申すに。たつた今私しが、門口へ出ましたれば、大きな病犬が居りました。その病犬の大きさ怖さと申すものは、ひよつとあれに喰ひつかれて御覽じませ。堪るものではござりませぬ。もそつと過ぎてお歸りなされませ。

市郎　得て春先は、病犬が出來るものでござるて。そんなら講中と一緒に、累どのゝ歸りを、奥で待ちませうかい。

三郎　サア〳〵、奥へお出でなされて、もう一つお上がりなされませ。申し〳〵、その珠數は戸棚の中へ入れて置かつしやりませ。また歸りに忘れさつしやりますな。

市郎　合點ぢや〳〵。

ト珠數を戸棚へ入れる。

サア〳〵、皆も奥へ、ござれ〳〵。

ト市郎右衞門先に講中皆々、捨ぜりふにて奥へ入る。合ひ方、三郎兵衞、後見送り、思ひ入れあつて、潜りを明け

三郎　最前の。そこにござるか。心遣ひはない。マア、こちらへ入らつしやりませ。

ト内へ入れる。谷藏、伽羅の下駄を木片の際へ置き、思ひ入れして、上へ通り

谷藏　左樣ならば、御免下さりませ。

三郎　時にマア、何は捨て置き聞きませうは、わしを見かけて、隱まうてくれいと云はつしやる、その仔細は。

谷藏　その樣子と云ふは、これでござりまする。

ト脇差を三郎兵衞が前へ出す。

三郎　樣子を問へば答へもなく、只一腰を投げ出して。

ト思ひ入れあつて、行燈を掻き立て、一腰を取上げ、拵らへに心を付け、拔き放し

刃をしたふこの血は。

ト納め、兩人、思ひ入れ。

谷藏　サア、それぢやに依つて、隱まうて下さるまいか。
ト三郎兵衞、思ひ入れあつて門口を締め、內外へ心遣ひして、行燈を遠ざけ、谷藏が側へ寄り、合ひ方。

三郎　して、喧嘩の樣子は。

谷藏　御主人と賴むは、やんごとなき御方。廓の出入りが意趣となり、忍びの駕籠の歸るさに、待伏せされしは伏見の京橋。足弱連れと容赦なせば、弱味へ付け込み相手は大勢、主人の御身には替へられず、討つて捨てたゝ今宵の仕儀。なんと御亭主、隱まうては下さるまいか。

三郎　出かさつしやれた。小氣味のよい今の話し。隱まひませう。

谷藏　樣子を聞いて、得心の上。

三郎　町人でこそあれ、わしも男だ。もしも後日に事顯はれ、人殺しの罪極まらば、こなたと替つてわしが命。サア、命に替へて隱まひました。お客人、マア、落ちついてござりませせ。

谷藏　忝なうござる。その一言を聞く上は、何を隱さう、拙者事は。

三郎　待たつしやれ、名は聞きますまい。隱まひ負ふせたその上で、何時でも聞かれるこなたの實名。生なかに今聞いて、もしもわしが內に隱まうたと云ふ事が、外へ知れては、わしが疑ひを請けるが口惜しい。ハテ、隱まひ負ふせたその上では、三郎兵衞を憎いとも思はつしやるまい。わしも又賴み少ない身の上、こなさんのやうな人には、なんぞの時の力になつてもらひたいが、わしの願ひ。いつでも聞かれる互ひの身の上。心措きなく、マア横にでもならつしやい。

谷藏　それもさうかい。そんなら今宵は、夜と共に話しませうかい。

三郎　それがようござる。マア〱、横になつたがよい。枕を進ぜうか。時分はどうぢやの。遠慮さつしやるな。

谷藏　御亭主、見れば新佛さうなが、こなたの親御とでも云ふやうな事かの。

三郎　イヤ、親どもには、幼少な時分別れましたが、それよりは兄弟三人、後の二人は皆妹、其うちの一人は、仔細あつて外へ出して置きましたが、この中急病で亡くなりました。今日が初七日ゆゑ、末の妹は寺詣りに遣はしました。

谷藏　ハテサテ、それは氣の毒な事。急病とは云ふものゝ、病とは、なんでござりました。

三郎　エヽ。
　ト悄りして
日頃から心遣ひの病氣、思ひ出しては可哀さうな事をしました。
谷藏　わしとした事が、なんの聞かずともよい事を。兄貴に思ひ出させて、エヽ、氣の毒な。泊り合せたこそ幸ひ、餘所ながら回向しませうかい。
三郎　それは忝なうござる。
　ト三郎兵衞、佛壇の蠟燭の心を切る。谷藏、位牌に向ふ。
傳譽妙心信女、俗名高尾。
谷藏　エヽ。
　ト悄りして位牌を見る。ドロ〳〵にて、屏風の小袖自づと動く。谷藏、念佛申して居る。三郎兵衞、ツカ〳〵と寄らうとする。谷藏、これを隔て、兩人、思ひ入れあり
御亭主、後に逢ひませう。
　ト唄になり、谷藏、奥へ入る。三郎兵衞、殘り
三郎　合點のゆかぬ今の有樣。今宵泊めたる彼の者が、妹の位牌へ回向するや否、筐に送りしあの小袖、生きたる如く、自づと動くは。
　ト思ひ入れあり
直ぐなる死でもある事か、刃にかゝつてこの世を去る、最期まで着たるこの小袖ゆゑ、念の殘るも理りかえ。南無阿彌陀佛々々々々々々。
　ト回向して居る。出の唄になり、花道より、累、振り袖やつしの形。豆太、丁稚の形にて、提げ籠へ鯛と鰻を入れて、小田原提灯を下げて出て
豆太　モシ〳〵、累さん、急いで歩きなさいませ。どこの國に今、寺詣りから歸る者があるものでござりまするか。
累　ハテ、心の急くはわしも同じ事。兄さん一人留守に置きましたれば、何かの事が御不自由であらうと思へば、其方よりわしが心が急くわいなう。
豆太　併し、お前の姉さん高尾さんは、亡くなつてしやれたからは、お前が一人の妹。花見に行かうが、芝居を見やうが、有平をねだらうが、心一杯と云ふものだ。それ程のお前でも、自由にならぬが、最前見かけたあの關取どの。名は慥か木綿川。オヽ、それ〳〵、絹川とやら、わしが自由になるなら、どうぞお前と一つにして見たい

ものだぞ。

累　サア、その絹川さんとやら云ふ關取さん、いつぞや清水の花見の戻りに、見て見ぬやうな下向道。それから絶えて逢ひ見る事もなく、お懐かしいと思うて居たに、最前黄昏に見かけましたは、慥かに主さんではなかつたかいなう。

豆太　さればナ。用ありさうに急いて行かしやつたが、飛脚にでも頼まれたのか。但しは虫氣付いたと知らせて來たか。それに見惚れて此やうに、遲くなつたと云つちやア、正直に云ひやすぞえ。

累　其やうな事を、兄さんに云うてよいものかいなう。お寺詣りが遲うなつたとばかり云うて、その事は必らず云うてたもるなや。

豆太　お前がさう頼みなさる事なら、云ひやすまいから、その代りに、琥珀の帶を買つてくれなさるか。

累　云うてさへくれぬなら、其方の事はどうなとせうかいなう。

豆太　琥珀の帶さへ買つてくんなさるなら、何も云ひやせぬ。そりやアさうと累さん、いま後で褒めやしたぞえ。

累　なんと云うたぞいの。

豆太　あれ見ろ、お染と久松が通ると云ひやした。

累　なにを。早う行きやいなう。

ト矢張り唄の切れにて、兩人、門口へ來り、明けうとして明かぬゆゑ

申し兄さん、戻りましたぞえ。

ト叩く。

豆太　旦那さん、歸りやした／＼。

ト三郎兵衞、捨ぜりふにて、門口を明け

三郎　オヽ、妹か。ヤレ／＼、待ち兼ねました。大分遲かつたの。

累　さぞお前は、お淋しうござんしたであらうの。

三郎　イヤ、留守に市郎右衞門さまはござる、長家の衆がござるし、外にも客人もあつたゆゑ、其やうにも思はれなんだが、きつう暇がいつたの。若い者の夜に入つて歩くは、入らぬものぢや。重ねては嗜なんだがよいぞや。大方また阿房めが、道草を食つて居おつたであらう。

豆太　イエ、道草は食べやせぬ。お寺で草餅を大分食べやした。

累　お墓の掃除をしたり、それからお花を上げたり、何やかやで、いつそ遲うなりました。

三郎　内を晝早うに出て、お寺まで、なんぼ女子の足ぢやと云うて、晝のうちに行きさうなもの。それに夜に入つたとは、ちと嗜なみや〳〵。

豆太　イヱ、お寺へ行つたは八ツ過ぎの事。それから和尚樣の御馳走になりまして、ぶら〳〵歸る道で、逢ひやした。

三郎　そりや誰れに。

豆太　ハテ、逢ひやしたよ。

三郎　そりや、誰れに。

豆太　木綿川に。

ト累、術なき思ひ入れ。

三郎　そりやアなんの事だ。

豆太　オヽ、絹川に逢ひやした。好い男だよ　成る程、あの子の惚れなさつたも無理はないぞ。

三郎　何を吐かす。

豆太　ほんに惚れやした。

累　コレ。

豆太　南無三、琥珀の帶。

三郎　此奴が何を云ふやら、一つも解らぬ。縱から見ても横から見ても、阿房な奴ではあるぞ。

豆太　付ける藥がありさうなものだ。

三郎　また差出居る。すッ込んで居らう。時に累や、其方も知つての通り、今日市郎右衞門さまを講頭にして、百萬遍を繰つてもらつたが、なんぞ夜食を進ぜたいが、其方は留守なり、おれが手一つ。なんぞそこらを見集めて拵らへて上げたいものぢやが。

累　アイ〳〵、わたしも其やうな事が苦勞になつて、大抵道を急いだ事ぢやござんせぬが、マア、何をお茶にして上げたものでござんせう。手前物の豆腐を上げるもをかしいものなり、なんぞお茶になりさうな物を。

豆太　さう云ふ事もあらうかと、わたしが土産に買うて來た、好い物がござります。

三郎　それは阿房めが出かし居つたわえ。なんぢや、早う持つて來い〳〵。

豆太　爰は一番褒めてもらはずばなりませぬ。

ト提げ籠の鯛と鱧を出す。

三郎　こりやアなんだ。

豆太　なんと、鯛の濱燒に、この鱧を蒲鉾にして進ぜたなら、一かどの法事でござりますな。

三郎　コリヤヤイ、今日はいつだと思ふ。妹の高尾が初七

嘉永二年三月河原崎座所演

尾上菊次郎の累

日ぢやワ。それに此やうな物を買つてうせると云ふ事があるものか。

豆太　サア、高尾さんの佛事ぢやに依つて、買つて來やした。

三郎　そりや又なぜ。

豆太　ハテ、高尾さんは全盛な女郎衆。日頃から魚づくめ。如何に死んだ身の上だと云つて、いとしほなげに大根や人參ばかり進ぜられますまい。また斯う云ふ物を進せたならば、ひよつと喰ひつかしやるまいものでもござりませぬ。

三郎　云はして置けば方途がない。おのれがやうな奴は。

ト棕櫚箒を持つて打ちにかゝる。累、留める。豆太、泣き出す。奥より、講中の者皆々出て來て、これを留める。

講中　三婦どの、これはマアなんでござる。

三郎　あの阿房めを折檻いたさうと存じて。

講一　いつは兎もあれ、今日は佛事の事、料簡してやらつしやりませ。

累　お前方は、ようお出でなされました。

講二　これは累どの、こなたの留守に、大きに造作になりました。もうお暇申しませう。

三郎　もそつとお話しなされませ。何はなくともお夜食を、上げる積りでござりまする。

講三　なにサ／＼、もう歸りまする。時に皆の衆、市郎右衛門どのは、どうなされましたの。

講四　最前の酒に廻されて、奥に寢て居られまする。

講五　そんなら後より戻らるゝであらう。サア／＼、皆歸りませう。

三郎　これは又、餘りお早々でござりまする。そんなら又、二七日にはお頼み申しまする。お履物を。

ト豆太、履物を直す。皆々、捨ぜりふにて向うへ入る。

豆太　アレ／＼、あの人は、おれが草履を穿いて行くワ。オ、イ／＼。エ、、太い人だ。

三郎　時に佛前へ、なんぞ上げたいものだが。オ、、それそれ、累や、高尾が繁昌の時分、見返り柳の前の輕燒がきつい好きであつたが、輕燒を買つて供へたいものぢや。

累　わたしも其やうに思うて居やんした。あの豆太をちよつと取りにやらうわいの。

三郎　イヤ／＼待ちや。彼奴をやつたら、又ちやつとでは埒が明くまい。ツイおれが一走り行て來ませう。

累　シタガ、きつう暗いぞえ。なんなら明日の事にでもなさんせぬかえ。

豆太　わつちが行つて來やせう。

三郎　イヤ／＼、ツイ一走り行て來よう。

ト三郎兵衞、身拵らへする。奥にて

谷蔵　御亭主々々／＼。

ト云ひながら出て來る。合ひ方。

三郎　これは客人、どこへござる。

谷蔵　最前話したお方のお身の上、どう思つても氣がゝりになりまする。そこらまで行つて見たうござる。

三郎　成る程、マア、そんなもの。ほんに累、これはおれが前方、きつう世話になつた人ぢや。今宵尋ねてござつたを幸ひに、泊めました程に、馳走申しや。あれはわしが末の妹、名は累と云ひまする。近付きになつて下されませ。

谷蔵　そんなら、これはこなたの末の妹、高尾どのゝ妹。アノ高尾どのゝ。

ト思ひ入れあり

ハテ、好い產れつきでござるの。全體わしは兄御とは、ずんど心安うしましたが、打絶えて互ひに疎遠。今宵久し振りで尋ねました。これからは心安うして下さりませ。

ト此せりふのうち、累、悄りして、いろ／＼思ひ入れ。行燈を掻き立て、つく／＼見る。豆太、累へ囁き、茶煙草盆を持つて出て、嬉しきこなし。

累　ようお出でなされました。

豆太　ようお出でなされました。

トうろたへ、兩人、向ひ合ひ互ひに辭儀する。

三郎　これサ／＼、てもさても騷々しい。其やうに蓮葉にせずと、靜かに馳走申しやれいの。

豆太　これでござりやす／＼。

三郎　阿房めが同じやうに、何を吐かし居る。

豆太　イヽエサ、この人でござりやす。

三郎　何がこの人だよ。

豆太　今日寺詣りの歸りの遲くなつたも、みんな主から起る事サ。

三郎　寺詣りの歸りの遲いのが、主から起る事とは、そりや何を云ふのだ。

豆太　ハテ、お前も野暮な。累さんは疾から主に。

三郎　ヤ。

豆太　主でござりました。
　ト三郎兵衛、呑み込み思ひ入れ。累、恥かしきこなし。
谷藏　妹御に別れさしつても、また斯う累どのがあれば、どこへ緣付かつしやれても、末の便りになると云ふものして、どこぞ相應な所でもござるかの。
三郎　サ　見さつしやる通りのわしが身の上。好い町人衆の所から云ひ込みもござれども、彼れが先づ嫌がりまする。わしも又、妹を玉に遣つて、團扇で暮らす心もござらぬ。どうで外へやるものぢやから、先はなんでも儘、あれが行きたがる所へ遣らうと思ひまする。
谷藏　いつそそれがようござらう。時に、そんならわしはちよつと行て見て來ませう。
累　お前はマア、どこへお出でなさんすえ。
谷藏　まだわしが連れが來る筈でごんすから、ちよつと行て見て來ませう。
累　お前もマア、この暗いに、お出でなさんして、ひよつと怪我なとさんしたら、どうせうと思はんす。お連れ衆なら後から尋ねて見えませうわいなア。どこへも行かずと、此方の內に、二年三年も十年も百年も、お連れ衆の見えるまで、お待ちなされたがようござんすわいなア。

三郎　イカサマ、勝手を知らぬ夜道。イヤ、斯うしませう。幸ひわしは近所まで行かねばならぬ用がごんす。また見受けた所が、妹もこなさんに何か用が。サ、わしが見て來て進ぜませう。
谷藏　それは忝ならごんすが、併し、こなさんでは、もし其お方に巡り逢つても、夜道と云ひ、見知りない連れ。
三郎　ハテ、氣遣ひさつしやるな。最前の體をとつくり聞いて居れば、宛ら雪を墨とも思ひますまい。こなたは餘り門口へ出るはいらぬもの。幸ひ留守は彼いら二人。わしに代つて賴みます。
谷藏　云はつしやればそんなもの。そんなら早く歸らつしやい。
三郎　そんなら賴みましたぞ。ナニ累や、隨分と、ナ、馳走しや。
　ト提灯を下げ、行かうとする。累、留めて
累　兄さん、夜道ぢや、これ差して行かしやんせ。
　ト押入れより脇差を出し、三郎兵衛に渡す。
三郎　これには及ぶまいが、大脅しに差して行きませう。
　ト門口へ出て
もしもわしが留守に、話しの人が見えたら、遠慮なしに

内へ入れまして、ナ。コリヤ豆太、何をウロ〱して居る。エヽ、ウロ〱と機轉の利かぬ。累や、客人に肩でも揉んで進ぜやれ。
ト門口をしやんと締める。唄になり、三郎兵衛、思ひ入れあつて、向うへ入る。累、嬉しき思ひ入れ。あと合ひ方、
谷藏　何から何まで頼もしい兄貴。好い兄弟を持たしつたの。それには引替へ氣の毒なは只姉御。
ト思ひ入れ。累、これに構はず
累　アイ、お茶を上がりませ。
ト茶を出す。
谷藏　アイ〱、構はつしやりますな。
ト茶碗を取り下に置き
南禪寺前まで眞直ぐに、お出でなされたと云ふからは、もうお見えになりさうなものぢやが。但し又、道に迷ひ岡崎村の方へお出でなされはせぬか知らん。ハテ。
ト累、豆太に囁く。豆太、吸ひつけ莨をやれと仕方で教へる。
累　アイ、お莨を上がりませ。
谷藏　イヤモウ、構はつしやるな。茶も莨も、大分のみました。
ト谷藏、頼兼が事を苦勞して居る。
豆太　お前、よう來て下さんした。
ト嫌らしう云ふ。
谷藏　おきやアがれ。氣が狂つたさうな。
豆太　時にお前、あの子を知つて居なさるか。
谷藏　今夜初めて近付きになつたものを、どうして知るものか。
豆太　變つた事の。累さんはお前をよう知つて居やんす。
谷藏　そりや又どうして。
豆太　しかもこの春、稻葉藥師に角力のあつた時、わしは累さんの供で、清水の觀音さまへお參り申した歸りがけ角力崩れでどや〱と、松原通りの人群集。この子を人に抓らせまいと、後へグッと引添うて。
ト手を持つて側へ引付ける。
累　歸る雁金來る燕、人目包みし頭巾を着て、通らしやんしたその殿振り、いとしらしうて、つんとして、思はずゾッと春風が、裾吹き返すも氣が付かず、暫し見送る後影。
豆太　機轉利きたるこの豆太、あたりの茶屋へ駈け寄つて

粟　今の角力の名はなんと、戀の出花を酌みさして、あの關取は絹川と聞いた時のその嬉しさ。逢ひ見る爲と鼻紙へ、假の楊枝に覺え書。消ゆる思ひでござんしたに、よう來ては下さんした。

谷藏　そんなら其方は、疾からおれを知つて居たのか。

粟　アイ、知つて居た段かいなう。

谷藏　ハテナア、姉の高尾が恨むも、その妹粟が慕ふも、我れと我が身に報い來て、この世は牛の小車や、廻る因果は仇と戀。ハテ、爭はれぬものぢやなア。

粟　お前は何を云はしやんすぞいなア

谷藏　最前から、ちと心持ちが惡い。無心ながら肩を揉んで下され。

豆太　肩はわしが得手ものサ。

粟　イヤ〱、肩はわしが揉む程に、其方は白湯を酌んでおぢや

豆太　オッと呑み込み。併し溫からうに。

粟　ちよつと沸かして上げやいなう。

豆太　さらば白湯を沸かさうか。

ト合ひ方、時の鐘になり、豆太、白湯を沸かす。花道より、頬兼、頬かむりをして、しどけなく、出て來り

頬兼　ア、、辛どや〱。爰はマアなんて云ふ所で、そしてマア、夜道で物の黑白は知れず、谷藏が云ふには南禪寺前を眞直ぐに行けと敎へたが、どこが南禪寺やら。エエマア、ずんと咽喉が乾いてならぬが、そこらに葛湯はあるまいか知らん。これにつけても高尾が居つたなら、此やうな不自由な目はさせまいもの。あそこに灯し火が見える。あれまで行たなら、定めて駕籠に乘せてくれるであらう。ドリヤ。アイタ、、、。足が痛うてならぬ。悉皆節分の夜座敷を歩くやうぢや。それに夜氣を受けた所爲か、そこら爰らがじめ〱してならぬ。湯を取らせたいものぢやが。

ト門口へ來り、無性に叩いて

誰れも居らぬか。爰明けてくれい。早う明けいよ。どうぢや、明けぬかい。

豆太　豆腐はもう賣らない。

頬兼　明けてくれいよ〱。

豆太　油揚は賣りきりだよ。

頬兼　明けてくれいよ。

豆太　エ、モウ、寢たよ。

谷藏　ト谷藏、合點のゆかぬ思ひ入れにて、門口を明けて
賴兼公でござりまするか。

賴兼　谷藏か。逢ひたかつた〳〵。
ト心緩みて動かれぬ思ひ入れ。

豆太　ア、、生醉だ〳〵。
ト上の方へ逃げる。累も氣味の惡き思ひ入れある。

谷藏　今も今とて御前のお噂のみ。ようマアこれまでお出で下されました。お足は痛みは致しませぬか。お御足を淸めますお湯を、早う〳〵。
ト累、アイ〳〵と盥を持つて出る。豆太、藥罐の湯をあける。谷藏、二人して足を洗ふ。

賴兼　谷藏や、モウ〳〵、其方に別れてから、辛どい目に遭うた。そしてマア、爰は其方の家か。

谷藏　イヤ、私しが宅ではござりませぬが、隨分お心措きなう入らせられませい。

賴兼　オヽ〳〵、コリヤ、二人ながら爰へ來て、足を揉んでくれい。
ト豆太、ムッとして

豆太　なんだ、足を揉め。

谷藏　イヤ、お御足は私しが仕りませう。

賴兼　谷藏や。官藏や外の惡者どもは、どう致した。

谷藏　ヘイ、官藏を初め外の奴等も、まんまと
ト谷藏、豆太に思ひ入れして
コレ累や、最前話したわしがお連れのお方ぢや程に、白湯漬を上げましてくりや。豆太も共々奥へ行て、手傳うて拵らへてたも。賴んだぞ。

累　アイ〳〵。そんならツイ拵らへて參りませう。サア豆太、おぢや。

豆太　なんの、知りもせぬ者を、打ッちやつて置きなさい
ト豆太、ふてる。累、無理矢理に手を引き、奥へ入る

谷藏　遲うてもよい程に、隨分綺麗にしてくれよ。頼んだぞよ〳〵。
ト後見送り
早速ながら申し上げませうは、最前の官藏めを初め、付き從ふ下部まで、なんなく仕留めましてござります。

賴兼　ナニ官藏を仕留めたと云ふか。出かした〳〵。
ト云ひながら、賴兼、コクリ〳〵と居眠る。

谷藏　御覽の通りの曲者ども。向うは手段の上、不意に打つたる卑怯者。憎さも憎しと眞ッ二つに仕りました。
ト賴兼を見て

御寢なりましたか。さうでもあらうかい。ついにおひろひもなされぬ夜道を、たつたお一人で、云はゞ爰まではようお出で遊ばしたなア。風でも召してはならぬ。なんぞお裾へ懸けて上げたいものぢやが。

ト戸棚へかゝる。奥にて

市郎　三婦どのや／＼。

ト云ふ。これにて、谷藏、賴兼を引起して、捨ぜりふにて、戸棚の内へ賴兼を隱す。

三婦どの／＼、いかい報謝になりました。イヤモウ、辭儀なしに大きに食べ醉ひました。忝なうござる。もうお暇申しませう。

ト酒に醉うたるこなしにて、出て來り、ヒヨロ／＼と谷藏に行き當る。

谷藏　こなたは誰れだ。

市郎　おれか。おれは帶屋の市郎右衞門と云つて、三婦どのゝ家主だが、こなたは誰れだ。

谷藏　わしかえ。わしはなにサ。オヽ、それ／＼、わしは三郎兵衞が親でごんす。

市郎　なんだ親だ。

ト膽を潰す。

谷藏　イエ、なにサ、わしやア三郎兵衞とは兄弟同然の者でござりまするが、今夜佛事に參り合せ、平に留められまして、今夜はこれに一宿いたしまする。

市郎　そんなら、三婦どのが歸られたら、よう云つて下さい。ドリヤ、歸りませう。谷藏、留めて

ト戸棚へかゝる。

谷藏　コレ／＼、お前は何をさつしやる。

市郎　先刻この戸棚へ、百萬遍の珠數を入れて置いたに依つて、持つて歸りますよ。

谷藏　ナニ、この戸棚へ珠數を入れた。なぜ珠數を入れた

市郎　ハテサテ、別してもない事をきつい膽を潰しやうの。なんでも、あの戸棚へ珠數を。

谷藏　なぜ戸棚へ物を入れた。あの戸棚を明けさせて詰まるものか。殊に三婦が留守を預かつて居て、手籠めにさしては、わしが立ちませぬ。珠數は明日持たせてやりませう程に、マア、今夜は歸らつしやりませ。

市郎　イエ／＼、さうでござらぬ。講頭から預かつた物。粗末にすると思はれては、わしが立ちませぬ。持つて歸りませう。

トまた戸棚にかゝる。

谷藏　戸棚を明けて詰まるものか。

市郎　ハテサテ、おれが物を持つて行くに、誰れがなんと云ふものだ。退かつしやい〳〵。

谷藏　待つたしやい〳〵。

市郎　エヽ、面倒な。退きやれよ。

ト合ひ方、振り放す。谷藏、留めて立廻り。此うち、花道より、三郎兵衞、提灯を下げ、菓子袋を持つて、出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、思ひ入れあつて、内へ入り、市郎右衞門を見事に取つて投げる。

谷藏　三婦どの、いま歸らしつたか。

三郎　オヽ、いま歸りました。

市郎　アイタヽヽ。わりやアおれを投げたな。うなア。

ト拳を振り上げ、三郎兵衞と顏見合せ

三郎　家主樣、何をなされまする。

市郎　三婦どの、好い所へ歸らしつた。聞いて下さい。この戸棚へ入れて置いた百萬遍の珠數を出しにかゝれば、この男が滅多無性に留めますわいの。そればかりぢやアない、おれをあそこへぶッ付けたわな〳〵。イヤ、ぶち付け千萬な。

三郎　モシ〳〵、お前を誰れが投げるものでござります。今のはお前の怪我でござりまする。

市郎　なんだ今のは怪我だ。

三郎　左樣サ、この莨盆へ、お前が蹴躓かつしやれたのでござりまする。

市郎　ハテ、とんだ怪我もあるものでござるの。時に三婦どの、夜が更ける。珠數を出して下さい。

三郎　上げまいでは。大事のお道具を借りましたものを。ドレ出して。

ト戸棚へかゝる。谷藏、コレと思ひ入れ。三郎兵衞は何心なく戸棚を明ける。内より、吹替への頰兼、頰冠りの儘にて出て來る。三郎兵衞、愕りする。谷藏、心遣ひの思ひ入れ。市郎右衞門、見ようとする。三郎兵衞、戸棚をシヤンと締める。

谷藏　人目を忍ぶ伊達小袖、しかも立派な男物、望み手のあるまでは、人の目つまにかゝらぬやうに、しまつて置いて下さいまし。しつかりと頼みましたぞ。

ト兩人、思ひ入れ。

市郎　これサ〳〵、そりやマア何事だ。二人して質屋の番頭を口說くやうな事を云つて居るが、三婦どの、早く珠數を出して下さい。どうするのだ。いつそおれが。

ト立ちかゝる。谷藏、支へるうち、三郎兵衞、戸棚より珠數を出して、手早く後を締める。

三婦　ソレ、珠數。

　ト投げてやる。市郎右衞門、取つて

市郎　これ程埒の明く事を、これが又珠數なればこそよけれ、質で見たがよい。上げ下げの間に合ふものぢやアない。

　ト珠數を持ち門口へ出かゝり

イヤ申し、暗いワ〳〵。なか〳〵一足も歩かれぬ。三婦どのや、提灯を貸して下さい。

三郎　オヽ、幸ひ爰の講中のこの提灯。これなりと持つてござれ。

　ト講中と記したる提灯を出してやる。市郎右衞門取つて

市郎　アヽコレ、この提灯より、あの戸棚の。

　ト戸棚の方へ行かうとするを、三郎兵衞、門口へ突き出し、戸をシヤンと締める。

こりやアどうする。

三郎　ようござりました。

市郎　おきやアがれ。

ト矢張り、醉ひたるこなしにて、提灯を下げて花道へかゝり、よき所にて、提灯の灯を吹き消す。明けの鐘になり、思ひ入れあつて、尻をからげ、窺ひ〳〵取つて返し、下の方へ入る。

三郎　家主とした事が、役にも立たぬ事を。

　ト云ひながら、あたりを見て

客人、戸棚の內の伊達小袖まで、お世話申さうと云ふこの三郎兵衞、そのわしが根性も、大概知れたでごんせうの。

谷藏　そりやハヤ、わしも世間を渡つて歩いて、盆茣座の端へも、又は端買ひの傾城柄をも握つたもの。宵からこなさんの心遣ひは、心魂に徹して忝なうござる。

三郎　さう思つて下さりやア、わしも嬉しい。時にこなたの名を、宵に聞くも男らしうないと思つて、聞きませなんだが、根性にかけごのない事を、見拔いて下さつた上は、男立てもいらぬやうなもの。此やうに懇ろになつて、名を知らうと云ふもをかしいが、こなさんの名は、マアなんと云ふ。

谷藏　宵にさへ打明けて、話さうと云つたわしが身の上。わしは絹川の谷藏と云ふ、ずんと小前な角力取でごんす

天保九年正月市村座上演

市川九藏の三郎兵衛

三郎　エヽ、なんと云はつしやる。こなさんが絹川の谷藏と云ふ、角力取だと云はつしやるか。

谷藏　如何にも。絹川の谷藏と云ふ者でごんす。

三郎　アノ、こなたが絹川の谷藏どの。

ト思ひ入れあり

ハテナア。なんのわしとした事が、役にも立たぬ事を。ハヽヽヽ。ドリヤ〳〵これを手向けて回向しませう。

ト三郎兵衞、菓子袋を持つて、位牌の前へ行かうとする。

谷藏　イヤ、三婦どの、それはわしに供へさせて下さりませ。

三郎　エヽ。そんならこなた、供へて下さるか。

ト谷藏、菓子袋を佛前へ供へて

谷藏　傳譽妙心信女、菩提の爲。南無阿彌陀佛々々〳〵々々々々。

ト回向する。ドロ〳〵にて、小袖の上へ心火燃え、以前の通り、小袖おのづと動く。谷藏、目を閉ぢて回向する。三郎兵衞、キッと思ひ入れ。

情ない高尾どの、まだ浮かまずに成佛せぬか。何事も君のお爲と諦らめて、恨みを晴らして下さい。忠義の爲には替へられぬ。この絹川が手にかけた。

ト三郎兵衞、思ひ入れ

お主のお爲と諦らめて、成佛さつしやい〳〵。

ト懷中より袱紗に包みし稻妻の鏡を出して、これにて拂ふ。心火消える。三郎兵衞、脇差を拔き、谷藏へ切りつける。

三郎　妹の敵、絹川觀念。

ト立廻りにて、谷藏、煙草盆を持つて、しつかと受けとめる。ほぐれて又切り込む。奥より、累、出かゝりこれを見て、いろ〳〵留める。立廻り、有り合せたる屏風にて、三郎兵衞が白刃を押へ、三人、キッと見得

累　マア、待つて下さんせ。こりやマア兄さん、なんであなたを、どうさんすのぢや。

三郎　サア、谷藏こそ高尾が仇。其方が爲にも姉の敵。

累　エヽ。

ト思ひ入れ。

三郎　サア、谷藏、立ち上がつて勝負なせ。町人なれども三郎兵衞、現在妹の敵を目の前に置きながら、その分に捨て置かうか。知らぬ昔が口惜しい。サア〳〵、立ち上がつて勝負なせ。

累　姉さんの敵ゆゑ、そんならどうでも絹川さんを。
三郎　ヤア、面倒な。そこ退け。
ト累を引き退け、また切つてかゝる。立廻り、谷藏、脇差を投げ出し、思ひ入れ。
谷藏　如何にも命が惜しい。この場を助けてもらひたい。
三郎　何がなんと。
谷藏　斯くまで厚情にあづかる三婦どのへ、隱す仔細もござらぬ絹川が、命が惜しいと云ふ譯は、これでござる。
ト鏡を出す。三郎兵衞、取つて
三郎　ドレ。天晴れの名鏡。裏に稻妻を鑄付けしは、正に鎌倉の管領持氏の重器、稻妻の名鏡。
谷藏　コリヤ。
三郎　これがこなたの身の願ひか。
谷藏　如何にも。この鏡を見知つてござるからは、こなたも常の町人でもござるまい。
三郎　仔細あつて見知つて居るその鏡。それは兎も角も、絹川、その名鏡を持つて、再び家を起さんと、サア、命を惜しんで身の願ひ。こなたもいかい苦勞をさつしやるの。
谷藏　命を惜しむ身の願ひ。そればかりかは今宵しも、最前こなたに話せし通り、伏見京橋において、君に敵たふ曲者ゆゑ、討つて捨てたる相手は大勢。斯くまで人を殺めし絹川。助かる筋はなけれども、身の願ひある切なさは、卑怯未練と笑はれても、命が全うしたいばかり。現在の妹を殺され、腹が立たう。この絹川が討ちたからう。尤もとも、道理とも、外に詞はござらぬ。願ひ叶うたその後では、例へ何國の果に居やうとも、尋ねて來て討たれませう。それまではこの敵討を、延しては下さるまいか。
累　兄さん、聞かしやんしたか。あれ程までに事を分けて云はしやんすものを、無理に敵を討たしやんしても、姉さんの爲にもなりそもないもの。そしてマア、日頃から逢ひたい見たいと、サア、どうぞマア、料簡して、勘忍して上げまして下さんせいなア。
三郎　人も知つたる關取の絹川。筋ない事にそれ程までに、命を惜しみもさつしやるまい。ようごんす。聞き屆けました。賴みの通り妹が敵討は、延して進ぜませう。
谷藏　すりや、賴みの筋を聞き屆けて。
三郎　如何にも。
谷藏　エヽ、忝ない。
累　そんなら、敵討は延して下さんすか。申し〳〵、今

の事を聞分けて、お前の云はしやんす通りになつたわいなア。なんとマア、聞分けの好い兄さんぢやござんせぬかいなア。

ト三郎兵衞、立つて、戸棚へ錠を卸ろす

谷藏　これは。

三郎　大切な妹の敵、手放してはやられない。また逢ふまでの人質は、あの戸棚の内。殊に以て大勢の人を殺めしその身の罪。一先づ影を隱さずばなるまい。その隱れ家と云ふは、幸ひわしが商賣に通ふ、道程遠き下總の、羽生村の知るべまで。その道連れはこの累。姉の敵と狙ふ妹。こなたにどうやら心有りげな。その位の事に氣の付かぬ野暮なわしでもごんせぬ。

谷藏　高尾どのゝ敵ゆゑ、一人はやられぬ、妹御を付けてやる。隱れ家も羽生村とな。何から何まで三婦どのゝ深切、忝なうござる。さは云ひながらこの絹川が、お側に居ずば、あの戸棚の。

三郎　それはわしが呑み込んだ。密かに御所にお供する。もし人殺しの罪顯はれ、下手人沙汰に及ぶなら、男の意地づく、身不肖ながら、その科までも引受ける。その代りにはその妹、親身の姉に別れた奴、不便でごんす。うそ狹い豆腐屋の内で育つた不束者、こなたの氣には入るまいが、高尾の事を思はつしやらば、いつまでも見捨てずに、可愛がつてやつて下さりませ。

谷藏　何がさて、退引きならぬこの場の恩義。氣遣ひさつしやるな。妹御は、この谷藏が未來まで。

三郎　添つて下さるか。

谷藏　あなたを誓ひに。

ト戸棚へ思ひ入れ。

三郎　エヽ、忝ない。妹、聞いたか。絹川どのが、女房に持つてやらうといの。

累　そりやマア誠でござんすかえ。エヽ、有り難うござんす。モウ、これと云ふも、みんなお前のお慈悲。申し兄さん、お前の心が解けて、いよ〳〵女夫になつても大事こざんせぬかえ。

三郎　大事ないとも〳〵。

累　エヽ、有り難うござんす。絹川さん。

谷藏　累どの。

累　必らず見捨てゝ下さんすなえ。

三郎　めでたい〳〵。情は情、仇は仇。互ひに心解け合うて、女夫の契を結ぶからは、未來の高尾も恨みもせまい。

累　ちよつと祝言の眞似事なりと、させたいものぢやが。

こりやマア、あんまり急で、嬉しいやうで恥かしいやうな、有り難い事ではあるぞ。わたしや髮を結ひ直さうわいなア。

三郎　イカサマ、高尾が忌中のうちに束ねがけ。其まゝで祝言もなるまい。女子の髮を結ふは、夫を祝ふとの事。妹、斯うしや。絹川どのとおれは、何もかも淸くする爲に、わつさりと奧で一つ飲む程に、その間に早う結うてしまや。

累　アイ〳〵。そんなら、さうしやんせうわいなア。

三郎　サア、聟どのござりませ。

谷藏　心得ました。

ト立つて、高尾が位牌へ思ひ入れして

世の中は、夢か現か現とも、夢とも分かずありてなければ。

三郎　それに引替へ今宵の祝言。互ひに心も丸綿の

累　解けぬ思ひを解く帶は、八聲をつげの小枕に

谷藏　雌雄の銚子の口と口。

三郎　打ち合せたる

谷藏　男と

三郎　男。

累　三國一の

三郎　聟どの。

谷藏　舅どの。

三郎　サア、ござりませ。

ト唄になり、谷藏、三郎兵衛、奧へ入る。累、殘り、思ひ入れあつて

累　ほんにマア、兄さん、有り難うござんす。日頃の願ひ叶ふと云ふも、みんなお前のお情。エヽ、有り難うござんす。

ト奧より、豆太、丸綿を持つて、出て來り

豆太　サア〳〵、忙しくなつて來たワ。今宵は法事があるかと思へば、婚禮が始まる。これを思へば盆と正月の方がましかえ。モシ〳〵、累さんえ、わたしが隣の鍛冶屋へ行つたら、内儀さんの云ふ事にやア、今夜祝言があるなら、必らず歸るの戻すのと云ふ事を云ふなと云ひやしたから、そして、なんと云ふものだと聞いたれば、なんでも開くと云へとサ。そして、今夜なくてならぬ物を借りて來やした。

ト丸綿を出す。

累　ほんに其方は、よう氣が付いたなう。

豆太　いま時分の馬鹿には、油斷がなりませぬ。そしてお前も、ちつと髮でも結ひなさい。

ト鏡臺を持つて來り

わしは爰で、先刻土産に買つて來た、鯛を燒きやせう。

ト火鉢へ木把を入れる。此うちに伽羅の下駄片しあるを知らず、見物に見えるやうに、これをくべる。

累　豆太や。どこやら好い香氣がするぢやないかや。

豆太　この鯛は、腐りはせぬ筈ぢやが。

累　其やうな匂ひぢやないわいの。ハテ床しい。

豆太　モシ／＼、累さん、わしはこれから奧へ行て、吸ひ物拵らへをしやすから、用があらば呼びなさい。

累　そんなら其方、奧へ行きやるなら、絹川さんを爰へ寄越し申してたも。

豆太　ハテ、忙しない。絹川さんは、お前の旦那だものを呼ばずとも今に來やす。

累　ちと話しましたい事があるわいの。

豆太　オツと合點だ。爰だ／＼。さらば開きませう。

ト合ひ方、豆太、鯛を持つて奧へ入る。累、香氣に思ひ入れして

累　ハテ、合點のゆかぬこの香氣。誰れがマア嗜なんで此やうに。

ト門口へ行かうとする。薄ドロ／＼、燒酎火、寢鳥になり、屏風の小袖動く。累、うしろ髮の思ひ入れ。

誰れぢやえ。エヽモウ、ずんと放さんせいなア。お前は姉さん。エヽ、なんと云はしやんす。わたしに云ひたい事があつて來たと云はしやんすかえ。エヽ、今宵の祝言はならぬ、絹川さんに添はす事はならぬと云はしやんすかえ。そりや又なぜでござんすえ。エヽ、お前の爲に恨みがある。成る程、尤もでござんすが、よう物を思うても見やしやんせ。お前の恨みのある事は聞えて居やんすが、現在兄さんが許して、添はして下さんす程に、お前もどうぞ料簡して下さんせ。モシ、姉さん、どうぞ妹が願ひぢや程に、よく／＼の事ぢやと思うて、どうぞ。申し、默つて俯向いて居さんすは、料簡して添はして下さんすか。エヽ、嬉しうござんす。エヽ、どうあつても思ひ切れ。イエ／＼、嫌でござんす。モウ／＼、これぱつかりは、大事の姉さんのお詞でも、背かにやならぬ。さう思うて下さんせ。エヽ、切つて見せう。イエ／＼、そりやお前のわやくと云ふものぢやわいなア、エヽ、思ひ切

れ。ハテ、嫌でござんす。オヽくど。お前も苦界をさんしたやうにもない。そこ退いて下さんせ。ナニ退かぬ。退かぬと云うて、どうさんす。アイタヽヽ。こりやお前、抓らしやんすの。モウ、どのやうに折檻さんしても思ひ切る事は、嫌ぢや〳〵。

ト大ドロ〳〵にて、累、いろ〳〵苦しき思ひ入れ。

申し、姉さん、そりやお前、聞えませぬぞえ。戀しい床しいと思ふこの年月、慕ふ心が屆いたやら、結ぶ緣の女夫事、妹脊の仲を裂かうとは、聞えぬわいな〳〵。モウこればつかりは、どのやうに仰しやつても、思ひ切る事は嫌ぢや〳〵。勘忍して下さんせいなア。

ト屛風の內にて

高尾　エヽ、恨めしいなア。

ト大ドロ〳〵にて、累、いろ〳〵思ひ入れして、トヾ屛風の蔭へ氣を失ふ。

谷藏　累や〳〵、どこへ行つたぞ、累々。

ト出て來る。累を見て

これはどうしたものだ。癪でも起つたか。但し、轉寢か。風でも引けば惡い。コレ〳〵。

ト起す。累、ひつくと起き上がる。屛風の內にて、高尾、付け聲にて

高尾　絹川どの、恨めしやなア。

谷藏　さては高尾が執念、妹累に取り付いて、斯くまで我れを恨むるか。ハテ、恐ろしい執着ぢやなア。

高尾　邪慳の刃に、この世を去りし我が恨み、妹累が姿を借り、修羅の恨みを晴らさんとすれど、佛法執行の名香の威德に、近寄る事も叶はぬか。エヽ、恨めしいなア。

谷藏　ヤヽ、なんと。さてこそなア。火鉢にくゆるこの下駄は、その上、御先祖鎌足公、高隆寺と云ふ名香を以てこれを刻み、國阿上人へ寄附し給ふ。上人これにて參宮ありしと聞く。また名付けて吾妻の伽羅とも云ふ。佛法弘通の功力にて、成佛なせ。頓生菩提、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト谷藏、下駄にて拂ふ。累、苦しき思ひ入れにて、倒れる。

コリヤ〳〵累、氣を付けい〳〵。

ト介抱して引起す。累、誂らへの拵らにて、起きる。谷藏恟りして、有り合ふ丸綿をかぶせる。奧にて

三郎　千秋萬歲の千箱の玉を奉る。

ト三方に熨斗、土器を載せ、銚子を持つて出て來り

ヤレ〱、めでたい〱。わざとばかりの祝言。サアサア妹、呑んで絹川どのへさしや。

谷藏　イヤ〱、もう斯う互ひに得心の事なれば、杯せずとも夫婦は夫婦。云はゞ下總までは暫しの旅。夜の明けぬうち、ちつとも早う、旅立ちの用意がしたうござる。

三郎　成る程、それも尤もぢやが、云はゞ夫婦の固めの杯、二つには累も初旅の門出。わざと祝うてやりたい。サアお主もちよつと祝うて行きや。

累　アイ。

ト丸綿を上げる。三郎兵衛、見て悔りして

三郎　これは。

谷藏　コリヤ、姉の高尾が執着にて、例へ面部は替るとも一旦頼み頼まれた、妹累はわしが女房。三郎兵衛どの何も案じる事はござりませぬ。

三郎　高尾が死靈付き纏ひ、斯くまで恨むか女の一念。ハテ、恐ろしい。

谷藏　まだこの上に、どのやうな事があらうとも、見捨てぬといふ印し。

ト伽羅の下駄を出し

三郎兵衛どの、これを見知つてお居やるか。

三郎　所にも似合はぬこの香氣。足利の家に、高隆寺と云へる高木履ありとは聞きしが、もしやその

谷藏　推量の通り、足利代々の重器ながらも、御主人のお宿申した貴殿への一禮。御主人と妹御を引受けて、互ひに預かる片し違ひの片し下駄。例へ暫しは別るゝとも、逢へばいつでも、歯と歯を合せし心の約束、

ト片々づゝ納める。

三郎　忝ない。戸棚の内の伊達小袖、綻びかゝるお身の上、お目が覺めたらお供申さう。お主とてもその通り、夜明けぬうちに、絹川どの。

谷藏　三郎兵衛どのも、隨分息災で。累おぢや。

ト累が手を引く。

三郎　イヤ、谷藏どの、愚痴な事ぢやが、必らず累に、鏡を見せて下さるな。

谷藏　氣遣ひさつしやるな。

ト兩人、ホロリとして、累を伴ひ、門口へ行かうとする。ドロ〱にて、三郎兵衛、以前の小袖を取つて、裾へ白刄を貫く、累、足を抱へて倒れる。谷藏、驚ろき駈け寄る。三郎兵衛も行かうとする。この時、市郎右衛門、出て

市郎　合點のゆかぬ戸棚の内。

トかゝる。三郎兵衛、立廻り。市郎右衛門を當てる。これにて、ウムと倒れる。三郎兵衛、蒲團を手早くかぶせる。谷藏へは兵内窺ひ寄り

兵内　谷藏、捕つた。

トかゝる。見事に投げ倒す。三郎兵衛、小袖へ貫きし刀を取つて納める。谷藏、血を拭いて白刃を一緒に納め、兩方にて物音を窺ひ、門口をソッと明ける。互ひに顔を見合せ、三郎兵衛、門口をシャンと締める。拍子、幕。

谷藏　累、おちや。

トてんつゝ、ドロ／＼にて、累、跛足のこなし。谷藏これを介抱して、手を引いて花道へ入る。この上を吹替への小袖付いて、向うへ行く。ドロ／＼打上げる。シヤギリ。

四　幕　目　　井筒外記屋敷の場

役名＝井筒外記左衛門。井筒女之助。山中鹿之助。伊達傳藏。奴、梅平。同、入平。同、鳴平。仁木彈正妹、河内。同姉、八汐。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。軒に大和葺き。見付け銀地の襖。上の方、障子屋體。その前に小高き土手、樋の口あり、この際、下の方萩の盛り。眞中に床几を直し、この上に梅平、奴の形にて、竹箒を側に置き、煙草をのんで居る。入平、鳴平、奴にて、水を打つて居る。白囃子にて幕明く。

梅平　ホウ、お庭の掃除は入平、鳴平、見れば塵一本なし奇麗な事、大儀々々。

入平　ヤイ／＼梅平、うぬ、とも／＼お庭の掃除をすると思つたら、新參の癖に、いつの間にやらのし上がつて

鳴平　菊畑の鬼一もどきをやりかけるな。コリヤ、ヤイ、おいらにばつかり骨を折らして、聞けばわりや、色事を稼ぐと云ふ事だな。

入平　イヤ、梅平めは、大方夜さりの二十四文の色事だらう。イヤ、色事と云へば、若旦那女之助さま。

梅平　それ／＼、昨日祇園で、仁木彈正左衛門さまの妹御と、でつかちない色事を、おッ始めさつしやれたところが、あの意地の悪い[illegible]さまの目にかゝつて、[illegible]し

くなつたげな。
鳴平　それ〳〵、さう云ふ噂だ。
梅平　これはしたり、若旦那は、ツイあちらのお座敷にござつた。
鳴平　オヽ、靜かにしろ〳〵。
　トこの時、障子屋體より
女之　下部ども、夜の掃除は片附いたか。
三人　ヘイ。
　ト合ひ方になり、女之助、衣裳、羽織、袴の形にて、出て來る。梅平、庭下駄を直す。女之助、下駄を穿き庭へ下り、床几に腰をかけ
女之　時ならぬ萩のこの盛り、落葉の掃除、大儀々々。
三人　左樣ならば、私しどもは。
女之　部屋へ參つて休息いたせ。
三人　ヘイ。
　ト行かうとする。
女之　コリヤ、梅平一人殘り、外の者は次へ立て。
梅平　ヘイ。
入平　ドリヤ、休息いたしませう。
　ト合ひ方になり、奴二人、下の方へ入る。女之助、梅平、殘る。
女之　梅平、其方は新參ながら、萬事に心を附けて、古參の者よりは働らきが見ゆると、親人にもお噂があつた。
梅平　それは有り難い事でござりまする。
　ト女之助の顏を見て
　モシ、若旦那、いかうお顏持ちが惡く見受けましてござりまするが、お心持ちは如何でござりまするな。
女之　イヤ、心惡うはない。
梅平　でも、どうやらお顏色が。イヤ、新參の下郎めが、申し上げまするも、異なものでござりまするが、主從となりますれば、三世の奇緣とやら。なんぞ御苦勞になる事でもござりますならば、御遠慮なく仰しやるがようござりまする。また及ばずながら、お力になる事もござりませう。
女之　イヤ〳〵、何も苦勞になる事はないが、身が顏色が其やうに惡う見えるか。
梅平　ヘイ。
女之　ムウ。
　ト思ひ入れ。
梅平　このお庭の見事なる萩、人も花も一盛り。色に迷ふ

はある慣ひ。久米の仙人とやらも、萩の白きに迷つて道を失なつたと云ふ事。

女之　梅平、そりや花の萩ではない。女の脛と云うて肌の事ぢや。

梅平　ヘイ、私しはまた植木の萩か、牡丹餅の事かと存じました。ハヽヽヽ。

女之　必らずともに、其方も案じぬがよい。

梅平　でも、そのお顔が昨日祇園で、仁木さまのお妹御と

ト云はうとする。

女之　コリヤ、そりや何を云ふのぢや。下郎は口のさがない者と申せば、其方も一言半句に心を附けるがよい。扣へて居らうぞ。

梅平　ヘイ。

女之　ハテ、下郎ではあるぞ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより外記左衞門、誂らへの拵らへ、上下、衣裳にて、侍ひ、中間、附き添ひ出て來る。

外記　忰、それに居つたか

女之　これは親人樣、只今御殿よりお下がりでございまするか。

外記　オヽ、彈正左衞門どの、御番代りで下城いたした。

ト云ひ〳〵、萩の花を見廻り、床几に腰をかけ

なんと忰、庭の木萩の返り咲き、いつも盛りの時分と違ひ、春とは云へど、まだ別れ霜の時候、それにこの花の眞盛り。

女之　尤も當お館中にて、先武將義教公、御寵愛ありしこの木萩。

外記　外記左衞門住居の庭に、未だ殘つてこの如く、それゆゑ庭を淸くするも、先君に仕ふる心。時ならぬ返り咲きは、お家の吉事か。

ト思ひ入れあつて

この頃の人心、但しは凶事の告げなるか。

女之　この木萩によりて詠みたる歌。秋萩の古枝に咲ける花見れば、元の心は忘れざりけり。

外記　如何にも。或る人萩は一年づゝにして枯れ、若葉は古枝に咲くと詠みしはと難ず。この萩、草花にあらず木なり、名を唐萩と云ふ。依つて弓などにこれを作る。武勇に長ぜし足利義教公、御寵愛ありしも感ずるに恐れあり。

女之　花の色も異木に勝り、餘國に双ぶ方なき名木。

外記　さるに依つて先君より、御秘藏のこの木萩、先代萩とはこれならん。ハテ、眺めある木萩の盛り。ムヽ。

ト萩を眺めて思ひ入れ。梅平、こなしあつて

梅平　さて、謂れを聞けば有り難い。御奉公の內にも、花を見ながらお庭の掃除。アヽ、とてもの事に、一杯やらかしましたら、格別よい花見でござりませう。ハヽヽ。

外記　アヽ、下郎か。われも實に尤もかい。兎角大切なは奉公大事。忰女之助、よく承れ、其方が兄、惣領の民部之助は、武勇才智に秀で、先渡邊左門どの、家を繼ぐべき一子なきゆゑ、所望に依つて是非なく惣領を、養子に遣はせしも、井筒の家よりは上に立つ渡邊家ゆゑ、有り難きは管領のお指圖。今は渡邊民部之助と、足利家羽翼の臣下。隨分とも其方も、忠義一圖が肝要々々。

女之　親人の御教訓、有り難う存じまする。

ト向う揚げ幕にて

呼び　お使者。

外記　ナニ、お使者とある。

女之　何方よりのお入りでござりませうぞ。

外記　梅平は次へ參り、お使者もてなしの用意を申しつけい。

梅平　畏まりました。

ト梅平、下の方へ入る。序の舞になり、向うより鹿之助、上下、衣裳にて出て、直ぐに本舞臺へ來て

鹿之　これは外記左衞門どの親子の衆、鬼貫公より役目を蒙むり、今日使者に立つたる山中鹿之助。

外記　ムヽ。伯父君よりお使者とござれば

外女　イザ先づ、あれへ。

鹿之　然らば御免下されい。

ト鹿之助、二重舞臺へ通る。外記左衞門、女之助、次へ控へる。

外記　して、鬼貫公よりのお使者とはな。

鹿之　使者の趣き、餘の儀にあらず、昨日洛東祇園の社內に於て、井筒外記左衞門の子息女之助どの、仁木彈正左衞門どのゝ妹河內どのと。

ト云はうとする。女之助、驚ろき

女之　アイヤ、鹿之助どの、お使者の御口上ではござれども。

外記　コリヤ忰、大切なる鬼貫公のお使者、御演說を止める無作法至極。控へぬか。

女之　おやと申して。

トこなしある。向うバタ〳〵にて、侍ひ一人走り出で

侍ひ　申し上げまする。只今あれへ仁木彈正左衞門さまより、嫁君のお輿入れとござつて、同勢附き添ひ、お乘り物二挺、見えましてござりまする。

女之　ナニ、仁木どのより嫁入りとは心得ぬ。

外記　此方に覺えなき、推しての婚姻。

鹿之　すりや、外記左衞門どの親子には、覺えなき嫁入りとは、これには何か樣子のある事。某は暫時奧にて相待たん。

外記　婚禮の樣子、承知いたしたその上にて、

女之　某は鹿之助どのへ、お使者のもてなしと申すも烏滸がましく、何か四方山の物語り。

鹿之　如何にも、あれにて、女之助どの。

女之　お使者御苦勞。

外記　その乘り物、これへと申せ。

侍ひ　ハッ。

鹿之　案内召されい。

ト唄になり、鹿之助、先に女之助、附き添ひ、奧へ入る。侍ひは向うへ引返し、外記左衞門、殘り

外記　鬼貫さまより心得ぬ使者と云ひ、折惡しき押しつけ業の、仁木どのより嫁入りとは。ハテナア。

ト唄になり、向うより絹羽織の侍ひ二人、鋲打ち女乘り物二挺舁いて出る。後より菖蒲革の侍ひ中間、油單を掛けたる挾み箱を舁き出て來て、本舞臺にて、侍ひ乘り物の際へ來て

侍ひ　これは外記左衞門さまのお宅でござりまする。

八汐　妹、聟どのゝ屋敷ぢやわいなう。

ト合ひ方になり、先の乘り物より八汐、裲襠、衣裳、かいどりの形、次の乘り物より、河内、振り袖、白無垢、裲襠、衣裳、丸綿にて出る。八汐、乘り物より刀箱を取出し

其方どもは、これより直ぐに開きやいなう。

供皆　畏まりました。

トばた〳〵と供廻り、向うへ入る。外記左衞門、これを見て

外記　見受けますれば、嫁御寮を連れられて、これへの入來は。

八汐　同じ家中に執權役は勤めますれど、お目もじならぬ私しは、仁木彈正左衞門が姉の八汐。これなるは妹河内、弟直則申し越しまするは、昨日祇園の社に於て、

御子息女之助さまと、この妹河内と、何やら若い同士のあのゝものゝで譯ある事ども。折惡しく當麻の岡幸鬼貫さまに見咎められ、不義はお家のお法度と、お咎めに合ひましたといなう。

ト外記左衞門、驚ろき

外記　ヤヽ、悴女之助と河内どのと、アノ不義密通。すりや、それゆゑに、伯父君鬼貫さまよりの、只今のお使者ムウ。

八汐　サア、聞きなされませ、折よくも弟彈正左衞門參り合せ、妹河内は非箇女之助と幼なき時分より、親々約束にて云ひ號け致せし上は、お咎めに遭ふ謂れなしと、きつぱりと、不義の譯立つて事納まりしは、双方の家の無事と云ふもの。

外記　すりや、直則どのゝ申し譯にて

八汐　事なう濟んだ上からは、月日を過さば如何ならんと姉の私しへ直則が相談。その上にて今日、押しつけ嫁入り。即ちこの一品は、引出物や　寸志やら、御披見あつて祝言の、御用意なされて下さりませ。

ト刀箱を差出し

コレ妹、何も恥かしい事はない。舅御樣へ、ソレ、御挨拶申しやいなう。

河内　ハイ／＼。モシ、舅御樣、わたしや嫁でござりまする。今日からよいやうに、お頼み申しますわいなア。

八汐　アレ、御覽じませ。まだ初心で、御挨拶さへ碌々にほんにどうしたものぢやぞいなう。

ト此うち外記左衞門、こなしあつて

外記　さては直則どのゝ計らひにて、推して我が家へこの嫁入り。

ト思ひ入れあつて、刀箱を明けて、刀と短册を取上げ

引出物の寸志とあつて、刀一腰に添へたる短册。「くらべこし振分け髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰れか上ぐべき」この古歌は伊勢物語。ハテナア。

ト諷らへの合ひ方になり、外記左衞門、キッと思案の思ひ入れあつて、刀を見て

ハテ、合點のゆかぬ刀の拵らへ、目貫も縁も一樣に、山鳥に躑躅の高彫り、手に入りたる小柄と同じこの拵らへ、さてこそ。

ト　またキッと思ひ當るこなし。

八汐　御承知あらば、直さまこの場で婚禮の取結び、互ひに似合うた縁と云ひ、思ひ當る事あらば、願うてもない

勿怪の幸ひ。
河内　どうぞ姉様、早うお杯を、お願ひ申して下さりませいなア。
八汐　オヽ、姉が合點ぢやわいなう。
ト外記左衛門、思ひ入れあつて
外記　イヤナニ、八汐どの、彈正とのより送られし、この二品の引出物は、歌の心の判じ物、解いて女夫の杯をさせてやりたいものなれど、マアならぬ。妹を連れて、はや疾々と歸られよ。
兩人　エヽ。
ト兩人、驚ろき
河内　姉様、あれお聞きなされましたか。
八汐　オヽ、聞いたとも〳〵。
ト外記左衛門へ詰め寄り
モシ、外記左衛門さま。イヤ　外記左衛門どの、この祝言の取結び、叶はぬ時は二人とも、不義の科あるお家の掟。互ひに若木の花盛り、むざ〳〵殺すか散らさぬは、そりや親兄の心の嵐。燒野の雉子夜の鶴、子を悲しまぬはないものぢや。ならぬと仰しやるお詞は、憚りながら外記左衛門さま、そりや恩愛も情も、御存じないと云ふもの、武士は物の情を知ると云ふに、あんまりお胴慾でござりまするぞ。
外記　默り召されい、八汐どの。それは女の手前未練。その本亂れて末納まらずと、賴兼公にはお身持ち御放埒ゆゑ、御閑居に押籠めのお身となり給ひ、當時若君の御代となり、お家の政道亂れあつて、治める者もなく、渡邊仁木非筒の良臣、その子供等が不義せしを、云ひ號けなんどゝ云ひ立てゝ、婚禮を取結ばゞ、この後家中に不義あるとも、皆云ひ號け〳〵と、政道は眞ッ暗闇、伜が不義に極まらば、首討つて掟を立てる。外記左衛門が日頃の魂ひ。其方もその妹は、如何やうとも計らひ召され、斯やうな緣組み思ひも寄らぬ。早々歸りやれ。
ト刀を取つて立ち上がるを、八汐、提へて
八汐　サ、その思し召しも無理ならねど、それでは妹を殺さにやなりませぬ。
外記　そりや其方の勝手におしやれ。
河内　アイ、さうでござりまする。女之助さまと夫婦になられにや、なんの長らへ居りませうぞ。
八汐　アレ、あの胴慾な事わいの。兄弟三人ある中に、末の妹は親々の、血の結びとやら、嫁入りと云へば、い

そいそと來た甲斐もなう、孫どのゝ顏をも見せず、その上に、掟を立てゝやみ〳〵と、殺して何を樂しみに、生き長らへて居られうか。二人三人にかゝる命。親子兄弟血筋の悲しみ。思ひ直して御料簡。頼み上げます、コレモシ。

ト いろ〳〵こなしある。外記左衞門、思ひ入れあつて

外記　ヤア、くど〳〵と返らぬ繰り言。所詮叶はぬこの祝言。口でまだ〳〵云はうより、悴と緣組みならぬと云ふ印はコレ爰に。

ト 差添の小柄を拔いて、差出し

彈正どのより送られし、引出物のこの刀と、同じ模樣のこの小柄。

ト 投げ出す。八汐、取つて恟りして

八汐　妹、この小柄、覺えて居やるか。

河内　その小柄の模樣は、矢ッ張り山鳥に躑躅。そりや兄樣のお差し料。

八汐　どうしてこれが。ムウ。

ト 兩人キッとこなし。

外記　不義の科ある我が悴、お家の掟に行ふからは、それなる河内も不義の相手。

河内　すりや、舅御樣にはどうあつても。

八汐　この緣組みは

外記　切れ目の小柄。

河内　モシ。

外記　ヤア、未練千萬。

ト 河内、取りつくを、外記左衞門、沒義道に振り切り、チヤンと唄になり、外記左衞門、ツイと奥へ入る。河内、ハアと泣き落す。八汐、後を見送り、思ひ入れあつて

八汐　焦れ〳〵た女之助、添ひたいが一ぱいで、折角連れて來たものを、舅御の聞き入れなく、暇の印と渡されしこの小柄は直則が差し料。さては弟が話せし通り、アノいつぞや。ムヽウ。

ト 思ひ入れあつて、ヂッとなる。

河内　モシ、姉樣

ト 八汐、矢張り思案して居る。

モシエ、モシ、姉樣いなア。

ト 八汐、心附きて

八汐　何ぢやぞいなう。

河内　舅御樣は格別、聞えぬは女之助さま。深く交せしか

ね事も、今更變る飛鳥川。

八汐　親子揃うて此やうに、よく胴慾に緣切るとは

河内　結ぶの神の誓ひもなう、姉樣。

八汐　妹

河内　思へば〳〵果敢なき緣の

ト兩人手を取り交し

契りぢやなア。

ト泣き落す。

八汐　エヽ、水臭い〳〵。井筒と苗字は誰れが附けた。コレ妹、とても心の變つた男。長う居る程耻の耻。サアおぢやいなう。

ト河内の手を取る。河内、俯向き、泣いて居る。

コレイナウ、なぜ立ちやらぬ。早う歸りやいなう。

ト河内、八汐の顏を見て

河内　モシ、歸れとは、そりや祝言の忌み詞ぢやござりませぬか。

八汐　オヽ、わつけもない、この子わいの。去られてしまうて、忌み詞どころかいなう。

河内　それぢやと云うて、兄彈正さまの仰しやるには、掟を背く其方なれど、どうぞ助けてやりたさに、女之助に嫁入りさすとのお情。此まゝ去られて歸りなば、矢ツ張り元の不義の科。とても死ぬる命なら、思ふ殿御のこのお舘、爰で死ぬるが本望でござりまする。姉樣、そのお刀で、早う殺して下さりませ。

八汐　オヽ、道理ぢや〳〵。氣強い弟の彈正でさへ、其方の命助けん爲、推しての嫁入り、聞き入れない男御の片意地ゆゑ、殺さにやならぬ義理詰めは、わしに斬れとの事なるか。其方は死ぬる覺悟でも、なんとこれが殺されう。

河内　エヽ、御未練な。引出物のこの刀は、死なで叶はぬ約束事。モシ姉樣、お聞き入れはござりませぬか。腑甲斐ないお前は頼まぬ。離別の印のこの小柄。姉樣、おさらば。

ト小柄にて死なうとする。八汐、もぎ取つて、そこへ捨て

八汐　エヽ、聞えぬは男御。女夫にすれば助かる二人。妹が爰で自害せば、女之助も不義の相手。死なずば掟は立つまいが。

河内　それぢやに依つて。

トまた刀にて死なうとするを、八汐、思ひ入れあつて

キッと留め

八汐　イヤ殺さぬ。この刀は弟彈正が、心を籠めし引出の一腰。其方を殺して現在の、この姉が、なんと云ひ譯せうぞ。

河内　ぢやと云うて。

トまた取りつく

八汐　ハテサテ殺さぬ。

河内　イヽエ、是非とも。

ト河内、死なうとするを、八汐、留める。立廻りの所へ、向うより傳藏、麻上下、股立ちにて、走り出で來て

傳藏　外記左衞門さま〳〵。

ト奥より

外記　ナニ、外記左衞門に用事とは。

ト出て

傳藏　伊藤傳藏。あわたゞしい、何事ぢや。

傳藏　拙者今日御先祖の佛參に、宇治の興正寺へ參詣のところ、伏見の川に浮き死骸。見ますれば奥醫師大場道益故なく殺害いたされ、川へ投げ込み死骸。其まゝ切り捨てけるは、何か樣子のある儀に存じ、その歸るさの道なから、お中屋敷のこなた樣まで、ちよつとお知らせ申さん爲、これへ參つてござりまする。

外記　すりや大場道益は、伏見の川にて人手にかゝり、相果てしか。さてこそ身が秘書。

ト外記左衞門、思ひ入れ。八汐、これを聞いて驚ろき

八汐　ヤア〳〵、こりや短兵急に。

外記　ヤ。

ト八汐、心意氣あつて

八汐　可愛い事を致したなう。

外記　イカサマ、これには樣子あらう。併し傳藏、穩便にて

傳藏　畏まつてござりまする。

ト傳藏、向うへ引返し入る。八汐思ひ入れあつて

八汐　妹、其方はそれ程、女之助へ貞女を立てる心なら、つれない男のこの家で死なうより、連れ歸つて兄弟二人暇乞ひして、其方とわしと同じ枕に死ぬ覺悟。

河内　そりや嬉しうござんすが、わたしやどうあつても、殿御の内で死なねば、貞女が立ちませぬ。

ト外記左衞門、キッと思ひ入れあつて

外記　イヽヤ、身が屋敷では殺さぬ。

河内　すりや、どうあつても。

外記　それなる小柄が縁の切れ目と、最前も云うたではないか。

河内　そんなら、この小柄がお手にあつたゆゑ。

ト小柄を取つて、思案して

すりや、この小柄で。

トきつと思ひ入れ、八汐、河内を引立て

八汐　ハテ、縁のない所に居ずと、わしと一緒に。

ト河内、心を替へ

河内　そんなら姉様。

八汐　妹、おぢや。

ト八汐は刀を持ち、河内は小柄を取つて、河内、先にツカ／＼と花道へ行く。外記左衛門、思ひ入れあつて

外記　ヤレ待たれよ八汐どの、申し聞かす一事あり。

八河　ヤ、、なんと。

ト八汐、思ひ入れあつて

八汐　ムウ。いま相果てる嫁小姑を、呼び留められしは、心よく婚禮さするお心か。

外記　イ、ヤ、さにあらず、誠貞女を立て通し、死ぬる心の嫁女ならば、小姑もろとも、なぜ聟のこの家で死を勸められぬ。

八汐　ヤ。

ト悔りする。河内、思ひ入れ。

外記　昨日祇園の社に於て、其方の妹、と、桂女之助が不義の科ある命を助け、刀を謎の引出物。味方に附けん計略と、睨んだ眼に相違があらうか。今の様子を聞いて、直さま歸るのか。末子の妹河内は格別、彈正兄弟合體の今日の婚禮、迂濶にならぬ。一應もまた再應も糺さねば三々九度の杯をせうや。愚かな事を。

ト此うち八汐、無念のこなし、いろ／＼あつて

八汐　すりや外記左衛門、この計略を、アノおのれに。

ト云はうとして、心を替へて

サア、妹、行きや。

ト河内、思ひ入れあつて

河内　モシ、そんなら姉様。

八汐　ハテ、行きやと云ふに。

ト河内を無理に引立て、行かうとする。外記左衛門、思ひ入れあつて

外記　八汐、お待ちやれ。

ト八汐、これに構はず、また行かうとする。

イヤサ、待ちやれと云ふに。

ト八汐、知らぬ振りにて

八汐　イヤ、わしも寄る年。殊に春氣で耳が遠うなつて、オヽ、辛氣やの。

外記　すりや、八汐どのには、お耳が遠いで。

八汐　とんと聞えぬ。

外記　ムヽヽ、ハヽヽ、。

ト笑ふ。

河内　姉樣、お前の。

八汐　耳がしいれば何事も、知らぬが佛。

河内　エ。

八汐　妹、佛の前で臨終正念。

河内　ぢやと云うて。

ト心意氣あるを、八汐、手を引いて

八汐　ハテ、往生際の惡い子ではあるわいなう。

ト頭になり、八汐、キッと思ひ入れあつて、河内の手を引き、向うへ入る。外記左衛門、後見送り

外記　心憎きは彈正兄弟。表に忠を顯はせど、底意は惡の根ざしの不忠。佞人聖人に紛ふの譬へ。ムウ。

ト合ひ方になり、奥より女之助、襖を開き、刀を杖に思ひ入れあつて、出て來て、ギツクリととまり

女之　親人、樣子を承りしか。大場道益、この程行くへ知れざると聞きしが、察するところ同家中の内にて、佞人輩が。

外記　ムウ悴、某とても、目ざすはそこぢやて。

女之　こりや打捨て置かれぬ一大事。女之助が、ソレ。

トきつとなつて、向うへツカ／＼と行かうとして、歩かれぬ思ひ入れにて、ギツクリと留まる。外記左衛門見て

外記　ヤレ待て悴。どれへ參る。

女之　一家中の樣子見屆け、佞人輩を。

外記　イヽヤ、そりや若氣の至り。心得違ひぢや。

女之　なんと。

ト思ひ入れあつて、外記左衛門が前へ來て

忠義を立てんと思ふ某、親人には心得違ひと仰しやるは

外記　佞人輩を討取るとも、その逸り男では心元ない。殊には其方が。

ト女之助に目を附ける。女之助、思ひ入れ。

女之　エ。

ト外記左衛門、こなしあつて

外記　さうぢや。

ト謀らへの合ひ方になり、外記左衛門、上の方の土手にある、萩の枝を一つかね引き抜いて來て、女之助の目先へ差出す。

女之　これは。

ト仕掛けにて、萩の花バラ／＼と散つて、枝ばかり、一つかね殘る。女之助、キツと見て

ムウ、合點のゆかぬ。返り咲きのこの木萩、地を離るれば忽ちに、花は散つて、この古枝の一つかね。

外記　サ、これぢやに依つて、急かずと心を落ちつけい。さうなうては忠義は立つまい。

女之　尤も萩は生花にも水を用ひず、湯を以つて生けると申せど

外記　地中を離れて枯れたるこの萩、柴となつては其方への教訓。

女之　ヤ、なんと。

外記　この束ねたる萩の古枝、焚火を以つて燃して見よ。

ト女之助、萩の枝を取つて

女之　こりや濕りたる萩の古枝、束ねし儘に焚火を以て燃すとも、容易く燃ゆる事はなりませぬ。この親人のお心は。

外記　氣を好む小吏となつては、必らずその長吏を凌ぐと人の上となつては下を蔑むる、束ねし濕り萩の如し。これ佞辯を以て立身なしたる臣下の譬へ。下役にあつては上を僞はり、また上役となつては下を蔑むるゆゑ、濕りし薪を束ねたる如く、事性急にしては、先に計略あつて容易くは成就し難し。濕りし薪の燃ゆる時節を相心得よ

女之　御教訓心魂に徹し、承知仕つてはござりまするが、猶豫ならざる一大事。

外記　イヤ、其方の魂ひでは心元ない。

女之　そりや又なぜでござりまする。

外記　この鏡にて女之助、わが顔をとくと見い。

ト扇を開いて、突きつける。

女之　ナニ、この扇を以て鏡とは。

ト扇子を取る。

外記　怒つて向へば怒つて映る。笑へば笑ふ顔なれど、映らぬ扇へ其方が顔、ト、とつくりと映して見よ。

女之　ムウ。

ト扇を持つて我が顔を映し、キツと見る。七つの鐘、合ひ方。女之助、ガツクリとなる。この時向うより、河内、走り出て來て、柴折戸の外にて窺ふ。奥より

外記　鹿之助、出かけ、様子を聞いて居る。
外記　その扇面を鏡として、映らぬ顔もあり〳〵と。
　ト女之助の顔へ手を掛け、キッと見て
死相を顯はす女之助。
　ト七ツの鐘鳴る。
女之　いま打つ鐘は七ツの死期。
外記　鳥の將に死なんとする時、その鳴くこと悲し、人の將に死なんとする時、その云ふ事よしと云へり。
女之　すりや某が覺悟の様子を。
外記　子を見ること親に如かじと、最前よりの立振舞ひ、心は逸れど最期の其方、死相を知らいでなんとせう。出かした悴。
　ト表を見て、思ひ入れあつて
千秋萬歳の千箱の玉を奉る。
女之　ヤ、。
河内　その小謡は。
外記　外記左衛門が嫁の河内、改めて祝言さゝう。イザ、これへ。
河内　すりや舅御様には、
　ト内へ入る。

外記　花聟の支度をお見やれ。
女之　まツこの通りに。
　ト肌を脱ぐ。竹笛の合ひ方になり、腹を切り、布にて縛り居る。鹿之助、河内、これを見て
河内　そんならお前は。ハア、。
　ト女之助に取りつき、泣き落す。
鹿之　察するところ井筒親子の御心底。
女之　ヤレ嘆くな河内、最前よりの始終の様子、聞くと極めし身の覺悟、主親の目を掠めたる不忠不義、親に先立つ不孝の罪。モシ、お免しなされて下さりませ。
外記　親の心を推量して、潔よきその切腹。ホ、ウ、それでこそ民部之助が弟、この外記左衛門が子なるぞや。イヤ、鹿之助どの、聞いて下され。元、某が先祖と云ふは肥前の國長崎の出生なりしが、南蠻流の祕法の毒藥、先君義政公へ奉る。軍用の調法とお取立て下され、冥加にあまる身の出世。某悴に至るまで、東山家の執權職兄民部之助は渡邊の苗字を繼ぎ、晝夜忘れぬ主君の御恩過ぎつる正月二十六夜、我が家の塀を乘り越える曲者搦め捕へて一詮議と、狙ひ寄つたる我れを目附け、打ちかけたるは最前のその小柄。無念ながら取逃がし、土藏

へ入つて改め見れば、南無三方、毒薬の秘書紛失。鍔かに在所を尋ねる折柄、最前盗りし引出物の刀こそ、目貫も縁もその小柄と、同じ模様の山鳥に躑躅の高彫り。まつた短冊の歌の心は、くらべしこの刀と小柄をくらべよと、かけたる謎は彈正が、毒薬祕書の盗賊は、我れと知らせて妹を盗り、科ある悴が命を助け、味方に附けん計略にて、麻にもつるゝ蓬の譬へ、姉八汐と彈正が、合體の惡事。武士の命は義に依つて、輕しと知らぬ直則が、慾に迷ひし魂ひゆゑ、兄弟一致の八汐を詮議と思へど、我が罪をも糺さずして、人の罪は糺されずと、使者に立つたる鹿之助どのゝ心を計り、悴に切腹させん爲、兄弟一つでない末子の河内、嫁とも云はずつれなくも致せしは、まッこの通り計らはん爲。嫁女、悴、鹿之助どの、仔細は斯くの通りでござる。

鹿之　ホ、ウ、智仁兼備の外記左衛門どの、流石の老臣。某鬼貫どのより使者の役目を蒙むりしは、昨日祇園の社にて、女之助と河内が不義、見咎められしを彈正左衛門、云ひ號けと申し上げ、その場で事は濟みたれど、邪智深き伯父鬼貫どの、殊に河内に横戀慕、キッと參つて糺し參れと、この鹿之助へ申し附けは、貴殿へ心を運ぶ某ゆゑ、役目に依つて越度を拵らへ、罪に取つて落さん爲と知つたるゆゑ、わざと故なく役目を蒙むり、參りしこの場の義心の仕儀、申す詞もない仕合せ、

女之　とは云ひながら、某が。

ト思ひ入れ。

外記　悴、悔むな。其方が最期は、謀叛の輩を詮議する、我が爲の獄木も同然ぢやぞ。

女之　こは有り難き親人樣。武士の家に生れし身の、お馬の先の討死か、御主君のお身替りに、命を捨つるは弓取りの身の譽れ。云はゞ忠にも孝にもたらず、犬死するこの身をば、そのお詞が千僧供養。さはさりながら淺ましき、人非人の妹とも、知らで結びし妹背の緣ゝ

ト思ひ入れ。此うち河内、こなしあつて、女之助の側へ摺り寄つて

河内　すりや謀叛人の血筋ゆゑ、人非人とのお詞が、この身にひしと堪えまして、女之助さま、わたしや悲しうて悲しうて。エヽ、。

ト思ひ入れあつて、最前の小柄を出し

さうぢや。

ト小柄にて自害する。外記左衛門、鹿之助、驚ろき

外記　ヤヽヽ嫁女。
鹿之　この最期は。
河内　恥かしや、今まで姉様兄様、合體の惡事と知らず、舅御様、勿體ない胴慾と、心で恨んで居りましたが、最前舅御様の、この家で殺さぬ、この小柄とわたしへ掛けて下さりました、それでわたしがこの自害。因果な縁を結んだゆゑ、いとしい殿御をやみ／＼と、切腹させました罪科も、わたしが仕掛けた不義いたづら。憎い奴とお叱りもなう、情深い親御様、祝言させてやらうとある、そのお詞が身にあまり、殿御と一緒に死ぬるのが、せめてこの身のこれが本望。モシ、女之助さま、お許し受けた本の女夫、三途の川も死出の山も、必らず見捨てゝ下さりまするな。モシ、せめて女房と只一言、云うて聞かせて下さりませ。
女之　オヽ、それでこそ謀叛人の血筋を斷つて、女之助が二世の妻。
河内　エヽ、嬉しうござんす。
鹿之　その仲人は鹿之助、交せし詞は冥途の土產。未來成佛。
女之　とは云へ親人。

河内　舅御様。
ト外記左衞門、思ひ入れあつて
外記　アヽ、味氣なき憂き世界。
鹿之　忠義ゆゑには
外記　親子の別れ。
ト顔見合せ、思ひ入れ。
鹿之　打捨て置かれぬ道益が様子。イデ、鹿之助が。
ト行かうとする。此うち梅平、種ケ島を持ち窺ひ出で
梅平　最前からの様子は聞いた。うぬ等一々二つ玉だぞ。
ト外記左衞門をキッと狙ふ。
鹿之　ヤア、人非人め。
外記　小癪な下郎。
ト梅平へ扇を打ちつける。これにて梅平、ヤアと愕りするところへ、外記左衞門、ツカ／＼と寄つて、種ケ島を叩き落して、下へ入れ替り
下郎め覺悟。
ト火蓋を切ると、樋の口を打ち拔く。水の音になり、仕掛けにて、樋の口より、返し板にて、水流れ落ちて舞臺先へ行く。煙硝火立つて、所々の萩、一時に枯れる。皆々見て驚ろき

鹿之　狙ひの的の下郎を除け、庭に仕掛けし樋の口を
外記　打ち抜いたるには仔細あり。
鹿之　如何にも木萩の一時に枯れしは。
外記　兼ねてそれなる新參の梅平、我が家へ入込み程なく
も、庭の木萩の返り咲きは、正しくこの池に地雷火あり
と疾より知つたり。
梅平　すりや彈正さまより云ひ附けにて、入込み仕掛けし
地雷火を
女之　親人様には御存じあつて、二條河原の水の手を
外記　我が庭先へせき入れて、樋を打ち抜きしこの水にて
敵の計略地雷火は、忽ち消えれば一時に、枯れ果てたる
この木萩。
鹿之　して又、彈正方より地雷火仕掛けしその様子は。
外記　若君の御殿より、丑寅に當るこの池。正しく調伏呪
詛の人形、密かにこの所へ埋め置き、もし顯はれて詮議
に立寄る者どもを、自然と失ふ地雷火の密計。
梅平　すりや、我れ／＼が惡事の謀計、悟られたるか、口
惜しや。
外記　實正糺すはあの土中。
鹿之　ドレ、鹿之助が。

ト上の方へ行かうとするを、梅平、それを、立廻りに
て、外記左衛門、キッと留める。鹿之助、土手の下を
掘り返し、白木の箱を出して
さてこそ調伏のこの白木の箱、願主仁木彈正左衛門直則
梅平　それを。
ト又かゝる。外記左衛門、隔てる。
鹿之　ハテ、天晴れの外記左衛門どの。
梅平　うぬ、外記左衛門。
トまた行かうとするを、女之助、梅平を引提げて、ガ
ツと踏みつけ、腹帶を解く。血タラ／＼と流れる。こ
れにて梅平を突きやり、思ひ入れ。
女之　最早この世の
河內　舅御様、おさらば。
外記　その婚禮は外出の門出。庭へせき入る水杯、三々
九度も老は殘りて。
鹿之　若木は枯るゝ。散り行く萩の目當の的は
外記　土手の樋の口。
女之　親人様には。
鹿之　まだ手の內は。
ト梅平、又かゝらうとする。外記左衛門、拔討ちに梅

平の首を、ポンと切る。板返しにて、梅平の首、前へ出る。

外記　狂ひ申さぬ。

ト木の頭。女之助、河内、バッタリ落入る。鹿之助、思ひ入れ。外記左衞門、顏を背ける。よろしく拍子。

幕

五　幕　目

足利館の場
床下の場

役名――足利鵞若丸。鹽澤丹三郎。中間、門平。彈正姉、八汐。無理之助妻、雛波。左馬之助妻、此花。泥之助妻、磯野。腰元尾崎。同、勿來。同、陸奥。同、信夫。同、岩手。同、友引。道益姉、小槇。鳶の嘉藤太。一子、千松。山名奥方、榮御前。荒獅子男之助照秀。乳母、政岡。仁木彈正左衞門直則。

本舞臺、三間の間、向う一面の網代塀。幕の内より丹三郎、門平、四建目の形にて、密書を柳に摑み合うて居る。時の鐘にて、幕明く。

丹三　ヤイ折助め。うぬ伏見の京橋から、付けつ廻しつこの丹三を、氣根よく追ッ駈けたな。

門平　知れた事。その密書を取らうが爲に、足の續くだけ追ッ駈けて、取らにやアならぬワ。

丹三　ハテしつこい。いつまでも〳〵同じ事。我が御主人彈正さまより、御用あつて參つた狀だワ。

門平　その御主人から來た狀ゆゑに、見たいと云ふのだ。

丹三　イヽヤならない。

門平　ならぬとあるは合點がゆかぬ。命のありたけ追ッ駈けて取るのだ。

丹三　此方も命の續くだけ、うぬに渡して、つまるものか

ト振り切つて行くを、また引ッ捉へ

門平　うぬ逃げようとて、逃がさうか。

丹三　所を身共が。

トまた振り切るを、やるまいと、立廻りにて、ちやつと鳴り物になり、丹三郎、門平と見事なる立廻り、よろしくあつて、キッと見得にて、上より淺黄幕を切つて落す。誂らへの花やかなる鳴り物になる。

本舞臺、三間の間、一面の竹の節欄間、鍍金の鐵物、翠簾屋體。下に緣側、黒塗り高欄附き、これに鍍金鐵物、これを一面に上よりセリ下ろす。ト日覆より櫻の吊り枝、上の方へ若竹の茂み、隨分澤山にこれを押し出し、これにて道具とまる。

ト行列三重になり、向うより千松、袴、羽織にて、脇差を鎗にして、振つて出る。鶴若君、壺折衣裳にて、中啓を懐にさし、小さ刀にて、狆へ紅絹の長紐を附け、これへ乘り、勿來、結構なる鳥籠に雀を入れ、これを持ちて出る。尾崎、信夫、岩手、友引、いづれも奥女中の形にて出て來る。

女皆　殿樣お馬。

千松　此方は後のお鎗持ち。

鶴若　よう鎗持つた。ハイシイ〳〵。

女皆　ハイドウ〳〵。

千松　お馬ぢや〳〵。

若君　先のけ〳〵。

ト囃し〳〵、本舞臺へ來て

皆々　さて〳〵、よいお慰みを致しました。

鶴若　コリヤ千松よ、狆が草臥れ居つたかして、もう歩かぬ。

千松　もうこれを止めに致しまして、外の事にしませう。

尾崎　それ〳〵、それがよろしうござります。そんなら何に遊ばされまする。

勿來　いつもの通りに、千松どのと隱めくらは。

信夫　狐拳はどうでござりませうぞ。いつそ虎拳に致しまして、虎が強い和藤内は。

尾崎　それよりは、つい參る歌骨牌。

岩手　こりやこなさん方の遊びぢや。若殿樣のお慰みになりませぬ。

友引　この武者繪草紙を御覽遊ばされませ。

ト草双紙、武者繪を大分出す。三味線入りの小太鼓の樂になり、向うより政岡、裲襠衣裳にて、黒塗りの蓋付きの塗り桶、錠の卸ろしあるを持ち出て來て、花道にとまる。日覆より櫻のチラ〳〵散る。差し金附きの雀大分、若竹の中より飛んで群れる。政岡、これを見て

政岡　若竹に、陽炎もゆる小雀の、自然と寄つて戯むるゝは、何か吉事を告ぐるのか。足利源氏は引き離れれど、竹に雀はお家の指し物。あの小雀の囀づると云ひ、風に

ちりちりあの櫻、折知り顔の眺めぢやなア。
皆々　政岡さま、御前様には、これにお入り。
政岡　ハツ。
ト本舞臺へ來て、信夫を呼び、右の桶を渡す。
若君様には、御殿の内のお慰み。さぞ面白うございませう。
ト銕若君、千松、草双紙、武者繪を見て
銕若　コレ千松、こりや金時と云ふ強い武者ぢやぞ。
千松　イエ〳〵、金時より辨慶が強うござりまする。たつた一度外は、泣いた事はないと申しまする。
銕若　イヤ〳〵、金時は熊や狼を相手にして、角力をとらすから強いわいの。
千松　イエ〳〵、辨慶が強うござりまする。
ト爭ふ。
政岡　コリヤ〳〵千松、御前様に其やうな事を申し上げるか。
千松　それでも、わしが辨慶が強いと云へば、あなたが金時が強いと仰しやるから。
政岡　そりやどうしたものぢや。この母が常に云ひ聞かせた事を、なんと聞いて居やるぞ。お主様と勿體ない爭ひ立て。殊に若君様には御病中。お表への聞えもあれば、必らず騒ぐまいぞと云ひつけ置いたに、不行儀な。モウモウ、其方はお目通りは叶はぬ。次へ立ちや。
ト千松、しをれて居る。
まだ母が云ひつける事を聞きやらぬか。
ト千松、アイ〳〵と、しをれて立つ。
銕若　コレ政岡、千松が悪い事があるなら、堪忍してたも
友引　アレ、あのやうに仰しやつてぢや程に
尾崎　今日はマア、堪忍してお上げなされませ。
皆々　わたし等が詫び言でござりまする。
政岡　御前様のお詞と云ひ、皆様の御挨拶。今日は赦します。重ねてキツと嗜なまうぞ。
千松　アイ〳〵。
ト辭儀する。
政岡　これからは、あの雀に、またお知行を取らせませうわいの。
銕若　それがよい。雀に知行を取らせい〳〵。
政岡　ドリヤ、お知行をやりませう。
ト雀に米を入れてやる。
千松　サア〳〵、これからまた隠れん坊ぢや。

嘉永二年三月河原崎座上演

尾上菊次郎の政岡

政岡　これはしたり、又かいの。
千松　アイ〳〵。
　ト又しをれて居る。此うち狆、そこらを嗅ぎ歩く。
兼若　アレ政岡、狆めは空腹になつたさうぢや。
千松　ハイ、私しは空腹ぢやござりませぬ。狆めは空腹ぢやさうで、嗅いで歩きまする。
政岡　ほんに、狆めは弱い奴ぢやござりまする。御前様にも、わが身にも、よい時分には食べさす程に、隨分お伽をして待つて居ませうぞ。シタガ、日足も未の下刻。
　ト思ひ入れ。向うより陸奥、着流し奥女中の形にて、出て來て
陸奥　政岡さまへ申し上げまする。無理之助さまの奥方難波さま、彈正さまの姉上八汐さま、左馬之助さまの奥方此花さま、泥之助さまの奥方磯野さま、只今これへお出でゝござりまする。
政岡　ナニ、お揃ひなされてお見舞ひとや。
　ト誂への三味線入りの出の鳴り物になり、向うより、八汐、襠裲衣裳。次に難波、襠裲衣裳。此花、同じく襠裲衣裳。磯野、襠裲衣裳にて出て來て、花道にとまる。

　これは〳〵どなたにも、お揃ひなされて御出仕。若君様にも、今日は餘程お快い御樣子。
八汐　弟彈正、御機嫌伺ひの爲、出仕と存じますれども
難波　男の體したる者は、堅く無用とお止めあられし、兼若君の御病性。
此花　それゆゑに代る今日の役目。
磯野　私しとても同じ事。夫泥之助が名代、お取次ぎよろしう
八汐　政岡どの
四人　お頼み申しまするわいなア。
政岡　これはマア、改まつたお詞。なんのお取次ぎに及びませう。サヽ、これへ〳〵。
四人　左樣なら、お許しなされて下さりませ。
　ト本舞臺へ通り、よろしく住ふ。
政岡　若君樣へ申し上げまする。出仕の衆へ、お詞を下し置かれませう。
兼若　オヽ、皆よう參つた。
此花　これは〳〵、有り難い君の御意。暫らくお目見得いたしませぬうちに、さても〳〵温なしう御成長。
難波　それ〳〵、あのやうにお淑かにおなり遊ばされまし

たも、偏へに政岡さまのお育て柄。ナアモシ、磯野さま

磯野　左様でござりまする。上へ立つお方のお守りは、大抵の御丹精ぢやござりませぬ。政岡さまにも、さぞお嬉しうござりませうな。

八汐　イヤモシ、お三人ながら、お心安いは常の事。その挨拶より、云はねばならぬ詮議の筋。早うなさんせいなア。

ト政岡、思ひ入れあつて

政岡　イヤ、御詮議の筋と仰しやるは、なんぞ又、氣遣ひな事ではござりませぬか。

此花　政岡さま、今日私しどもが、お見舞ひの出仕とは表向き。

八汐　伯父君鬼貫さま、弟仁木彈正よりの、こなたへのお尋ね。

政岡　ハツ。

八汐　お三人の衆、樣子をそこで、云うて下さんせいなア

難波　この程より當お館に怪しき事ども。皆兼若君のお身の上にかゝりし事。それにつき鬼貫さま彈正さまより、政岡召さるゝところに

磯野　兼若君、他へ出で給ふ事を嫌ひ、猶また政岡を放し給はぬとの事。然らば鬼貫さまにも、早速君の御前へ出づべきなれども

此花　これとても若君には、男體せし者をお嫌ひ給ふが即ち御病氣。それゆゑにこそ

八汐　鬼貫公、弟彈正の名代として、この八汐が參りましたわいの。

磯野　そのお添へ人の、夫々の役目の名代。

三人　連れ立ち參りし右の樣子。

政岡　これはマア、御苦勞に存じまする。若君樣にも殊なう御機嫌。マア、おゆるりと。

八汐　イヤ、落ちつきなされた政岡どの、腕白盛りの兼若君、一切外へ出さず、殊に男は嫌ふとて、このお館は女護の島ぢやと、下々の取沙汰。何事も御病氣々々々と云ひ立て、その癖醫者にもかけず、守護なさるゝお前の心が、合點ゆかぬとある御評定。

政岡　何事のお尋ねかと存じましたに、兼若君の御病氣の體。元より打臥し給ふ程ではなけれど、御殿の内も廊下の内を限り、一切おひろひ遊ばさぬゆゑ、男體した者は、否ぢや嫌ひぢやと、やんちゃんぼつかり御意遊ばし、男と云うては私しが倅千松ばかり。その外は御覧の通り

女中はつかり。この政岡を片時もお放し遊ばさぬも、矢ッ張り御病氣の業と存じまする。

八汐　そりや御病氣ぢやござりませぬ。憚りながら我まゝ氣まゝ、育ての惡さ。頼兼公には御隱居遊ばし、そのお跡目をお繼ぎなさるれば、御幼少でも足利九代の武將。それしきの事なら、よう御意見を致されたがよいわいなう。

ト此花、こなしあつて

此花　八汐さま、憚りながら兼若君へ對し、何とやら、ちとお詞が過ぎまする。

八汐　ハテ、何を云ふのも君のお爲。

此花　例へお爲なればとて、御幼君の、お氣に違ふ强意見で、もし御病勢が重つてはお家の大事。御他行をお嫌ひ男體した者をお好きなされぬと云ふは、もしお產れつきではあるまいか。癖とあれば、あながち御病氣とは云はれぬ仕儀。

磯野　何は兎もあれ、朝夕御膳はお進み遊ばすかな。

政岡　サア、御膳がお進み遊ばせば、さして案じもござりませねど、何をお進め申しても、この四五日は一向御絶食でござりまする。

磯野　すりや兼若君には御絶食とな。ムウ、それ程お食の進まぬお顏の色艷、おやつれも見えぬと云ふは。

八汐　こりや好い氣の附き所。四五日もお食の進まぬ若君樣、どこに一つお惡さうな樣子も見えず、これが合點のゆかぬ始まり。なんと皆樣、そろ〳〵詮議なさんせいなア。

難波　ホヽヽ、これは又、八汐さまの、如何に御執權のお姉御樣なればとて、遠慮もなげなお詞。御絶食にてお顏のやつれの見えぬと云ふが即ち御病氣、體病んで脈やまざるは輕く、體病まざれども脈やむは重しとやら承る。何にもせよ、一大事の御病症。とくと糺せとある鬼貫さま、彈正さまの御名代の八汐さま、私しども添へ人の役目。政岡さまのお詞、疑ふではなけれども、醍醐の品變らば、召上がられまいものでもない。今日の醍醐はこの難波。お膳番の女中方、これへ持つてござんせ。

陸奥　畏まりました。今日の御膳番は、私しでござりまする。

難波　早う〳〵。

磯野　こりや難波さまの、ようお心附かれてのお指圖。左樣がよろしうござりませう。

難波　ト合ひ方にて、陸奥、下座へ入り、直くに懸け盤の配膳を持つて出て來る。難波、受取り、若君に据ゑ
御臣下、名和無理之助の妻の難波、今日の御配膳。少しなりとも召上がられて下さりませうならば、有り難う存じまする。
ト後へ退り辭儀する。兼若は政岡を見て、食べては惡いかと云ふ思ひ入れ。政岡、思ひ入れ。トゞ兼若、膳を、引寄せにかゝるを、政岡、目交ぜする。兼若、膳を突き出し
兼若　イヤ、まだ飯は欲しうない。膳を下げい。
政岡　すりや、御膳はお嫌と御意遊ばすか。
難波　憚りながら、左樣御意遊ばしてはお身の毒。また何ぞお氣に進んだ上がり物を。
兼若　イヤ〳〵、否ぢや〳〵。
難波　それ程お嫌ひ遊ばす御膳。差上げらとは申しませぬ。サア、御機嫌お直し遊ばしませ。
ト懸け盤を引いて
誠に怪しい御病證。
政岡　左樣でござりまする。御病氣と云ふものは、上から知れぬもの。御覽の通り御機嫌よう、お渡り遊ばしても御膳の時は否ぢや〳〵と御意遊ばすゆゑ、お側に附き添ふ私しが心の內、御推量下されませう。
八汐　そりやお氣病と云ふものは、人の心と同じ事で、上からは見えぬもの。それを見貫くは醫者の役。なぜお藥はお上げなさんせぬ。
政岡　それもいろ〳〵お勸め申せど、お少さい時から、お側に附き添ふ御前のお付き醫者、大場道益どのはこの體から見えず、その外は明體した者とては。
八汐　大方さうあらうと思うて、道益の姉女ながらも、醫の流儀を受け繼ぐ名醫の聞え、大貫さまの御意を受けて、お次まで連れ參つた。そんな事に如才のある八汐ではないわいの。ソレ、呼んで下され。
尾崎　ハツ。
ト花道に向ひ
大場道益さまの姉小槇どの。これへ〳〵。
小槇　畏まりました。
ト合ひ方になり、向うより小槇、後ろ帶にて、出て來る。
礒野　これは道益の姉御小槇どの、大儀〳〵。
小槇　誠に有り難いお詞。大切な兼若君の御病氣、定めて

お蟲の業。憚りながら私しが、習ひ覺えし鍼術にて、早速御本腹を。

政岡　イヤ、小槙どの、その御療治は叶ひませぬ。

小槙　政岡さま、なぜ御療治が叶ひませぬか。

政岡　小兒には豫め、先づ鍼また灸を忌むと、千金方と云ふ書に記しあると承ります。殊に以て外の物とは違うて、露味のならぬ鍼術。僅か一分一寸の違ひにて、經路所を失ふ時は絕命なす。サア、左樣の事もあるまいがお覺えなされた小槙どの、併し、頑是なき鶴若君、お身が鍼けば所の違ふ大事のお鍼。なんと皆樣、こりや私しが誤まりぢやござりますまいがな。

八汐　イヤモウ、そんなむづかしい事は知らぬが、御病氣遊すが第一ぢやござらぬか。

政岡　イエ〱、例へ御病氣であらうが儘、鶴若さまは大事のお身。もしもの事があつた時には、忽ちお家の亂れとなる。この程の御膳の仕儀と云ひ、油斷のならぬ大切の場所。迂濶に療治は叶ひませぬ。

ト八汐、思ひ入れある。

磯野　成る程、これは御尤も。併し、御病氣とあるを、其まゝにも捨て置かれまい。御容體見脈の事、御評定がようござりませう。

八汐　それ〱、鍼の灸のと云ふに依つて、いろ〱理窟がつく。サア小槙、若君のお脈を早う。

小槙　左樣なら畏れながら、お脈をお伺ひ申しませう」

トこなしあつて、鶴若が前へ來て、脈を見て、愕りして

ヤ、、、こりや必死のお脈。

ト皆々驚ろき

皆々　ナニ、必死のお脈とや。

小槙　このお脈は濇溢と申して、物を覆ひし如く、上より下へ傾むくなり。溢は外へ出づるなり。男の氣和する事なく、病まざれども死を遁がれぬ、お脈體でござりまする。

八汐　それ程の御難病、死脈が打つまいものでもない。只見たところでは、死脈が打つが不思議なやうで、すべてその身の災難で、死ぬるにもその所では死脈が打つものぢやと聞く。物は試し、小槙、この御殿を離れて、今一度お脈を。別間へお出で遊ばすがお否なら、廊下でなりと今一度。

難波　イカサマ、こりや好い所へお氣が附かれました。

ト磯野、兼若を連れて、政岡、花道の方へ行き、小槇脈を見て、驚ろき

小槇　ヤア、こりや御平脈。所が變れば此やうに、無病のお脈でござります。

政岡　ナニ、この所では無病のお脈と云はつしやるのか。

小槇　御殿で何ふその時は、必死のお脈。

磯野　ハテ、怪しい事なア。

小槇　イヤモウ、とんと合點が參りませぬ。

八汐　何も合點のゆかぬ事はない。慥かにお館の内に、若君を害せんと、窺ふ者があるに極まつた。

此花　イカサマ、それも計られず。

政岡　かゝる時節の事なれば。

ト皆々立ち上がり

陸奥　御殿の隈々、お庭の隅々手分けして

尾崎　大切なる若君樣を、窺ふ曲者。

信夫　慥かにあると覺えたり。

勿來　長押天井または下家、お庭の樹立の茂み／＼。

岩手　怪しき者の忍ぶ樣子。

友引　詮議するはお側の役。

六人　ドリヤ、一詮議。

ト皆々長刀を持ち、立ち騒ぐ。政岡、此花、難波、磯野は、兼若を守護する。千松、ウロ／＼する。八汐、思ひ入れ。

八汐　ヤア、腰元中、騒がしい。誠若君を害せんと忍び入れば、猶以て靜かに／＼。このお館にて覆溢と云ふ狂脈打つとある。覆溢の文字は覆ひ溢るゝ。上より下に傾き内より外に出る脈體。察するところ怪しきは、この天井にあると覺える。ソレ。

ト八汐、身繕ろひして、長刀を取つて、天井を見て突ッ込む。この途端に天井より、嘉藤太、黑具にて、[illegible]にて舞臺へ落ちる。女形皆々取卷く。嘉藤太、逃げようとする。八汐、押へて

さてこそ曲者。この八汐が推量の通り、若君を狙ふ曲者サア、よもやおのれが企みではあるまい。何者に頼まれた。尋常に白狀いたせ。

嘉藤　イ、ヤ、白狀する覺えはない。

八汐　覺えないと云はさうか。ソレ、女中衆、合點か。

六人　心得ました。

ト嘉藤太を取卷く。

友引　サア、何者に頼まれた。

嘉永二年三月河原崎座上演

八世市川團十郎の八汐

市川新車の沖の井　成田屋宗兵衛の嘉藤太

岩手　白狀に依つて命は助ける。
勿來　御殿の上に忍んで居た樣子。
信夫　若君樣を害せんとは
尾崎　サア、賴み手があらうがな。
陸奥　白狀せねば今爰で、この長刀にかゝるかや。
六人　サア〱〱、なんとぢや。
ト長刀にて取圍む。
嘉藤　ア、、申します〱、ナニ云はいでどうするもんだ兼若君を押ッ殺せと、その賴み手は。
六人　何者ぢや。
嘉藤　サア、それは。
八汐　眞直ぐに云はぬと、命がないぞ。
嘉藤　その賴み手は、そこに居る政岡どのだ。
皆々　ヤ、、なんと。
ト悄りする。政岡、驚ろき思ひ入れ。
政岡　ナニ、この政岡が賴みしとは、跡方もなき僞はり言
嘉藤　ア、、もう叶はない。命がけの仕事とは云ひながら斯うなれば首と胴との生き別れ。賴まれた事は云ふまいと、誓言は立てたれど、手詰めになれば是非がない。白狀して、命がどうぞ助かりたい。

政岡　こりや聞えた。この政岡を罪に取つて落さんと、企む者あつて、兼ねての廻し者ぢやな。眞直ぐに白狀いたせ。
八汐　上から見えぬ人心。ハテ、恐ろしい企みぢやなう。
政岡　八汐さまのお詞とも覺えませぬ。大事の〱兼若君御成長遊ばすをこそ、指折り日を數へこそすれ、どうしてマア、此やうな恐ろしい。
八汐　イエ〱、千松どのを、世に立てたいと云ふ謀叛でござんせう。コリヤ曲者、政岡どのが、さう賴んだであらうがな。
嘉藤　左樣々々、それで命を助けて下さりませ。
八汐　さう白狀すれば其方に科はない。科人も詮議も政岡どの。これからはこの八汐が、詮議し拔く程に、覺悟して待つて居や。
嘉藤　そんならモウ、お助けなされて下さりまするか。
ト立たうとする。
此花　曲者待ちや。
ト嘉藤太、思ひ入れ。八汐、こなしあつて
八汐　こりやをかしいわいの。明白に白狀した曲者、若君を害せんと、賴み手はあの政岡どの。

此花　その政岡どのは、若君様の乳人役。害し申さん心あらば、人頼みになんの及ばう。御殿の内は隙次第、廻り遠い天井の上に、忍び込んだは、内に手引きのない證據。お乳の人に科を塗らんと、外から企む惡人があるまいとも申されぬ。それぢやに依つて、曲者を呼び戻したは、よもやわたしが誤まりではござんすまい。

八汐　此花さま、なんのかのと理窟を附けて、贔屓なされても、叶はぬと云ふ證據を見せませうか。

　ト懷より願書を出し

この程怪しき事どもは、鬼貫さまにも、彈正にも、事なう大事に思はれしほどの事。願書と申し、修驗に云ひつけ、君を呪詛する者ありと訴へ。その願書密かに詮議せいと、鬼貫公の云ひつけ。女中衆、ソレ、讀み上げさつしやれ。

　ト願書を陸奥へ渡す。取つて見て

陸奥　敬まつて申す。大小の神祇を驚ろかし奉る。當時足利の跡目、鶴若君の命を絶ち終つて

尾崎　我が悴を以て、足利の家督に立てん事を、乞ひ願ひ奉る。

信夫　たま〳〵毒害を以て除かんとすれど、鬼貫直則が忠心にて事ならず

岩手　我れ〳〵が大望、悴を以て立て候はん事、神明感應あらんものか。

友引　百拜稽首諸願成就なさしめ給へ。願主政岡の局、荒獅子男之助。

六人　敬つて申す。

皆々　ヤ、、、、。

　ト大きに驚ろく。小槇、こなしあつて

小槇　こりやモウ若君様のお脈どころか、そこら從らのお脈が上がつた。ドレ、私しはお次へ參つて、ナア、八汐さま。

八汐　休息を申しつけう。

小槇　ハイ、有り難う存じまする。

　ト合ひ方。小槇、下座へ入る。政岡、此うち思ひ入れある。

八汐　サア政岡、この云ひ譯があるか。なんとぢや。

政岡　エヽ、穢らはしい。微塵さら〳〵覺えのない事。こりやよくも企む輩あるに極まつたわいの。

　ト八汐、思ひ入れ。

八汐　何も彼も入らぬ。この上は、鬼貫公の御前へ引いて

白狀さそう。

難波　イヤモシ、政岡どの、企みでない、その證人はこの難波。

八汐　又お前も理窟かいの。これ程明白に願書の宛名が。

難波　サア、それぢやに依つて、證人はこの難波。こりや科を塗る拵らへ願書。

八汐　して、この願書が、どうして似せ筆ぢや。

難波　こりや八汐さまでもあるまい。正直な願書にさへ、神仙に憚り、何の年の男女と書くが法式。文の取り遣りするやうに、銘々の名を書いて、まッ此やうに顯はれた時、姓名が印なれば、我れと我が身を訴人も同然。これ程の企みをする者が、うか／＼姓名を書きさそうなものか。さりとては不躾ながら、淺墓な八汐さま。達て御詮議なさるゝと、却つてその身が疑はるゝものでござんせうぞえ。

ト八汐、思ひ入れあつて

八汐　ハテサテ、ようも云ひ込めさんしたが、なんでもかでも疑ひのかゝつた政岡どの、若君のお側には置かれぬ、鬼貫公のお指圖。今日からはこの八汐が乳人役。

政岡　エヽ、そんならお前が、若様のお側勤めを。

八汐　其方の勝手は惡からうが、鬼貫公の仰せつけられ：：モシ若様、今日からはこの八汐がお側に附き添ひ、御大切に致しまする。ほんに／＼、お仕合せな若君様ではあるわいなア。

兼若　イヤ／＼、其方は嫌ひぢや。おりや政岡に別れる事は、否ぢやわいやい。

八汐　ほんに子供と云ふものは、聞分けのない。なんぼ否と仰しやつても、この政岡は科人。云ひ譯の立つまでは、別家へ押籠め獄屋に入れて、お逢ひなさるゝ事は叶ひませぬわいの。

兼若　政岡を獄屋とやらへ入れるなら、おれも一緒に行かう。

千松　御前様がお出でなさるゝなら、わたしもお供いたしませう。

兼若　オヽ、千松も來い。獄屋へ行て遊ばう。

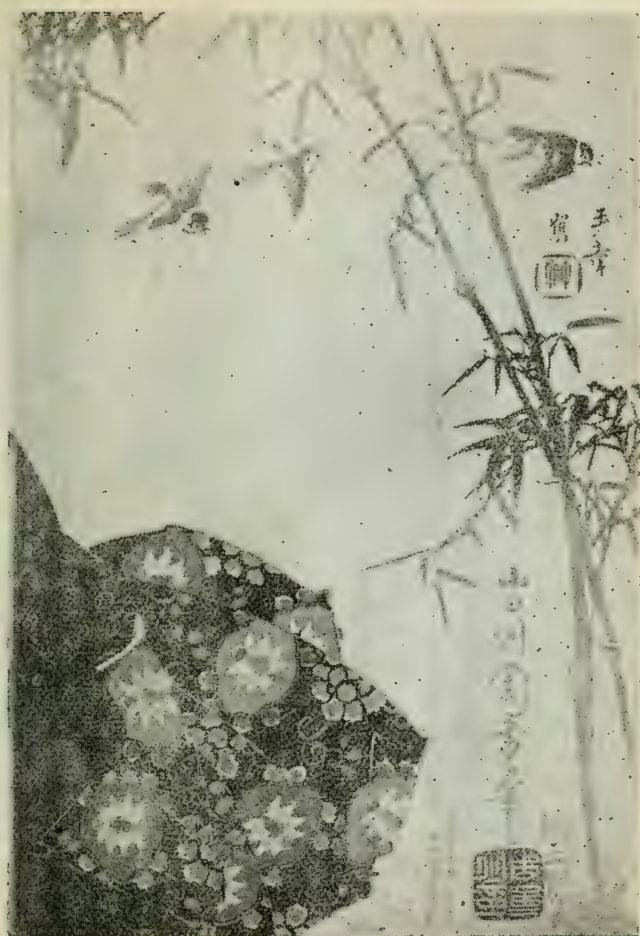
ト此うち政岡、チッと泣いて居る。兼若、見て

政岡、なぜ其やうに泣くぞいやい。

政岡　ハイ／＼、なんの泣きもなんとも致しませぬ。ホヽホ。モシ、若君様、獄屋と申します所は、遊ぶやうな所ぢやござりませぬ。大抵怖い所でござりますわいなア。

粂若　その怖い所へ、なぜ其方をやらうと云ふぞ。
八汐　エヽ、如何に頑是ないとて、こんな奴を頼んで殺さうとする政岡を、オヽ、怖々。大抵恐ろしい事ぢやござりませぬ。
粂若　イヤ／＼、おれを可愛がる大事の政岡。おりや殺されても大事ない。なんぼでも否ぢや／＼。
政岡　エヽ、有り難い。例へお命をお捨て遊ばしても、この政岡と一緒に行きたいとは、よう御意遊ばした。よう仰しやつて下さりました。
八汐　エヽ、なんのそれが有り難い。どうあつても斯うあつても、云ひ譯立つまでは鬼貫公の御意ぢや。一間の獄屋へ。
政岡　ぢやと云うて、これがマア。
八汐　後見の御意を背くのか。
政岡　全く以て。
八汐　こりやモウ、甘う云うては濟まぬわいの。なんぼ若君の仰せでも、政岡めを此まゝにはならぬ。イケ圖々しいと云はうか。お家を狙ふ惡人の癖に、その白々しいしやツ面わいの。
ト政岡を蹴飛ばす。政岡、思ひ入れあつて
政岡　最前よりいろ／＼との難題も、かゝる時節と押默つて、無念を堪え胸を摩つて居る政岡、ようも足蹴にしやつたの。
ト粂若、思ひ入れ
八汐　ホヽヽ、盗人猛々しいと、大罪人の身を以て、まだ其やうな口立派な。いつその事に。
ト有り合ふ脇息を持つて振り上げる。磯野、その手を取つて
磯野　八汐さま、餘り蓮葉で、御仁體が損ねまする。
八汐　そりや又なぜ。
磯野　只今の若君樣の御意、憚りながら、なんとお聞きなされたやら、あの政岡どのを折檻あつては、若君樣の御機嫌に違ふと云ふもの、なりや、御意を背く道理。幼なけれども足利九代の武將たる、粂若君の御意が重うござりまする。殊にお前は女儀のお身。ちとお嗜なみなされませいなア。
八汐　でも大罪人の政岡、御前を引ッ立て獄屋の憂き目。サア、うせう。
ト政岡を引ッ立てにかゝる。磯野、支へる立廻り、
粂若　八汐待て。

八汐　又お留め遊ばしますか。
栄若　それ程獄屋へやりたくば、政岡が代りに其方行け。
八汐　これは又迷惑な。科人の代りにこの八汐を、獄屋へ行けとは阿房らしい。ようござります。そんなら政岡が代りに、この千松を。
栄若　その二人の者は、おれが臣下ぢや。
八汐　エヽ。
栄若　おれが云ふ事を聞かぬ奴は、皆獄屋へ入れい
　ト八汐、ギョッとする。政岡、キッと思ひ入れ。難波こなしあつて
難波　アヽ、實に栴檀は二葉より芳ばしと、天下をしろし召され給ふ、御器量顯はれ、寛仁大度。この上は御諚意の通り、乳人政岡どのと御一緒に置きまする程に、御機嫌お直し遊ばされませ。
此花　その御仁心を側で聞いてさへ、涙がこぼれて有り難いもの。その身になつてはさぞかしと、思へば思ふ程、私しどもゝ。
　ト思ひ入れ。
磯野　この願書は似せ物にて、外々よりの企みならば、忠義の心根あつて、御幼君のお爲になる政岡どの。
難波　この上は私しどもゝ、このお館に暫らく止まり、様子を見るが夫々の名代。
八汐　すりや、鬼貫公の名代の八汐が云ふ事は。
難波　反古にはせねど私しどもゝ、お添ひ人の役目を蒙むる事なれば。
此花　お前ばかりが鬼貫公の御名代で
磯野　私しどもの夫々の、役目を反古に
三人　なさるのか。
八汐　サア、それは。
三人　ハテ、若君の御意に違ふは大不忠。
八汐　そんなら、どうなと御勝手次第サ。
　ト思ひ入れある。
政岡　この上は若君様には、お閨をあちらへ移されて。
栄若　そんなら、あちらへ行てその配膳を。
　ト膳の側へ行かうとする。
政岡　アヽモシ、このお膳は、難波さまのお据ゑなされたお膳なれば、私しが持ち参つて。
　ト掛け盤を取り上げる。八汐、思ひ入れあつて
八汐　すりや、どうあつても政岡を獄屋へは。
政岡　ハテ、若君様の御意なれば、私しは参りませぬ。

八汐　エヽ口強情な。アヽ主と病ぢや。
雛波　女中方、その曲者を廣庭へ。
八汐　イヤ、この曲者は八汐が詮議し、一々科ある奴等、引ッ捉へにやアならぬ。
三人　すりや、八汐さまが。
ト また八汐、思ひ入れあつて
八汐　とは云へ政岡。
ト キッとなるを
政岡　御意でござんす。
ト 唄になり、政岡、掛け盤を持ち、若君、先に千松、奥へ入る。
此花　サア、八汐さま、雛波さま。
磯野　御一緒に、あの奥へ。
八汐　ハテ、わたしは此奴を詮議し、その上にて。
此花　左様ならば八汐さま。
皆々　後程お目にかゝりませう。
ト また唄になり、此花、磯野、雛波、下座へ入る。後に八汐、嘉藤太、殘り
八汐　サア曲者、うぬ、引ッ捉へて一詮議。
ト 合ひ方になり、八汐、立ち上がり、あたりへこなしあつて、嘉藤太が繩を解く。
嘉藤　八汐さま、仰せつけられましたる通り、うま〳〵参りは参りましたが
八汐　女郎どもが支へこさへの、詮議立てにしくじつた。
嘉藤　この上は、今一勝負やつて見ませう。
八汐　あの兼若があちらへの間へ、座を移したる政岡が心憎い。今一度、あの御座の間へ忍び入つて。
嘉藤　庭の樹立の茂みに隠れ。
八汐　ハテ、その智恵はまだ若い。この天井を詮議したれば、心の附かぬを幸ひに
嘉藤　また天井へ忍び入つて
八汐　なんでも兼若政岡を。
嘉藤　次の長押の手鎗を以て。
ト 大きな聲にて云ふ。
八汐　コリヤ……來い。
ト 管絃になり、八汐、嘉藤太、下座へツイと入る。始終管絃にて、眞中の翠簾屋體、ひゞきにて開き、二間の間、舞臺前へ出る。道具とまる。誂らへの琴入りめりやす、獨吟になる。
〽緑子の育つも木々の糸遊は、霞か雲か初櫻。

明治二十二年十月桐座上演

九世市川團十郎の政岡

ト此めりやすにて、三方の簾一面に上がろ。内に誂らへの臺子を直し、風呂釜をかけ、茶の湯道具一式、石の塗り補並べあり、これに水屋、柄杓添へてあり、政岡、これに直り、上の方に兼若、次に千松、右の鳥籠に掛け盤直しあり。

政岡　ヤレ／＼、只今はひやいな危い事。けれう三人の衆がござつたればこそ、鬼貫さまの名代をかさに着て、八汐めが云ひたいがい。若君様の御意が重いゆゑ、事なう濟みましてござります。それはさうと最前から、若様にはさぞ御退屈。千松もホッとしたであらう。サア、もうよい程に、何なりとも御意に入る事をして、遊びや／＼

ト兼若、方々見廻し

兼若　政岡、もう空腹なと云うてもよいかや。

政岡　お道理でござりまする／＼。今日は思はぬ事に隙取つて、飯拵らへも遲うなりました。若様始め千松も、昨夜のまゝで、さぞ御空腹にござりませう。よう御辛抱遊ばした。只今飯を差上げまする。

兼若　そんならこれを食べようかいなう。

ト以前の掛け盤を引寄せろ。政岡、留めて

政岡　ア、モシ、この程は怪しい事ども打ち續く。この御膳は難波どのゝ云ひつけられ、よもや怪しい事はあるまいとは思へども、油斷のならぬ人心。どう思つて、どうあらうやら、君子は危ふきに近づかずと申しますれば、氣遣ひのない御飯を、いつものやうに、この政岡が拵らへて差上げまする。今少しの間、御辛抱なされて下さりませ。

兼若　それでもおりや空腹な。コレ、食べさせてくれいやい。

政岡　これはしたり、また無理な事を御意なさるゝ。私しがお爲にならぬ事を申しませうか。千松、云ひつけた事よう聞いて賢いわいの。

千松　わしがひもじいと云ふと、御前様が猶やんちや仰しやるゆゑ、武士は辛抱が第一ぢや。忠義と云ふものは、ひもじい目を堪えるものぢやと、お前が云はしやつたに依つて、ひもじいけれど、辛抱して居るわいの。

政岡　オヽ、それが忠義ぢや／＼。侍ひぢやぞ。

ト泣いて

ホヽヽ、オヽ、強い武士ぢや。強い／＼。

兼若　ひもじい目を辛抱すると強いかや。

政岡　オヽ、強い／＼。

粂若　そんならおれも辛抱しよう。
政岡　アノ、若樣にも御辛抱遊ばしまする。さてもお強い事、これには又、千松も叶はぬ〱。シタガ、もう追ツつけ炊いて上げますぞえ。ドレ、飯の拵へ致しませうか
兩人　アレもう飯を、炊くのぢや〱。
トめりやすになる。
〽蕾の花も水加減、咲かすと燃ゆる夕かれい、薪涙にしめる伽羅の香。
ト此めりやすにて、政岡、鍵を出し、石の塗り桶の錠を明け、ちよつと毒味を茶碗へ汲んで、飲んで見て、錦の袋物より、米を明けて水指にて、米をかしぐ事あつて、釜へ仕掛けて、だん〱炊く。此うち粂若、千松、こちらを見て、飯はどうぢやと云ふこなし、いろいろある。
政岡　只今炊いてあげまする程に、まちつと御辛抱遊ばせや。
粂若　オゝ、早う食べさせてくれい。
千松　わしにも食はせてや。
政岡　オヽ、食べさせる〱。飯の出來るその間、若樣が御退屈。お氣に入りの雀の雛鳥、もう親鳥の來る時分ぢや。そこへ直しや。
ト千松、アイ〱と雀の籠を直す。
もう追ツつけ上げます。火がおこると直ぐに飯になりまする。千松も辛抱するといんま云うて、その顏はなんぢや。いつもよう唄ふ雀の唄でも唄うて、若樣をお慰め申さぬか。唄を唄ふうちには、ちやんと飯が出來るわいの
千松　そんなら、いつもの雀の唄を。
政岡　早く唄や〱。
千松　アイ〱……こちの裏のちさの木に〱。
粂若　雀が三羽とまつて〱。
千松　ひとりの雀が云ふ事にや〱。
粂若　よんべ呼んだ花嫁御々々々。
千松　金襴緞子を縫はすれば〱。
粂若　ほろり〱とお泣きやるが〱。
ト此うち親雀來て、籠へ餌を運ぶ。政岡、これを合せて
政岡　何が悲しうて、お泣きやるぞ〱。
粂若　コレ〱、雀の親が子に何やら食はし居る。おれも早う飯が欲しい。
千松　ほんに雀の親が餌を運びまするわいの。飯はまだか

や。

ト政岡、泣き顏を隱し、思ひ入れあつて

政岡　わしが息子の千松が〳〵。

千松　金掘りに行て戻らいで〳〵。

龜若　一年經つてもまだ見えぬ……コレ、まだ飯は出來ぬかや。

政岡　ハイ〳〵、もう今出來まする。今あげますわいな…………二年待てどもまだ見えぬ〳〵。

千松　母樣、飯はまだかいなう。

政岡　オヽ忙しない。其方までが。

千松　三年目には文が來て〳〵。

ト此うち以前の狆出て來る。龜若、見て

龜若　ソレ千松よ。狆が來た。狆よ、來い〳〵〳〵。

千松　狆よ來い〳〵。御前のお召しぢや。來い〳〵。

ト千松、抱いて撩つて居る。

政岡　オヽ、よい所へよう來た。何をやらうぞ。それ〳〵この御膳。ほんにみちは仕合せぢや。畜類の身で有り難い、お坐りなされたこの御膳、御機嫌直し褒美ぢや。ほんにこれが狆味ぢやわいの。

ト膳の物をいろ〳〵、千松、明けてやる。狆はこれを食ふ。

千松　サア〳〵、食へ〳〵。

政岡　あのマア嬉しがる事わいなう。

龜若　政岡、おりや狆になりたい、

ト政岡、思ひ入れあつて

政岡　オヽ、お道理ぢや〳〵。ついに艱難辛苦をしろし召されぬ武將の身分、生れ給ふお果報にて、この程の御不自由。申すも畏れありながら、四海の御主、何暗からぬ御身にて、心に任せぬ食物ゆゑ、鳥類の餌までにも、お目にとまると思へば、狆になりたいと羨やましげに仰しやるは、そのお心根を思ひやつて、政岡がこの胸は、張り裂けるやうにござりますわいなア。

トぢつと泣いて、思ひ入れ。

龜若　そちは何を泣くぞいやい。飯食べさすが悲しくば、いつまでも辛抱せう程に、泣きやるないやい。

千松　母樣、わしも辛抱しませうわいの。

ト政岡、思ひ入れあつて

政岡　イヤ〳〵、泣きやせん。ハイ、泣きは致しませぬ。政岡が泣いたのは、飯があんまり出來ぬに依つて、飯の出來る呪ひに、いま泣いたのでござりまする。どうやら

昭和三年十一月歌舞伎座上演
中村歌右衛門の政岡

斯うやら、飯が出來ました。

鎌若　飯が出來たか。嬉しや〳〵。

政岡　いつものやうに、ドレ、にぎ〳〵して上げませう。

ト飯を握り、折敷の上へ置く。鎌若、喜び

鎌若　サア〳〵、食べよう〳〵。

ト手を出す。政岡、留めて

政岡　イヤ、お待ち遊ばせ。吟味の上にも吟味せねば、御辛抱の甲斐がござりませぬ。コレ千松、この飯をお毒味して差上げや。

千松　アイ〳〵。

ト千松、食べる。政岡見て

政岡　オヽ、氣遣ひない。サア若君樣、お心靜かに召上がりませ。ドレ、おかよひを致しませうか。

ト鎌若へ差出す。向う揚げ幕にて

呼び　榮御前さまのお入り。

ト政岡、思ひ入れあつて

政岡　ハテ心得ぬ。管領職の奧方、榮御前さまのお入り……コレ千松。其方はお次へ。

ト思ひ入れ

千松　アイ〳〵。

ト千松、下座へ入る。また呼びあつて、誂らへの鳴り物になり、向うより榮御前、襠裲衣裳にて、結構なる菓子の折を持つて出て來る。奧より八汐、難波、此花、磯野、出て來て、先へ鎌若を辭儀させ、皆々よろしく出迎ふ。

政岡　榮御前さまのお入りとござりまするゆゑ、病中ながら、館の主鎌若丸、介添として乳人政岡。

八汐　家の執權仁木彈正左衞門が姉八汐。

難波　足利家八人の烈臣、名和無理之助が妻難波。

此花　大館左馬之助が妻此花。

磯野　同じく土子泥之助が妻磯野。

此花　これまでお出迎ひ申しましてござりまする。

政岡　先づ〳〵あれへ

皆々　お通り下されませう。

榮御　管領職を重んじられ、御病中ながらのお出迎ひ。介添の計らひ神妙々々。夫山名左衞門持豐の名代なれば辭退いたさず、それへ通るでござんせう。

ト鳴り物の切れにて、榮御前、上の方へ通る。政岡、鎌若に引添うて居る。皆々よろしく添ふ。

政岡　榮御前さまへ申し上げまする。今日お入りの御用の

筋。一通り仰せ下されませうならば
皆々　有り難う存じまする。
榮御　さればいなう。今日妾がこれへ參りしは、兼若どのには御病氣に依つて、男たる者を禁じられしと聞くゆゑ、夫に代るこの榮。密かに參つて、とくと容體を見屆け參れよと、夫持豐の云ひ附け。斯く心を遣はるゝも、足利九代の武將たる、兼若どのゝ御所勞。殊にお食事も進まぬ由、何がなお口に合ふやうにと、申しつけたるこの菓子の折。打捨て置かれず、御賞翫あらば夫の喜び。八汐とやら、よしなに計らうてたもいなう。
ト八汐に目くばせする。
八汐　畏まりましてござりまする。お家柄とは申しながら管領方よりお心を、盡されての進ぜられ物。後とも云はず只今この所にて、御賞翫なさるゝがよろしうござりまする。
ト八汐、折を引寄せる。政岡、心遣ひの思ひ入れ。
磯野　モシ八汐さま、折角山名さまより、お心を盡されて進ぜられたるそのお菓子。お食氣のない若君樣、ひよつとお否と仰しやる時は、榮御前さまのお目通りと云ひ、どう御挨拶をせうと思うてゞござりますぞ。
八汐　サア、それは。
磯野　あまりツカ〳〵仰しやらぬがようござりまする。
榮御　イヤ〳〵、その心遣ひ無用々々。管領より下され物でも、氣に入らねば否と云ふは、頑是のない子供の一徳、苦しうない。八汐、その折、早う開きやいの。
八汐　ハイ〳〵。畏まりました。折角あのやうに榮御前さまの、お心を遣はさるゝ事。ドレ〳〵。
ト八汐、菓子折を持つて來て、蓋を明ける。政岡、いろいろ心遣ひ。八汐、わざと若君が前へ、折を出し
てもマア、結構なお菓子ぢや。どうやらおいしさうな。なんぞお氣に入つた物を、一つお取り遊ばしませぬか。
ト若君、欲しさうなる思ひ入れ。政岡、側へ寄つて、目交ぜにて
政岡　オヽ、お否でござりまするか。左樣ではござりませうが、折角山名さまの奧方樣、進ぜられたるこのお菓子お氣に入つた物をお取り遊ばせ。そのお心があればよいになア。
兼若　そんなら食べてもよいか。
八汐　オヽ、大事ござりませぬ。サヽ、何なりともお氣に入つた物を。

ト兼若、菓子を取らうとする。

兼若　そんなら食べてもよいかや。

政岡　ア、、コレモシ。

ト袖を引く。兼若、扣へる。

榮御　待て政岡、そちやなぜ留めた。

政岡　サアそれは。

榮御　ムウ、聞えた。夫持豐より、兼若どのゝ病氣見舞ひに、送られたるその折が怪しいに依つて、それで留めたのか。

政岡　なんのマア、左樣な事ではござりませぬわいなア。

八汐　左樣でなくば、とも〳〵爰でお進め申すがよいわいの。

政岡　それぢやと云うて

榮御　但し怪しいと思ふのか。

政岡　サアそれは。

榮御　管領山名持豐より送りし折へ、疑ひかけし乳人政岡こりや此まゝには濟まされぬわいの。

此花　イヤ、憚りながら、そりや榮御前さまの思し召し、違ひましてござりまする。

榮御　そりやなぜに。

此花　ハテ、管領方より送り賜はるこのお菓子、何しに怪しみませうぞ。只今政岡が留めましたは、典藥どもより禁じましたる毒斷ち。

難波　それ〳〵、抑へ扣へは乳人の役。それゆゑ只今のやうに、申しましたものでがなござりませう。ナウ、政岡どの。

政岡　左樣でござりまする。

榮御　すりや、この菓子に怪しい事はないかや。

兩人　何しに左樣な事が。

榮御　さう思はゞ自らが、直に若へ進めにやならぬ。

三人　エ、、。

ト恟りする。

榮御　但し、政岡、其方が進めるか。

三人　サアそれは。

榮御　サア。

皆々　サア〳〵。

榮御　ドヽ　どうぢや。

ト奥より千松、走り出て來て

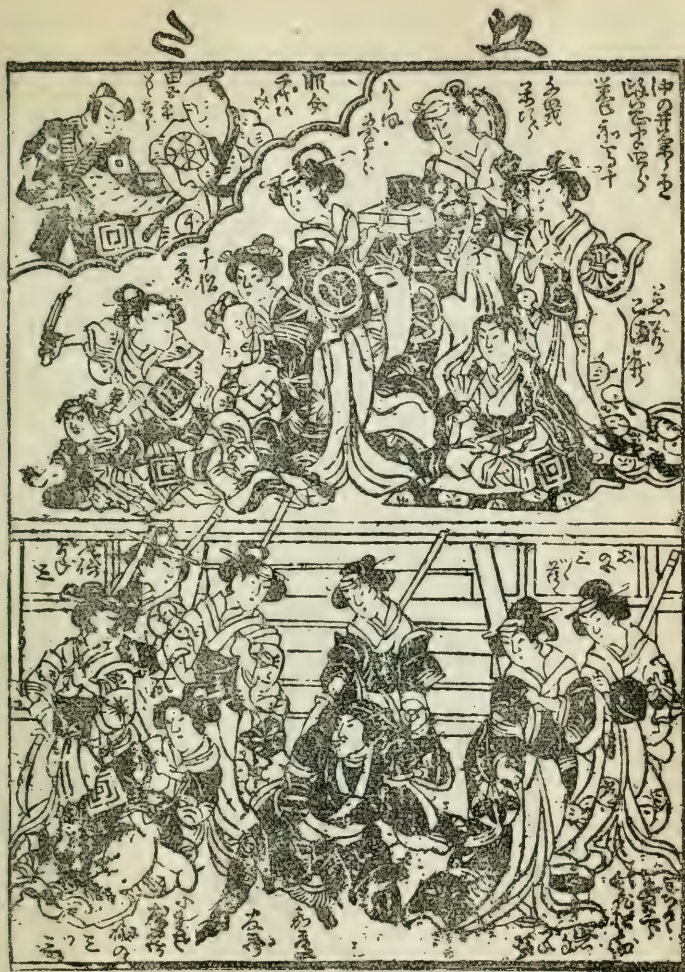
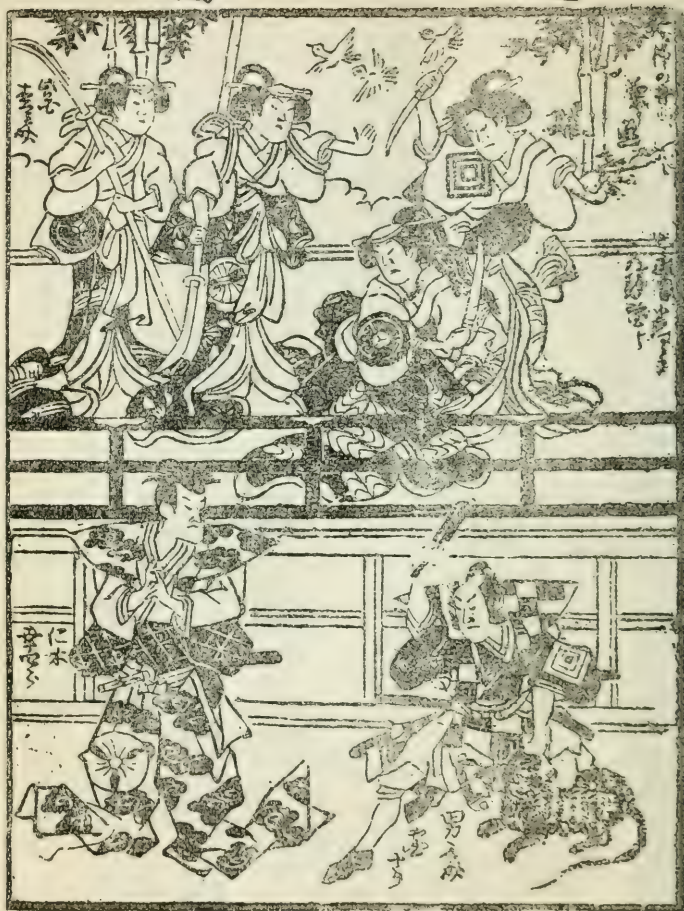
千松　母樣、わしにもお菓子を下されいなう。

ト折の菓子を取つて、一口食ふ。皆々呆れる。

ア、母様、苦しいわいなう。
ト皆々菓子へ目を附ける。
皆々　さてこそ怪しきこの折の菓子。
ト寄らうとするを、八汐、皆々を突き退け、千松を引寄せ、手早く懷劍にて、胸元をグツと抉る。
皆々　コレイナ／＼。
ト鎌若を圍ひ
政岡　女中方、若君様の守護いたされい。
皆々　畏まりました。
ト腰元六人走り出て來て、鎌若を守護して、奥へ入る
政岡、此花、難波、磯野、八汐へ詰め寄り
難波　合點のゆかぬこの場の樣子。
此花　事の實否も分らぬうちに
磯野　御前に法度の懷劍を以て
政岡　何ゆゑ千松を手にかけられた。八汐どの。
四人　返答なんと。
八汐　こりやなんぢや、お前方は。何もザワ／＼騒ぐ事はない。誰れあらう、管領職より下し置かれし、この菓子の折、踏み破つたる慮外者。見るに忍びず手にかけしは、お家の爲を思うて、八汐が忠義ぢやわいなう。

難波　ムウ、すりや、御前さまのお目通りをも憚らず、狼藉なしたる千松ゆゑ、お家のお爲を思はれて
八汐　如何にも手にかけ、殺しました。
難波　何へ八汐どのゝ手にかけられずとも、助かり難き千松の身の災難。幼なけれどもこの場の樣子、賢くも知つてお役に立ちしは、日頃のお育て……サア、育て柄とは云ひながら、口ゆゑ死ぬとは、ほんに果敢ない身の上ぢやなア。
八汐　コレ、見やしやんせ。まだ息があるかして、ぴくぴくびくするわいの。オヽ、痛からう。道理ぢや／＼。現在他人のわしでさへ、酷い事ぢやと思うて、コレ、此やうに涙がこぼれる。コレ、政岡どの、其方は悲しうもなんとも思はぬかいなう。
ト政岡、思ひ入れあつて
政岡　なんのマア、お上へ對し慮外と云ひ、親の名まで穢したる千松。お手にかけられたるはお家のお爲、ちつとも悲しい事はござりませぬわいなア。
八汐　すりや、これでもこなさんは悲しうないか。これでもか。これでもか。
ト酷く抉る。政岡ヂツと、堪えたるこなし。

文政元年八月中村座

上演繪番附

榮御前、目を附け

榮御　オヽ、出かした八汐。夫持豐より送りし、大切のこの折、入らざる小悴めが出しやばつて、既の事に大事の企みを

ト云はうとして

サア、大事の菓子を荒した科、手にかけしは八汐が働らき、流石は執權職の彈正が、頭を踏まへる姉ほどあつて天晴れ〳〵。

八汐　なんのマァ、執權職の彈正が、頭を踏まへるのなんのと、さしてもない事をお譽めのお詞。それに引きかへ氣の毒なは政岡どの、さぞ悲しうござんせうなア。

政岡　改まつた八汐さまのそのお詞。お家のお爲を思し召して、千松をお手にかけられしは、忠義と云ふもの、なんのお恨みに存じませうぞ。

榮御　その詞を聞く上は、政岡には自らが、密かに聞かせる仔細あれば、四人の者は、暫らく次へ。

四人　アノ、私しどもは。

榮御　遠慮してたもいなう。

四人　畏まりましてござりまする。

ト唄になり、四人ともに下座へ入る。あと合ひ方、榮御前、あたりを見廻し、政岡の側へ寄り

榮御　年頃仕込みし其方の願望、成就して、さぞ喜びであらうの。

政岡　エ、なんと仰しやりまする。

榮御　サヽ、驚ろくは尤も。もう隱すには及ばぬわいの。其方が密かに取替へ置きし、其方の子のあの兼若に恙なく、足利家の世繼の千松がこの最期。さぞ本望であらうがの。

政岡　エヽ、なんとえ。

ト思ひ入れ、合ひ方。

榮御　サイナウ、取替へ子の樣子は、先達て知れたれども、もしやと思ひ最前から、始終の樣子試しみるに、血を分けし我が子の苦しみを、なんぼ氣強い其方でも、堪えて餘所に見て居らるゝものかいの。慥な證據を見る上は、包むに及ばぬ。コレ、これを見や。

ト連判狀を出して見せる。政岡、取上げ

政岡　こりやコレ、鬼貫どのを始め、家中の諸士は過半お味方。

榮御　コレ、聲が高い。何かに附けて心憎きは、渡邊民部之助、井筒外記左衞門。寄り〳〵密かに試した上。得心

なくば人知れず討取る手段。八汐にもしかと云ひつけ萬事ぬかるな、合點か。

政岡　左様なら、この連判を、私しにお預け下されますか

榮御　其方にしつかり預けるぞや。

政岡　して、あなた様は。

榮御　これより館へ立歸り、夫持豐へこの場の樣子を。心急げば、これより直ぐに。

政岡　左樣ならば。

榮御　政岡さらば。

ト唄になり、簾下がる。榮御前、悠々と向うへ入る。政岡、後見送り、チッとこなしあつて、千松が死骸を抱き上げ

政岡　コレ千松、よう死んでくれたなア。其方が命を捨ててくれたばつかりに、邪智深き榮御前、取替へ子と思ひ違へ、兼ねての企みを明かすと云ひ、連判までを渡せしは、親子の者の忠節を、神や佛の憐れみ給ふか。アラアラ、有り難やなア。これと云ふも、常に敎へし事よう聞分けて、手詰めになつた毒害を、よう試みてたもつたなう。とは云へ可哀や、君のお爲と覺悟極めて居ても、現在我が子が嬲り殺しに會ふのを、側に見て居る悲しさは

どのやうにあらうぞいなう。千松、可哀や／＼なア。

ト泣き落す。バッタリと音して、政岡の前の左右へ、白刃二本ツヽと出る。政岡、恟りする。直ぐに白刃引ッ込む。政岡、思ひ入れ。誂らへの鳴り物、トヒヨになり日覆より鴈三四羽舞ふ。政岡、これを見て

合點のゆかぬ下家より、窺ふ白刃の樣子と云ひ、あの鴈……敵に伏勢ある時には、歸鴈列を亂すと云ふ。春も彌生に鴈の歸るとするに、あの通り行儀にもつらならざるは、さては最前の若竹に雀の飛ぶと云ひ、こりやいよいよ曲者のあるに極まつたわやい。

トきつと思ひ入れ。ドロ／＼にて煙硝火立つて、この白刃は板返しにて、二腰とも二疋の鼠になる。

白刃の忽ち鼠となりしは、正に妖術。

ト側の鑵子の沸え湯を、この鼠に浴せる。鼠消える途端に、天井より鎗の穗先、ズッと出る。政岡、恟り天井にキッと目を附け

さてこそ又もや天井に、窺ひ忍ぶ曲者は。

ト有り合ふ柄立を手裏剣に打つ。嘉藤太、天井より手鎗を持つて、飛び下りる。政岡、見て

ヤア、そちや最前の曲者。又もや爰へ。

文化五年三月市村座上演

七世市川團十郎の男之助　五世松本幸四郎の彈正

嘉藤　政岡觀念。
ト鎗にて突いてかゝろ。ちよつと鳴り物になり、烈しき立廻りあつて、政岡、嘉藤太を一突きに殺す。八汐窺ひ出で
八汐　おのれ政岡。
ト懷劍にて、突いてかゝろ。立廻り
政岡　ヤア、八汐どの、こりやなんとさしやんす。
八汐　樣子を聞けば、榮御前を騙かつたる不屆き者。この由を注進して。
ト政岡を引退け、立廻り、キツととまる。東西の簾の内にて
難波　不忠者の仁木彈正左衞門が姉八汐。
此磯　そこ動くまいぞ。
八汐　ヤ、、、なんと。
ト管絃になり、後の簾卷き上がる。此花、難波、磯野、長刀を搔い込み立ち身。
八汐　合點のゆかぬ。この八汐を不忠不義とは。
此花　ヤア、知るまいと思ふか。其方が弟彈正直則。執權職を蒙むりながら、惡逆不道の叛逆の企て。
難波　非筒家の毒藥の祕書を奪ひ、御膳番鹽澤丹三へ大事を頼み
磯野　若君のお氣に入り、大場道益を他へ呼び出し、密かに毒藥を買ひ調へしは、察するところ兼若君を失はん、深い企みで。
三人　あらうがな。
八汐　イヽヤ知らぬ。その毒藥の事、さら〳〵覺えない。
磯野　ヤア、覺えないとは云はさぬ。慥かな證據、大場道益が姉小槇、早う參れ。
小槇　畏まりました。
ト小鼓の合ひ方にて、下座より小槇、出る。
八汐　ヤア、わりやア。
ト悸りする。
小槇　なんと好い證人であらうがな。サア、八汐どの、もう叶はぬ。ようも〳〵弟道益に、南蠻祕法の調合に、道益に毒藥を買ひ調はせ、この事外へ洩らさうかと、よくも鹽澤丹三に云ひつけ、弟を騙し殺しにしやつたなア。
八汐　ヤア、それまでうぬは知つて居たか。
小槇　知らいでなんとせうぞいの。たつた一人の弟の敵と思ひしが、この事荒立てなばお家の大事と、わざと其

方の味方と見せかけ、ある事ない事云ひ散らしたも、まツから手目を上げう爲。若君様と千松どの、入れ替へ子と跡方もない事を云うたのもこの小槇、それゆゑにこそ榮御前が、うま〳〵と一杯喰うて歸つたも、みんなわしが匕加減。これもあれなるお三人様の仰せつけられ。なんと膽が潰れやんせう。

八汐　エヽ、殘念やなア。そんならうぬを此方へ入れ置いたも、此奴等が指圖であつたか。エヽ、忌々しい。うぬ等一々觀念。

ト三人へ懷劍にて突いてかゝる。立廻りにて引き退ける。小槇、かゝるを、見事なる立廻りにて、トヾ政岡へかゝる。政岡、立廻りにて、連判狀を落す。それをと八汐、寄るを、三人長刀にて支へる、ドロ〳〵にて差し金つきの鼠出で、この途端に鼠、連判狀を咬へ、前の穴へ消える。

政岡　詮議の種の連判狀を。

ト行かうとするを、八汐、又かゝる立廻り。政岡、懷劍を取つて、八汐が横腹を抉り

三人　女ながらも謀叛の片割れ。

政岡　我が子の敵。

皆々　天命思ひ。

政岡　知りやつたか。

ト八汐を取つて押へ、止めを刺し、これなりに誂らへの大太鼓入りの鳴り物になり、チョン〳〵のキッカケにて、この道具を一面セリ上げる。

この緣側、高欄際より下の高さ七尺程の高御殿の緣の下になり、吊り枝の櫻、次第〳〵に引き上げる。櫻の花チラ〳〵と散る。この緣の下に男之助、上下衣裳、股立ちにて、連判狀を咬へたる大鼠を踏まへ鐵扇を振り上げ、キッと見得にてセリ上げる。道具納まると上の翠簾下りる。

ト大薩摩になり

〽國家將に亡びんとするに、必らず妖孽あるとかや。荒獅子男之助照秀は。

男之　君臣を失へば龍魚となり、權臣に歸すれば虎鼠と變ずと、李白が七言眼のあたり、怪しき鼠の有樣おやなア……當時足利の武將は御幼君にてましませば、佞人刑部の讒者の輩、稍ともすれば君を窺ふ曲者あり、誠や鼷鼠の功、牛の角を喰ふと、左傳に見えしも宜なるかな。

國家の傾敗を知らする鼠の振舞ひ。今この御殿を宿直なすに、佞人輩が手段にて、丈拔群なる大鼠も、斯う照秀が踏み挫しいぢやア、びくとも動く事はなるまい。男之助が鐵扇の以て、只一打ちに。

ト鐵扇にて鼠を喰はす。鼠、男之助と立廻りにて、向うへ一散に逃げて行く。花道の切り穴へ飛び込む、男之助、追ひ駈けんとする。ドロ〳〵にて少し、五體のすくむ思ひ入れ。捲となる。これをキッカケに花道の切り穴より、彈正、百日、鼠の衣裳、長上下にて、眉間に疵を受け、連判狀を咬へ、印を結んで居るなりにセリ上がる。此うち上の翠簾靜かに上がる。政岡、手燭を持ち、前に燭臺二本並べあり、男之助、向うを見て

男之　さてこそ曲者。

彈正　なんと。

ト連判狀を片手に持ちて、九字を切る。大ドロ〳〵にて、手燭・燭臺ともに灯消える。

政岡　すりや、妖術にて。

男之　ハテナア。

トきつと睨む。政岡、向うを見込む。

彈正　ム、、ハ、、。

トこの途端、ドロ〳〵にて、よろしく拍子。　幕

幕の外、彈正、思ひ入れ。出端になり、連判狀を懐へ入れる。ドロ〳〵を被せて、彈正、悠々と向うへ入る。後シヤギリ。

六幕目　決斷所の場

役名――山名宗全持豐。細川修理大夫勝元。當麻岡幸貫鬼。渡邊民部之助。山中鹿之助。井筒外記左衞門。侍ひ、運八。同、左仲太。仁木彈正左衞門直則。

本舞臺、三間の間、高足二重舞臺、本緣側附き、見付け大紗綾形の唐紙襖、丸に二つ引きの幕を張り、眞中に白洲梯子を掛け、すべて管領山名決斷所のかかり。幕の内より高舞臺に、持豐、剃立て、老けたろ拵らへ、上下衣裳にて、刀掛けに刀を掛け、書院火鉢を置き、直り居る。平舞臺に運八、左仲太、麻上

下、段立ちにて、扣へ居る。その外菖蒲革の侍ひ、東西に二人づゝ付き添ひ、時の太鼓にて幕明く。

左仲　只今のお大鼓は未の刻。最早御裁斷に間もございますまい。

運八　今日は式日に事替り、仁木渡邊の爭論に附き、管領の山名さまの當館にて裁斷。我れ〳〵は武將家よりのお附き人。

左仲　萬事油斷なきやうに申し合すでござらう。

持豐　オヽ、皆大儀。

ト兩人辭儀して

運八　持豐公へ申し上げまする。當麻、仁木、渡邊、山中の者ども、今朝より相詰め罷り居りまする。

左仲　勝元公にはお入りもござらねば、如何計らひませう。

持豐　イヤ、勝元どのには上使の御用に附き、この席へは見えられぬ筈。某一人にて相計らふ。ソレ、四人の者どもを、これへ呼び出せ。

兩人　畏まつてござりまする。

ト東西の花道の角へ來て

運八　當麻の岡幸鬼貫、仁木彈正左衞門直則。

左仲　渡邊民部之助早友、山中鹿之助政勝。

兩人　罷り出ませい。

ト東西の揚げ幕にて

四人　畏まつてござりまする。

ト時の太鼓になり、東の揚げ幕より鬼貫、彈正左衞門熨斗目、麻上下。向う揚げ幕より民部之助、鹿之助、熨斗目、麻上下にて、出て來て、本舞臺にて平伏する

運八　當麻の鬼貫、仁木彈正。

左仲　渡邊民部、山中鹿之助。

兩人　双方相詰め召されたか。

四人　ハツ。

兩人　大法なれば兩腰を渡し召されい。

四人　ハツ。

ト大小を渡す。兩人取つて片附ける。

持豐　いづれも寄つて承れ。天下の政事は法を以て人を糺し、道を以て人を教ふ。さるが中にもこの度の訴へ、安からぬ大事、心措きなく願ひの趣き申し上げい。

民部　ハツ。

ト鹿之助、思ひ入れあつて

鹿之　民部之助どの。

ト民部之助の袖を引き、勝元が居らぬと思ひ入れ。

民部　ムウ、恐れながら勝元公には。
運八　今日御上使の御用にて未だ延引。
民部　左樣ならば。
ト兩人、當惑の思ひ入れ。
持豐　某一人にて相計らふ上は、早く申し上げい。
民部　ハッ。
ト思ひ入れあつて、民部之助、懷中より願書を出し恐れながら、委細とくと認めし願書、御覽下されませうト持豐が前へ差出し、下がる。
持豐　ソレ、讀み上げい。
ト運八、訴狀を取つて開き
運八　「恐れながら願ひ上げ奉り候ふ。渡邊民部之助、山中鹿之助。一つ、賴兼どの直ぐなる心を惡道へ導き、美女を進め、身持ち隋弱に致せし事。一つ、義政公國阿上人へ寄附なりし伽羅の下駄、廓通ひに召させし事。一つ、兼若君毒殺の事。右の條々御詮議の上、偏へに家納まり候ふやう願ひ上げ奉り候ふ。」
ト願書を緣側へ置き、後へ下がる。
持豐　渡邊民部、この訴狀の通り相違ないか。
民部　ハッ、偏へに御裁斷願ひ奉りまする。

持豐　當麻の圖幸、あの通りか。
鬼貫　ハッ、この鬼貫一向夢にも存じませぬ。執權の儀でござれば、委細の儀は仁木彈正左衞門にお聞き遊ばされませう。
彈正　畏れながら只今の箇條、一つとして存じませぬ儀でござりまする。
持豐　默れ彈正左衞門。主人を毒殺など申す事を、同じ執權の民部之助、迂濶に出訴すべきや。ソレ渡邊、證據あらば差出せ。潔白に吟味遂げん。早く〳〵。
民部　ハ、ア。
ト思ひ入れ。
彈正　恐れながら山名さまへ、御念ではござりますが、賴兼公を東求堂へ移されし後は、義政公のお指圖にて、鬼貫どのは足利家の後見、拙者儀は執權職仕れども、毒害の企みなどとは思ひも寄らぬ儀。
民部　イヤ、彈正左衞門、民部が再度お訴へ申せし三ヶ條の企み、兼若君を毒殺の儀。伽羅の下駄の儀。殊に賴兼公の昵近として淫酒を勸め奉り、島原の傾城高尾を、なぜ請け出して差上げしぞ。この申し譯はなんと。
彈正　賴兼公淫酒の二つに溺れ給ふゆゑ、諫めを入るゝは

執權の役。度々御意見申し上げても、お側には絹川谷藏などと云ふ、田夫野人の曲者あつて、彈正左衞門が申す事、なか／＼お聞入れはないわい。殊に伽羅の下駄の儀廓通ひに召さるゝ事、拙者草履は取りませず、存じませうやうはござりませぬ。

鹿之　イヽヤ、さにあらず、それのみならず、御座の間近う鳶の嘉藤太と云ふえせ者を語らひ、忍び込ませし企みの事。よもや覺えのなきとは云はれまいがや。

彈正　サア、それは。

鹿之　殊に御殿に於て毒殺の儀につき、こなたの姉八汐、惡事露顯に依つて、政岡どのゝ手にかゝり、相果てられたではござらぬか。

彈正　尤も兄弟の事でござれば、同心と思はれうが、姉は姉にて毒殺の惡事ゆゑ、政岡どのゝ手にかゝり、相果てたはその科。この直則は忠義第一、女儀の企みに一味なさうや。馬鹿な事を。

民部　ヤア、知らぬとは云はれますまい。その證據、鹿之助申し上げい。

鹿之　ハツ。

ト以前の密書を出し

「兼ねて相願ひ申し候ふ通り、先達て密かに窺ひし毒藥の祕書、大場道益を以て、藥種買ひ調へ、密計肝要に候ふ、鹽澤丹三どのへ仁木彈正」……この密書、お吟味下されい。

ト民部之助、密書を取つて、持豐が前へ差出す。持豐取つて

持豐　ムヽ。彈正左衞門、相違ないか。

ト彈正左衞門、思ひ入れあつて

彈正　ハテ淺墓な。これ程の事を謀つて致す者が、ありありと姓名を記す馬鹿者があらうか。そりや似せ筆だ。

民部　イヽヤ、僞筆にあらず、證據はコレ。

ト懷中より一通を出し

この一通、御覽下されませう。

ト差出す。持豐、取つて

持豐　ナニ／＼「御紙面下され忝なく拜見いたし候ふ、この間陸奥の名產金海鼠一籠、貴意にかけられ、忝なく存じ候ふ。猶貴面の節萬々お禮申し述ぶべく候ふ。月日、渡邊民部之助どのへ、仁木彈正左衞門。」

ト持豐、思ひ入れ。彈正、驚ろき、鬼貫と顏見合せ思ひ入れ。

民部　そりや拙者が國詰めの節、京都へ送りましたる産物の禮狀、一通り彈正が自筆にござりまするや。憚りながらお尋ね下されませう。
持豊　彈正、こりや其方が手蹟か。
彈正　如何にも拙者、民部之助へ禮狀。
民部　いづれ違ひはあるまいが。
　ト鬼貫、思ひ入れあつて
鬼貫　イヽヤそれでは。
　ト持豊、彈正、こなし。
持豊　すりや、この禮狀と密書と同筆。ドレ。
　ト引合はせて見ろ。思ひ入れにて、密書を火鉢にくべろ。民部之助、鹿之助、驚ろき
民部　ヤヽヽ、大切なるその密書を。
持豊　何がどうした。
鹿之　山名さまには火中あつて。
持豊　役にも立たぬこの禮狀、キリ／＼持つて立ち居らう
　ト打ちつけろ。
彈正　如何にもその禮狀は、彈正が手蹟に違ひない。
鬼貫　サア、詮議せぬか、二人の奴等。どうだ、ちつとさうもあるまい。

鹿之　すりや、證據になるべき今の密書を。
民部　火中あつて、エヽ。
　ト兩人立ち上がり、縁側へ取りつく。
運八　管領の御所だ。靜まらぬか／＼。
　ト制する。持豊、煙草をのみて
持豊　ハヽヽ。
　トせゝら笑ふ。
民鹿　チエヽ。
　ト無念の思ひ入れ、いろ／＼あり、この時向うより勝元、長上下、衣裳、小さ刀にて、侍ひに刀を持たせ、ツカ／＼と出て來て、花道にてこれを見てキッとなり
勝元　見れば訴訟の者ども、管領の目通り、決斷の場所にて無禮の振舞ひ。扣へい。
　トきつと叱りつけろ。
民部　ハヽヽツ。
　ト元の所へ坐り平伏する。持豊、恟りして
持豊　これは細川勝元どの。アノ貴殿には。
勝元　今日斯波の武衛參府に依つて、上使の御用、決斷の役目延引ならんと存ぜしが、殊なら早く相濟み、直さまこれへ參つてござる。

持豊　先づ〳〵これへ。

勝元　御先役の儀でござれば、上座は貴殿。

持豊　そりや如何やうとも。先づ〳〵これへ。

勝元　然らば。

ト太鼓、謠になり、勝元、本舞臺へ行く。侍ひ附き添ひ、刀を差出す。勝元、刀を取つて、二重舞臺へ上がり、下の方に住ふ。

持豊　今日は上使の御用、遲なはらんと存ぜしゆゑ、某一人裁斷いたさうと存じ居つたが。

勝元　イヤ〳〵、この決斷は兩管領の役目。例へ如何やうの儀あるとも、參らいでは相定め難し。して幼君の儀につき、當麻鬼貫、仁木彈正左衞門、渡邊民部之助、山中鹿之助、參つたか。

四人　ハツ。

持豊　只今だん〳〵と訴訟の小口承つたが、彈正が詞、毛頭僞はらざる武士の一徹。皆民部めが拵らへ事と見えまする。

勝元　ムウ。

ト思ひ入れ。

民部　恐れながら勝元公へ申し上げまする。只今も只今とて、鶴若君を毒殺なさんとしたるその證據と、彈正より身が方へ參つたる禮狀の手蹟同筆の由。

鹿之　その密書は、只今山名さまにに火中召されて。

鬼貫　コリヤ〳〵鹿之助、そりや何を云ふのだ。

持豊　勝元どの、あの通りの無禮者でござる。

勝元　すりや、彈正が自筆の禮狀は、それにあるか。

民部　これに所持いたしてござりまする。

ト右の禮狀を見せる。

勝元　彈正、自筆に相違ないか。

彈正　御念でござりまする……毒殺の密書なぞとは跡方もたい事。

勝元　ムウ。よい〳〵……未だ彈正左衞門が誠とも、民部之助が僞はりとも、眞僞が分らぬ爭ひ。

トそこにある訴狀を取つて見て

イカサマこの訴狀の通り……彈正左衞門、賴兼公を身持ち放埓と云ひ立て、東求堂へ押籠めしも、また鶴若君へ毒殺の企みも、其方なりと白狀に及ばぬか。

彈正　これは勝元公の仰せとも存じませぬ。毛頭覺えなき儀白狀いたす事はござりませぬ。

勝元　ヤア、未練な彈正、汝足利家の執權ならずや。例へ

ば東山どのゝ物好きの茶器を彈正預かり、盜賊の爲に奪ひ取られても、その品紛失の儀は彈正存ぜぬと申して、云ひ譯が立たうか。この度の騷動は、正しく彈正が爲す業。白状いたせ。

彈正　サア、それは。

勝元　なんと。

民部　それのみならず、修驗者を語らひ、妖術を以て鶴若君を調伏なすは、これとても汝が企み。

ト鬼貫、恟りして

鬼貫　コレ〳〵彈正左衛門、大分風波が。

ト云はうとする

彈正　ハテ、大事ござらぬ……ヤイ民部之助、この彈正に誤まりあつては天道が赦さぬ。調伏などとは何を以て

民部　その罪を遁がれんと、蘇秦張儀の辯を以て云ひくろむるとも、呪詛調伏の一事に依つて汝が罪科。

鹿之　サア、有やうに申すまいか。

ト兩人、キッと詰め寄る。鬼貫、持豊　いろ〳〵思ひ入れする。持豊、心得て

持豊　ヤイ〳〵、民部之助、最前よりの爭論、彈正左衛門を罪に落さんとすれども、何も慥かな證據がない。鶴若丸を調伏なす、語らひし修驗者、連れて參つたか。

民部　サア、その儀は。

持豊　イヤサ、慥かな證據の山伏を、連れて來たかと云ふ事よ。

民部　サア、それは。

持豊　それはで濟まうか。民部之助の僞はり者めが。させる證據もなき事を、訴へ出でたる不屆き者めが。

彈正　この場に於て調伏と云ふ

鬼貫　證據があるか。

民部　サアそれは。

彈正　サア〳〵〳〵。

皆々　サア〳〵〳〵。

持豊　返答はドゞどうだ。

民部　ホイ。

ト當惑する。向う揚げ幕にて

外記　恐れながら管領の御兩所へ、非筒外記左衛門がお願ひ。

持勝　ヤ、なんと。

ト皷の合ひ方になり、向うより外記左衛門、熨斗目、麻上下にて、以前の白木の箱を抱へ出て來て、花道に

平伏する。

持豊　ヤア、外記左衛門の白痴者めが。最早評定極まりしに、今となつて罷り出で、わりや裁許を破るか。

勝元　イヤ、左様でござらぬ。民部之助證據なきゆゑ、當惑の體は相見ゆれど、未だ黒白分らぬ爭論。外記左衛門が願ひ、其まゝに濟ませては、天下の政事が立ちませぬ。早これへ。

外記　ハツ。

ト本舞臺へ來て

帶劍叶はざる管領のお席。イザ、大小それへ差置かれ下されませう。

ト左仲太へ大小を渡す。

勝元　民部之助が實父、非常外記左衛門、我れへの願ひとは何事。その首尾により、聞き屆けて遣はさう。

外記　恐れながら今日の御裁斷、呪詛調伏毒殺の一事に極る。その證據の御詮議にも持豊公のお叱り、他家へ養子に遣はしましたれど、實の悴民部が當惑、第一はお家のお爲、鶴若君を調伏なしたは仁木彈正左衛門と申す慥かな證據、持參いたしてござりまする。

民部　すりや、なんと仰せらるゝ。若君調伏の證據の品を

外記　如何にも。

民部　エヽ、忝ない。

ト外記左衛門、思ひ入れあつて

外記　イヤナニ、彈正左衛門どの、これ覺えがござるか。

ト懐中より以前の小柄を出し見せる。彈正左衛門、見て

彈正　ムウ、山鳥に躑躅の高彫り、その小柄、聊か以て存ぜぬ。それは格別、管領職の御前、帶刀いましむる所へ、持參なしたるその小柄、上を恐れぬ無禮者めが。

トきつと云ふ。

外記　イヤ、恍けまい。これこそ悴女之助へ、汝が妹を婚禮の節。引出物に持參せし、刀の拵へは山鳥に躑躅の高彫り、この小柄と模様も同作。藥法の秘書紛失の節盗賊が打ちかけし手裏劍、合はせて見ればしつくりと、刀に添へし短册の、歌の謎を解いて見れば、妹と悴が縁を結び、邪に荷擔せよと云ふ心の古歌。すりや、若君を毒殺の企みも汝、この云ひ譯はなんと／＼。

彈正　ムヽ、ハヽヽ。その刀は當正月中旬、しかも二十八日鹽澤丹三郎親重代の刀なれど、母親の長病にて難儀いたすゆゑ、求めくれよと頼みに、是非なく買ひ調へ、妹

が婚禮の聟引出に遣はしたるが、察するところ彼の鹽澤が、毒藥の秘書を盗み取り、兼若君へ毒を盛つたに相違ない。それに何ぞやこの彈正を、罪に取つて落さんとは、痴けた事を。

外記　すりや、覺えないとか。

民部　それにつけても最前の、符合なしたるあの密書。

鹿之　火中召されし山名さま。

持豊　ヤイ〳〵、そりや何を云ふのだ。扣へぬか。

ト きつと叱りつける。

外記　然らばそれにも致さうが、呪詛調伏の證據の一品。

ト 白木の箱を差出す。

彈正　ナニ、その箱は。

外記　身が屋敷の庭なる小萩の返り咲き、合點のゆかぬと相尋ねしに、思ひがけなきこの箱こそ、察するところ若君のお館より、丑寅に當りし身が屋敷、調伏呪詛の人形に相違ないわい。

勝元　その箱これへ。

外記　ハツ。

ト 勝元の前へ直す。

勝元　白木を以て調へし、怪しの箱の表を見れば、願主仁木彈正左衞門直則敬白と記しあるからは、疑ふ所もなき調伏のこの箱。急いで内を改めい。

外記　ハツ。

ト 箱の蓋を明けて、内より釘の打つたる藁人形と白絹を出し

御覽下されませう。四寸四方の藁人形、四十四本の釘を貫き、白きあこめの絹を添へたるは、紛ふ所もなき兼若君を呪咀調伏。

民鹿　さてこそなア。

勝元　サア、彈正左衞門、かゝる證據の出る上は、最早陳ずる所もあるまい。速かに刑罪を相待て。

持豊　ヤア、扣へ召されい勝元どの。その藁人形が調伏の證據にもせよ、彈正が自身罪に落ちぬうちは、證據とは云はれぬ。サア、彈正、あの品に覺えがあるか。

ト 彈正左衞門、思ひ入れあつて

彈正　如何にも直則、覺えがござりまする。

ト 鬼貫、驚ろき

鬼貫　コレ〳〵彈正、あの箱に覺えがあつてつまるものか。この鬼貫は知らない〳〵。

彈正　ハテサテ、身に覺えある事は、どこまでも包まぬ忠

義の臣下。その藁人形、人命を斷つ調伏の證據に違ひござらぬ。
民部　さてこそ鎌若君を調伏なすのか。
彈正　イヽヤ、この彈正を調伏なすのだ。
三人　ヤ、なんと。
彈正　賴兼公の身持ち放埒懦弱を諫め兼ね、我れと我が身を調伏の人形だ。
外記　して、このあこめの白絹は。
彈正　そりや修驗者の調伏の秘法、この彈正が知るものか
外記　イヽヤ、さうは云はせぬ。惣じて密書を認めるに、明礬を以て文字を書き、人に知られん事を秘すと雖も、水に浸せば顯はるゝと云ふ事、知るまいと思ふか。この願書の文字を顯はし見せう。鹿之助、その手水鉢の水。
鹿之　心得ました。
ト合ひ方になり、外記左衛門、白絹を引ツ張つて居る鹿之助、柄杓に水を汲み、持つて來て白絹へかける。
彈正　どうだ、外記左衛門、願書の文字は顯はれたか。
ト白絹に文字顯はれぬゆゑ。三人取つて見て改め
民部　モシ親人。
鹿之　一向文字が。

ト彈正、思ひ入れ。外記左衛門、思案して
外記　イヤ、氣遣ひない〳〵。まだ〳〵外記左衛門が思ひ當ることあり、居士のげんてうと云ふ者、ろかんほうしやの藥を以て、栴檀の板に浸け置き、死後に湯を注ぎしに、生涯のうちの遺言悉く顯はせし、漢家の昔の噺はしく、正にその藥ならん。コレ、民部之助、お臺子の湯を乞ひ受けて、これへ。
民部　畏まりました。何卒お臺子の湯、願ひ奉る。
持豊　願ひに任せ、ソレ、侍ひ衆。
左仲　ハツ。
ト下座へ入り、臺子の釜と柄杓を添へて、持つて出て來る。民部之助、鹿之助、この白絹へ湯をかける。三人引ツ張り見て、文字の出ぬゆゑ驚ろき、思ひ入れあつて、顏見合せ
民部　親人。
鹿之　外記左衛門どの。
外記　水に浸し
鹿之　湯を注いでも
外記　一字一點
三人　見えぬと云ふは。ホイ。

ト當惑の思ひ入れ。
外記　さて企んだり拵らへたり。正しく調伏の願書とは知りながら、この場の證據にならざるは、我れ〳〵が武運の盡き。
民部　弓矢の神も見放し給ふか。
三人　エヽ、殘念やなア。
持豊　どうだ、外記左衛門、遂に文字が顯はれたか。
外記　サア、斯くまで試し見たれども、文字は元より調伏の、證據となるべき印とても。
持豊　ないと云つて濟まうと思ふか。大切なる裁斷の場所へ、役にも立たぬ物を持つて、時刻を移すのみならず、管領の我れ〳〵を、白痴にする不届きめが。
外記　お憤り、恐れ入り奉るでござりまする。
ト平伏する。
彈正　ハテサテ、氣の毒千萬な。
ト勝元、思ひ入れ、キッとなつて
勝元　ヤイ外記左衛門、コリヤ、如何いたした事ぢや。民部之助浮沈の場所に至り、かゝる災ひを仕出でし事、粗忽とや云はん、不調法とや云はん。其方が越度ゆゑ、持豊どのゝ怒り強く、民部が願ひも水の泡。事を企まんとする者は密計を施し、人を惑はすと云ふ所へ心が附かぬうつけ者めが。それのみならず召さゞるに、管領の我れ我れを憚らず、推參したる緩怠至極。其方が越度は、皆兼若君の越度となるぢや。老年と申し、その職にあらざる辨まへなき、タ、白痴者めが。
ト外記左衛門、思ひ入れあつて
外記　ハツ、勝元公の凛々たる嚴命に、恐れ入つてござりまする。誠申し上ぐべき詞とてもござりませぬ。若君調伏の證據にもなるべき品、持參いたすとても、逆臣の謀計深く、それとは分明ならざるに依つて、某が越度ゆゑ、持豊公の怒り強く、却つて民部之助が妨げとござれば、取る所もなき不忠の某。申し譯には切腹いたして
ト刀を拔かうとする。民部之助、驚ろき留め
民部　コリヤ、外記左衛門どの、何事でござる。
外記　兩管領への申し譯に。
民部　死は一旦にして遂げ易し。この場に於て申し譯に、御生害なさらずとも、又お怒りを宥むる料簡もござりませう。
鹿之　もしや後日に、その證據出でたる時は後の殘念。マアマア、お待ちなされい。

外記　ヤア、未練なる留め立て。民部之助は實子なれども他家へ養子となれば、渡邊の家が大切。某とても先祖の瑕瑾。家の疵にならぬやう、腹かッさばいて申し譯。留め立てなすと不忠になるぞや。

民部　でも。

　ト思ひ入れ。

鹿之　某は格別、民部之助どの、目前實父の生害を。

外記　未練な事を。

　ト外記左衞門、左仲太の側の大小を取る。左仲太、やろまいとする。眞中へ出て、肩衣を跳ね、身繕ろひして刀を拔き、白絹にて卷き、腹へ突ッ込む。民部之助キッと思ひ入れあつて

民部　はや親人には。

外記　親とは何ぢや。他家相續なれば他人でないか。

鹿之　外記左衞門どの、仰せ尤も、さりながら、武士の胤と同じ人間。現在親の切腹を、眼前實子の見る悲しさ、他人の我れまで、チエ、。

　ト思ひ入れ。

民部　鹿之助どの、未練でござるぞ……イヤ、推量して下されい。

　ト民部之助、食ひしばり思ひ入れ。

勝元　外記左衞門、天晴れの最期。埋れ木の花咲く事と賴政が、平等院にて詠ぜられしは、文武を兼ねたる勇士の譽れ。外記左衞門はそれに引きかへ、不忠に汚名を雪がんとて、よくも生害いたせしよなア。

外記　有り難き勝元公の仰せ。その御一言を冥途の土產、最早この世に用なき拙者。鹿之助どの、民部、さらば。

　ト刀を引き廻さうとする。勝元、これに心を附けて

勝元　待て、外記左衞門。その刀引き廻すな。ハテ心得ぬ汝が刀にせし白絹、血汐に染まると等しく、文字の形顯はせしは訝かしい。その絹これへ。

民部　ハツ。

　ト立ち寄つて、外記左衞門が刀に卷きし絹、血に染みたるを取つて來て、勝元へ差出す。勝元、改め見て

勝元　さてこそ我が推察に違はず、後漢の仲景が傳方に、荊州の塵蟲を水蛙の油に和し、文字認むるに白紙の如し人間の生血を以てこれに注げば、文字鮮かに映るが如し。さては彈正、この秘法を用ひしよな。

　ト彈正、ギヨッとする。持豐、鬼貫、三人顏見合せ、思ひ入れ。

これ見よ。文言とても兼若君を調伏の願書。即ち願主は
仁木彈正左衛門直則とあるからは、これに勝る證據やあ
らん。
ト投げて渡す。民部之助、手早く取つて
民部　ハツ、親人、お喜びなされい。未だ武運に盡きざる
か。エ、、忝ない。
外記　ヤ、、何と云ふ。我が生害をなせしゆゑ、調伏の
絹に注ぎし我が血汐にて、呪詛の願文顯はれしか。エ、、
忝ない。
民部　誠にこの手蹟こそ、彈正が自筆。
勝元　我れと申せし彈正が禮狀の手蹟。
外記　まだその上に、妹が引出に送りし、刀に附けたる
この短册の歌こそ、くらべこし振分け髪の肩すぎぬ。
ト以前の短册を出して渡す。
民部　君ならずして誰れかあぐべき。
鹿之　三色の自筆揃ひし上は
民部　この手鑑に、よもや返答あるまいが。
彈正　サアそれは。
皆々　サア／＼／＼。
民部　なんと。

彈正　エ、、口惜しや、仕込みに仕込みしその願書。外記
左衛門が血汐より、露顯なしたは、エ、、殘念やなア。
トきつと思ひ入れ。外記左衛門、刀を引き廻し、ガッ
クリと落入る。民部之助、ハッと泣き落す。鹿之助、
思ひ入れあつて、左仲太と共に死骸を片附ける。
鬼貫　サア、彈正左衛門、まだこの上に思案があるか。な
んと。
勝元　ヤア、動き召さるな鬼貫、彈正證據の書面出る上は、
最早遁がれぬ、一言の答へなきは皆汝が企み。人非人の
分として、卑怯未練に詞を飾り、調伏毒殺の罪を隱さん
とする不敵の獄卒。最早云ひ譯あるまい／＼。持豐どの
最前よりのお聞きの通り、罪明白に知れたれば、罪科に
仰せつけられ、尤もに存じまする。
持豐　イ、ヤ、まだ罪科には行はれぬ。
勝元　そりや又なぜに。
持豐　ハテ、一應も再應も拷問に及び、彼れが口から白狀
なきうちは
勝元　罪科には行はれませぬか。
持豐　如何にも。
勝元　斯くまで罪に服する彈正、拷問などゝ手延びに召さ

文政元年八月中村座上演繪番附

る丶は、持豐どの丶御胸中が、一物あつて訝かしい。左樣なされても、天下の法が立ちますか。

持豐　サア、そりやア。

勝元　なんとでござる。

持豐　エヽ、どう云へば斯う云ふと、家柄とは云ひながら若いに似合はぬ、よく極めさつしやる。さりながら彈正も譜代の武功、殊に義政公へ申し上げねば、刑罪の儀は計らはれぬ。彈正、また願ひの筋あらば、鬼貫と申し合はせて、合點か。

彈正　有り難う存じまする。

勝元　然らば持豐どのには、上聞に達せられまするか。

持豐　左樣いたさう。最早、某、退座せん。

勝元　この上は、勝元も同道いたさう。

ト勝元、立ち上がり、思ひ入れあつて

民部之助、斯やうな企み露顯の上は、足利のお家は、礎堅き汝が忠臣。忠義ゆゑとは云ひながら、外記左衞門がこの最期、親子の實を思ひやり、勝元感涙止め兼ねたわやい。

ト思ひ入れ。

民部　有り難う存じまする。

持豐　イザ、退座召されい。

勝元　鬼貫どのには、まだ聞き合はする事あれば、先づ奧へ。

鬼貫　ハツ。

持豐　勝元どの。

勝元　持豐どの。

持勝　イザ。

ト管絃になり、持豐、彈正左衞門へ思ひ入れ。勝元、民部之助へ思ひ入れあつて、奧へ入る。運八、左仲太皆々下座へ入る。あと合ひ方、民部之助、死骸の側へ行て、ヂツと思ひ入れあり、鹿之助、死骸を取繕ろひ下座へ入る。後に彈正左衞門、民部之助、殘り、思ひ入れあつて

彈正　民部之助どの、他家へ養子とは申しながら、御親子の忠臣に出ツくはしたは、邪非道の彈正左衞門、一言の詞もござらぬ。御親父の御最期、さぞ御愁傷でござらう

ト民部之助の前へ手を突き、思ひ入れ。民部之助、睨みつけて、取りあへず、あちら向く。

サア、御立腹と申さうか、御殘念と申さうか、至極御尤もだ〳〵。併しながら、兼若君を毒害せうと申したは、

拙者ばかりではござらぬ。これには外にまだ一味がござる。モシ、民部どの。

ト いろ〳〵云へど、民部之助、矢張り睨みつけて居る

イカサマ、人非人のやうに思はれる事なれば、御挨拶ないも御尤も。いま心を翻へす爲に、徒黨の連判を、こなたの手へ相渡しませう。

ト 懷より連判狀を出す。民部之助、思ひ入れあつて

民部　ムウ、その身を悔いて一味の連判狀を、差出す程のこなた。先づ何は兎もあれ、その連判狀披見せう。

ト 連判狀を披き見る。

彈正　如何にも、こりや伯父君鬼貫どの筆頭にて一味徒黨の連判、只今管領の御前で、白狀いたすはいと易けれど、伯父鬼貫公の道ならぬ事ゆゑ、理を非に曲げて爭ひ申した。

民部　惡人ながらも、鬼貫どのを庇ふとは、まだしもの心底、一つの取り得。

彈正　まだ〳〵この上に申したき儀。さま〲ござれば。

ト 懷より立文を出して

即ちこれに認め、御内見の上、勝元公へ執成し願ふ兼ねての覺悟。その上にて切腹願ふ彈正が心底。

民部　何かは知らねど密書とあれば、披見いたさう。

彈正　誠に武士の情。エ、忝ない。

ト 差出す。民部之助、立文を取りにかゝる。彈正、中に仕込みし短刀を拔いて

民部、覺悟。

ト 民部之助が肩先を切り下げる。

民部　騙し討とは卑怯千萬。

ト よろぼひ切りつける。これより鳴り物になり、兩人烈しき立廻りあつて、トゞ民部之助、彈正を引寄せて腹へ突ッ込み。

大惡人の仁木彈正、遁がれはあるまい。

彈正　エヽ、殘念やなア。持豐さま鬼貫どのと心を合はせ賴兼を馬鹿者に仕立て、九代武將兼若丸を押ツ殺し、義政を流し者にして、一天下を握らうと思ひしに、うぬ等親子が忠義に依つて見顯はされ、この場に於て命を落すか。エヽ、口惜しやなア。

ト 抉り刀を拔く。彈正、バツタリと落入る。直ぐに止めを刺し、民部之助、ガツクリとなる。鹿之助、一人出て來て

鹿之　こりや民部之助どのには。

民部　彈正が騙し討にて手は負うたれど、大惡無道の仁木彈正、まツこの通りに。

鹿之　オヽ、出來ました。コレ、疵は淺い。心を慥かに。

ト肩衣にて、民部之助の疵口をしつかりと括り、思ひ入れある。管絃になり、奥より勝元、銀の茶碗を袱紗に乘せ持つて出て來て

勝元　出かした民部之助。かゝる忠義の武士を持たれし兼若君は、果報人と云はん、また果報拙なしとや云はん。者の數にはあらねども、細川修理太夫勝元、汝が忠義を感じ、藥湯を得させん。苦痛を遁がれよ。

鹿之　ハツ／＼、有り難う存じまする。

ト介抱して

有り難き勝元公より、お藥湯を下し置かるゝ。

ト民部之助、やう／＼と心つきたる思ひ入れあつて

民部　管領職の勝元公より、自ら藥湯を賜はる事、冥加なき仕合せ。さりながら、血汐の穢れあれば、仰せつけられ、下し置かれませい。エヽ、有り難い／＼。

ト苦しきこなしにて、思ひ入れ。

勝元　苦しうない。サヽ、苦痛を遁がれい／＼。

民部　然らば頂戴仕らん。

トよろぼひながら、茶碗を取つて戴き飲み、始終鹿之助、介抱。民部之助、またウンと反り返る。鹿之助、

キツと抱いて

鹿之　コレ、民部之助どの、心を慥かに持たつしやれい。

民部　勝元公のお側近うは憚り。民部之助、最早お暇仕らう。

鹿之　でも、その深手では。

民部　ハテ、大事ない。例へ此まゝ相果てるとも、管領の御前に於ては、民部之助は相果てぬ。

勝元　併し、其まゝの歩行、心元ない。家來ども、勝元が乘り物。

民部　イヤ／＼、恐れあれば、此まゝ／＼。

ト思ひ入れあつて

今日は如何なる吉日ぞ。足利のお家、萬代不易の門出なれば、山中どの、鹿之助どの、めでたい。

鹿之　めでたい。

ト思ひ入れ。民部之助、ニツコリと笑ふ。

民部　めでたい。

トきつと思ひ入れにて

一張の弓の勢ひたり、東南西北の敵を容易く

ト扇を開き、よろぼひながら、舞を舞うて、バッタリとなる。鹿之助、思ひ入れ。勝元、これを見て、こなしあつて、扇子を開き、額へ當てる。この途端よろしく拍子

幕

七幕目

寶藏寺堤の場

役名──羽生村の金五郎。旅役者、佐渡島原八。衣裳屋、安右衛門。所化、祐海坊。庄屋、權兵衛百姓甚太郎。同、勘右衛門。同、角右衛門。判人面白屋文吉。岩淵運八。百姓娘、おそよ。同、おこの。笹野才藏。持氏息女、薗生の前。羽生村與右衛門實ハ絹川谷藏。同女房、累。

本舞臺、三間の間、正面、藁葺きの地藏堂、それより下の方へ建て足したる庵室。上の方に松の大樹。稻村、藪疊、石地藏の前には、權兵衛、庄屋の拵へ甚太郎、勘右衛門、百姓にて、三人とも後向きにて、双盤を打つて居る。堂の緣先に、祐海坊、鼠木綿、布子、所化の形にて机にかゝり、經木を並べ、勸化して居る。よき所に、寶藏寺地藏の建立と書いたる白木綿の小幟を立てあり、すべて、下總國鬼怒川のほとり、寶藏寺堤の體。双盤、念佛の聲にて、幕明く。

祐海　寶藏寺地藏堂建立、經木一枚の施主に付かつしやりませう。

トてんつゝになり、矢張り双盤の音。向うより、佐渡島原八、旅役者の拵へ、安右衛門、衣裳屋にて、狂言大小を二人前ほど腰に差し、女形と立役の鬘を二つ手に持ち、若い衆一人、衣裳葛籠を擔ぎ、後より、面白屋文吉、女衒にて出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。祐海、地藏堂建立と、ひさくを振る。皆々見て

原八　こなさんは、所化の祐海坊ぢやアないか。

祐海　さう云はつしやるは、祭芝居の師匠にござつた、佐渡島原八どのではござらぬか。

原八　左樣でござります。今日の稽古は爰の地藏堂にあるから、行つて下さいと村の若い衆が云はるゝから、土浦の衣裳屋どのを同道して來ました。

文吉　わしらは江戸から龍ケ崎の町に來た、面白屋文吉と

云ふ者でござる。近年はなまになりさうな因果者もござらぬが、衣裳屋さん、なんと土浦あたりにはあるまいかの。

安右　されば、おいらの方にも江戸へ出したら錢にならうと云ふ、見せ物もごんせぬが、コレ、江戸のお客へいゝ物がござる。この羽生村に、累と云ふ女がござるが、此奴を江戸へ出したら、よい見せ物であらうて。

祐海　これはしたり、滅多な事を云はつしやるな。あの累には、與右衞門と云ふ亭主がござつて、殊に愚僧が寺の檀家でござる。そんな噂は御無用でござるよ。

原八　イカサマ、與右衞門どのゝ嚊衆を、見せ物に出すのなんのと、決してそんな事は云はないがようござる。時に庄屋さんも、若い衆も來てござるかの。

祐海　疾に見えて、師匠が來たら早く稽古をしたいと云つて、あの堂に双盤を打つて居られますよ……モシ〳〵庄屋さん、師匠どのが見えられたよ〳〵。

　トこれにて、權兵衞、甚太郎、勘右衞門、堂より、出て來て

權兵　これはお師匠。

三人　早うござりました。

原八　どなたもお待兼ねでござりませうが、只今土浦の衣裳屋どのが見えましたから、鬘衣裳の掛合ひをして、同道して來ましたて。

權兵　それはお世話でござつた。コレ〳〵、お前が衣裳屋どのか。この庄屋の權兵衞の出が、この春の祭狂言に、姫小松の龜王と、切の女形で梅川をしました。その積りで衣裳鬘を見立てゝ下さいまし。

甚太　コレナ、衣裳屋どのや。わしどもはお安と、切狂言は孫右衞門と、二役受取りましたで、お祭のこんだから新に村の孫右衞門の役も、派手やかに錦の羽織でも着ようと思ひますて。

勘右　この勘右衞門なぞも、ちつくり大役だ。ア、モシ、俊寛僧都どのと、切狂言が飛脚屋の忠兵衞の役を、組頭からの割付けだア。こんな役は、お江戸の千兩役者でも出來やアすめえて。

甚太　サア、貴公達ばかり大役を引請け召されたから、村中の若い衆が、氣惡になり申して、あつちこつちで諍ひのう出來申して、すんでの事にお代官樣へ訴へに及ぶところよ。

權兵　さればサ、甚太の云はるゝ通りサ。俊寛の役割に

付き申して、七ヶ村の騷動に及び申すところを、高桃村の若い衆が、やう〳〵の挨拶で、上の辻子の手合ひに會我狂言の一幕物を差付けて、それでマア事濟んだのサ。

文吉　成る程、村方のお祭芝居にやア、その位の諍ひも出來やせう。わしらも今度、江戸から來て居ますが、相應な役があらば、なんでもしやせう。

原八　そりやア幸ひだ。お前、豐後の三味線はどうだえ。

文吉　アイ、少しは間に合せるね。

原八　そいつは奇妙だ。稽古のうちは淨瑠璃は、甚太郎さんに語つてもらふ。時に一切り物の曾我の對面は、せりふは覺えなさつたかえ。

權兵　大抵には浮みました。

原八　一遍やつて見なさい……ドレ、稽古莚を敷かう。

ト舞臺へ莚を敷く。皆々、これに乘り

權兵　併し、新田の手合ひが來ねえが、拔いてやりますべい。甚太の工藤だつけな。わしどもは朝比奈の三郎だ……コレ、御所化、足拍子を賴みます。

祐海　合點だ〳〵。ソリヤ、カタリ〳〵〳〵。

トつけを打つ。權兵衞、甚太郎、勘右衞門、不器用なる振りにて

權兵　ソレ、小林の朝比奈だもさ。コレ〳〵、工藤どの、當年は貴公樣の作は、どうでござるかな。

甚太　これは朝比奈の三郎どのか。モシ、當春の雪が利き申して、麥作は十分に見え申すて。

勘右　虫送りの世話も見えず、陸穗も取れ申さうと、小藤太も腹鼓を打ち申すて。

文吉　飛んだ狸芝居だ。

安右　モシ〳〵、鬘が合ひますか。掛けて御覽じませ。

ト女形の鬘を出す。

權兵　成る程、梅川には、これをかぶつて、よく見え申さうかな。

文吉　忠兵衞は隨分厚鬢がよいて。

ト權兵衞は女形、勘右衞門はびん鬘をかける。

原八　御所化樣、鳴り物を出して下さりませ。

祐海　合點だ〳〵。

ト堂の內より、太鼓、三味線を持つて來て

ソリヤ、預かつた三味線、これが双盤の太鼓、サア、出語りの稽古が見たいの。

安右　サア、鏡はこれにござります。忠兵衞には脇差が要りませぬ。

ト鏡を二面出す。兩人、鬘額を見て、勘右衞門、一腰を差し、文吉、三味線を取り

文吉　梅川の道行ならば、ちつとは覺えて居た。コレ、お前も助けてくんなさい。

甚太　覺えただけ語りませう。

權兵　コレ〳〵、師匠、祭狂言だから、淨瑠璃の句ぎり句ぎりへ、太鼓を入れて下さい。

原八　心得ました。サア〳〵、道行を一遍立つて見なさい。お所化さん、鉦や太鼓は。

袮海　おれが廻るワ。ソリヤ、グワン〳〵〳〵。

ト銅鑼を思ひ入れ早めて打つ。權兵衞、駈けて出て轉ぶ。勘右衞門、これも駈けて出て、權兵衞を見て

勘右　梅川か。

權兵　忠兵衞さん。

勘右　コリヤ。

ト袮海、知らせを打つ。

文吉　落人の爲かや今は冬枯れて。

ト此うち、袮海、大太鼓を打ち込む。

薄尾花はなけれども、世を忍ぶ身は後や先、人目を包む頰冠り、やつせど色香梅川が、凍ゆる手先懷へ、溫められつ溫めつ、石原道を足曳の、大和路指して行く旅の

ト好き文句のあたりまで、原八、立つて教へる。權兵衞、勘右衞門、それに習つて振り、句ぎり〳〵へ袮海大太鼓を打ち込む事あつて、よき時分、時の太鼓になり、向うより、岩淵運八、ぶツ裂き羽織、大小、股引後より、百姓金五郎、百日鬘、牢拂ひの體にて縛められ、百姓角右衞門、人足の形にて、この繩を扣へ、捕り手四人付き、出て來り。本舞臺へ來り

角右　お役人樣のお出でだ。扣へさつしやい〳〵。

捕手　百姓ども、下に居らぬか〳〵〳〵。

トこれにて、皆々うろたへ蹲まる。運八、上へ通り

運八　其方どもは、當村の百姓どもか。

皆々　左樣でござりまする。

運八　然らば申し渡す仔細あり、これなる金五郎事、去年十月、弘經寺の十夜に、他村の者と口論の上、疵を付けたる科に依つて、相手の者本腹まで、牢屋へ押籠め置きしところ、この度主人山名さまより、御用仰せつけられ金五郎が科、今日御容赦下さるゝ。家來ども、縛めを解け。

捕手　ハア、

ト金五郎が繩を解く。

權兵　これは〳〵、有り難いお役人樣の仰せ。即ち私しは當村の庄屋でござりまする。組下の金五郎、御免下されまするとは、ハイ〳〵

皆々　エヽ、有り難うござりまする。

運八　尤も命を助けるは、この者に一大事の御用。コリヤヤイ、金五郎、これへ參れ。

金五　へイ〳〵、これはハヤ、何御用かは存じませぬが、命に替へる寶はござりませぬ。して、私しへの御用の筋はな。

運八　イヤ、別儀でない。この度、足利頼兼の家騷動に付き、暫らくが間頼兼事、東求堂へ押籠めの身。然るに持氏の息女蘭生の前、頼兼と婚姻調ひ、懐胎の由、館の成行き氣遣はしく、蘭生の前には、二つ引龍の御旗を所持なし、この程逐電。正しくこの下總へ逃げ下りしとの訴へ。今にも當村へ來りなば、生捕つて渡すとも、まつた騙し寄つて、コリヤ、このおろし藥を喰はすとも、左の子は男子ならん、足利の血筋絶やさん爲の、山名さまの計らひ。その役目は金五郎、油斷なく仕れ。即ち用意の藥。ソリヤ。

ト藥の包みを金五郎に渡す。

金五　へイ、左樣なら蘭生の前とやら、腹に子のある女めが、二つ引龍の旗を所持なし、このあたりへ參り次第、縛つて出すとも、この藥を喰はすとも、金五郎めが命代りのその役目。きつと仕負ほせ差上げませう。お氣遣ひなされますな。

運八　出かした。仕負ふせれば拔群の御褒美。召捕り次第主人の領分、飯沼の陣屋へ訴へ參れ。斯く云ふは岩淵運八。キッと申し渡したぞ。

金五　畏まりました。

角右　隣村へお供いたしませうか。お役人樣、

運八　案内いたせ。家來參れ。

ト時の太鼓になり、運八、角右衞門、家來付いて下座へ入る。

權兵　ヤレ〳〵、金五郎、お主も命助かつて

皆々　こんなめでたい事はないわえ。

金五　イヤモウ、今度は大座の別れにならうと思つたら、相應な役にさゝれて、また命が助かつたよ。

原八　それ程めでたい事はないわな。シタガ、そのむさくろしい頭では、鬱陶しからうぞ。

祐海　コレ、金五郎どの、村方に祭狂言がある。月代でも剃つて、踊の世話でもするがよからう。
金五　ハア、、地芝居があるか。して、狂言はなんだ。
甚太　俊寛の島物語、曾我の對面、梅川忠兵衞、樣々な藝盡しよ。
金五　なんと、俊寛の役はあるまいかの。
勘右　ア、、らつちもない。俊寛の役は、この勘右衞門が受取つて置きましたよ。金五郎には團七の住吉場がよくござらう。
安右　モシ〳〵、お前方は衣裳付けの前に、なんと衣裳を見分けられぬかえ。
金五　ア、、こなさん、衣裳屋どのか。なんとわしにも、相應な布子の一つも貸して下さい。
安右　エ、、アノ、お前にかえ。
金五　コレ、膽を潰す事はない。ドレ、この葛籠か。
　ト手を差入れ、大縞の布子を取出し
衣裳屋さん、これを借りたよ。
安右　これは迷惑な。
文吉　コレ金五郎。わしはこなさんに用があつて來ましたが、噂を聞いて案じましたが、今日の赦免で落ちつきました。
金五　文吉どのか。こなさんにも用がある。わしが月代を剃るまで、待つて居て下さいよ。
文吉　心得ました。
甚太　久し振りだ。この店を借りて、髮月代をしてやらうか。
金五　お世話ながら頼みます。
角右　圍爐裏に湯が沸いて居ませうよ。
原八　サア、もう一遍稽古をやりやせうか。
金五　ドリヤ、久し振りでお香剃を受けようか。
　ト在郷唄になり、金五郎、布子を抱へ、甚太郎、勘右衞門、原八、安右衞門、捨ぜりふにて、庵室の勝手の方へ入る。祐海坊、文吉、權兵衞、長床几に殘り、矢張り、在郷唄にて、向うより、おこの、おそよ、田舍女にて、手拭をかむり、やつしの形。手覆、脚絆、草鞋にて、苅豆を脊負ひ、おそよは苅豆の上に浴衣を挾み出て來る。後より、累、龍田川の染めやつしにて、これも苅豆を脊負ひ出て來る。後より、薗生の前、裲襠、抱へ帶の形、菅笠をかざし、竹の杖を突き、笹野才藏、股引、半合羽、大小、旅體の形にて、菅笠を持

ち出て來り、花道にて
才藏　コレ〱、女中方、ちと物が尋ねたうござる。飯沼の弘經寺と申すは、この道を參るかな。
そよ　左樣でござりまする。あの羽生村と申す村を越しますると、もう程はござりませぬわいな。
この　おそよさん、こなさんは、爰らあたりの在所には見馴れぬ風俗。なんと立派な、女中さんぢやないかいな。
そよ　ソレイナア、大方上方から、筑波詣りと云ふやうな事であらうわいなア。コレ、累さん、皆さんは、美しいお方ではないかえ。
累　サイナア、わたしも先刻から見て居やんすが、どうでもあの女中さんは、お前の云はんす通り、京のお方と見えるわいなア。
この　イヤモウ、京の女郎衆であらうが儘、累さんの器量には、どうしてマア、叶ふ事ぢやないわいな。
累　何を譯もない、おこのさんとした事が、京で育つたわたしでも、今では在所の畑仕事。定めて色も黑うなり田舍じみたであらうわいな。
そよ　なんのいな。お前は村中一番ぢやわいな。ホヽヽ。
累　また嬲つてかいな。

蘭生　コレイナウ、今宵はマア、いづれへ一宿するのぢやぞいの。
才藏　見ましたところが、宿屋とても見えず、暫らくが間あれなる辻堂へ。
蘭生　サア、おぢやいなう。
トてんつゝになり、皆々、本舞臺へ來り、蘭生の前、才藏、下の方へ笠を敷き住ふ。女形三人、啣へ煙管にてよき所へ來る。
權兵　イヨ〱、品ものめら、ぢよなめいてうせたな〱
祐海　この三月は產土の祭があるに、見れば苅豆を脊負うて、出來秋を見るやうに、忙しさうに出かけたな。
そよ　オヽ、祐海坊か、聞いて下さんせ。爰のお地頭、山名さまとやらの御陣屋から、苅豆を拾八駄、今日中に持ち參れと、村中へお觸れ、そこで在所は大混雜。爺も婆も苅豆脊負うて、飯沼の陣屋へ納めに行くのぢやわいの
權兵　ハヽヽ、それでみんな脊負うてか。時に、あそこにござる女中も、ありやてまへ達の連れ衆か。
累　イヽエイナア。あの方は、都の衆と見えるわいな。
ト文吉、見て、
文吉　イヤア、飛んだ顏があるものだ。あれが先刻話しの

累とやらか。

累　ようわしが名を知つて居やさんすの。

文吉　知らないでわな。噂に聞いたよりは、おつりきな顔だもの。

累　エヽ、どうしたとた。

文吉　サア、あんまり美しいナ。ソレ、こんな器量が江戸にもあるまいと思つてよ。

累　コレ、あんまり嬲つて下さんすな。わたしも以前は都生れ、わしが口から云ふも、どうやらなものながら、ちつとは評判の娘ぢやと、噂にも乗つたわたし、今でこそ在所嗅。定めし顔形もしみたれたでござんせうわいな

文吉　ハテ、口は重寶なものだ。併し、おいらが商賣の因果者に、江戸へ出さば十年で百貫にならうか。

累　何が百になるとはえ。

文吉　サア、お前も江戸へ出て、吉原の奉公したら、百兩にならうと云ふ事サ。

累　なんのマア、わたしらがやうな者が。

文吉　エヽ、厚かましい。コレ、爰に衣裳屋の鏡がある。これを見て物を云ひ給へよ。

ト葛籠の上の鏡を何心なく取つて出す。累、驚ろき顏を隱す。おそよ、留めて

そよ　これはしたり、あの累さんは、鏡を見ぬ大願がござんす。それにマア、お前は滅相な事しなさんすなえ。

ト鏡をもぎ取り

コレ、累さん、鏡は此方へ取つた程に、もう爰へござんせいな。

ト云はれ、累、思ひ入れあつて

累　知らぬ事とて、惡い事しなさんすお方。わたしや兄さんの云ひ付けで、願の滿てるでまは、必らず妹は鏡を見る事は、無用にしてくれとの事。女子の不自由も兄の爲と、去年の春から二年越し、わたしや鏡を手にも觸れた事はござんせぬわいな。

文吉　成る程、その顔の……サ、その器量ぢやアナウ、姐え達。

ト皆々顔見合せ、思ひ入れある。

鏡を見ぬのは惜しいものだ。

權兵　それ〳〵、あのやうな美しい累がやうな顔もあるにアレ〳〵又、あそこに居る女中のやうな、大概な器量もある。あの女中なぞは江戸へやつたら

ト薗生の前の方へ指をさす。

文吉　あの女中かえ。あれなら物云はずに百両になるのサ。

才藏　コリヤ／＼、そこな男、百両になるとは、身がお連れの女中の事を申すか。

ト　きつと云ふ。文吉、モヂ／＼して

文吉　イエ／＼、あなたの事ではござりませぬ。アノ、アレアレ、アノ、累どのゝ事でござりまする。

累　エヽ、こなお人は、わしが顔さへ見れば、百両とやらになると、コレ、なんぼこなさんが其やうに餘所事に勸めさんしても、わたしや勤めする心はないぞえ。殊に與右衛門どのと云ふ、キツとした好い男を持つて居るわいな。エヽ、アタなめ過ぎた。

文吉　エヽ、亭主があるか。

そよ　コレ、懷胎ぢやわいな。

文吉　ハテ、物喰ひのいゝ奴もあるものだ。

ト　思ひ入れ。角右衛門、スタ／＼と出て來り

角右　サア／＼、みんな、行かないか／＼。

この　アイ／＼、そんなら行きませう。サア、累さんもござんせ。

累　連れ立ち申さうわいな。おそよさんもござんすか。

そよ　アイ、わたしや宿へ持つて來た單衣物、この流れで洗ひたうござんす。コレ、角右衛門どの、御大儀ながらこの苅豆を屆けて下さんせいな。

角右　オツと合點だ。屆けてやりませう。

ト　苅豆を脊負ふ。

權兵　ドリヤ、庄屋も付いて納めて來ようか。

累　そんなら、おそよさん、歸りに又連れ立ちませうわいな。

そよ　さうしやんせう。

この　サア、累さん。

文吉　ドリヤ、金五郎に逢つて行かうか。

ト　念佛太鼓の鳴り物になり、權兵衛、角右衛門、累、おこの、苅豆を脊負ひ、下座へ入る。文吉、庵の內へ入る。祐海坊、おそよ、薗生の前、才藏、殘る。

才藏　イヤナニ御出家、最前より物尋ねたうござつたが、あたりの人へ遠慮いたし、差扣へ罷り在つたが、この羽生領に、與右衛門と申す百姓がござるかな。

祐海　成る程、與右衛門と申しまする百姓は、今爰に居た累と云ふ者の、亭主でござりまする。

才藏　ハテ、それは存ぜぬ事とて。して、その與右衛門宅

までは、如何程ござるかな。
そよ　アノマア、僅か四五丁もござりませうわいな。
才藏　それは程近うて安堵いたした。お聞きなされましたか。最早道程も僅か。與右衞門と申すは、賴兼公に仕へ奉りし、谷藏と申す者。都に於ては山名左衞門が惡逆にて、足利のお血筋を絶たんと、御懷胎のあなたのお行くへ尋ぬる樣子。人知れぬこの國に立越し、暫らくが間與右衞門方に、お忍びなされませい。
園生　辛からば只一筋に辛からで、賴兼公にお別れ申し、常ならぬ身の自らが、お腹に宿せし君の御胤。一歳我が君御放埒の聞え高く、これ皆伯父御鬼貫どのゝ逆臣、仁木が企てにて、足利家の御一大事。笹野才藏、この上とても自らが身の上、よしなに賴むぞや。
才藏　お氣遣ひなされまするな。與右衞門が隱れ家を尋ね暫し彼の地にお忍ばせ申さん。二人の衆も我れ〳〵が身の上、他言は必らず。
祐海　ハテ、そこが譬へに云ふ通り、人を助ける出家の役
そよ　在所に育てど私しどもゝ、もしもの時は共々に、お力になりませう。ちつともお氣遣ひ遊ばされぬがようござりまする。
才藏　ハテ、賴もしい志し。過分に存ずる。
ト思ひ入れ。よき時分後より、運八、家來を連れ、角右衞門付き、窺ひ居て
運八　ソリヤ。
家來　動くな。
ト取卷く。才藏、園生の前を後に圍ひ、キツとなつて
才藏　こりやお侍ひ、足弱を同道せし、旅人に向つて、何ゆゑの狼藉。樣子に依つてお身達が、爲になるまい。返答ぶちやれ。サ、なんと。
運八　ヤア、吐かしたり、知るまいと思ふか。足利家の侍ひ笹野才藏、その足弱は園生の前。この下總へ逃げ下り知るべを求むる二人の奴等。追ッかけ來りし某は、山名が一族岩淵運八。
角右　付け廻したるこの道筋。遁がれぬところだ、腕
皆々　廻せ、エ、。
才藏　さてこそ山名が一族よな。御油斷あるな、園生さま
園生　必らずともに怪我せぬやうに。
そよ　あなたの加勢を、祐海さん。
祐海　合點だ〳〵。足弱連れのこのお二人、愚僧がなくばいざ知らず、坊主が家の天秤棒、坊さん山道畑道、畦道

谷道樺田原、たら〳〵落ちるはお乳の人、事も愚かやづくにふが、手並の程を知りつらん。

ト六尺棒を構へ、鉢巻して立ち上がる。

運八　面倒な。芋掘り坊主をぶッちめろ。

捕手　合點だ。やらぬワ。

祐海　化けもの見せんと云ふまゝに。

ト禪のツトメになり、群がる大勢を棒にて、毆り廻る。運八、角右衛門、家來、向うへ逃げる。祐海坊、棒を振つて追ひかけ入る。

そよ　モシ〳〵、こりや在所に目馴れぬあなた樣の、お姿を替へさせませい。幸ひのわたしが單衣、穢らとこれを召替へませ。

才藏　イカサマ、今の奴等が參らぬうちに、ちつとも早く

ト古き單衣物を、薗生の前が衣裳の上から引張り、扱帯を締め、頭へ手拭を卷き

そよ　サア〳〵、斯う云ふ姿におやつしなされ、ちつとの間、あの辻堂の内へ、お忍びなされといな。

薗生　そんなら、暫らくこのお堂で。

才藏　今の奴等を出しぬく間

そよ　お忍びなされいな。

ト薗生の前、才藏、堂の内へ入る。てんつゝになり、向うより、與右衛門、脚絆、草鞋、咥へ煙管にて、苅豆を脊負ひ、腰へ鎌を差して、出て來る。本舞臺にはおそよ、下座よりおこの、庵の内より原八、安右衛門若い衆、付いて出て來り、おそよ、皆々落ち合ふ。

これは與右衛門さん、お前さんも出てござんしたかえ。

與右　オヽ、こりやア村の姐え達か。おらが嚊アの累と一緒に、來たぢやアなかつたか。

この　サイナア、累さんは飯沼の御陣屋に、お前のござんすを待つて居やしやんすわいなア。

與右　エヽ、大きな白痴者だぞ。日の暮れぬうち其方衆と歸らうとは思はないで、なんのマア、おれを待たずともの事だ。

そよ　ハテ、そこが色で添はんしたところぢやわいな。

與右　ハテ、よい機嫌な手合ひだ。

原八　コレ〳〵、與右衛門さん、明日の稽古はお前の所へ引けまするると、若い衆が云うて居られました。おやかましうござりませう。

與右　こりやア祭芝居の師匠どのか。この度はハヤ、御苦勞でござります。して、大概踊が出來まするかな。

原八 イヤモウ、どなたも精が出まするて。
安右 時に與右衛門さんえ。私しはこの度の衣裳屋、土浦の取手屋安右衛門でござりますが、何かとお世話樣でござりませう。
與右 ア、、お前が衣裳屋どのかえ。隨分鬘や大小も、綺麗なのを貸しなさいよ。
安右 イエモウ、今度は衣裳開きでござりまする。
原八 時に與右衛門さんえ。わたしはこの間、潮來まで行きやしたら、蓬來屋の內から、お前に屆けてくれろと、菊野と云ふ女郎が、文をことづてましたが、與右衛門さん、お前も萬更でもござりませぬよ。
ト封じたる文を渡す。與右衛門、取つて
與右 アノ、こりや何よ。この春、三社廻りに行つて、隣り村の手合ひと、潮來の蓬來屋に一晩泊つたが、その時揚げた女郎であらう。いらない錢がありやアせまいし、潮來三界へ二度と行くものか。
ト二口の煙草入れへ、文を見物に見せて入れ。
原八 イヨ〱、さまします〱。
そよ その文の事を、累さんに云はうかいな。
この それがよからうわいなア。

與右 ア、、コレ〱、埒もない、必らず沙汰なし〱
そよ ソレ見なんせいな。
原八 そんならわしは、庄屋どの丶所へ歸りやせう。委細は明日與右衛門さんの所で相談しやせう。サア、衣裳屋さん、行きませうか。
安右 左樣いたしませう。
そよ 與右衛門さんは、累さんと二人連れ。
この 後から來なんせえ。
原八 與右衛門さん。
與右 明日、逢ひませう。
ト葛西念佛になり、おそよ、おこの、原八、安右衛門若い衆、葛籠を脊負ひ、鬘、大小を持つて、向うへ入る。與右衛門、殘る。
今來る道の噂には、賴兼公と御祝言調ひし、持氏公の息女蘭生の前さま、我が君のお胤を御懷胎遊ばされ、この下總へ知るべを慕ひ、お入りありしとの事。以前は御家來の谷藏、正しく我れをお尋ねあつて、お出でありしに極まつた。お隱まひ申さんにも、女房累は高尾が死靈に面體替り、その上又も姉が障化に、心も荒く折々の物の怪。賴兼公のお情受けし、お方と云はゞ、この世を去り

文政元年八月中村座上演絵番附

し高尾が一念、御身の仇とならんも知れず。いつぞや都にて預かりし、片しの下駄、留守なき茅屋へ殘し置くも心遣ひと、畑仕事に出る度も、寸の間放さぬ。

ト苅豆の内より袱紗に包みし下駄の片しを出し

兄三郎兵衞に渡し置きしは、名木の木履一足、揃うてお渡し申すそれまでは、滅多に手放して置かれぬわい。

ト思ひ入れ。人音するゆゑ、元の苅豆の中へ隱す。暮れ六ツの鐘になり、下座より、權兵衞、出て來り

權兵　ア、そこに居るは、與右衞門ぢやないか。

與右　さう仰しやるは庄屋どのかえ。

權兵　コレ／＼與右衞門、女房の累が、貴樣の來るを待つて居るわいの。サア、モウ日も暮れた。早う行つて連れて歸らうとはせいで、何をして居るぢやぞいの。

與右　イヤモウ、先刻に連れのあるうちには歸らいで、わしを待つて居りまするなら、この苅豆を納めて、ちよつと連れて歸りませう。庄屋どの、お靜かにござりませ。

權兵　サ、早う行つてやりやいの／＼。

ト矢張り暮れ六ツの鐘にて、與右衞門、下座へ入る。庵の内より、甚太郎、勘右衞門、文吉、出て來り

三人　庄屋どの。

權兵　三人の手合ひ、彼のお尋ね者が

文吉　この地藏堂に踞んで居るが、山名さまからお觸れのある

甚太　賴兼が御臺の薗生の前、縛つて出せば慥かに御褒美

勘右　その先陣はおれがする。後詰めを必らず賴んだぞ。

權兵　逃がさぬやうに合點か。

勘右　合點だ。慥かに爰に。

ト堂の内へ入らうとする。内より手を捻ぢ上げる。

アイタ、、、。

三人　どうした／＼。

勘右　女に似合ぬ、おれが腕を。

ト思ひ入れあつて、見事に投げらるゝ。皆々駈け寄り

三人　どうした／＼。

勘右　つんてんころりと投げ出したワ。

金五　わしでごんすよ。

皆々　ヤ。

金五　羽生村の金五郎でごんす。

ト合ひ方、時の鐘になり、堂の内より、金五郎、以前の布子を着替へ、啣へ煙管にて出る。皆々、見て

權兵　ヤ、わりや金五郎、庄屋が指圖のこの勘右衞門を

皆々　なぜ投げた〳〵。
金五　ハテ、おてまへ達も世話にして、赦免のわしをこの庵で、年を越したる髪鬚を、香剃りならぬ月代も、さつぱり今から根性を、洗ひ上げたる膽玉を、地藏の前で身の懺悔。そこへ矢庭に踏ん込むゆゑ、投げ出したが、なんとした。殊に二人は岩船の、地藏詣りの同者衆、わしが腰押しだ。若い衆、マア、さう思つてもらひませう。
權兵　此奴が〳〵。昨日今日まで、庄屋に苦勞をかけた金五郎。獄屋を出ると其やうに
甚太　わりやア眞面目に
皆々　なつたな〳〵。
金五　サア〳〵、おらア今日から眞面目になつた。惡者却つて實事師。コレ、おらア今から弱い者の贔屓をする、實事師だ〳〵。
　ト目顏にて知らせる思ひ入れ、皆々呑み込み
文吉　合點だ〳〵。呑み込んだとは云ふものゝ
勘右　慥かに二人はお尋ね者。
甚太　山名さまの御陣屋へ
權兵　そびいて行くべい。金五郎、退きやれ。
　トつか〳〵と行くを、金五郎、これを留めて

金五　これサ、庄屋どの、久し振りで赦免になつたこの金五郎、ちつとはわしが云ふ事も聞いて下され。殊にあの堂の内にござるはお侍ひ。ひよつと間違うた時は、こなさん云ひ譯がごんすか。
權兵　サ、それは。
金五　それはとは、村の束ねをする者が、そんな輕はずみな事で濟むものか。
甚太　成る程、こりや金五郎が云ふのが尤もだ。庄屋どの此まゝにしてやらつしやりませう。
權兵　それでも、どうやら落人臭い。
勘右　ハテ、ようごんすわな。
權兵　そんなら此まゝにして歸りませう。若い衆、また明日、稽古にかゝりませうぞや。
三人　さうさつしやりませ。
權兵　ドリヤ、行かうか。
　ト捨て鐘になり、權兵衞、向うへ入る。文吉、勘右衞門、甚太郎、金五郎と目配せして、下座へ入る。
金五　エヽ、あの庄屋めは、イケ慾面の張つた。あの旅の衆を落人ぢやのなんのと、無法な事云ふ奴ではあるぞ。
　ト捨て鐘になり、内より、才藏、薗生の前を介抱して

出て來る。

才藏　これは〳〵、若い人、樣子はあれから聞きました。所の者が思はぬ疑ひ。それを貴公の働らきで、此方へ詮議もかゝらず、殊に虎の口の難を遁がれたと申すもの。イヤモウ、忝なう存ずる。

蘭生　何を云うても足弱の、自らを供しやる才藏。何事も思ふに任せぬ、さぞ心遣ひであらう。コレ、與右衞門とやらに逢ふまで、必らず短氣を出してたもんなや。

ト これにて、金五郎、思ひ入れあつて

金五　アイヤ、お待ちなされませ、與右衞門に逢ふまでと仰しやるお詞。その與右衞門は以前は谷藏。私しが爲には遁がれぬ親類仲。さすればあなたが、都方よりお出でありし、賴兼公の思ひ者。

蘭生　蘭生の前とは自らが

ト 云はうとするを、才藏、思ひ入れあり

才藏　アイヤ、お名を迂濶にツイそれと

金五　お名乘りあるなとお側から、お心遣ひも御尤も。さりながら私し事は、與右衞門と遁がれぬ仲の者なれば、今日も爰にてお二人の、もしやお出でもあらんかと、手分け致して與右衞門諸とも、お迎ひがてらのお待受け。必らずお心置かれまするな。

才藏　すりや、其方は與右衞門が、身寄りの者とな。

金五　如何にも。殊さら蘭生さまには、足利家の重器、二つ引龍の御旗御所持の由。このあたりには山名が餘類、徘徊いたせば、御大切に御所持遊ばされませう。

才藏　すりや、御旗を所持の事までも

金五　疾より存じ罷り在りまする。

蘭生　それ程まで心を付けてたもる其方、包むに及ばず。これこそ足利家に傳はる二つ引龍の御旗。自らが守護し立退いたわいの。

ト 懷中より、袱紗に包みし旗を出す。

金五　畏れながら、その御旗、下郎めが冥加の爲に

ト 受取り、袱紗を取つて

勿體なきこの御旗。素性なき土百姓が手に觸れまするも、不思議な緣。エヽ、有り難う存じまする。

ト 戴く。後より、甚太郎、勘右衞門、窺ひ寄つて

甚太　さてこそ違はぬ蘭生の前。その旗を。

ト 取りにかゝる。これより、立廻りになり、有り合ふ勸化の幟を踏み倒し、金五郎、文吉を下座へ追ひ込む。才藏、拔いて切り拂ふ。これにて、甚太郎、勘右衞門

花道へ寄り、中の間の歩みへ廻り、潜まつて窺ふ。此うち、禪のツトメ。才藏、それを知らず揚げ幕へ追ひ込んで入る。金五郎、駈け戻りて蘭生の前に行き合ひ

蘭生　ヤ、其方は今の。

金五　お氣遣ひなされまするな。今の奴等が戻らぬうち、あなたは私しが住家へ、お供いたしませう。

ト云ひ、捨てある幟を取つて、旗を吹替へ、旗は懷中して、蘭生の前へ幟を差付け

サア／＼、大切なこの御旗、御所持遊ばされませ。

蘭生　志し、忘れは置かぬ。このマア才藏は、早う戻つては來やらいで。

金五　お氣遣ひなされまするな。お後から上げませう。

ト捨ぜりふのうち、文吉、四つ手駕籠を擔ぎ、下座より出て來る。勘右衞門、甚太郎、窺ひ／＼舞臺へ戻り來る。

文吉　金五郎、難儀と見たゆゑ駕籠を持つて來た。これへ乘せて、お主が內へ。

金五　出來た。あなたには暫し駕籠へ。

蘭生　才藏は、まだ見えぬかいなう。

金五　ハテ、今にお出でゝござりませう。マア／＼この駕籠の內へ。

ト蘭生の前を駕籠に乘せ、有り合ふ荒繩にて横に縛り文吉に囁き、皆々呑み込み、甚太郎、勘右衞門、二人して駕籠を舁き、向うへかゝる。向うにて、人聲するゆゑ、引返して下座へ入る。向うより、才藏、一散に駈け戻り、金五郎を透かし見て

才藏　それに居るは、只今の若者か。

金五　お侍ひ樣、お怪我はござりませぬか。

才藏　氣遣ひおしやるな。妨げなす土民めら、逃がさじものと追ひかけしに、いづれへか見失つた。して、蘭生さまには。

金五　サア、私しもこちらの道へ追ひかけしに、後に戻つて見れば、あなた樣はお見えなされませぬ。ちよつと一走り、お尋ね申して。

ト駈け出すを才藏引ツ捕へ

才藏　イヤ、さうは拔けさせぬ。さてはおのれ、我れ我れを勞はる體に見せかけ、あなたをばいづれへか、おのれが手渡し致したな。

金五　モシ／＼、全く以て

才藏　イヤ、それに違ひはない。サア、眞直ぐに云へ。

吐かせ。

トこづき廻す。

金五　ア、モシ〳〵、そんなら申しませう。何も惡い根性で致した儀ではござりませぬ。爰に置きましては、あなたのお身の爲になるまいと、私しが知るべの方へ今の女中は。

ト云ひ〳〵窺ひ見て、才藏が刀を手早く拔き、切り下げろ。才藏、ウンと倒れる。誂らへの合ひ方。捨て鐘、才藏、起き上がつて

才藏　こりや、おのれ、騙し討にひろぐか。

金五　知れた事だワ。今の女は賴兼が、思ひ者の薗生の前彼奴を玉に金にするには、邪魔になるお主を殺してしまふ。無駄言云はずと死んでしまへ。

才藏　さてこそおのれ、與右衛門が身寄りと云ひしも。

金五　みんな噓だワ。

才藏　エヽ、おのれ、人非人の土民の爲にこの深手。せめておのれを。

ト脇差を拔いてかゝる。金五郎、立廻つて、才藏を切り下げる。この立廻りよき所へ、下座より、累、ウカウカと出て來る。才藏、金五郎と思ひ、累を探り捉へて

才藏　おのれ曲者。

ト刀を振り上げる。

累　ア、モシ、與右衛門どの。

ト聲立てる。與右衛門、跡より出て、これを聞いて

與右　累、どうした。

累　アレ、わしを捉へて。

ト此うち、金五郎は下へ來て窺ひ居る。與右衛門、駈け寄つて、暗がりながら才藏を捉へ引退ける。才藏、切りつけるを與右衛門、その刀をもぎ取り一太刀切る、才藏、與右衛門へ縋り、腰に差して居る鎌を取り、切つてかゝる。この立廻りに、與右衛門、脊負ひし苅豆の内より、以前の片しの下駄を落す。金五郎、探り寄つて、この下駄を拾ひ、以前の刀にて、才藏が上へ跨り、下駄を啣へて止めを刺し、刀を捨て、あたりを探り、鎌を探り取つて、與右衛門に行き當る。與右衛門狼藉者と心得、立廻り。金五郎、鎌にて打つてかゝる。累、後より、この手をよろしく留める。其うちに懷より、以前の簱を落す。與右衛門、探り寄つて、この簱を引ッたくり、金五郎を當てる。累、與右衛門にこ

文政元年八月中村座上演繪番附

けかゝり、兩人、囁き合うて下の方へ行く。この時、向うより、三郎兵衞、三度笠、半合羽、一本差しにて柳行李の割掛けを肩に掛け、出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。金五郎、心付き、三郎兵衞に行き當り、鎌にて打つてかゝる。三郎兵衞、この手を捉へ、鎌をもぎ取り、見事に投げる。このはずみに、石地藏にこけかかり、地藏、俯向けに倒れる。金五郎、この上に跨がる。

與右　南無三、片しの

累　エ、與右衞門どの。

三郎　ナニ、與右衞門とは。

金五　そんなら、こいつが。

ト地藏の頭を下駄にてくらはし、惘りして、思ひ入れ三郎兵衞、下の方に逡ふ。與右衞門、ホッと思ひ入れあつて

與右　アヽ、生醉ださうな。

ト思ひ入れ。この仕組みよろしく、拍子

幕

八　幕　目　羽生村與右衞門內の場

役名　持氏息女、蘭生の前。羽生村の金五郎。面白屋文吉。所化、祐海。岩淵蓮八。衣裳屋、安右衞門。百姓、角右衞門。豆腐屋三郎兵衞。羽生村の與右衞門實ハ絹川谷藏。同女房累。

本舞臺、三間の間、正面、藁葺きの在鄕家。上の方反古貼りの障子屋體、その前に、誂らへの草井戸、四つ目垣に山吹の盛り。正面、戸棚、上の佛壇に明り灯し、暖簾口、欄間、よき所に神棚、これに誂らへの小宮を載せ、藁葺きの門口、俵物二三俵重ね、門口竹藪、爰に累、祐海坊、木鉢にて團子を丸め、重箱に入れて居る。よき所に圍爐裏、これに藥罐をかけ、下の方に、安右衞門、衣裳の明け荷、大小、鏡なぞを置き、菓子盆で團子を食つて居る。在鄕唄にて、幕明く。

安右　これは、ちよつと參つて、大きに御馳走になりまする。

累　なんの、志しの佛の命日。辭儀なしにお上がりなされまし。
祐海　團子の仕込みがいゝから、いくらでも食はつしやい。丸い頭の團十郎が手傳つたから、これが誠に團子でござりまする。
安右　何を云はつしやる。時に、これはお志しの佛樣がござるかな。
祐海　さればよ。今日は爰の内に、一周忌の佛があるからと云ふので、愚僧も齊に呼ばれて來たのだ。辭儀なしに團子を參りませ。
安右　それは、いかい御報謝でござります。今宵は此方の内に、祭狂言の稽古があると云つて、若い衆が先へ行けと云はるゝから、鬘大小鏡まで持つて參じましたが、まだどなたもお出でられませぬか。
累　これはしたり、外の品は格別、此方の内へは、鏡と云ふ物は決してなりませぬ。持つてござんしたら、脇へ持つて行て下さんせ。
安右　ハイ〳〵、それは惡い物を持つて參りました。ヘエお内では御法度かな。
祐海　これサ、この人は、爰の内ではお内儀が、鏡を見ないと云ふ大願だ。早くどこぞへ、持つて行かつしやい持つて行かしやい。
安右　ハイ、左樣なら、いづれとも仕りませうが、與右衞門どのはお留守かな
累　アイ、こちの人は、佛樣へ膳を据ゑやうと、いま町へ買ひ物に行かれましたわいな。
安右　そんなら、お歸りまで待つて居りませう。
祐海　さうさつしやい。時に、團子を替へて食はつしやいな。
安右　大きに食べました。
祐海　辭儀をさつしやるなよ。
ト在郷唄になり、與右衞門、頬冠りにて、安下駄を穿き、岡持の豆腐を提げ、樒の花を四五本持つて、出て來る。餘ほど後より、三郎兵衞、以前の形にて、付き出て來る。花道にて
三郎　モシ〳〵、そこへござる人、物が尋ねたうござります。羽生村と申すは、これでござりまするか。
與右　アイ、あの石橋から此方が、羽生村でごんす。
三郎　ハイ〳〵、左樣ならこの村に、與右衞門と申す人がござるかな。

與右　アイ、その與右衞門と云ふは、わしでごんす。
　ト三郎兵衞を見て
三郎　ヤ、こなさんは與右衞門どのではござらぬか。
與右　よう尋ねてござりました。
　ト手拭を取る。
わしが內は、あの向うでござります。ヤレ〳〵、ようござりましたの。サア〳〵、連れ立ちませう。
三郎　イヤモウ、わしも疾に來るのでござんしたが、何やかや話せば長い事だらけ。サア〳〵、一緒に行きませう。
與右　サア、ござりませ。
　ト門口へ來り
累や、京の兄貴がござつたぞや。
累　エ、兄さんがござんしたえ。
與右　サア〳〵、此方へ入らつしやりませ。
三郎　そんなら許さつしやりませ。
　ト內へ入る。累、見て
累　ほんに、お前は兄さん、ようマア尋ねて來て下さんしたなア。
三郎　お主も息災で替る事も。
　ト累が顏を見て、思ひ入れあり

與右衞門どの、妹累は今以て、替る事はごんせぬかの
　ト思ひ入れ。
與右　見さつしやる通り、今以て替る事はないのサ。
累　なんで又、替る事があつてよいものかいな。兄さんにも別條なく、こんな嬉しい事はござんせぬわいな。
與右　コレ累、足の湯を取つて進ぜぬか。
累　ほんに圍爐裏の鑵子に。
　ト盥を持つて立ちかゝるを、與右衞門引留めて
與右　ア、イヤ、待ちやれ。お主にやア鏡を見せない兄貴の大願。ひよつと盥の湯の內へ、我れを忘れて影がさゝば。
　ト三郎兵衞と顏見合せ
アイヤ、こりやおれが汲んで進ぜう。
三郎　ハテ、構つしやりますな。
　ト此うち、與右衞門、盥に湯を明けて、三郎兵衞が前に置く。
こりやア慮外でござります。
　ト捨ぜりふにて、足を洗ふ。
祐海　時に與右衞門さんえ。佛へ上げる團子は出來たが、お前、煮染めの豆腐は買つてござりましたか。

與右　オイ。煮染めの支度は人參牛蒡、在郷種の苞豆腐、いま買つて來ました。コレ、御所化、この花を佛樣へ上げて下され。

祐海　オツと合點だ。

ト樒の花を受取り、佛檀の花活けを取つて來り、樒を花活けへ挿す。

安右　モシ、與右衞門さん、今お歸りなされましたか。今夜はお內に稽古があるゆゑ、鏡も大小も持つて參じました。

與右　オイ、衣裳屋さんか。今夜はちとわしが內には、見なさる通り久し振りの客もあるし、どうも稽古が出來ますまい。お前、斯うして下さりませ。今夜は外の內と、振り替へて下さるやうに、庄屋どのまで一走り行て下さりませ。

安右　ハイ／＼、左樣ならさう申しませう。大小や鬘も、衣裳の明け荷の上へ置きまする。取りに寄越すまで置いて下されまし。

與右　しつかりと預かりました。そこへ置いて下さりませ。

安右　左樣なら、庄屋どのへ、ドリヤ、行つて參じませう。

ト合ひ方になり、安右衞門、向うへ急ぎ入る。

祐海　サア／＼、花を上げたよ。これからは愚僧が、その豆腐を持つて行つて、苞豆腐を拵らへて進ぜうか。

與右　オヽ、御所化。頼みます。

祐海　心得ました。モシ、お前、ゆるりと話さつしやりませ。

ト合ひ方にて、祐海、岡持を提げて、暖簾口へ入る

與右　サア／＼、兄貴、マア／＼、こちらへござりませ。

累　ドレ、花茣蓙を敷いて上げうかいな。

ト花茣蓙を敷く

三郎　構はつしやるな。ナニ他人ぢやアあるまいし。

ト煙草盆を持ち、茣蓙の上に坐る。

與右　イヤモウ、便りをするも京と下總、疎遠の段は料簡して下さいまし。

三郎　そりやア此方も互ひの事。昨日今日と思ふうち、南禪寺を別れたも。數へて見れば去年の今月。

累　しかも今宵は姉さんの、一周忌に當つたゆゑ、心ばかりの佛事の賄ひ。

三郎　成る程なア。旅がけゆゑに今日がいつやら、幾日やら、妹が忌日も氣も付かず、其方衆にやう／＼と、尋ね逢うた今日の日が、妹尚尾が命日とは、ハテ、緣と云

ふものは爭はれぬ。一年經つても妹が顏の

累　エ。

三郎　アイヤ、替る事もなくて、マアめでたい。コレ、谷藏どの、いつぞや都で、妹累をこなたに渡し、その節預かる賴兼さま、東山のお館へ、送り參らせ、忠臣の早友さまへお渡し申せしところ、仁木直則が惡逆にて、お家の騷動。賴兼さまには東求堂に御座ある由、まつた御臺蘭生さま事、慥かに貴樣の在所を尋ね、この國へお出での樣子。賴兼公のお情を、身に宿せし只ならぬ……アイヤ、こなたに逢つたら渡さうと、持つて來た片しの木履。定めし貴樣も所持して居やうの。

與右　成る程、大切なる名木の下駄、密かに與右衞門所持して居れど、耕作のその際にも、肌身離さず

ト思ひ入はあり

隨分と大切に持つて居ますて。

三郎　そりやさう有りさうなもの。名木の下駄が今日の今一足揃ふ夫婦仲、愛想も盡きず、よくマア累を。

累　兄さん、喜んで下さんせ。お前の前では云ひ憎い事ながら、それは〳〵與右衞門どのが、わしを可愛がつて下さる程に、お前、お禮云うて下さんせ。殊にわたしや懷胎して、もう五月になるわいな。

三郎　ナニ、懷姙だ。そりやアめでたい。コレ與右衞門どの、此やうな形の替つた……アイヤ、都に居た時と違ひ、顏も器量も在鄉女。ようマア見捨てずに下さる志し、コレ、手を下げて禮を云ひますぞや。

與右　これはしたり、例へ在所の貧しい暮らし、髮や形もそれなりに、襤褸袷の肩を綴、どんな見憎い形にならうが、一旦こなさんに詞を番へた、わしも男だ。決して累は見捨てる事ぢやァござらぬよ。

三郎　その男氣なこなさんゆゑ、わしも落ちついては居まするが、その時累に云ひ聞かし、賴んで置いたわしが大願、鏡は見せて下さるまいの。

累　そりや氣遣ひしなさんすな。お前の願ひを破るまいと、與右衞門どのゝ心遣ひ。去年の春から二年越し、ほんにマア、女子の身で、鏡を一度も手に取らず、田の水の影さへも、濁して通る心遣ひ。そりやモウ、案じて下さんすなえ。

三郎　そりやア何かと不自由にあらう。兄が願ひもモウ少しだ。辛抱して、決して鏡を見てくりやるなよ。

與右　イヤモウ、そりやア案じさつしやるな。わしが內ち

やア鏡と云つちやア、きつい法度。併し、こなさんも知つてござる、御主人から預かりの、稲妻と名付けし名鏡は、アレあの通り神棚へ、封じ込んで祀つて置けば、内にあつても見る事ぢやアごんせぬよ。

三郎　成る程、その節わしにも見せた稲妻の名鏡……イヤ稲妻と云へば、昨夜鬼怒川の堤傳ひ、黒白も見えぬ暗がりで、ピッカリ光るは稲妻か、目先へ煌めく鎌の刃に、危ない事、この兄も、かゝりや繋がる妹が聟どの、狢生村の與右衛門と、彫りつけてある草刈り鎌。

ト前幕に手に入れし鎌を出して見せる。

累　そりやソレほんに、與右衛門どのゝ

與右　おれが手馴れたその鑄鎌。どうしてこなたの。

三郎　拾ひました。

與右　ヤ、

三郎　堤の下の地藏堂、切られて居たは京家の武士。その場で折よく手に入るこの鎌。久し振りのこの兄が、與右衛門どのへ、ソレ土産。

ト投げてやる。與右衛門、取つて

與右　そんなら昨夜のすつぱ抜き、その侍ひは京家とあれば、もしや御臺のお供して．わしを尋ねて來た人か。割符を合すは手に入る御籏。

三郎　ヤ、御籏とは。

與右　サア、畑仕事の歸りがけ、落したこの鎌。

三郎　折よくわしが拾つて仕合せ。與右衛門どの。

與右　兄貴、そべらつしやりませ。

累　ドレ、釜の下でも焚きつけませうか。

ト唄になり、累、暖簾口へ入る。與右衛門、三郎兵衛捨ぜりふにて、横になる。直ぐにテンツヽになり、向うより、文吉先に、駕籠屋、四つ手駕籠を擔ぎ、後より、金五郎、小風呂敷に下駄の片しを包み、腰に括り付け、下駄がけにて、出て來り、門口へ駕籠を下ろす。

金五　オッと、爰が與右衛門が所だ。コレ、文吉さん、なんと云つても手間が取れやう。さう思つて居なされ。

文吉　合點だ。コレ、駕籠の衆、駕籠は爰へ置いて、後方吉左右聞きに來さつしやい。

駕籠　ハイ／＼、さうしませう

ト駕籠を門口へ置き、駕籠屋向うへ入る

金五　與右衛門、内に居やるか。

ト門口を入る。與右衛門、起き直つて

與右　オヽ、金五郎か、ヤレ／＼、久し振りだの。聞けば

昨日赦免したげな。別條なく、マア、めでたい〱。

金五　されば よ。すんでの事に首の飛ぶところを、山名さまのお庇で、細い首も付けたやつよ。シタガ、久し振りで村へ歸つて、錢一文の當もなし、昨日おつりきな物を見付けたで、そりやア格別、おれも今日から商賣を始める積りよ。

與右　イカサマ、なんぞ商賣をせざァなるまいが、耕作の外、お主が知つた仕事と云つても。

金五　あるの……不器用者の金五郎、吝な事だが覺えた藝は、聞きやれ、おらア下駄足駄の齒を入れるの。

與右　ナニ、足駄の齒入れをする。イカサマ、こいつは重寶で流行らうわい。

金五　イヤモウ、流行る段ぢやアない。下駄ばかりか、下駄の齒の、しかも名木の薫りある。世にも稀れなる高木履、おれにやアこんな誂らへもあるよ。

　ト風呂敷の中より、以前の下駄の片しを出す。與右衞門、見て

與右　ヤ、そりやソレ昨夜失ひし

金五　覺えがあるか。

與右　サ、それは。

金五　旅人體の侍ひが、切られた側で拾つたこの下駄。覺えがあれば人殺し。與右衞門、それでもこの下駄を

與右　落した場所は村境。あの辻堂の慥かにあたり。

金五　覺えがあらば渡さうが、堅木割木の山下駄には、似ても似付かぬ伽羅の下駄。土ッぽじりに似合はぬ品。それでもお主が。

與右　サ。それは。

金五　よもやそれとは云はれまい。

　ト思ひ入れ。此うち、三郎兵衞、起きて樣子を聞き

三郎　アイヤ、若い人、その下駄は、わしが落しました。この旅人が落した下駄。ハテよく、拾つて來て下さつたなう。

　ト起き上がつて下駄を取りに行かうとする。金五郎、この手を取つて

金五　コレ、待たつしやい。こなさん、どこの人かは知らないが、おれが下駄を物云はずに、こりやアどうするのだ。

三郎　ほんに、こりやアわしが惡うごんした。併し、今云はつしやるには、拾つた物だと云はつしやるから、ツイわしが物ゆゑ、取りにかゝつたものサ。こりやアお前、

大きにお世話様でござりました。これはわしが昨夜落しました。ヤレ〳〵、お世話でござりました。

ト持つて行かうとする。この手を留めて

金五　これサ〳〵、この人は、おれが下駄と云はつしやるが、して、こなさんの下駄だと云はつしやるには、證據でもごんすか。

三郎　ハテ、證據のない事を云ひますか。昨夜この村境の曲り角で、ツイ落したる片しの下駄。尋ねたけれど無いこそ道理。コレ〳〵、疑はつしやらば。

ト柳行李の内より、下駄の片しを出し

ソレ、見さつしやい。大きさ恰好この通り、寸分違はぬ揃つた下駄。こりやア若い人、忝なうござりました。よいお人に拾はれたぞ。

ト下駄を揃へて、元の上の方へ坐る。金五郎、呆れたる顔にて

金五　ハテ、そんならこなたの落した下駄だの。判りやア是非がない、渡しちやアやらうが、その下駄にやア曰くがある。慥かにそりやア足利の、頼兼どのが物好みに、廓通ひの名木の下駄。

與右　それをお主が、どうして知つた。

金五　イヤ、その下駄にやア本阿彌がある。

與右　ナニ、本阿彌とは。

金五　文吉さん、駕籠の内の本阿彌を。

文吉　合點だ。サア、姐さん、出なさい。

ト駕籠の内より、薗生の前が手を取り、内へ入る。

與右衛門どのとやら、その下駄の本阿彌はこの女だ。なんと美しい者であらうが。

薗生　ナニ、與右衛門と云やるからは、そんなら自らが尋ぬる其方が。

ト與右衛門が側へ寄る。

與右　待たつしやいまし。與右衛門はわたしだが、ついに見馴れぬ女中、殊にうづ高いその顔。そんならもしやあなた樣は。

薗生　其方を尋ねて遥々と

與右　アイヤ、滅多な事を。

金五　成る程云へまい。いま云ふ通りその下駄を、名木の木履と見分けし女。昨日思はず鬼怒川から、目を付け置きたるこの旅人。與右衛門お主を遥々と、尋ねて來たと云ふからは、お尋ね者の慥かに薗生。

與右　アイヤ、そんな胡亂な者ぢやアない。この與右衛門

を尋ねて來たは
文吉　お尋ね者の蘭生であらうが。
　トこの前より、與右衛門、莨をのむとて出しかゝりし
　序幕の文を見付け、思ひ入れして
與右　イヽヤ、この子は潮來の女郎だ。
金五　アノ、この子が。
與右　オヽ、サ、しかも潮來の蓬來屋の、菊野と云ふ抱への
女郎。三社參りの歸りがけ、ちよつと一晩旅がゝりの、
お伽噺に與右衛門が、年が明けたらいづれとも、女房約
束しようかと、內に嚊アのあるのを隱し、無駄なせりふ
を眞に受けて、それで尋ねて來たのであらう。ナウ女中
ヤレ、久し振りで、よく來たの。
金五　そんなら お主が潮來の馴染みか。アノ、累と云ふ女
房のあるに。
三郎　女房はあれどあの面體。愛想の盡きるも無理ではな
いかえ。
與右　アコレ、決してさうした
文吉　お尋ね者か。
與右　イヽヤ女郎だ。女房約束した女だ。
蘭生　樣子は何か解らねど、自らゆゑに心遣ひのこの樣子

與右衛門なれば。以前の御家來絹川の
與右　アコレ、鬼怒川とは、このあたり、水の流れと人の
身は、どこにどうして、ナモシ、……アイヤ、潮來の姐
え滅多に物を云はぬがよいよ。
金五　絹川ならば都にて、三人四人の人を殺め、行くへの
知れない人殺し。殊に昨夜も鬼怒川の、堤の下で切られ
た旅人。下駄から付け込んだら、その殺し手は。
　ト三郎兵衛へ目を付ける。三郎兵衛、思ひ入れあつて
三郎　揃つた下駄はわしが代物、どこにどうしてあらうが
まゝ、人殺しとやら、なんとやら、此方に覺えのない事
サ。
文吉　これサ金五郎、人殺しは後へ廻し、目を付けたる駈
落ち女。おれが手先で吉原の、勤めをさせればしつかり
と百兩。年季の殘つた女なら、金に轉ぶが近道だ。勤
めをさすとも持豐さまへ。
與右　なんと。
金五　あれ聞かつしやい。與右衛門どの、百兩だけのこ
の代物、迷つて來たを昨日から、おれが引込み世話する
も、魚心ありや水心、元手に見込んだこの女、不承であ
らうが金にしよう。それ不承知なら親方へ、歸してやる

文政元年八月中村座上演繪番附

か但し又、山名さまの陣所へ……サア、斯う云やア物が角立つ。與右衞門どの。こなさんの手で百兩の

與右　出來ない金も女ゆゑ、出來さにやアならぬこの手詰め。當分の手附けを渡して置かう。

金五　アノ、百兩の手附けをか。

與右　待つて居やれ。

ト戸棚の内より、一腰を取出し、金五郎が前へ出して

金五郎、手附けと云つても外ぢやアない。こりや與右衞門が大切の魂ひ。商賣こそ百姓なれ、近郷近在で知つたる羽生の與右衞門、男はけちだが、おれが魂ひ、男の魂ひ預けるから、當分これで待つてくりやれ。

金五　面白い。百姓ながら以前を聞けば、慥かに都で……サ、小角力も取つた噂。イヽワ、折角の頼み、男と見込んでこの魂ひ。

文吉　コレノ＼、その刀は預かつても、あの後金の工面はいゝかよ。

金五　ハテ、打ッちやつて置かつしやい。あの男も羽生の與右衞門。

文吉　して、後金の出來るのは。

與右　明日とも云はず今夜中。

金五　面白い。今夜とあらば五ッを合圖に、その百兩を渡してもらはう。

與右　アノ初夜までにか。そりや又あんまり。

金五　急であらうが、此方も急に金の入用。不承知ならば渡す所へ。

與右　いゝワ、お主がさう云ふ事ならば、出來ないまでも工面して見ようわサ。

文吉　それが違やア文吉が、明日は早々江戸へ通しだ。その氣になつて金の算段。

三郎　何か縺れた女の出入り、口出ししたいものなれど、累が縁にこの兄が、却つて聞いてはなんとやら。矢ッ張り爰は知らぬ顔。知らぬながらもその女中、頼兼公の

與右　サ、金の工面をする間。

金五　手放されないこの女。

ト蘭生の前が手を取る。

蘭生　すりや、自らを又外へ。

金五　イヤ、こなさんは金と引替へ。下駄目利きの詳しい女中。

三郎　ヤ、なんと。

金五　拾つた下駄の主は旅人。こなたも素手ぢやア通れな

い。マア、さう思つて居さつしやい。

三郎　おれも四五日逗留の、宿は即ち爰の内、貧乏搖ぎもするのぢやない。用事があらば何時でも來さんせ。ドリヤ、納戸を借りてゆつくりと。

ト莨盆と以前の下駄とを持ち、立ち上がる。

與右　長の道中、定めしお疲れ。見苦しけれど、あれなる納戸で。

金五　おれも今宵の初夜までは。

文吉　この文吉も待つて居やうか。

蘭生　これに付けても、只氣遣ひなは才藏が。

ト思ひ入れ。與右衞門、こなしあつて

與右　ハテ、こなたのかゝりの刀の代は、この與右衞門が受取つた。なんにも云はずと、ナ、コレ……二人の衆、兄貴も部屋で。

金五　與右衞門どの。

三郎　ドリヤ、お造作にあづかりませう。

ト唄になり、金五郎、蘭生の前の手を取り、三郎兵衞に目を付け、文吉、付いて暖簾口へ入る。三郎兵衞、思ひ入れあつて、これも暖簾口へ入る。與右衞門、殘る。合ひ方。

與右　すりや、あのお方が、疑ひもなき蘭生の前さま。數ならぬ與右衞門を、力と思うて海山越え、この關東まで御下向の、殊には主君の御胤を、御懷胎との三婦どのゝ詞。二世と語らふ女房なれども、姉が死靈にあの面體。頼兼公の御胤と云はゞ、もしや世を去る高尾が一念……こりや女房に打明けて、明らさまにも云へないわえ。

ト思ひ入れ。暖簾口より、累、出て來り

累　コレ、與右衞門どの、お前、何をマア其やうに、屈託顔して居やしやんす。いま奥へ金五郎どのが、連れて見えたあの女中は、お前が馴染みの潮來とやらの、女郎衆と云ふ事。それを爰へ引込まんしたから、それで其やうに物案じの樣子かえ。コレ、こなさんはわしに愛想が盡きて、それであの女中さんを。

與右　成る程、譯を知らない女房累。この與右衞門が色狂ひに、引込んだ女だと、一圖に思ふもこりや尤も。今も兄貴の聞かるゝ手前、打明けて云はれぬは、金五郎と云ふあの惡者、あいらが聞くゆゑに、潮來の女郎と云つたは嘘。誠あなたは頼兼公の御臺、蘭生の前さま。以前御家來のこの谷藏をお尋ねなされ、この下總までござつたを、山名が一族手分けして尋ねる樣子。殊にあなたは只

ならぬ……サア、只ならぬ御病氣。ア、コレ、あの金五郎めに番つた詞。どうして五ツまでにその百兩が。

ト手を組んで思案の體。累、これを聞いて

累　エ、、そんならあの女中さんは、頼兼さまの御臺所。お前の爲には御主人樣かえ。

與右　オ、よ。

累　ほんにマア、さうとは知らず、こりやてつきりお前が、馴染みの女中を連れてござんしたかと思うて。ホ、ホ、、よもや女夫になつて丸一年、經つや經たずに其やうな、心にもならしやんすまいとは思へども、そりやモウ、此方はその氣であつても、男の心と云ふものは……モウ／＼、決してそんな心は思ひますまい。それはさうと與右衛門どのえ。お前、たつた今、大枚百兩と云ふ金がなければ、ならぬやうな事を云ひなさんしたが、そりやマア、なんで金が要るのぢやえ。

與右　成る程、百兩の金と云つたのは、蘭生さまの事に付き、あの金五郎めが昨日あなたを、おのれが所へ連れて行て、名木の下駄の事までも、とつくりとあなたの口から聞いた上にて、おれが所へ同道してうせたのは、退引きならぬ與右衛門に、百兩の金にて、あなたをわしに渡さうと、目論で來た彼奴の仕事。金が出來ぬと云つたなら、直ぐに山名へ訴へて、訴人しかねぬあの惡者。ア、コレ、さう云ふ事になつちやア、これが蘭生の前でござると云ふ、爰が身替り所だが、と云つて丁度それに相應な女と云つてもないもの。與右衛門に兄弟はなし、金にしさうな娘と云つても持たぬ身の、ア、コレ、五ツまでに金の工面が。但しあなたを連れて一先づ爰を。

累　エ。

與右　これサ女房、こんな事を滅多に、おくびにも出すなよ。ア、コレ、賴んで明日まで延さうか。こいつはマア、餘ッぽどむづかしくなつたわえ。

ト手を組んで思案して居る。累、思ひ入れあつて

累　コレ、與右衛門どの、お前、其やうに一人して苦勞をせずとも、ちつとは女房にも相談して下さんせいな。このマア暮らしで、百兩と云ふ金が、田畑を賣つてからが、どうマア出來ませうぞ。そこが膝とも談合ぢやぞえ。幸ひ兄さんは來てござんす。先づ斯う／＼と相談して、その金高にはならずとも、わたしを江戸の吉原へ勤め奉公……サ、わたしが口から、こんな事云ふも、どうやらその身をひけらかすやうなれどな、以前は都で育つたわ

たし、今は在所のこの世渡り。お前の目からも都に居た姿とは、そりやモウ違つたではごんせうが、そこが又、馬士にも衣裳。油氣のないこの髮を、ツイ取上げて貯への、小袖でこの身を化かしたならば、持つて生れた姿ぢやもの、そりや相談が出來ぬと云ふ事もあるまいぞえ。コレ、この身を賣つてもお前の一分、男が立てゝ進ぜたいわいな。

ト與右衞門が側へ摺り寄つて、キッと云ふ。これにて、與右衞門、思ひ入れあり、累が顏を見て

與右　累、すりやそれ程までに、おれが事を思つて、わりやアその身を賣らうと云ふ。コレ、お主が金になる位なら、この與右衞門が手を下げて、金拵らへる相談を……サ、しまい物でもないが、どうもお主で金は拵へられぬ。

累　コレ、そりや何ゆゑでござんすえ。

與右　ハテ、奥へ來て居るてまへが兄貴、一年振りで來た人に、來ると早々妹累を、わしやア賣りますと、亭主のおれが口から云はれるものか。御主人へ忠義を立てればとて、それぢやア兄貴へこの與右衞門が、面が立たない。決してそんな事は思つてもくりやるなよ……ア、コレ、毒を喰はゞ皿と、金五郎めをバッサリ云はせ、あなたを密かにお供しようか。

トいろ／＼屈託のうち、累、差寄つて

累　コレ、與右衞門どの、お前マア其やうに、一人苦勞をしなさんすが、そんなら斯うして下さんせ。今からわたしを去らしやんせ。女房の縁さへなくば、兄さんへの義理もあるまいぞえ。エ、コレ、與右衞門どの。

ト此せりふのうち、矢張り、與右衞門、思案して居る。

コレイナア、そんならどうでもお前、わたしで金拵らへる心はござんせぬか。ようござんす。現在の女房に、相談して下さんせぬ、水臭いお前。わたしやいつそ。

トあたりを見廻し、そこにある鎌を取つて

わたしやこれで死ぬ程に、後を弔らうて下さんせ。さらばぢやぞえ。

ト鎌にて死なうとする。與右衞門、うろたへ、これを留めて

與右　コレエ、女房、わりやア氣が狂つたか。刃物三昧して、なんでマア死なうと云ふのだ。

累　なんでとは與右衞門どの、わたしが死んだその後で、お前の御主人蘭生さまの御身替り、山名とやらへこの首を、お前が持つてござんしたら、事なうあなたに別條な

く、お前の忠義が立つと云ふもの。すりや兄さんの手前、女房賣らぬ身の面晴れ。どうぞわたしをお身替りに。

ト與右衛門、累が顔を見て、不便の思ひ入れあつて

與右　ア、可哀やわりやアなんにも知らず、アノこの顔で身替りと。

累　エ。

與右　サ、器量に替りはなけれども、生れ付いたる面ざしは、蘭生さまには似たとは云はれぬ。

累　サ、そこが譬へに云ふ、死顔と生顔とは、相が替ると云ふ事を、これを取り得に、もしひよつと。

與右　サ、それに如才はなけれども、如何に相好替るとも似ても似つかぬ雪と墨。

累　そんならそれ程あなたとは。

與右　器量はそれと替らねど、腹は立ちやるな、高位なる持氏公の御息女に、三婦が妹のお主が素性、高が町家で育つた女、それが似付かぬ雪と墨、それ程に眞實盡してくれるお主が性根、兄の三婦とも相談して、いづれともお主が願ひ、叶ふまいものでもない。

ト莨盆を引寄せて莨をのんでゐる。

累　そんなら、兄さんと相談して、わたしが願ひの苦界の奉公。

與右　殊に依つたら頼まずばなるまい。マア、急かずとも、おれ次第になつて居や。

ト莨を詰めようとして

南無三、莨が粉になつた。いま町に行つた歸りに、買つてくりやよかつた。アヽコレ、莨に離れちやア、親に離れたより悲しい。ドレ、一走り行つて來ようか。

ト門の方へ思ひ入れ。

累　ア、コレ、お前ござんすにや及ばぬ。ちよつとわたしが村境の店まで行て、買うて來て上げうわいな。

與右　成る程、おりやア奥へ行つて、久し振りの兄さんへ挨拶。殊には其方の願ひと云ひ、そろ〳〵と云ひ出しても見ようか。

累　どうぞさうして下さんせいな。

與右　殊に依つたら金五郎にも逢つて、日延べ出來りやアそれも重疊。コレ、てまへ、一走り莨を頼むよ。

累　心得ました。お前は奥の兄さんに

與右　逢つて話したその上で

累　得心あれば、わたしも安堵。

與右　云はれぬ義理と思へども

累　親は泣き寄り打付けに

與右　面押拭ひ斯う／＼と

累　云うてわたしが

與右　願ひを三婦へ。

累　與右衛門どの。

與右　ドレ、相談して來ませうか。

ト唄になり、與右衛門、累が顏を見て、ホロリとしたろ思ひ入れにて、奥へ入る。あと合ひ方、累、殘り

累　與右衛門どのがあのやうに、義理ある女房のわたしゆゑ、兄さんの手前を思ひ、勤めもさせず、お身替りにも殺されぬと、情らしう云はしやんす程、どうぞ夫の男が立てゝ進ぜたいわいな。

ト合ひ方、莨入れを持つて思案して居る。奥より、金五郎、出て來り、後に窺ひ居て

金五　そこに居るのは累ぢやないか。

累　金五郎さんか……ドレ、莨を買つて來ようかいな。

ト行かうとする。

金五　コレ累、待ちや。てまへにやアちつと話しがある。

累　金五郎さん、話しがあるとはえ。

金五　外の事でもない、累……ア、いつ見ても／＼、どうでも田舍生れと違ひ、京で育つたてまへゆゑ、美しいものだわえ。

ト脇を向いて舌を出す。累、これを知らず

累　又じやら／＼としたてんがうばつかり、云うて下さんすな。

金五　その下さんすなと素氣ない所が、一倍可愛らしい。コレ累や。

累　なんぢやぞいなア。

金五　この金五郎はの、てまへに、小ツ恥かしいが、どうもならねえ程惚れたわやい。

累　エヽ、措きなさんせ。其やうな事云うても下さんすな。

金五　コレ、惚れまいものか。

累　なぜかえ。

金五　ハテ、てまへのやうな器量の女が、この下總は云ふに及ばず、いま廣い江戸を探したと云つて、二人と云つてあるものかな。

ト脇を向いて思ひ入れ。

累　コレ、金五郎さん、こなさん、なんぼう其やうに云はしやんしてもな、わしには與右衛門どのと云ふ、歷と

した主のある身。此やうな事が與右衛門どのに、ひよつと見られては悪い程に、妾を放さんせ〳〵。

金五　累、アノお主は與右衛門を、眞實な亭主だと思つて居るか。マア〳〵、下に居や〳〵。

ト兩人、下に居る。

累　金五郎さん、こちの人が眞實な男でなうて、なんとしやんせう。

金五　エヽ、てまへはうつとりな者だ。

ト莨を吸ひ付けにかゝり、思ひ入れ。

オヽ、奥へ莨入れを置いて來た。オヽ、その莨を一服貰はうか。

累　こりや粉になつたわいな。

金五　オヽ、粉になつた、その子に付いて、てまへ、詰まらない話しがある。マア〳〵、一服のんでから。

ト莨入れを明ける拍子に、内より以前の文落ちる。金五郎、思ひ入れあつて

なんだ、文が落ちたぞよ。「與右衛門どの參る菊野。」こりやアコレ、おれが連れて來た女の名は菊野。ハテ、おつりきな物を、てまへは持つて居るの。

累　ほんに、その文が、この莨入れにあると云ふは。

ト思ひ入れ。

金五　コレ、これだワ。てまへは眞實と思つても、あの奥の女郎は菊野、しかもあの女は孕んで居るワ。それを話して聞かさうと、思ふ矢先へこの文だ。ドレ、封を切つて、マア、讀んで聞かさうか。

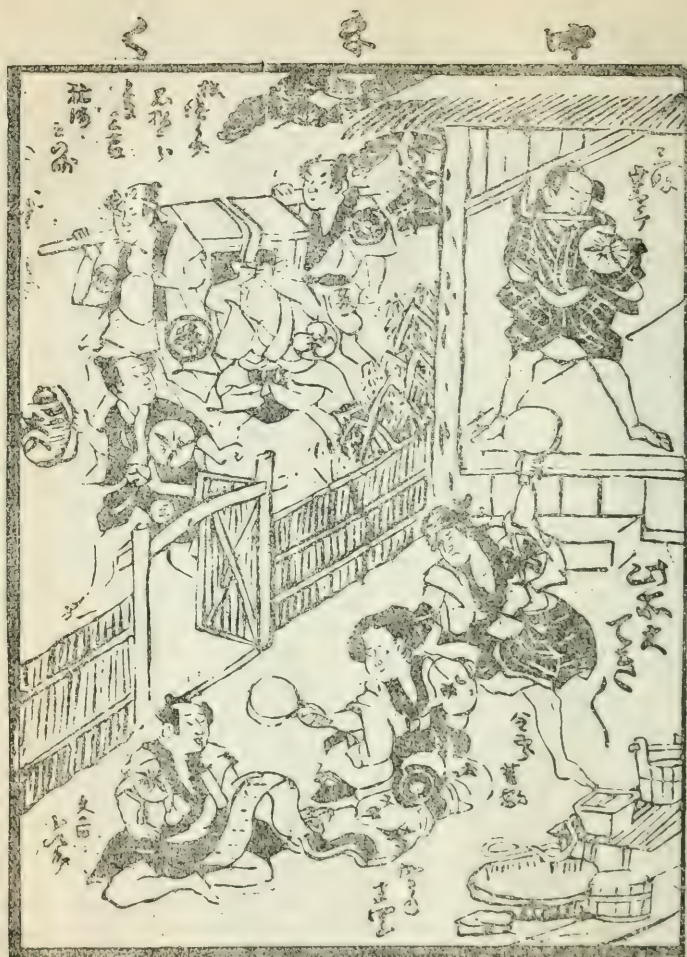
ト封を切らうとする。累、留めて

累　アヽコレ、それ讀んで下さんすな。成る程、こりやこちの人へ、菊野とやらから來た文に違ひはござんすまいが、その文言を讀んだ上、どのやうな事が書いて、わたしが心にかけては、今更この身の……サ、なんであらうと、讀んでもらはずとようござんす。その文戻しなさんせ。

ト引ッたくつて懐中する。

金五　ハテ、てまへはそれ程にも悋氣をしないか。コレ、あの與右衛門はの、お主と云ふ女房のある身で、あの菊野と云ふ女郎を孕まして、身が重くなつたに依つて、そこでおれが所へ相談に來たのだ。そんな水臭い男にせずと、おれが女房になれ。聞けばお主は孕んで居るげなの。

累　エ。

金五　何も隱す事はない。お主も懐姙、奥の女も與右衛門

文政元年中村座上演繪番附

が子を孕んで居ちやア、二人ながら一時に子が出來やう。殊に百兩と云ふ金を工面して、あの女を爰の內へ置かうとは、深切な與右衞門。併し、こんな水呑百姓が、晩の五ッまでに百兩の工面……大笑ひだ。錢百の工面も出來はしまいよ。

ト嘲笑ふ。累、ムッとしたる思ひ入れにて

累　金五郎さん、その金が出來るぞえ。アイ、夫の爲には女房の、この身を賣つてなりと、その金を拵らへるわいな。

金五　コレ〳〵、てまへ、見替へられる女郎の代りに、體を賣る氣か。

累　なんの、あなた樣は賴兼さまの

金五　ナニ、賴兼

累　サア、金……金と聞いたあの女中、例へ夫の色にもせよ、與右衞門どのゝ男の立つ事ならば、この身を賣つても、わたしやいとひはせぬわいな。

金五　ハテ、深切な女房もあるものだ。

ト よき時分より、後へ、文吉、出かゝり居て

文吉　氣遣ひしなんな、內儀さん。わしが口を聞いて、江戸の吉原の勤めをすれば、お前の器量ぢやア百兩が二百兩にもならうが、惜しい事にやアたつた一つ疵があるよ。

金五　こなさん、文吉どのか。

累　ほんに、お前は昨日村境で、ちよつと逢うたお方。味な緣でわたしが內へ……モシ、江戸のお方え。お前が望みにはなるが、疵があると云ひなさんす、その疵とはえ。

文吉　ハテ、こなさんは孕んで居るげな。女郎になるものが孕んで勤めがなるものかな。ならないゆゑに奥の女がころげ込んで來たぢやアねえか、それには腹に子があつ金になるものか。腹に子があつて値のするは鯥ばかりだ。腹の內から二人禿で、どうして勤めがなるものか。

累　成る程、さう云ひなさんすりや、わたしが腹には與右衞門どのゝ

金五　イカサマ、孕み女で勤めはなるまい。コレ〳〵、幸ひ奥の菊野が、腹の子をおろしてやらうと、持つて來た藥、てまへ寧そこれを呑んで、體を賣るがよからうが。

ト 序幕の藥を出して、累に渡さうとする。

累　エヽ、滅相な。わたしが腹には與右衞門どのゝ大切の初子。どうしてマア、恐ろしい其やうな藥を。

文吉　コレ內儀さん、お前藥を服まないと、廓の勤めがな

らぬぞえ。ならない時にやア百兩の金も出來まい。それでもいいかえ。

累　ほんに、さう云ひなさんすりや、身が重うては廓の奉公。いつそお前方の詞に付いて、この藥を……アア服んでは與右衛門どのへ云ひ譯が……イカサマ、こりやマア、一思案せざなるまいわいな。

ト藥を持つて思ひ入れ。

金五　よし又、廓の奉公するにもせよ、鏡を見ないで女郎はなるまい。願であらうが、こればつかりは見ずばなるまい。

累　でも、兄さんが大事の願ひ。去年の春から恥かしい、女子の身で手にも觸れざるあの鏡、ふツつり見まいとわたしが内には、鏡と云うては、アイ、ござんせぬわいな。

文吉　ハテ、願であらうと、顏や容を作るには、鏡を見ないで濟むものかな。

金五　それ／＼、女郎に鏡は肝心だ。幸ひ爰に祭芝居の稽古の鏡。

ト有り合ふ二面の鏡を取り、一面を文吉へ渡し

サア、累、ちよつとマア鏡を見やな。

ト差しつける。累、顏を隱して

累　エ、滅相な。大願ゆゑに見えぬ顏。其方へ持つて行きなさんせ。

文吉　これサ、おれに相談して、廓の勤めがしたいなら、マアちよつと鏡を見さつしやいな。

ト差しつける。

累　エ、お前までが。免して下さんせいな。

金五　これサ、ちよつとマア寫して見やな。

累　エ、免して下さんせ。

ト嫌がるを兩方より、一度に鏡を差しつける。累、思ひ入れあつて、袖にて顏を隱し、俯向く。

金五　これサ、顏を隱して鏡を見ずば、廓の勤めがなるまいぞよ。マアちよつと鏡を。

ト鏡を差しつけうとして、思ひ入れあり

ヤ、こりやアどうだ。この鏡は地金になつて、こりやコレ銅。

文吉　ほんに、お主がさう云へば、コレ、この鏡もすつぱり銅。

ト金五郎、文吉が鏡を取り、兩方見比べ

兩人　こりやアマアどうだ。

ト思ひ入れ。これにて、ツツと顏を上げ、遠くより鏡

を窺ひ見る事あつて、二面の鏡、銅ゆゑ思ひ入れあつて、手に取上げ

累　ほんに、二面のこの鏡、地金を顯はすこの不思議はどうも合點の

ト思ひ入れあり

これにて思ひ當つたは、日頃夫が大切に、秘め置くあの名鏡、その威徳にて二面の鏡、光を失ふ

ト思はず神棚の方へ目を付ける。

金五　ナニ、名鏡

累　サ、滅相な。曇つてあればこそよけれ、大願ぢやと云ふにアタ阿房らしい。この鏡も狂言の大小も、サヽ、其方へ持つて行きなさんせ。

ト捨てある鏡と大小を取つて表へ投げ捨て、支へる金五郎、文吉を表へ突き出し、門口を締める。

金五　コレ〳〵、てまへ、さう惡しくする事はないぞえ。

文吉　それサ、勤め奉公の世話をしようと云ふ、おれまでも突き出すとは、てまへ、そんなら世話を頼まないのかよ。

累　アイ、鏡を見いで叶はぬ勤め奉公なら、お前を頼まぬ。外で相談するわいな。阿房らしい……ほんに、お前方にかかつて、佛壇へ水向けも……ドレ、水汲み替へて置かうか。

ト合ひ方になり、累、上の草井戸へかゝり、綱釣瓶を取つて井戸へ下ろすとて心付き、映りし形の見えぬやうに水を汲み上げ、佛壇の茶碗を取つて來り、釣瓶の水を明け、釣瓶に水の殘りしを、井戸端の竹棚の上へ置き、茶碗は佛壇へ供へ、水向けして回向する。門口にて、金五郎、思ひ入れあつて、文吉に囁く。

文吉　エヽ、そんなら中心を入れ替へて。

金五　コレ。

ト文吉、ソツと内へ入り、累へ氣を付けて居る。金五郎、狂言の刀、木太刀を拔き、與右衛門より預かりし刀の鞘へ嵌め、これを差して、本身をば狂言の刀の鞘へ納め、引ッ抱へて、ソロ〳〵内へ入り、累を見て

コレ累、なんだ。てまへは佛を拜むのか、水向けをするか。ドレ、おれも水を向けてやらうか。

ト竹棚の釣瓶を取つて、累が後へ廻り

コレ累。

ト大きな聲にて云ふ。累、悔りして振り返る拍子に、釣瓶の水へ形映る。

累　アヽコレ、その水へ。
ト顏を外ける。文吉、無理に押へる。金五郎、釣瓶を
差しつけ。
金五　有り合ふ鏡は曇つたが、幸ひ釣瓶に水鏡。累が面體
寫して見ろ。
ト嫌がるを無理に見せる。この時、累が目には以前の
儘に映る。金五郎、文吉が目には惡女に見える思ひ入
れ。
なんと、累、お主が顏には愛想が盡きるか。
累　エヽ、惡てんがうな金五郎さん。見まい〳〵として
居るものを、振り返る拍子に、唐突に釣瓶の水に、わた
しが影を寫して、マア、折角愼しむ大願が。
金五　水に映つたてまへの影を、そもじは見たか
累　アイ、見まいと思へど唐突に、映る釣瓶の水鏡、以
前に逢ひし髮形、やつれ果てゝも面ざしの、變らぬわた
しがソレその面體。
金五　ウム、そんなら映るこの影が、お主が目からは以前
に變らず、人並に見えるのか。
文吉　アノ、こなたの目にやア矢ッ張り以前の。
累　アイ、なんの變らう。ソレ、見なさんせ。變る事の
ないわたしが面ざし。なんぼ鏡でないと云うて、人の大
事の大願を、ようマアこなさんは。憎いお方ぢやないか
いな。
金五　呆れたものだ。あれ程變つて映るのを、累が目には
面影の、變らで映るは、なんでもこいつは、只事ぢやア
ないわい。
文吉　ソレ、水に映つたその影を。
金五　おれが見やうで變るのか。とてもの事に、もう一遍
コレ、累。
ト釣瓶を取つて、累へ差しつける。累、思ひ入れあつ
て、この釣瓶を取つて、庭へ打ちつけ水をこぼす。
コレ。
ト寄るを。
累　アタしつこい、
金五　ヤ。
ト留めるを、有り合ふ莨入れを打ちつける。莨の粉脇
へ散つて、文吉が眼へ入る思ひ入れ。
累　措かんせいな。
ト唄になり、累、腹立ちたる體にて、奧へ入る。金五
郎、後を見送り

金五　おいらが目にやア悪女の影。彼奴が目にはさう見えぬか。ハテサテ、こいつは、けうけれつな内だわえ。
文吉　コレ〳〵、貴樣の眼には悪女に見えるが、おれが目には煙草の粉が入つて、目が山椒を喰つたやうに、ヒリヒリする。これが誠に山椒の目だ。
金五　何を云やアがる。時に今あの門口で、與右衛門から預かつたのこ刀、狂言の木太刀と摺替へた心は、どうで五ッまでにやア出來ない百兩。その時はこの刀を叩き出して、あの女を連れて、かッ走る。それで中心を入れ替へて置いたは、なんときついものか。
文吉　成る程、貴樣は悪智恵のある男だ。シタガ、あの鏡が二面とも曇つたは、どうも合點がゆかないぞえ。
金五　サア、おれもさう睨んで置いた。そりやアさうと吹替へたこの刀、急に二本も差しては居られず、スワと云ふ時覺えをして置かにやアならぬが、アヽコレこの刀をどこぞへ。
　トあちこち見廻し、神棚を見付けて
あるとも〳〵。あの神棚へ上げて置けば、まさかの時は引ッ拂つて、駈け出す分の事。それ〳〵、
　ト刀を神棚へ上げる。この時、上の宮、落ちて割れるこの中より袋入りの名鏡出る。この音にて上の障子を明けて、三郎兵衛、窺ふ。
文吉　それ〳〵、宮の中から何か出たぞよ。
金五　イカサマ、何かおつりきな物が出たぞよ。
　ト手に取上げ、袋より、鏡を出し、思ひ入れあつて
こりやコレ、正しく、山名さまより、御沙汰のあつた、足利の家に傳はる稲妻の名鏡。そんならあの與右衛門が、都に居る時預かつて、この家へ隱して置いたか。これで讀めた。先刻に鏡の地金になつたは、この名鏡がこの家にあるから。さても鏡のその威德。ハテ爭はれぬ。
文吉　コレ金五郎、さう云ふ鏡が手に入るも、福德の三年目だ。ちつとも早く山名さまへ。
金五　合點だ。お主やア鏡を山名の陣所へ。
文吉　呑み込んだ。
　ト受取り行かうとする。三郎兵衛、ツカ〳〵と出て、この鏡を引ッたくり、文吉を見事に投げる。金五郎、見て
金五　ヤ、お主は先刻の客人だな。
文吉　コレ〳〵、客人でも商人でも、それには頓着はないなぜおれをぶん投げた。

三郎　ハテ、わりやァ盗人だに依つて、投げたがどうした
文吉　ナニ、盗人だ。
三郎　ハテ、鏡を盗んで駈け出すから、盗人ではあるまいか。
金五　コレ〳〵客人、鏡を盗んだと云ふが、その鏡は、おれがのだぞ。
三郎　イヽヤ、この鏡はおれが鏡だ。
金五　ヤ、ハテサテ、この男は物さへ見ると、おれが物だと。先刻も下駄を引ッたくつたが、今度は鏡まで、引上げるのか。ハテサテ摑み男だ。して、こなさんの鏡だと云ふにやア、なんぞ慥かな
三郎　證據も絲瓜もいるものか。この鏡は、妹の、累に付けて爰の家へ嫁らした、こりやア累に付けた女の魂ひ、證據と云ふは、妹に云ひ含め、この鏡の外、決して外の鏡と云つちやア、手にも取るなと云ひ付けて寄越した、それが證據だ。それでもこなさんは、其方の鏡と云ふにやア、なんぞ慥かな證據があるか。
金五　サそりやア。
三郎　なんとどうだ。まだ〳〵、おれが鏡と云ふ證據は、この鏡の裏には、稻妻が鑄付けてある。

ト裏を返し

ソレ見やれ。おれが云ふには違ひはあるまい。これでもこなさんの鏡と云ふか。イヤハヤ、呆れた奴等だわえ。
文吉　コレ〳〵金五郎どの、あの男が云ふ通りぢやア。どうか此方の物のやうにやア。
金五　いゝワ。打ッちやつて置かつしやい。どうするものか。主が出たならせう事ない。併し、たつた今あの棚から、バッタリ落ちたを取上げ見れば、在所に目馴れぬ鏡ゆゑ、鬚拔き鏡によからうと
三郎　それで貴様が斷わりなしに
金五　マア、そんなものサ。
三郎　イヽヤ、こなた衆の鬚拔き鏡にやア強過ぎる。こりやア妹が魂ひだ。いゝ所へ來合せて、すんでの事に古鐵買ひが手へ渡らうとしたわえ。

ト袋へ納め、懷へ入れる。

金五　それが累の魂ひなら、兄のこなたに渡してやらうが、まだ〳〵此方にやア、與右衛門が魂ひを預かつて居るよ。金が出來にやアあの女は、おれが自由だ。その上揃つた下駄の納まり。
三郎　イ、ヤ、あの下駄は、ありやァわしがのだよ。

金五　ハテ、よく欲しがる奴サ。

文吉　コレ、金五郎どん、いらざる鏡を持ち出して、投げられたのは此方の損。なんと、奥へ行つて、與右衛門が返事を。

金五　オヽ、聞き切つて行かざアなるまい。

三郎　さうしてやらつしやい。金五郎どのとやら。

金五　逗留のお客。

三郎　不承であらうが。

金五　ドリヤ、いしかつて待つべいか。

　ト合ひ方、時の鐘になり、金五郎、文吉、上の障子屋體へ入る。三郎兵衛、殘る。暖簾口より、與右衛門、薗生の前を誘ひ出て來り

與右　兄貴、爰にござりましたか。先刻この女中の事に付き、定めしこなたもこの與右衛門は、道知らすの者とも思はつしやらうが、決してさう云ふ心ぢやござらぬ。この女中の身元を云はゞ、誠あなたは。

三郎　コレ、今も今とて金五郎、他聞の憚り。女中樣、先づ先づこれへ。

　ト合ひ方變つて三郎兵衛、薗生の前が手を取り、上座へ直す。與右衛門、見て

與右　すりや三婦どのには、あなたの身元を。

三郎　聞かずと知れし頼兼公の、御臺所薗生さま。町人ながらも累が兄三郎兵衛、決してお心措かれまするな。

　ト薗生の前へ思ひ入れ。薗生の前もこなしあつて

薗生　さては其方は與右衛門が、妻の累に縁ある人か。自ら事は頼兼公の、御胤を懷胎なし、程なら足利家の騷動、山名持豐の讒に依つて、お家の成行き氣遣はしく、二つ引龍の御籏、自ら所持なし、才藏一人召し具して、慣はぬ旅のこの吾妻路。昨日思はず道にて難儀。才藏事も、その場より行くへ知れず、只ならぬ身の妾が心遣ひ。所持する御籏は、コレ爰に。

　ト懷中より袱紗包みを出し明ける。内より、序幕の勸化幟出る。

ヤ、、こりやコレ御籏と思ひの外、いつの間にかはこの似せ物。さては昨夜の暗紛れ、あの金五郎が。

　ト奥を見詰めて立ち上がる。三郎兵衛、これを留めて

三郎　すりや、大切なる御籏を、アノ奥に居る惡者が。

與右　イヤ、氣遣ひさつしやるな。昨夜思はず地藏前、切ツつはツつの騷ぎの中、怪しき奴が組みつくゆゑ、引ツ捕へたる暗紛れ、手に殘りしはこの御籏。

ト懐中より、二つ引の旗を出し、三郎兵衛へ渡す

三郎　すりや、これがお家に傳はる。

蘭生　さては御旗は、其方の手へ納まりしとや。エヽ、忝ない。

三郎　それぞ正しく奥に居る、あの金五郎が慥かに仕業。今もこれにて稲妻の名鏡、金五郎が所持せしゆゑ、奪ひ返せしこの御鏡。

ト鏡を出す。與右衛門、見て

與右　すりやアノ惡者が所持せしとな。油斷のならぬ鶏の目鷹の目。

三郎　この名鏡は蘭生さま。イザ、大切に。

ト鏡を蘭生の前へ渡す。

蘭生　これにつけても供なせし、あの才藏はなんとして。

三郎　今朝これへ來かゝる道、村境にて横死の侍ひ、旅人と見えしその死骸、正しくあれこそお供の武士。

蘭生　すりや、才藏は人手にかゝり相果てしとな。不便な者のその成行き。せめて敵へない死骸なりとも。

與右　サ、御尤もにはござれども、死骸を拙者が引受けなば、手蔓より詮議の起り。不便ながらも矢張り其まゝ。

蘭生　アヽ、心に任せぬ落人の……未來成佛、南無阿彌陀佛。

ト手を合せて思ひ入れ。時の鐘になり、向うより、角右衛門、小提灯を下げ、すた／＼來る。遥か後より、運八、上幕の形にて、これに船頭三人、手甲、脚絆に頬冠りに面を隠し、窺ひ／＼出て來る。角右衛門は内へ入り、四人は藪垣へ忍ぶ。

角右　コレ／＼、與右衛門どの。山名さまとやらから御詮議があると云つて、村中は皆庄屋どのへ呼ばれます。サアサア、お前もござりませ。

與右　ナニ、山名さまから御詮議とあつて。

蘭生　それぞ慥かに内らが。

三郎　ア、モシ。

ト蘭生の前を後へ隠し

村中の觸れとあらば、行かずばなるまい。必らずともにあと氣遣はずと行つて來さつしやりませ。

與右　イカサマ、猶豫あつては擲持つ足。直ぐに爰から。

三郎　あと氣遣はずと。

與右　そんなら兄貴、必らず留守を。

三郎　呑み込んだ。

與右　頼みましたぞよ。

角右　サア、ござりませ。
ト時の鐘になり、角右衞門、捨ぜりふにて、與右衞門を引ッ張り、花道より、東の歩みを通り、東の口へ入る。三郎兵衞、あと見送り
三郎　山名からの詮議とあれば、正しくこれなる薗生さまの。
ト思ひ入れ。運八、ソロ〳〵内へ窺ひ入る。
運八　さてこそ落人、動きやアがるな。
ト引きつける。三郎兵衞、薗生の前を圍ふはずみに、薗生の前の懷より、以前の鏡を落す。
三郎　こりや狼藉な。何をひろぐ。
運八　默りやアがれ、この女こそ薗生の前。與右衞門めを引出したも、後へ付け込む某が、手柄にするのだ。邪魔すな、そこ退け。
三郎　さては山名が廻し者。亭主は留守でもこの三婦が、預かつた薗生さま。指でもさすと爲にならぬぞ。
運八　小癪な事を。殊に落ちたは慥かに鏡。薗生の前に違ひはない。邪魔する野郎め。うぬから先へ。
ト拔いて三郎兵衞へ切りつける。立廻りあつて、三郎兵衞、この刀をもぎ取り、運八を切り倒し、止めを刺す。この血汐、落ちたる鏡にかゝりし思ひ入れにて、空にて、雷きびしく鳴る。薗生の前、これに恐る。三郎兵衞、血刀を拭ひ、空をキッと見て
三郎　ハテ、心得ぬ俄かの雷。
ト落ちたる名鏡を取上げ
さてこそ、稻妻鑄付けしこの名鏡、血汐の穢れにて空に雷電。ハテ、爭はれぬ鏡の威德。イザ、名鏡は薗生さま
ト襲はれ居る薗生の前に鏡を渡し
彼奴が死骸も、目立たぬやうに。
トあたりを見廻し、明け荷を見付け
幸ひあれなる荷の內へ。
ト運八が死骸を明け荷へ打込み。蓋をする。矢張り此うち雷。この時、奧より祐海坊、耳を押へ、行燈を下げ出て來り
祐海　桑原〳〵。うんらいぐうせいでん。さて〳〵ひどく鳴つて來た。コレエ、雷、喧ましいぞ。あんまり鳴るな。しつこく鳴ると今爰へ睨み落すぞ。
ト空を睨む。又ひどく鳴る。此うち、三郎兵衞は薗生の前を介抱して居る。
アヽ、嘘だ〳〵。睨み落して堪るものか。一體おれが嫌

ひなは、雷と精進物だ。ア、コレ、雷の咒ひは……オ、あるぞ／＼、爰に幸ひ鎌がある。この鎌を斯う軒へ差して置くと、どんな雷でも、西の海へ跣足で逃げる。雷は鎌が嫌ひ。坊主はかまが……こいつは後は云はない事だ。

ト草苅り鎌を取つて、軒へちよつと差し

これでよい／＼。

トきたりを見て

イヤア、そこにござるは先刻の客人だの。そちらのは昨夜逢うた女中さん。お前も雷がお嫌ひさうなよ。

三郎　コレ坊さん、この女中は、きつい雷が嫌ひと見えるが、なんと好い守はござらぬか。

蘭生　雷除けの守があるなら、下さんせいな。

祐海　されば、雷除けはないが、おれが懐中には觀音除けの鍋屋劍がある。これぢやア間に合ふまい……オツとあるぞ／＼。おらが師匠の祐天さまの名號がある。これを貰はして進ぜませう。大切に持つてござりませ。

ト懐中の袱紗に包みし一軸を出して、三郎兵衞へ渡す

三郎　これは幸ひ有り難い。祐天さまのこの名號。サアサア、御大切に御所持なされませ。

蘭生　こりや有り難い御名號。嬉しうござんす。

ト懐中する。

祐海　ハア、鎌の所爲か、雷が餘程遠くへ行つたはえ。何を云ふにも、爰らは筑波が近いから、雷で目を突くやうだ。ドレ、この間に寺へ行かうか。ほんに、この明け荷には狂言衣裳、歸りに庄屋へ屆けてやらう。

ト明け荷を脊負ひにかゝる。

三郎　ア、コレ、坊さん、その明け荷の内にやア、云ふに云はれぬ。

祐海　サ、生物と見たゆゑに、坊主の役に野邊送り。あの鬼怒川へどんぶり水葬。

三郎　そんなら賴むぞ。目立たぬやうに。

祐海　合點だ。

ト明け荷を脊負ひ、門へ出て空を眺め

ハア、雷が草臥れたかして止んだな。止んだと云つちやア此方の物だ。怖くはないぞ。ヤイ雷め、男ならもう一遍鳴つて見ろ。鳴る事はならないか。どうして成田屋に合つちやア、つがもねえ。

ト空を見て睨む。叉グワラ／＼と強く鳴る。

ア、野暮な。嘘だわえ。桑原々々。

ト重さうに明け荷を脊負ひ、向うへ入る。三郎兵衞、
介抱して

三郎　最早雷も、餘程靜かになりました。蘭生さま……
ハテ、女儀と云ふものは、雷と云ふと其やうに。モシ
今の名號、大切に持つて居られませう。

トこの時、五ツの鐘鳴る。金五郎、ツカ／＼と出て來
り

金五　先刻の女は爰に居たか。約束通りだ。ドレ、連れて
行かう。

ト蘭生の前が手を引き立てる。三郎兵衞、これを留め
て

三郎　こりやア先刻の金五郎どの、この女中を、どうする
のだ。

金五　ハテ、與右衞門と番つた詞。いま打つたるは慥かに
初夜。鐘は鳴るとも金は出來まい。それゆゑ女を連れて
行くのだ。

三郎　イヽヤ、約束であらうが、肝心の與右衞門は留守。
後を預かつたこの三婦は、滅多にやア渡されない。お主
が方にも手付けが取つてあるぢやアないか。

金五　ハテ、手附けと云つてもがた／＼丸。この刀さへ返
せば、おれが代物、連れて行く。ソレ、與右衞門が渡し
た魂ひ。

ト預かつたる刀を三郎兵衞が前へ抛り出し

サア、女來い。

蘭生　すりや、どうあつても自らを。

金五　連れて行くのだ。おれと一緒に。

三郎　イヽヤ、どうあつても、やる事はならない。

金五　ハテ、面倒な。

ト連れて行かうとする。三郎兵衞、金五郎と立廻り、
見事に引敷く。

三郎　やる事はならないぞ。

トこの時、奥より、文吉、伽羅の下駄を引提げ出て來
り

文吉　コレ金五郎、名木の下駄は捲上げたぞ。

三郎　ナニ、その木履を。

ト文吉を引きつける、この間に、金五郎起き上がつて

金五　若い者ども。合點か。

三人　呑み込んだ。

ト表に窺ふ鬼怒川の船頭三人、ツカ／＼と入り、蘭生
の前を引立て、門口の四つ手駕籠へ入れ、繩にて、駕

籠を結はへる。

三郎　あなたをやつては。

ト立ちかゝるを文吉、足に獅嚙み付く。この間に金五郎摺り拔け

金五　山名の陣所へ、その駕籠をやれ。

駕舁　合點だ。

ト駕を舁き上げ、三人一散に向うへ入る。金五郎、行かうとする。三郎兵衛、引きつける。この時、奥より累、ツカ／＼と出て

累　ヤア、兄さん、このマア樣子は。

三郎　先刻の女中を惡者めらが、駕籠に打乘せ山名の陣所へ。

累　ヤ、そんならあなたを。

三郎　其方は追ひかけ、合點か。

累　心得ました。

ト行かうとする。

三郎　ヤレ待て累、向うは大勢、女の身で、もし手に餘らば夫の魂ひ。

ト以前の刀を投げてやる。累、取つて

累　心得ました。イデ追ツ付いて。

ト行かうとする。文吉、支へる。累、跛にて轉ぶ思ひ入れ。この時、文吉が持つたる下駄、前に落ちてある

三郎　心急く程跛の妹。その足元では。

ト累、落ちたる下駄に目を付け、手早く取上げ

累　これ幸ひに片しの下駄。お免し請けて跛のわたしが

三郎　いそふれ妹。

累　心得ました。

ト捨て鐘になり、累、片しの下駄をちんばに穿き、一散に向うへ入る。三郎兵衛、金五郎、文吉、立廻りよろしく、行燈を踏み倒し、暗がりの仕組み。東口より與右衛門、スタ／＼戻つて來る。舞臺は金五郎、棚へ上げ置きし刀をぼッ込み、探り廻つて、片しの下駄を取上げ、行かうとする。三郎兵衛、引留める。三人暗闇の立廻り。此うち、與右衛門は花道へ來り、金五郎片しの下駄を持ち、與右衛門と摺れ違ひ、はう／＼向うへ逃げて入る。與右衛門、門口へ來り

與右　こりやどうだ。行燈が消えて眞の闇。

三郎　さう云ふ聲は與右衛門か。

與右　こなたは三婦どの。

三郎　コレ、お主が留守に金五郎、約束通りと先刻の女中

を、駕籠へ打込み連れ行くゆゑ、妹の累に一腰渡し、追はへさせたはたつた今。金五郎めも取逃がした。ちつとも早く、後追ひかけ

與右　蘭生の前の御後を、直ぐにこれから

三郎　ぬかるな與右衛門。

與右　合點だ。

ト行かうとする。文吉、探り寄つて

文吉　與右衛門やらぬ。

ト組みつくを、與右衛門、内へ投げ込む。起き上がつて行くを、三郎兵衛一つ當て、門口をしやんとさす。この時、軒の鎌、表へ落ちる。與右衛門、取上げ

與右　手馴れしこの鎌。

三郎　與右衛門早く。

與右　程は行くまい。

ト與右衛門、向うをキッと見る。文吉、起き上がり、三郎兵衛へかゝる。三郎兵衛、拔打ちに切り下げる。文吉、見事に草井戸へ切り込まれる。與右衛門、向うへ一散に入る。三郎兵衛は血刀を拭ふ。この仕組みよろしく、拍子。

幕

幕の内、捨て鐘にてツナギ、直ぐにこの幕を引返す。

大詰　鬼怒川の場

役名‖持氏息女、蘭生の前。羽生村の金五郎。
羽生村の與右衛門實ハ絹川谷藏。同女房、累。

本舞臺、三間の間、舞臺よき所まで張出したる高土手。上の方に柳の大樹。舞臺一面の吊り枝。向う黑幕、稻村、樹立、打拔きよろしく、舞臺前通り蛇籠波板、柵、流れ灌頂、桶の口、よき所に誂らへの屋根を掛けたる庚申塚。下の方に、石の側に鬼怒川寶善寺堤と朱にて書きあり、雷の音にて、幕明く。

ト雨の音、捨て鐘、雷、きびしく鳴る。船頭三人、駕籠の先へ白張りの地藏提灯を吊し、花道より、スタスタ舁き出て來り、土手の上へ駕籠を下ろし

船一　ヤレ／＼、今の雷は剛氣なものだ。羽生村から爰まで一目散に來たが、おらァ今の雷に、臍を拔かれはしなんだか。爰はマアどこであらう。

船二　爰は寶善寺の堤端れだ。あの金五郎は、もう來さう

文政元年八月中村座上演繪番附

なものだ。
船三　それ〳〵、ひよつと與右衞門めが、うしやアがつちやア面倒だ。早く駕籠を渡して來べい。舁き上げろ〳〵
ト駕籠を舁き上げる。船頭一、駕籠の內バタ〳〵して、內より以前の鏡落ちる。船頭一、これを見付けて
待ちやれ〳〵。內から何か落ちたぞよ。
ト鏡を取上げる。駕籠の內より、出ようとする。皆々これを押へて
三人　ドッコイ〳〵、逃がしちやアならない。
船二　落ちた物は、なんだ〳〵。
船一　見やれ。鍋蓋のやうな鏡が落ちた。
トまた駕籠の內バタ〳〵する。三人、これを押へて
船二　ドッコイ、逃がしてなるものか。何にしろ、こりやア金五郎に渡すがいゝ。
兩人　それがいゝ。舁き上げろ。
ト駕籠を上げようとする。向うバタ〳〵にて、累、一散に駈け來り、この體を見て
累　ヤ、菌生さまはこの駕籠に。
ト駈け寄るを、三人これを支へて
三人　ヤ、累だな。寄りやアがるな。

ト駕籠を上げようとする。累、引戾さうとする。捨ぜりふにて、爭ふうち、向うより、金五郎、片しの下駄を持ち、一散に駈け來り、この體を見て、累を引退ける。三人、見て
三人　ヤ、金五郎か。
累　ナニ、金五郎とや。
ト寄るを金五郎引留める。
船一　コレ〳〵、いま道を急く駕籠の內から、こんな鏡が落ちたぞよ。
ト金五郎へ渡す。
金五　こりやアコレ稻妻の名鏡。
累　ナニ、名鏡とや。
ト取らうとする。空にて雷ひどく鳴る。三人、耳を押へ
三人　桑原々々。こいつは摑まれちやアならぬ。
ト駕籠を置き捨て、捨ぜりふにて逃げて入る。
金五　これエ、駕籠をやつてくれないか。エ、若い者ども。雷がそんなに怖いか。エ、大べら坊めが
ト呼び立てる。累、武者振り付いて
累　その名鏡をわたしに渡しや。

金五　イヽヤ、不思議に手に入るこの鏡、渡す事はならない。

累　イヽヤ、わしに渡しや。

金五　イヽヤ、ならない。

ト兩人、鏡を引合ふはずみに、金五郎の手へ鏡の袋殘り、累の手へ名鏡殘つて、軒鼻の提灯の明りにて、累覺えず我が影を見て、ワッと飛び退き、鏡を捨てる。金五郎、鏡を取らんと手をかけるを、累、また顏を外けて鏡を取上げる。兩人爭ふ。また思はず顏を見て累、ワナ〳〵慄ふ。金五郎、これに目を付け、さてはと思ひ入れ。

金五　累、先刻に云つた願を破つて、わりやア鏡を見たであらうが。

累　エ。

金五　イヤサ、願立てしたる鏡の表。わりやア鏡を見たであらうが。

累　僅かな明りに映る影。殊に映りし面ざしは、似ても似付かぬわたしが面體。映りし影は慥かに外の。

金五　イヽヤ、今のはわれが面ざし。疑はしくば、それ。

ト累を引寄せ、明りの際へ引きつけ、無理に顏を突きつける。累、見まいといろ〳〵思ひ入れあつて

累　ア、ソレ、誰れやら覗いて。

金五　イヽヤ、外に覗いた者はない。惡女の影は即ちわれだ。

累　エ、でも今日が日まで、鏡は手にも觸れざれど、手水の水や洗濯の、盥へ汲みし其うちに、見まいと思へどツイ怪我で、先刻もお前が汲み上げし、釣瓶の内の水鏡、映りし影は以前に變らぬわたしが顏。

金五　それを見ながら驚かぬは、累が目からは替らぬ相好、これにて思ひ當りしは、先刻に我が家で曇りし鏡、地金を顯はす鏡の不思議。正しく名鏡の威德ならんと、今と云ふ今氣が付いた。惡女を顯はすこの鏡、水に映ると、名鏡に映る面體、拔群の相違であらう。ト、とつくりと鏡を見ろ。

ト無理に差しつける。累、いろ〳〵思ひ入れあつて

累　よもやとは思へども、コレ〳〵、模樣も同じ龍田川髮の恰好、アレ物云ふ口元。そんなら映る俤は、いよいよわたしでござんすか。こりやマアいつから此やうにわたしの面は變つたぞいな。鏡を見ずばいつまでも、恥かしい目をしやんせう。そんならこれが姉さんの、死靈

の業でござんすか。こりやマア、一生これで居るかいなう。直る仕様はござんせぬか。わたしや恥かしい。どうせうぞいなう。

トいろ／＼思ひ入れあつて、泣き倒れ伏す。金五郎、嘲笑つて側に差寄り

金五　尤もだ。われがさう云ふ悪女の相になつたゆゑ、あの與右衛門が愛想を盡かし、先刻におれが連れて行つた駕籠の内のあの女、ありやア與右衛門が胤を孕んで居るまだ／＼われに云ひたい事があるが、こりやア云ふまい云ふまい。イヤ、云ひますまい。

トこれにて、累、顔を上げ、金五郎に縋つて

累　コレ、金五郎さん、何なりとこの上、お前の云はんす事を聞く程に、サア、云うて聞かして下さんせ／＼。

金五　成る程、それ程聞きたがらば云つて聞かさう。その代り、てまへに聞く事がある。あの與右衛門は以前、絹川の谷藏と云つたであらうな。

累　アイ、成る程、絹川の谷藏と云つたわいな。

金五　さうであらう。谷藏ならば、われが姉の、高尾を殺した人殺し。

ト名木の下駄を見付け、取上げて

こりやコレ頼兼が廓通ひの、名木の木履であらうがな。

累　アイ、さうぢやわいな。

金五　この下駄は、おれが貰はう。

累　アイ、どうなと勝手にしなさんせ。

金五　よし／＼。コレ、こりやア大事の事だがの、あの駕籠の内の女は、與右衛門が隱し妻、慥か名は、オヽ、菊野と云つた。

累　エヽ……………道理こそ最前の、コレ

ト以前の文を出し

與右衛門どのが、知らぬ顔にて渡した文。今の今まで眞實に、封も切らずに置いたこの文。そんならお前の云ふに違はず。

ト封を切り、提灯の明りにて、透かし見る事あつて

エヽ、舌たるいこの文言、腹が立つわいの／＼。

金五　腹が立つか。

累　口惜しうござんす。

金五　まだ云つて聞かせる事がある。あの女は懷胎だが、わりやア、それを知つて居るか。

累　イヽエイナ、先刻には病ぢやと云うて、懷胎と云ふ事は、決してわたしに

金五　云はない筈だ。われが腹にも子があるゆゑ、どちらと云つても與右衞門が胤。シタガ、愛想の盡きた累が方の、腹の餓鬼めはおろしてくれろと、先刻にてまへに渡した藥。ありやアてまへに服ませるのだよ。

累　エ。

ト懷を探し、袂より、最前の藥の包みを出し

すりや、この藥を、わたしに服ませて

金五　おろしてくれろと頼まれたが、あんまり不便に思ふから、おらア隱さず云つて聞かす。わりやア亭主に嫌はれた。女の道が立つまいぞよ。

トいろ〳〵と焚きつける。累、藥と文を兩手に持ち、鏡に映る我が顏を怖々に見る事あつて、いろ〳〵腹の立つ思ひ入れ、身を慄はして泣き倒れる。金五郎、下駄を引ッ提げ、立ち上がつて

いま爰へ與右衞門が來たら、必らず恨みを忘れるな。百兩になる代物、手放しお主に渡す程に、その代りにやア名木の下駄、一足揃へておれが貰つた。必らず共に仕損じな。其うちおらア向うの堤、樣子はあれなる辻堂で。

ト云へども、累、駕籠の方を見て、無念の思ひ入れ。

ハテ、執念の……コレ、喰はせろよ。

ト藥を服ます思ひ入れをして見せる。時の鐘、合ひ方になり、金五郎、思ひ入れあつて、下駄を下げ、堤傳ひに下座の方へ入る。累、無念の思ひ入れ、胸苦しき體にて、鏡を持ち、前の流れへ這ひ寄つて、川水を呑んで手に掬ひ上げる。五體慄へて手に水の溜らぬ思ひ入れ、二三度あつて、河原にある榮螺殼手に觸るゆゑ、拾ひ取つて、これに水を汲んで咽喉を濕し、フッと心付いて、持つたる藥を榮螺の貝に入れ、振り廻して水にほだて、駕籠の側へ探り寄つて繩を引き切る。內より、薗生の前、走り出て花道の方へ行かうとする。

累　菊野さん、待たしやんせ。

ト呼ぶ。薗生の前。我が名でなきゆゑ、矢張り行かうとするを、ツカ〳〵と寄つて、裾を扣へ

コレ、菊野さん、待てと云つたら待ちなさんせいな。

薗生　さう云やるは、慥か與右衞門が女房の累。

累　アイ、その與右衞門が女房の、わたしや累でござんすわいな。

薗生　その又累が、なんで自らを、覺えもない菊野と云やるは。

累　コレ、隱さんすな菊野さん。イヤ、菊野どの。エ、

こなたはなう。與右衞門が女房の累かと、こなたの口からなめ過ぎた、その呼びやうは、エヽこなたは。

ト無念の思ひ入れにて、榮螺の貝を差しつけ

これを飲んで下さんせ。

蘭生　ナニ、それを飲めとは、そりやなんぢや。

累　こりや、月よどみの流し藥。

蘭生　エヽ。

ト驚ろく。

累　先刻に與右衞門どのが云はるゝには、腹に病のあるこなさん、この藥を服んで見さんせ。

蘭生　ぢやと云うて、流し藥と聞くからは、どうしてそれが。

累　よもやこなさん服まれまい。病と云ふは僞はりにて與右衞門どのゝ、こなたは胤を身ごもらうがの。

蘭生　アコレ、どうしてマア滅相な。アノ自らが。

累　サ、懷胎せぬ者ならば、この藥を服んで下さんせ。

蘭生　でも、見す〳〵に恐ろしい、藥と云やるを聞いては

累　そんなら夫の胤を、いよ〳〵

蘭生　エヽ、滅相な。どうしてマア。

累　そんなら服まんせ。

蘭生　ぢやと云うて。

累　夫の胤でないならば、そりや何者の子でござんす。

蘭生　サア、それはどうも、明かしてそれと。

累　云はぬはいよ〳〵夫の胤。服んで見さんせ。

蘭生　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

累　よもや藥は服まれまいぞえ。

ト差しつける。蘭生の前、この手をキッと捉へて

蘭生　エヽ大膽な。自らに無體の狼藉、慮外な累。

ト貝をもぎ取り、前の流れへ捨てる。累、キッとなつて蘭生の前を引きつける。

累　エヽ、こなたはなう。

ト引廻して無念の思ひ入れ。禪のツトメになり、向うより、與右衞門、一散に出て來り、この體をためらひ見て

與右　ヤ、女の泣き聲は氣遣はしい。累は居ぬか。

ト駈け寄り、この體を見て

ヤ、そちや累か。金五郎めは爰へうせたか。われが捉へて居るのは金五郎か。して、蘭生さまは。

トよく〳〵見て

昭和二年四月帝國劇場上演

尾上梅幸の累　松本幸四郎の與右衛門

ヤヽヽわれが捉へて居るお方は。

蘭生　コレ與右衞門、わしを累が此やうに、酷たらしう無體のあり條。

與右　さう仰しやるは蘭生さま。コリヤ、何ゆゑに勿體ない。女房放せ、コレサ、累、コリヤ、氣が狂つたか。狂氣したのか。

トもぎ放す。直ぐに累、與右衞門に武者振り付いて聲を慄はし

累　コレ、與右衞門どの、わしや氣が狂つた。狂氣した

與右　そりや又なんで。

累　コレ、この鏡で。

ト鏡を突きつける。

與右　すりや、その鏡で其方が顏を。

累　アイ。ようもこれまでわたしが相の、變りし事をこなさんは、なぜに今まで恥かかせ、鏡を見せて下さんせぬ。

與右　さては累は面ざしの、變りし影を鏡で見て、それゆゑの恨み事。そりや聞えたが、なんであなたを。

累　サ、そのあなた〳〵とこなさんの、お主あしらひ、それが一番腹が立つ。あの女こそ菊野と云ふ、お前の色であらうがの。

與右　コレエヽ、痴けた。勿體ない。あなたは現在御主人の。

累　イヽヤ、そりやこなさんの僞はり事。證據と云ふはコレこの文。先刻にこなさん渡さぬ顏で、莨入れの内にあるのは知りながら、知らぬ顏にて渡せしは、わしに自滅をさせるのか。この顏ゆゑにこなさんは、愛想が盡きたであらうがの。

與右　コレ累、愛想の盡きる位なら、この腹帶を締めささうか。

ト懷へ手を差入れ、腹帶の先を引出し

これが愛想の盡きない證據。姉が死靈に面體の、可哀や以前に變れども、兄貴に番つた詞は金鐵。朝夕床の上げ下ろし、怪我にも一日荒けなく、云はないおれが心根をわりやア忘れはしまいがな。殊にはわれが懷胎の、この與右衞門が初子持ち。首尾よう二つにしたいとは、神や佛へ手を上げて。

累　イエ〳〵、こなさん、そりや噓ぢや。その深切な心根で、なぜにわたしが腹な子を、水にしようとこなさんは、藥を服まさうとしやつたぞ。

與右 ヤ、、、ナニ、藥とは。

累 恍けさんすな。金五郎どのをお前が頼み、わたしが腹な子をおろさせ、あの女中の腹な子を、お前大事に育てる心でござんせう。さう云ふ邪慳な心なら、腹な子よりもわたしから、いつそ殺して下さんせ。エ、、こなたはなう。

與右 ナニ、藥を金五郎に。アヽ、そんなら彼奴にしやくられて、わりやア、誠に思ふのか。他人の詞を誠にして深切通せし與右衛門が、わりやア詞を疑ふか。

累 アイ、疑ふ〳〵。コレ、鏡を見せて下さんせぬが、これがお前を疑ふ始まり。こんな醜いわしが顔、なぜに隱して下さんした。死靈の業と云ひながら、鏡に映るわたしが影、我れと我が身に怖氣立ち、我が面差しと知らぬ身の、さんばら髪で居る時も、引いて頭の形かたち、ほんに累は美しい、好い生れぢやと人さんが、嬲らしやんすを仇事と、知らず心で誠と思ひ、十人並にも優つたかと、わたしが心で自慢して、これ見よがしの伊達模樣好んで染めた龍田川。なんの似合はう、着て居られう。わしや恥かしい。面目ないわいなう〳〵。

薗生 コレ、累どの、それが心の逆ひと云ふもの。今ぞ明かさん自らは、頼兼公の御胤を、この身に宿せし薗生の前。必らずともに疑うて。

與右 アイ、お詞に違ひなき、主人の御胤、あなたは御臺の薗生さま。必らずともに疑はず、どうぞ心を取り直し共々力となつてくれ。コレ、夫が手を下げ頼む。その疑ひを晴してくれ。

累 イエ〳〵、そりやこなさんの皆僞はり。お主ごかしのその女、憎さも憎し。

ト立ちかゝる。與右衛門、引留め

與右 すりや、どうあつても御主人を。

累 こなたの色のあの女、切り苛なんでもこの恨み。まだその上にこの鏡、惡女の相を顯はせし、仇たる鏡は。

ト鏡を振り上げ、水中へ投げ込む。

與右 ヤ、、、名鏡を。

ト川端へ駈け行く。薗生の前も立ちかゝる。この間に累、抜打ちに薗生の前が胸先を打つ。薗生の前ウンと氣を失ふ。與右衛門、驚ろき駈け戻る。累、薗生の前を又打たんとする。與右衛門、この手を捉へる。兩人木太刀を持つたるまゝ、土手の上へ、好き所へグツと差込み、累が襟髪を掴んで引きつける。捻ぢ廻し、キ

ツとなつて

エヽ、妄な人外めが。鏡を破却しその上に、お主を祟なす人面獸心。おのれは天魔の魅入つたるか。姉の高尾も我が手にかかり、その妹のおのれまで、殺さにやならぬこの場の仕儀。さはさりながら惡人の、おのれを殺せば胎内の、可哀い水子も甲斐もなう、日の目も見せず殺すが殘念。前生からの因果か業か。現在の夫が手にて、妻や子を一つに殺すも約束事。思へば〳〵おのれはなア。

ト捻ぢ廻してキツとなる。

累　エヽ、こなさんは返らぬ事。殺さば殺せ女の一念、一度死しても魂ひは、五體を放れ宙に迷うて幻の、陽炎稻妻水の泡、浮かみもやらでこの土に止まり。子孫は愚か田畑の、虫けらとまで生を替へ、七世の末まで付き纏ひ、恨みを云はで置かうかいなう。

與右　飽くまで凝つたるその氣ざし。夫が手にかけ、この世の別れ。

ト鎌にて切つてかゝる。累、掻い潜つて土手へ駈け上がり、兩人、キツと見得。これより、誂らへの合ひ方、雷の音、本雨頻りに降る。後は一面の稻妻。兩人、土手へ上がり下りタテ。累、手を負ひ、こけ落ちる。

與右衞門、鎌にて累を切り下げる。この仕組みよろしく、トヾ累が髻を捉へ、鎌にて首を掻き切る。

心柄とは云ひながら、變り果てたるこの死態。

ト首を稻妻の明りに透かし見る事あつて

姉の高尾に妹の累、因果づくとは云ひながら、手にかけた上からは、三婦へ一筆書き殘し、妹二人が敵の與右衞門、討たるるまでも鏡の在所、尋ね求むる暫時の猶豫。ソレ。

ト合ひ方。舞臺先の流れ灌頂の白布を取つて、小指を喰ひ切り、書置を認め、切り首を包み、上の庚申塚の屋根の上に置く。この時、金五郎、窺ひ寄つて

金五　さては累を殺した與右衞門。

與右　さう云ふ聲は金五郎。ハテよい所で

ト兩人立廻り

逢つたなア。

金五　累に嫉妬を勸めたも、濡れ手で粟の女が胎内、賴兼めが血筋を絶やす、流し藥を勸めたも金五郎。與右衞門わりやア人殺し。うぬに繩打つ、覺悟しろ。

與右　累が最期もおのれから。極惡人め、觀念ひろげ。

ト鎌にて打つてかゝる。金五郎、拔いて切りつける。

この立廻りに伏したる蘭生の前が上へ金五郎こけかゝる。これにて、蘭生の前心付き、起き上がる。金五郎見て

金五　ヤ、わりやア蘭生か。

與右　さてはあなたは御安泰。

蘭生　累が嫉妬に切りつけし、刃に伏せしと思ひしに、雨のしたたり咽喉に入り、心付いたる自らが、惣身に刃の疵もなう

與右　御安泰なるこの樣子。

金五　蘭生はおれが。

ト立廻りにて、與右衞門、草叢にある木太刀を見付け

與右　こりやコレ木太刀の捨てありしは、さては累は木太刀と知らず

金五　おのれが鞘へ仕込んだ木太刀。それで累は、あの女を。

蘭生　廻り〳〵て自らが、過ちなきも懷中の、この名號の奇特なるか。

ト懷中の名號を開く。

與右　木太刀になりしも六字の加護。さては中心を入れ替へたは

金五　皆金五郎が仕事だワ。うぬが刀の中心を爰に。我が魂ひで成佛しろ。

ト切りつける。與右衞門、立廻り、この刀をもぎ取り金五郎をしたゝか抉る。この血汐したゝり、水中より水氣立ち登り、以前の鏡顯はれる。與右衞門、キッと目を付ける。

與右　さてこそ血汐の爲、水氣と共に名鏡の、顯はれ給ふか。アラ〳〵有り難やなア。

ト死骸を切り倒し、鏡を取上げる。

蘭生　すりや名鏡は、再びこなたの

與右　手に入るからは、片時もこの場を。

蘭生　與右衞門、供しや。

與右　イザ、お立ちあられませう。

ト兩人、花道の方へ行く。大ドロ〳〵になり、心火燃え、上の方の切り首包みし白布、仕掛けにて開き、眼を見開き、兩人、連理引きに引き戻され、キッとなる

これは。

累　共に冥途へ誘引せん。蘭生の前。

與右　エヽ、恐ろしき累が執着、この名號の奇瑞を以て。

ト鏡は蘭生の前へ渡し、名號を取つて差しつける。大

ドロ〳〵打上げると共に、心火消え、魂ひ飛び去り、惡女の切り首、以前の累の切り首になる。

蘭生　ヤ、、今まで惡女の累が面。眠るが如き以前の面ざし。さては高尾が執着の、立去りたるか。エ、、有り難やなア。

與右　ト思ひ入れ。鷄の聲、明け六ツの鐘。雨戸開き、夜明けの景色。以前の三人取巻き

三人　與右衞門、動くな。

トかゝるを取つて投げつけ、足下に踏まへ

與右　小癪な事を。

ト蘭生の前を圍ひ、キツと見得。カケリになり。

幕

伊達競阿國戲場（終）

仁木彈正
山鳥割鉤匙
渡邊民部
吉原雀金貫

伊達風流東山榮

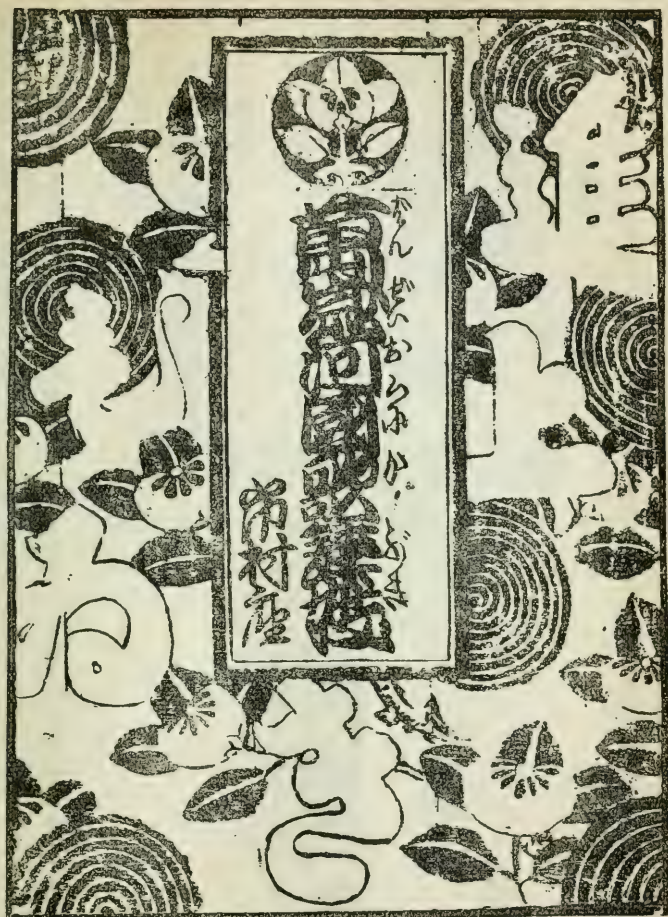
頃も彌生の仲の町櫻にかをる伽羅の下駄その寛濶は賴兼が萩大名の狂言に外へ高尾はやるまいぞやるまいぞとて煩惱の絆に繋ぐ娘の花笄島田重三と金谷金五郎互ひに折を松井田が素性を問へば山名の某さて對決の晴勝負に角力取の關之助がどつこいとまつた御殿の床下鼠坊主も忍びの衣手道哲庵の額の小さんに女之助が筒井筒も底意は深き外記左衞門が舞ひ納めたる一國の宮司

再御攝橘花櫓

萬歳阿國歌舞妓

御取上

四番續

初演の繪番表紙

萬歲阿國歌舞妓

三建目

東寺裏の場
島原廓の場
六條河原の場

役名｜足利左金吾頼兼。大江圖幸鬼貫。武田武助。土子泥之助。尤道理之助。足輕、岩手助八。夜番人、木戸嘉兵衞。豆腐屋婆、おくら。同丁稚豆太。傾城薄雲實ハ息女菊姫。遣り手、おくま實ハ八汐。醫者、大場宗益。傾城、高窓。奥女中、沖の井。千束屋女房、おせん。太鼓持ち、似十。仲居、おとく。荒物屋、無理右衞門。若黨、茂佐八。奇妙院滿海。庄屋、野之作。奴、丸平。同、角内。島田女之助。島原の傾城、高尾太夫。夕ぐれお六。土手の道哲實ハ島田重三郎。角力取、鳴神鶴之介。

本舞臺、三間の間、正面、石垣の高土手、この上、柾木垣、後に黑幕。上手、柳の立ち樹、すべて、東寺裏手のかゝり、禪のツトメにて、幕明く。

ト爰に、川豆のおくら婆、世話やつしの婆にて、森田屋の頭巾をかぶり、顏を隱し、破れたる衣を着、草履、股引を穿いたる坊主を引ッ捕へ、草履を振り上げて居る。これを、豆腐屋の丁稚、豆太、足駄にて留めてゐる。

豆太　コレ〳〵、阿母さん、たかゞ乞食坊主だ。堪忍しておやりなさい。

くら　イヤ〳〵、ならぬ〳〵。先刻から、薄穢ない形をして、後になり、先になり、日暮れだと思つて、わしが簪を拔かうとは、いけッ太え。年は寄つても、南禪寺豆腐のおくらさんだワ。こんな奴は、懲りるやうに、まちつと斯うして。

ト また叩くを

豆太　コレサ、身に誤まりがあるから、手出しもしません。もう、放してやるがようござります。

くら　手出しをしたら、殺してしまふワ。われは、其方へ退いてゐろよ。

豆太　いゝ加減に、放しておやりなさい。
くら　イヤ、どこまでも、この坊主め。
ト ぶちにかゝるを、豆太留める。このはずみに、件の坊主は、振り放して、下座へ逃げて入る。豆太は、矢ツ張り留めてゐる。
南無三、坊主は逃げ居つた……われも、なぜに留めるぞいの。併し、あれ程ぶつてやつたら、少しは腹も癒たといふもの。あゝしてやらねば、彼奴の爲にならぬわいの。
豆太　それだと云つて、可哀さうに、何も取りもしねえものを。
くら　ヤレ〳〵、油斷も透もなるものぢやない。
ト 頭をいぢり廻して
それでも、ぶつたゞけ得といふもの。その代り、足袋も何も、此やうに。
ト 砂を拂ふ。
豆太　モシ〳〵、その草履は、鼻緒が切れて居ますぞえ。
くら　ほんに、あんまり強くぶつたせいで、頭の物を取らねば、また此やうな目に……コレ、豆太、そこらに藁があらう。ちよつと、打つてたもいの。
豆太　どうして、それが出來るものか。内まで、辛抱なさい。
くら　イヤ〳〵、これでは行かぬ……ちよつと、結び付けてくりやいの。
豆太　こいつは、とんだ目に遭ふものだ。
ト 小言云ひながら、鼻緒を立てる。時の鐘、木魚の合ひ方になり、向うより、木戸の嘉兵衛、半纏を引かけ、草履、股引、親仁の拵らへにて、尻をからげ、六尺棒を持ち、片手に、東と云ふ字の付きし弓張りを灯し、夜廻りの思ひ入れ。後より、岩手助八、親仁の拵らへ、紺の看板一本差しにて出て來り
嘉兵　ヤレ〳〵、マア、縁といふものは、盡きぬもの。久し振りだ。さうして、今は。
助八　サア、知つての通り、もと奉公のうち、磨き直した八重垣の鎌、盗んだ奴は何國の者か、途中で奪ひ取られしゆゑ、我れは屋敷を直ぐさま出奔。それゆゑ、今は此やうな態。
嘉兵　それはマア、氣の毒な。わしも以前は、仁木さまに奉公したれば、今では氣樂な番太の夜廻り。
助八　ヤレ〳〵、年とつた身に、定めし御苦勞。お前のお庇で、道も明るく。とてもの事に、もちつと一緒に。

嘉助　サア〳〵、ござらつしやれ。
ト両人、舞臺へ來る。おくら、これを見て
くら　コレ〳〵豆太、幸ひの提灯。灯をお借り申しや。
ト豆太、草履を穿く。
豆太　アイ〳〵、合點だ
ト豆太、懐中より、小提灯を出し
モシ〳〵、御無心ながら、灯を一つ……オヤ、お前は隣の小父さんぢやねえか。
嘉兵　ほんに、豆太の。今頃どこへ行きやつた。サア〳〵、お灯を。
ト豆太、火を移す。
くら　ヤレ〳〵、嘉兵衛どの、まだ寒いのに、夜廻りでござるか。
嘉兵　オヽ、阿母さんも御一緒に。そして、お前様は。
くら　ちつと近所まで出ましたが、道で泥坊に遭ひまして、大きに隙取りましたわいの。
嘉兵　それは嫌な事。何も取られはなさらぬか。
ト此うち助八、おくらが聲を聞き、不審の思ひ入れ。
くら　ハイ、仕合せと、何も取られませぬが、鼻緒を。
ト提灯の側へ寄らうとして、思はず、助八と顔見合せ
ヤア、お前は助八どのか。
助八　さてこそ〳〵。われは、女房のおくまだな。
トおくら、逃げようとするを捕へ
どつこい、さうはならぬ。道理こそ、似たやうな聲と思つたが。うぬ、逃げようとは憎い奴の。コレ、おのれはな、おのれ内を駈け出すと、直ぐに妹娘を連れ、どこぞへ行つたか行くへなし。尋ねやうにも貯へなく、殊に質の在所、何やかや、入用だらけに姉の娘は、この島原へ勤め奉公。それにわれは、ようも〳〵亭主を見限り、よくも今まで便りもせずに居をつたな。サア、われが住居を、キリ〳〵吐かせ。
嘉兵　ハア、そんなら、おれが隣に居たを、こなたの方へは。
くら　なに知らせるものか。家出したのを幸ひに、内證で姉の娘は其方へ渡し、それから妹の果を連れて別れ、今までこなさんに便りをせぬも、有やうはまた無心がうるさく、亭主ながらも錢金づく。それでこなたへ音信不通。
助八　うぬ、その口を。
ト捻ぢ居るゆゑ

くら　アヽ云ひます〳〵。わたしが居所云ひます程に、その手をゆるめて。

助八　ソレ……キリ〳〵吐かせ。

　ト突き放す。

くら　サア、その居所は……べら坊やアい。

　ト下座へ逃げて入る。

助八　憎くい女めが。

豆太　おれも後から。

　ト行くを、助八、捕へろゆゑ、これを突き倒し

べら坊やアい。

　ト一散に、下座へ入る。始終、捨て鐘、助八、追ひかけ行くを

嘉兵　アヽ、モシ〳〵、助八どの〳〵。モウ〳〵追ひかけるには及ばぬ。ほんにあれが、癩病に棒打ち。併し、おくらどのゝ内は、わしが直き隣り。わしが内を尋ねござれば、ツイ知れる事。コレ〳〵、幸ひ爰に、わしが悴を外記左衞門さまのお屋敷へ、奉公にやる請け人の所書付け。

　ト懐中より、書付けを出し

ソレ、これが慥かな好い手懸り。この書付けを持つて、わしが内へ尋ねてござれば、ツイその隣りがおくらどのの内。サア〳〵、これをこなたに。

　ト渡す。

助八　ハイ〳〵、忝なうござります。そんなら、早速尋ねて參りませう。併し、大事の書付け。

　トしまはうとして、懐より手拭を引き出す。このはずみに手拭にくるみし、五十兩の金、パッタリ落ちる。此うち、後に、以前の坊主、窺ひ居る。

嘉兵　オヽ、それ〳〵、金が。

　トこれにて、助八、取上げて

助八　コレ、この金は、賣つた娘へ年季を増す、その身上借りの五十兩。これで失うた一品が。

嘉兵　そんなら、話しの一品が、アノ賣り物に。それは仕合せ。さりながら、年寄りの夜道に大枚の金、わしも送つて進ぜたけれど、時が延びては又しくじり。随分と心を付けて歸らつしやりませ。

助八　ハイ〳〵、御深切、忝なうござります。これも孝行ゆゑ、寶が戻れば、以前の助八。

嘉兵　それは耳寄り。めでたい〳〵。そんなら明日は、必らず尋ねて。

初演の繪番附

助八　キツと參ります。そんならこれで
嘉助　お別れ申しまする。
　ト時の鐘、木魚の音にて、嘉兵衛、棒を叩き、向うへ入る。
助八　ヤア、人は見かけによらぬもの。以前の友と深切に、所の書付けまで預けた上、この大枚の金子にも、微塵心を移さいで、猶深切に語らふとは、成る程、正直な人……これはしたり、この暗闇に大枚な金取つて一人とは、ヤレ／＼物騒な。ドレ、ソロ／＼と踊りませうか。
　ト上の方へ行かうとする。この時、坊主、窺ひよつて、後より、懐へ手を入れ、後向きにて、金を引き出す。助八、一人して、やらじと爭ふ。此うち、坊主は片手にて、助八の刀を拔き、切り付ける。これにて助八、タヂ／＼として倒れるゆゑ、金を引ッたくり、戴く。この時、助八、起き上がり
うぬ、泥坊め
　ト云ふを、其まゝ上へ乘しかゝり、後向きにて、助八へ止めを刺す。この見得、時の鐘の送りにて、この道具、廻る。

本舞臺、三間の間、本緣付き、高足の屋體、白洲階子をかけ、向う一面に、長の色暖簾。屋體の柱に千束屋といふ行燈を掛け、上の方、篠竹、手水鉢、葉蘭の植込み。下の垣に、山吹茂り、紅葉をあしらひ、日覆より、見事なる櫻の吊り枝、一ぱいに下ろし、よき所に枝折り門。すべて嶋原揚屋、庭先の體。踊り地にて、道具納まる。
　ト一ぱいに鳴り物、打ち上げる。直ぐに、清搔、行列三重、誂らへの鳴り物になり、向うより陸尺兩人、金紋付きの挾み箱を擔ぎ、二行に並び、後より古川傳藏、麻上下、股立ちの侍ひ、次に中間二人、鎗二筋持ち、後より麻上下の侍ひ、長刀を擔ぎ出る。後より足利左金吾賴兼、羽織衣裳、一本差し、紫の茶袱紗、庭下駄にて、盆の上へ紅葉豆腐を載せ持ち、後に尤道理之助、土子泥之助、麻上下、大小にて、賴兼の刀を袱紗にて持ち添へ、後より、大場宗益、十德、惣髮にて附き添ふ。この後より、武田武助、奴にて銀の茶瓶を擔ぎ、後より、侍ひ、袴羽織にて大勢附き添ひ出る。これと一緒に、東の口より、三浦屋薄雲、襠裲衣裳にて、若い衆、長柄をさしかけ、子役の禿二人附き、後

より、傾城、高窓、高機、襠補衣裳にて、奥女中、沖の井、舟宿女房の拵らへ。遣り手おくま、遣り手にて附き添ひ、この後より、大江の岡幸鬼貫、着流し、羽織、大小にて、深編笠をかむり、中間、附き添ひ出る。千束屋女房おせん、女房の拵らへ、仲居おとく、似十、太鼓持ちにて出迎ふ。尤も此うち行列の人數は、舞臺の下手に下座する。

賴兼　皆も一緒に

皆々　先づお入りあられませう。

ト矢張り鳴り物にて、舞臺へ來り、薄雲、高窓、高機、禿は、二重の上へ、賴兼初め、その外、皆々よろしく並ぶ。鬼貫、よき所に立つてゐる。

せん　これは、マア〱、いつも〱相變らず、有り難いお入り。どうでも、お足が近いと見えて、お早い事でござりましたわいな。

賴兼　賴兼ともあらう身が、阿彌陀の先に買ひ物は、高尾に寄する紅葉豆腐とは、なんときつい〱。

似十　イヤモウ、お大名の豆腐買ひとは、これは祝ひ物。サア〱、かね〱、ぶッ始まり〱。

とく　エヽ、おかしやんせいなア。

泥之　お供廻りは、いつもの如く。

皆々　心得ました。

ト行列の人數、皆々下座へ入る。

くま　成る程、女郎さん方の道中と違ひ、お大名の往來といふものは、ほんに凛々しいお供廻り。

沖之　その殿さんも、紅葉豆腐を買ひ物とは

とく　ほんに、きつい凝りやうぢやわいな。

賴兼　それについても最前より、合點のゆかぬ。予が目通りと云ひ、座敷の内に、笠も取らざるあの客は。

鬼貫　遠慮いたしてわざと失禮。左金吾賴兼、久しう逢はぬ。

ト笠を取る。

道理　ヤ、あなたは伯父御。

泥之　鬼貫公。

賴兼　ヤア、さては意見に。

鬼貫　イヤ〱、云はぬ。若氣の花ぢや。老い朽ちぬうち如何程なりと。

賴兼　すりや、あなたには賴兼へ。

鬼貫　野暮な意見は、毛頭云はぬ。身共も今宵はこの座敷にて吞み明かさんと、わざ〱これへ。

武助　日頃に似合はぬ鬼貫公。その御一言、何とも以て。

鬼貫　なんの、偽はり心もなく、頼兼にも打寛ろいで。

頼兼　イヤ、案じるより生むが易いと、打つて變つた伯父御のお詞。斯うなるからは、別心ござらぬ。我が無禮をお免しあつて、先づこれへ。

鬼貫　上座いたさう。

ト上手へ通る。

泥之　最前より、見受けるところに、日頃見馴れぬ太夫職。ても美しい御容顏、我が君、あれは如何でござりませう。

ト薄雲を見て云ふ。

頼兼　成る程、見事。今までこれは氣の附かぬ。して、太夫は、

せん　ハイ、あのお子は、三浦屋から突出しの薄雲さん。

頼兼　すりや、三浦屋の。こりや又一會出ずばなるまい。併し、これまでも毎夜々々通ふに、あの高尾太夫は、一度もよき返事とてもなし。さりとはつれない。

道理　成る程、高尾とても、木石ではあるまいが、五十四郡の主たる、頼兼公がこれ程に思し召すのに、身の程知らぬ。

似十　左やう／＼、深草の少將は、小町を慕うて九十九夜。

宗益　それより遙か增りし君へ、お返事いたさぬあの高尾。いかな小町も今頃は、疾に靡いてござる時分。

くま　あなたを嫌ふ高尾さんゆゑ、仲の町を引かせた上、なほ懲らしめ。この內では掃き掃除やら、使ひやら、日毎にむごく小ぢよく同然。

とく　ほんに、見る目も氣の毒ぢやわいな。

薄雲　それ程思ふ頼兼さまを、忌み嫌ふのも、勿體ない。それに引替へ自らは……この薄雲は、思ふお方を。

高窓　餘所に詠めて儘ならぬ。

高機　それが浮世の習ひとやら、辛氣な事であるわいな。

沖の　併しマア可哀さうに、いま島原で全盛と、名に三浦屋の高尾さん

せん　引かせて遣らうも、お客へ義理。例へ好いても好かいでも、金で沈めた流れの身の上。儘にならねば勤めが大切、お客大事と教へるは、どこの內證も同じ事。それに、取分け大切な、お大名を嫌うたゆゑ、三浦屋では親方さんが大きな腹立ち。わたしが一先づ引取つて、主人の顏の立つやうに、ほんに心の遣ひ役。

頼兼　イヤ／＼、さういふ所が又一しほ。是非とも高尾は身共が手活けに。

鬼貫　成る程〳〵、其方が好いた太夫なら、いつ何時でも身請けして。併し其方は云ひ號け、山名の息女菊姫と、縁談極まる上からは。

武助　どうで遁がれぬその縁談。同じくならば身請けの御沙汰は。

頼兼　これはしたり、其方までが、モウ〳〵、屋敷の者は七里けつぱい。

ト薄雲、これを聞き、思ひ入れ。

武助　でも、御約定のある上は、遁がれぬ縁談。また一つには御身の行くへ。もしやそれにて、お心も直り給はゞ、御家中の喜び。さがなき下郎が申し上げるも、お家の爲と思し召し、何卒お心を入れ替へて

頼兼　館へ歸れか。それが否さに、あの高尾……それとも、是非歸らねばならぬ事なら、弟の鶴喜代に家國を相續いたさせ、頼兼は矢張り氣儘の若隱居。

鬼貫　それはよけれど肝心の、家督願ひの繼目には、信夫摺りの御判。また一品は、天國の劍が無ければ、滅多に家督は。

頼兼　それも先年紛失なし、失うたる者は渡邊民部。それゆゑに勘當なし、行くへ知れねど今日にも、失せし御寶持參なし、尋ね來らば勘當は、赦し取らせん我が所存。

鬼貫　すりや、それゆゑに流浪の民部。草を分つて尋ねるとも、どうして滅多に……イヤ、イカサマ、彼れめは仕兼ねぬ奴。

宗益　どうやら、それは覺束ない。

頼兼　これは又、堅いワ〳〵。切角忘れた館の話し、モウモウ、それは西の海、サラリと一つ。コリヤ、酒を持て酒を持て。

せん　サア〳〵、お銚子を持ちや。

とく　サア、似十さん、お前も手傳うて下さんせ。

似十　オッと合點、ヤレ〳〵、これは急がしい。太鼓持ちやら、もぐらもちやら、どうやら目を舞ひさうな。

トおとく、似十、沖の井も手傳ひ、酒臺の道具を出す。始終かすめて、踊り地。

頼兼　然らば伯父君、御免を受けて。

ト杯を取上げる。

鬼貫　サア〳〵、始めい。

とく　ドレ、お酌いたしませうわいな。

トこれより酒盛りになる。この時、向うバタ〳〵にて、鬼貫の奴丸平、捻切り奴にて走り出で、花道よき所に

て、ポンと返る。鳴り物入つたる大盡舞になり、後より嶋田女之助、上下、衣裳、大小にて、ツカ〳〵と出る。後に角内、同じく奴にて附き出る。女之助をやらじと、ちよつと立廻りあつてとまる。

武助　御前。

道理　御酒宴の妨げ。遠ざけさつしやい。

丸平　ハツ。上意だ。立たう。

ト立ちかゝるを。

鬼貫　酒宴半に無禮な奴。して、その者は。

丸平　ハツ。先達て閉門仰せつけられたる、嶋田重三郎が弟、女之助、兄の越度にお屋敷を、追放されて素浪人。

角内　罪あるその身を顧ず、推して御前へ推參なす小童ゆゑ、兩人が支へましてござりまする。

道理　出かした〳〵。兄の重三は越度にて、屋敷は追放。

泥之　その弟の女之助。罪は同罪、君の目通り、いつかな叶はぬ。キリ〳〵爰を

兩人　立歸れ。

女之　例へ如何やう仰しやるとも、この場は、いつかな立ちますまい。兄の越度に弟も同罪、その押籠めの身を以て、推參いたせし女之助。君のお怒り合點にて、參上いたすも御主人へ、申し上げたき事ござつて、身を顧ず、推しての無禮。

頼兼　ナニ、予に申したき事あつて、推參いたすとあるからは、それには定めて仔細あらん。とく〳〵申せ、女之助。

女之　ハツ。然らば暫らくお許し受けて。

ト立ち上がるゆゑ

宗益　ヤア、キリ〳〵それにて、その樣子を

女之　樣子と申すは、主人の行跡。

頼兼　ヤ。

ト思ひ入れ。女之助、ツカ〳〵と舞臺へ來る。角内、丸平、同じく附き來り、うぬトかゝるを左右へポンと投げ退け、頼兼の傍らへ摺り寄つて

女之　エヽ、あなたはなう。

ト誂らへの合ひ方になり

假にも君は足利の、その御舍弟たる大切な、御身を以て輕々しく、晝夜下賤の徘徊なす、かゝる廓へお通ひあつて、日毎に募る君の行跡。いつかお家の政事さへ、亂れん事の嘆かはしく、密かに兄が御意見を申し上げしに聞濟みなく、却つて君のお怒り厚く、手討となるべき重三

郎。それをなだめて、いづれもの、詞添へにて重三は出家。その弟たる女之助、若年ものゝ身を以て、申し上ぐるもお家のお爲。何卒、聞濟み下されて、この後ともにこの里へ、お通ひあるはフッツリと、止まりあられよ、頼兼公。

頼兼　ヤア、云はれぬ諫言、聞く耳持たぬ。云はゞ見たる重三郎、手討になすを人々の、止めに依つて出家なし、屋敷を出でゝ獨居の暮らし。それを又ぞろ其方が

女之　御意見申すも、お家のお爲。また二つには御身の行跡、お心入れ替へ下さるやう。

頼兼　生若輩の汝等が、諫言なぞとは、出過ぎた奴の。

女之　例へ如何やう仰しやつても、女之助が一命に、替へても君へ御諫言。

頼兼　まだ／＼申すか。詞を背かば、その場は立たさぬ。

ト拔きかける。

女之　それを恐れて、たに御意見。是非ともあなたはお館へ。

頼兼　云はれぬ事を。覺悟いたせ。

ト切つてかゝるを、かい潜り、ちよつと立ちかゝりに、曲碌にて留め、二つに切り割る。これにて女之助は、ツカ／＼と後ずさりする。頼兼、猶振り上げるを、薄雲始め、皆々留める。鬼貫も、思ひ入れ。この時、向うにて

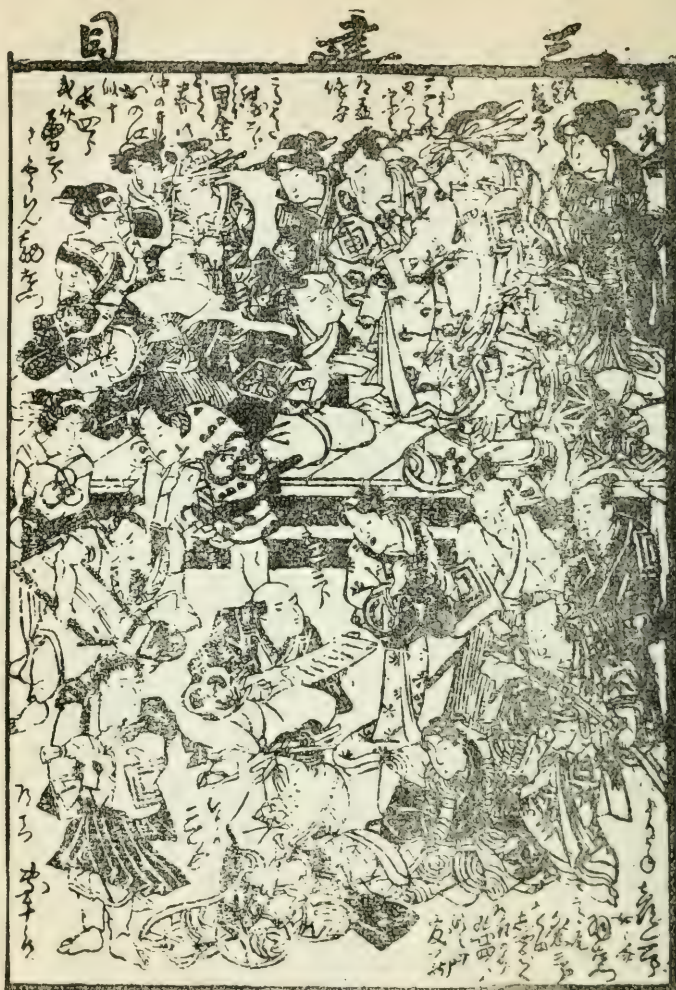
高尾　殿さん、待つた。三浦屋の高尾が留めやんした。マアマア待つて下さんせいなア。

ト派手なる誂らへの唄になり、頼兼は、皆々を突きのけ、追ひかけるを、武助、女之助を、花道へ突きやる。敵役、行かうとするを、女形よろしく留める。向うより高尾、新造の形、扱帶を締め、安下駄を履き、提げ籠の中へ樒と櫻の折り枝、色よき花を大分入れ、これを提げ出で、女之助を圍ひ、頼兼をキッと留める。

頼兼　そちや高尾、樣子も存ぜぬ身を以て

高尾　留めて出たのは野暮らしい。廓へ通ふ神風も、雨をいとはず來る客は、わたしが目からは、みんな野暮。粋と云ふのはこの里へ、通はぬ人に、通ふぞかし。その上またも野暮堅い、お客があるゆゑ此やうに、下女の役やら、使ひやら、あられぬ業もその人を、粋にさせたい心意氣。それといふのも酒の科、好いか惡いか今にては、下女の高尾が留めやんした。殿さん、待つて下さんせいなア。

頼兼　留めて出たのは、この刀を。
高尾　その納まりは及ばずながら、マア〳〵、あそこへ行
　かしやんせいなア。
　　ト押し戻して、舞臺へ來る。
せん　ひやいな所へ、高尾さん
女皆　よう留めて出て下さんしたなア。
高尾　サア、如來樣やら、神樣やら、物調のへて歸りがけ、
　ちよつと佛の膳立てに、出迎へながらも。
鬼貫　ハテ、サテ、女の大膽な。武士の拔いたる魂ひを
頼兼　血を見ず納めるその仕樣は。
高尾　仕樣と云うて、いま急に、その御返事はならねども、
　留めて出たからは此方も意地。お前の拔いたその劍、此
　まゝわたしが預つて、納める仕樣は後々に。
頼兼　ムウ、面白い。然らば其方へ、予が劍、
高尾　預かりませう。キッと高尾が。
　　ト白刃を受取り、側にある鞘へ納める。
似十　シタリ、成る程、これは大丈夫。鬼に鐵棒、山茶も
　煮花。
宗益　おきやアがれ。
鬼貫　折角浮いたこの座敷を、役にも立たぬ童ゆゑ、以前
　の醉もどこへやら。
角内　ちとお直しと致しませうか。
宗益　この宗益も、お相手に。
鬼貫　座敷を替へて、奥でゆるりと。
とく　御不承ながら、わたしがお酌に行かうわいな。
女之　一旦御不興を蒙むるも、折を窺ひ又ぞろ君へ。
高尾　ア、モシ、なんであらうと、お前は此まゝ。
女之　とは云ふものゝ。
とく　サア、ござんせいなア。
　　ト二挺鼓になり、鬼貫、宗益、おとく、女之助、奥へ。
　　丸平、角内、下へ入る。
くま　サア〳〵、あんな野暮大盡は遠ざけて、これからは
　我が君さまへ、積る思ひを、
頼兼　如何にも、浮いたこの座敷、花を殘して奥へ行くも、
　どうやら殘念。サア、おせん、一かけ〳〵。
高窓　ほんに、あやかりたいは高尾さん、さりながら、詠
　むる人を嫌ふとは、夜の錦の色も香も。
　　ト大きな杯を取上げる。
高機　ほんにマア、羨やましい。
　　ト此うち、頼兼、酒を干して

初演の繪番附

頼兼　コレ高尾、いま引受けたこの杯、其方へさしたい。
なんと一口。
高尾　否でござんす。
頼兼　そりや又、なんで杯を。
高尾　サア、お前のさした杯を、受けるが否さに店を引き、
親方さんの强意見、怖い仕置きもなんの事、この身にな
つてもその酒を、呑むはお前の相方と、云はれるゆゑに、
どうもわたしは。
頼兼　すりや、それゆゑに。併し、以前に引替へて、今は
下女たる其方なれば、心措きなくこの酒を。
高尾　そんなら杯受けやんせう。おかみさん、憚りながら。
ト　おせん、酌をして、高尾呑む。
頼兼　ても見事。五十四郡の主たる、この頼兼は誰れ誰れ
にも、下げぬ頭を幾度か、下げても其方にこれまでの。
高尾　それは、お前の勝手づく。それがうるさく斯うなる
からは、誰れに遠慮もない高尾。マア、お前のまゝには。
頼兼　ムウ。
ト思ひ入れ、本調子の合ひ方になり、頼兼、思ひ入れ
にて、提げ籠にありし櫻の枝を取つて
我が心、如何にせよとて散りつもる、花咲く風の誘ふな
るらん。勤めの身には間夫とやら、それも敵は花に風
高尾　月に村雲、障りある、この世に飽いて頼みなく、折
木となりし櫻木を
頼兼　また一度は花咲かせ、手活けの花と眠るとも、時に
よつては仇嵐。
高尾　引くに引かれぬ劍の稻妻。
頼兼　それ見ぬうちは性根を据ゑ、後とは云はず
高尾　成る程、御返事いたしませう。
頼兼　この場で、其方が
高尾　アイ、わたしが返事は
ト思ひ入れあつて、盆に載せし豆腐を出し
これでござんす。
皆々　ヤ、その豆腐を返事とは。
高尾　サア、何を云うても、豆腐にかすがひ。どうでもき
かぬと諦めて、この後フッツリ
頼兼　それなら、花は
ト高尾、櫻の枝を取つて散らし
高尾　仇な嵐に吹き散る花。
頼兼　すりや、どうあつても。
道理　奥樣には、

高尾　落花は枝に
頼兼　返す／＼も
　トきつとなつて、抜きかける。高尾、身を寄せて
高尾　サア、切らしやんせ。どうで返らぬその花の、散り際もろき落葉の紅葉、枝をおろして、お前の存分。
　ト頼兼、思ひ入れあつて、刀をシャンと納める。高尾、振り返り見て、醉ひし思ひ入れにて
お免しなんしえ。
　ト横に寐ろ。頼兼、思ひ入れ。
くま　ほんにマア、呆れたもの。甘口になれば附け上がり、今は下女でも以前は傾城。思ふお客へつれない仕方。遣り手の役に、わたしがちよつと
　ト煙管を持ち、振り上げるを、おせん留めて
せん　待たしやんせ、おくまどの。以前の通り勤めの身で、お客を振り通さば、成る程、お前のまゝにもならうが、憚りながらこの子には、わたしと云ふ預かり人、アイ、三浦屋からこのおせんが、引取つたのも親方の一旦心を鎭める爲。マア、女郎さん方でも、この事ばかりは相對で、口説き落すが手段とやら。なんぼ、お前の强面でも、その折檻は御不肖ながら、おせんが留めた。マア、さう思うて下さんせ。
くま　それぢやと云うて、捨て置いては、云ひたいがいの我まゝ氣まゝ。こちらへ預け願うて置くも、もしや心を入れ替へて、殿さんへ添臥しするやうと、遠い思案もこの子の爲。それに根强く振り通す、主に底持つ高尾さん、その性根をば、叩き直して。
　トまた立ち寄るを
高窓　モシ、あれ程に、おかみさんが事を分けて留めなんすに。
高機　今日は、わたしに免じて、堪忍しておくんなんし。
くま　なんの、お前方の知つたやうに、留め立てさんすと、側杖を。エヽ、退きなんせ。
　ト突き退ける。
頼兼　コリヤ／＼おくま、もうよい／＼。予に義理立てなら、捨てゝ置きや。疵でも附けては、大事の賣人。
武助　でも、甘口な君の上意。
薄雲　あるは否なり、思ふこと叶はねばこそ身を盡し、逢ふを樂しみ束の間も、忘れぬやうに思うてゐる、わたしを餘所の仇花と、詠めて心でそれ程に、あの高尾さんを。
頼兼　ヤ。

薄雲　及ばぬ色香に引かされて、沈みもやらぬ苦界の身にも、思ふお方のあればこそ、いとはで暮らす薄雲を、あなたは餘所の仇花と。
高窓　ほんにまゝにはならぬもの。
似十　最前より、さぞ鬼貫さまのお待ちかね。
泥之　我が君には、一先づ奥へ。
頼兼　如何にも。
ト立ち上がり、高尾を見て、思ひ入れあつて
人我れに辛ければ、我れ又人に辛しと云ふ。戀を知らざるそりや譬へ。最前申せし高尾が詞。もうこの上は、どこまでも。
沖せ　そりや、どうでも。
武助　これなる高尾も
泥之　手活けの花に
頼兼　風ひかぬやう。
薄雲　そりや又あんまり。
窓機　モシ。
頼兼　氣を附けやれ。
ト唄になり、この人數、殘らず奥へ入る。高尾一人殘る。あと合ひ方。高尾ソツと起きて、奥の方を見て、
手を合して拜み、こなしあつて
高尾　申し殿さん、お免しなされて下さりませ。いはゞ下ざま助八が、その娘たるこの高尾。賤しきこの身に勿體ない、それ程までにわたしをば、お心掛けて有り難いお詞、それにつれなう云うたのも、我が身を思うて、それゆゑに、また二つには約定せし、重三さまは殿樣の、その御家來のお方と語らひ、なんとこの身は枕が交されう。思へば罰にて、父さんが、失うた寶の在所も知れた上、金さへあればと、この身をば、年季を增して五十兩、その金ゆゑに父さんは、非業の最期も、わたしゆゑ、願ひも叶はず、さぞや口惜しうござんせう。せめては御回向せうにも、まゝならぬが勤めの身の上。心ばかりの追善も、父さんへの申し譯。オヽ、それ〳〵。
ト鼻紙の中より紙の戒名を出し
肌身離さぬこの戒名。
ト右の戒名を手水鉢の水にて濡らし、手拭掛けへ貼り、下の山吹の枝を取つて來て、手水鉢へ入れ、回向のこなし。此うち、木魚の入りたる誂らへの合ひ方になり、向うより嶋田重三郎、網代笠、麻衣、鼠の小袖を高くからげ、草鞋にて、前へ木魚を附け、五十日の坊主に

て出て來り、此うち、上の櫻の枝へ差し金の鶯とまつて囀る。重三郎、花道にとまり、思ひ入れあつて、これを見て

重三　三衣の曉、眞如の月、詠むる心、梅にあらねど春の末、櫻の枝におくれなく、經よみ鳥の囀るも、まゝに回向は亡き人の、せめては未來の迷ひをも、この身の迷ひ受取つて、佛果菩提も後世の爲。

高尾　お果てなされた父さんの、佛事を弔らひする人も、わたしが外に妹は、あるに甲斐なき生き別れ。後の母さん連れ行きて、どこにどうしてゐる事やら、誰れに便りもなきこの身。

重三　今は出家の身の上に、あるまじきとは思へども、高尾に迷ひ、大それた

ト懐より、ソツと文を出して見て

手詰めの金の入用と、高尾が知らせ、それゆゑに、身は浪人のたゞずみさへ、暮らしかねたる瘦せ世帶。何國の者とも知らばこそ、不便の最期も、思はぬ惡業、報い來て

高尾　やがて敵を尋ねた上、討つて草葉の父さんへ、せめては手向ける娘の役。

重三　未來は必らず

高尾　一蓮托生。

重三　思へば浮世は

高尾　果敢ないこの身。

重三　南無阿彌陀佛々々〱々々々。

ト兩人、心々の思ひ入れあつて、重三郎、木魚を打ちながら、本舞臺へ來て、枝折り戶の外に立つ。高尾こなしあつて

高尾　ほんに、幸ひの修行者さん。手の內を

ト笠の內を覗き見て

ヤ、どうやらお前は

重三　其方は、高尾。

ト兩人、顏見合せ

高尾　變る姿は重三さん。

ト寄るを

重三　この身になつては。

ト行きかけるを、高尾、袖を押へて

高尾　ア、モシ

ト誂らへの合ひ方。此うち重三郎、枝折り戶の內へ入る。

どういふ事で、お前のお姿。

重三　様子云はねば面目ない。あの御主人の頼兼公、夜毎日毎の廓通ひも、其方の色香に迷うたゆゑ、お諫め申すは臣下の役。表は忠義と御意見の、そのお怒りにてこの身をば、既にお手討となるべきところ、その座にあつた人々の、なだめに依つて命助かり、我れは直ぐさま出家の願ひ、屋敷を出でゝ今の身は、佛門に入つてこの如く、姿形も士手の道哲。それゆゑわざとこれまでは、疎遠のうちに、この程より、手詰りと聞いた文ゆゑに。

高尾　さう云ふ事とは露知らず、お前に逢はぬが心にかゝり、なぜこの頃は廓へも、ござんせぬかと案じるも、女子の心、定めて外に面白い、移り易いは男氣と、恨んでばつかり居りましたわいなア。

重三　なんの、恨みも戀も世にある時。一旦云ひ交したる、心は變ぜぬ武士の魂ひ。

高尾　そんならお前は、どこまでも。

重三　見捨てぬ證據は、いつぞや頼みの金の事。今の身の上、やう／＼と、調へ來りし五拾兩。

ト懐より金を出して見せる。

高尾　ほんに、それは心遣ひをさせまして。折角調のふその金は。

重三　なんと云やる。そんなら、その金、其方の方で。

高尾　あの父さんの失ひし、寶の鎌を賣り物に、あるとは知れて價の金。それゆゑお前にその事を、頼むも忙しく三浦屋で、年季を増して五十兩。

重三　そんなら、わが身が身に替へて。

高尾　その金ゆゑに情なや、あの父さんは、道にてやみやみ何者か。

重三　ヤ、、なんと。

ト思ひ入れ。

高尾　サア、證據はなけれど五十兩、包みし紙は、わたしが文殻の反古。

トこれにて、重三郎恟り、懐より金を出し、包み紙を見て

重三　ヤ、、そんならその夜の

高尾　エ。

ト兩人、思ひ入れ。

重三　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト目を閉ぢて思ひ入れ。フト氣を替へ

例へ姿は變るとも、舅の敵、いつか又

高尾　二人一緒に父さんの

重三　何國に隱れ忍ぶとも

　ト行きかゝるを、高尾留めて

高尾　ア、モシ……久しぶりでの重三さん、是非に今宵は

　ト寄り添ふを

重三　爰で一夜の回向なと。

　トこの時奥にて

似十　高尾さん〳〵。

　ト呼ぶ。これにて

高尾　誰れやら呼んで

重三　見咎められては互ひの身の上。

高尾　お前は暫し。

　ト重三郎を下の方へ連れ行く。暖簾口より似十出て來り

似十　コレ〳〵高尾さん、お前は爰に何をしてゐなさる。先刻から、おかみさんが用があるとて呼んでござる。サア、早う行きなさい〳〵。

　ト高尾を無理に連れて奥へ入る。重三郎出て來て

重三　今の話しで、始めて聞いた高尾が親。それとも知らでひよんな事にて、不便の最期。これといふも、素性賤しき重三郎。もと某は捨て子にて、山鳥の目貫を添へて、三條小橋に捨てありしを、拾ひ取りしは島田十太夫どの。その家までも我れゆゑ退轉。養父に別れ實の親、あるやなしやの覺束なさ。形見に殘るは山鳥の目貫。思へば浮世は、味氣なきものぢやなア。

　ト思ひ入れ。靜かなる踊り地になり、奥よりおせん先に、沖の井、おとく、似十、臺の物、銚子杯などを持つて、皆々出て來る。後より頼兼、少し醉ひたる思ひ入れにて、扇を顏に當て、これを薄雲、高窓、高橋、手を取つて出て來る。道理之助、泥之助、武助附き添ひ出る。重三郎、下の方へ來る。皆々二重の上に坐る。

せん　サア〳〵殿さん、座敷を替へて爰でわつさり。

とく　これから以十さんの、いつもの聲色を、

沖の　御酒宴の始まり〳〵。

似十　東西々々、これからは枡の流呑み、銚子の口呑み。大酒下り、評判々々。

頼兼　コレ〳〵、其やうに浮かし立てゝも、肝心の高尾がゐぬと、呑めぬ〳〵。高尾は居るか。高尾々々。

薄雲　ほんに、殿さんとした事が、二言目には、高尾さんの事ばつかり。

高窓　少しお側を離れると其やうに
高機　いつそ羨やましい高尾さん。
似十　なんでも御前は、女子でなければ、夜が明けぬ。
道理　この上は女護の島へ、お國替へがよろしうござらう。
武助　コリヤ〳〵、いづれも様には、滅多な事を。
頼兼　イヤ〳〵、苦しうない〳〵。女子でなければ夜が明けぬ。廓の花の居續けに、酒と討死しようと、呑み明かしたる昨夜の持越し、高尾を相手に呑み直さうと思ひの外、そこに居るのは何者ぢや。
ト重三郎へ目を附けて思ひ入れ。泥之助、道理之助、立ちかゝつて
道理　ヤア、貴殿は慥か
武助　先達て、御勘當請けし
頼兼　オヽ、其方は、島田重三郎でないか。
ト重三郎思ひ入れあつて
重三　主人の御罰で、只今この態、面目次第も。
ト思ひ入れ
女皆　ほんに、久しう逢はぬ重三さん
頼兼　勘當請けし其方が、予が目通りへは如何して。
武助　イヤ、憚りながら、この場に居合す島田氏。

泥之　思ひ知つたる貴殿の成行き。
道理　ハテサテ、見すぼらしい、形かたち。
頼兼　イカサマ、酒も醒め果てた。併し汝が養父たる、十太夫は家の譜代、彼れが忠義にめでゝ、今よりして其方が勘當、赦してくれう。
重三　すりや、拙者めが御勘氣、御赦免とや。エヽ、有り難うござります。
ト思ひ入れ。
頼兼　オヽ、その代り、予が申す事、何事に依らず其方には。
重三　有り難き御仰せ。御免しござらば以前の如くの臣下の身、何しに否やを申さうや。例へ、身を粉に砕きましても、何なりとも。
頼兼　すりや、違背は致さぬか。
重三　何しに以て。
頼兼　いよ〳〵汝が
重三　仰せの通り。
頼兼　高尾を取持て。
重三　エ。
頼兼　ならぬと申すか。

重三　イヤ、御諚でござれば。

頼兼　はや〱取り持て……イカサマ、其方は取持つであらうなア。

ト思ひ入れ。踊り地になり、奥よりおくま出て、重三郎を見て

くま　なんだ、この人は。爰をどこぢやと思うて居やんす。御前の前とも憚らず、むさい穢ない坊さんが

ト よく〱顔を見て

ヤア〱、お前は重三さん。

重三　折も折とて面目ない。

ト逃げんとするを引ッ捕へ

くま　コレ〱、面目どころか重三さん、イヤ重三どの、よくも〱ノメ〱と、爰へござつた。こなたゆゑには茶屋船宿の、難儀してゐる事知らずにか。ほんにマア、厚かましい人もあるものぢやな。

似十　それ〱、先刻から、わしも云はう〱と思つて居たが、こなたに立替へた駕籠賃やら、祝儀の貸し。

くま　まだその上に、高尾さんの揚げ代の勘定、拂はぬのみか惡足となつて、あそこや爰の裏茶屋へ引摺り込み、こなたたうとう、この子をぶらつき者にしたは、みんなこなたの業。サア、たつた今、金を拂はつしやれ。サア、どうしなさる〱。

ト重三郎を捕へてこづき廻す。

重三　サ、、尤もぢやが、その金と云うては今爰で

ト思ひ入れ。

泥之　どうして〱、一文二文の貰ひ溜め、報謝の錢ならありもしやうが

道理　金と云つては叩き鉦、それさへなしで木魚ばかり。

くま　ほんにお前も、斯う落ちぶれやうとは

似十　昔は槍に引きかへて、今はやう〱破れ笠。

武助　これが島田の何某と

頼兼　そんなら高尾が

女皆　間夫といふのは重三さん。

敵皆　なんと、これでは我が君さま

頼兼　さうとは知らで……ムウ。

ト思ひ入れ、合ひ方になり

斯くとも知らで現在の、主人が家來に手を下げて、頼むを見ては、心の内にさぞや今まで予が事を、うつけ者、よい阿房ぞと、わい等二人、よくも主人を騙かつて、憎くき人外めが。我が刀の錆に眞ッ二つ。

ト思ひ入れ。刀へ手を掛けるを、おせん留めて

せん　ア、モシ。憚りながら御前には、お手討なさるゝ場所が悪い。爰は廓の人立ちゆゑ、もしもの事がある時は、御名の出る事。先づ〳〵お鎮まり遊ばしませ。

頼兼　ムウ。

ト思案の思ひ入れ。

重三　何ゆゑ拙者をお手討に。

泥之　殿の揚げ詰め、あの高尾を

くま　サア、其方の身分のしらちより、此方の勘定、残りの金。たつた今、五十兩、受取りませうか。

重三　サア、それは。

頼兼　主人を嘲ける島田重三の不届き奴。どうあつても料簡が。

トまた立ちかゝる。この時、下の方より女之助、ヅカヅカと出て、重三郎を引きつけ

女之　ヤア、人非人の重三どの。現在、お主を騙かつて、それゆゑにこそ、こなたの家は退轉。それにマチ〳〵。よくも爰へノメ〳〵とござつたなう。

ト思ひ入れ。よき時分より、後へ鬼貫出て来て様子を見てゐる。頼兼見て

頼兼　ヤ、いつの間にやら

女之　伯父君様。

鬼貫　高尾が間夫とあるならば、彼れが詮議を糺した上、これにて見物いたさうか。

頼兼　只今、詮議と思へども、假にも佛身粧ふ島田。併し腹癒せ、彼れに糺明。

くま　それ〳〵、揚げ代の滞り、廓の法なら桶伏せは當り前。いつその事に大門から

泥之　破れ笠を引ッ剝いで

道理　赤耻かゝすが、主人への腹癒せ。

兩人　この上は、我れ〳〵が。

ト立ちかゝり、手をかけるを

重三　武士の衣服へ手をかけて、慮外の振舞ひ。

ト思ひ入れ。

頼兼　イヤ、其奴、引剝げ〳〵。

泥道　御前の御意ぢや。重三どの、

トまた立ちかゝる。立廻りあつて、兩人、重三郎が衣、小袖を脱がせる。重三郎、晒しの長襦袢一つにて、そこへ突き出す。皆々見て

似十　これは怪しからぬ。これが高尾さんの色事師。

泥之　坊主が憎けりや、袈裟とやら。

道理　けさの清めは雲かぶり、たうとう仕舞ひは橋本町。

くま　サア／＼、お門へわつさりと、立たつしやい。

　ト三人寄つて引立てる。

頼兼　見れば見る程、みじめな態。よつてたかつて笑ふがよい。

敵皆　ハヽヽヽヽ

　ト笑ふ。

鬼貫　ハテサテ、氣の毒千萬な。

　トよき時分、後へ高尾出て、窺ひ居て、これを見て、いろ／＼とこなし、帯を解き、上着を脱ぎ、下着のまにて、ツカ／＼と舞臺へ下りて來て、重三郎に上着を着せ、チッと囲うてこなし。皆々見て

せん　ヤ、どうして爰へ、高尾さん。

女皆　そんならお前は、

女之　悪い所へ。

　ト氣がれの思ひ入れ。下の方へ扣へる。

敵皆　なんで爰へは。

高尾　サア、なんでとは、お前方も曲がない。如何に戀には疎いとて、いとしい男をみす／＼に、風引かせるが見てゐる辛さに、それでアノ

頼兼　すりや、いよ／＼高尾が心底は

高尾　アイ。

　ト兩人、キッと思ひ入れ。胡弓入りの合ひ方。

どなたの前であらうとまゝ、誰れ憚からず斯うなる上は、いつまでも、わたしが殿御は、わたしがまゝ。必らず構うて下さんすな。

　トこれにて、頼兼、ムッとしたる思ひ入れ。

頼兼　エヽ、おのれはなア。

高尾　例へ、この後どのやうな、憂目に逢はうと、みんな元はわたしゆゑ。さう思うて見れば、眞實主が可愛うて可愛うて、ほんに身も世もあらぬわいなア。

　ト重三郎に縋り付いて思ひ入れ。

くま　成る程、感心、お前は好い女郎衆だ。流行は三浦屋の名うてだけあつて、意氣張り強い、ほんの女郎衆、きつい／＼。併し、お前は其やうに、可愛いと思ふ色男でも、金は無いの。金が無ければ客とは呼ばれぬ。サアサア、其方へ退いて居なさい／＼。

　ト高尾を引き退けて、重三郎が側へ來て

サア、重三どの、揚げ代の五十兩は、どうしなさる。た

つた今、受取りませう〳〵。
鬼貫　コリヤ〳〵おくま、なんぼお主がせがんでも、金の一段になつては、どうして〳〵、食ふや食はずの痩せ坊主、お布施の錢のその外は、なんで金があるものか。
くま　その非人同然でも、金さへあれば、お客に取るのが廓の習ひ。キリ〳〵金を。
ト　また重三郎に立ちかゝる。
重三　そんならこの場でその金が
くま　あるならいつでもお客樣。
重三　三衣を取れば出家でなし、斯うなる上は手詰めの金。如何にも承知……サ、受取れ。
トみたけ小判五十兩、おくまが顔へ打ち付ける。
くま　アイタヽヽ
ト取つて見て
こりや、このお金。
重三　金さへ遣れば、浪人しても元の武士、勘當請ければ誰れに遠慮の主人もなく、風來者の島田重三、とても相手は大名の、引馬連れば此方にも、附馬連れて始末屋の、手にかゝらねえごろつき株。今から客に
トおくまを取つて投げ

ならうかい。
鬼貫　でも、さて根強き島田重三。
道理　返す〳〵も憎くき振舞ひ。
重三　どうで體は野へ出した、死人も同然。賴兼さま。
高尾　よもや、二人は
賴兼　ヤ。
重三　これでは、生かして置かれまい。
ト思ひ入れ。
高尾　サア、切らしやんせ。早う切られて二人とも
重三　永い未來で蓮の上、危なツかしいお床入り。
高尾　それが此方の願ひでござんす。
賴兼　堪えに堪えしこの場の仕儀。もうこの上は。
ト寄るを女之助、ツカ〳〵と出て賴兼を留め、もろ肌脱ぎ、差添を拔いて腹へ突き立てる。
ヤ、何ゆゑあつて女之助には
皆々　この體は、
ト竹笛、誂らへの合ひ方。
女之　サ、只今拙者が切腹は、あの畜類に劣つたる、二人を切るはお刀の、穢れと存じ、それゆゑに、代りに果てたる某が、命を捨てゝ我が君の、これにて御機嫌直され

て、少しも早くこの所を、惡者多き色里へ、殊には後々、
廓通ひもお止まり、お心入れ替へ下さるやう、御身の行
跡氣遣はしく、拙者がお諫め申すのも、お家の長久願は
ん爲。

頼兼　天晴れ兄に勝りし汝が忠義、可哀や若者。

重三　野暮で終りし身の果は、いつでもあの態

高尾　どうで此方も、二人一緒に。

女之　イヤ／＼、お二人とも、それさせまい爲にこの生害。

頼兼　忠義でめでゝ、この上とも。

女之　すりや我が君には、お聞き屆け下さるとや。

頼兼　云ふにや及ぶ。苦痛せずとも、予が介錯。

　ト後へ廻り、差添拔いて、女之助の首をポンと切る。

最前見ざる血汐の刃物、これにて醉も醒めたれば

武助　一先づこれよりお館へ。

頼兼　併し、心は改めんが、雨のつれ／＼雪の朝、通ひ馴
れたる廓の內でも、後の馴染は

　ト薄雲を見て

あの薄雲。

高窓　そんなら、今から殿さんは

高機　あの高尾さんの

敵背　殿の相方は、今晩よりは見立て替へ。

せん　いよ／＼極まる薄雲さん。

頼兼　今より高尾を乘り替へて、その面當ては、コレ

　ト薄雲を引き付ける。

せん　そのお取持ちは千束屋の

沖の　文にはあらで、積る思ひを、今宵のうちに

とく　仲居の役はお座敷の

薄雲　そんなら爰で。

　トおせん、沖の井、おとく、銚子杯を持つて出て、此
うち、頼兼、杯をちよつと請けて、おせんへやる。お
せん取つて、薄雲へやる。沖の井、酌をする。淸搔聞
ゆる。

鬼貫　これで納まる初會の杯。

重三　取りも直さず婚禮の

高尾　祝言濟めば

沖の　定まる奧方、菊姫さま。

頼兼　や。

薄雲　必らずこの末お變りなう。

頼兼　そんなら、彼れは

沖の　お云ひ號けの姫君樣。

皆々　ヤア。
ト悄り、思ひ入れ。
せん　姿を替へてこの里に
沖の　勝元さまのお指圖にて、この沖の井は、乳人の役。
頼兼　馴染みとなれば、この後も、矢ッ張り廓で傾城の
鬼貫　屋敷風なら野暮堅い。
頼兼　もしそれならばお斷わり
道理　然らばこれより
敵皆　直さま館へ
沖の　吉日選んで
せん　玉の輿入れ
重三　ころ寢の床入り
くま　ほんにめでたい御祝言。
鬼貫　然らば後刻、甥の殿。
とく　送り申して大門まで
女皆　そんなら殿さん
せん　モシ、いつもの通り
頼兼　駕籠を入れて置きやれ。
ト流行り唄になり、頼兼先に、おせん、女形殘らず附いて向うへ入る。重三郎、高尾、おくま、武助、似十は奥へ入る。あと三人殘る。
泥之　鬼貫公、まんまと首尾よく
道理　頼兼めを
鬼貫　たうとううつけ者に仕立てたれば、やがて押籠め、足利は心のまゝ。
泥之　その時こそは、我れ〱はじめ
道理　やがて大望近きうち
鬼貫　コリヤ。
ト思ひ入れ、踊り地になり、向うより下郎茂佐八先に、足輕の形、後より奇妙院滿海、いがくり坊主、衣、法印の形にて、額に白刃を打ちつけし繪馬を脊負ひ、この後より荒物屋無理右衛門、木綿やつし、羽織、股引、藁草履、親方の拵らへにて出て來て、直ぐに本舞臺へ來り
茂佐　ハッ、お指圖に從ひ、奇妙院滿海、町人無理右衛門同道いたしてござります。
鬼貫　出かした〱。先刻より相待ち居つた。
滿海　鬼貫公を始め、いづれも樣。
無理　ハイ〱、申し上げます。私しにも何やら御用とござりまして、お招きにあづかり、早速參りました。して、

御用の筋は。
鬼貫　イヤ、呼び寄せた仔細といふは、外の事ではない。其方が女房、今は遣り手のあのおくま、彼れが素性を承はらんと、わざ〳〵の招き。
無理　これは何事と存じましたら、女房が身の上。以前は山名の奥勤めを、致しました八汐と申す者。若き時に持豐さまのお手が付いたゆゑ、其まゝ宿へ下がつたところで、ぼてれんと腹の膨れた八汐どの、やう〳〵產み落して見れば男の子。その時、山名の殿樣が、後の證據と山鳥の片しの目貫に、金を添へて下さたつを、貰ひ受けて私しが女房。その金ばかりを此方へ取つて、目貫を添へて捨てた所は三條小橋。
トこの時、おくま出て窺ひ居る。矢張り踊り地薄く
それといふも、この親仁、根が嫉妬から、その子を捨てた樣子を、なんで又あなたが。
くま　イヤ、その後は、わたしがお話し申しませう。
トこの時おくま、前へ出て
鬼貫　如何にも聞いた汝が素性。樣子といふはこの書面。ソレ、これを讀んで見よ。
ト懐中より、手紙を出して見せる。おくま、讀む心にて
くま　そんなら、この節、その悴、證據を持つて來るならば、お取上げ下さるといふこの手紙。
ト鬼貫へ返す。
無理　なんと云やる。その悴をお取上げなさるといふ事か。
鬼貫　それゆゑ、兩人までこの樣子。
くま　惜しい事ぢやが、今は解らぬ。併し尋ねて持豐さまに。
鬼貫　この後とも夫婦の者、しかと尋ねて。
滿海　それに付いてもこの滿海、いつぞや盜む天國と、同じ側なる信夫摺り。
無理　御判はわしが、仁木さまに賴まれたゆゑ、二人して盜んで見たれば、御褒美は、今になんの御沙汰も。
トこの時、宗益、後へ出かゝり出て
宗益　イヤ、その褒美の儀は、兼ねてこの宗益へも、お賴みの毒藥、調合は致すれど、これぞといふ褒美の、證據なければ滅多には。
鬼貫　尤も〳〵。併し、宗益、これは外ならぬ事ゆゑ、さるによつて、首尾よく成就のその時は、五百石、その御加增の割符の書き物。

ト渡す。宗益、取つて

宗益　成る程、慥かにお書き物。毒藥は、早速に其許へ。

道理　その預かり手は、道理之助。

滿海　して又、この滿海には。

鬼貫　當座の褒美は、劍と引替へ。

ト懐中より、包み金を出して遣る。滿海、受取つて

滿海　そこに如才はござらぬ。人に悟られぬやうに、この額に仕込み置けば、誰れも氣の付く事はござらぬ。イザ、劍を。

ト渡す。

鬼貫　この劍と共に、手紙を添へて、慥かに其方に。

茂佐　しつかりと、お預かり申しました。

ト受取る。手紙は、懐中する。

鬼貫　この上は、舘の跡目、鶴喜代の調伏。

滿海　それこそ常に習ひ覺えし、しいたの密法。藁人形に、四十四本の針を打ち、添へたる衣は

ト懐中より、白木の箱を出し、内より白衣を出して

この如く、一字一點見えざれど、血汐をあやせば忽ちに文字現はるゝ秘法の白衣。

鬼貫　成る程、稀代の秘法。幸ひ鶴喜代は、この程の眼病、祈禱と披露し、祈念は四十九日が間。舘にあれば、

くま　鶴喜代君の落命疑ひなし。

泥之　併し人形、見咎められては一大事。

滿海　然らば貴殿へ。

ト鬼貫へ渡す。鬼貫懐中する。

無理　して、又、わしがその印は。

鬼貫　矢張り其まゝ、褒美と取替へ。只この上は、國元より、外記左衞門が、下り來らば、人知れず、

泥之　先づそれよりは、差當る頼兼めを。

道理　今日の歸りを、道にてバッサリ。

くま　ても、恐ろしい。

無理　それこそ、野伏り非人を語らひ

宗益　道にて喧嘩を仕掛けなば

滿海　忽ち頼兼、その場で寂滅。

トこの時、下座より丸平、角内出て來り

丸平　その加勢にはこの丸平。

角内　角内もろとも、兩人して

鬼貫　然らば、これより直ぐに。

宗益　御前勤めの宗益は、この書き物が氣がゝりゆゑ、暫時貴様へ。

無理　ト今の書き物を無理右衞門へ渡す。
　　　預かりました。
　　　ト受取る、印と一緒に紙入れに入れる。
泥之　一刻も早く我れ／＼兩人、後より追ッつき
道理　賴兼めを人知れず
鬼貫　必らずぬかるな。
兩人　心得ました。
　　　ト矢張り踊り地。無理右衞門、道理之助、泥之助、丸平、角内、向うへ入る。鬼貫、滿海、宗益は奥へ入る。おくま、茂佐八殘る。引違へて、下座より似十、出て來り、
似十　サア／＼、飛んだ事が出來て來た。あの高尾さんと道哲めが、どつちへ行つたやら。てつきり二人は、駈落ちだ／＼。
くま　ナニ、あの坊主めが、高尾さんを引ッ張つて。
似十　オヽ、サ、今のうち、遠くは行くまい。後から追ッかけ。
くま　そいつは堪らぬ。斯うしては居られぬわえ。
　　　ト踊り地になり、おくま先に、身拵らへして、似十、一散に向うへ入る。茂佐八殘り、思ひ入れあつて
茂佐　なんだ。高尾と道哲が駈落ちしたとか。おれも後から尋ねてやりたいが、滅多に行かれぬ。大分預かり物が多い。先づこの手紙を斯うして
　　　ト紙莨入れへ入れようとして、内より、いろ／＼書出しを出して
　　　待て／＼、こいつは伊勢太の流れ。此方は山形屋の書出しよ。これを一つにして、斯うして置いて。
　　　ト書出しと一緒に、莨入れへ入れろ、此うち、後に、武助、出かゝり居て
武助　イヤ、その書出しは、下郎も慥か割り前の
　　　ト手をかけるを。
茂佐　うぬか。新參の癖に差出た奴。
　　　ト引ッたくる。
武助　イヽヤ、ちよつと見かけたその手紙、慥かにそれこそ。
　　　ト又かゝるを
茂佐　おきやアがれ。なんでわいらに。
　　　ト振り切つて、懷へ入れる。
武助　殊には怪しきその白刃、紛失なせし天國の
茂佐　どうしたと。

武助　ちよつとこの場で、下郎が手柄に。

茂佐　なにを

ト立廻り。これより、太神樂、龍毬の鳴り物になり、兩人、立廻りよろしくあつて、トヾ、「どつこい」と見得。曲撥になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、向う一面の浪幕。眞中に、米俵積み重ねたる大茶船一艘。この前、浪板にて見切り、上の方に柳の立ち樹、吊り枝たつぷりにして、舞臺前、誂らへの切り穴、同じく浪板、河岸の體。雨車。禪のツトメにて道具とまる。

ト爰に百姓、野之作、脚絆、手甲、菅笠、庄屋の形。百姓一人、同じく旅形にて、大きなる軍鷄籠の中に、誂らへの鷲を入れたるを、棒を通し、人足二人、これを擔ぎ、皆々、雨にあひたる思ひ入れ。

野之　ヤレ〳〵、春の雨といふものは、今まで結構な空であつたが、忽ち降り出しましたが、それにもう日は暮れかゝるし、大降りのせぬやうにしたうござる。

百姓　コレ〳〵、庄屋さん、お前は、雨具は持つてござらぬか。

野之　さうよ。わしも、この頃の日和癖だから、よもや降りはしまいと思うた。

人足　時に庄屋さん、一體この鷲は、どこへ持つて行きますね。

野之　この鷲は、比叡山四明ヶ嶽へ下りたを、加茂の河原でやう〳〵押へ、お地頭樣の云ひ付けゆゑ、足利のお屋敷へ持つて行くのよ。

人足　して、この鷲は、一體何になりますね。

野之　これはこの度、鶴喜代さま、御眼病に依つて、蟇目に用ゆる鷲の羽根、生きて居ねば惡いとあるゆゑ、そこで村中寄つて、やう〳〵捕へたのよ。

百姓　ハヽア、そんならこの鷲も、なんと啼く事がありませうね。

野之　啼くとも〳〵、鳶のやうに啼くと云ふから、そこでなくこと地頭といふワ。

百姓　成る程、地頭馬鹿にした事サ。

野之　ハヽヽヽ。サア〳〵、そろ〳〵行きませう。

ト矢張り禪のツトメ、皆々下座へ入る。向うバタ〳〵にて、茂佐八、走り出て來る。後より、武助、追ひ駈け出て、花道にてちよつと立廻りあつて、兩人、本舞

臺へ來る。茂佐八を捕へ

武助　サア、下郎め、その品、此方へ渡せ。

茂佐　しみしつこい。退きやアがれ。

ト立廻りあつて、トヾ、武助を當てる。ウウンと倒れる。

大べら坊め。こんな事は、いくらもたべ付けてゐるワ。滅多に才六めに、渡してつまるものか。見咎められぬ其うちに。

ト額の白刃を取つて、あたりを見て、後の船の中の米俵へ差し込む。フト思ひ附いて、貫入れより、今の書出しを出して、目印に挾む。この時、鬼貫より受取りたる手紙を落す。此うち武助、心付いて、茂佐八の落せし手紙へ手を掛け

武助　黑白はそれと解らねど、慥かに證據のその手紙

ト取上げるを、茂佐八、引ッ渡つて、手早く石を附け上の方へ投げる。この手紙、差し金にて、柳の枝へかかる。此うちに、後の船の內より、船頭起きて、棹をさす。船は下座の方へ入る。茂佐八、これを見て、アレアレと悔り思ひ入れ。

茂佐　南無三、大事の

ト伸び上がつて見るを

武助　なにを、下郎め。

ト突くゆゑ、茂佐八、有頂天になつて

茂佐　船よ／＼、船よなう／＼。

ト雨車、風の音になり、一散に下座へ入る。續いて、武助、追ひかけ入ると、ゴンと時の鐘、バタ／＼になり、向うより、重三郎、新造の振り袖着たる以前の形、袖を挾みて、頰かぶりをして、尻からげ、賴兼の小さ刀を差し、以前の形の高尾が手を引き、走り出て來て、花道にて兩人思ひ入れ。蛙の聲。

重三　よう／＼の思ひにて、あの島原は拔け出たが、折惡い急の春雨。

高尾　濡るゝは同じ身の上も、もしや追手が來やうかと。

重三　虛空無天に走つたが、雨の小やみに、暫しあれにて。

ト向うを見て

來い。

ト手を取つて、本舞臺へ來る。

高尾　爰はマア、なんといふ所でござんすえ。

ト重三郎あたりを見て

重三　暗うてそれと知れねども、慥かに爰は六條河原。

高尾　そんなら、もう追手は來はせぬかえ。

重三　イヤ〳〵、例へ捕へられても、とても命は捨てた身の、殊にはお主をさみなして、あの現在の弟まで、犬死させた因果がこの身に報い來て、所詮死なうと覺悟は極めたれど、さは云へ二人が、翌日の浮名も耻かしく。

高尾　わたしも同じ父さんを、その金ゆゑに情ない。併しお前は後に存命して。

重三　イヤ、其方より猶わしが、

高尾　そりや又なんで。

重三　サア、今こそ云ふが……その譯は、これを見や。

　ト金を包みし反古を見せる。高尾、晴れ間の星明りに透かし見て

高尾　こりや、慥かわたしが父さんへ、金を包んであげた反古。どうしてお前が。

重三　サ、その親御とは露知らず、其方の身の上に、無くてならぬとあるゆゑに、金ほど人も恐ろしい。

高尾　そんならお前は、父さんを。

　ト恟り思ひ入れ。

重三　コリヤ。

　トあたりへ思ひ入れ。誂らへの合ひ方。

サ、こればかりでも死なねばならぬ。云はゞ其方のわしは敵。

　トこの時、五ツの鐘鳴る。

いま打つ鐘は初夜の鐘。諸行無常を誘ひ來て、少しも早くこの所で、二人一緒に潔よく。

高尾　なんの、お前が勿體ない。わたしが事ゆゑ現在の、あの父さんを

　トこなしあつて

猶々生きてはゐられぬわたし。長いあの世で父さんへ申し譯。

重三　イヤ〳〵、どうあつても、其方ばかりは

高尾　そんなら、お前と二人連れ。

重三　未來へ店替へ。

高尾　疾からわたしや、諦らめてゐるわいなア。

　ト泣き落す。これより、一つ鉦の念佛になり。重三郎、思ひ入れあつて、小さ刀を拔く。高尾の咽喉元へ突きつけ

重三　思へば過去の因果にて、親子諸とも我が手にかゝり、形もあらうに、出家の姿。

高尾　宿世如何なる約束と、思へどこの世は、今宵の名殘

り。

重三　かゝる憂き月を見る辛さ。

高尾　それがお前の矢ッ張り愚痴。

重三　いらぬ繰り言。

高尾　最期を早く。

ト高尾を一刀貫く。この時、風の音になり、柳の枝にかゝりし手紙、バッタリと下へ落ちる。此うち、重三郎、高尾を抉る。高尾、アッと倒れる。重三郎、白刃を持つて、ソレと腹切らうと持ち直す。手に落ちたる手紙さはるゆゑ、幸ひと反古にて、白刃を巻かうとする。この時、空へ月出る。これにて重三郎、思はず、手紙の上書を見て

重三　鬼貫どのへ、山名持豐。

ト讀む。心付いて、手紙を開き、

ナニ〳〵「先達て、お頼み申せし通り、二十七ヶ年以前、召使ひ候ふ八汐と申す女に情を加へ、懷胎なし、奧の悋氣に長の暇を遣はし、その節、産み落せし男子辨之介、後の證據と山鳥の片しの目貫に金子相添へ、右手當といたし、遣はし候ふところ、その後承はり及び候ふは、八汐夫婦の者、如何いたし候ふや、行くへ相知れ申さず、家の嫡子河内之助は心に叶ひ申さず候ふ間、山鳥の目貫、持參いたし候はゞ、早速家督相讓り申すべく候ふ。右の一條、お調べ下され候ふやう、頼み入り候ふ。月日」

ト悔り、思ひ入れあつて

ヤ、ヽ、すりや、この手紙にて、始めて知つた我が素性。養父たる十太夫が、拾ひ取りし捨子ぞと、この年月までも知らざりしが、血筋は正に山名持豐、今は天下の古老職、殊には證據は持ちたる目貫、持ち行く時には山名の家督、さうとは知らで今日までも、仇に暮して佛門の、姿を假の土手の道哲、女郎と語らひし、その理ゆゑにこの場の體裁。こりや滅多には死なれぬわえ。

ト思ひ入れ、これにて高尾、苦痛を堪えて

高尾　ヤゝ、そんならお前の

ト寄るを、重三郎、見向きもせぬ思ひ入れ。篠入りの合ひ方。

重三　こいつは巧い出世の小口。殊によつたら頼兼より、高くも登る山名の家筋、斯くなる上は島田の家、なんの小さな家中の芽生え。この高尾。

ト側へ寄つて

コレ、われが親の敵も、取つてやらうと思つたが、敵と

いふのは矢ッ張りおれ、どうしても取る譯にはゆかねえ。元は八重垣盗んだ泥坊、此奴が業だ何もかも。おれに任せてその時は、足軽位なその家は、二つも三つも立てゝやる。さうしたならば旦那寺、盆や暮れには、百一升の付け屆け、無縁にならねえその次手に、回向をするからコレ高尾、氣の毒ながらわればかり、そろ〳〵先へ死んでくれ。今一時この事が、早く知れたら仕様があらうに、さりとは不便な女だなア。

ト此うち高尾、聞いて口惜しき思ひ入れにて、重三郎に取縋り

高尾　エヽ、聞えぬわいなア。それ程までに、お前の惡心。

ト恨めしき思ひ入れにて、ヂッと見るを

重三　コレサ〳〵、惡い合點、心中とは云ふものゝ、お主もなるたけは、生きてゐてえが、食ふ事がならねえゆゑの心中。所にこの身が大名になると聞いては、百年も生きてゐたいが人情だ。そんな愚痴を云はずとも、お主は早く死んでくれ。

トこの時、高尾は、捨てたる白刃を取つて

高尾　エヽ、情ない。こなたゆゑ、せめて一太刀。

トよろぼい寄つて、打つてかゝるを、重三郎捕へて

重三　ヤレ、役にも立たねえ、危ないワ。とてもくたばる命なら、六條河原の土よりも、どうで野晒し、介抱もの。のたれて死んでしまやアがれ。

ト思ひ入れ。これより重三郎、高尾をなぶり殺しにして、上の川へ切り込む。此うち、重三郎の守り袋を引き切る事、高尾の咽喉元を抉るゆゑ、川へ吊し切りのやうになり、重三郎をしつかり捕へて

高尾　エヽ、恨めしい重三どの。

ト聲を立てるゆゑ、口へ守り袋をはませ、白刃にて存分抉る。これにて高尾、落入ると、ゴンと本釣り鐘。重三郎、思ひ入れあつて、そろ〳〵行きかける。この時、薄ドロ〳〵、寝鳥になり、高尾、顏を上げて、恨めしき思ひ入れ。重三郎、思はずゾッとして、また氣を替へて、ツカ〳〵と立戻り、高尾が首をポンと打ち落す。この首、仕掛けにて、よき所へ出る。重三郎見て

重三　南無三、口へあの守。目貫の入りしを、思はずも。

ト手をかけ、取らうとする。この時、向うにて人音するゆゑ、重三郎、ちよつと下の方に小隠れする。雨車頻りに、向うより、似十先に、六尺棒、弓張り提灯を

持ち、後より、中間二人、一人は挾み箱を擔ぎ、箱提
灯を提げ、出て來て、花道にて
似十　お前方は、頼兼さまの御家來衆。いま時分、どこへ
ござつらしやるのだ。
中一　わしは殿樣のお召替へを、廓からお屋敷の歸りがけ。
似十　ハヽア、さうかえ。わしは又、駈落ちをした道哲、
高尾が、その行くへを尋ねるのサ。
中二　そんなら、そこまで道連れに、
似十　サア／＼、行きませう／＼。
ト三人、本舞臺へ來て、提灯持ち、思はず高尾が首を
見付けて
中間　ヤア、爰に何やら。
ト提灯の明りにて、皆々見て
似十　高尾が切られてござる。首だ／＼。
ト驚ろきて、腰の拔けたる思ひ入れ。中間兩人は、挾
み箱を置いて一散に下座へ逃げて入る。似十、愕りし
て、おづ／＼してゐる。この時、後より、重三郎、出
て來て、似十が目先へ白刃を出す。
似十　ヤ、こなたが高尾を。
ト云ふを、口を押へて突き放す。ヒヨロ／＼下の方へ
行く。
重三　その挾み箱、爰へ出せ。
ト云ふゆゑ、似十、慄へ／＼
似十　ハイ、ヽ、ヽ
ト怖々、挾み箱を引摺つて來て、そこへ出す。重三郎、
顏にて、蓋を明けろと云ふ思ひ入れ。似十、心得て、
蓋を明ける。重三郎、立ちかゝつて、内より、頼兼の衣
裳を出し、我が形此方と見比べて、よし／＼と頷づき、
思ひ入れ。此うち、似十、慄へ／＼、下の方へ來て、
怪しい奴を
ト逃げかゝるを、後より一太刀に切り下げる。似十、
アッと倒れる。重三郎、右の衣裳を持つて思ひ入れあ
つて
重三　此奴に着せて、おれが替へ玉。さすれば爰で人殺し
の。
トうまいと思ひ入れあつて
せめては首に回向など……
ト首に手をかける。薄ドロ／＼になり、葭の中より、白
蛇出て、この首にまとひ居る。重三郎見て愕り、白蛇
は、首を咬へて、ザリ／＼と、葭原の中へ引き込むゆ

ゐ、重三郎、取らうとする度に、首遠くなり、トヾ首を咬へて、切り穴へ入る。ドロ／＼、燒酎の火、バッと立つ。重三郎、恟り、思ひ入れ。

ても恐ろしい

トたぢ／＼して後へ下がり、挾み箱へ撞と座し、目を閉ぢて、手を合せ

南無阿彌陀佛。

トこの見得、時の鐘、ドロ／＼にて道具ぶん廻す。

本舞臺、向う黒幕。上の方に、五條の橋の袂を見せ、以前の柳、矢張り其まゝにて、下の方に、開帳千部の札建てあり、靜かなる木魚の合ひ方にて、道具とまる。

ト爰に、非人古木の權、同じくつゞれ松、同じくどんつく長七、いづれも、酒菰を着たる非人にて、寢轉んで居る。向うより、無理右衞門先に、尻からげ、丸平角内、頰かむりして、後先に心を附けて、スタ／＼出て來り、三人、舞臺へ來て、無理右衞門、小石を取つて礫を打つ。これにて、四人起き上がつて

古權　合圖の礫は。

三人　待つて居りました。

無理　オヽ、最前云ひつけた通り、賴兼が駕籠と見たならば。

丸平　人知れず喧嘩仕掛けに。

角内　併し、駕籠に付いてゐる侍ひは此方の內幕。

無理　間違はぬやう、必らずぬかるな。

四人　心得ました。

益　アレ／＼、向うへ提灯が。

古權　慥かに賴兼。

無理　忍べ。

皆々　合點だ。

ト時の鐘になり、皆々、小隱れする。向うより、駕籠屋、垂れを下ろしたる四つ手駕籠を擔ぎ、これに泥之助、附き添ひ出て來る。後より道理之助、追ひかけ出て來て

道理　オヽイ／＼、これへござるは、泥之助ではござらぬか。君の御安否心元なく、夜中の事ゆゑ、狼藉者もあらんかと、後へ下がつて、見え隱れに。

泥之　それは御苦勞。然らば、これより御同道。

ト皆々本舞臺へ來る。此うち、以前の非人、バラ／＼と出て、駕籠を取卷き

古權　旦那樣、御報謝を
三人　下さりませう。
泥之　待て〳〵非人、夜中と云ひ、武士に向つて、手の內とは。
道理　定めし汝等は物取りならん。免し難い奴なれど、忍びの筋。
泥之　心も急けば免しくれる……サヽ、駕籠の者、急げ急げ。
　ト行かうとする。この時、丸平、角內、窺ひ寄つて、提灯を叩き落す。これにて、駕籠舁き、慟りして
駕舁　ヤア、人殺しだ〳〵。
　ト駕籠を、よき所へ置いて逃げて入る。泥之助、道理之助、駕籠を後に圍ひ
泥之　怪しい奴と見た目は違はぬ。さては、わいらは。
道理　側へ寄つたら命はないぞ……ソレ。
　トこれにて、無理右衞門、窺ひよつて
無理　たゝんでしまへ。
皆々　合點だ。
　ト禪のツトメになり、皆々、縫ひぐるみにて、打つてかゝる。兩方、仕組みの立廻りよろしく、泥之助、道理之助も、縫ひぐるみを取つて、合點にて追ひ散らす。この時、下座より、野之作先に、百姓、以前の鷲を擔ぎ出て、この中へ入り
百姓　喧嘩だ〳〵。
　ト鷲の籠を置いて、ごつちやになる。此うち無理右衞門、紙入れを落したる思ひ入れにて、あちこち探し、皆々邪魔になるゆゑ、突ゝ倒し、探して歩く。このごつちやにて、逃げ廻り、鳥籠を引ッくり返すと、トヒヨになり、中より、鷲出て、そこにある紙入れを咬へ、飛び上がらうとするを
百姓　ソリヤ、鷲が飛んだ〳〵。
野々　アレ〳〵、鷲が紙入れを。
　ト取らうとするを
無理　それは、わしが紙入れだ。
　ト取りにかゝるを、皆々立ちかゝる。此うち吹替へにて、人形の無理右衞門を、鷲が咬へる。風音烈しく、此まゝ無理右衞門を浚つて、紙入れを咬へ、空へ舞ひ上がる。皆々、慟りして
百姓　オヽ〳〵、大事の鷲が。
皆々　人を浚つた〳〵。

ト皆々、ごつちやに下座へ入るを、道理之助、泥之助、追ひかけて入る。時の鐘、合ひ方になり、駕籠の垂れを上げ、内に頼兼、少し醉ひたるこなしにて、あたりを見て

頼兼　コリヤ／＼、誰れぞ來ぬか。醉醒めの水を持て水を持て。

ト手を叩く。これをしるべに、丸平、角内、窺ひよつて

丸平　觀念。

ト打つてかゝるを、頼兼、キッと捕へて

頼兼　こりや、何者なれば、物を申さず。ムウ、さては盜人ぢやな。

角内　オヽ、盜人だ。われが命を

丸平　盜みに來た。

頼兼　小癪な匹夫め。コリヤ、近習の者は居らぬか。此奴等を遠ざけい。

丸平　面倒な。ぬかるな。

角内　合點だ。

ト禪のツトメ、兩人、打つてかゝる。立廻りちよつとよろしくあつて、此うち祇園囃子になり、向うより、鳴神鶴之介、前髪角力の拵らへ、着流し、一本差しにて出て來り、花道にて、向うを見て、直ぐに本舞臺へ來て、この立廻りの中へ入り、兩人を取つて投げ、頼兼を介抱して

鶴之　ヤ、あなたは、我が君頼兼公。

トこれにて、頼兼、鶴之介を見て

頼兼　ヤレ／＼、よい所へ鳴神が參つた。

ト喜ぶこなし。

よう來た／＼。サア／＼、鶴之介が來ては、千人力ぢや。どいつでも來い／＼。

ト思ひ入れ。

鶴之　ア、モシ／＼、滅多に我が君。

頼兼　でも、お主が來れば

鶴之　イヤ／＼、爰にござつては、もしや御身に……斯樣なされませ。

ト駕籠に付いてある伽羅の下駄を取つて來て、頼兼に穿かせ、我が手拭を出して、頰かむりをさせ

これよりあなたは、五條通りを寺町筋、それより横へ眞直ぐに、室町のお館へ、夜の明けぬうち、サ、早う早う。

賴兼　合點ぢや〳〵。併し、道は知らず、其方も一緒に。

鶴之　參りたけれど、只今の狼藉者。又も來らば御身の大事。

賴兼　そんなら仕方がない。行くぞや。

鶴之　ちつとも早う。

ト賴兼、歩かうとして、下駄にて歩かれぬ思ひ入れ。

賴兼　コレ〳〵、どうやらこれでは、道のはかゞ行くまい。

鶴之　モシ、お待ち遊ばせ。

ト足に觸る無理右衞門の草履を取つて

幸ひのこの草履。

ト草履を穿かせ

サヽ、早う〳〵。

賴兼　五條通り、寺町筋を眞直ぐぢやの。

ト繰返し〳〵云ひながら、花道へ行く。謠をうたひながら、悠々と向うへ入る。此うち捨て鐘。鶴之介、伸び上がり、後見送りて

鶴之　モシ、お怪我をなされますな。眞直ぐでござりますぞ。ヤレ〳〵、世話の燒けた旦那どのぢや。

ト下駄を持つて、思ひ入れ。この時、丸平、角內、後より

丸角　觀念。

ト切つてかゝるを、鶴之介、掻い潜つて、刀を打ち落す。これより兩人を相手に、角力の太鼓になり、立廻りよろしくあつて、此うちに、丸平、伽羅の下駄を取つて、鶴之介を目當てに打ちつけるとて、この下駄、思はず、向うの橋の後へ投げ込む。これにて鶴之介、南無三と取りに行かうとするを、角內、駕籠につけたる蛇の目の傘を取つて、後より、打つてかゝる。鶴之介、又これを捕へる。立廻りに傘開けて、橋の袂へ其まゝ置く。また兩人かゝる。立廻りに、トヾ二人を絞め殺し、鶴之介、ホッと思ひ入れ。下駄を尋ねる心にて、あたりを探り、廣げてある傘の轆轤へ手をかけ、取らうとすれど、動かぬゆゑ、鶴之介、刀にて引き出す。これに引かれて、橋の袂より、重三郎、紫の貫き袱紗、羽織衣裳、小さ刀にて、今の下駄を穿き、思はず引かれて出て、直ぐに行きかゝるを、鶴之介、心得ぬ思ひ入れにて、ちよつと立ちどまる。立廻りのうち、これより、誂らへの鳴り物になり、此うちに、向うより、おろく、木綿やつし、嶋田髷、前垂れを冠り、春雨に遭うたる體にて、藁草履を挾み、火口殼を抱へ、

莚の内に、火打ち石、火打ち鎌を入れ、これを持つて出て來り、直ぐに舞臺へ來て、この中へ入る。これより三人、立廻り、鶴之介は、おろくを重三郎と心得、重三郎は、おろくを鶴之介と心得、この立廻りのうちに、鶴之介、貰入れを落す。これをおろく拾ふ。重三郎の懷より、以前の山名の狀出かゝるを、鶴之介、手をかける。この時、途端に、鶴之介の懷よりも、書き物出るを、重三郎、取つてこの仕組みよろしくあつて、重三郎、花道へ行く。舞臺は、鶴之介、おろくを重三郎と心得、首筋を取つて引立てる。この途端に、月出る。鶴之介、おろくと顏見合せて恟り。花道の重三郎、思はず聲立てゝ

重三　南無三。

ト傘にて顏を隱す。おろくは、鶴之介の顏を見て、思ひ入れ。鶴之介、おろくを引き戻すとて、これにておろく倒れる。重三郎、傘を廣げる。木の頭。三人よろしく、拍子、幕。

ト幕の外、重三郎、傘をさし、思ひ入れ。花道の上へ雁金出て、向うへ行く。摺り鉦入り、派手なる唄になり、重三郎、悠々と向うへ入る。柝に付いて後シキギり。

四　建　目

南禪寺前豆腐屋の場
安井八幡開帳の場
粟田口組屋敷の場

役名＝足利左金吾賴兼。豆腐屋後家、おくら。同丁稚、豆太。嶌の嘉藤太。黑澤官藏。森山六兵衞。尤道理之助。土子泥之助。番八、木戶の嘉兵衞。下女、おやま。家主、川瀨屋文藏。町抱へ、三吉。講中、才助。同、舟右衞門。力士、鳴神鶴之助。同弟子、山中鹿之助。荒物屋、無理右衞門渡邊民部。同一子、千松。豆腐屋娘、粟。嘉兵衞娘、夕ぐれお六。島田重三郎後ニ民谷與右衞門。

本舞臺、三間の間、世話の二重舞臺。上の方、折り廻し障子屋體。正面、暖簾口、二重の下の方、落ち間にして、爰に大釜、好みの所に臼を据ゑ、豆腐屋の道具よろしく、この二重、いつもより、少し上へ寄つて飾り、よき所に門口、これに南禪寺豆腐と書

きたる看板を掛け、これより、下の方、誂らへの火の見、この下、九尺の二重、草履、草鞋、駄菓子など並べ、すべて東山南禪寺豆腐屋と、番太郎、隣合せの模樣よろしく、幕の内よりおくら、三建日の婆にて、豆を挽いてゐる。丁稚豆太、豆腐を切つてゐる。下の番屋に、木戸の嘉兵衞、發端の親仁にて糊の臼を挽いてゐる。門口に、木挽こつぱの柚六、同かゞりの又七、木挽にて、古木を臺切れにて引いてゐる。仕出し大勢、豆腐を買つてゐる。てんつゝ、禪のツトメにて、幕を明く。

仕出　爰へ、豆腐を二丁下さい。

同　油揚げを十と、燒豆腐を五つ下さい。

豆太　オットショ。豆腐はこの桶へ入れるかな。

ト銘々、捨ぜりふにて、手に／＼入れ物を持つて門口へ出る。

仕出　次手に草履を一足買つて行かう。

嘉兵　お待ちなさりませ。

ト矢張り、てんつゝ禪のツトメにて、仕出し、捨ぜりふにて、皆々向うへ入る。

豆太　ヤレ／＼、今日は今朝から、剛氣に賣れる日だ。おれ一人で、誠にガッカリだ。これで爰の内の聟にならなけりや、お庇がない。

くら　馬鹿を云ふな。われがやうな者を、聟に取るやうな内は持たぬワ。其やうな事いふ手間で、殘りの種も絞つて置くがよいぞ。

豆太　また仕事をするのか。人使ひのいゝ事だ。

又七　この木さへ切つてしまへば、これで仕舞ひだ。

柚六　さうよ。後は明日の事にしよう。モシ／＼、今日はもう仕舞ひますよ。

くら　ヤレ／＼、御苦勞でござりました。錢があるなら、酒でも買つてあがりませ。油揚げの一つ位は、達引きます。

柚六　有り難うござります。

嘉兵　コレ／＼、隣りの内でその古木を買つて、何にするのでござりますえ。

柚六　聞かつせえ。薪が高いから、湯屋で古木を焚くは聞いたが、豆腐屋まで、古木を遣ふとは恐れるね。

嘉兵　その位にせねば、商賣になりますまい。

ト矢張り、糊を挽いてゐる。

柚六　そんなら、お世話でも、この鋸は、明日まで爰に置

いて下さりませ。

嘉兵 サア〱どこへなりと、置かつしやりませ。

ト柚六、又七、そこらを片附け、鋸をよき所へ直し

又七 そんなら、明日まで頼みますよ。

柚六 サア、來や。歸りに湯へ入つて行かう。

トてんつゝになり、柚六、又七、向うへ入る。おくら、門口へ出て

くら エヽ、あの人達は、ちつと芥らを掃いて行けばよいのに。嘉兵衞どん、今に豆太に掃かせますよ。

嘉兵 ナニ、ようござります。どうで、わたしが掃きますから、打ッちやつて置かつしやりませ。

くら イヤ、ほんに今日は、内のおろくぼうを見ませぬが、どこぞへお出でか。

嘉兵 イエ、どこへも參りませぬが、昨夜から、風をひいたと云つて、寢込んで居ります。さういへば、お前の所の累さんも。

くら 聞いておくれ。わしが先の亭主の ソレ、お前も知つて居る助八どのが、どこでか切られて死んだとサ。それに因縁と云ふものは、變つたもので、あの心中して死んだ島原の高尾、後で聞けば、助八どのゝ娘ぢやげな。

それなれば、内の累とは、現在の姉ゆゑに、ちよつと悔みにやりました。なんと不思議な事もあるものぢやござんせぬか。

嘉兵 成る程、親子一時に非業な死やうをするとは、そりや飛んだ事だ。この中、東寺の歸り道で、助八さんにちよつと逢つたが、それが別れか。南無阿彌陀佛々々々々々々……さうして、その高尾どのとやらは、坊主と心中したさうだが、物好きな事ぢやの。

豆太 ナニサ、その坊主は、太鼓持ちださうな。をかしいね。

くら それにお前、その高尾の首が無いとサ。

豆太 首が無くつても、女はいゝものだ。

嘉兵 そんなものかね。

豆太 それはさうでも、落ちるところは、此方の累さんの因果だ。こんな繼母を持つて。

くら 又この餓鬼めが。

ト叱る。豆太、二重へ飛んで上がる。

嘉兵 イヤモウ、子を持つのも苦勞なものサ。わしも、元は賴兼さまの御家中、仁木さまに奉公をしてゐて、忰は同家中の外記左衞門さまへ中間奉公。其うち女房を持つ

て、孫も出來ましたさうだが、生れついての正直者だが、
その代り、餘ッぽどの間抜け。どうぞ、妹のおろくにも、
早う男を持たせたいものでござります。
豆太　わしでは、どうだえ。
嘉兵　お前なら、云ひ分なしサ。ハヽヽヽ。
　トこなし。
くら　よくなんでも口を出すよ。嘉兵衞どん、おろくぼう
に、藥でもあげなさいな。
嘉兵　ハイ、俵屋でも服ませませう。
　ト禪のツトメになり、嘉兵衞、こなしあつて、番屋の
內へ入る。この鳴り物にて、向うより、蔦の嘉藤太、
袴、羽織、大小、草履取りを連れて出て來り
嘉藤　お願ひ申さう。主は爰にござるか。
くら　ハイ、主はわたしでござります。御用なら、お入り
なさりませ。
嘉藤　然らば御免なされい。
　ト內へ入る。
くら　見れば、豆腐のお誂らへでもござりますまい。して、
私しに
嘉藤　別の儀でもござらぬ。拙者ことは足利頼兼の家臣、
蔦の嘉藤太と申す者だが、仔細と申すは、この家の娘、
主人頼兼の御目に留まり、召抱へんとあるなれど、云は
ば人の娘、親御達の分別もござらうと、それゆゑ、わざ
わざ御相談に參つた。なんと、この儀は如何でござるな。
くら　ヤレ／＼、左やうな事でござりまするか。それは、
私しの方も望むところ。てかけ妾は世間の習ひ。併し、
それも讀みと謌、金にさへなる事なら、娘は隨分。
嘉藤　それは、云はずとも知れた事サ。相談極まれば先づ、
支度金貳百兩出すが、なんと、これでは出來さうなもの
だ。
くら　アノ、貳百兩。コレ豆太、お茶でも上げぬかいの。
豆太　オット。
　ト豆太、茶碗取つて、茶を酌み、嘉藤太へ差出す。
嘉藤　主人頼兼公は、至つて性急なお生れ付き。直ぐに今
宵でも、お出でなされたら
くら　そりや、わたしが好いやうに計らひます。
嘉藤　それは重疊。それと申すも、惚れてござる高尾、心
中いたせしゆゑ、それに似たこの家の娘、もしお出でな
されたら、隨分ともに心を盡し、もてなしが肝心でござ
るぞ。然らば、拙者はお暇申す。後程キッと。

くら　モシ、その節、今の
トこなし。
嘉藤　ハテサテ、そりや念には及び申さぬ。然らばお暇。
くら　ようお出で下されました。
ト唄になり、嘉藤太、こなしあつて、向うへ入る。おくら、あと見送り
ヤレ〳〵、今日は、いろ〳〵の事のある日ぢや、助八どのや、高尾の死んだ事を聞くかと思へば、また今のやうに、累が身の出世、金儲けの事を云うて來るし、これがほんの、惡い事があれば善い事があると云ふ世の譬へ。塞翁法師が旨い物を食はうと云ふのは、この事か知らん。
トこなし。
豆太　モシ〳〵、阿母さん。今も聞いてゐれば、あの累さんを、大名のお妾にするとやら。どうしてあの累さんが。お客を取る事を承知するものか。殊に親御や、高尾さんが死んだと聞いて、鬱ぎ切つてゐるものを。
くら　エヽ、馬鹿め、それが見込みぢや。あの二人が死ねば、尻も來ぬ娘、これから、おれが食ひ物にするのぢやわいやい。
豆太　それでも、堅くろしい累さん。さうして鶴之介さんといふ
くら　やかましいわい。あの鶴之介は、親からの云ひ號けと吐かしてゐれど、それもこれも打ッちやつて、コレ、この中、われに買ひにやつた
ト巾着の中から、薬を出して
これを服ませれば男嫌ひも、ツイ、ぐにや〳〵となるわい。
豆太　ハア、そんなら、その蠑螈の黒燒でかえ。
くら　なんと、行屆いたものであらうがな。
豆太　行屆いた慾張りだわえ。
ト唄になり、向うより、豆腐屋娘累、振り袖、羽二重の娘にて、珠數を持ち、後より女中おやま、付いて出て來る。
かさ　此やうに、急いで戻るのも、あの母さんがやかましいゆゑ、ほんに大抵、氣の急けた事ではなかつたわいなう。
やま　併し、この位に戻りましたれば、阿母樣ぢやとて、なんとも仰しやる事ではござりませぬ。
ト云ひながら、兩人、本舞臺へ來る。直ぐに内へ入り
かさ　母さん、只今戻りました。

くら　ニヽ、この子は、なんだな、どの位隙を入れてゐるのぢや。たかゞ父親や、姉の死んだのぢや。それを今時分まで、かゝるといふは。

　トおやまを見て

おのれも同じやうに、何をしてけつかつたのぢや。

かさ　それでも、父さんのお墓、また姉さんの事も、死なしやんしたとばかり、實狀が知れぬに依つて

やま　いろ／＼と、聞き合して居りましたわいな。

くら　エヽ、役にも立たぬ事、捨てゝ置け……累、其方には早速、云はねばならぬ事がある。マア／＼爰へ來や。

　ト累、坐り

かさ　わたしに云はねばならぬ事とは、そりやマア、なんでござんすぞいの。

くら　外の事でもない。わが身を今宵、大名のお妾にする程に、その心で居ませうぞ。

かさ　アヽ、モシ、どうしてわたしに。殊に父さんが約束の、あの鶴之介さんといふ人のあるわたし。それでさへ、男が嫌さに、今日まで兎やかう。

　ト云はうとするを

くら　アヽ、コレ／＼、その男嫌ひも、大概がよい。その又、鶴之介の事は、死んだ親仁どのが約束の事なら、こりや、おれの知らぬ事。なにもこれには義理はいらぬ。大名の妾になれば、第一はマアわが身の仕合せ。この婆も、浮みあがると云ふものぢや。

かさ　そりやモウ、お前の云はしやんす事、否と云ふではなけれども、どうぞ、この事ばかりは。

くら　ムウ。そんなら、なにか、この婆が身が樂になる事、わりや不承知ぢやな。

かさ　なんのマア、勿體ない。

くら　イヤ／＼、さうぢや／＼／＼／＼。生さぬ仲でもこのわしは、蔭へなり陽へなり、其方の事を大事、大事にする事ではない。それを世に云ふ繼ッ子の僻み根性、この婆が身勝手を云ふと思うて、それで否ぢやと云ふのであらう。オヽ、よい思し召しぢや。いつまでも／＼、老い年寄つて忙しいこの商賣。樂をせうと云へば、わが身は不承知。オヽ、孝行な事ぢや／＼。

　トこなし。

かさ　其やうに云はしやんすと、わたしや、立つても居ても居られぬけれど、鶴之介さんへの義理と云ふのも、これには、いろ／＼。

ト云はうとして

サア、どういふ事やら、男は嫌ひ。これといふのも、わたしが氣儘から起つた事。心で心は取り直しても。サア、斯う云へば、矢ッ張りお前の詞を背くやうなれど、モウモウ、明日から店の事は、お前に代つてわたしが手一つ、どのやうな辛い目しても、お前に樂をさせます程に、妾とやらになる事は

くら　どうあつても、嫌か。

かさ　アイ。

ト思ひ入れ。

くら　よし〳〵、オヽ、立派によう云やつた。ドレ〳〵、わしは。

ト云ひながら、あたりの出刃庖丁を持つて來る。豆太見て

豆太　阿母さん、何をするのぢや。

くら　エヽ、默つてゐやれ。

ト累の前へ來て

累、さらばぢや。

ト此の庖丁にて死なうとする。累、あわて留めて

かさ　マア〳〵、待つて下さんせ。お前、こりや、なんで死なしやんすのぢやえ。

くら　イヤ〳〵、放せ〳〵。おりや死ぬる〳〵。

かさ　イエ〳〵、お前をどうして。コレ、皆も留めてたもいの。

豆太　合點だ〳〵。

ト豆太、おやま、留めようとする。

くら　わいら、構ひ居るな。サア、累、爰を放せ。わが身は妾になるのは否ぢやと云ふし、わしは、約束したお屋敷へ濟まず、それぢやに依つて生きては居られぬ。

トまた死なうとする。

かさ　アレ、待たしやんせと云ふのに。お前を殺して、わたしがどうして

くら　そんなら妾になつてくれるか。

かさ　サア、それはな。

くら　否なら死なうか。

かさ　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト累思ひ入れ。おくらこなしあつて

くら　累は、親を殺します。繼母を殺します。親殺しぢや親殺しぢや。

ト大きな聲にて云ふ。累、いろ〳〵留めて
かさ　母さん、マア、待つて下さんせ。世間の人も聞くわいな。誰れも否ぢやと云はぬものを。
トこなし。
〽ら　そんならよいか。得心ぢやな。
ト累、領づく。
わが身が得心すれば、わしもまんざら死にたくもない。よう得心してくれた。オヽ、よい子ぢや〳〵。
ト累、默つてゐる。
わが身さへその心なら、何もいさくさはない。今にも、その大名どのがござらう知れぬ。なんぞ肴でも拵らへて置かねばなるまい。サア〳〵、わいら二人も用はあるぞ。おれと一緒に奥へ來い。累、其方は隨分奇麗にして、顔でも拭いて、鼻でも叩いて置きや。ヤレ〳〵、世話やの世話やの。人を使へば苦を使ふぢやなア。
ト奥へ行きかゝり、振り返つて、累を見る。累、顔を上げ、おくらと顔見合す。おくら、咽喉を突く眞似をする。唄になり、累、こなし。おくらこなしあつて、おやまを連れ、入る。豆太、後よりおくらをぶつ眞似をして、附いて入る。あと彈き流し、合ひ方。累、こなしあつて
かさ　なんぼう生さぬ仲にもせよ、日頃から胴慾なあの母さん。それにつけても、いつぞや祇園の年籠り、つい暗紛れにいたづらな、枕交したあのお方。お顔も知らず、名も知らず、恥しいやら嬉しいやら、互ひの所も打明けて、話しをせうと思ふうち、あたりの喧嘩に果敢ない別れ。後の證據と下さんした
ト懐より、印籠を出し
模樣は陸奥松島を、好んで蒔かせたこの印籠。この片々のその主を、心で尋ねてゐるけれど、どこにどうしてござんすやら、今日が日までも音信知れず。別れし後にてお腹の樣子、もし母さんに知れてはと、あの鶴之介さんの男氣を、賴んで斯うと打明けて、話して見れば呑み込んで、どうか斯うかと思ふうち、降つて湧いたる今日の仕儀。父さんや姉さんには、同じ月日に死に別れ、賴みに思ふ母さんは、今のやうな邪慳な事。得心はしたものの、この印籠へ云ひ譯立たず。こりやマアどうせう、どうせうぞいな。
トいろ〳〵愁ひのこなし。唄になり、向うより重三郎、賴兼の拵らへ、伽羅の下駄を穿き、嘉藤太、附き添ひ

出て來り、花道にて

重三　ア、コリヤ〳〵嘉藤太、いから草臥れて歩かれぬが、まだ餘程、間があるか。

嘉藤　イヤ、もうつい向うが、その豆腐屋でござりまする。御免下さりませ。

ト嘉藤太、入れ替つて、舞臺へ駈けつけて來り

頼みませう〳〵。

ト此うち、重三郎、靜かに舞臺へ來る。奥より、おくら、豆太、おやま出て

くら　これは、先程のお侍ひ樣、マア内へ

嘉藤　我が君を密かに、お供いたした。

ト重三郎に向ひ

御前、直さま、これへ。

ト重三郎、頷づき、つッと上へ通り、座に附く。豆太、キヨロ〳〵見て居る。累、下の方へ來て、あちら向いてゐる。

重三　長途を歩行いたしたので、いから草臥れた。ナニ、嘉藤太、して、その女はどうぢや。

嘉藤　ハツ。只今、お目通りを。

トおくらの方へ來て

サア〳〵阿母、彼の代物を、一刻も早う、御前のお側へ。

くら　ハイ〳〵、畏まりました……サア〳〵累、ちやつとお茶を。

やま　モシ、ちやつとお茶をお上げなさりませ。

ト茶を酌み、茶臺に載せて、無理に累に渡す。累、不承々々に、茶を出す。重三郎、取りながら、累を見て

重三　奇妙だ……イヤ、あでやかなるものぢや。嘉藤太嘉藤太、こりや、よい物を心付いた。この褒美には、百石の加増を申し付けるぞ。

嘉藤　有り難う存じまする……。コレ〳〵、この通りぢや。どうだ〳〵。なんと、大名と云ふものは、きつからうが。

くら　きついワ〳〵。モシ〳〵、お殿樣、この娘を差上げましたら、私しにも御褒美が。

重三　イヤモウ、心に叶へば、どのやうにも取立て遣はす。併し後々、隱居すれば、大名をやめる頼兼、都度々々に願ひ出るを、聞き屆けるも面倒で惡い。なんと、物は相談ぢやが、この頼兼、この家の聟とやらに致してはどうぢや。五十四郡を持參ぢやが、どうぢやな。

豆太　こいつは面白いわえ。さうすると、このおれは、差詰め爰の家の御家老職。家老だよ〳〵。

重三　何はさておき、嘉藤太、申し付け置きし事は、如何ぢや。
嘉藤　ハツ〳〵。
ト下の方へ、おくらを連れ來たり、ちよつと呼んで囁く。
くら　それは承知。さうして彼の一件わえ。
ト金の仕方する。嘉藤太、呑み込んでゐると云ふこなし
重三　早く致せ。五十四郡を持參ぢやぞ〳〵。
嘉藤　只今々々。
トおくらに呑み込ます。おくら、重三郎の前へ來て
くら　ハイ、あなたは、さぞお草臥れでござりませう。ちとお横にでも、おなり遊ばしませ。
重三　オッと……合點ぢや〳〵。
ト足を投げ出して
コリヤ〳〵、そこに居る者ども。爰へ來て、身が腰を擦れ擦れ。
豆太　横柄なべら坊だな。
重三　でも、奥家老ではないか。
豆太　合點だ〳〵。

ト重三郎の腰を揉む。此うち、おくら、おやまに囁き、障子屋體の内へ、床を取らせる。おやま、累の顔を見ながら、こなしあつて、床を取る。おくら、手早く奥より、銚子を持ち來り、最前の薬を入れ、重三郎の前へ持つて來る。
くら　只今、お肴が出來ます。あまり御退屈、ちよつとお一つ。
重三　こりや氣が付いて居るわえ。サ、、つげ〳〵。
ト呑んで
サ、、これは、其方にさゝう。呑みやれ〳〵。
ト累へさす。
かさ　わたしや酒は嫌ひでござんす。
トこなし
くら　コレ、どうしたものぢや。ちやつと頂かぬか。呑まぬとこれぢやぞ。
ト咽喉を突くまねをする。
かさ　エ、、忙しない。呑むわいなア。
ト杯を取る。おくら、ついでやる。累、いや〳〵呑む。おくら、重三郎へ、杯をさせとする。累、默つて杯を重三郎へさすな

くら　ハイ、御返杯のお杯。
ト重三郎、取つて
重三　こりや、過さずばなるまい。
トまた呑む。嘉藤太こなしあつて
嘉藤　拙者は何か用事もあれば、御前は暫らくこの所に
くら　ほんに、わたしらも、ちよつと外して
豆太　イカサマ、仲人は宵の程。併し、その女夫事が濟む
と、約束通り、おれは御家老だが、それはいゝかえ。
嘉藤　ハテ、ようござります。
ト唄になり、この人數皆々、奥へ入る。累、重三郎殘
る。あと合ひ方。
重三　時に、女、其方、も一つ呑まぬか。サヽ、身が酌を
致し遣はす。
トこれにて、また累、一つ呑む事。
これが卽ち、夫婦仲の寢酒とやら申すのぢやが、もう寢
ては强いか。どうぢや〳〵。
かさ　イエ〳〵、わたしやお大名は、きつい嫌ひでござん
す。
重三　大名は嫌ひか。それぢやに依つて、只今も申す如く、
其方への心中に、大名は止めて、この家の入り聟。コリ
ヤ、心措きなく、身が云ふ事。
トまた寄り添ふを、累、飛び退き
かさ　イエ〳〵、それでもお大名は、矢ツ張りどこやら。
わたしは、仕馴れたこの臼を。
ト臼を挽きにかゝる。重三郎見て
重三　こりや、一段と面白さうな手業ぢや。すりや、その
臼とか申す物を挽くのが、この家の內の式作法の第一と
見える。弓矢八幡とても當家の聟となるべき某、その臼
てふ物を挽いて見ようか。
かさ　そりやモウ御勝手。一緒に寢るよりその方が。
重三　然らばこれにて、臼の傳授を。
ト累の側へ來る。
かさ　頼みもせぬに粹狂な。
重三　イヤ、どこまでもこの業を。
かさ　臼にかけたる箍かけの
重三　たが〳〵懸けて歸らうより、身を臼の目と
かさ　思ひ切る世に
重三　ドリヤ、挽くとやらにかゝらうか。
ト口切りの唄になり、重三郎、累、こなしあつて、臼
を挽きにかゝる。この唄をかつて、向うより三吉、絆

纏、股引、町抱へにて、金棒を引き、後より頼兼、三建目の形にて、頬かむりをして出る。川瀧屋文藏、家主の形にて附いて出る。

文藏　モシ〳〵、矢ッ張りあなたのお屋敷は、知れませぬか。

頼兼　今に知れぬが、其方ども、存じて居るか。

文藏　どう致して、あなたの御存じない事を、私しどもが、

三吉　どうぞ、屋敷の名でも、聞きたいもんだ。

頼兼　たわけ者め。武士たる者が、迂濶に姓名を名乘るべきや。サヽ、身が存じ居る所まで、送れ〳〵。

三吉　こいつは困り者だ。早く、先の町へ送りやせう、

文藏　それがよい〳〵。

トまた鐵棒を引いて、頼兼を中に文藏、三吉、本舞臺へ來る。

嘉兵衛や〳〵。

トこれにて、番屋の内より嘉兵衛出て

嘉兵　こりやァ大家さま、なんでござりまするな。

文藏　なんだどころか。迷子の事だ〳〵。

嘉兵　そりやァ厄介者だ。

三吉　迷子は迷子だが、迷子の大名だよ。

文藏　餓鬼に劣つたお大名様、それゆゑ、町送りにする積りだ。

嘉兵　それは怪しからぬ。どういふ事で

ト頼兼を見て

ヤ、あなたは。

頼兼　其方、身を存じて居るか。

嘉兵　あなたは、お見知りはござりますまいが、私しの方には。

頼兼　それは重疊。然らば家主とやら、大儀であつた。ヤレヤレ、足を痛めた。

ト番屋へ腰をかける。

文藏　そんなら、こなたが知つてゐるお大名か。ヤレ〳〵、それは丁度よかつた。

三吉　それでは、いさもくさもない。おいらの方には、構ひッこなし。

文藏　嘉兵衛どん、しつかり渡しましたぞ。

嘉兵　慥かにお預かり申しました。

三吉　とんだ交ぜ返しだ。サア、行きやせう。

ト合ひ方、生け殺しにて、文藏、三吉、捨ぜりふを云ひながら、引返して向うへ入る。

嘉兵　ヤレ〳〵、マア、どう致した事で、殿様には、どこへお出で遊ばしました。あなたお一人。マア〳〵これへ。

ト賴兼、上へ上がり

賴兼　仔細あつて、一人で歩いて見たが、昨夜から道が知れいで、さて〳〵困り果てた。殊には、餘程空腹ぢや。膳部の用意いたせ。

嘉兵　へイ〳〵、これは大變。御膳と申して早速には、マア、穢くとも、お茶を一つ。

ト茶を酌んで出す。此うち、重三郎、累、臼を挽きながら

重三　これは、なか〳〵力のいるものぢや、ちと休んではどうぢや。

かさ　イエ〳〵、この位な事で休んでは、とんと役に立たぬわいなア、お前は否なら、御勝手に止めなさんせ。

重三　イヤ〳〵、さう聞いては止められぬワ。併し、此やうにして、毎日々々女夫仲よう、二人ならんで稼いだら、大名よりか遙かよい身上になるであらう。いつまでも、この臼のやうに重なり合うて。

ト累に寄り添ふ。

かさ　アレ、マア爰を。

ト飛びのき

エヽ、モ、アタ舌たるい。否ぢやと云ふのに。

重三　ハテ、荒々しい女ぢやなア。

ト累、腹立てながら、門口から、外を見て居る。賴兼、フト累を見て

賴兼　ハテ、奇麗な者ぢや。コリヤ〳〵、あの者は何者ぢや〳〵。

嘉兵　へイ、あれは、隣りの娘でござります。

賴兼　ナニ、娘ぢや。然らば、まだ定まりたる夫もない者と見ゆる。身が心に叶うた。身が妾に致さう。コリヤコリヤ娘。

ト立つて來て

大名の妾になるは、餘り憎うはあるまいがな。

ト累の手を門口外より、チツと握る。累、振り切り

かさ　エヽ、モ、外にも大名があるわいな。此やうにも大名が、たんとあるものかいなア。

トおくら、奥より出て

くら　なんぢや。門口に居る人は誰れぢや。アタ不作法な、人の大事の娘を捕へて。

ト門口へ出る。嘉兵衞、氣の毒なる思ひ入れ。

嘉兵　アヽ、モシ、阿母、ちよつと〳〵。
卜呼ぶ。おくら來るを、嘉兵衞、ちよつと囁いてこなし。
くら　ムム、そんなら、あなたもお大名かえ。
賴兼　大名〳〵。併し、今の娘のしこなしは、どうやら大名が嫌ひのやうに見請けた。コリヤ娘、大名が嫌ひならば、只今より、この家の主となつて、其方を迎へるが、否か〳〵。
くら　イエ、モウ、あなたの事なら、どうでも致しませうわいな。
賴兼　併し、この番太郎とやらになれば、名も改めずばなるまいな。
嘉兵　イカサマ、お大名の番太郎ならば、角の番太郎、糊なめ公とでも申しませうか。
賴兼　然らば、先づ見習ふ爲、この臼とやら。
卜臼の側へ來て
コレ〳〵、斯う挽いてはどうぢや。天晴れな番太郎であらうがな。
重三　コリヤ〳〵、老女、何を致し居る。女が心底、どうも濟まぬが、五十四郡は欲しうないか。

くら　欲しうござりますればこそ、大事の娘を、マア、あなたは爰へ。
卜重三郎を上の障子屋體の内へ入れ、見切り障子を閉めて
コレ〳〵累、どうしたものぢや。ちやつとお側へ行かぬか。
卜累、頭を振るを、無理に行けとする。
賴兼　コリヤ〳〵、隣りの老女、來いよ〳〵。
くら　ハイ〳〵、只今。
卜門口へ出る。
賴兼　此方は、如何いたす。
くら　上げますは、上げますが　どうぞ暫らく、支度を致しまするうち。
賴兼　然らば、それまで、相待ち居るか。早く致せ。
重三　コリヤ〳〵、女は如何いたした。
くら　ハイ〳〵。
卜内へ入り、累に、重三郎の側へ行けとする。
かさ　行くは、行くけれど。
卜愚圖々々して居るを
くら　否ぢやと云ふと、ソレ、これぢやぞ。

重三　ト咽喉を教へて、無理に累を、重三郎の側へ突きやる。
　其方、ひどく身共に心を持たせ居るな。憎い奴ぢや
ぞ。
ト後より抱きしめる。累、伸び上がつて、おくらの方
を見る。おくら、また死ぬ眞似をする。累、こなし。
かさ　そんなら、アノ、どうぞ、一度で。
トこなし
重三　ナニ、一度。然らば、先づ五十四郡のうち、一郡を
遣はす。後は、追ひ〱陸奥の、奥の方をば。
トこなし。累、逃げようとする。この時、薄ドロ〱
にて、欄間の内より、白き蛇、ブラリと下がり、首を
上げる。累、見て
かさ　アレエ。
ト重三郎に抱き付く。重三郎、恟り、入れ替つて、こ
れを拂ふ。蛇は消える。
重三　ハテ、怖くはないワ。
ト唄になり、障子をさす。おくら、落ちつきしこなし。
くら　ヤレ嬉しや。先づ、奥の客人は寝かしてしまうた。
トまた外の番屋にて、賴兼、手を叩き
賴兼　老女、來いよ。

くら　アレ、また表座敷から……お手が鳴るよ。
ト云ひながら、門口へ出る。
嘉兵　コレ〱、そちらが濟んだら、早くこちらへ。
くら　ハイ〱、直ぐに上げます。どうぞ暫らく、
嘉兵　左やうなら、暫くのうち、わたしが奥にて、お横に
なつて。
賴兼　イカサマ、さう致さう。そんなら老女、キッと詞を。
くら　只今直ぐに。
賴兼　ドリヤ、奥殿にて相待たうか。
ト唄になり、賴兼、こなしあつて、嘉兵衞を連れ、奥
へ入る。おくら、内へ入り
くら　ヤレ〱、斯う又、合憎、客人の落合ふ事もないも
のぢや。併し、どちらも〱金儲け。とてもの次手に、
もう二三人、大名が來ればよいが。
トこなし。靜かなる名古屋唄、かすめたる禪のツトメ
になり、向うより鶴之介、前幕の角力の拵らへ、後よ
り、山中鹿之助、大どてら、取てきの拵らへにて、附
き添ひ、兩人、花道にて
鹿之　コレ、關取、あんまり、こなんが結構にしてごんす
から、先では馬鹿にしやすわサ。今日はなんでも、埓を

明けずば歸りやすまいぞえ。

鶴之　ハテ、よいわい。何事も、おれ次第にして置け。必らず、無駄口をきくな。何を云うても、先は女、婆ほど解らぬものはない。それはさうと、お屋敷の賴兼さま、昨夜五條の橋下でお目にかゝつたが、今に屋敷へお歸りがないとの事。われも、隨分氣を附けて、お目にかゝつたら、お供申すがよいぞ。

鹿之　合點でごんす。

鶴之　どうぞ早く、歸らつしやればよいが。

　トまた唄になり、兩人、本舞臺へ、直ぐに內へ入る。

阿母、この頃は逢ひませぬの。

　ト上へ通る

くら　オヽ、鶴之介どの、なんと思うて。弟子の鹿之助とのも御同道で、どれも〳〵、米が廉うてお仕合せだ。そして、なんぞ用でもあつてお出でか。

鶴之　外の事でもないが、久しいものだが、あの累、約束通り引取つて、近くに女房にする積り、それで、今日わざ〳〵來ました。

くら　なんの事かと思へば、累が事かえ。アタしつこい。あの娘は、わしが掛り子、どうしてこなたに。

鹿之　ア、コレ〳〵、婆さん、聞きなせえ。こりやア、惚れ合つて貰ふのなんのと云ふやうな、嫌らしい事ぢやねえよ。いつも〳〵同じ事を云うたりするやうだが、實の親御から貰つてくれと、關取の方へ書付けまで取つてある夫婦仲、それだから、連れて行くと云ふのが惡いのか。なんぼう婆アだと云つて、あんまり解らねえ事を云ふぜ。

鶴之　そりやさウ、親仁どのから書付けまで取つては置いたが、この事を云ひ出すと、否の應のとむづかしい。それには、なんぞ様子のある事と、それでこれまで打捨て置いたが、この中、思はず親仁助八どのが切られた噂、殊には又、高尾どのゝ安否、累を女房にする時は、討たねばならぬ男の敵。それが否さに約束を、變替へしたと云はれては、どうも世間へ面出しが出來ぬ。また二つには

　ト書き物を出して

この書き物サ。この證文へも義理が立たぬ。そこを思うて商賣に、似合はぬながらも、女の催促。サア、さう思つて、おくらどん、累をおれが貰ひましたぞ。

　トおくら、これを聞き、默つてこれを留める。

待たつせえ、おくらどん。この位、譯を云うても、果をくれる事は、否だと云ふのか。

くら　マア、そんなものよ。

トこなし

鹿之　アノ、助八の證文があつても。

くら　死人に文言。

鶴之　すりや、どうあつても。

くら　ドリヤ、燒豆腐の水でも替へよう。

トおくら、唄になり、ツイと奥へ入る。

鹿之　あの狸婆アめ。

ト行かうとするを、鶴之介、こなしあつて

鶴之　ハテサテ、忙しない。なんと云はうが明日までには、おれが女房に持つて見せるワ……兒イ、火を一つ入れてくれ。

ト火入れを突き出す。始終、合ひ方、隣りの番屋より、嘉兵衛、莨入れを持つて出て來り、門口より

嘉兵　關取、御免なされませ。この莨入れは、慥かあなたのでござりませうな。

ト三建目の莨入れを出す。鶴之介見て

鶴之　それ〱、こりやわしのだ。

ト取つて戴き

こりや忝ない。大きに尋ねました。どうしてお前が。

嘉兵　ヘイ、その莨入れは、昨夜、娘めが拾ひましたゆゑ、そこであなたへ。

鶴之　さうかえ。そりや有り難い。そんならちよつと、禮に行きやせう。

嘉兵　イエ〱、それには及びませぬ。お前の物をお前に返すに、なんのお禮が。

鶴之　イヤ、さうぢやごんせぬ。返してもらふは、貰うた同然。是非ともちよつと。

嘉兵　成る程、それ程に仰しやる事ならば、あなたがお出でには及びませぬ。ちつと、お待ちなされて下さりませ。

ト嘉兵衛、番屋の方へ來て

おろく〱。

ト呼ぶ。

ろく　アイ〱。

ト合ひ方にて、番屋の内より、おろく、前幕の形にて、おづ〱出て來る。嘉兵衛は、また内へ入る。おろくは門口に坐つてゐる。鶴之介見て

鶴之　どうしたものだな。父さん、コレサ、マア〱、此

方へ呼びなさいな。

嘉兵　ア丶モシ〳〵、あれが勝手でござりまする。その貰入れのお禮と、たつた一言仰しやるが、身にしみ〳〵と、それゆゑに連れて參つたこの娘……マア、御免なされて下さりませ。

ト鶴之介の側へ寄つて

親の口から斯様な事、申し參るも如何な儀ではござりますが、いつか北野の角力の折、モシ、笑うて下さりますな。番太の娘が大それた、いま日の下に隱れもない、人も知つたる鳴神鶴之介どのに、惚れて、所詮出來ぬ相談と、心で心を取り直し、隱してゐるを親の身で、どうぞ叶へてやりたいと、思ふばかり、石龜の自團駄、其うち昨夜、思はずお前の手にて、衿髪を攫まれたをば思ひ出に、尼にもなりたい娘が願ひ。娘に甘いは父親の習ひ。不便でござる。ならう事なら女房にと、サア、それもならずば一度でも。

ろく　ア、モシ、父さん、其やうな耻かしい。併し、心でくよ〳〵と、焦れて死なうと思うて居れど、ならぬ仲でも此やうに、フトした事からお詞を、請ければ、わたしや嬉しいけれど、とても叶はぬ事ならば、どうぞ死にたうござんすわいなア。

ト泣く。嘉兵衞、こなしあつて

嘉兵　この通りでござります。どうぞ、お慈悲に娘めを。

鶴之　ア丶、コレ、父さん、何を云ふのかと思へば、わッけもない。そりやモウ、おれだと云つて、まんざら木の端、竹の折れでもなし、志しは忝ないが、今ン當つてその返事は。

嘉兵　成る程、さう仰しやるは、御尤もぢやが、そこを只管。

鹿之　カウ〳〵、父さん〳〵、どうしたものだな。いま隨一の關取と、人も知つたる親方が、腹は立ちなさんなだが、番太郎の聟にやアなられめえ。おいらは又、その惚れた惚れないのと、そんな事はきつい嫌ひだ。カウ、爰に、錢が四百ある。これであの子に、なんぞ買つてやりなさい。

ト懷より錢を四百出す。

嘉兵　有り難うござります。それは貰ひましたも同然。その出來ませぬ事ゆゑに猶々と。

鹿之　出來ない事なら、云はねえがいゝ。

ト鶴之介、默つて、煙草をのんでゐる。

知れた事を引ッくり返し、よく物を積つて見さつし、大きな形をして、小さな内へ、出來ない事を合點で……アア、聞えた。こりやアこんた、困らせるのだな。困つた上は眞人れ、それだけ錢をくれろと云ふのか。そんなら早く云ふがいゝワ。

鶴之　アヽ、コレ〳〵、其やうな事は云はねえがいゝ。ナニ、まんざら、さうでもあるまい。カウ、父さん、今も云ふ通り、深切は忝ないが、とても其やうな事は出來ねえから、お前もとつくり勘辨をして、あの子にも、よく云つて聞かすがいゝぜ。

鹿之　この後とも、そんな馬鹿を云はつしやるな。

嘉兵　馬鹿は云ひませぬ。實を云ふのになんだ。こなたばかりびく〳〵と、成る程、體は大きいが、川柳とやらにある通り、大男、惣身に……ドリヤ、參りませうか。

　ト行きにかゝるを

鹿之　カウ〳〵、大男、惣身には、なんだと。惣身に智惠が廻りかねと、それを云ふのか。この親仁め。

嘉兵　ナニ、それをアノ、わしが。

鹿之　イヤ〳〵〳〵、云ふ氣だ。サア、吐かせ、吐かしやがれ。うぬ、云はねえと斬うして。

　ト嘉兵衛の胸ぐらを取つて、突き倒す。嘉兵衛、倒れ、門口にて額を打ちしこなし、額に疵つく。おろく見て

ろく　ヤア、父さんの顔に。

　ト介抱する

鹿之　疵を附けたら惡いのか。

　ト立ちかゝるを鶴之介とめて

鶴之　これはしたり、どうしたものだ。大人氣ない。年寄りや女を相手に、人が聞いても外聞が惡い。マア、下に居ろと云ふに。

鹿之　それでもお前、强情な。

　ト寄らうとするを、おろく留めて

ろく　どうぞ、御免なされて下さりませ。何を云ふのも年寄りの事、ツイ物云ひが惡うございましたは、此方の不調法。元はと云へば、わたしから起つた事。あなたもどうぞ御料簡を。モシ、關取さま、どうぞ御堪忍なされて下さりませ。

　トいろ〳〵詫びをする。

鹿之　其方の不調法は知れた事だ。

鶴之　さう云ひなさりやア、何も根も葉もある事ではなし、お前の方さへよけりや、此方はいゝ。其方はいゝかえ。

また惡いと云うて相手なら、どこまでもこの鶴之介、互ひに詞の間違ひなら、それでこの場の濟み濟まし。鹿よ、藥でも付けて進ぜるがよい。

ろく　ナニ、ようござります。父さん、ちやつと内へ、

嘉兵　成る程、人の情も世にある時。現在顏に疵を受けても、此まゝに。まんざら昔はこの親仁も。

ろく　父さん、もうよいわいなア。

トこなし。

嘉兵　われさへよけりや　おれもよい。サア、行きませうか。

ト合ひ方になり、嘉兵衛、おろくの手を取り、下の屋體の内へ入る。鶴之介、こなしあつて

鶴之　お主も氣の早い。畢竟、人がよければこそ。ちつと嗜なむがいゝぜ。

鹿之　それだといつて、あんまりな強情親仁だ。

鶴之　その親仁より、爰の婆、あの強情にも困らせるぜ。

鹿之　ほんに、今の交ぜツ返しに忘れてゐた。もう一度逢うて、あの婆アに。

鶴之　おれは爰に待つてゐる。そんならお主が、も一度逢つて。

鹿之　さうしやせう。待つて居やんせ。

ト合ひ方になり、鹿之助、奥へ入る。下の番屋より、おろく、手紙を持つて出て來て、怖さうに内を覗き

ろく　關取さま、まだ爰にお出でなさりますか。

鶴之　オヽ、今の女中、なんぞ、用かな。

ろく　只今は大きにお世話になりました……この文を、あなたにソッとお渡し申せと。

ト文を出す。鶴之介、不思議さうに取つて、上書ばかり見て

鶴之　そんならアノ頼兼さまが、どうして爰の、アノ番屋に。

ろく　ちよつとあなたをお呼び申せと。

鶴之　そりやア飛んだ事だ。ドレ、ちよつと行つて、お目にかゝらう。

ろく　サア、お出でなさりませ。

ト鶴之介、ズッと番屋の内へ入らうとする。

ア、モシ〳〵、そちらではござりませぬ。人目を憚かり、あれなる櫓に。

鶴之　ナニ、櫓に……それは安心、そんならちよつと。

ろく　お危なうござります。

ト おろく先に立ち、櫓の中段まで上がる。鶴之介も付いて上がる。

これより上へ。

鶴之 合點でごんす。

ト櫓の上へ上がる。おろく、此うち梯子をツッと引き、下へ下りて、肌を脱ぎ、鉢巻をして、菊明きの鋸を出し、鑢にて目を立てる思ひ入れ。鶴之介は、此うちに、上へあがり、頼兼なきゆゑ、

こりや、頼兼さまは……ハ、ン、さては女が。

ト思ひ入れ。この時、風の音して、三建目の形の無理右衛門を火の見の屋根へ落し、鷲は、上へ上がる。花道、付け際へ、三建目の紙入れを落す。この無理右衛門が落ちし物音に、鶴之介は櫓の上、おろくは、舞臺へベッタリ尻餅をつく。

ろく 今の物音。

鶴之 何やら屋根に

無理 落ちてもつまらぬ火の見の屋根。

ろく どうで一緒に

トこの時、鶴之介、下を見る。おろく、仰向く。兩人顔見合はす。おろく、鋸をトンと突き、キッとなりて、見得。臼挽き唄のやうなる合ひ方になる。

鶴之 ムウ、そんなら、女が騙かつて、梯子を引いてこの櫓へ。

ろく アイ、ぞつこん惚れた此おろく、顔押拭ひ、親子連れ、頼んで見れど聞入れない、玉の杯底拔けし、男はフッツリ思ひ切り、その折受けし父さんの、顔に疵付く仕返しに、命を取るも殺生と、今アノ爰で鋸の、刃金の切れ味、この柱、切らば忽ちから／＼と、横には遂に寢た事の、ないお前でも大象を、繋ぐ女の念力で、其うち天から逆さまに、落ちるは男の自業自得。細工は流々、仕上げの程、これにて思ひ知らしやんせ。

ト思ひ入れ。嘉兵衛、奥より出て

嘉兵 出かした娘。それでこそ、おれが娘。なれども、女の手一つでは心元ない。おれも一緒に手傳うてやらう。

ト嘉兵衛も鉢巻をして、おろくと向ひ合ひ、柱に當てて、グイ／＼と切りにかゝる。

鶴之 ア、コレ／＼、早まるまい／＼。これサ、どうしたものだ。其やうな事をするとは、父さん、なんだな、如才もなくて……お娘、いゝ氣前だ。なぜ先刻はあのやうな事を云つたかしらん。小ッ恥かしい事だが、おらア

疾から惚れてゐるやつサ。それを知らいで野暮め〱。

トこなし。

ろく　アイ、わたしや野暮でござんす。野暮ぢやに依つて、この柱、親子二人で切るのぢやわいなア。

トまた切りにかゝる。無理右衞門、惘りして

無理　これは大變。そんなら下に。

ト屋根をトン〱と叩き

モシ、お願ひ申しませう。下家のお方へ。お前がござるゆゑに、向う三間、兩隣りではなくて、下上隣りが迷惑だ。わたしも家主だが、ひよんな店子を持つものだ。お前が意趣返しに切り落されると、わしも一緒に落ちねばならぬ。いつそお前、そこから飛ばしやつてはどうだな。

鶴之　どうしてお前、爰から飛ばれるものか。飛ばれるなら、お前飛ぶがいゝ。

無理　わしも飛びたいが、いま浚はれて來た鷲に、別れたから、もう飛ぶ事もどうする事もならぬ。貴樣がそこにござつては、誠に上隣りは迷惑するわえ。

鶴之　モシ〱、上のお方え。なんと、斯うなつて見れば上下ともに、お互ひに、よく〱の因緣づくでなければ、一つ長屋にも住みません。いつその事、お前、仲人になつて下さつてはどうだえ。

無理　成る程、こりやア尤もな事だ。承知しました。

ト下の方を見て

モシ〱、グッと下の方え。こりやアお初にお目にかゝりました。附きましては、よい聟がござりますが、思し召しはござりませぬか。

嘉兵　イカサマ、その聟から起つた事ぢや。さうして、その聟になる人わえ。

無理　取りも直さず、これに居られるお方。私しには、顏は見えませぬが、そちらで見合ひが濟みましたら。

ろく　そりや、大きにお世話さまでござります。成る程、さういふ事なら、お前樣に免じ、不承ながら、男に持つてやらうわいなア。

鶴之　それは忝ない。善は急げだ。早く下りて。

ト下りようとする。

嘉兵　ドッコイ〱、さうはならぬ。下りては叶はぬその力、爰で直ぐに祝言を。

鶴之　それでも、あんまり及び越しだせ。

無理　オッと、あるワ〱。爰に凧の尻尾がある。これを斯う繫いで。

ト凧の緒を繋ぎ、下へ繰り下ろして

サア〳〵、これで酒と茶碗を。

嘉兵　合點ぢや〳〵。

ト笊へ徳利と茶碗を入れ、これに繋ぐ。

無理　サア〳〵、先づ花嫁から、一つ呑んだり〳〵。

嘉兵　成る程、さうぢや。おろく、一つ呑め〳〵。

ろく　アイ〳〵。

ト茶碗を取る。嘉兵衛、ついでよろしく呑んで、笊の中へ入れ

嘉兵　引いたりよ。

無理　オヽイ。

ト引き上げ、鶴之介がゐる前へブラつかして

サア〳〵聟どの、呑んだり〳〵。

鶴之　こいつア奇妙だ、なんの事はねえ、天狗の祝言と來てゐる。サア〳〵、仲人さん、お酌を頼みます。

無理　どうして、爰から酌が出來るもので。

鶴之　それぢやア、手酌か。

ト取つて呑み

さうして、この杯は、どうしませうな。

無理　ちよつとお合ひをしませう。

トまた上へたぐり上げ、一つ呑んで

妙々……サア、グッと下のお方、杯は先づこれでお預かり。下ろしますよ。

ト嘉兵衛の前へ下ろす。

嘉兵　サア〳〵、これで祝言も濟んだから

鶴之　もう、下りてもよしかな。

ろく　サア、下りなんせ。

トおろく、梯子をかけ、これにて鶴之介、下りにかゝる。

無理　オイ〳〵、おれはどうだ〳〵。

ろく　お前は、一人でそこへ來なさんしたによつて、來た道へ行かしやんせいなア。

無理　これは迷惑だ。それにしても、おれが落した紙入れは、どこにあるかしらん。

ト上より探して見て

よし〳〵、あそこにあるな、と云つたところが、取りには行かれず、エヽ、氣のきかねえ鷲だ。とても事なら、下まで落してくれるがいゝ。

ト鶴之介、よろしく下へ下りる。

嘉兵　斯うなる上は、此方の聟どの。おろく、嬉しいか嬉

初演の繪番付

しいか。
ろく　これが嬉しうなうて、どうせうぞいな。
鶴之　併し、ひどい目に會はしくさつた。
　ト おろくの脊中を叩く。
嘉兵　この上ともに、面倒を見てやつて下され。サア〳〵この上は、改めて。併し、なんぞ肴が。
鶴之　どうでゆるりと。マア、差當つて、隣りの油揚でも、買つて來なさい。
嘉兵　さうしませう〳〵。
　ト 門口へ來て
どうぞ、油揚を下さりませ。
豆太　オイ〳〵。
　ト 出て來て、油揚を嘉兵衞に渡し、火の見の上を見て
オヤ〳〵なんだ。あそこに人のやうな鳶がゐる。油揚を取られなさんな。
無理　イヤ〳〵、鳶ではないが、あの紙入れを取ろ〳〵。
　ト 思ひ入れ。
豆太　こいつはをかしい。みんなに知らせてやらう。鳶だ鳶だ。
　ト 豆太、こなしあつて、向うへ走り入る。

嘉兵　サア〳〵、この肴で。まだこの上に、關取の名を揚げ物と、縁起祝うて
鶴之　そりや、忝ない。斯うなる上はどこまでも、鳴神鶴之介が女房。オヽ、女房と云へば、隣りの娘、一旦親と約束して、證文まで取つて置いたが、アヽ、コレ、その證文を返してからにしたいものだが。
　ト この時、奥にて
頼兼　イヤ、その祝言より、鶴之介、いま改めて頼兼が、主從三世の杯くれん。
　ト 合ひ方になり、奥より頼兼出る。鶴之介、平伏して
鶴之　ハッ、御安體にて喜ばしう存じまする。最前、おろくが持參の手紙、僞はり事と思ひしが、矢ッ張りこの家にお隱れありて。
頼兼　主が世話にて、暫時の休息。まだ〳〵其方が昨夜の働らき。過分々々。サヽ、主從の杯いたさう。
鶴之　あまりと云へば冥加なきお詞。恐れながら、お請け申すでござりませう。
嘉兵　併し、御前様、この品は。
　ト 徳利と茶碗へこなし。
ろく　どこぞで、ちよつとお杯を。

頼兼　アイヤ〳〵、この品で苦しうない。變つた器も又一
興。サヽ、一つ。
ト頼兼、こなしあつて、茶碗を取上げる。下座にて、
兵の交はりと、綱の謠を謳ふ。この謠をかつて、向う
より、民部、深編笠の浪人、手に鼓を持ち、千松、こ
の手を引き、民部、目の見えぬこなしにて、本舞臺へ
來る。此うち、頼兼、鶴之介、おろく、酌をして、よ
ろしく杯をする事。
嘉兵　めでたい所へ、幸ひの謠。ドレ、手の内を。
ト嘉兵衛、立たうとする。民部、扇へ願書を載せ、差
出す。頼兼、これを見て
頼兼　見れば賤しき浪人の、差出す品は……願書ならば見
るに及ばぬ。二品揃はゞ、いつにても。
ト民部こなし。
鶴之　様子は知らねど、御前のお詞。
ト民部へこなし。
頼兼　人目もあれば、ソレ、手の内を。
ト額にて教へる。
ろく　心ばかりの。
ト糊の米を盆へ載せ、これをやる。民部、これを袋へ

千松　取り、有り難うござりまする。
頼兼　ハテサテ不便な……も一つ呑まうか。
ト茶碗を取る。唄になり、民部、千松に手を引かれ、
こなし、行きかゝり、千松、落ちてある紙入れを拾ひ
千松　こんなもの拾うた。
ト民部、探るを、千松見せず、先に立つ。これにて兩
人向うへ入る、無理右衛門見て
無理　コレ〳〵、そりやア、おれがのだ〳〵。アレ〳〵、
ア、情ない。
トいろ〳〵跪き、後向きに、樂屋へ、どうと飛んだる
こなし。向う、バタ〳〵にて、文藏先に、豆太、三吉、
柚六、又七、走り出て
豆太　今の鳶が、なんでも爰の奥へ、落ちた様子だ。
皆々　探せ〳〵。
トやかましく云ふ。
嘉兵　ハヽン、なにか。あの火の見の上の人が。それは大
變、探して下さい。
皆々　合點だ〳〵。
ト豆太、三吉、又七、柚六、皆々奥へ入る。

文藏　コレ〳〵嘉兵衛どん、わしは、外の事で來た。こなた、この書付け覺えがあるか。
ト發端の書付けを見せる。
嘉兵　ドレ、お見せなさりませ。
ト取つて見て
成る程、これは。
文藏　知つてゐるか。そんならちよつと、どこのかお侍ひが、用があると、
嘉兵　それでは、わたしが行きますのか。おろく、ちよつと行て來るぞ。
ろく　何も案じる事ぢやござんせぬかえ。
嘉兵　ナニ、こりやアおれが所書きぢや。
文藏　サア、ござれ。
ト禪のツトメになり、文藏、嘉兵衛、向うへ、足早に入る。奥バタ〳〵にて、無理右衛門、璧つて出る。以前の人々、附いて出て
皆々　こなた、どこの人だ〳〵。
無理　どこの人どころぢやない。大事の物をなくした。爰に斯うして居られぬ、と云つたところが、腰は立たず、コレ〳〵、皆の衆、どうぞ、おれを連れて行つて下さい。

ト向うを見て、氣を揉むこなし。
三吉　それだといつて、所も知れぬもの、どうなるものか。
無理　連れて行かぬと、係り合ひだぞ。
皆々　これは迷惑。
ト繩を見附け
柚六　いつその事、この繩で引摺つて行からぢやないか。
皆々　それがよい〳〵。
ト柚六、以前の凧の尻尾にて、無理右衛門の帶を結び付け、向うへ廻ろ。
無理　成るたけ早く賴みますぞ。併し、人を追ひかけるのに、默つても行かれまい。いつもの通りに。
皆々　どうだな〳〵。
無理　あと追ひかけて、さうだ。
ト曲撥になり、手ばかり動かしかける思ひ入れ。皆々これを引ッ張り、無理右衛門、璧りながら、向うへ、皆々走り入る。
鶴之　馬鹿な奴にて……何は格別、御前には、少しも早うお屋敷へ。
賴兼　直さまこれより。
ト向うより、箱提灯、供廻り大勢、乘り物を擔ぎ、バ

タバタと出て、手を突き

家來　お迎ひ。

鶴之　丁度幸ひ迎ひのお駕籠。御機嫌よろしく。

賴兼　さらば。

ト駕籠に乘る。賴兼こなしあつて

鶴之介、近う。

鶴之　ハツ。

トこなし。

賴兼　いま主從となりたる其方。併し、以前は家來の家、松ケ枝志摩が忰なれば、幼名を名乘つて、武士に取立てなば

鶴之　幼名名乘れば關之助、父の家名を、君の御厚志……家來となれば只今にも、御意見申すは御身の行跡。何卒、放埒惰弱の儀をば。

ト賴兼、こなしあつて

賴兼　其方の意見、含み置く。身が心底は其方へ、先刻送りしあの書面。

鶴之　ハツ。

ト以前の手紙を押頂いて、封を切り、口の内にて讀み

ヤヽ、すりや、あなた樣の御身持ちは、御妾腹ゆゑ御舍弟へ、殊には佞人。

賴兼　コリヤ、必らず忠義を。

鶴之　君のお側に。

賴兼　ムウ。

ト思ひ入れ。

乘り物、やれ。

ト唄になり、この人數、皆々向うへ入る。鶴之介、おろく殘り

鶴之　先づ、あゝしてお歸し申せば、御安泰にて直さま屋敷へ。ヤレ〱、がつかりとした。

ト伸びをしながら、おろくを見て

カウ、お娘……イヤお娘ぢやない、おらが嚊ア。

ろく　エヽ、モ、何を云ひなさんすぞいなア。

鶴之　何を云ふものか。もう斯うなつては、鶴之介がおかみさんだ。今日から、その頭も、なんとかいふ髷に結ひ直して、關取の女房らしくしにアならぬぞ。そして、その

ト着物を見て

何もかも、おれが仕込んでやらにやアならぬ。何も其やうに其方へ寄つて、怖さうにしてゐる事はない。もつと

此方へ寄るがいゝわな。
ろく　それはさうと、お前、これから、あのお屋敷へ行きなさんすかえ。
鶴之　さうよ。どうで行かねばならぬ。何も直ぐ行くに及ばぬわえ。
ろく　そんなら、アノ、父さんが戻らしやんすまで、どうぞ、暫らく。
鶴之　ほんに父さんは、どこへか行つたなア。
ろく　アイ。
トこなし。
鶴之　來い。
トおろくの手を引ッ張る。
ろく　アヽ、モシ、どこへ行くのぢやえ。
鶴之　どこと云つたら、あの奥で……ちよつと地取りの。
ろく　エ。
鶴之　もう暮れさうなものだが。
ト唄になり、鶴之介、こなしあつて、おろくの手を引き、番屋の內へ入る。あと合ひ方、上の方の障子の內より、重三郎、出て來る。暖簾口より、おくら、嘉藤太、出て來り

くら　頼兼さま、娘は、お氣に入りましたか……嘉藤太さん、今の事はえ。
重三　イヤ、氣に入らぬ。
くら　エ。
重三　心に叶はぬあの女。同道するにも及ぶまい。嘉藤太、參れ。
ト行きにかゝる。おくら留めて
くら　アヽ、モシ、それぢやアお前、お約束が。
重三　なんと致した。
嘉藤　いはゞこの家は豆腐商賣、その家にて、かゝる賣女同然に、人を引込む怪しい婆ア。室町の御殿へ訴へようか。
くら　それぢやと云うて、見す〳〵娘を食ひ逃げに。
ト支へる。
重三　妨げ致さば、武士の大法。ソレ、嘉藤太。
嘉藤　心得ました……うぬ、眞ッ二つに
ト拔きかける。
くら　人殺し〳〵。
ト矢庭に隣りの番屋へ逃げて入る。
重三　ハヽヽヽ。さがしき老女め。捨て置け〳〵。
ト嘉藤太を連れ、門口へ出ようとする。番屋より鶴之

介、出かけゐて

鶴之　頼兼さま、どうぞ暫らく。

ト内へ入る。

ちつとお目にかゝらねばならぬ事がございます。マアマアお下に。

重三　身を止めたるその仔細は。

鶴之　仔細もごさいも入りますめえ。いま爰の内の年寄りを、娘の事から云ひ募り、刃物三昧さつしやると、町人でも人一人、お大名でも殊に依れば、下手人に取らにやアならない。まだその上に此方に、お話し申す用事もあれば、お歸し申す事は出來ない。頼兼どの、マア、さう思つてもらひませう。

ト下に居る。

重三　イヤ、待つ事は罷りならぬ。それとも待てとあるならば、相連れたりしこの家來を。

嘉藤　どうしてわしが。

トこなし。

鶴之　成る程、大名は大名だけ、御家來を代りならば、この場に於て、ちよつと斯うして。

ト嘉藤太の襟髮を掴む。

嘉藤　アヽ、コレ、どうする〳〵、

ト重三郎こなし。

鶴之　どうするものか。化け損なひの頼兼どの、尋ねぬうちに其方から、明かさぬ時は、この通りだ。

ト締め上げろ。

嘉藤　アヽ、コン〳〵、待つてくれ。もう斯うなつたら何事も。

重三　イヤ、頼兼。

鶴之　いよ〳〵さうか。

トまた締める。

嘉藤　嘘だよ〳〵。

鶴之　それでも矢ッ張り頼兼どのか。

重三　サア、それは。

鶴之　サア。

ト嘉藤太を締め上げながら

兩人　サア〳〵〳〵。

重三　こいつは堪らぬ。

ト逃げ出るを、奥より鹿之助出て、門口ピッシャリ締め、衣裳を引ッ剝ぎ、突き倒す。重三郎、三建目の形になる。

鹿之　ソレ見やアがれ。
鶴之　サア、坊主め、なんの爲に爰の内へ、騙りに來やアがつた。キリ〳〵それを吐かせ。
鹿之　うぬ、吐かさねえと、踏み殺してしまふぞ。
　ト重三郎、起き上がつて
重三　剛氣に强い人だ。譯と云つたら、高が斯うだ。爰の豆腐屋の婆アめがな、毛も無い頭へ簪を突ッ刺して、東寺の裏門を通りやアがつたから、その簪を拔きにかゝると、おれをひどい目に會はしやアがつた。その腹癒せに娘を弄さんだ上、疵物にするを附け目のこの騙りだ。お角力さん、斯う云つてしまへば、いさゝくさもあるめえ。疵が付いたら、あの娘、わしに下さい。貰ひませうよ。
鶴之　大分平ッたく出たな。如何にもあの娘、やらうと云ひたいが、さうはならない。うぬが着てゐたあの着物は、賴兼さまの廓でのお召替へだ。それさへ剝げば用はねえワ。無駄口を叩かずと、キリ〳〵爰を歸りやアがれ。頭に免じて、うぬが命は助けてやるワ。サア歸れ、うぬ行かねえか。
　ト重三郎の首筋を捕まへる。
重三　行かねえで、どうするものか。

鶴之　サア、歸れ〳〵。
　ト重三郎を門口へ突き出す。
鹿之　うぬも一緒に、行きやアがれ。
　ト同じく嘉藤太を抛り出す。
重三　いま〳〵しいなア。折角うまくやつた所を、惡い奴が來やアがつて、ひどい目に會はしやアがつた。なんの事はねえ、斯うもあらうかといふ引込みだ。
　トこなしあつて
うぬ、覺えてゐやアがれ。
　ト唄になり、重三郎、嘉藤太、行かうとすると、向うより、長兵衞、着流し大小にて、風呂敷包みを抱へ、後より、侍ひ一人、上下、大小を臺に乘せ、兩人、足早に、心々に出て來り、花道、附際に行き合ひ
長兵　道哲ぢやないか。丁度よい所で。
　ト侍ひ、内へ入り
侍ひ　鶴之介どの、これにござるか。我が君より賜はる衣服大小、直さま屋敷へ。
鶴之　これは御苦勞。
　トこなし。
重三　此方も、いゝ事かな。

長兵　よいとも〳〵。こなたが頼みの一儀、持豊さまに言上したところが、その證據の知れるまで、その者を浪人組の頭となし、栗田口の下屋敷へ、其方召連れ、世話いたせと、コレ、羽織大小を持つて來た。

ト番屋の縁にて、風呂敷包みをほどき出す。

重三　そいつは奇妙だ。サア〳〵爰で。

ト帯を後へ廻し、大小を差し、頭を撫でゝ

併し、この頭では。

長兵　オッと皆までのたまふな。

ト懐より、頭巾を出し

暑からうともこの頭巾、なんと、きいたるものか。

重三　巧くするぜ。

ト頭巾をかむり、こなしあつて

これでは、どうか侍ひの

鶴之　此方も武士の仲間入り。御前よろしくお執成し。

重三　斯うなる上は、お互ひに、今なり立ての侍ひ同士。

ト臺を頂く。

鶴之　名は松ヶ枝の關之助。

重三　我れらも改名、民谷與右衛門、いま改めて近付きに

鶴之　そんなら爰で

兩人　ならうかえ。

ト誂らへの合ひ方になり、重三郎、内へ入り、鶴之介、思ひ入れあつて、兩人、前へ出る。

重三　關之助とやら、今までは、いかい世話。騙りの手前何やかや、これを御縁にこの後とも

鶴之　そりや云はずとも、お互ひに、當つて碎けたその後を、根葉に持つならどこまでも、身不肖ながら關之助、何時なりと御勝手次第に。

重三　面白い。イヤ、喧嘩よりは與右衛門が、これから直ぐに栗田口、新宅開きに呼ぶ氣だが、よもや客には來られまい。

鶴之　行きますの。お招きならばどこまでも、正客ならば侍ひを、やめて以前の鶴之介。併し、馳走が心元ない。

重三　イヤ、その献立は此方の手段。料理はさま〳〵。

長兵　そのもてなしは、この長兵衛。

嘉藤　わしらも一緒に

鶴之　後方ゆるりと。

ト暮れ六ッの鐘。

重三　ありやもう暮れ六ッ。ちつとも早う、何かの事を。

長兵　そんなら直ぐに。

ト重三郎、嘉藤太、長兵衞、門口へ出かゝり

重三　關取、是非とも今宵は

鶴之　御念に及ばぬ。

重三　ドリヤ、新宅で、お客を待たうか。

ト唄になり、重三郎、以前の伽羅の下駄を穿き、長兵衞、嘉藤太、付いて向うへ入る。この時、重三郎、内へ莨入れを落して入る。

鹿之　さては、今の意趣返しに。關取、お前、行かんすかえ。

鶴之　約束したら、行かざアなるまい。

鹿之　それでは今夜は。

鶴之　ナニ、彼奴等が、どうしえるものか。

トふと今の莨入れを見て

こりやアあの坊主が莨入れ。中に何やら、

ト中を見て

こりやア片しの印籠だ。

ト見る。奥バタ／＼にて、累、剃刀を持ち、死なうとするを、おやま、留めながら出て

やま　こりや危ない、累さま、何ゆゑ刃物を、

かさ　肌を穢したこの累。どうぞ殺して。

トまた死なうとするを

鶴之　エヽ、危ない／＼。

ト剃刀の手を捕へて

なんで死ぬのだ。

かさ　サア、その譯は祇園にて、約束したる其お方、母さんへの云ひ譯に、表向きは云ひ號けに、なつてやらうとお前の深切。それさへあるに、あの騙りに、肌を穢したこの身のいたづら。どうも生きては。

鶴之　ハテサテ野暮な。このおれも、ちつと譯が

かさ　イエ／＼、お前はそれで濟みもせうが、約束したる印籠の

ト印籠を出し

此お方へ、どうも操が

鶴之　ヤア、それは。

ト印籠を見て、鶴之介こなし、今の拾ひし片しを出して

合はせて見さつし。

ト累、取つて

かさ　しつくり合つたこの印籠、どうしてこれを。

鶴之　今の騙りがその持ち主。

かさ　そんなら、その夜の
鹿之　ひよつとそれなら
ト鶴之介、思はず手を打つのが木の頭。
鶴之　とんだ話しだ。
トこなし。累、印籠を持つて、思ひ入れ。この仕組みよろしく、拍子幕。
ト直ぐに、禪のツトメのツナギにて、この幕、引返す。
本舞臺、三間の間、板羽目。眞中、開き戸、これに下向道といふ札を貼り、上の方、開帳の立て札。よき所に、葭簀張りの茶屋店を並べ、日覆より、櫻の吊り枝、すべて、安井八幡、開帳の體よろしく、爰に茶屋女、茶を酌み、參詣の仕出し大勢、床几に腰をかけ居る。大拍子にて幕あく。
仕出　成る程、この八幡樣の御開帳は、大繁昌ぢやの。
茶娘　左やうでござります。外よりは一番參詣がござりまする。
仕出　何しろ、參つて來ようではござらぬか。
同　さうしませう〳〵。茶の錢は爰に置きましたよ。
茶娘　ハイ〳〵、有り難うござります。
皆々　サア、行きませう。
茶娘　又お歸りにお寄りなされませ。
ト辻打ちになり、皆々、上の方へ、茶屋娘も、附き添ひ入ると、向うより、鹿之助、前幕の形、御供米を詰めたる紙袋を大分、手拭にて結へ、これを肩に掛け、出て來るを、後より、黑澤官藏、着流し、大小にて附き添ひ出て來り
官藏　オイ〳〵、關取々々。剛氣に早い足だぜ。
鹿之　なんだな。關取々々とと、おれを呼んで、なんぞ用でもあるのかな。
官藏　ちつと用があるが、マア〳〵、あすこへ行きやせう。
ト兩人、本舞臺へ來り
鹿之　ついに見た事のないお方、わしに用とはえ。
官藏　イエ、外の事でもないが、娘をおれに下せえな。
鹿之　なんだ、娘をくれろ。この人は、とつけもない。おれが娘を持つものかな。
官藏　成る程、斯う云つちやア解るまい。高が、斯うだ。おれは粟田口の組屋敷にゐる、黑澤官藏といふ者だ。この間から、おいらが親分になつてゐる土手の道哲、今の名は島田重三郎。この間、南禪寺の豆腐屋の娘を、フト

した事で手なづけたを、貴様の師匠の鳴神が彌次馬に出て、ひどい目に遭はしたさうだ。何は格別、その娘は、おいらが貰つて女房にさせねえと、おいら同士の顔が立たねえ。

鹿之　なんだと思つたら、道哲が尻押しか。あの女は、鳴神どのが、いろ〳〵と譯もある事。おれがそれを知るものかえ。

官藏　貴樣は知るまいが、さうして、師匠の鳴神は、どこにゐるのだ。

鹿之　どこにゐるか、おらア知らねえ。

官藏　知つても知らねえでも、あの娘は貰つて下せえ。

鹿之　この男は解らねえものだ。おらア知らねえと云ふに。

官藏　イヤ、貰つた〳〵。

鹿之　イケしつッこい。知らねえと云ふに。

官藏　貰つたぞ〳〵。

鹿之　知らねえ。

ト兩人、爭ひながら、上の方へ入る。矢張り辻打ちにて、向うより、人足二人、屏風を唐紙を擔ぎ出て來り

人一　なんと、今朝から此やうに運ぶ荷物は、みんな山名さまから來るのだが、あの組屋敷へは、誰れが引ッ越すのだ。

人二　さればサ、土手の道哲といふ惡者、山名さまに引上げられ、それでこの通り、道具を運ぶのだとよ。

人一　とんだ出世もあるものだ。もう一荷だ。やッつけようか。

人二　それがよからう〳〵。

ト上の方へ急ぎ入る。バタ〳〵になり、下向口より、鹿之助を、才助、上下、講中にて、支へる心にて出る。後より舟右衛門、同じく、官藏を支へながら出る。官藏「片肌脱ぎ、ごま竹の杖を振り上げる。人足大勢、これを支へながら出て

才助　關取も不肖さつしやい。お侍ひ樣も料簡なさいなさい。

官藏　否だ〳〵。彼奴がおれをぶちやアがつた。料簡しないぞ〳〵。

才助　ハテ、お互ひに間違ひだ。爰で騒がれては、講中が迷惑だ。

官藏　爰を放せ〳〵。

才助　コレ〳〵皆の衆、その杖を取つて下さい。それは昔西行法師が、重忠さまの、秋の夕暮といふ歌を詠んで、

池上の觀音さまへ忘れて置いた、この開帳での、一の寶物、折られてはならぬ。取つて下さい〳〵。

官藏　エヽ、吝い奴等だ。この杖の一本や二本、叩き折れても、知れたもんだ。打ッちやつて置けえ。取てきめ、うぬはなんで、おれをぶちやアがつた。なんぼ開帳場といつて、喧嘩の日延べは、不承知だ。爰へ來やアがれ、叩き殺すぞ。

舟右　アヽ、コレ〳〵、其やうに云つては、お前方、お開帳を潰すやうなものだ。そも〳〵中尊、見ず知らずのお方でもなし、近う寄つて、ハイ〳〵と、挨拶をして居るなら、心を和らげんとの御誓願にしても、よささうなもんだ。

才助　それ〳〵、腹を立てゝは、お互ひにそんねん樣の宸筆。サア〳〵ちよつと、笑つて紫摩黄金の如來としてはどうだ。

鹿之　コレ〳〵、お前方、そんなに緣起を云つて聞かせるのは、牛に經文、無駄なこつた。先刻から、同じ事を否だと云ふのに、こじ付いて、附いて廻つてうるさいから、それでおれが隨分擲つた。サア、野郎、云ひ分があるならどうともしろ。わいら、五人や十人來たつて、びくともするやうな、お角力樣と思やアがるか。

官藏　お角力も氣が強い。おれをぶつたがいゝか、これがいゝか。

ト　また杖を振り上げる。

才助　ソレ、杖を折るまいぞ。寶物を大事にさつせえ。

ト　皆々、捨ぜりふにて留めるを構はず、官藏、鹿之助をぶちにかゝる。鹿之助、引ッたくつて、官藏の眉間をぶつ。官藏、額へ疵つく。

官藏　又ぶちやアがつたな。いつそ、うぬを。

ト　刀を拔き切つてかゝる。

皆々　拔いたぞ〳〵。

ト　双盤、大拍子にて、皆々騷ぐ。鹿之助、官藏を、したゝか打つ。官藏、ウムと苦しみ、其まゝ倒れる。

才助　ヤア、目を廻した〳〵。

舟右　かゝり合になつちやア惡い。

皆々　構はつしやるな〳〵。

ト　皆々、捨ぜりふにて、下向口へ逃げて入る。鹿之助こなし。

鹿之　アヽ、コレ〳〵、お前方の科にはしない。エヽ、仰山な……成る程、口程にもない脆い侍ひだ。併し、死に

やアしないかしらん。
ト見て
いま脾腹をぶつたと見える。今に氣が附くだらう。おれが逃げたと云はぬやうに、見覺えのあるこの手拭で。
ト鳴神を染めたる手拭にて、官藏の額を結へ
斯うして置けば、おれが相手だ。ドリヤ、師匠に届けて置かうか。
ト辻打ちになり、鹿之助、上の方へ入る。向うより重三郎、好みの形。若い者、挾み箱を擔ぎ、後より、長兵衛、嘉藤太、浪人の形にて、兩人、葛籠の蓋へ、いろいろの道具を載せ、さし荷ひ出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、長兵衛、官藏を見て

長兵　ヤア、官藏が倒れてゐるぜ。
ト皆々愕り。

重三　水を持つて來い。

長兵　合點だ。
ト茶店の手桶を持ち來り、官藏に呑ませ、活を入れる。
官藏、心附き

官藏　うぬ、角力め。
ト駈け出さうとするを、長兵衛、嘉藤太、留めて

兩人　コレ〳〵官藏、どこへ行くのだ〳〵。
トこれにて、官藏、皆々を見て

官藏　ヤア、頭を始め、長兵衛、嘉藤太……ハ、ア、さては逃げて行つたな。さうだ。
トまた行きにかゝる。重三郎、留めて

重三　マア、待て〳〵。譯も云はずに、逃げた〳〵と、見りやア額に疵を付けて、おぬしやどうしたのだ。
ト官藏、額を撫でゝ見て

官藏　ハテナ、額の疵をいつの間に、手拭で
ト手拭を取つて見る。

重三　ドレ
ト取つて見て
こりやア鳴神が印の手拭。さては、あいつ等にぶたれたな。

官藏　鳴神なら、まだしもだ。その弟子の山中に、今日爰で逢つたを幸ひ、兼て話しの豆腐屋の娘、鳴神めが邪魔すると聞いたによつて、山中めにぶッつかり、くれろ、否だが云ひ上り、それからおれを
ト腰を見て
刀は無いか〳〵。

初演の繪番附

長兵　爰にある〳〵。
　ト取つて差させ
それなれば面白い。貴樣一人、行くにやァ及ばぬ。
嘉藤　おれも一緒に
三人　さうだ。
　ト身構へして行きさうにする。
重三　イヤ、待て〳〵、てまへ達が行かないでも、仕樣がある。
三人　それだと云つて。
重三　ハテ、待てと云ふのに……喧嘩の起りは鶴之介、あの鳴神には、わいらより、おれが存分遺恨がある。この間の豆腐屋の、その返報と思ふうち、いま黒澤がしやツ額へ疵を付けたも鳴神が、弟子なら矢ツ張り同じ事。今夜の新宅振舞ひに、彼奴を呼んでこの仕返し……こいつは喧嘩が冴えて來たわえ。
長兵　そんなら、此方に
三人　なんぞ手段が。
重三　誰れぞ、矢立を持つちやア居ないか。
長兵　なんぞ書くのかえ。それならば、丁度奇妙だ。
　ト持つて來た荷の中より、硯箱を出し
ちつと善過ぎるが、大高の巻紙があります。
重三　こりやアいゝ物があつた。
　ト重三郎、手早く手紙を書いて
貴樣は大儀ながら、これを持つて行つて下つし。
若者　ヘイ〳〵、畏まりました。して、お所は。
重三　双林寺前で鳴神と聞けば、直ぐに知れる。
若者　左やうなら、行つて參ります。
　ト若い者、手紙を持ち、向うへ走り入る。
重三　新宅開きと披露して、呼びにやつたら彼方にも、疵持つ足だが男づく、よもや否とは云はれまい。
長兵　そんなら今宵、鳴神を
官藏　弟子の代りにこの疵の
嘉藤　仕返しどころか、息の根を
重三　直ぐにこれから、何かの手番へ。
長兵　そんなら一緒に。
官藏　アイタ、、、。
　トこなし。
彼奴になんぞ、食はせる物を。
重三　そりやアおれが胸にある。その計り事は……道で云はう。

ト辻打ちになり、重三郎先に、長兵衛、嘉藤太、荷を擔ぎ、嘉藤太、官藏を介抱しながら、上手へ入る。あと暮れ六ツの鐘。向うより、嘉兵衛、口幕の形にて、走り出て、直ぐに舞臺へ來り

嘉兵　ヤレ〱、飛んでもない事の疑ひで、この間よりの災難。出る所へ出れば解りもせうが、以前はこの身も仕官の身の上。まんざら恥もかきたくなし、それで爰まで逃げて來たが、どうぞ、この疑ひの晴れるまで、どこぞへ暫らく、行つてゐたいものだが。

ト思ひ入れ、この後へ道理之助、泥之助、絆纏、股引にて出かけ

道理　疑ひかゝりし番人め。

泥之　うぬ、逃げるとて逃がさうか。

嘉兵　成る程、さう仰しやるを、逃げも走りもしませぬが、あの助八が死骸の懷中、私しの所書があつたゆゑ、人殺しはわたしと、この間より、度々のお尋ね。これより外に申し譯は。

道理　云ふな。其方が如何やうに申しても、この云ひ譯は相立たぬぞ。

泥之　その譯が聞きたくば、身と一緒に屋敷へ參れ。さなきに於ては其方が、却つて古主へ忠義が立たぬぞ。

嘉兵　ナニ、古主とは。

道理　某兩人參りしは、仁木どのゝお指圖。是非とも其方を入牢させ、命を取らねば、仁木どのゝ役目が立たぬ。

泥之　なんと、それでも云ひ譯いたすか。

嘉兵　成る程、仁木さまの御難儀となる事なら、例へ無實の難にもせよ、繩にかゝつてお屋敷へ。

兩人　オヽ、よい覺悟。詞を聞く上は、命を助くる手段があるが、敎へてやらうか。

嘉兵　して、その御諚は。

ト兩人、思ひ入れあつて、嘉兵衛に囁く。

そんなら、あの外記左衛門を。

兩人　コリヤ。

ト三人こなし、この見得、銅鑼の送りにて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、通しの二重。正面、唐紙、櫛形の欄間。上の方、山吹の茂み、手水鉢。いつもの所に、枝折り戸。上の方、藪疊。すべて粟田口組屋敷の模樣。幕の内より嘉藤太、上の方に重三郎、壁な

結つてゐる。上の方、長兵衛、火鉢へ鐵灸を乘せ、蛇を竹串に刺し燒いてゐる。官藏、竹を削つて居る。吉原雀、その手で深みへの唄にて幕明く

重三 どうだ〳〵。入れ髪と見えはしないか。

嘉藤 どうしてお前、ずぶ地から生えたやうだ。

長兵 久し振りで、男にならしつたから、以前よりは思ひなしか、色男にならしつたやうだ。それはいゝが、この地もぐりを蒲燒とやりかけたが、殘りは刺身とこぢつけようか。

官藏 此方は構はず竹槍た。サア〳〵、これでは岩でも突通るぜ。

重三 御大儀々々。時に肴は揃つたかな。

長兵 揃ひやした。先づ、蛇の生燒き、蜴蜥の刺身。

官藏 それでは、どうか、ぼん〳〵のやうだの。これに釣合ひさうな藝者はあるまいか。

重三 藝者と云へば、隣り組は、大分冴えるの。

長兵 慥か今夜は巳待だつけ……サア〳〵、蒲燒が出來たぞ〳〵。畜生め、まだ首をビク〳〵して居やアがる。

嘉藤 成る程、此奴は、人間は恐れるが、山鳥に食はしたら、旨がるであらうな。

重三 イヤ又、その山鳥では、少しふさぐが、あの目貫を首が咬へて、其まゝ川へ落ちたが、どうかして知れさうなものだ。

長兵 そりやア案じなさんな。後楯には山名さまといふものが扣へて居るから、詮議すれば直ぐに知れやす。

嘉藤 それ〳〵、イヤ又、それと云ふも、あの河内之助どのが、野暮堅いから、そこで落し胤のお前を引き上げるといふ、山名さまの料簡。兎角河内之助どのには、困つてゐると見える。

重三 なんでも、白痴はあやまるのよ。

皆々 ちげえねえ。

トこなし。流行り唄になり、向うより、茶屋の男、提灯をともし、先に立ち、後より、鶴之介、羽織、一本差しにて、水引をかけし尺長のびらを持ち、出て來り、茶屋の男、舞臺を指さして

茶屋 あなたが仰しやる屋敷は、大方これでござりませう。

鶴之 案内して下つし。

茶屋 へイ〳〵。

ト先へ本舞臺へ來る。鶴之介、花道中程に立つてゐる。

お願ひ申しませう。民谷與右衛門さまのお屋敷は、これ

でござりますか。
長兵　爰だが、なんだな。
茶屋　只今、鳴神鶴之介が參りました。ちよつとお先へ。
皆々　ソリヤ、來た〳〵。
ト皆々騒ぐ。
重三　コレサ〳〵。そこを平常、落ち付いて……羽織を出せ。
嘉藤　アイ。
ト嘉藤太、羽織を重三郎の後より着せる。茶屋男、花道へ來て
茶屋　あそこでござります。私しは、左やうなら。
鶴之　御大儀々々々。
トまた唄になり、茶屋男は向うへ、鶴之介、靜かに本舞臺へ來り、門口から
御免なされませ。さぞお待ち兼ね。やう〳〵只今になりました。
重三　ようこそ〳〵。マア〳〵これへ。
ト内へ入る。皆々こなし
鶴之　お構ひなされますな。
ト座につく。

長兵　ソレ、お客だぞ〳〵。
ト皆々、キヨロ〳〵する。
重三　コレ、どうしたものだ。初めてのお客。お杯を早う早う。
官藏　承知いたした。
ト杯を持つて、鶴之介の前へ出る。
重三　お吸ひ物〳〵。
嘉藤　ハツ〳〵。
ト嘉藤太、吸ひ物、皆々廣蓋に、大平、丼なぞ並べしを、鶴之介の前へ直し、皆々手を突き、こなし。
重三　この者どもは、朋友やら、子分やら、お見知りなされて下され。
鶴之　これはお初に。サヽ、お手を〳〵。
長兵　お嫌ひかは知らねども、靑蛙に溝泥の味噌漬。靑味はおんばこでござる。
嘉藤　宿なし猫の丸ごと燒、付け合せにはまたゝびの揚げ物。
官藏　平は鼠に角又のつぺい。御膳の時は、山かゞしの蒲燒。先づ〳〵これにて
皆々　呑んでおくりやれ。

鶴之　それは御馳走。併し此方も手土産に、些少ながらこの書付け。御主人、お納め下されい。

ト出す。重三郎、開き

重三　樽片荷、肴一折。

皆々　ハテナア。

トまた今の唄になり、向うより、おろく、世話女房、派手なる拵らへにて、ぶら提灯をともし、後より鹿之助、早桶を棒にて擔ぎ、出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

鶴之　爰だ／＼。

鹿之　御免なされませ。

ト早桶を眞中へ直す。おろくも入る。

重三　お持たせぶりの樽といふのは

皆々　アノ、この品を。

トこなし

ろく　アイ、この品でござんす。どなたも御免。わたしはこの頃、鶴之介どのゝ女房に、しかも成り立て早々から、お轉婆者と笑はれるかは知らねども、心ばかりのこの樽は、主に任したこの體。これぞ一生五十年、醉うて暮らすも男山、四斗樽變じて人の樽。銘はさしづめ花がつみ、花々しくもこの中へ、劍菱ならぬ劍の大和屋。それ御馳走に持參しました。マア、さう思うて御亭主さん。どうぞ納めて下さんせいなア。

皆々　そんなら命をこの中へ。

鹿之　この關取のお内儀の、まだホヤ／＼のそのお持たせ。肴は紅葉の吸ひ物に、この山中の鹿之助、親玉ならば當り前。牡丹にこの身をしゝびしほ、切り刻まれるが此方の望み。ちつとも構はぬ、宿六どん、マア、さう思つてもらひませう。

重三　おつう仕込んだ鳴神夫婦。望みの通りこの品を、此方へ納めたその上は。

ろく　夫婦手に手を引き合つて、その御馳走に千鳥足、歸りには骨酒を、樽に納めて行くのでござんす。

鶴之　エヽ、やかましいわえ。云はして置けばベラ／＼と、わいらが知つた事ぢやない。鹿之助、一緒に歸れ。

鹿之　アイ、歸りやす。歸るは歸るが、とてもの事、家移り粥の赤の飯、血汐に染めしその飯を

ろく　わたしも一緒に食べるつもりで。

鶴之　まだ吐かすか。わいら二人が爰にゐると、この鶴之介の男が立たぬが、それでもわいらは爰にゐたいか。

ろく　サア、それはな。

鶴之　喧嘩の起りはおれ一人、キツ〳〵爰を歸れと云ふに。
鹿之　そんなら行きやす。姐御も一緒に。
ろく　必らずお前は。
　トこなし。
鶴之　エヽ、行けと云ふに。
　トまた今の唄になり、おろく、こなしあつて、鹿之助附いて向うへ入る。
サア、邪魔は拂つた。この上は、ドリヤ、御馳走になりかけよう。
重三　其方が一人になるからは、此方も邪魔な居候ふ。爰を暫らく。
皆々　それぢやアお前。
重三　ハテ、歸れと云ふに。
　ト顔で教へる。
皆々　ホイ。
　ト皆々、不承知な顔して門口へ出て、三人囁き合ひ、藪疊の中へ小隠れする。
重三　邪魔を拂へば一人と一人。サア、この上は。
　ト鶴之介、ドッカリ下に居て
鶴之　今こそ持參の種肴。兩方締めてこの鳴神。サア、存分にやつた〳〵。
　トこなし。
重三　イヤ、そりやア不承知だ。この與右衛門、そんな手足は動かさぬ。あがり鰻を見るやうな、それを料るは下手料理。此方はびくしやく刎ねあがる、魚でなければ賞玩しないワ。
鶴之　成る程、さう聞いたらば、お望み次第、相手になつて眞劍勝負。
　ト身構へして
サア、こなたから拔かつせえ。
重三　イヤ、われから
兩人　サア〳〵〳〵。
　ト一度に拔き放し、キッとなつて見得。誂らへの鳴り物になり、兩人立廻り。此うち思はず行燈を切り倒す。捨て鉦、忍び三重のやうなる合ひ方。兩人暗がりの模樣、ト、鶴之介、門口の外へ出る。上の茂みより、長兵衛、官藏出て窺ひ、竹槍を持つて思ひ入れ。下の藪疊より、嘉藤太、同じく窺ふ。重三郎、誤まつて早桶を切り付ける。たが切れて、この途端、前の火鉢へ火燃えつく。桶の内より累出て、重三郎と顔見合す。

重三　桶の中から

鶴之　引ッ越し女房。

かさ　なんでお主が

重三　揃ひし印籠。

ト印籠を見せる。重三郎、恟りして

重三　さうとも知らいで

鶴之　約束變替へ。

ト書き物を投げてやる。

かさ　そんなら、これから

重三　可愛い奴の。

ト引き寄せる。鶴之介、外より門口を締める。敵役三人、竹槍を投げ付けると、一時にチョンと木の頭。

鶴之　おしげりなんし。

ト思ひ入れ。重三郎、累、抱き付く。敵役こなし。この仕組みよろしく。拍子幕。

ト知らせにつき、シャギリ

五建目

山名館表門の場
山名役宅の場
非筒假住居の場
足利館床下の場

役名――非筒外記左衞門。山名宗全持豐。山名河内之助。角力取、山中鹿之助。五十嵐小文次。高細穴五郎。伊皿子大八。白坂左軍太。大島倉右衞門。土子泥之助。尤道理之助。大江岡幸鬼貫。番人、木戸嘉兵衞。丹介女房、およよ。奥女中、沖の井。同、武隈。同、千賀野。同、勿來。外記左衞門若黨、丹介。仁木彈正左衞門直則。松ヶ枝鬩之助照光實ハ鳴神鶴之助。

本舞臺、三間の間、眞中に下馬の腰掛け。見附け内づら、三方とも、板羽目、この並び上下、石垣、腰瓦の長屋、白壁に平窓。上手に冠木門、出入り。すべて山名屋敷表通りの體。爰に中間三人、辨當を遣ひゐる。よき所に、朱にて非筒の印付きし伊達紐かかりし挾み箱、長柄など立てかけある。時の太鼓にて幕明く。

中一　なんと、もう何時であらうな。

中二　今の太鼓が九ッだ。

中三　旦那は、お下かりが遲いな。
中一　その筈よ。これまで始終、お國詰めの旦那、外記左衞門さま。
中二　今日急にお國元よりお登りなされ、何か願ひ出とやらを持つて、この山名さまへ願ひにお出で。
中三　その事は聞いてゐる。その相手といふは、鬼貫さまと仁木彈正さま。
中一　お國ばかりござつて、事馴れぬ旦那。
中二　それ〳〵、御家來のおいらまで案じられる。どうぞ首尾よく
三人　行けばよいが。
中一　それにつけても若黨の丹介。
中二　おいらを頼んで、先刻から居ないが
中三　何をしてゐるやら
中一　マア、構はずと
三人　腹を作れ〳〵。
ト皆々捨ぜりふにて、辨當を遣ふ。てんつゝ調べになり、向うより丹介、絹羽織、木綿袴、高股立ち大小にて、德利、皮包みを一つに提げ、出て來り、直ぐに舞臺へ來て

丹介　イヤア、いづくの浦でも、腹の時計は違はぬかして、皆うま事の最中だな。
ト皆々、丹介を見て
皆々　コレ〳〵丹介どの、先刻から何をしてゐたのだ。
丹介　内裏女郞も折助も、食はねば立たぬ譬への通り、その才覺にサ。
中一　おいらは、また惡く氣を廻して、斯う並んでゐるうちも、女房持ちはこなた一人。
中二　お供歸りを待ちかねて
中三　天非拔けの据ゑ膳を
皆々　食ひに行つたかと思つた。
丹介　ハヽヽ、なに滅相な。
中一　さうして、提げた物はなんだ。
丹介　サア、これか。丹介一生では、こなからの働らき。
三人　ナニ、アノお供先で、アノ酒をか。
丹介　常は誡めなれど、今日は旦那の初めての願ひ書、首尾よく行くやうにと、お神酒を少し。その剩りをみんなに頂かせようと、肴も下馬からではないぞ。
ト右の德利を渡す。
三人　エ、忝ない。丹介明神さま〳〵。

丹介　その明神のお神酒。併し爰では法度。向うの辻番の後を借つて

三人　エヽ、堪えられぬ。早く〳〵。

ト皆々、捨ぜりふにて、德利と皮包みを提げて、いそいそ、向うへ走り入る。丹介あと見送り

丹介　これまで、お國詰めの旦那外記左衞門さま、この度初めての御出訴。どうぞ首尾よく相濟むやうにと、數ならねども、この程の心遣ひ。夜の目も合はぬ所爲かして、大さうに眠氣が參つた。ドレ、この隙にトロ〳〵と、お願ひの叶ふ正夢でも見ようか。

ト思ひ入れあつて、後の腰掛けへ寢ころぶと、調べになり、向うより、先徒士二人、後より乘り物、裏方四人にて擔ぎ、古川傳藏、上下、侍ひにて附き添ひ、槍持ち、角内、丸平、對の看板、草履取りに出て來り、直ぐに舞臺へ來り、駕籠を下ろし、戸を明けると、内より鬼貫、上下、大小にて刀を提げ出る。

傳藏　お供廻りは、如何仕りませうな。

鬼貫　オヽ、サ、今日山名どのが内意のお召し、伺ひの爲に伺候の某。供の者は立歸り、後刻迎ひに。

皆々　畏まりました。

ト傳藏、丸平、角内殘り、皆々は向うへ入る。此うち、鬼貫、あたりを見て、右の挾み箱を見附け、思ひ入れあつて

鬼貫　ムウ、この箱の印は井筒……最早、出訴いたしたな。

トこなし。傳藏に囁く。傳藏心得、兩人に囁く。

あの道具を取散らせ。

三人　心得ました。

ト件の挾み箱、長柄など、そこらへ取散らす。鬼貫こなしあつて

鬼貫　あの者を引摺り出せ。

三人　ハツ。うしやアがれ〳〵。

ト丹介を引起し、無理に連れて來て引据ゑる。

角内　コレ、この箱は、其方の主人の挾み箱か。

ト丹介、何心なく

丹介　左やうでござります。どうして爰へ。

ト取りにかゝるを

三人　寄りやアがるな。

ト丹介、悧りして扣へる。

鬼貫　して、其方が主人と申すは。

丹介　ヘイ、頼兼公の藩中、井筒外記左衞門でござります。

三人　ナニ、井筒外記左衞門。
丹介　して、あなた樣は。
三人　大江の圖幸鬼貫さま。
丹介　エヽ……して、その挾み箱が、どう致しました。
鬼貫　どうとは、茲な無禮者めが。察するところ、今日我れ〳〵を相手となし、願ひ出でたる外記左衞門は、臣下。その斯くいふ鬼貫は、賴兼の後見なれば、主人も同然。その主人の面體へ、陪臣の小者たる其方が、土足にこの箱打ち付けたワ。
丹介　エヽ、。
鬼貫　其方ばかりの心であるまい。
傳藏　左やう〳〵。こりや、この者が才覺ぢやござりますまい。
角內　大方、主人の云ひ付けか。さうであらう〳〵。
丸平　さすれば相手は
三人　外記左衞門。
丹介　アヽ、モシ〳〵、滅相な。どう致しまして、假にもお旦那の名を仰しやつて下さりますな。元よりお供先で臥りましたは、私しめが不調法。存じませぬ事ながら、打返しましたは、申さうやうもござりませぬ不屆き。どうぞ幾重にも御免を
鬼貫　イヽヤ、ならぬ。今日の仕儀といひ、身に云ひ分があつての仕業。この箱こそは卽ち、井筒外記左衞門。持參いたして是非とも議論を
傳藏　御尤もの仰せ。あなたのお手は下させませぬ。
角內　棒づくめでも
丞平　相手は井筒外記左衞門。
三人　サヽ、參りませう〳〵。

ト傳藏、箱を抱へ、門の方へ行かうとするを、丹介あわて留めて

丹介　御尤もでござります〳〵。が、なか〳〵主人の存じた事ではござりませぬ。たゞ私しが不調法、幾重にも御免なされて、その箱を、どうぞ無難にお返しなされて下さりませ。お慈悲でござります。お情でござります。

ト手を合せて拜み廻る。

鬼貫　イカサマ、下郎が有樣、不便にもあり、外記は知らぬと申すが、さうでもあらうか。然らば返しくれうなれども、武士たる者の面體へ、打ちつけたるその箱は、取りも直さず汝が主人。今この所にて踏み碎いて

ト挾み箱を土足にかける。丹介、縋り付いて

丹介　アヽ、モシ〳〵、それでは矢張り主人の耻辱。越度と申すはこの私し。物の數にはござりませねど、箱の代りに私しを、お腹の癒るやう御存分に

鬼貫　オヽ、いゝ料簡だ。其方を存分に致しても、怒りを解くには足りねど、然らば其方を

傳藏　あなたのお顔へ打ちつけし

角内　箱の代りにお慈悲を以て

三平　今この場にて

三人　斯うするワ。

ト三人、丹介を打つ。

丹介　イヤモウ、どうでもよろしうござります。お腹の癒るほど御存分に。

三人　でも、いゝ辛抱。こんな奴は

鬼貫　ぶてばぶち得。ぶんのめせ。

三人　お許しぶちだ。

ト三人立ちかゝつて、丹介をしたゝかに打つ。てんつつ、調子になり、向うより、丹介女房おとよ、世話女房の形、誂らへの薬鍋を提げ、抱子を懐へ入れ、スタスタ出て來り、この體を見て、走り來り、この中へ入り

とよ　こちの人、こりやマアどうして。

丹介　コリヤ〳〵、構ふな。斯う手籠めにせられねば、ならぬ譯があつて。

三人　女の知つた事ぢやない。どいてゐろ〳〵。

とよ　モシ〳〵、マアお待ちなされて下さりませ。何か様子は存じませねど、どういふ譯で丹介どのを。

鬼貫　ムウ、そちや女房か。身に對し、慮外いたした下郎めゆゑ、此奴が願ひで

三人　この通り。

とよ　左やうではござりませうが、この上に、疵でも付いては、共稼ぎの女房の難儀。モシ、お腹立ちもござりませうが、この上は、私しども親子がお詫び。どうぞお宥し下さるやう、偏へにお願ひ申し上げます。

鬼貫　身が面體へ打ちつけたる箱の代り、打ち殺す奴ながら、妻子が願ひ、高が下郎。

三人　大概しめたら

鬼貫　もう好い加減に

三人　宥してくれるワ。

ト云ひさま、丹介を突き倒す。

とよ　そんなら此まゝ

丹介　これで濟めば誠に安堵。
鬼貫　ハテ、辛抱のよい野郞だ。
丹介　有り難うござります。
三人　ざまァ見ろ。ハヽヽヽ。
鬼貫　イヤ、思はぬ事で大きに遲參。
三人　然らばお旦那、
鬼貫　命冥加な……ドリヤ、參らう。
ト誂へになり、鬼貫先に、傳藏、丸平、角内、付き添ひ、こなしあつて門の内へ入る。丹介、おとよ殘り、こなしあつて
丹介　ハテ、怖いものだ。假にも奉公の間を盜み、横になつた罸が當り、とんだ災難。コレ、この事は必らず旦那へは。
とよ　なんの云はうぞいな。御奉公といふものは、重い輕いに依らず、大事に勤める程、苦勞の多いものでござんす。取分け、今日旦那さまのお上がりは、大切のお願ひゆゑ、御出府のうち朝夕の、お宮仕へはわたしら夫婦。それといふも、元はといへば、お前は仁木さまの御家來、木戸嘉兵衞さまのお子にて、外記左衞門さまへ御奉公。わたしも同じ下女奉公。その折フッと馴染みしを、旦那樣のお情で、夫婦となつて町宅して、あそこや爰へ雇はれて
丹介　親子三人、どうやら斯うやら暮らすのも、旦那の御恩。所へ今度お屋敷の騷動。大事の御身ゆゑ、其方とおれの、外は誰れ一人、寄せつけもせぬ御用心。
とよ　サア、旦那樣には、朝夕のお心遣ひ。もし御病氣でも出ては惡いと、若殿樣のお附きのお方が、きつうお案じ遊ばして、鬱氣を拂ふお藥を、旦那へ上げよと仰やうに、下された有り難さに、直ぐに走つて來る道で、ひよんな噂を。
丹介　そりや何を。
とよ　舅御樣の事を。
丹介　オヽサ、其方には隱してゐたが、人殺しの疑ひで、親仁樣には疾から入牢。
とよ　それ程の事、このわたしに云はぬ、お前の心勞も……
……マヽ、とつくり相談した上で
丹介　是非とも御免あるやうに。
とよ　それも氣がゝり。イヤ、氣がゝりと云へば、わたしは飛んだ粗相をしました。このお藥と一つに、鶴喜代さまから下された櫻の花、取急いで忘れたわいな。

丹介　それは大變。イヤ、斯うしやれ。そのお藥は、おれが預かる。その坊主めも爰へ寄越して、わが身はちよつと一走り。

とよ　そんならわたしは、ちつとも早く。

ト抱子を丹介に渡す。

丹介　よく叮嚀にお詫びを申して。

とよ　アイ〳〵……ドレ、取つて來ようか。

ト唄になり、おとよ、トツカワとして向うへ入る。丹介あと見送り

丹介　ヤレ〳〵、彼奴も粗々かしい、とは云へ何かといかい苦勞を

ト抱子泣く。

オヽ、だがよ〳〵。泣くな〳〵。アヽ、コレ、どうぞ彼奴が歸るまで、グッスリ拔いてくれろなよ。

ト思ひ入れ。時の太皷になり、向うより人足二人、この後より、嘉兵衞、牢屋の仕着、繩にかゝり、後より泥之助、道理之助、袢天、股引、十手を差し、大小にて出て來り、直ぐに舞臺へ來り、嘉兵衞、爪づく拍子にウンと倒れる。

兩人　如何いたした〳〵。

ト立ちかゝり見て

こりや急病と見える。其方どもは、早く醫者を迎へ、右の樣子を申せ。早く〳〵。

ト人足、ハッと棒を擔ぎ、兩人とも向うへ走り入る。

泥之　エヽ、コレ、醫者の參るまで、打ッちやつても置かれまい。水でも呑ましてやりたいが、薄穢ないこの囚人。

道理　折惡しく藥とても。

ト立ち騷ぐ。此うち丹介、何心なく窺ひ見て悄り。

丹介　ヤア、こりやアわしが、親仁樣だ〳〵。

トおろ〳〵する。兩人見て

泥之　親仁とあれば、許す〳〵。

兩人　介抱いたせ〳〵。

丹介　へイ〳〵、有り難うございます〳〵。

トうろたへながら、そこにある手桶の水を手拭にしめして、嘉兵衞の口へ注ぎ入れる。

親仁樣ア〳〵。お心が付きましたか。モシ、丹介でございます。

ト思ひ入れ。嘉兵衞、やう〳〵心付いて

嘉兵　ヤア、忰か。

丹介　親仁樣、心は慥かでございますか。

嘉兵　マア、思ひがけない。どうして爰に。
丹介　旦那樣のお供で居合はしたばつかり、急病を救ひましたも、盡きせぬ緣。これも旦那樣のお庇。
嘉兵　イヤ／＼、今の身はさうでない。此まゝに捨て置いて死んだなら、結句思ひはあるまいに。悴、ひよんな事してくれたなア。
丹介　モシ／＼。どうしたものでござります。お氣の弱い。モシ、爰に孫娘も居ります。
ト懷に抱いたまゝ顔を見せる。
嘉兵　ヤア、孫か、孫かいやい。ヤレ／＼、オヽ、よう寢て居るワ。ちつと見ぬうち、ヤレ／＼大きうなり居つたなア。
丹介　イヤ、お前の事もひよんな災難。今も今とて女房とも相談、どうぞ一刻も早う御出牢あるやうに。
嘉兵　アヽ、イヤ／＼、神佛を頼んだとて、なんとしてこの親は……これがこの世の見納めぢやわいやい。
丹介　エヽ、そんならあなたは。
道理　人殺しの上に、金子を奪ひし盜賊と
泥之　白狀あつて明日死罪。死骸は即ち由緣の者へ。
丹介　エヽ、モシ／＼、なんとしてお前はマア、覺えもない白狀をなされましたか。
嘉兵　サヽ、悴、聞いて吳れ。家を知らせる書付けを、書いてやつたがこの身の因果。あの助八がその書付け、持つて死んだで、このおれに、疑ひかゝつて日每の拷問。その苦痛に堪え難く、生きたとて僅かな命。それより早う盜賊と、なつても苦しみを助かる心で、覺えぬ事も白狀したが、今この場でわれや孫に逢うて見れば、死にたい事はないわいやい。
ト泣いて思ひ入れ
丹介　御尤だ／＼。御尤もでござります。それ程の事を、お前の古主の仁木さま、一言なりともお取扱ひを
ト嘉兵衞、兩人へ願へと思ひ入れする。丹介心得
ヘイ／＼、御兩人樣へ申し上げます。只今お聞きなされた通りの仕儀、どうぞお慈悲に親の命を。
道理　成る程、尤もの願ひ。併し爪印捺りし罪人。
泥之　そこを助かる仕樣もあれど、何事に依らず、申し付ける一儀
兩人　其方、しかと勤むる心か。
丹介　何がさて、親の命さへ助かりまする事ならば。
道理　オヽ、助けくれる。その趣意は、嘉兵衞にとくと申

し聞かせ置いたれば。
泥之　有無の返事が生死の二つ。この上は申し合した通り、
嘉兵衞が縄目を。
道理　心得てござる。
ト嘉兵衞の縄を解く。
嘉兵　これは。
泥之　縄目を免すその仔細は、只今も申す如く、役目首尾
よく仕負ふせなば
道理　親の命を助けくれる。縄打つ代りの放し飼ひ。
泥之　我れ〳〵は、暫時この場を
道理　引下がつて遠見の固め。
泥之　大事の役目、コリヤ
兩人　密かに致せ。
ト調べになり、兩人、門の内へ入る。丹介、思ひ入れ
あつて
丹介　モシ〳〵、さぞお手が痛みませう。サア〳〵、心が
急きます。して、お命の助かる仕様は。
嘉兵　サア、科極まりしおれが命と、釣替への役目、どう
で手輕い事ではないが、お主、見事勤めるかよ。
丹介　これはしたり、どうしたものでござります。あなた
のお命助かりまする事ならば、どんな事でも。
嘉兵　口外すれば、戻らぬ大事ぢやが、悴、しかと。
丹介　斯ういふうちも、心が急きます。して、勤める役目
は。
嘉兵　呑ましやれ。
丹介　そりや、何を。
嘉兵　毒薬を。
丹介　誰れに。
嘉兵　其方が主の外記左衞門に。
丹介　エ、、、、
ト愕り。笙の調べになり
嘉兵　サ、、愕りであらう。膽が潰れやうが、頼まれたそ
の譯は、われが主の外記左衞門、今度お國より上られ、
鬼貫公とおれが古主の、仁木彈正さまを相手取り、惡事
の訴へ、さりながら、段々と様子を聞けば、却つてこれ
皆、外記左衞門の惡企み。
丹介　モシ〳〵、そりやお前、何を仰しやります。どうし
て旦那様に限つて、そんなお心があるものか。とんだ事
だとんだ事だ。
嘉兵　コリヤ〳〵、それは、われが何もかも知らぬのぢや

わいやい。
丹介　イヤ〱、お前こそ、何も御存じないのだ。
嘉兵　これはしたり、われが正直な心から、一圖の料簡。鬼貫公を初め彈正さまは、主君を大事と守り奉り、民を撫育なさるによつて、その威勢を妬み、跡方もなき訴へに、頼兼公を押籠め、鶴喜代さまを御代に立て、我が意を振はん底企みぢやわいやい。
ト丹介、これまでに、いろ〱思ひ入れあつて
丹介　フム、御主人様の企みの樣子。初めて聞いて心の違ひ。悪人にもせよ主人は主人、またその上に、これぞといふ證據もなければ。
嘉兵　また御兩所のお心を疑がつてゐるわれが心底。例へ證據はないにせよ。おれが古主の仁木さまの、仇なる外記左衞門、毒で殺せば三方四方、親の忠義を立てさすか、忠義を立てて、この親を、死罪にするか。悴丹介、サヽ、返答が聞きたいわい。
丹介　親の命を助けるには、どんな役目もいとはねど、現在主人の外記左衞門さまへ、どうして毒が。
嘉兵　コリヤ、ヤイ、おれが爲に古主なら、われが爲にも古主筋。大の虫を助けて小の虫を殺すが誠の忠義。
丹介　それだと云つて。
嘉兵　得心せねば目前に、親を死罪にする心か。
丹介　どうもそれは。
嘉兵　得心するか。
丹介　サア。
嘉兵　不得心か。
丹介　サア〱〱。
嘉兵　どうぞ毒を服ませてくれいやい。
ト思ひ入れ、この時、門の内より鬼貫、ツカ〱と出て抱子を引ッたくる。
丹介　ア、モシ娘を。
ト寄るを睨めつけ
鬼貫　寄るな、うぬ……嘉兵衞に明かせし一大事、聞入れなくば親子が一命。この場に於て。
ト抱子を懐へ入れ、嘉兵衞を踏み付ける。
丹介　ヤ、親仁樣を。
ト寄るを、鬼貫手早く白刃を拔いて、嘉兵衞にさしつけ
鬼貫　サア丹介、心を改め味方に附けばその通り。異議に及ばゞ、いま目の前で。

丹介　アヽ、モシ〳〵、白刃を納めて下さりませ。恐ろしくつて口がきけませぬ。
鬼貫　この期に及んで卑怯な一言。
　ト丹介の目先へ白刃を突き出す。
丹介　アレエ。
　ト思ひ入れ。
鬼貫　然らば承知か。
丹介　どう致しまして、そんな事が。
鬼貫　不得心とか。
丹介　知れた事でござります。
鬼貫　心据らぬ大馬鹿めが。
嘉兵　アヽ、コレ悴、おれが命は構はぬが、どうぞ孫めを助けたい。われが心たつた一つで、親子の命も助かり、第一、お家お國の納まりとなる。爰の所を聞分けて。
丹介　でも、現在の。
鬼貫　エヽ、面倒な。
　トまた嘉兵衛を殺さうとする。
丹介　コレ、滅多な事を。
鬼貫　荷擔いたすか。
丹介　サア。

鬼貫　同意いたさば、親が命は。
　ト嘉兵衛を引き起す。
嘉兵　コレ、いま云ふ通り、心よからぬ外記左衛門。それで騒動納まれば、不忠でない、古主へ忠義。
丹介　とは思へども御恩のお主、悪人にもせよ勿體ない。
嘉兵　得心せねばこの親は、どうで死罪になる體。それよりいつそ。
　ト鬼貫の白刃を取り、死なうとする。
　南無阿彌陀佛。
丹介　これはしたり、滅相な。マア〳〵待つて
嘉兵　そんなら承知か。
丹介　親の詞に從へば、お旦那の命の瀬戸。得心せねば目前に。
嘉兵　親を殺すか。
丹介　どうしてお前を。
鬼貫　捻り殺すぞ。
丹介　アヽ、モシ。
鬼貫　善悪二つが生死の境。
嘉兵　悴、返事は。
兩人　どゞ、どうだ。

丹介　ト丹介こなしあつて
　是非に及ばぬ。如何にも毒を。
鬼貫　コリヤ。
丹介　服ませませう。
嘉兵　すりや、聞分けて。
鬼貫　出かした丹介、荷擔いたさば兼ねての約束、親の命
　は。
　ト嘉兵衛の持つてゐる白刃を取つて鞘へ納める。丹介、
　ホッと思ひ入れ。
嘉兵　エヽ、忝ない。そんなら孫も。
　ト寄るを
鬼貫　イヤ、汝は助けて娘は人質。
丹介　エ。
鬼貫　其方に渡すは
　ト思ひ入れあつて
　この毒薬を。
　ト出して丹介に渡す。
丹介　そんならこれが。
鬼貫　それで行かずば、コリヤ
　ト懐より種ケ島を出し
　これにて其方は。
　ト嘉兵衛に渡す。
嘉兵　すりや、この品で。
丹介　こんな事とは夢にも知らず、もしお氣鬱でも出やう
　かと、心を附けてお薬まで。
　ト薬鍋へ思ひ入れ。
鬼貫　それこそ幸ひ、いま爰で。
嘉兵　毒を仕込むは、われが働らき。
丹介　それを首尾よく仕負ふせなば。
鬼貫　孫が命も
嘉兵　助けた上に、親子は出世。
鬼貫　變心なさば、親子が寂滅。
　ト思ひ入れ、
丹介　ア、モシ……承知の印は。
　ト手拭を咬へ、件の毒な薬鍋へ入れる。
鬼貫　出かした丹介。薬ばかりぢや安心ならぬ。立歸つて
　湯の中へも
嘉兵　忘れぬやうに入れて置け。わりや親孝行者だなア。
丹介　よこしま非道も目の前の、親の命にや
鬼貫　ヤ。

丹介　替へられませぬ。

ト目をねぶり、こなしあつてつぐ。鬼貫、嘉兵衛、目を見合はせ、巧いと思ひ入れ。早舞ひになり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、二重屋體、欄間、結構なる御簾を掛け、金襖、黒塗りの上がり段。すべて山名館奥書院の模樣。調べにて道具とまる、ト向うの襖を明け、井筒外記左衛門、上下、大小にて、願書を懐中し、窺ひ／＼出て來る。下座より白坂左軍太、上下にて出て、花道にて外記左衛門に行き合ひ、心得ぬこなし、見送つて揚げ幕へ入る。外記左衛門、立ちどまり、思ひ入れあつて

外記　主家の亂れ嘆かはしく、訴への願書は持參なしたれども、當所の首尾は、馴れぬ外記左衛門。お廣間にて奏者の指圖に依つて、奥書院まで參れば、お役人方お詰合せのよし。教へに任せ、間毎を越えてお座敷の體、お詰め合ひなきは……餘り推參も恐れ……なじよにも、かじよにも、すべきやうがない。

ト思ひ入れ。下座より大嶋倉右衛門、上下にて振り返り／＼出て來る。外記左衛門見附け、ツカ／＼と舞臺へ來り、小腰を屈める。倉右衛門、不思議さうに入れ替り、行かうとするを

イヤ、憚りながら、訴への者でござりまする。願書お取次ぎ下されうや。

倉右　係りが違ふ。

ト外記左衛門、ハツと思ひ入れ。

見れば廣間の案内もなく……ハ、ア、手入れなきゆゑに、やられたな。

ト外記左衛門、考へる。此うち、左軍太、足早に立歸り

左軍　大島氏々々々、次手ゆゑ、廣間で承はつたら、彼れでござる。

ト外記左衛門へ思ひ入れして云ふ。

倉右　エ、内願の……彼のでござるか。致しやうがござる。コリヤ／＼、其方は不勝手と見える。伺ひ方係りの同役を、呼び出して遣はさう。

外記　それは有り難き思し召し。何分よろしう。

ト倉右衛門、舞臺へ來り

倉右　大八どの、穴五郎どの、好い加減に休息召され。急

初演の繪番附

の訴へがござる。
左軍　御兩所々々々。
ト けはしく呼ぶ。これにて上手より、伊皿子大八、高縄穴五郎、上下にて目を擦り〳〵出て來る。此うち、倉右衛門、左軍太、囁き笑ふ事。
大八　これはお情ない。御兩所、此方ちつとも寝は致さぬ。
穴五　少し考へる事があるを、けたゝましい呼びやう。
大八　して、訴へと云ふは。
外記　私しでござりまする。
大八　して、其方は。
外記　頼兼が國家老、井筒外記左衛門めでござりまする。
大八　さては國侍ひゆゑ、當所は不案内ぢやな。
外記　御意でござりまする。この度、初めての出訴。田舎侍ひ、武骨の段は幾重にも。
倉右　イヤ、仰せられいでも田舎侍ひ。此方よく存じて居るわい。所馴染まぬ上、未だ手入れ音信なきゆゑ、取次ぎには突き放され
左軍　この所にマゴ〳〵いたし居るゆゑ、御兩所の好いお慰みにと存じ、その上彼れでござる。
ト 思ひ入れ。兩人呑み込み

大八　エ、鬼…ヤ、その頼みより、音信なきが恐れる。
外記　イヤ〳〵、御意ではござれど、大切の出訴ゆゑ、御一門を始め、諸家中へも音信不通。
大八　エ、その事ではないは。黄金花咲く陸奥の國政を預かりながら
穴五　人の心を和らぐる、歌詠みの氣も付かず
倉右　これがほんの東夷。
左軍　堅くなつて、とんとわからぬ。
四人　ハヽヽヽ。
ト 笑ふ。御簾の内にて
持豊　騒がしい。方々、持豐それにて事を糺さん。
外記　あのお聲は。
四人　執權のお出で。蟄しませい。
ト 外記左衛門、ハアと下へ蹲まる。皆々よろしく扣へる。序の舞になり、正面の御簾巻き上がる。内に山名左衛門持豐、袴、羽織の形、褥の上に坐り、下手に、小文次、上下にて、持豐の刀を持ち扣へる。
四人　只今とくと吟味の上
小文　イヤ、言上に及ばぬ。奏者の申し上ぐるに依つて、直さま御出座。

持豊　して、訴への者は。
四人　即ちこれに。
持豊　フム。頼兼の國家老、井筒外記左衛門とは、其方よな。
外記　ハア、。
持豊　して、願ひの趣きは。
外記　委細願書に認めござりまする。憚りながらお取次を、
ト四人へ云ふを
持豊　イヤ〳〵、願書取上ぐるは同列の勝元、出仕なければ相成らぬが、なにが、馴れぬと見ゆれば、予が格別の心入れを以て、願ひ書も預かり、よきに計らひ得させんが、先づその大體は。
外記　ハツ、憚りながら、お讀みの儀を。
ト四人へ云ふ。
持豊　イヤ〳〵、勝元同席の節は勿論、某一人なれば許す。直ぐに返答いたせ。
外記　ハア、、こは冥加なき仕合せ。でも、餘り畏れ入りますれば。
小文　イヤ、お許しの上は苦しうない。直ぐにお訴へを致されよ。
外記　ハツ。この上は……訴へまする趣意は、後見鬼貫、側家老彈正兩人が取計らひ、何かすべて心得難く、主人頼兼が放埒も、それゆゑと存じますれば、國家の騒動、打捨て置かれず、彼れらに尋ねる不審十五ヶ條、認めましたる願ひ書。
持豊　こりや輕からざる訴へ。さほどの儀を其方一人、願ひ出でしは。
外記　イヤ、畏れながら、國許に於きましては、年寄ども評議の上、武骨の者ども大勢出訴いたしては、徒黨の汚名、お上を憚りまして、それゆゑ外記左衛門たゞ一人。
持豊　成る程、申し譯はさる事なれども、其方一人、ぬきんでゝの訴へは、鬼貫、彈正が威勢を羨む偏執の疑ひ。
外記　御意ではござれど、この外記は、代々澁谷の城主にて二萬石、なに不足ござつて、味噌黨の世話仕る家老役、羨やみませうやうはござらぬ。
持豊　して、十五ヶ條の訴へは。
外記　皆それ〳〵の不審ござりまする。
持豊　その證據は。
外記　今日、持參仕らず、追つて御覽に入れ奉りまする。
持豊　すりや、今日は……ハテ殘念な。イヤ、殘る方なき

忠義の其方、して、到着は。
外記　ハツ〳〵。
持豊　イヤサ、いつ到着いたした。
外記　ハツ、昨夜中、着府仕り、それゆゑ今日の參上。
持豊　定めて旅中も急ぎ、さぞ疲れつらん。斯樣いたさう。
表向きはこれまで、內證は又格別。小座敷へ伴ひ、打寛
ろいで一獻酌まん。陸奧の話しも又一興。サヽ、外記、
遠慮なしに。
外記　ハヽ、御懇の御意、有り難うは存じますれど。
五人　御意を背くは却つて恐れ
持豊　サヽ、予と一緒に。
ト立たうとする。此うち、中の舞になり、二重の上手
より鬼貫、ツカ〳〵と出て
鬼貫　これは〳〵持豐公には、最早御出席、折角の御內意
を。
ト云ひかけるを
持豊　ア、惡い所へ。
ト思ひ入れ。
外記　思ひがけなき鬼貫さまには。
ト心得ぬこなし。

鬼貫　其方は外記左衞門。誰れが許してこの席へは。
外記　出訴の儀につきまして。
鬼貫　その噂を聞きしゆゑ、推參の鬼貫、如何なる願ひか
知らねど、それ〳〵の役人を差措き、一圖の料簡は亂心
か狂氣か。大方、埒もなき願ひ。お取上げには及びませ
ぬ。
外記　この期に至り、論は無益。最早、山名公お取上げの
御意ござれば
持豊　コリヤ〳〵外記左衞門、只今までとは違ふぞ。予は
左やうの事は申さぬ。存ぜぬ、知らぬぞ。
外記　でも、最前
持豊　ヤア扣へい。席をも辨まへず、詞を返す不屆き奴。
コリヤ、予を何と思ふ。某は天下の執權、何よしみあつ
て汝等に、懇意がましく左やうの事を申さんや。茲な無
禮者めが。
外記　すりや、御懇の御意に引きかへて……フム。
ト思ひ入れ。
持豊　田舍者ゆゑ、取るに足らねど、これ皆、後見たる鬼
貫の行き屆かざるゆゑ。申し譯あるか。無禮であらう。
トわざとキツと云ふ。

鬼貫　ハヽ、恐れ入りましてござりまする……コリヤ外記、どう致したものだ。其方の越度は、某が難儀。身が難儀は頼兼が爲にならぬ。恐れ入つたか。恐れ入つたれば、片時も早く罷り立てと申すに。
外記　イヤ、立ちませぬ。
皆々　なんと。
外記　家の大事、我が國の亂れは、これ天下の大事。それを訴へ出でたる某、無禮は私しの無禮にして、大事は天下の煩らひ。その爲にこそ立て置かれし天下の問注所。その問注所へ願ひ出でしを、お取上げこれなくては、問注所の詮なし。但し、無益の場所なるか。この儀承はつた上に罷り立たん。鬼貫さま、憚りながら、如何でござりまする。
鬼貫　黙らう此奴。例へ其方、口がしから申しても、それでは天下の甲乙がないワ。
持豊　家格に違ふ一個の願ひ、無禮者ゆゑ、取上げる事、罷りならぬ。
外記　ハヽ、恐れ入り奉りまする。お取上げなければ、何ともすべきやうがない。この上は、武將の御前へ直々にお願ひ申す。萬一お取上げあられし節は、いかゞしうもござれば、この段しかと申し上げ置きまする。然らば退出。
ト立たうとするを
持豊　コリヤ〳〵……兎角武骨の其方、身分の段を詫びるなら、取上げくれうツ。
外記　イヤ、身分の儀は、如何やうにも相成りましても、私しに於てお詫び仕るが、頼兼家に於きましては、決してお詫びは仕らぬ。
持豊　此奴、頑なゝ奴。よいワ、その願書、これへ……。
ト外記左衛門、ハッと差出すを、小文次取つて持豊へ出すを取つて
こりや、鬼貫始め、彈正その外、十五ヶ條の不審、怪しからざる訴へ、覺えあるか。
ト願ひ書を鬼貫に見せる。鬼貫、心にて讀み
鬼貫　イヤ、一向に思ひよりませぬ。
ト願書を、手早く元のやうにして、持豊へ返し、外記左衛門に向ひ
如何に外記、例へ、どのやうな儀がこれあらうとも、其方に於ては、國元より罷り出る事はならざるところ、如何にして相上つた。遠足ならぬその仔細は、家の寶、天

國の劍、信夫摺りの印まで紛失。その越度は其方が悴民部、その砌りより勘當。かゝる罪人のその親たる身を以て、いま十五ヶ條の訴へより、これに越えたる誤まりあらんや。人の非をあげんと思はゞ、なぜ我が身を糺さぬ。

外記　サ、それは。

持豐　サ、外記左衞門、返答なきは覺えあらん。それになんぞや、ノメ／＼と訴へ出でし、無禮緩怠。早々この場を罷り立て。

ト右の願書を外記左衞門に打ちつける。

外記　すりや、お取上げは。

持豐　叶はぬ事ぢや。

四人　立ちませい。

ト外記左衞門、これにてチッと思ひ入れあつて、小文次に向ひ

外記　憚りながら、あなた樣より、鬼貫へ伺ひまする儀をお取次ぎ。

小文　遠慮に及ばぬ。申し開けられよ。

外記　ハ、ツ、イヤ別儀でもござりませぬ。天國の劍、信夫摺りの印、紛失とは僞はり、疾より拙者が。

鬼貫　ア、、コリヤ／＼、僞はりを申すな。

外記　イヤ、あなた樣ではござりませぬ。こりや、こなた樣へ申し上げます。例へ又、實にその二品、某失ひしに極まらば。

鬼貫　國の元老、其方には切腹申し付けるワ。

外記　然らば又、鬼貫公にも御切腹。

鬼貫　何がどうした。

外記　禮儀はこれまで。憚りながら、詞正しく申し上げる。眞平御免。

ト三味線入り、序の舞になり、外記左衞門、キッとなつて

鬼貫さま、あなたは、賴兼の家に於ては、何を司り給ふや。

鬼貫　知れた事、後見職を司れば、其方の爲にも主人同然。

外記　さるによつてお尋ね申す。

鬼貫　何を尋ねる。

外記　鬼貫どの、切腹の儀を。

鬼貫　なんと。

外記　只今この所にて、外記左衞門、預かりの寶失へば、その申し譯に切腹との御一言。既に寶に致せ、器物です

らその通り。然るになんぞや五十四郡、その家の後見は恐れ多くも殿御一代は、あなたの預かり、その預かりの頼兼公、淫酒の二つに魂ひを奪はれ、二品失ひしは、矢張りあなたのお失ひありし同然。拙者、殿へ對し切腹いたさば、鬼貫どのには後見の誤まり、天下へ對して切腹なすは、あなたのお役目。それになんぞや、陪臣の外記左衛門が切腹なし、國家を預かる鬼貫どの、この儀に於ては存ぜぬ知らぬと、生面さげて、よくもこの席にて申さるゝものかな。寶紛失の云ひ譯に、切腹なして事が濟まば、いはんや、預かる血筋の頼兼、身持ち惰弱に寶の詮議、この儀に於ては成り代り、なぜ腹切つて意見は申されぬ。家來が百萬切る腹より、後見職の鬼貫さま、お命捨てるものならば、上にも格別の思し召し。但し拙者が腹切らば、國家が無事に納まりまするか。

鬼貫　サ、それは。

外記　サア〳〵……返答あられよ、鬼貫公。

　トきつと云ふ、鬼貫、ギックリとなる。この時、八ツの時計鳴る。

持豊　ありや、八つの時計。評議はこれまで。これよりは勝元の係り。外記左衛門、立て。

外記　すりや、どうござつても、お取上げは。

皆々　立ちませい。

　ト外記左衛門、ハッと悄れ、行きにかゝる。この時、奥にて

河内　ヤレ待て。その願書、某が直に受取り、屆けてくれん。

　ト外記左衛門、立ちとまり、思ひ入れ。序の舞になり、山名嫡子河内之助、上下にて奥より出て、眞中に住ふ。

持豊　そちや忰河内之助。

河内　最早刻限、勝元のお係りなれど、外記は遠國者ゆゑ、事馴れぬと見えますれば、此方にて取上げ、勝元に相渡し、取計らふが古老のお役目。

持豊　ぢやと申して。

河内　然らば、勝元一人にて、計らひましても苦しうござらぬか。

持豊　イヤサ、それでは。

河内　サ、そこを存じて拙者が計らひ。コリヤ〳〵外記、身は河内之助、心措きなう、その願書を。

外記　ハッ、有り難うござりまする。

　ト下より願書を差出す。河内之助、取つて

河内　こりや、國家の大事、輕からざる願書……差當る相手は鬼貫どの、この席へは、誰れが許して。この後とても、右の一件相濟むまでは、私しにお出であつては、親ども何か依怙あるやうにて、彼れこれと風說ござつては、役儀は濟まぬ。向後、キッとお出で御無用。
鬼貫　恐れ入りましてござりまする。
外記　ハッ、誠に明白なる御諚。この後よろしく。
河内　双方とも、追つて召出すそれまでは、兩人とも立ちませい。
鬼貫　ハッ。
外記　外記、念の入れやれ。
外記　有り難う存じまする。
皆々　立ちませい。
ト誂らへの合ひ方。早めたる時の太鼓になり、外記左備門、向うへ、鬼貫に附き添ひ皆々奥へ、河内之助、持豊殘り、行きにかゝるを
河内　イヤ、お待ち下されませう。
持豊　用ばしあつてか。
河内　申し上げるは……あなたはなう。
ト合ひ方になり

いらざる鬼貫、彈正へ荷擔なし、五十四郡へお手を入れんと、不義の富貴は浮べる雲、昔が今に至るまで、假にも亂臣、事をなしたる例しを聞かず。殊には當時、古老と呼ばれ、肩を並べる人なき御身。慾には限りのあらざれば、後には天下も……サ、その思し召しある時は、忠孝盡せし御先祖へ、不忠となつて家の大事。聞濟みあつて、親人樣。
持豊　ヤア、いらざる諫言。一旦組みせしこの大望、あの鬼貫に家督させ、姫を餌に頼兼を隱居と號し、殊に依つたら五十四郡も。
河内　そのお心ゆゑ時來つて、數代の名家もあなたの代に。
持豊　潰しても予が物、外からなんのいらぬ世話。悴、打捨て置きやれ。
河内　すりや、子孫にも。
持豊　構はぬ大望。これから段々。
河内　モシ、親人樣。
持豊　なんだ。
河内　あなたはなう。
トこなし。早舞になり、この道具、ぶん廻す。

本舞臺、上の方、綺麗なる圍ひ。爐へ釜をかけ、床の間附き。この續き、後へ下げ、一間の障子屋體。すべて屋根に連翹咲き亂れ、いつもの所に枝折り門、この脇に松の大木、人登る事あり、外記左衛門假宅の模樣。時の鐘、合ひ方にて道具納まる。

ト直ぐにパタ／＼になり、向うより丹介、以前の形、藥鍋を提げ、出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、枝折り戶を閉め、掛け金をかけ、思ひ入れあつて、毒の包みを出し、爐の釜へ仕込むこなしあつて

丹介　道ならぬとは知りながら、親の命を助けうばかり。又二つには家國の、お爲とあるに是非なくも……モシ、旦那樣、お免しなされて下さりませ。

ト思ひ入れ。矢張り時の鐘、合ひ方にて、向うよりおとよ、風呂敷包みを提げ、出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、枝折り戶を明けても明かぬゆゑ

とよ　こりや明かぬわいな。誰れがマア、掛け金を

ト內を覗き

そこにござんすは、こちの人ぢやないかえ。

トこれにて、丹介、惘りして飛び下り

丹介　オヽ、こちの人だ、さうしててまへは。

ト云ひながら、掛け金を取る。

とよ　なんでマア晝中に、爰を閉めたのでござんすえ。

丹介　爰を閉めたは、なにサ……用心が惡いから。

とよ　さうでござんすか。そして、旦那樣は。

丹介　もう今にお歸りなさるであらう。

とよ　それに又、お前は。

丹介　おれが歸つたは……オヽ、それ／＼、御膳の支度をして置かうと思つて。

とよ　さうでござんすか。御膳と云へば先刻の藥。旦那樣へあげて下さんしたかえ。

丹介　イヤ、あのお藥は、あげるに間がなかつたに依つて、爰へ持つて來て置いた。

とよ　そんならちよつと溫めて。

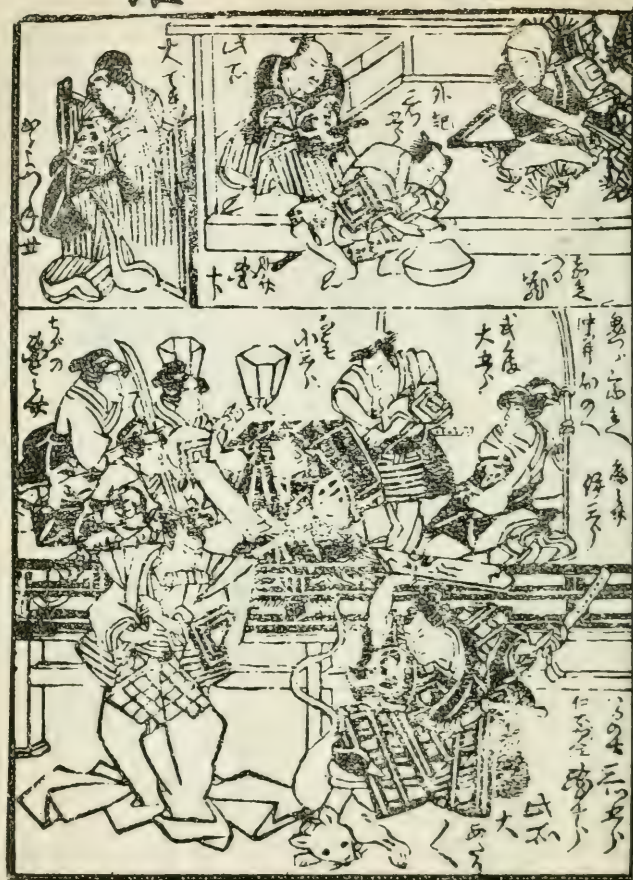
ト取りにかゝるを

丹介　コレ／＼、手を附けては惡い。それは、おれがよいやうにする。マア、それよりは御膳の支度に。

ト思ひ入れあつて

コレ、この釜の湯は、よくたぎつてゐます。手を附ける事はなりませぬぞ。

とよ　なんで、マアわたしが。

丹介　手を附けると火傷をしますぞ。
とよ　エヽモヽなんのこつちやぞいなア。
　　ト唄になり、丹介こなしあつて、ツイと奥へ入る。この唄をかつて、向うより外記左衛門、以前のまゝ出て來る。後より、侍ひ、絹羽織にて、附き添ひ出て、花道にて
侍ひ　最早御用は。
外記　オヽ休め〱……アヽコリヤ〱、其方はお向ひ屋敷の吉田志摩方へ參り、身共、只今下がり申した。委細は後刻御意得べしと申して參れ。
侍ひ　ハツ。
　　ト引返して、走り入る。外記左衛門、舞臺へ來り
外記　コリヤ、おとよ、大儀であつたな。
　　ト云ひながら、内へ入る。
とよ　オヽ旦那様、お下がり遊ばしましたか。私しどももお案じ申しまして
外記　さうであろ〱。身も馴れぬ事ゆゑ、なんとやら氣苦勞なれども……アヽ河内之助どのは、御發明と見える。先づ〱これにて安堵。
とよ　それはよろしうござります……マア、お召替へ遊ばしませぬか。
外記　左やういたさう〱。
　　ト上下を脱ぐ。おとよ、手早く疊みながら、今の風呂敷包みをそこへ出し
とよ　只今、御呉服所から、お誂らへのお上下、その外、いろ〱參りましてござります。
外記　それ〱、國元より未だ事足らぬ品もあれば、先づその上下なぞ、出して見せい。
　　トおとよ、ハイ〱と風呂敷包みを解き上下を出す。此うち、奥より丹介、覆面して膳を持ち出て來り、下の方へ來て
丹介　旦那様、只今お下がりでござりますか。さぞかし御苦勞でござりませう。
外記　オヽ丹介か。何かと大儀であらう。
　　トおとよ右の上下を出して
とよ　お上下はこれでござりまする。
　　ト外記左衛門、見て
外記　エヽこりや忌はしい。
　　ト氣にかけるこなし。
丹介　お上下が、どう致しました。

初演の繪番附

外記　さればサ、その上下は、石持ばかりで、上繪を描かざれば、無紋も同然。
丹介　ヘイ、無紋では惡うござりまするか。
外記　イカサマ、其方は知るまいが、武士たる者が立派に切腹するその時は、無紋の上下、この髷の髻を拂ひ、疊の上へ白絹を敷きて、三方に九寸五分。その故實は武士の嗜なみ。併し今時そんな武士は。マア、それはそちらへ。
ト丹介、これを聞いてこなし。
とよ　左やうなら片付けまして……ほんにわたしとした事が、とんと忘れて居りました。今朝御前樣から、さぞがし外記は氣骨であらう。せめては心晴らしにと、この花をあなた樣へ。
ト奥へ走り行き、直ぐに櫻の花を持ち出て、外記左衞門の前へ置く。
外記　こは有り難き贈り物。ア丶、畏れ多い。ナニ家來づれが苦勞なすは、これ役目の表。それをお案じ下さる御主君の御慈悲。仇に見るのは勿體なし　その床の間へ。
トおとよに花を渡す。おとよ受取つて、床の間の花活けへ挿す。

丹介　オ丶、勿體ないで思ひ出した。モシ〳〵、旦那樣、先程、若殿樣から、その櫻の花にお添へなされて下された御前藥、御膳前に召上がつては、如何でござります。
外記　ナニ、すりやお藥までも……ハテサテ、冥加なき仕合せ。早速頂戴するであらう。
丹介　左やうがよろしうござりませう。
トそこにある茶碗を取つて藥をつぐとて、過つて茶碗を取落す。
南無三、大事の。
ト思ひ入れ。
外記　これはしたり、粗相千萬。大切のお藥を。
とよ　ほんにマア、不調法な。
ト外記左衞門、氣を替へて
外記　イヤ〳〵、藥の溢れたは、めでたい〳〵。アノ病氣なぞで、藥を溢せば、病人も平癒するとて、殊の外喜ぶ。この度の大願、首尾よう叶ふ前表とも申すのであらう。オ丶、めでたい〳〵。
丹介　左やうなら、藥の溢れましたは。
とよ　却つて旦那の御機嫌に。エ丶、お嬉しう存じまする。
ト此うち丹介、顏へ手にて袖を當て、手拭にてそこら

を拭き、思ひ入れあつて門口へ捨てろ。

丹介　お藥が溢れましたら、御膳を召上がりませぬか。

外記　イヤ／＼、まだ膳部は欲しうない。こりや斯樣いたさう。折角の下され物。この花を眺めながら、一服立てよう。

とよ　それはよろしうござりませう。

外記　其方達兩人も、身が立てるから、一服吞め。

とよ　それはマア、有り難い。

　トこれを聞いて、丹介驚ろき

丹介　ア、、コレ／＼、その茶を飲んで堪るものか。よす事よす事。

とよ　それでも、折角旦那樣の

丹介　それだからよせといふ事。

とよ　エ。

丹介　ハテ、旦那の手から勿體ないワ。

外記　ハテサテ、遠慮深い。茶の湯に上下の隔てはない。然らば丹介、其方夫婦は、以前のよしみ、實義を見込み、召使ふに、この程の心遣ひ、後々は取上げ遣はす。それまでの褒美がてら、身が手づから薄茶を一服。

とよ　それはマア、冥加ない。左やうならば。

丹介　これサ、よせと云ふに、エ、、情ない。われはマア、奧へ行けよ。

とよ　行けなら行きますが、丹介どの、お前、娘をどうしなさんした。

丹介　サ、その娘は……なによ、オ、、親仁樣が許されて、連れて行つたよ。

とよ　エ、、そりやマア、嬉しい好い事でござんすなア。

丹介　サ、いゝ事だから、奧へ行けよ。エ、、行けといふに。

とよ　アイ、いま行くわいな。

　ト合ひ方になり、おとよ、こなしあつて奧へ入る。外記左衞門、此うち、爐の前へ直り

外記　丹介、然らば、其方吞め。

丹介　エ、どうでも吞みますかな。

外記　サア／＼、遠慮に及ばぬ。これへ來い／＼。

丹介　ア、、丹介これを吞まにやならぬと云ふは、お主の罰だ。仕方がない。吞みませう。

外記　ハ、、、、仰山な奴の、得て下々では茶の湯と云へば、何か改まつて氣詰まるやうに思へども、何もさうむづかしいものではない。ドリヤ、立つて遣はさうか。

丹介　南無阿彌陀佛。

ト合ひ方になり、柄杓を取る時、蝶二羽飛び下り、櫻の枝へ飛びかふ。

外記　アレ見よ。丹介、どうも云へぬ。蝶の花に戯むれ飛びかふ樣子、また一入、どうも云へぬ〳〵。

ト外記左衞門、茶碗を引寄せ、袱紗にて釜の蓋を切る時、湯氣のぼろ心にて、天井の蠅、落ちたるこなし。外記左衞門、思ひ入れ。

如何な事にか、天井にとまりし蠅の、羽を縮め落ちたるは。

ト羽箒にて捨てるこなし。此うち、以前の蝶二羽ながら、バッタリと落ちる。丹介、始終思ひ入れ、外記左衞門、釜に口を附け、キッと思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり

忘れても汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水……見ず知らずの中は猶さらに、油斷は愁ひの元なりと、心を盡す折も黄昏、小蝶の夢かまぼろしの、手爾波合はざるこの場の樣子。こりや滅多には呑まれぬわえ。

ト思ひ入れ。この時、下の松の木へ嘉兵衞、よぢ登り、内を窺ふ。

丹介、灯をともせ……ともせと云ふに。

丹介　ヘイ。

ト立ち上がり、燭臺に灯をともす。外記左衞門、思ひ入れあつて

外記　コリヤ丹介、この水は、其方夫婦の外

丹介　手は付けませぬ。ヘイ、毒なぞは、決してござりませぬ。

外記　さうであらう。併しどうやら。

トこなし。此うち、嘉兵衞、鐵砲にて外記左衞門を覘ふゆゑ、とまりし雀、啼いて飛び去る。これにて丹介、思はず振り返り、嘉兵衞を見て、ギックリ、燭臺を吹き消し、外記左衞門の肩へつかまり庇ふ心。嘉兵衞、火蓋の切れぬこなし。

コリヤ〳〵、丹介、なんと致す。

丹介　イエ、お草臥れと存じ、ちよつとお肩を。

外記　ナニ肩を……そりや忝ない。

丹介　ドレ、揉んで上げませう。

ト外記の肩を揉みにかゝる。この時、下の方へ月出る。

外記　オヽ、灯は消えても月の光り、これがほんの夜櫻。斯う揉みながら眺めるも、君のお庇ぢや。

ト嘉兵衛の影、外記左衛門の目先へ映る思ひ入れにて

丹介、あの松ヶ枝に動くは、ありやなんであらう。

ト丹介、ギックリ。

丹介　鳶。

外記　イヤ。

丹介　烏…へイ、大方、雀でござりませう。

トこれにて、嘉兵衛、頷きて下りる。

外記　ハヽア、雀か…雀と云へば、其方が在所は、慥か下野の雀の宮、あの雀の宮の謂れは、どういふ事でかあつたな。

丹介　これは旦那、あれを御存じござりませぬか。あれは雀長者の事でござります。

外記　雀長者とは。

丹介　ヘイ、昔あそこに、大きな長者がござりました。所が殊の外雀を愛しまして、參る雀に餌を與へてはごくみましたところが、家來の慾心にて旦那を殺し、身上を丸呑みにしようと、饅頭の中へ針の折れを、したゝか入れて食はせました。それで亭主が七轉八倒。その折また雀が一羽、これも轉げて苦しむ様子、其うち、又、一羽の雀が、青い草を啣はへて來て、苦しむ雀に喰せると、忽ち白い泡を吹いて、羽叩きをして飛んで行きましたを、不思議な事と、その草を見たら、韮でござりました。そこで亭主も韮を食ひ、早速に針を吐いて助かりました。それで祀つた雀の宮でござります。

外記　そりや又、どういふ心で。

丹介　これは又旦那様、鳥類が主を助けた恩を思つて。

外記　それで神に…成る程、併しながら、そんな雀は、人にもよもや、ナア丹介。

丹介　エ。

外記　鳥類ですらその如く、況んや人間、惜しいかな、末世に至らば人間も、恩の忘れ、お家の騒動、上を學べば下々まで、肌ゆるされぬ企みの底意。口には云へど心には、雀に劣るその根性。誠の人はないものだな。

ト丹介へかけて云ふ。この時、月隱れる。

丹介　ハア、月も又雲隱れ。暫時の休息と思ひの外、大きに遅なはつた。身は今日の様子、志摩方へ屆けて參る。

ト云ひながら、刀を差し、門口へ出る。

丹介　左やうなら、お向う屋敷へ。

外記　コリヤ烏…イヤ丹介、よう留守せいよ。

ト唄になり、外記左衛門、思ひ入れあつて向うへ入る。

嘉兵　毒の破れに氣を奪はれ、われが按摩で外記左衛門、打ち損じたれば、後追ひかけて。

　ト行きにかゝるを、丹介とめて

丹介　ア、モシ、親仁樣、その毒と知りながら、お叱りもなさらず、餘所事に御意見なされたお慈悲の旦那、どうしてお前に殺させられう。こればつかりは。

嘉兵　エ、、小自烈たい。殺さぬ時はおれが身の上。例へ今は外記左衛門、打ち損じても鶴喜代は遁がれぬ一命。

丹介　そりや又なんで。

嘉兵　證據と云ふは鶴喜代が、居間の四方に修法の木札、逆さに打つたる調伏の、奇特は即ちあの眼病、その法ゆゑに追ッつけ落命。

丹介　ヤ、、、。すりや最前のお詞とは、打つて變つたあなたのお心。

嘉兵　オ、、孫が不便と云つたも僞はり。おれが古主の仁木さまへ、一味をしたもこの身の出世。それだによつて。

丹介　そんなら慾に魂ひが入れ變つたのか情ない。さうとは知らず旦那樣へ……思ひ出しても勿體ない。

嘉兵　われが主が大事なら、おれも大事の御主人樣。それぢやによつて

丹介　イヤさうは。

　ト兩人揉み合ふうち、上手よりおとよ走り出で、そこにある丹介の脇差を取つて

とよ　南無阿彌陀佛。

　ト自害する。丹介愕り。

丹介　ヤ、、なんで其方が。

とよ　なんでとは、お二人樣、御恩に御恩を重ねし御主人如何に親や子の爲とて、毒を盛るとは勿體ない。お前と一つでない潔白。それゆゑわたしがこの自害。不便と思うて親仁樣。

嘉兵　オ、、わいらは死ぬとも勝手にせい。外記左衛門さへしまうて取れば、ヅッシリとした褒美の金。それが欲しさの大事の仕事。どうでもおれは外記左衛門を。

丹介　ア、モシ、現在娘があの苦しみ、それでもあなたは本心に。

嘉兵　オ、、くたばつたのは自業自得。邪魔立てせずと、そこ放せ。

丹介　イヤ、さう聞いては、猶やる事はなりませぬ。

嘉兵　エ、、役にも立たぬ。そこ放せ。

丹介　イヽヤ、ならぬ。

嘉兵　放せ。

丹介　ならぬ。

ト兩人揉み合ふうち、丹介力餘つて、鐵砲持ちたるまゝにて、ドンと尻居にゐる。嘉兵衞、それをと取りに行くはずみ、本鐵砲の音して、嘉兵衞、これに中り、門口にて血を吐き苦しむ。おとよは、白刃を拔き、落入らんと苦しむ。丹介、兩方を見てオロ／＼する。よき程に、兩方一時にポンと倒れて死ぬ。丹介呆れ、チッと下に、本釣り鐘。連翹チラ／＼と散つて來る。丹介、悄れ、やう／＼死骸を片付け、ハッと泣き落す。獨吟のかゝりになり、丹介、思ひ切つたるこなしにて、以前の風呂敷包みより、白木綿を出して、よろしくそこへ敷き、以前の上下を着て、兩肌を脱ぎ、脇差を拔き放し、腹切らうとして戰き、打捨て、手を組み考へ、外記左衞門の膳部を我が前へ直し、釜を取つて、右の湯を飯へかけ、正面向きに、丹介湯漬を喰ふ事、よろしく、ソロ／＼毒廻りしゆゑ、次第に苦しみ、いろいろあつて膳を摑み毀す。獨吟の切りになり、向うより外記左衞門、戻つて來る。抱子を懷へ入れ出る。後より中間一人、窺ひ出る。外記左衞門、門口へ來り窺ふ。この間に、中間、隱れる。丹介、思ひ入れあつて

丹介　アヽ、恐ろしい毒氣の廻り。勿體ない、この苦しみを旦那樣に。

外記　不便や汝、思ひ知つたか。

ト云ひながら内へ入る。

丹介　ヤヽ、旦那樣、あなたへ云ひ譯、親子三人。

外記　イヽヤ、娘は某が、歸る道にて怪しの曲者、追ひ詰められて捨て置く小兒、抱き取つて改むれは、守の内にこの臍の緒。こりやコレ其方が

ト抱子を見せる。

丹介　この丹介が一人の娘。

外記　身が手に入らば、心殘さず。

丹介　死ぬる今際の只一言、鶴喜代さまのお居間の四方、逆さに打ちたる木札の守。その奇特にてお命危ふく、證據と云ふは眼病の、次第に縮まる御身の大事。あなたは早くその札を。それを聞いたが少しの恩義。

外記　ヤヽヽヽ。猶豫ならざる館の呪詛。これより早く御殿へ駈けつけ。女房はどれに。上下々々。

丹介　女房も矢ッ張り。お間を缺けては。

トよろ〳〵しながら、脱いで置きし外記左衛門の上下を取つて、後より着せ、大小を渡す。

外記　然らばこれより

ト行きかゝる。この時、中間、窺ひ出て

中間　觀念。

ト切つてかゝるを押へ付ける。

丹介　アヽ、モシ、御無事でお早う。

外記　歸らぬうちに其方は。

丹介　歸らぬあの世へ。

外記　コリヤ、娘は育てる。

中間　なにを。

ト振りほどいて切り付けるを、刀を引ッたくり、ポンと切り倒す。其まゝ、花道へ行く。抱子しきりに泣く。これを聞いて丹介、スックリと立ち上がりて、門口まで行き、外記左衛門を見る。

外記　南無阿彌陀佛。

ト手を合せ、愁ひのこなし。揚げ幕にて

呼び　お夜詰め。

ト外記左衛門、氣を替へ、股立ちを取る。木の頭、丹介次第に落入る。これをキザミにて、拍子、幕。

ト幕の外、外記左衛門、思ひ入れあつて、向うへ一散に走り入る。早舞にてツナギ。引返す。

本舞臺、三間の間、高足の御殿。見附け金襖。前側、御簾巻き上げ、爰に、山中鹿之助、黒頭巾にて革葛籠を脊負ひ居るを、沖の井、千賀野、勿來、武隈、腰元にて詰めかけ居る。この見得、管絃バタ〳〵にて幕明く。

沖の　この館の大奥へ、忍び入る怪しの曲者。金銀衣服には目もくれず

千賀　我が君奪ひ、立退く曲者。

武隈　我れ〳〵見出す上からは

勿來　そこ一寸も動かせぬ。

沖の　サア、眞直ぐに

四人　白狀々々。

鹿之　如何にも、金銀に目もかけず、葛籠に入れし子寶は、館の主、鶴喜代どの、盗んで行くも家の爲。女童の知る事か。道押ッ開いて通しやアがれ。

沖の　謂はれぬ雜言。

四人　イデ、我れ〳〵が。

男之助を相撲にて演せし一例

文政十一年二月河原崎座所演

ト早舞になり、ちよつと立廻りのうち鹿之助の懐より手紙を落す。沖の井、これを取るうち、奥より鬼貫出て、鹿之助に切りつける。立廻りに、鬼貫一巻を落す。

沖の　ヤ、、すりや我が君の御爲と、忠義の武士の指圖により。

鹿之　それに、御安堵。女中方、

ト一巻を取上げ

これぞ正しく連判状。この場に於て

ト開かうとする。ドロ〳〵になり、大鼠出て、一巻を啣へ、切り穴へ飛び込む。

ヤ、、證據となるべき一巻を

四人　鼠が啣へて

鹿之　とても遁がれぬ鬼貫公。

沖の　サア、尋常に

皆々　白狀々々。

鬼貫　何を小癪な。

ト早舞になり、ちよつと立廻つて、鬼貫眞中に刀を擔ぎシヤンと見得。正面の御簾を下ろす。直ぐに好みの鳴り物、大ドロ〳〵にて、松ケ枝關之助照光、角力取の形、上下、股立ちにて、大小、白木の三方へ木札を載せ、右の手に鐵扇を張り上げ、鼠を踏まへたまゝ、舞臺眞中へセリ上がり、キッと見得。

關之　動きやアがるな、濡鼠め。いま我が君より名を賜はり、松ケ枝關之助照光と、改まつたる鳴神が、前髮だけに若君の、お伽仲間の餓鬼大將、御病氣祈りの歸りがけ見りやアお居間の側近く、イケ圖々しい畜生め、うぬも只のちい〳〵ぢやアあるめえ。この鐵扇を喰はぬうち、キリ〳〵一巻渡しやアがれ。

トどろ〳〵にて、いつもの通りあつて、鼠を打つ。鼠逃げて花道の切り穴へ消える。掛け煙硝パッと立ち、直ぐに仁木彈正セリ上がる。

曲者。

ト彈正、手裏劍を打つ。關之助、受けとめ

取逃がしたか。

ト手裏劍を持ちかへる。木の頭。

殘念な。

ト股立ちを取つて、キッと見得、大ドロ〳〵にて、拍子、幕。

ト幕の外、仁木彈正殘り、あざ笑ふ。出端になり、悠悠と向うへ入る。後打込み。

二番目

東山民部浪宅の場
足利問注所の場

役名　細川修理大夫勝元。島田重三郎。醫者、大場宗益。修驗者、奇妙院滿海。ます／＼坊主。願人、念願。荒物屋無理右衞門。同女房、おくま足利鶴喜代。一子、千松。若黨、茂佐八。角力、山中鹿之助。鳶の嘉藤太。大島倉右衞門。高縄穴五郎。古川傳藏。白坂左東太。土子泥之助。尤道理之助。非常外記左衞門。金谷金五郎實ハ渡邊民部同女房、小さん。仁木彈正左衞門直則。

本舞臺、三間の間、鼠壁、破れ唐紙を建てし押入れ上の方、一間の反古貼り障子の屋體、下に一つ竈、よき所に神棚、これに赤き紙を敷きたるさんだはら御幣。いつもの所に門口、この外に雜藏あり。爰に大場宗益、薬箱を抑へ、奇妙院滿海、法印、錫杖を持ち、祈念してゐる。願人の念願、半田にて竈の上へ土瓶を吊し、薬を煎じ、ます／＼坊主、二枚折りの屏風へ、地獄の繪を描きしを持ち、門口に立つてゐる。すべて、東山、願人長屋の體、四つ竹節にて幕明く。

滿海　とうまるはらんだばあさまや、ぢいさんさうだん。

ト錫杖を振る。

宗益　ハテ、騒々しい祈禱だ。

ます　半田、何を旨い物を煮るのだ。

念願　オヽ、ます／＼、いま歸つたか。降らないでよかつたな。

滿海　謹み敬つて申す……イヤ、爰の内の疱瘡神は、大名と見えて、横柄な事を云ふぜ。

ます　なんだ。爰の千松が疱瘡をするか。

念願　なにサ、里ツ子がよ。それはさうと、なぜおぬしやアそこにゐる。

ます　サア、醫者だの、法印だのとゐる所へ、持ち物が賽の河原で、あんまり縁起でもないからよ。

念願　それだが、もう、今日は笹湯だ。

ます　それは、ます／＼おめでたいな。

念願　そりやいゝが、薬を煎じるに炭は無し、薪は無し。

滿海　そんな事を云つていけるものか。根太板でも引ツ放

すがいゝ。
念願　さうやらかさう。
　ト竈の脇の根太板を剝がし、へし折つてこれを焚く。
宗益　成る程、こなた衆に家を貸しては、家主迷惑だ。
ます　ほんに、見附けると、大家の鼻アがやかましいぞえ。
念願　彼奴がやかましいは、當り前だものを。
滿海　それ〳〵、全體は三浦屋の遣り手で、表の荒物屋の
　女房になつたのだ。
宗益　遣り手ならむづかしい筈だが、また亭主も優しくは
ないぞえ。
ます　どうして〳〵。
　トこの時、いま剝がした根太より、犬一疋出て宗益が
　周圍をまごつく。
念願　ソレ〳〵、犬が出た〳〵。
皆々　この畜生め〳〵。
　ト追ひ廻す。犬は逃げて縁の下へ入る。
宗益　イヤ、怪しからぬ内もあるものだ。
滿海　道理でこの間から、子犬が啼くと思つたが、縁の下
　へ子を產んだな。
宗益　イヤ、子を產んだと云へば、其方のかみさまが、產

後に服ませた、あの藥禮はどうする。
滿海　どうも斯うも、引續いての不仕合せ。まだやらない
　と云つても、藥九層倍だ。きつい事はない。
宗益　イヤ、この人はとんでもない。そんなら、補ひに服
ませた、練り藥の一分貳朱でも、せめての事に。
滿海　それもどうして、いま爰に。
宗益　無いでは濟まぬ。是非とも爰で。
滿海　こいつは、とんだ目に遭ふわえ。
　ト云ひながら、側にある風呂敷包みを持つて逃げ出す
はずみ、包み解けて、中より、藁人形と白絹落ちる。
ます　ソレ〳〵、何か落ちた〳〵。
宗益　こりやアなんだ。褌だな〳〵。
滿海　馬鹿な事を。
宗益　なんでも構はない。これでも抵當に取つて置かう。
滿海　とんだ事を云ふ。そりやア一大事の。
宗益　ナニ大事だ。道理で箱の中へ入れて置いた。この褌
が欲しくば、一分貳朱持つて來さつし。
　ト白絹を懷へ入れる。
滿海　ムウ、仕方がない。
　ト思ひ入れ。

宗益　時に藥は。
念願　疾によくつて、火の次手だから、笹湯の湯も沸かして置きました。
宗益　それはお世話。何かと長屋の厄介だ。
ます　そんなら、おれもなんぞ手傳はう。
宗益　そこで法印、一分二朱、合點かえ……ドレ、愚老もなんぞ手傳つてやりませう。
ト四つ竹になり、宗益、神棚のさんだはらを持ち、念願、土瓶、ます／＼坊主は鍋を提げて、奥へ入る。滿海殘り
滿海　いま／＼しい所に醫者坊主め。なんぼ内幕でも、側への遠慮、調伏のあの絹を、ひよつと褌に締められては大變。なんでもこいつは一分二朱、早く工面をしにやアならない。
ト思案してゐる。てんつゝになり、向うより茂佐八、車曳の形、若い者、同じく、菰包みの乾物を、めいめい擔ぎ出て
若者　べらぼうにやかましいぢやないか。如何に將軍樣の御名代の山名さまだといつて、車まで留める事はない。
茂佐　さうよ。一人曳きなら御法度だから、留められる筈だが、いさもくさもあるものぢやない。
ト云ひながら、本舞臺へ來り
カウ喜八どん、おれが藏へ入るから、先へ車を持つて行つて下さい。
ト若い者、捨ぜりふにて、引返して向うへ入る。此うち、茂佐八、門口から
モシ／＼、お内に荒物屋の鍵がござりまするかえ。
滿海　ナニ鍵だ。
トあたりを見て
大方、これだらう。
トそこに掛けてある鍵を取つて、茂佐八と顔見合せ
ヤ、こんたは茂佐八ぢやねえか。
茂佐　オヽ、お前は奇妙院さんか。開きねえ。お前が盜んだあの天國、追ツ駈けられて仕方なし、俵の中へ隱したが、サア、その俵が知れないから、そこで俵を持ち扱ふ爲に、この態だ。手にさへ入つたら、重三郎どのへ渡して、勘當の詫びを賴む積りだ。
滿海　そんな事とは知らず、思ひがけない所で逢ひました幸ひちつと話しもあれば。
茂佐　マア、こいつを藏へ入れてしまはう。

ト鍵を受取り、藏の戸を明け、持つて來た乾物を入れ
ながら
爰にも二三俵、なんだか俵があるが。
ト鍵を滿海に渡す。滿海受取り、元の所へ掛けて置く
待て〳〵。爰にどうやら。
ト藏より俵一俵擔ぎ出し
オヽ、心覺えのこの書出し。これだ〳〵。
ト喜び、俵へ手を差し込む。中より三建目に隱したる
天國を引き出す。

滿海　あつたか〳〵。
茂佐　しめた〳〵。まめ息災に小豆の中。
滿海　でも、よくどこへも渡らずに。
茂佐　とんだ所で巡り逢つた。ドレ俵を。
ト藏へ入れようとする。
滿海　アヽ、コレ〳〵、そのぬけ殼をくれないか、と云ふ
譯は、急に一分二朱なけりやならないによつて
茂佐　遣らないで、おれが物ぢやなし、豆でもよくば、も
う一俵出してやらうか。
滿海　そんなに貰つても仕方がない。
茂佐　おらア、これから御名代のお供で、重三郎どのも來
てござらうから、この一腰を。
滿海　そんなら、それを重三どのに。
茂佐　こなさんも、その俵を見附からないうち。
ト藏を締め、錠を卸ろす。
滿海　茂佐八どん、大分小豆が溢れたぞえ。
茂佐　ナニ、後を構ふものか。
トまた四つ竹節になり、茂佐八、一腰を持ち、滿海、
俵を擔ぎ、向うへ入ると障子の內にて
小さ　これはモウ、有り難うござります。
ト矢張りこの鳴り物にて、障子の內より、宗益先に、
小さん、浪人女房の形にて、以前のさんだはらを持ち
出て來り
イエ、モウ、あなたのお庇で、先づマア、してとりまし
てござります。
宗益　サア、なんぼ筋がようても、小兒といふものは、兎
角積合ひが出たがりますが、先づ〳〵笹湯が濟めば、御
安堵と申すもの。
小さ　左やうでござります。シタガ、あの眼は、ひよつと
疱瘡の入りましたのではござりませぬか。
宗益　イヤ〳〵、あれは疱瘡の所爲ではござらぬが、一體

むづかしい眼でござるゆゑ、この間、金五郎どのへもお話し致して置いたが、コレ

ト薬箱より、眞珠の包みを出し

この眞珠を、男女に限らず、生血にて用ひさへすれば、忽ち平癒すれど、その眞珠の價が、

小さ　モシ〳〵、さうして、どの位いたすものでござります。

宗益　五十兩サ。

小さ　エヽ。

ト思ひ入れ。

宗益　高いものな。

ト矢張り四つ竹節にて、向うより鹿之助、前幕の角力取にて出て來り、門口に窺ふ。

小さ　忽ち癒る眼病の、薬はあつても五十兩、どう思うて見ても、身貧な中で

宗益　お内儀、こなたは元、島原の額傾屋で、小さんと云つた藝子。なんと物は相談ぢやが、愚老が女房にならつしやらぬか。さうすれば、この薬は直ぐに進ぜるが、どうでござる〳〵。

小さ　御深切なそのお詞。それが誠のお心なら、マア、とつくりと思案して、

宗益　思案も何もいつた事か。幸ひ御亭主の留守。ちよつと爰で。

小さ　アヽ、モシ、そんな。

宗益　こりやア、堪らなくなつて來た。

ト小さんに抱きつく。この時、鹿之助、ズツと入つて宗益を投げる。

小さ　オヽ、よい所へ兄さん。

宗益　ヤイ〳〵、前髪め、なんで愚老を投げたのぢや。

鹿之　オヽ、投げてもよい。亭主のあるこの小さんと、間男したゆゑ。

小さ　モシ兄さん、どうしてわたしが。

鹿之　ア、コレ……イヤ〳〵、云ひ譯は聞かない。ヤイ、醫者坊主め、うぬ、重ねて置いて四つにする。さう思つてうしやアがれ。

宗益　コレ〳〵、それは亭主の云ふ事だ。その上、まだ間男の手付けさへ取らない。

鹿之　やかましい。間男もせぬものが、なぜ小さんの帶を解かした。大方、小さんも合點で、帶紐を解いたのか。さうであらうな〳〵。

小さ　アイ、成る程、さうでござんす。否ぢやといふものを無理に捕へてな。
宗益　ア、コレ、滅多な事を云ふまいぞ。おいらは何も、知らぬ〳〵。
鹿之　サア、藪醫者め、そこへ直れ。
宗益　ア、コレ〳〵、この間男、買ふ〳〵。
鹿之　ナニ、間男を買ふとは。
宗益　オ、お定まりの七兩二分で買ふ。
鹿之　どうして〳〵、そんな廉い買ひやうでは賣られぬ。矢ッ張り四つに。
小さ　わたしは疾から。
宗益　オッと、七兩二分で廉くば、値上げだ〳〵。
鹿之　オ、身ぐるみ脫いで、それが首代。
宗益　そりや又、あんまり。
鹿之　否なら矢ッ張り。
宗益　エ、氣の短かい。
ト帶を解いて、裸になる。この時、白絹と眞珠落ちる
小さ　こりや最前の。
ト取上げる。
宗益　それは大事の。
鹿之　これで首代、算用濟みだ。
宗益　それではあんまり。
鹿之　命冥加なお醫者だな。
宗益　ハア、。
ト泣き落す。奥より念願、ます〳〵坊主出て
兩人　なんだ〳〵。
宗益　コレ、聞いてくりやれ。爰の內儀に抱きついたばかりの所へ、あの若衆が來て、この通りだ。
鹿之　それで濟まずば首をもがうか。
兩人　なにサ、濟みますよ〳〵。
宗益　裸にされては濟まない〳〵。
兩人　よしサ〳〵。マア、此方へ來なさい。
ト宗益を表へ連れて出る。
宗益　コレ、こなた衆は、あつちへ行つちやア、濟みます濟みます。おれが方へ來ては、よしサ〳〵と、どういふ理窟だ。
兩人　ハテ、あつちは濟みます。こつちはよしサ、兩方合せて
ト宗益、思ひ入れあつて
宗益　すみ――よし――成る程、住吉さまの。

兩人　岸の姫まつ、やんれ、おめでたや。
宗益　やアここせ、よんやな。
三人　ありやりや、これわいな、このなんでもせ。
ト住吉になり、三人よろしく向うへ入ると、合ひ方に
なり、鹿之助あと見送り
鹿之　ハヽヽ、いかい白痴サ。
小さ　身貧とは云ひながら、人の物をば騙りも同然。
鹿之　ハテ、それも矢ッ張りお主へ忠義。最前來かゝる門
口で、樣子を聞いた眞珠の事、さぞかしお主が心ではと
思つたゆゑに無理無體、不義に落したあの宗益。これと
いふのもお屋敷は、惡人どもと若君を、密かに奪ひこの
家で、御養育させ申すのも、落ちるところは金五郎どの
へ、忠義を立たせ二つには、元の武士だと思ふから、無
くてならないその眞珠。この雜物も質入れして、艱苦の
中で御主人を、はごくみ申す少しは氣助け。
小さ　嬉しうござんす。今の夫の身の上では、手に入り兼
ねるこの眞珠。
鹿之　それは格別、今日問注所で、あの仁木と外記左衞門
さまと對決との事。おれはこれからあのあたりを、うろ
つき廻つて、その樣子を。

小さ　アイ／＼、そんならさうして下さんせ。わたしが爲
にも男御の。
鹿之　そりや合點、氣遣ひしやんな。
小さ　そんなら兄さん。
鹿之　ドレ、行つて來ようか。
ト唄になり、鹿之助、思ひ入れあつて、向うへ入る。
小さん、思ひ入れあつて
小さ　お主の爲には切り取りも武士の習ひ、身慾にすると
いふでもなし。この眞珠も矢ッ張り神の……ほんに禮湯
のめでたさに、その神で思ひ出した。天德寺の繕ひをし
て置かねばならぬ。なんぞ反古が。
ト傍へにある針箱の内より、四建目に千松が拾ひし紙
入れを出して
この中に、慥か厚い紙が。
ト宗益が預けし一札を出して
なんの書付けやら知らねど、これで
ト茶碗にある糊を持つて來り
ホヽヽ、つぎあてがいではなうて、どこの國に。ドレ
紙あてがひをして置きませうか。
ト唄になり、今の書き物にて天德寺を繕ひ居る。此う

ち、向うより金谷金五郎、深編笠、浪人の形、古鼓を
持ち、千松、四建目の形にて一緒に出て來る。直ぐに
舞臺へ來り

千　母樣、いま戻りました。

小さ　オヽ千松、戻りやつたか。お前もさぞお草臥れなさんしたでござんせう。

トこれにて金五郎、千松を連れ、内へ入る。

コレ千松、草臥れはせぬかや。

千松　イエ／＼、草臥れはせぬけれど、歸る道々も、ありや乞食の子ぢや、物貰ひの子ぢやと、弄られるのが、わしや口惜しい。

小さ　そんなら、アノ道々も……尤もぢや／＼わいなう。

金五　ハヽヽヽ成る程、女童と一口に云ふ筈ぢや。いま此やうに浪人したは、お家の重寶紛失の越度。寶さへ詮議し出だせば、忽ち元の渡邊民部。アヽ未練千萬な。コリヤ悴、いま云ふ通りぢや。その時は笑うた奴めを皆首切つてやるが、さうしたならば、嬉しいか／＼。

千松　アイ／＼、さうすると、嬉しい／＼。

金五　して、若君樣の御機嫌は如何ぢや。

小さ　アイ、今日は大きに御機嫌がようて、笹湯も濟んだりや、マア、安堵しなさんせ。

金五　それは重疊な事ぢや。

小さ　モシ／＼、まだ喜ぶ事がござんす。ソレ、こりやお前にも宗録が話したとある、眼病の

ト以前の包みを見せる。

金　アノ、五十兩といふ價の眞珠。それがどうして。

小さ　サア、それには樣子がござんすが、そりや兄さんに逢はしやんして。

金五　さういふ事なら、兄の山中どのに聞かう。マア、忝ない／＼。其方、しつかり。

ト小さんへ渡す。此うち、千松、あたりにある以前の紙入れを、見物へ見せて、中より印形を出し、持ち遊びにしてゐる。この時、障子の内にて

鶴喜　民部はどこぢや。千松はまだかや。

金五　アレ、若君の

小さ　コレ、行儀ようしませうぞ。

ト唄になり、反古貼り障子を開くと、この内に足利鶴喜代、若君の拵らへ、赤き衣裳を着て、木綿蒲團の上に座す。あたりに達磨、太鼓など取散らしあり、金五郎、思ひ入れあつて

金五　先づ以て今日は、笹湯のお祝儀、めでたう存じまする。
鶴喜　それでも何も見えねど、馬に乘つて遊びたい。
金五　ハツ、畏まり奉る。併し、まだ御病中でござりますれば、お馬の儀は、御延引がよろしうござりませう。
鶴喜　そんなら。早く、飯が食べたい。
金五　ハツ〳〵。コリヤ女房ども、早う御膳の。
小さ　サア、その御膳が。
金五　オヽ、その米は、爰にある〳〵。
　ト紙包みを出し
　コレ〳〵これで。
　ト小さん、盆へ打明けて
小さ　モシ、こりや黒米ぢやわいなア。
金五　さうか〳〵……待て〳〵。それを白くする仕樣がある。流し元に德利があらう。それを持つて來やれ。
小さ　アイ〳〵。
　ト德利を持つて來る。
金五　爰らに太鼓の
　トそこにある太鼓の撥を取上げる。
小さ　ドレ、わたしは其うち、湯を沸かして

　ト金五郎、德利の米を搗きながら
金五　ア、お家にかゝる禍ひなくば、五十四郡の若君の、今日は笹湯の御祝儀とて定めし御殿のお料理も、七五三ぢやの、高盛りのと
小さ　それに引替へ、御膳にも、小豆一粒、生臭もの。
金五　おかゝも怪我に情ない
小さ　これが足利御連枝たる
金五　賴兼公のお世繼と
小さ　備はり給ふ御果報も
金五　拙なき夫婦が
小さ　笹湯の學び
金五　ほんに思へば世の中に
小さ　實に盛衰は
両人　あるものぢやなア。
　ト思ひ入れ。これより獨吟になり、両人、飯焚きの模樣よろしくある。
鶴喜　飯はどうぢや。
金五　ヘイ〳〵、こりや御膳番、急ぎませうぞ……其うちお待遠でもあらう爲に、いつも唄ふ雀の唄を。
鶴喜　おれも唄ふわいやい。

金五　それはよろしうござりませう。サア〳〵、お唄ひなされませい。

ト兩人、手を打つて

鶴千　こちの裏のちさの木に〳〵、雀が三疋とまつたとまつた。

鶴喜　飯はまだかや。

小さ　ハイ〳〵まだ。アレ、お數寄屋で……一羽の雀が云ふ事にや。

ト紛らす。

金五　併し大方、もうよいであらう。

ト德利の米を盆へ明ける。小さん、これを取つて桶へ入れ、かくす。

金五　以前は家老の渡邊民部も、米搗きとまで落ちぶれた。ハヽヽ、けれう、その時馴染んだ藝者の小さんなればこそ、ほんのお屋敷者の妻なぞならば、この節の間には合ふまい。併し、斯く落ちぶれても、月にも花にも、たゞ樂しみは其方ばかりぢや。

ト後よりヂツト抱きつく。

小さ　モシ、晝の中、なんのこつちやぞいなア。

金五　でも、今の身は、これより外に樂しみは。

トこなし。

小さ　アレ、およしなされませ。惡い事ばかり。

金五　ムウ、こりや口では云うても、おれを嫌ふかな。

小さ　エ、モウ、憎らしい。

金五　可愛らしい。

小さ　なんぢやぞいなア。

ト抱きつく。千松見て居て

千松　お父さんとようよ、お母さんとようよ。

金小　コリヤ〳〵、滅多な事を。

ト思ひ入れ。此うち緣の下より、犬一疋出て、桶の米を喰ひにかゝる。小さん見附けて

小さ　アレ、大事の米を。シツ〳〵。

ト追ふ。これにて犬は、緣の下へ入ると、米をゆすいで、湯の中へ入れる。

鶴喜　飯はまだかや。

金五　只今〳〵。其やうにおせたけ遊ばずと、御家來中が迷惑いたす。

ト此うち、小さん、門口へ出て

小さ　どこから犬めが

ト探すとて、最前溢れし小豆を見附け

心ばかりに。

ト小豆を拾ふ。千松は以前の印形を啣へたまゝ居眠つてゐる。

金五　オヽ、草臥れ居つたの、眠り居る。コリヤ、千松……コリヤ千松。

ト脊中を叩くはずみ、千松、印形を呑み込み、ギリギリ苦しむ。

どうした〳〵……小さん〳〵。

小さ　アイ〳〵。

ト云ひながら、内へ入り、この體を見て驚ろき、持つてゐる小豆もそこへ投げ散らし、水を含み來て呑ませる。これにて千松、やう〳〵納まる。

どうぢや、納まつたか〳〵。

金五　よいか〳〵……ソレ〳〵、お飯が。

ト小さん、うろたへ、鍋の下を引きながら

小さ　なんでも啣へるが癖ぢやによつて、ちつと氣を附けや……サア〳〵、御膳も出來ました。いつもの通り、にぎ〳〵して上げませう。

金五　それがよい〳〵。シタガ、コレ、おめでたに、小豆のでなうて。

小さ　イエ〳〵、小豆もお祝儀に、わざとこのお盆の脇へ

ト云ひながら、むすびを握る。

金五　さうであつたか〳〵。

小さ　サア〳〵千松、鬼役しや。

ト二人の前へ盆を置き、千松、取つて見て

千松　モシ、父様、私しどもの御膳は、なぜ黒うござりまする。

鶴喜　黒い飯は、おりや食べぬぞ。

金五　ア、イヤ〳〵、それは黒いのではござりませぬ。今日はお徙湯ゆゑ、御祝儀の赤の御飯でござりまする。

千松　そんなら、いつも黒いのは。

小さ　矢ッ張り赤の御膳ぢやわいの。

鶴喜　赤の飯かや。嬉しい〳〵。

トまた獨吟になり、兩人むすびを喰ふ。金五郎、小さん、こなし。此うち、獨吟切れる。鶴喜代、食べしまひ

御膳を引けやい。

小さ　ハイ〳〵、畏まりました。

ト四つ竹節になり、二人の盆を引いて、流し元にて洗ふと、向うよりおくま、三建目の役、女房の拵らへに

なり、達磨を持つて出て來り、直ぐに舞臺へ來り

くま　ハイ〱、御免なさりませ。

ト內へ入る。

小さ　オヽ、これはマア〱、ようこそ。

金五　お家主のお內方か。サア〱、こちらへ。

くま　イヤ、もうお構ひなされますな。さうして聞けば內方に、疱瘡子があるとやら、こりやモウ有りふれた物ぢやが、ほんの見舞ひの印ばかりに。

ト達磨をそこへ出す。

金五　これは〱、有り難うござります。

小さ　モシ、笹湯がすむと、直ぐに神樣を送るものぢやと聞きましたが、ちよつとお送り申して來ようかいなア。

金五　さうしやれ〱。

千松　小母樣、わしが內は赤の御膳ぢや。

くま　オヽ、そりやその筈、今日は笹湯ぢやわいの。

千松　イヤ、毎日赤の御膳ぢや。

くま　なんぢや、毎日……、イヤ、赤の御膳と云へば、藏から小豆を出さねばならぬ。お世話ながら、その鍵を。

小さ　アイ〱。

ト鶴喜代を負ひ、以前のさんだはらを持ちながら、鍵を取つておくまへ渡す。

くま　こりやモウ、毎度お世話樣でござりまする。

小さ　なんの、大事ござりませぬ……モシ、そんならわたしや、このお子連れて神樣を。

金五　ちよつと送つて來るがよい。

小さ　左やうならおかみさま。

くま　イエ〱、わたしも。

金五　サア千松。

小さ　ドレ、お送り申して來ようか。

ト唄になり、小さんは向うへ、金五郎、千松障子の內へ、おくまは鍵を持ち、表へ出て

くま　あの丁稚め、どこへ遣つても彼奴が居らぬと、男の眞似までせねばならぬ。これより遣り手の方が遙かましぢや。

ト四つ竹節になり、向うより無理右衛門、以前の役、前垂掛けにて出て來り

無理　これ〱婆アどの、何をするのだ。

ト此うち、おくま、やう〱錠を明け

くま　サア、店に小豆が切れたゆゑ、出しに來ました。

無理　ドレ〱、手傳うてやらう。

ト兩人して藏の内へ入り

兩人　ヤア、無いワ〳〵。

　ト捨ぜりふ云ひ〳〵出る。

無理　なんでも豆と小豆を入れて置いたに違ひないが、ほんに油斷も盜もなるものぢやない。

くま　コレ、こちの人、知れた〳〵。この盜人は、鍵を預けて置く妾の浪人者。

無理　オヽ、さうぢや。

くま　妾の門に小豆の溢れてゐるといひ、餓鬼めが毎日赤の飯ぢやと吐かしたからは、てつきり彼奴に違ひはない。殊に里子ぢやといふ抱猪子は、慥かに鶴喜代、それを詮議し、褒美の金。

無理　そいつはえらいワ。

兩人　サア、盜人ぢや〳〵。

　ト内へ入る。奥より金五郎、千松出て來り

金五　オヽ、こりやお家主ぢやな。何を大きな聲で。

無理　云はにやならぬ〳〵。藏の中の小豆が一俵無いによつて。

くま　オヽ、鍵が預けてあるからは、泥坊に違ひない。

金五　默らう。尾羽打枯らせど身も侍ひ、小豆俵を何にせう。それとも外になんぞ證據が。

くま　オヽ、外に慥かな證據といふは……コレ〳〵千松、よい子ぢやの。コレ、こちの内の飯は白いのや。

千松　イエ〳〵、なんでも飯は赤いのぢや。

くま　それ見たか〳〵……小豆の盜人、證據は千松。

兩人　なんと違ひはあるまいがな。

　ト金五郎、千松を障子の内へ押入れ、こなしあつて

金五　成る程、悴めが口と云ひ、鍵は元より預かりあれば、御夫婦ともに某が、盜みしものと思はるゝ、その間違ひも浪々の、身貧に黒き飯の色、何ゆゑ斯くと子心に、問ふをくろめる赤の飯、現在親が僞はりを、教ゆる事も誠と思ひ云ひ觸らし、折に俵の紛失に、必定我れを盜賊とは、道理至極と存ずるゆゑ、餘儀なう身の恥あらはしてお話し申すがこの場の潔白。これで疑ひお晴らし下され

くま　イヽエ、晴らしますまい。藏の中にあるものが、錠も明けずに出やうかいの。

無理　その錠明ける藏の鍵は、妾の内に預けてあるぞえ。

くま　頭隱して尻とやら、妾らに小豆があつからは

無理　これでも盜まぬ證據があるか。

金五　サア。

兩人　サア〳〵〳〵……なんと、云ひ譯あるまいがな。
　トきつと云ふ。
金五　ホイ。
　ト當惑のこなし。この時向うにて
茂佐　エヽ、びくしやくせずと、うしやアがれ。
　ト唄になり、向うより嶋田重三郎、剃立て、絆纏、股引、大小にて、後より茂佐八、侍ひの形にて小さんを引立て出て來り
重三　して、女が住所は。
茂佐　慥か向うの。
重三　取逃がすな。
　トつか〳〵舞臺へ來り
主は居るか。
　トずつと內へ入る。皆々驚ろく。
小さ　モシ、こちの人。
金五　ヤ、女房か。こりや、どういふ仔細で
　ト重三郎を見て
ヤヽ、其許は。
重三　元は朋友島田重三、今は執權宗全公の身內、苗字も下され山名重三。渡邊民部、久しうて逢つたな。

金五　ムウ、すりや、山名重三どのとな。
くま　コレ、そんならわしが。
　ト重三郎へ思ひ入れ。
無理　コリヤ、それを爰では。
　ト押へる。
重三　思ひがけなき渡邊民部。すりや、この抱瘡子、察するところ
金五　イヤ、その小兒は外々より、里に取つたる
重三　里に取らうがこの家の餓鬼。今日、等持院へ室町どのゝ御名代、その介添は勝元どのと山名宗全。すりや今日一日は武將同然。然るにそのお供先を横切りなしたこの悴。即座に切り捨つべきながら、親にも一言右の云ひ譯、申し聞かせて成敗なさんと、それゆゑ宿まで引かせて來た。サア、覺悟極めて、それへ出ろ。
金五　ヤヽ、すりや御名代たるお供先……ヤイ〳〵小さんそちや又その時。
小さ　サア、神詣りして歸るさの、外珍らしくわたしが脊、折に美々しき御同勢、片寄り居る間もあちこちと、お目の惡いに爪づいて、思はずこけしお供の內、ハッとあわてゝ抱きかゝへ、通りし粗相、幾重にも、お詫び申せど

聞分けなう、無證の手籠めに斯うした仕儀。
金五　ムウ、すりや求めざるほんの過ち。ましてや小兒、殊さら眼病。
重三　默れ浪人。例へ目かいは見えずとて、盗人しても大事ないか。仁の加へて其まゝに、助け置かば執權の、威勢が衰へ、掟が濟まぬ。キリ／＼餓鬼めをそれへ出せ。
金五　イヤ、さう御意あれば此方も、供先警固の作法を糺し、その上にては兎も角も。浪人しても武士は武士。
無理　コレ／＼、その侍ひなら、藏の小豆を盗んでも大事ないか。
トこれを聞いて
茂佐　ナニ、藏の小豆を。
ト無理右衛門、茂佐八を見て
無理　オヽ、さういふは先刻まで、車を曳いた茂佐八どの
茂佐　サア、急に旦那の御家來と、形も變つた奴の茂佐八
トおくま、この時そこにある以前の紙入れを取上げ
くま　コレ／＼、この紙入れは無理右衛門どの、こりや、こなさんの。
ト無理右衛門に渡す。
小さ　イエ、そりや千松が。
ト無理右衛門、中を改め
無理　そんなら、餓鬼めも泥坊するな。
金五　すりや、千松が拾うたる、その紙入れの中の品。不足せしゆゑ、これも又。
小さ　重なる難儀、こちの人。
くま　親子は遁がれぬ盗人だぞ。
ト重三郎、金五郎を引きつけ
重三　ヤイ、爰なうつけ者め。酒色に溺れ大切な、家の重寶失つて、浪人の名は金谷金五郎。如何に落ちぶれたればとて、町人風情の口の端に、かく淺ましい振舞ひは、賴兼どのまで恥辱となる。そこへ心の附かざるか。見下げ果てた性根だな。
ト思ひ入れ。金五郎、こなしあつて
金五　云ひ解く詞はありながら、證據なきゆゑ無念にも…サ、それを貴殿の今の御意見。その御深切の心に甘へ、何卒、親子が犯したる、始末も無難の御計らひ、偏へにお賴み申す。
重三　イヤ、その計らひ罷り成らぬ…と云ふところだが聞けば里子の餘慶にて、露の命を凌ぐと其許の、云はぬばかりの餘儀ない賴み。もどかぬ思案は、ハテ何をがな

ト合ひ方になり、袂より水引を掛けし紙包みの菓子を出して、また懐より小判を十兩出し、二品をよき所へ並べ

今日、御法會に有り難くも、武將よりして我れ〳〵に、お料理下し置かれし上、頂戴いたせしこのお菓子。それに並べて小判十兩、子供心に何れを取るや。サ、渡邊氏氣儘に取らせて見さつしやい。

金五　すりや、並べたる二品の

小さ　金とお菓子の其うちで

茂佐　こりや、どちらでも。

鶴喜　イヤ、おりやそのお菓子。

小さ　コレ。

ト留める。

重三　菓子なら子供と後日の云ひ譯。金なら助けぬ餓鬼めが命……どちらなりとも早く取れ。

トこの時、緣の下より小犬出て、有り合ふ菓子を食ふ小さん見て

小さ　アレ、犬めがお菓子を。

ト追ひ退けうとするうち、犬、踠き苦しむ。

茂佐　南無三。

ト菓子を取りに來るを、皆々よろしく思ひ入れ。重三郎、矢庭に小犬を捕へ、小柄にてグッと貫く。鶴喜代、小判を取る。金五郎小さん、驚ろく思ひ入れ。

重三　夫婦があせるに引替へて、痩せ貧乏にかぶれた餓鬼、金を取つたは定まる命。菓子を穢した小犬が手本だ。

ト持ちたる小犬を投げ出す。

金五　御厚志空しく、斯くなる上は、とても遁がれぬこの場の仕儀。是非に及ばず、性根を据ゑて……千松々々、早う來い。

ト奧にて

千松　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、障子の内より千松出て

父様、御用でござりますか。

ト金五郎、思ひ入れあつて

金五　コリヤ、義に依つて命を捨てるは、侍ひの習ひぢやと、常々申し聞かせしを、そちや忘れは致すまいな。

千松　アイ、よう覺えて居りまする。

金五　サア、存分に。

ト金五郎頷き、千松を重三郎の前へ連れて來て

重三　どうしたと。

初演の絵番附

金五　ト思ひ入れ。小さん、思ひ入れ。
天下の掟、切り捨ても、室町どのゝ御名代、もだし難なく此方も、小兒の名代さしつけし、小兒は即ち拙者が忰。

小さ　エヽ。
ト悄り。

金五　即ち拙者が覺悟いたして、突き出すからは一言一句、外より異論ござらぬ忰。

小さ　そんならあの子を……サ、義理ゆゑに捨てるが常の習ひとは、諦らめながら、これがマア。
ト立ちかゝるを

金五　コリヤ……分けて云はねど恩愛に、切るに切られぬ義理の子に、かゝる難儀はあるべき事。この場に及んで取亂すな……サ、重三どの、お聞きの通り、盗賊の證據となりし、紙入れも小豆も、自づと正體を、分けるはこの場で彼れが腹、あばくは山名重三どの。さすれば掟の切捨ても、相立つ道理、某へ、町人どもが疑ひの、盗みのしるし一粒でも、有るや無きやの念晴らし。もし無き時は云ひかけの忰が一命、犬死にやさゝぬ。二人の衆、性根を定めて挨拶さつしやい。

くま　エヽ、なんの、高の知れた痩せ浪人、コレ、さう云ふがほんの事なら

無理　オヽ、さうぢや／＼。首を遣るわい。しかも二つ並べて。

金五　コリヤ千松、そちや御主人……サア、主人にはあらねども、里子の代り、死なねばならぬが、見事死ぬかよ

千松　アイ、死にまする。侍ひの子ぢやに依つて、立派に死んで見せませう。

小さ　その健氣なほど猶の事、助けたうても助からぬ、侍ひの子を産んで、泣きも泣かれぬ悲しさは、マアどのやうであらうぞいなア。
ト思ひ入れ。重三郎、この體を見て

重三　イカサマ、哀れなこの場の仕儀。餘所に見るのも何とやら、と助けもしさうな所をば、助けぬが又役目の表。首ぶち落すを頼みに任せ、腹をあばくが渡邊民部、後で後悔おしやるな。
ト此うち、鶴喜代、手遊びを持つてゐて

鶴喜　ヤイ、いつもの謠を謡うて聞かせい。

金五　これは又、時も時、なんぼ御頑是ないとても。

小さ　この場の樣子、ちつとはマア。

鶴喜　イヤ、謡はねば、聞かぬ〳〵。
皆々　此奴は餘ッぽど手こずりものだ。
重三　ムウ、心を付けるに物云ひ振舞ひ、氣高き樣子は初
めより、思ふに違はぬ。
ト思ひ入れ。
金五　アイヤ、今のやんちやも氣高きも、神の業……心な
らずも曲舞の
小さ　其うちわたしや一筋に、お主……と親へ孝行な、あ
の子の未來の助かるやう。
金五　彌陀の淨土の西方へ
小さ　導き給へ、地藏尊。
ト有り合ふ地獄極樂の屏風を千松が後へ立てる。
重三　サア、キリ〳〵と用意をしやれ。
トこれより地藏經になり、金五郎、有り合ふ繩にて千
松が兩手を縛り、宗益が落せし白絹にて猿轡をかける。
小さんは柄の付いたる鈴を鶴喜代が側へ持ち行き、和
讃に合せ、打つて見せ、金五郎が體を見て、其まゝ驅
け寄る。金五郎、押し隔て、腮にて思ひ入れ。小さん
は泣く〳〵以前の天德寺を持ち來り、敷き、金五郎、
その上へ千松を寢かす。千松、眞中へ居直る。これま
でに地藏經切れる。
金五　健氣に見ゆれど、まだなんの、辨まへもなき幼な兒
の、一重積んでは父戀し
小さ　母戀しとて只一人、暗い闇路をウロ〳〵と
重三　迷ふが不便と思ふなら、あの里子こそ鶴喜代と、明
かして母共に渡したら、餓鬼が命は助けてくれるワ
金五　默り召されい。斯く成り果てゝも渡邊民部、悴に主
人を替へやうか。
重三　さう云や直ぐに修羅道の、血汐は眼前、餓鬼めが臓
腑。
小さ　みす〳〵それを目の前で。
重三　阿鼻焦熱の血煙り立て。
ト千松へ立ちかゝる。
鶴喜　早う謡へやい。
金五　ハツ。
ト以前の鼓を取つて
はや修羅道の關の聲、矢叫びの音震動せり。
トこの謡のうち、よきキッカケに重三郎、千松が腹へ
差添を突き立てる。金五郎、ギヨッとしながら、また
謡にかゝる。小さん、ハツと泣かうとして、手拭を噛

みしめて、こなし。

重三　もがくワ〳〵。腹をあばけど虫の息、まだびく〳〵と。

小さ　見まいと思へど

金五　コレ……寄せ手と見えしは群れいる鷗、鬨の聲と聞えしは、浦風なりけり高松の、朝嵐とぞなりにける。

ト納まる。此うち重三郎、こなしあつて

重三　如何にや渡邊、なか〳〵健氣なくたばりやう。親に増つた餓鬼めが臓腑、武士の情に賞翫させる。精進ならずと味はつて、親子のよしみだ、せめての事、念佛なりと唱へてやりやれサ。

金五　死んでも後へ、忠義を盡す、悴が魂ひ。ソレ女房

ト小さん心附き、手早く有り合ふ鉢へこれを受けとめ

小さ　思はずこれも千松が

ト以前の眞珠をこの中へ入れて

モシッ

ト直ぐに鶴喜代に服ませる。此うち、重三郎、猿轡の白絹を取り、白刃を拭ひながら

重三　成敗濟めば夫婦の者、勝手次第に。

トおくま、千松の死骸を見て

くま　さうして、これぞと差當る、小豆はなくて、こりや黑米。

無理　それぢやア此方が間違ひか。

三人　オヤ〳〵〳〵。

ト氣味惡きこなし。金五郎、重三郎が血を拭ひし白絹に文字現はれしを見て、思はず取上げ

金五　ヤ、こりや調伏の

重三　ヤ。

ト手をかけるを、金五郎、ちやつと持ちかへ、重三郎が手を締め上げ

金五　イヤ、この絹より悴が屍。

ト腹より、以前の印を出し

正しくこれぞ。

重三　ナニ、これが。

ト思ひ入れ。金五郎、絹と一緒に懷中して

金五　サア、あばきし腹内、町人ども、とつくりと檢分しやれ。

く無　ヤア、。

ト慄へ出す。この時、鶴喜代、あたりを見て

鶴喜　コレ民部、なぜ屋敷が違うたやい。

ト小さん駈けより
小さ　ヤア〳〵、そんならあなたは……モシ、お目が見える
　わいな〳〵。
金五　エヽ、有り難い〳〵……　お目が見えれば、憚りなき
　お家のお世嗣、鶴喜代君。
く無　さてこそ餓鬼めが。
茂佐　鶴喜代ならば。
　ト立ちかゝるを金五郎、引きのける。この間に小さん
　鶴喜代を抱き、障子の内へ入る。おくま、無理右衛門
　それとかゝるを
金五　無禮な奴等の
　ト重三郎、ムウととめて
　下がり居らう。
重三　今の今まで鶴喜代が、見えない眼が、ド、どうして。
金五　さればよ。先つ頃より預かりの劒、紛失のその上に
　浪人なして年月を、假に語らふ藝子の小さん、今は夫婦
　となりはひも、貧しき中に忘れぬ忠義。お館に佞人はび
　こり、君の御身も危ふしと、親外記左衛門人知れず、勘
　氣の我れへ密かに送り、匿まひ申せしこのあばら家、然る
　に計らず今日の珍事。小豆をかすめし盗賊と、彼れらが
　我れへの疑ひを、晴らさん爲に、この如く、腹をあばい
　て切捨ての、掟を糺し、その血汐が、鶴喜代君の眼病に
　忽ち廻りし妙藥の、奇特はあり〳〵腹内に、とゞまる御
　印は御家督に、なくて叶はぬ信夫摺りの御判。
　ト今の印を出して見せる。
重三　ナニ、アノ、それが。
金五　伜が拾ひし紙入れの、主は即ち無理右衛門。その紙
　入れにあつたる御判。ソレ盗人は即ち其方。
無理　サアそれは。
　トもぢ〳〵思ひ入れ。小さん走り出て
小さ　モシ〳〵こちの人、千松が命代り、腹の癒えるやう、
　ずた〳〵にしてやらしやんせ。
金五　云ふまでもない、所を去らず、土壇の紙襖
　ト血に染みし天德寺を見て、フト繕ひし一札を見て、
　ハッと引き放し
　こりや彈正が宗益へ、毒の契約、覺えの手蹟。
小さ　それも矢ツ張り紙入れより
金五　事顯はるゝ毒殺の、一書と共に調伏の、證據に添へ
　てこの御判。
重三　すりや、一時に何もかも。

金五　遁れぬ盗賊、尋常に。

無理　サア。

四人　サア〳〵〳〵。

無理　こいつは堪らぬ。

ト逃げるを、引き戻し

金五　ドッコイ。おのれを逃がさうか。サア、何者に頼まれた。有やうに申せ。吐かさにやこの場で。

ト柄に手をかける。

無理　ア、、モシ〳〵、申します〳〵。何を云ふにも、首がなうては。

金五　命惜しくば、キリ〳〵吐かせ。

無理　サア、その譯は。

ト重三郎の方を見る。此うち重三郎、思ひ入れあつてこの時、無理右衛門が首をポンと切る。金五郎、驚ろき

金五　ヤ、、詮議殘りし無理右衛門。

重三　討つて捨てたは貴殿へ寸志。

ト刀を拭ひ納める。

金五　なんと。

重三　武士に向つて慮外の町人、それゆゑ餘人の手を待たず。

金五　すりや、それゆゑに……ハテナア。

ト思ひ入れ。バタ〳〵になり、鹿之助、滿海、以前の藁人形を奪ひ合ひ出て來り

鹿之　動きやアがるな……妹は居るか。民部どの、今日、問注所の樣子を聞き、知らさう爲に駈けつけた。

ト金五郎、小さんこれを聞いて

小さ　オヽ、兄さんか

金五　して〳〵樣子は。

鹿之　最前、あれから六波羅へ、行きつ戻りつ

ト滿海剝れ返してかゝるを

ドッコイサ……今日の對決、頻りに思ふ勝元公は、將軍の御名代とてお出でなく、彈正貞眞の山名どの、權威のかさおし、理を非に曲げ、鶴喜代君も押籠めと、大半極まり、佞人等が、あら方勝利となつたる由……聞くと等しく駈け戻る、道にて出合ひしこの修驗者、正しく呪詛の藁人形、所持するこそは企みの印、それゆゑ彼奴をその席へと、追ひかけ來りしこの場の仕儀。猶もこれより問注所へ。

トこれまでに、鹿之助、滿海、ちよい〳〵と立廻り、

滿海、下より刎ね返し

滿海　べら坊やアい。

ト一散に向うへ逃げて入る。

鹿之　うぬ。山伏め、待ちやアがれ。

ト引返して、追ひかけ入る。

金五　オヽヽ……さすれば仁木、鬼貫が

重三　勝利とあれば、同意の我れ〳〵、共に日頃の、ムヽ
ハヽヽヽ。

ト茂佐八、おくま嬉しきこなし。

金五　チエヽ、悪人どもを取拉ぐ、證據は爰にありながら
御勘氣の身はその席へ。

小さ　お前こそなれ、わたしが身は、表立たぬを幸ひに。

金五　出かした女房。そんなら早う。

ト二品を、小さんに渡す。

小さ　こちの人。

ト行きかゝるを

茂佐　ドッコイ、やつちやア。

ト後より組みつくを、振りほどいて

小さ　こりや、斯うしては

ト茂佐八をちよつと當てる。

居られぬわいの。

ト早三重になり、帶締めながら、一散に向うへ走り入
る。重三郎、これを見送り

重三　遁がれぬ證據のあの品々。

くま　此まゝ捨てゝは。

ト重三郎へ思ひ入れ。重三郎、金五郎を引き退け、行
かうとする。金五郎、また立廻つて、シヤンと留まる
茂佐八、心附いて切りつけるを、金五郎、身をかはし
て、その刀をもぎ取り、おくま、これはと茂佐八に寄
るを、金五郎、右の刀にておくまをドッと切り下げる。

ト大雷、皆々よろしく見得。

金五　怪しや下郎が一刀にて、云ひかけなせし憎き下郎、
助け置かれず其まゝに

重三　血汐にあやせば、不思議にも、忽ち降り來る雨につ
れ、轟き渡つて鳴る神の

金五　奇端を現はす一振りこそ、もし先達て紛失の

重三　ヤ。

ト白刃へ思ひ入れ。茂佐八、起き上がり

茂佐　うぬ。浪人め。

トかゝるを直ぐにバッサリ切り倒し、白刃に目を附け

金五　さてこそ尋ぬる、こりや天國。
重三　ナニ、アノそれが。
金五　これさへ我が手に入る上は、再び花咲く埋れ木の、渡邊民部が歸參の門出。その血祭りは島田氏、悴が恨みこの場にて
重三　イ、ヤ、それより目前の、汝は母の仇敵。
金五　敵呼ばはり事をかしや。小癪な事を。
重三　うぬから先へ。
ト切つてかゝる。茂佐八、よろぼひ寄つて金五郎にかゝるを、切り倒す。茂佐八、見事にかへるをチョンと木の頭。兩人よろしき見得。白囃子になり、拍子、幕。
本舞臺、三間の間、眞中に冠木門、左右、練り塀、爰に小さん、門へ入らうとするを嘉藤太、倉右衛門床上下にて支へ居る。すべて六波羅問註所の體。早舞にて幕明く。
小さ　どうぞお通しなされて。
嘉藤　ならぬ／＼。最前から申すに聞分けない。爰をいづれぢやと思ふ。六波羅の問註所ぢやぞ。
倉右　お召しの殿樣も聞かざるに、殊には女、通る事決してならぬ。
小さ　左やうではござりませうが、私し事は、鶴喜代の傅き、政岡と申す者。今日、火急のお召しの外記左衛門へ用事ござりまして。
倉右　イヤ／＼ならぬ。殊に鶴喜代どのゝ傅きと、あるに似合はぬ衣類恰好。
兩人　ならぬ事ぢや／＼。
ト小さんを突き退ける。この取合ひのうち、早舞にて向うより先徒士、槍持ち、黑羽織の侍ひ大勢、足を揃へ、乘り物を擔ぎ出る。同勢よろしく付き添ひ出る。
皆々見て
嘉藤　勝元公の御入り。
倉右　この樣子を、イザ御前へ。
ト小さんを突き退け、門の内へ入る。小さん、勝元と聞いて、頷き、傍へに窺ふと、此うち、乘り物は舞臺へ來る。
小さ　お願ひの者でござります／＼。
侍ひ　ヤア、途中の願ひ相叶はぬ。
皆々　そこ退きませい／＼。
小さ　そこを何卒。

侍ひ　慮外な女め。

ト突き放すを、小さん、走り寄つて、以前の品々を手早く乘り物の中へ打込む。これにて搦はず、乘り物は門の内へ入る。

皆々　おのれ狼藉　うしやアがれ〳〵。

ト大勢、小さんを引立て、門の内へ入ると、この道具ぶん廻す。

本舞臺、五延目の問註所の道具になる。二重舞臺の上に外記左衛門、麻上下の形、無刀にて座す。こなたに蔦い嘉藤太、高縄穴五郎、大嶋倉右衛門、古川傳藏、白坂左軍太、土子泥之助、尤道理之助、麻上下、大小の形にて立ちかゝり、外記左衛門に祝儀を述べてゐる見得。縁側の下に、仁木彈正、麻上下、無刀にて扣へ、この見得、時計の音にて道具納まる

傳藏　イザ〳〵帯刀、お渡し申す。

ト外記左衛門の大小を渡す。

穴五　ヤレ〳〵、先づ外記左衛門どの、御忠誠のほど顯はれ、大慶に存じまする

左軍　初めの程は、少し御樣子も、如何のやうに存じましたが。

嘉藤　左やう〳〵。いかう御案じに遊ばしたが、折よい所へ勝元公のお出でにて

泥之　即座の勝利。さぞかし御本意でござらう。

倉右　それにつけても、詮議の品々、持參いたした政岡とやら申す女、さて〳〵器量者でござつた。

道理　これも只今、休息所に於て、御承知と承はり、その喜びと致した事が。

皆々　イヤ、女にもあのやうな、忠臣の者がござるて。

外記　老年の外記左衛門、既に侫辯の爲め、申し伏せられ、お咎めも蒙むるべきのところ、勝元公の御明察を以て、一時に虚實相分り、鶴喜代家督と相極まる。これと申すも各々方の御懇情ゆゑと、有り難い仕合せに存じまする。それにつけましても、手前、政岡と申す女、決して聞き及びませぬ者でござるが、今日に至り、あの如くの品を持參いたし、勝元公へ御訴訟申し上げしは、なか〳〵他家の者とも存じられませぬ。先づその女の年恰好、御存じにござりませうなれば、憚りながら、承知いたしたうござりまする。

嘉藤　なにがその女、年は大方二十一二で、しかもよい女

子。

倉右　併し、合點の參らぬは、鶴喜代どのゝ傅きと申すに致しては、衣類がいかう見苦しうござるて。

外記　ムウ、年配恰好、未だ一見せざれども、正しく民部が……イヤ、忝なう存じまする。歸宿の節、相分るでござらう。

穴五　イヤ、マア〳〵御安堵。何かまだ執權のお尋ねある由で、差留められたが、何も、もう御心配な儀ではござらぬ。

左軍　先づ〳〵、ちと休息召さるがよろしうござる。イザいづれも。

皆々　誠に武士の鑑でござる。

ト口々褒めながら、奥へ入る。此うち、彈正、思ひ入れあつて

彈正　誠に事を計るは人にあり、爲す事は天にありと、昔が今に至るまで、僞はりを以て天を謀り、成就なせし例しなしと、覺悟はしながら、この度の一條、さぞ外記左衞門どのには、よも人とは思すまい。これ皆、伯父君鬼貫公の思し召し。再三、諫言申せしかど、お用ひなく、餘儀なく同意仕る。さりながら、我れも累代、仁木の末葉、獄卒の手にかゝらん事、先祖へ對し、不孝の第一。何卒、侍ひの作法を以て、切腹仰せつけらるやう、偏へに貴所のお執成し。

ト外記左衞門、取りあへぬこなし。

御立腹の段は至極々々、逆磔刑とも思はれんが、貴殿と某、遺恨なし。この儀に依つて一大事を告げ申さん。その功にめで井筒氏、切腹の儀をお執成し、何分ともにお願ひ申す。

ト眞實に云ふ。これにて外記左衞門、思ひ入れあつて

外記　魚は淸きに住まずと、これまで作る積惡も、太陽の光りに照らされ、いま重科につく際に望み、一大事を告げんとは、まだしもの事。品に依つては切腹の儀、執成すまいものでもないが、して、一大事とは。

彈正　こは忝なき貴殿の厚情。その一大事、外ならず。

トにじり寄つて

お家の重寶、天國の御劍、紛失の儀は兼ねて御存じ。それこそ、鬼貫一味の者へも深く包みて、谷間に隱し置く事存ぜし者は某一人、繪圖に記して卽ち爰に。

ト懷より、例の一札を出す。

外記　ムウ、すりやそれに。

彈正　詳しく在所、認めござる。密かに御覽下されい。

外記　ドレ。

ト手を出す。彈正この時

彈正　意趣、覺えたか。

ト一札に仕込みし短刀をスハと拔いて、直ぐに外記左衞門が肩先へ切り付ける。これへ外記左衞門、アッとひるむ所へ付け入るを、扇にて受け留め、兩人キッと見得、早舞になり、此まゝ道具、ぶん廻す。

本舞臺、一面の平舞臺、奥深く座敷の飾り付けよろしく、道具納まる。

ト向うより、以前の人數、追ひ〳〵に立騷ぎ、バタ〳〵烈しく

大勢　切りました〳〵。

ト口々に捨ぜりふにて行き違ふ。ト向うより彈正、大童にて出て來り、奥へ行かうとする。今の人數、組み留めようとするを、段々に切り倒し、思ひ入れ。下の方より外記左衞門、よろぼひ出て來て、抱き留める。此うち、カケリになり、向うよう、小さん走り出て來りこの體を見て、有無を云はず、落ちたる白刃を取つて直ぐに彈正が後より切りつける。彈正、ウッと倒れる外記左衞門、止めを刺さうとして、グッタリとなる。

小さ　モシ、旦那樣、お心慥かに。

ト呼び生ける。外記左衞門、これにて心附き

外記　仁木は如何。彈正は。

小さ　その彈正はお刀で、首尾よくこれに。

ト外記左衞門、よろぼひながら、乘りかゝり

外記　極惡人め、思ひ知つたか。

ト止めをして、又ガックリとなる。

小さ　モシ、お心弱い、氣をしつかりと。

外記　さいふは民部が女房よな。

小さ　ハイ、不思議に證據手に入るより、夫は浪人の身を憚り、それゆゑわたしが駈けつけても、通さぬ御門の掟、折よく細川勝元さまのお出でを幸ひ、乘り物へ無理にお願ひ申し上げ、心ならずも待つうちに、御勝利との御樣子を聞き、嬉しさに引きかへて、悲しいお姿。コレ、申し、お氣は慥かにござりまするか。

外記　出かした。其方が持參の證據にて、勝元公の曇りなきお目鏡ゆゑに、佞人どもを取りひしいだは、身が本望。この末とも若君大切に、民部とも〳〵お見立て申せ。

トこなしあつて、ガックリとなる。管弦になり、奥より細川勝元、銀の茶碗を持ち、出て來る。兩人見て平伏する。

勝元　ホヽウ、出かした外記左衛門。其方が忠義に免じ、勝元が藥湯を與へん。心靜かに服藥いたせ。

小さ　ハッ……舅御様。勝元さまからお藥湯を。

ト外記左衛門、しやんとなつて

外記　私し風情にお手づから、藥湯を給はる事、冥加なき事ながら、血汐の穢れござりますれば。

勝元　苦しうない。苦痛を遁がれい〳〵。

ト出す。小さん取つて渡す。

外記　有り難く頂戴仕つてござりまする。

勝元　思へば、この度遠路のところ、其方達親子が誠忠、鶴喜代どのは果報人とや云はん。また果報拙なしとや云はん。既に名家の廢せんとする時、死を顧ぬ臣あつて、これが救ふがゆゑにこそ、無事に納まる嗣目の墨付、有り難く頂戴いたせ。

ト墨付を出す。

外記　ハヽ……鶴喜代が家運を開くは、偏へに勝元公の御厚情。

兩人　エヽ、有り難うござりまする。

勝元　ヤレ待て外記、痛手に屈せず、天晴れ健氣の今日の振舞ひ。勇氣を記錄に殘さん爲、外記が齡を鶴喜代氏にゆづり申せし家督の壽、祝うて立ちやれ……齡を授くるこの君の、行く末守れと我が神詫の、告げを知らする松風も梅も

外記　久しき春こそめでたけれ。

ト心ゆるみし思ひ入れ。小さん、モシと立ちかゝるを

勝元　其まゝ。

ト、チョンと木の頭。

めでたい。

ト外記左衛門、ガックリとなる。小さん、泣き落す。

この仕組みよろしく、拍子、

幕

萬歳阿國歌舞伎（終り）

室町風流の反古染は
當世向きの伊達紙子

けいせい陸玉川

五段續

安永三年二月角の芝居上演番附表紙

けいせい睦玉川

大序　島原廓の場

役名　―佐々木六角義綱。名古屋十三郎。神原丹左衞門。渡井銀兵衞。濱名源藏。濱名段九郎。青貝靱負。益田小三郎。梅坂主水。常磐三之丞。雷雲右衞門。鬼輪外記。舞鶴屋傳三。遣り手、おゆら。禿、高彌。同、萩野。同、早野。米屋四郎兵衞。木屋杢兵衞。裸勘兵衞。傾城、高尾。同、遠山。同、和國。同、葛城。唐子屋お袖。玉川のりく。大館法印。角力、松島敵之助。荒川浪之助實ハ小浪。浮世渡平。豆腐屋權兵衞。

造り物、一面の平舞臺、竹の襖、砂場の所に茶屋床几二脚。毛氈敷き、高彌、萩野、早野、禿にて腰かけ居る。舞鶴屋傳三、亭主の形。おゆら、遣り手にて、腰かけ居る。騷ぎ唄にて幕明く。

ト對馬の合ひ方になり向うより、青貝靱負、益田小三郎、梅坂主水、丹前の形、所作事少しばかりあつてとまる、と

傳三　よいよ／＼、六さんの今日の趣向。

ゆら　出かした／＼。

傳三　時に、この太夫樣方はなぜ遲い。禿衆、迎へに行きや。

禿皆　アイ／＼。

ト三人走り入る。

ゆら　こりや、わしが行ておだてざ明くまい。

ト向うを見て、

アレ／＼太夫樣方が、見えるワ／＼。

トぬめり唄にて、遠山、葛城、和國、道中にて出。萩野、高彌、笠を持ち、三人につき出る。唐子屋お袖内より出て

そで　これは／＼、太夫樣方、遲いお出で。お前方が遲いゆゑ、皆樣のお待ち兼ね。此やうに來ましてくれなさつたは

和國　コレナ、皆まで云ひな。後はお定まりのせりふであ

らう。

傳三　でもお前、六さまの御趣向の、丹前六法の所作事、もう仕舞うてござりまず。

和國　オヽ、野暮。そんな事は珍らしうはないわいな、

葛城　それ／＼、粹な里に育つたやうにもない。

遠山　傳三さん

和葛　嗜なましやんせ、

傳三　オツと閉口。此やうに云ふも、兎角六さんの御機嫌よかれかし。

そで　ほんに、それはさうと、太夫さん方が見えたら、皆連れ立つて、お迎ひに行かうぢやあるまいかいな。

傳三　それ／＼。サア、皆來い／＼。

ト行かうとして、

ヤア、行くに及ばぬ。いつものやうに、打揃うてお出でるぞ。

そで　ドレ／＼。ほんになア。皆御機嫌取つて下さんせ。

傳三　サア囃子の樂、囃してもらはう／＼。

トしやきり囃子になる。渡井銀兵衛、神原丹左衛門、雷雲右衛門、段九郎、濱名源藏、黑羽二重の袖頭巾、傾城高尾を引立て出て、禿早野附いて出る。

銀之　サア、太夫どの、ごんせいなう／＼。

雲右　そもじが遲いで、座敷が持てん／＼。

段九　それゆゑ我れ／＼が直のお迎ひ。

丹左　名に負ふ名取りの高尾どのなればこそ

銀兵　渡井銀兵衛と云ふ侍ひ。

雲右　雷雲右衛門。

丹左　神原丹左衛門とも云はるゝ武士が

皆々　打揃うて警固の役。

若銀　なんと憎うはあるまいがの。

高尾　アイ、忝なうござんすと、お禮云ひたいけれど、わたしが方から來ておくれと頼んだ事もなし

そで　お前方の方から、好き好んで來て置いて

高尾　わしに恩をきせるとは

早野　きつい間違ひの。

禿皆　ヨウ、つぼさま／＼。

段源　煽てまい／＼。

傳三　コレ／＼、太夫さん、大切なお客樣方を、其やうに打込んでもらうて、ひよつと六さまの御機嫌が害ねると、我れ／＼の身の上、魂膽滅却の至り。

そで　六さまの御機嫌が惡いと、廓中の迷惑。コレ、高尾

さん、機嫌直しておくれいなア。
傳三　惣廓中のお頼み、お笑ひ顏が拜みたうござります。
ゆら　申し、高尾さん。
傳ゆ　ハイ、お慈悲でござります。
ト辭儀する。
高尾　其やうに頼ましやんすを、無下にもなるまい。その代りに座敷ばかりは、氣儘に勤めるぞえ。
傳三　オ、てや。何がさて候べく候におやりなされませ。
內方　お使者。
丹左　ヤレ情ない。また堅やの片桐彌十郎どのでがなあらう。
銀兵　この體を見附けられては堪らぬ〳〵。
雲右　サア、これから奧座敷で酒にせう。
丹左　サア、太夫どの、奧へござれ。
傳三　ソレ、皆寄つてお手を取つたり。
段九　いつそ拍子でやつてのけう。
源段　ゑいや〳〵。
ト祇園囃子になり、皆々、高尾を連れて入ると、踊り三味線になる。名古屋十三、衣裳上下にて出る。供廻り鈴持ち附き出る。

十三　ハ、ア、騷ぐワ〳〵。これは御近習宿直の衆も見えぬは、エ、、また例の大寄せぢやなエ、、これにつけても高尾が事、互ひに變るな變るまいと、誓ひし詞も徒らに、今は御前の寵愛。
ト供廻りと顏見合せ、悄りの思ひ入れあり
ア、、思ふ事儘ならぬこそ浮世とは、今この十三郎が身の上。今日のお使者も御前のお聞きに達し、御遊興の妨げと……云うて申し上げねばならぬ大切の事……ア、どうぞ殿の御機嫌に障らねばよいが。
ト思案する所へ、高彌、近寄り走り出て
高彌　オ、。十三さま、爰にかいな。怖い事ぢやわいな。
十三　オ、、高彌、變る事もないか。
高彌　變つた事は、高尾さんが、六さんの相方にならしやんしたが、お前は腹は立たんかえ。
十三　ませた事を云ひ居る。さうして、怖い事とは何ぢやぞ。
高彌　さいな。その高尾さんに、六さんがのぼりが來て、身請けせうのなんのと云はしやんすけれど、なんの彼のと云うて得心しやんせぬ腹立ちに、切らうとさしやんしたわいな。

十三　ヤヽア。
高彌　お前も爰に居て、側杖に遇はぬやうにさしやんせ。
　オヽ怖やなう〳〵。
　ト逃げ入る。
十三　すりや、高尾がおれに義理を立て、殿の心に從はぬか、アヽ可愛やなア。併し短氣な御前、もし御意に違うては身の上の。アヽどうしたらよからうなア。
　ト奥を覗き、いろ〳〵思ひ入れある所へ、早野・萩野走り出て
早萩　アレ〳〵、六さんが切らしやんしたわいな。
　ト逃げるを捕へて
十三　ア、コリヤ〳〵、切つたとは、タ、誰れを〳〵。
早彌　怖いお侍ひさんが切られさんしたわいな。
　ト走り入る。
十三　ハア、高尾でさへなければ、マア、落ちついた。
　ト遠山出て
遠山　オヽ、十三さん、お出でたかえ。
十三　遠山どの、その後は打絶えました。
遠山　さいな。ねつからお前がお出ぬゆゑ、扇合せも廢つたわいな。

十三　イカサマナウ、軒洩る月、冴えわたる義理ぢやなう。
遠山　それで高尾さんも、お前の事ばつかり。
十三　アヽ、コレ〳〵、もうその高尾の事は。
遠山　よし〳〵。その氣なら、この文の返事をちよつと。
　ト文を出す。
十三　この文の返事とは。
　ト見て、帶さま參る葛城よりと讀む。葛城、出かけ居て
葛城　コレ帶さん、突き出しの始めから、お前の事を思ひ詰め節々文上げても返事して下さんせぬは、高尾さんへの心中であらうと思うて居るうちに、高尾さんは六さまの揚げ詰め。お前も義理で退くと云はしやんすに依つて
十三　この文かえ。
葛城　高尾さんを退かんしたが定なら、あの小座敷へお出でいなア。
　ト手を取るを、振り切り、いろ〳〵ある所へ高尾出て
高尾　オヽ、厚かましい、なんぢやいな。
葛城　ヤア、高尾さんか。
高尾　アヽなめ過ぎた。なんの事ぢやいな。これと云ふも、お前が惡性なからぢや。何が氣に入らぬやら、この間は、

ねつから來もせいで、文やつても返事もなし、又なんぞ面白い事が出來たのぢやな。

十三　ア、コレ〳〵、悋氣らしいせりふは措いておくれ。今までとは違ひまするぞ。

高尾　ムウ、そんならわたしと六さんと。

十三　申すも恐れあり。ハア〳〵〳〵。

ト飛び退り辭儀して

眞平御免下さりませう。

高尾　エヽ、なんぢやいな。人を術ながらすやうな。

ト手を引き

サア、ござんせ。

十三　どこへ。

高尾　云ふ事があるわいなア。

遠葛　ヨウ〳〵。退いた色さま〳〵。

十三　爆てまい〳〵。

高尾　なんぼお前方がそやしておくれても、そんな事を術ながるやうな、わたしぢやないわいな。

遠山　葛城さん。

葛城　遠山さん。

葛遠　ドリヤ、氣を通さうか。

ト思ひ入れありて入る。後に十三、高尾殘り

高尾　幸ひあたりに人もなし。

十三　と云うて全盛の高尾どの、我れ〳〵しきとは隔てての違ひ。追ツつけ御前の北の方様に、おなりなさるゝその時は、コリヤ十三、われには用はない、次へ立てなど、横柄におやりなさるゝであらうが、せめて古へのよしみだけに、和かにさつしやつて下さりませ。

高尾　エヽモウ、惡洒落は措かしやんせ。憎てらしいアタ窮屈らしい。マア、この裃を脱がしやんせ。

ト紐を解く。

十三　ア、コレ、滅相な。

高尾　帶解くと、誰れぞ叱り手があるかえ。

十三　イヤ、居らないが、其許が。

高尾　叱り手があつたとて、そんな遠慮するやうな、まだな事ぢやないわいな。

十三　ヘヽ、なんぼそないに仰しやつても、まさかの時は、牛蒡程な尾を振つて

高尾　逃げるか逃げんか、ござんせ。

ト手を引くを突き放し行かうとする。また留めろ〳〵立廻りのうち、くる〳〵と帶解ける。これはと十三悧り

よき所へ、奥より佐々木六角、鬼輪外記、銀兵衛、丹左衛門、雲右衛門、段九郎、源藏、バラ〳〵と出て取卷く。六角、二人が帶を捕へ、キッと見得になり、十三高尾ハッと赤面する。遠山、葛城、お袖も出る。

丹左　ハレ、不思議なお使者ぢやな。

十三　イヤ、只今社杯着用仕る所でござりまする。

　トうろたへながら社杯着ると、お袖、遠山、葛城、氣の毒のこなしにて手傳ひ着せる。

六角　名古屋十三、使者の口上聞かう。

　トきつと云ふ。十三思ひ入れ。

十三　ハッ、大殿樣お行くへ知れざる、日數も早丸一年。もし御逝去ある時は、御一週忌の營み仕る爲、お館へお入りあられ下さりませうならば、共々追善御供養ありたき、奥方萩の方さまの御意。今日の使者の趣き、斯くの通りでござります。

六角　御口上の趣き、承知いたした。

丹左　イカサマ、十三どのには相應のお役目。

銀兵　坊主ごかしの佛いぢり。いつそ武士をやめて、クリクリと剃りこぼつて、坊主にならしやられぬかい。

雲右　イカサマ肉食妻帶坊などと付けたがよからうぞや。

皆々　ヨウ、色取り坊主さま。

　トいろ〳〵嬲る。外記氣の毒のこなし。

外記　イヤ〳〵、何れも。先づ〳〵お扣へなされ。其やうに口々兎やから云はしやると、若輩者の十三、殊の外難儀の體に見えまする。マア〳〵、この儀は。

六角　ヤイ〳〵、爺め、何をおのれが。扣へて居れ。

外記　イヤ〳〵、御意ではござれども、是非にこの儀は。

六角　默れ。詞を返す慮外者。家中への見せしめに。

　ト我打ちに外記が首を討つ。皆々悄り。

　身が詞を背けば、どいつ此奴の容赦はない。この老ぼれめがよい手本。これを肴に一獻酌まん。お使者、奥へござれ。

　ト唄になり、鷹揚に奥へ入る。皆々、十三高尾を引立て、奥へ入るところへ、豆腐屋權兵衛、豆腐の荷をかたげ

權兵　豆腐油揚げ。

　ト云ひ〳〵、本舞臺へ來る。内よりおゆら出て

ゆら　コレ〳〵、豆腐屋さん〳〵。

權兵　オヽ、これはおゆらどの、なんぞ用でごんすか。

ゆら　用と云うたら、この中頼んで置いた

權兵　エヽ、蒟蒻の煮染か。持つて來た／＼
　　　ト荷箱より蓋物を出し
からりと煮染めてくれと云はしやつたゆゑ、唐辛子少々、
油で煮染めて來たぞ。
ゆら　ヤレ、嬉しや／＼。これで茶漬四五膳
　　　ト入らうとする。
權兵　アヽ、コレ／＼、めん／＼の取る物取ると、もう駈
け出すのか。
ゆら　わしや近がつたぢやゆゑ、よい菜を見ると、蟲唾が
走る程、ひだるくなるわいな。
權兵　そりや猿の業ぢや。
ゆら　そりや血の道ぢやわいなア。
權兵　エヽ、癪持ちに蒟蒻は、えらい毒ぢやになア。
ゆら　なんぼ毒でも、蒟蒻の煮染めと藷ゆゑなら、命でも
惜しまぬわいなア。
權兵　道理々々。その命惜しまぬで思ひ出したが、さして
命を塵とも思はぬ此方の野良めは、爰へ來やしをりませ
ぬかな。
ゆら　エヽ、渡平さんかえ。どうした事やら、とんとお出
でぬわいなア。

權兵　ハテナア。エヽ、不孝者めが。年よつた親には垢
垂れた着物着せて、どこを經廻り廻つて居るぞ。コ
レ、おゆらどの、もし爰へ來をつたら、早う戻れと云う
て下さんせや。
ゆら　合點でござんす。
權兵　頼みましたぞや。
　　　ト行かうとする。
ゆら　アヽ、コレ／＼權兵衛さん。何か臺所で、一つ呑ん
で行かんせぬかいなう。
權兵　お客があるさうな。
ゆら　お客と云うたら、いつもの六さまぢやわいなア。
權兵　エヽ、今日も又六さまが。ナヽ、その六さま次手に、
彼の敵之助は、どうさしやりましたの。
ゆら　そのお方も、今日は見えます筈ぢやげな。
權兵　そんなら幸ひぢや。待ち合せがてら、臺所で酒でも
呑まうかい。
ゆら　サア、ござんせ。
權兵　エヽ、忝ない。
　　　ト唄になる。兩人、奥へ入るところへ、敵之助、裸勘
兵衛、米屋四郎兵衛、木屋杢兵衛出て

勘兵　コレ〳〵、コリヤ、どこへ、逃げて行くのぢやぞいなう。
四郎　埒へ仕掛けて見れば、女夫ながら留守。南無三、取逃がしたと思つて、方々尋ね廻つて來たのぢや。
杢兵　逢うた時に笠の代も
四杢　サア、算用してもらひませう。
敵之　成る程、段々御尤もでござりますけれど、今と云うては、どうもなりません。どうぞ明後日あたりまで。
勘兵　アヽ、コレ〳〵、その明後日までも久しいものぢや。損料の代おこしやらぬと、いつでも裸にして取るゆゑに、裸の勘兵衞と、異名附けられたおれぢや。遠慮はない。裸にするぞや〳〵。
敵之　アヽ、申し〳〵、爰は往還でござりませぬか。其やうに聲高に仰しやつて下さりますな。
勘兵　云はにやならぬ。サア、段々の損料、いま算用しや。
敵之　サア、その御算用を致しませうと存じて、爰まで同道したのでござります。
勘兵　そりや、なんぞ心當てのある事ぢやの。
敵之　左やうでござる程に、最前お頼み申した物、お貸しなされませ。
勘兵　オヽ、それは此方の商賣ぢやに依つて、貸すまいものでもなけれど、マア、下地の損料取らねば。
敵之　ならぬと仰しやるも御尤もなれど、今日ばかりは違ひない。その證據は、これ御覽じませ。
　ト狀を出す。
勘兵　この狀は。
敵之　そりやわたしの勘當の詫びの事を、取次してくれられまして、朋輩どもからくれた書狀。
　ト此うち勘兵衞、讀んで見て
勘兵　イカサマ、この狀を見れば、大方お前の首尾もよい程に、今日お目見得せいとある文言。
敵之　左やうでござります。今でも勘當の詫びさへ叶へば、元の侍ひになる私し。その時はお前方の算用、キツと致します程に、今日の所を呑み込んで、どうぞ身の廻り、お貸し下さりませ、
勘兵　尤もぢや。如何にもと云うて貸してやりたいものなれど、この狀はその世話する所から來た狀やら、また拵らへ物ぢややら、すつぽりと着逃げに遇うてはならぬてや。
四郎　イカサマ、こりやよい氣の附け所ぢや。

ト此うち益田小三郎出かけ見て

小三　オヽ、これは敵之助どの、お久しうござります。

敵之　これは小太郎どの、お遠々しう存じます。先づ其許は、何方へござる。

小三　イヤ、私しは御前がお能をなさるゝゆゑ、御装束の儀、用人衆へ申し參るのでござります。

敵之　それは御苦勞。して、丹左衛門どのは、御前に居られますかの。

小太　成る程、御前にござります。其許がお出でなさるゝ筈と申して居りました。

敵之　すりや、私しの儀を。

小太　お待ちなされてござりました。心急きますれば、參ります。

ト入る。

敵之　アヽ、コレ……樣子はお聞きの通り。歸參の叶ひまする事に、毛頭違ひはござりませぬ程に。

勘兵　イカサマ、どうやら面白い。

ト云ふ所へ、常磐三之丞、奥より橋がゝりへ行かうとする。

敵之　イヤ、コレ〳〵、三之丞どのではないか。

三之　ホウ、敵之助どの、こなたのその姿は。

敵之　面目次第もござらぬ。この體ゆゑ、御勘當のお詫に參るのでござるわや。

三之　それは幸ひの折でござります。今日は奥方より、お金を献上あらせられましたゆゑ、高尾どのを身請けなされて御酒宴最中。御機嫌よい所でござります。其許がお出でなされさうなものぢやと、お待ち兼ねでござりました。

敵之　すりや、銀兵衛どのが。

小太　お待ち兼ねでござる程に、もうお目見得なされ。私しは參ります。

ト云ひ捨て、橋がゝりへ入る。

勘兵　いかう樣子がよいわいなう。

四郎　それ〳〵、勘當がゆりて、元の身にならしやれば、松島敵之助さまと云ふお侍ひ樣ぢや。

勘兵　その聞入れなんだ腹立ちに、呼びつけられては迷惑。

四郎　早う御用に立てたがよからう。

敵之　そんなら呑み込んで貸して下さりますか。

勘兵　オヽ、貸しませうとも。

ト風呂敷より衣裳裃出す。

敵之　それは過分に存じます。
勘兵　早うこれを着て、勘當を赦され、約束の損料を下さ
れませ。
ト云ひ〳〵、早々社衽衣裳を着せる。
イヤ、まだ云はにやならぬ事がある。切り米の渡つた時、
安うして下されや。
敵之　何がさて、この御恩には、五人扶持や拾人扶持は進
ぜます。
勘兵　忝ない〳〵。さて立派な侍ひにならせたい。
敵之　さてマア、御前へ出ましても、まそつと隙取りませ
う程に、各々方は、暫らくお扣へなされて下さりませ。
勘兵　如何にも〳〵。シタガ、おれも木蔭から樣子を見ま
せう。皆ござれ〳〵、
ト連れ立ち橋がゝりへ入る。内より丹左衞門出て
丹左　イヤ、もうお免され〳〵。
ト云ひ〳〵敵之助と顔見合せ。
エヽ、敵之助どの、只今お出でか。
敵之　丹左衞門どの、昨日は御紙面、段々お世話。
丹左　イヤ〳〵、お禮には及ばぬ。武士は相互ひでござる
てや。

敵之　御深切忝なう存じまする。
丹左　直ぐに御前へお目見得と、申したいものなれども、
只今は御酒宴最中でござれば、折を見合せ呼びませう。
敵之　如何ともお指圖次第に仕りませう。
ト手を叩く。
萩高　アイ〳〵。
ト高彌、萩野出て
なんの用でござんすえ。
丹左　コリヤ、この仁を小座敷へ伴ひ、御酒でも進ぜて下
され。
萩高　アイ〳〵。サア、ござんせ。
敵之　然らば暫らく。
丹左　休息めされ。
ト唄になる。丹左衞門、橋がゝりへ入る。敵之助は萩
野、高彌と連れ立ち、下座敷へ入る。返し道具になる。
造り物、西の方、總塗り骨の障子。緣側の體になる。
障子の内にて
六角　太夫、先刻に云やつた通り、浮氣ではない、眞實ぢ
やと云ふ證據に、身請けしたが、嬉しいか〳〵。

高尾　オヽすかん。身請け〳〵と恩に着せたらしい。誰れも頼みもせんものを、お前の物好きで身請けして置いて、わたしや嫌ぢやぞえ。物も云うて下さんすないな。
六角　と云うても、さつぱりと身請けした上は。
高尾　ハテ、さつぱりとしてあるけれど、お前のしつこいのが嫌ぢやわいなア。
六角　すりや、最前誠さへ見たら、従ふと云うたのは。
高尾　當座遁がれの間に合ひ。お前を騙したぢやわいな。
六角　さう云や、もう料簡がならぬわい。
ト ばた〳〵にて障子蹴放す。六角、抜身を振り上げ居る。銀兵衛、丹左衛門、雲右衛門、見得ありて
銀兵　これは短氣な。戀は其やうに、木折りには行かぬもの。マア〳〵、お心を鎭められ下さりませう。
六角　銀兵衛、今の雜言を聞いては、どうも、
銀兵　御料簡のならぬ所を、憚りながら私しが、取持ちさせる役人がござります。
六角　ムヽ、この戀取持たせる役人とは。
銀兵　ソレ兩人、合點か。
源段　合點ぢや。
ト 源藏、段九郎。十三郎を引立て出る。高尾悧りし

高尾　ヤア、お前は。
銀兵　なんと、倔竟な戀の取持ちでござりませうがな。
六角　こりや出かした。十三、其方に云ひ付ける。高尾を口說き落して、身が手に入れい。
十三　イヤ、その儀は。
雲右　辭退するは、高尾と不義に極まつた。
十三　サ、それは。
銀兵　口說き落して差上げるか。
段九　サア〳〵、なんと。
六角　返答ないは、不義に極まつた。兩人、重ねて置いて四つにする。ソレ、引出だせ。
段源　ハツ。
ト 立ちかゝる所へ敵之助、ツカ〳〵と出て
敵之　憚りながら、先づ〳〵お待ち下さりませう。
六角　ムウ、見れば勘當せし敵之助め、誰れが許してこれへ出た。
敵之　サア、その儀は。
六角　身が詞を背く不忠者、そこ立去らぬか。
敵之　ハア、お詞を返し奉るは恐れながら、君の御不興を蒙むりし私し。永々の艱苦に置く所なき儘に、銀兵衛ど

の、丹左衞門どのをお賴み申して、度々のお詫びに御勘氣御赦免ある段、兩人より知らせの内意。この狀を便りに參りし甲斐もなう、誰れとの御意。丹左衞門、こりやどうでござりますな。

銀兵　なんぢや、勘當の御赦免ある程に、お目見得仕れとの御内意とは、ドレ。

ト狀を取り、讀む思ひ入れ。

雲右　銀兵衞どの、覺えござるかな。

銀兵　拙者、斯やうな書狀遣はした覺えないぞ。

敵之　ヤ、なんと。

銀兵　貴樣、まだ心が直らぬの。此やうな似せ狀を拵らへ、勘當の詫びとは、なんの事ぢや。

敵之　思ひも寄らぬお咎め。拙者に限り、左やうな儀は。

丹左　無いとは云はさぬ、始終の樣子皆聞いた。

ト云ひ〳〵丹左衞門出る。

敵之　よい所へ丹左衞門どの、この狀を銀兵衞どのが似せ狀と云はしやるも尤も。こりや眞赤いな似せ筆。

丹左　似せ狀と云はしやるも尤も。こりや眞赤いな似せ筆。

敵之　ヤア。

銀兵　ア、貴樣、どうでも性根が直らぬの。

丹左　似せ狀を拵らへ、身を遁がれんとする卑怯者。

ト引裂く。

敵之　イヤそれは。

銀兵　なんぢや、身が勘當の詫びせしとは、この頰桁で吐かしたか。

丹銀　玆な大騙りめ。

トいろ〳〵兩方より苛なむ。敵之助、無念のこなし、雲右衞門の側へ行き

敵之　コレ、雷どの、私しは似せ狀を拵らへた覺えはない。貴殿、よろしうお執成し。コレ、雲右衞門どの。

雲右　エヽ、知らぬわい。

ト蹈みかゝろ。敵之助、足首をグッと握る。雲右衞門、顏をしかめ、痛む思ひ入れ。

敵之　もうどうも。

ト反り打ち、詰め寄る。

雲右　なんぢや。反り打つたは切る氣か。

丹左　サア、無念なら切つて見い。

六角　身が許すと云ふ詞も出さぬうち、目通りへ推して差出る慮外者。打ち据ゑい。

三人　ハア。御意ぢや〳〵。

ト打擲する。十三郎、見かれ

十三　それは。

ト寄らうとする。六角引き付け

六角　イヤ、小癪な奴の。

ト下駄にて十三郎が眉間を打つ。

高尾　ア、コレ申し。

六角　憎くい奴の。兩人ともに覺悟せい。

ト駈け寄るを六角引き付け

ト刀振り上げる所へ、權兵衞出て縋りつき

權兵　マア／＼、待つて下さりませ。

六角　ヤア、慮外な老ぼれめ、なんで留めるぞ。

權兵　サア、留めましたは、無難に納めたさ。後先の辨まへもなう、お留め申した慮外の段は、免して下さりませ。二人をお手打とは、ア、、短氣ぢや／＼。

六角　ヤイ、親仁め、わりやこの樣子を知つて留めたか。知らずと留めたか。

權兵　先刻にからの樣子は、皆承はりました。

六角　聞いたれば改め云ふに及ばぬ。不義者を手討にするを、短氣とは。

權兵　サア、傾城は高が賣り物。その女子を買つたとて、不義間男のとは、云はれますまいぞ／＼。

六角　ハヽヽ、流石老人、聞き違へも尤も。賣女浮れ女とは云ひながら、疾に身請けして奧も同然。その高尾と十三郎が

權兵　懇ろさしましたは、とつと前方、殿樣のお相方と定まらぬ先の事なりや、萬ざら不義とは云はれまいかと存じます。既に、古へ在原業平、高子の君さまと、懇ろさしましたは先の事。二條さまにならしやりました時は、ア、、何とやら。オヽ、それ／＼……我が身一つは元の身にしてと、一首を見ひらかして、東の方へ身退かれし例しもあり、なんとえらい學問者であらうが。こりや私しが息子の渡平が、珍分漢をやり居る、次手に聞き覺えた耳學問。十三さま、こなさんも知らぬ事とは云ひながら、一旦高尾どのと云ひ交さつしやりました誤まり。この場をツイと身退いたが、よささうなものでござりますぞえ。

六角　ハテ、小ませた親仁め。十三めが命を助け、身が目通りへ出座は叶はぬ。早く歸れ。

十三　すりや、御前のお目通りは

丹左　御意ぢや。

銀兵　扣へ召され。

十三　ハッ。

　ト下がる。

六角　ヤイ、親仁め、おのれ、なか〳〵うい奴。とてもの事に、高尾を口說いて抱かして寢させ。

權兵　エヽ、この高尾どのを。

六角　忰とやらが學問好き。耳學問の手際が見たい。

權兵　お望みならば見せませう。

六角　出かした、當座の褒美。

　ト下駄をやる。權兵衞、ムッとして

權兵　アノ、これを褒美とは。

六角　佛も下駄も同じ木の切れ。佛を作るなりと、獄卒を作るなりと、細工人の心次第。

權兵　細工は流々、親仁が手際、お目にかけませう。

六角　高尾さへ得心すれば、比翼の初床、下座敷へ同道して

銀兵　唄三味線の氣を替へて

丹左　今宵の遊びは能囃子。

銀兵　お能の役目は、この銀兵衞。

六角　白樂天の役は身共。舞の役は太夫が風流、相生の松。親仁、必らず好い音信を。

權兵　追ッつけお聞かせ申しませう。

　ト唄になる。皆々奧へ入る。十三郎、高尾、權兵衞、敵之助殘り、この間勘兵衞、四郎兵衞、杢兵衞、ツカツカと出て

勘兵　先刻にからの樣子は聞いた。

四郞　あの體では、勘當の詫びどころぢやない。

杢兵　べん〳〵と引摺られて居やうより

勘兵　百貫の形に笠一蓋。

四郞　古褞袍ともに

勘杢　脫いで渡しや。

　ト敵之助、思ひ入れあり

敵之　成る程、約束の通り。

　ト帶ほどき

　マア、身の廻り、お戻し申します。

　ト差出す。勘兵衞取る。

勘兵　こりや、おれが物ぢやゆゑ取つて置いて

杢兵　追ひかゝりの算用合ひは。

敵之　御不肖ながら、お三人中へこの古着。

　ト裸になる。

勘兵　そこを氣強うするが、この勘兵衞が商賣。慥かに受取つた。サア〳〵、ござれ〳〵。

ト三人連れ立ち入る。
權兵　ても氣強い奴等ぢや。
敵之　十三郎どのゝ災難、この態も、皆佞人どもの企みの落し穴。嵌められたは、女房が事を根に持つ銀兵衛が計らひ。彼奴等を側に附けて置いては、殿のお身持ち……さうぢや。
ト奥へ行かうとする。權兵衛留め
權兵　待つた。氣色を變へて、どこへ行くのぢや。
敵之　知れた事。短慮な殿へある事無い事、焚きつける佞人どもを。
權兵　いま手にかけては殿への面當てになるがや。
敵之　と云うて。
權兵　心を鎭めて思案なされ。急く所でないがや。
敵之　ぢやと云うて、待たう〳〵と日を送るうち、佞人の舌強く、もし殿の御身の上に凶事ありては。
權兵　心元ないと思はしやるなら、荒氣を出さずと、チッと心を鎭めて、思案のありさうなものぢやぞや。
敵之　ア、、御勘氣の身なれば、お側へも行かれず。
高尾　何を云うてもその形では……せめてこれなりと、
ト襠補脫がうとする。權兵衛留めて

權兵　わつけもない。此やうな物着たら、また十三さまのやうにお疑ひの種……と云うて、裸でも居られまいし
ト我が上張り脫いで着せ
時の用には花色の單衣物。
敵之　志しは嬉しうごんすけれど、裸にて居るはわしが商賣。さのみ苦にもなりませぬてや。
權兵　そりやそんなもの。今までとは違ふ。ハテ、御知行頂戴して居るうちこそ、お抱への角力取なり、勘當請ければ只の人間。今この上張り着てなア。
ト囁きて
合點か。
敵之　イカサマ。
トまた囁き
權兵　この荷を貸します程に、コレ、この薦に大小を包みてなう……よいか〳〵。サア〳〵、十三さまも、長居さつしやると惡い。マア〳〵、早う去なしやりませ。
十三　段々の心遣ひ、忝なうござる。成る程去にませう。ほんに思へば、おれが身の上も、丁度白樂天の謡の通り。
權兵　オ、、それ〳〵。初春の、朝日には來れども
十三　逢はでぞ歸る元の住家に……お暇申します。

高尾　ア、コレ申し、いま別れていつか又。
十三　逢ふは別れの始めの約束。只何事も約束事と
高尾　なんぼ思ひ諦めても
十三　思ひ切られぬも道理。
高尾　道理と思うて下さんすなら
十三　逢はでぞ歸る元の住家に。
高尾　十三さん。
十三　高尾。
　ト一緒に寄らうとするを引分け
權兵　ハテサテ、爲にならぬがや。敵之助さま……ではな
　い得意廻りの豆腐屋どの。
　ト敵之助、思ひ入れあり
敵之　豆腐油揚げ。
　ト賣り／＼、向うへ入る。高尾十三、一緒になる。權
　兵衛、引き退け
權兵　ハテ、ごんせいなう。
　ト高尾を引ッ張り入ろ。唄になり、十三、後見送り、
　思ひ入れあり
十三　皆おれが誤りぢや何を云うても主と家來。さうぢや。
　ト花道へ行くところへ、傳三出で、十三を見附け

傳三　ドッコイ、十三どの、揚げ代算用してもらひませう。
十三　これは狼藉な。何をする。
傳三　何をするとは十三どの、揚げ代の算用は、どうして
　下さります。
十三　コレ／＼傳三、その揚げ代替りには、大切な尊像を
　預けて置いたぢやないかいの。
傳三　サア、その尊像は、三百兩の形なれど、やう／＼積
　らしたところが百兩。
　トこの間に勘兵衛、四郎兵衛、杢兵衛出かけ居て
勘兵　オヽ、さうぢや。此方へ置きに見えたれど、あんな
　物は本人に、直ぐに相談せねばならぬに依つて、置き主
　を改めに來たのぢや。
傳三　なんの彼のとやかましい。こりやいつそ賣り拂つて
　しまはうかい。
十三　滅相な。その尊像を賣り拂つてつまるものかいなう。
傳三　そんなら後金の二百兩はどうぢや。
勘兵　今までとは違ふ、素浪人の十三郎どの。これより直
　ぐに高ふけりの下地と見えた。
傳三　もうちよつとも待たれぬ。
勘兵　屋敷へ引摺つて行て、疊まで賣り拂つてしまへ。

傳三　それがよからう。皆手傳つて下され。
勘兵　合點ぢや。サア、來い〳〵。
ト皆々十三を手籠めにして花道へ行かうとする。戸屋の内より
浪之　待つた。
勘傳　待てとは。
浪之　一番待つてもらひませう。
ト太鼓、摺り鉦入りの唄になる。浪之助、若衆形、尺八差し、花道にて摺れ違ひの模樣、いろ〳〵あり、本舞臺へ皆々タヂ〳〵と戻ると、傳三、腹を立て
傳三　エヽ、埒の明かぬ。なぜ連れて行かぬぞい。
勘兵　サア、行くは行くが、ヤイ前髮、なんで道の邪魔するのぢや。
浪之　オヽ、邪魔する筋があつて邪魔するのぢや。細ごと云はずと、すツ込んで居らう。
ト十三、浪之助を見て
十三　ヤア、わが身は。
浪之　イヤコレ、兄者人ナア、おれが爲には大切な兄者人。緣者のこなさんの難儀と見たゆゑ、變生男子が來るからは、もう氣遣ひな事は何もない程に、落ちついて居やんせ。
傳三　ムウ。わりやこのならず者の弟か。
浪之　アイ、恥かしながら
傳三　マア、われは名は、なんと云ふ。
浪之　オヽ、おれが名を名乘つたら、あつたら膽が潰れやう。聞かずと措け〳〵。
傳三　イヤ、措くまい。サア、名を名乘れ。
浪之　アヽ、うぬ等がやうながらくたに、名乘るには及ばねど、聞きたがるゆゑ云つて聞かす。この廓へ今宵が始めて來た、荒川浪之助と云ふ角力取の前髮さまぢや。近う寄つて拜し奉れ。
傳三　ムウ、われが聞き及んだ荒川浪之助か。角力取には似合はぬ、美しい若衆ぢやな。
勘兵　浪之助でも梶之助でも、怖うないぞ。腕立てひろぐと、引ッ捕まへて若衆にするぞ。
四郎　オヽさうぢや。念者にならうか、若衆。
浪之　ハヽヽヽ、猿松めら、うぬ等が若衆になる浪之助ぢやない。ならう事なら、サア、若衆にして見い。
四李　合點ぢや。
ト四郎兵衞、李兵衞、勘兵衞かゝる。皆々投げ、傳三

かゝるを、足を取り投げる。浪之助、尺八にて三人を
打ち据ゑる。

浪之　サア、グッとでも吐かすが最後、荒川浪之助が引導渡すがどうぢや。兄貴、見やんせ。弱い奴等ぢやごんせぬか。

十三　ほんに、見掛けに似合はぬ弱い奴等ぢや。こなさんは見掛けに似合はぬ強い事ぢやなう。

浪之　サア、これからはお前の、大切な物を預かりながら、無理云うた奴等を戒めて見せやんしよ。そこに居る才六め、兄貴の揚げ代せがんだ奴はわれか。

傳三　ハイ、私しでござりますければ、私しは百兩と云ふ內揚げを取つて居りますれば、其やうにせがむ氣もござりませなんだけれど、質に取るのを、なんの彼のと云ふに依つて

浪之　エヽ、默れ。べら／＼と長口上。その上尊像を兄貴へ戻し、貳百兩の後金も、さつぱりと帳を消すか。サア、一口商ひ。この世あの世の堺目ぢや。キリ／＼云へ。どうぢや。

傳三　それでも勘兵衞、みす／＼三百兩の損

勘兵　アヽ、イヤ／＼、今の手並では、どんな目に遭ふも知れん。貳百兩や三百兩には替へられぬ。よい加減に料簡附きやいなう。

傳三　それもさうぢや。盜人には追ひ錢ぢやと思うて。

浪之　なんと。

傳三　アヽ、今のは申し害なひ。ハヽヽ。料簡の仕憎い所ではござりますれど、お前の御挨拶なら、如何やうとも致しませう。

勘兵　申し、浪之助さま、傳三が料簡せうと申されまする。お前も少々お腹の立つ事があらうとも、浮世のよしみに、不肖ぢやと思し召して、御料簡なされて遣はされませ。

浪之　料簡のならぬ所ぢやれけど、よいワ、堪忍してやらうが、いよ／＼兄貴に云ひ分はないか。

傳三　アイマア、申し分はござりません。

浪之　去にたくば、尊像戻して一札書け。

傳三　エ、この尊像を、只でござりますかえ。

浪之　知れた事。

傳三　一札とは、なんの一札でござりますえ。

浪之　この後、揚げ代の催促いたすまい、どのやうな事になつても手ざしせまいと云ふ證文書け。

傳三　そりや餘りな。其やうな證文は、
浪之　ならぬと云や、仕樣があるか。
傳三　ア、、サア、書きます／＼。
浪之　サア、早う書け。
傳三　ハイ／＼。
　ト硯、紙持ち出で、なんと書きませうなど云ふ。
浪之　一札の事、預かり申し候ふ尊像戾し候ふ上は、重ねて揚げ代せがみ申すまじく候ふ。
　トこの通り傳三書く。浪之助、思ひ入れあり
十三　合點ぢや、兄貴、まつと書かせさんせ。
　ト向うへ出て
　サア書け。
傳三　なんと書くのぢや。
十三　然る上は、何時遊びにお出でなされ候ふとも、お氣に入りし新造太夫幾人なりともお買ひ上げなされ、且又小遣ひ金はお入用次第に、十兩二十兩づゝ差上げ申すべく候ふ。
傳三　こりやよう書くまい。
浪之　否と云や、引導渡さうか。
　ト尺八振り上げる。
傳三　ア、、書きます／＼。
　ト右の通り書く。
十三　後日の爲一札件の如し、名古屋十三さま、傾城屋傳三判。
　ト書く。
　オ、、よし／＼。
　ト證文取る。
傳三　こりや又あんまりな。
浪之　引導渡さうか。
　ト尺八振り上げる。
傳三　それには及びません。エ、、いま／＼しい。
　ト腹立ち、内へ入る。
浪之　ヤイ、うぬらも一々、骨を拉ぐ奴なれど、今日は志しの佛の日ぢやに依つて免す。キリ／＼うせう。
三人　エ、、うぬを。
勘兵　マアよい。サア、來い／＼。
　ト唄になり、三人向うへ行く。浪之助見送り、よき所にて招ぐ。三人ツカ／＼と戾り
三人　まんまと首尾よう。

浪之　シイ〳〵。お前方の庇で
十三　こりや何の事ぢや。
勘兵　サア、約束の金は。
浪之　その金は
りく　その金は爰にござんす。
　ト橋がゝりより出る。
十三　ヤア、こなたは玉川のおりくぢやないか。
りく　合點のゆかぬは御尤もござんす。お前が殿樣より、お預かりの、泰山府君の尊像、揚げ代の代りにこの廓へ質物に置かしやんしたゆゑ、難儀なさるゝ譯を、この子が聞いて、どうぞ仕樣はないかと頼みやるに依って、やうやうと傳手を求めて、このお方に頼んで、斯う云ふ狂言を拵らへて來たのでござんすわいなア。皆樣、大分よう出來ましたわいなア。
勘兵　なんと裸の勘兵衛が、狂言の仕打ち、よからうがの。
浪之　出かした〳〵。わしも習うた通り、强い事する出入りも、しそこなふかと思うて、大抵案じた事ぢやなかつたわいなア。
十三　ムウ、そんなら今の荒事も
浪之　みんな拵らへ事でござんすわいなア。

十三　道理で手ひどう强う見えたと思うたぞ。
勘兵　その强う見えたお庇で、三百兩は帳消し。
十三　大切な尊像は戻るし
りく　うまい証文はお取りなさるし
勘兵　このもくの割れぬうち
りく　ソレ、約束の雇ひ賃。分けて取らんせ。
勘兵　エヽ、忝ない。
　ト財布より金を出し
先づ三兩は十三さまへの貸し殘り。貳兩はその衣裳代。後は三人に壹兩づゝ。
　トめい〳〵に渡し
又こんなよい仕事があつたら、知らして下んせ。皆おちやおぢや。
　ト連れ立ち入る。
りく　恰好は憎てらしう見えるが、金さへ見せりや、機嫌のよい人さんではあるわいなう。
浪之　わたしやしおほせたと思うたりや、草臥れたわいな。
十三　道理〳〵。先づお庇で急難を遁がれ、なんとお禮申さうやら。コレ、十三が手を突きます。小浪どの、忝なうござる。

浪之　オヽ勿體ない。わたしが伯母樣は、お前の御家來、なりやわたしが爲にもお主。その家來にお主樣が、禮云ふといふ事があるものかいなア。

りく　イヤ、小浪、さうぢやない。なんぼ家來筋でも、わが身はこんな形をして、大枚の金を蒔き散らし、難儀を救やつたもの、十三さまも禮云はしやんせにやならぬ。口先ばかりで禮云はしやんしては、小浪が喜びませんぞえ。

十三　口先ばかりの禮では濟まんとは。

りく　サア、その譯は、去年の遠論で、お前が隣り在所へお出でた時、わたしがお屋敷に勤めたよしみに、見苦しいわたしが所で、一夜の御逗留。たつた一度の假寢に誠を立て、ブラ／＼と戀煩らひ。それと解つてより、かゝらうと云ふ子はなし、姉さんの形見と、彼の子を杖柱と思うての暮らし。もしもの事があつたら、なんとせうどうせうと、案じ暮らして、懇ろなお人を頼んで、今度の身延參り。どうぞ十三さまのお目にかゝつて、この樣子を打明けてと思ふうち、大切の尊像、この廓へ預けなさつた樣子を、聞くと其まゝ、心中立てるは爰と、云ひ致へて今日のこの趣向。首尾よう行たも、在所の祭りや練り物に出やつたお庇。これ程までに心を盡す、あの子の心根を不便と思し召して、優しい詞をかけてやらしやつて下さりませ。十三さまに意見しさうな伯母の身で、此やうな事を取持つとは、どうやら不埒なやうにも思し召さうが、これもあの子がいとしさゆゑ、若い時は覺えのある事。身につまされて不便にござりますわいな。

十三　サア、おれも假初ながら、云ひ交した事もあるゆゑ、國へ戻つてから、便りもせうと思うて居るうち、この難儀。便り音信をせなんだは、おれが誤まり、堪忍して下されや。

浪之　アイ、其やうに仰しやつて下さんすりや、お恨みとも存じません。それに、高尾さんとやら云ふお傾城と、澤山云ひ交してござんすとな。わたしがやうな不束な者が、例へどのやうに思うたとて、可愛い事ぢやと思うて下さんすまいと、諦らめて切りましたこの黑髮。是非なう尼になりまする程に、せめてこの黑髮は、わたしが形見ぢやと思うて、お嫌ぢやあらうけれど、貰うて下さんせいな。

ト黑髮を出す。十三取つて

十三　たらちねのかゝれとてしも烏羽玉の、千筋と撫でし

安永三年二月大坂

角の芝居上演繪番附

この黒髪、思ひ切つた其方の貞節、忝なうござる。」せめてもの返禮、杯なりとしませう。コリヤ來いよ……ア、呼んだとて誰れも來てくれはせまい。ドリヤ、行て杯取つて來うか……ア、、浮世ぢやなア。

ト合ひ方になる。十三、奥へ入る。此うちおりく、浪之助、思ひ入れありて

りく　エ、、らつちもない。コレ小浪、ありやどうぢやいなう。

小浪　どうぢやて、、今のやうになつては、どうも仕様がないわいなア。

りく　ソレ見や。わしがあんじよう仕掛けて置いた所を、わが身がひよんな黒髪を出して、滅入らかしやつたによつて、十三さまも理に入つて、ア、浮世ぢやなアと云ふやうになつたわいなう。ア、辛氣な人ではあるわいなう。

小浪　サイナア。わしも切り髪出して、お前ゆゑ尼になりまするとき、きつぱりと云うたのは、十三さまが、さてもさてもおれゆゑに、尼にならうとはいぢらしい、尼にはせぬ、女房にしてやると、云はしやんすぢやあらうと思うて居たのに、せめて杯なりとせう、ア、浮世ぢやなアと云はれては濟まんわいなア。思案して下さんせいなア。

りく　思案と云うて仕様はないわいなう。いつそ何にも云はずに抱きつきや……こりやどうぢやと云ふ所へ、わしが出て、狂言を前へ引戻して見ようわいなう。

小浪　そんならさうして下さんせ。今でも見えると、何がなしに抱きつくぞえ。

りく　顔さへ見たら、とん〳〵〳〵と、斯う走つて行て抱きつきや。

小浪　何がなしに、とん〳〵〳〵と……斯うかえ。

りく　さうぢや〳〵。おれが爰に居ては悪い。おりや奥へ行て、十三さまを爰へおこさう程に、必らずぬかりやんなや。

ト内へ入る。いろ〳〵ある所へ傾城和國出かけ、後より抱きつかうかといふ思ひ入れ、いろ〳〵あり、兩方互ひに顔見合せ恟りし、

和國　てもマア、思ひがけもない所へ、ようござんしたな。

小浪　お前は先刻に、出口で逢うた女中さん。

和國　アイ。申しお若衆様。わしやお前に、逢ひたうて逢ひたうて。

浪之　なんぞ用がござんすかえ。
和國　アイ、その用はなア。
浪之　その御用は。
和國　御用は。
浪之　エヽ、京飛脚かなんぞのやうに、御用々々ばつかり云うて、なんぢやいな。
　ト和國、浪之助に抱きつく。
アレエ。コレ／＼、何ぢやいな／＼。
和國　お若衆様、先刻に出口で見初めてから、どうも斯うもならぬわいな。
浪之　どうも斯うも何がなりませんえ。
和國　どうぞ叶へて下さんせいな。
浪之　そんなら、わたしに惚れさんしたのかえ。悪い思ひ附きぢや。
和國　アイ、わたしがやうな者は、お氣に入るまいけれど浮世の不肖ぢやと思うて、叶へて下さんせいな。
浪之　サイナア、叶へて上げやんしたてゝ、なんの役に立たぬ事ぢや。
和國　とても叶はぬ戀ゆゑ、役に立たぬと云はしやんすのかえ。お前は殿御ぢやゆゑ、姫御前の心は知らしやんすまいが、斯う思ひ染めてからは、どうも思ひ切らるゝものぢやないわいな。
浪之　アイ、其やうに云うて下さんすは、嬉しうござんすけれど、わたしも惚れた殿御が。
和國　ホヽ。お前が惚れた殿御とはえ。
浪之　サア、殿御はな。ハテ、知れた事。わしは殿御でないか。しかも男の若衆ぢや。若衆ぢやさかいで、女子の側へ寄つては念者が叱る。爪の端でも貰やせんぞ。
和國　成る程、お若衆さんぢやに依つて、そんな事もござんせう。そのお前の念者様には、わたしがよいやうに断わり云ふ程に、どうぞ聞いて下さんせ。否ぢやと云うて下さんすと、わたしは長らへてはえい居ぬわいな。
　ト浪之助、氣の毒なるこなし。
浪之　オヽ、道理でござんす。わたしでも身につまされて……サア、女同士ならば身につまされて云ひもせうが、拙者男でござる。左やうの猥らな、どき／＼致した事は嫌ひぢや。以後はキッと禮儀を正して下されうならば珍重至極に存じます。
　ト此うちお袖、出かけ見て
そで　コレ、和國さま、爰にかいな。六さんが尋ねて居さ

んす。ちやつと奥へ來ておくれいな。
和國　アイ〳〵。お袖さん、先刻にお前に頼んで置いた、お若衆さんは、あなたぢやわいなア。
そで　ムウ。主かえ。こりやお前が惚れさんした筈ぢや。
モシ、お若衆樣、ツイにお目にかゝりませぬが、初對面から押しつけた事ながら、あの和國さんがお前に、きつい惚れやう。わたしに取持つてくれてゝ。どうぞ附合うて上げましてなおくれえ。
浪之　エ、、なんぢやいな。お前までが同じやうに、辛氣な事であるぞ。
十三　サア〳〵。やう〳〵と才覺して來たぞ。
ト杯持ち出る。浪之助、十三を見て走りかゝり、抱きつく。此うち葛城出かけ、この體を見て、中へ分け入り
葛城　ア、コレ、何さしやんすぞいなア。
十三　オ、、葛城か。
葛城　アイ、このお方は近付きかえ。
十三　オ、、あの人は小浪。イヤ、浪之助と云ふ、おれとは兄弟分の若衆ぢやわいなう。
そで　ムウ。そんなら幸ひでござんす。お前、仲人して女夫にして上げまして下さんせ。あの和國さまが、きつい惚れやうぢやわいの。
十三　誰れにいの。
そで　あの浪之助さんに。
十三　ヤ、ア。この浪之助に。アノ和國さま。ハ、、。
ト大笑ひ。
葛城　コレ、十三さん。姫御前は、相身互ひぢや。どうぞ叶へて上げておくれいな。
浪之　十三さま。いかう懇ろになさんすが、お前が、あの高尾さんかえ。
葛城　イエ〳〵、わたしや葛城と云うてな。
浪之　お前も十三さまと譯があるかえ。さても郞と云ふ所は、たんと惚れ手のある、けなりい所でござんすなア。
ト十三の太腿を抓る。この時、後より和國、浪之助を抓る。
浪之　ア痛々々。
葛城　なんとさしやんしたえ。
十三　イヤ、思ひがけもない太腿から、ア、痛。疝癪が發つたさうな。
葛城　そりや冷えさしやんしたに依つてぢや。

そで　それには幸ひの杯。サア、酌せう。一つあがれいな。
葛城　お前とわしと祝言の杯、呑んで上げうかえ。
十三　オヽ、呑んでさしや〳〵。
葛城　アイ〳〵。
　ト呑まうとする。浪之助引取り
浪之　イヤヽならぬ。
葛城　不作法な。何さしやんすえ。
浪之　何するとはこの杯、十三さまに戴かす事はならぬ。
十三　コレ〳〵小浪。イヤサ、浪之助。その身振りは何ぢや。
浪之　サア、これはな……オヽ、相するのぢや。
葛城　そりやお慮外でござんす。お袖さん、ついで上げておくれいなア。
そで　アイ〳〵。ドリヤ、お酌せうか。
浪之　これはお慮外ぢやなア。
　ト受け〳〵呑む。
葛城　サア、ちやつと下さんせ。十三さんから戴きたいわいなア。
浪之　嫌ぢや〳〵。
　ト又呑む。

そで　コレ、其やうに續けて呑まんしたら、酔はさんせうぞえ。
和國　それ〳〵、醉はしやんせぬやうに、お前の杯、わたしが戴かう。
浪之　オヽ、お前になら、さいてやらう。
和國　アイ〳〵。忝なうござんす。
　ト戴き呑む。
そで　アレ、十三さま、見やしやんせ。浪之助さんが、ひんひんさしやんしたが、杯をさいて、どうやら談合がなりさうな。こちらやお前方は、爰に居ては邪魔になりさうな。葛城さん、十三さんをちやつと、寢間へ連れまして行きいなア。
葛城　アイ〳〵。寢間へござんせ。
　ト十三の手を取り、行かうとする。浪之助、引退け
浪之　なにを。人に見せつけたらしい。寢間へ行かうとはならん。
葛城　なぜぢやえ。
浪之　なぜとは、わしや若衆ぢやに依つて、念者の十三さんを、女子の側へ寄せる事は、ならぬ〳〵。
そで　オヽ、若衆さんだてら、きつい悋氣ぢや。葛城さん、

搆はずと通れまして行かんせいなア。
葛城　アイ〳〵。サア、ござんせいなア。
ト十三の手を引く。
浪之　エヽ、アタしつこい。無理に行かうと云はんすと、
叩くぞえ。
葛城　どうして叩かんす。
浪之　斯うして叩くわえ。
ト兩方叩き合ふ。
十三　コレ、待ちやいなう。
ト分ける。皆々取さへ引ッ張り合ひ、奥へ入る。權兵
衛、下駄を持ち出て
權兵　エヽ、コレ、どうぞ早う殿樣を去なしたいものぢや
が、いま奥で聞けば、高尾を身請けして、直ぐに舟で去
ぬるとやら云はしやりましたが。
ト奥を窺ふ思ひ入れあり
まだぢやさうな。側に附き添ふ惡者どもが。ア、心元
ない。
ト思案して
さうぢや。呪ひして去なしてこまさう。
ト思案して、腰提げより火口を出し、下駄に灸を据ゑ
る。
もう去なしやりさうなものぢやが。雪駄よりは、ちつと
利きが遲いが知らぬ。
ト方々嗅ぎ廻る思ひ入れありて
面妖な。どこぞ好い薫禮が通るか知らぬ。
ト思ひ入れありて、井戸の内より忍びの者出て、方々
嗅ぎ廻る。
忍び　面妙な。この筈ではないが。
ト云ひ〳〵、また井戸へ入ろと、權兵衛、この間木蔭
へ隱れて、右の眞似をして
權兵　面妖な。この筈ではないが。
トこの間、浮世渡平出かけ、始終見て居る。
渡平　先刻から、好い薫禮の香ひがすると思へば、ハ、ア、
この下駄の香ひぢやさうな。
渡平　親父樣。ハテ、お前は味いな物、持つてござります
な。
權兵　コレ、わりや先刻にからの樣子
渡平　承りました。その下駄は、六さまと云ふ大々名の
でござります。
權兵　たつた今貰うた。

渡平　その下駄を。
權兵　その樣子は、今云ふ事でもあるまいが、わりやマア
　この間は。
渡平　ちつと叶はぬ用がござりまして
權兵　京へでも行たと云ふやうな事か。
渡平　マア、そんなものでござります。
權兵　年寄つた親を捨てゝ置いて、不孝者めが。
渡平　お叱りは御尤も。つい一夜泊りと存じましたれど、
　何やかや思はぬ隙入りで、やうやく今でござります。
權兵　父母在す時は遠く遊ばず。遊ぶ事必らず法あり。こ
　んな事はわれが常々心懸けるところ。よもや忘れはせぬ
　であらう。
渡平　勿體ない、なんの片時も、忘れうと思うても忘られ
　ぬ、大恩のお前樣。ア、、どうなされたぞ。御持病の疝
　氣など起りはせぬかと、案じ／＼歸りまして、我が家の
　敷居も、どうやら高いやうで、おづ／＼入つて尋ねます
　れば、今朝から得意廻りにお出なされた樣子。年寄られ
　たお前樣に、樂をさせますこそ道なれ、却つて御苦勞か
　けますも氣の毒さに、ちやつと代つてお休ませ申しませ
　うと、後を追うて見れば今の樣子。

權兵　眞黑な奴を。
渡平　如何にも見ましてござります。
權兵　正しく彼れは。
渡平　シイ／＼。
　トあたりを見て
　壁に耳。
權兵　井戸の物云ふ世の中。
渡平　今お前のお貰ひなされましたは、伽羅の下駄。
權兵　アノこれが。
渡平　焚かぬ先より焦るらんと、賞美せし芝舟と云ふ名香
　でござります。
　ト權兵衞、下駄をつく／＼見て
權兵　ても大名と云ふものは、結構な下駄を穿くものぢや
　なア。
渡平　その下駄を下された、六さまのお心は。
權兵　どうでもおれに、下駄を預けたのかいな。
渡平　世の諺に云ふ穿き物に灸。
權兵　呪ひに据ゑた灸が
渡平　薫じ渡つた今の匂ひ。
權兵　どうでも葬禮の匂ひと思うたて。

渡平　何にもせよ、大切なその下駄。
權兵　貰うても大事あるまいかいなう。
渡平　なんの大事ござりませう。わたしもあやかる爲に、少しばかり、
　ト小柄を出し下駄を削る。
頂戴仕りまやう。
權兵　頂戴など何なとせい。餘り結構な物で、どうも仕樣がない。
渡平　なんでも話しの種。隨分大切になされませ。
權兵　オヽ、其方も草臥れてあらう。一緒に去なう。サア、おぢや。
渡平　ハイ、お供いたしませう。が、わたしはちつと。
　ト井戸の方へ思ひ入れ。權兵衞もこなしあり、
權兵　イカサマ、何ぞ用もありさうなものぢや。おりや先へ去ぬる程に、何もかも、とつくりと樣子を……早う戻りや。
渡平　追ッつけ歸りませう。
　ト荷より丸盆を出し、右の下駄を載せ
權兵　佛も下駄も同じ木の切れと、云はしやりましたからは、この下駄を佛樣にせいと云ふ事ぢやな。誠に嵯峨の釋迦如來は、栴檀ゆゑ。大名の伽羅の下駄は借錢金。
渡平　ハテ、何を仰しやりますぞいの。
權兵　ハヽヽ、これにかゝらせ給ふは伽羅の下駄でござる。御信心の方々は、近う寄つて拜いて見さつしやりませ。冥加錢々々々々。
　ト唄になると恭々しく向うへ入る。渡平、あと見送り、右の下駄の削りさしを、火入れの火へくべると、井戸より右の忍びの者出るを引ッ擔ぎ投げる。それを來るところを、ポンと當てる。死骸を井戸へ打込む。渡平、井戸へ入る。十三、手燭持ち出て
十三　アヽ、可哀や高尾が、おれに義理を立て、御前のお心に從はぬ、志しは嬉しけれど、短氣な殿樣、もしやひよつと高尾が身の上にかゝらうと思へば……イヤ〳〵、先づ大切なこの尊像。取返してくれた小浪。エヽ、忝ない。
　ト戴く。此うち銀兵衞出かけ、聞いて居て
銀兵　その尊像を。
　ト取りにかゝる。立廻りになる。此うち浪之助出かけ見て居り、ちやつと手燭に毛氈かける。
南無三、火が消えたワ。

ト暗がりの思ひ入れ。この間に浪之助、右の袋入を拾ひ、ちやつと灰吹と入れ替へ、向うへ抛る。銀兵衛、十三、兩人探り廻り、その袋を取り、銀兵衛、忝ないと行かうとする。十三追ひ駈け入る。後に浪之助、胴慄ひする思ひ入れ、いろ〳〵あり、手燭にてその一巻を、よく〳〵見て

浪之　コレ十三さま、書き物は爰にあるわいな。

ト渡さうとして思ひ入れある。

イヤ〳〵、いま十三さまに渡しては、また今の奴に取られさしやんであらう。マア、これは……それ〳〵、こりや大切の物ぢやに依にて、これさへ在所へ持つて去んで置いたりや、十三さまが尋ねてござんせにやならぬ。オオ、こりや好い物が手に入つた。エヽ、忝ない。

ト戴く。向うへ入らうとすると、銀兵衛、抜き身を提げ出て、浪之助行き合ひ悄りし、慄へ〳〵入る。銀兵衛、本舞臺へ來て、忝ないと、右の袋を開け見て

銀兵　こりや灰吹。いつの間に入れ替へ居つた。エヽ。

ト打捨て、思ひ入れあり

先づ大切な密事。

ト火入れにて懐中の香を焚く。井戸より渡平、忍びの形にて出る。

コリヤ、この狀を是妙院どのへ。大切な用事、氣取られぬやうに。

ト狀を渡す。渡平戴き、また井戸へ入る。

憎くいは十三郎め。

ト見廻すうち十三が鎗を見付け

この鎗は十三めが鎗。

ト思ひ入れあり、鎗の穂先を切つて

お濱屋敷への近道は斯う。

ト走り入る。後へ渡平出て

渡平　是妙院どのへ、渡井銀兵衛。

ト狀を讀み、口に啣へ、尻からげながら向うへ走り入ると、返し。

道具、一面の黒幕下りる。橋がゝりより見事なる御座船出る。踊り三味線になる。六角、高尾が肩にかかり丹左衛門、雲右衛門、段九郎、源藏附き出る。葛城、遠山、悉萩野、高彌、早野も附き出る。

丹左　サア、太夫どの、早う船へ乘らしやれ。

高尾　オヽ、わしや嫌ぢやいな。

雲右　嫌と云うて濟むか。サア、乘らしやれ〳〵。
丹左　お手を取りませう。サア、皆乘らしやれ〳〵。
葛遠　アイ〳〵。
ト皆々船へ乘る。六角ほろ醉ひの體にて
六角　サア、これから太夫と同船で樂しむ。家中の者は屋敷へ歸れ〳〵。
三人　畏まりました。
雲右　サア、何れも。
段源　お出でなされ。
ト下座の方へ入る。
六角　サア、太夫、船へおぢや〳〵。
高尾　ハイ、お志しは嬉しいけれど、わたしはどうも。
六角　十三郎へ義理が立たぬと云ふのか。そりや愚痴なぞや。義理も情も、廓に居るうちの事。よく〳〵思へばこそ、身請けしたこの義綱。外への義理はあるまいがな。
高尾　身請け〳〵と、恩に着せさしやんしても、弱きを捨て、強きに靡く勤めの法はないわいな。
丹左　太夫どの、そりやどう云ふ事ぢや。殿がよく〳〵に思し召せばこそ、身請けなされたぞや。さほどに十三郎に義理を思はゞ、なぜ十三郎に身請けされんぞ。
高尾　サア、それはな。
丹左　嫌でも應でも、殿に抱かれて寢せにや置かんぞ。
高尾　傳へ聞く小宰相の局は、水に入つてその名を雪ぎ給ふ。この水底に身を沈め、その名を淸めん。さうぢや。
ト舟へ飛び上がり、身を投げようとする。六角、ツカカッと行て引きつけ
六角　憎くい女め。これまで家中の者の諫言、世の謗りもいとはず、斯程まで心を盡す、その志しを無にして、この水底に沈まんとは、不敵の女め。北州の千年、咸陽宮も亡ぶる時節。泥中の藻屑となさんは、惜しいとは思へども、是非に及ばん。
ト切りつける。高尾、船へ逃げ込み、障子に煙あがる仕掛け。
禿皆　アレ〳〵、
丹左　ヤレ鎭まれ。
ト死骸を川へ打込み「構はずと舟をやれ」と丹左衞門云ふ。
船頭　ハ、ア。
ト船を押し入る。死骸は西へ流る仕掛け。右黑幕引上げると、前一面の塀降りる。白樂天の謠となり、鳴り

物囃子になる。十三、逃げて出る。浪之助、追ひ駈け出て

十三　エヽ、聞分けのない。爰放さつしやれ。

浪之　イエ〱、なんぼ叱らしやんしても放しやせぬ。お前は勘當請けさしやんしたぢやないかえ。さうぢやに依つて、わたしが在所へ連れ立つて去にやんすわいな。

十三　ハテ、滅相な。殿の御前こそ遠慮云ひ付けられたれ、御家老協議の上でなければ、勘氣は請けぬお家の格式。サア、放さつしやれ。

浪之　そんなら附いて行きやす。

ト云ふ所へ、お袖と男出て

そで　いとしい事をしたわいなう。

男　左やうでござります。

ト云ひ〱二人を見付け

そで　ヤア、、十三さま、

十三　お袖か。

そで　コレイナア、高尾さんは、殿樣と船で抱かれて寢やしやんせんと云うて、お手討にして海へ切り込ましやんしたわいな。

十三　ヤ、ア。

トへたる。

浪之　エヽ、そんなら高尾さんは、殿さんのお手討に。

そで　アイ、船に乘り合した者は、高尾さんの側杖。いぢらしい事ばつかりぢやわいなア。

浪之　その高尾さんの死骸わえ。

そで　向うの川へ流れて來るげな。廓へ知らして、死骸を葬むる心ぢやわいなア。十三さま、弔らうてあげなされ。

男　サア〱、お出でなされませ。

ト云ひ〱花道へ入る。十三、ウツトリとして居る。浪之助、氣の毒のこなし。

十三　おれゆゑに。

ト泣く。

浪之　其やうに泣かしやんすと、蟲でも出ると惡いわいな。

十三　せめて死骸なりとも。

ト行かうとして足の立たぬこなし。

浪之　コレ、待たしやんせ。お前が高尾さんを思はしやんすも、わたしがお前を思ひまするも、戀に變りはないもの。そりや餘り心強い。胴慾ぢやわいなア。

十三　志しは嬉しいけれど、生き甲斐の無いこの十三。未來で逢ひませう。さらば。

ト　ひよろ／＼として入る。浪之助、後追ひ駈け入る。
この間矢張り白樂天の謠囃子。敵之助、豆腐の荷を擔ひ、大小を菰に包み、上に置き

敵之　豆腐油揚げ……ハア、こりや殿の下屋敷。あの謠は白樂天。佞人どもに煽てられ、淺ましいお身持ち。エ、、情ない……ア、、思ふまい／＼。この態になつたも意見から……ホウ、ぞんぶりと暮れた。ドリヤ、夜の明ける時節を待たう。豆腐々々。

ト　橋がゝりへ行かうとする。

内方　狼藉者が入込みましたぞ。門々を固めさつしやれ固めさつしやれ。

ト　ばた／＼。

敵之　ヤア／＼、狼藉者とは氣遣はしい。

ト　菰包みの大小差し、尻からげ。この間に銀兵衛、黒裝束にて井戸より出る。向うより雲右衛門、段九郎、源藏、頰冠りに顔を隱し出る。敵之助見て

敵之　曲者待て。

ト　銀兵衛にかゝる。立廻りあり、銀兵衛、向うへ走り、敵之助追ひ駈けうとする。雲右衛門、段九郎、源藏、引戻し、立廻りあつて、段九郎を切り倒し、雲右衛門の頰冠り取り、顔見合せると。

雲右衛門か。

ト　源藏かゝる。雲右衛門は向うへ走り入る。敵之助、追ひ駈け入る。源藏も駈けて入る。この間、渡平窺ひ居て、段九郎に止めを刺し、懐中の狀を引出し、透かして見て、向うへ走り入ると、返し。

道具、一面の高塀引上げると。
造り物、一面の二重舞臺、松の繪の唐紙。六角、白樂天の形にて手を負ひ居る。青貝靱負、梅坂主水、介抱し居る。神原丹左衛門、舞鶴屋傳三、傾城遠山、傾城葛城、禿高彌、萩野、早野、並び居る。侍ひ大勢、提灯持ち居る。

丹左　殿様、お心持ちはな。

六角　人蔘持て。

主水　ハツ。

ト　箱臺持ち出る。六角、一口吞み

六角　手裏劍打ちかけたは、遺恨ある奴の仕業。

丹左　人數の手分けし、詮議の最中でござります。

六角　ハテ、斯程な淺手、性根は慥か。氣遣ひすな。上屋

敷へ立歸る。供の用意せい。
丹左　でも、このお疵では。
六角　馬鹿な奴の。遊興の場所で、疵養生ならうか。丹左
御門、腹を卷け。
丹左　ハッ。
ト杯を疵口へ當て、白木綿にて疵口を卷く。六角、鎗
の穂先を拔き取り、よく／＼見て
六角　正しくこれは鎗の穂先。ハテナア。
トばた／＼。常磐之丞走り出て
三之　申し上げます。上屋敷の寶藏を切り破り、西天草の
御箱、紛失仕りましてござります。
六角　ナニ、室町どのへ差上ぐる、西天草紛失とは。ホイ。
ト云ふ所へ、侍ひ一人出て
侍ひ　申し上げまする。室町さまより火急の御上使、家老
中のお斷わりを聞き入れず、只今これへお入りでござり
ます。
六角　西天草紛失と云ひ、俄の御上使。時も時、折も折。
ハテナア。
傳三　私しどもは、なんと致しませうな。
丹左　われ達は勝手に歸れ。

皆々　ハア／＼。
ト皆々逃げ入る。
六角　遊興の場所と云ひ
丹左　殿のお手疵。
皆々　寶の紛失。
內介　御上使。
丹左　何れも。出迎ひ召され。
ト次第に並ぶ。
皆々　お通りあられませう。
ト皆々辭儀する。前へ黑幕下りる。
造り物、兩方の下棧敷へ、茶屋暖簾、掛け行燈一面
に出ると、一面に本雨降る。井戶の內より大館法印
黑裝束にて、西天草の箱を持ち出る。銀兵衞、向うよ
り走り出る。兩方、恟りして顏見合せ
大館　銀兵衞どのか。
銀兵　法印、萬般の首尾は。
大館　西天草。
ト寶の箱渡す。
銀兵　出かした。是妙院どの、一味の諸士へなア。

ト囁く。

大館　合點ぢや。

銀兵　行け。

大館　ハ、ア。

ト井戸へ別れ入る。雲右衛門、源藏、手を負ひ出る。敵之助、追ひ駈け出る。

雲右　敵之助、狼藉な。何するぞ。

敵之　合點のゆかぬ曲者。取逃がさしたはおのれ等。勘當のお詫びの種。サア、有やうに云うてしまへ。

雲右　さう吐かしや、もう。

ト切りかける。敵之助、雲右衛門、源藏三人、いろいろ立廻りありて、雲右衛門逃げ入る。源藏を切り倒し、死骸に乘りかゝり

敵之　御前て氣に入りの三人を手にかけ、詮議の種を失ひ、云ひ譯立たぬ。この上は是非に及ばぬ。

ト腹切らうとする。この間、渡平、傘さし、出かけ居て、その手をヂッと押へ

渡平　待て。

ト敵之助、顔見合せ

敵之　渡平どの、曲者を取逃がし、詮議の種は失ひ、お側の侍ひを手にかけた云ひ譯。

渡平　コリヤ、殺しても大事ない。云ひ譯の種、貸してやる。

ト銀兵衛より取つたる一通を渡す。

敵之　この一通は。

ト見て

渡井銀兵衛より

渡平　是妙院どのへ内通。

敵之　すりや、この一通を

渡平　秋塚どのへ。

敵之　人殺しの科が詮議あらば

渡平　喧嘩の相手は浮世渡平、云ひ譯は、これこの狀。

敵之　すりや、その狀で。

渡平　委細は追つて

敵之　さらば。

ト走り入る。

源藏　うぬを。

ト渡平にかゝるを、見事に捕へ切り込み、落ちてある狀を拾ひ、讀み〳〵向うへ入る。返し。

道具、黒幕引上げると、向う一面に茶屋の體。掛け行燈、二重舞臺、土手になり、苫原川柳、柵みに高尾死骸流れかゝる。めりやす。蛙鳴く所へ、十三、バタ／＼と走り出て、方々尋ね、右の死骸を見付け

十三　こりや高尾の襠襠。

ト死骸を抱き上げ見て

コレ高尾、殿のお手討になつたも、この十三ゆゑ。斯ういふ別れと知つたなら、仕樣もやうもあらうもの。コレ高尾、十三かと、ま一度云うてたも。可哀や／＼。

ト取亂し泣き、あたりの石を拾ひ、袂へ入れ

十三　死なば一緒と誓ひし通り、南無阿彌陀佛。

ト死骸を抱き、身を投げうとする。大勢の聲にて

内に　ハイ／＼。

ト十三郎、振り返り見て

十三　あの提灯は神原丹左衛門。殿樣に色を進め、高尾がお手討になつたも、みな彼奴等が業。一太刀なりとも恨みを晴らすは、高尾への追善。

トきつとなる。と丹左衛門、紋付きの提灯持たせ、乘り物に若黨大勢附き、丹左衛門供して出る。十三、窺ひ寄り

神原丹左衛門、名古屋十三が恨みの刃。受取れ。

ト切りかける。丹左衛門、ウンと反る。侍ひ、これはと驚ろく。十三、提灯切り落す。狼藉者と皆々逃げ入る。

丹左衛門、うぬ。

ト切りかけるを

丹左　待て。聊爾すな。

ト乘り物の内より

六角　ヤレ早まるな。十三待て。

十三　ヤア、御前はお乘り物に。ハア。

ト下がる。乘り物を開け

六角　義綱が手にかけたる高尾が死體、受取れ。

ト乘り物より高尾を出し、渡す。

高尾　十三さん、わしや無事で居たわいな。

十三　ヤア、すりや殿のお手にかけられしは。

高尾　可哀や、わしが衣裳を着せ替へ、造り手の杉を。

丹左　殿のお手討。十三どの、高尾どのゝ死骸に、末長う添うてやられよ。

六角　某がこれまでの放埒は、室町どのゝ誹りを請け、義理ある是妙院どの、伯父兵庫どのゝ、何事も心任せにさ

せん爲。
丹左　この神原が進めし惡事は、殿の云ひつけ。この事他言いたさぬと云ふ、誓言は斯くの通り。
ト腹へ突ッ込む。
十高　コレ、早まつた事を。
六角　ハア、不便の最後。ナニ十三、高尾は外戚腹の我が妹。
十三　ナニ、高尾どのを殿の御兄弟とは。
高尾　夫婦木と云ふ名香で
六角　不思議に知つたは、乳母が遺言。親人の御自筆の書置。
ト書き物を拋る。十三、開き見る。この間、西の通り道より、權兵衛、提灯を灯し出かけ、東の通り道より渡平、弓張り提灯をもし出て、灯影を隱し立聞きする。
十三　すりや、高尾どのは殿樣の
六角　腹替りの妹。後室是妙院どの、伯父兵庫どのゝ心腹。國家の恥を思ひ、無慘ながらも杉を手にかけ、高尾を手討と見せしも
丹左　大藏どのゝ横戀慕、後日の邪魔をさせまい爲。この丹左衞門が計らひ。

六角　家國の騷ぎを思ひ、我れと我が身に科を請けるは、この義綱が念願。今逢うて今別るゝとは、よく〳〵薄い兄弟の緣。孤子の妹、十三郎、いつまでも仲ようして、見捨てくれなよ。我れは不慮の劍難ゆゑ。
ト疵の痛むこなし。
十三　ヤア、。殿樣はお手疵を。
六角　紛失せし西天草、室町どのへ差上げるまでは、鎗の詮議は追つての事。丹左衞門が忠義の切腹。ホウ、、、過分なぞよ。
丹左　ハア、廓通ひの惡事のたゝまり、云ひ譯なさのこの切腹。
十三　殿のお惠み、丹左衞門のお志し。
高尾　どうマアお禮を申さうやら。
六角　コリヤ。供廻りの歸らぬうち、死骸を連れて早う行け。
十三　殿のお手疵、この切腹。
高尾　なんと見捨てゝ行かれませう。
丹左　忠義の切腹、無にするのか。
六角　志しを無足にするか。
高十　すりや、どうあつても

高尾　行けとある殿のお詞。
十三　背かれもせず
高尾　行かれもせず
十三　高尾どの。
高尾　十三さん。
渡權　そんなら。
ト兩方より提灯差出すを、六角、丹左衛門、叩き落す。一度に十三、高尾を圍ふ。渡平、權兵衛、悄りする。

幕

二段目

佐々木館の場

役名――岩倉主膳。佐々木大領の亡靈。奥方、萩の方。後室、是妙院。名古屋將監。名古屋十三郎。松島敵之助。秋塚帶刀實ハ浮世渡平。澤井勘平。民屋一角。同妹、千草。才原大藏。佐々木鶴若丸。叔父、淺井兵庫。傾城、高尾。乳人、淺香。才原勘解由。

造り物、惣二重舞臺、金襖。臆病口、中二階、金骨障子、砂場の際に神木の松、注連飾り、すべて屋敷の體。幕の内より、鶴若、若殿の形にて、眞中に直り居る。二重舞臺の下に、一角、兵庫、大藏、十三郎、勘平、皆々衣裳上下。二重舞臺の上、兩方に萩の方、奥方。是妙院、後室にて直り居る。淺香、裲襠にて立つて居る。右詰めの中へ、小姓、腰元、皆々立ちかゝりゐる。

兵庫　鶴若を跡目とは、この兵庫は吞み込めぬ。
一角　所を吞み込ませてお目にかけませう。
兵庫　見事其方が。
一角　くどい。
是妙　肉縁ある兵庫どのに向つて、推參な、扣へぬか。
一角　推參でございません。
淺香　コレ／＼、鎭まらしやんせ。奥樣、若殿の御意ぢやぞ。
萩の　鶴若、ちやつと鎭めやいなう。
鶴若　皆鎭まれい／＼。
皆々　ハツ。
兵庫　その若殿呼はりが吞め込めぬ。
大藏　ハテサテ、伯父者人、家の跡目はどう踠いても、某

より外にない。
淺香　憚りながら、そこが今日の評定。内々ならぬ事ゆゑ、國詰めの御家老秋塚帶刀さま、また京詰めの家老、この淺香が兄の才原勘解由さま、兩御家老、今日この中屋敷へお寄りなされ、先殿樣の若殿、私しがお育て申した、これなる鶴若丸さまに、十が九つ定まりさうなお家の相談。申し憎い事ながら、横合ひから、御肉縁とは申しながら、御家老並になりござる兵庫さま、あの大藏さまが先々大領樣の筋目なれば、跡目に立てよと御意なされましても、そりや兩御家老のお着きなされた上の裁斷。その裁斷を待たぬうちは、マア、一角さま十三さまを始めとして、成る程とは仰られそもないもの。殊に跡目の評議一決見屆けの爲武將の御所より御上使樣お入りのお迎ひに、十三さまの親御、將監さま、最前お上りなされれば、首尾ようお跡目叶ふやうにと、奥御殿で大館法印どのを呼び寄せ、御祈禱御祈念の最中に、双方のお爭ひ。白い黑いは天道樣が明らか。ナア、兵庫さま、左樣ではござりませぬか。
兵庫　さればなア。
萩の　何事も追つての事がよいわいの。

十三　自體また大藏さまが、お跡目を望まつしやるも、何とも呑め込めぬ。
兵庫　なんであらうが、筋目正しき大藏を差措き、外へ家督の納めやうがない。
大藏　その時の吠え面が、目の先へフラ／＼する。
一角　そりや大藏どの、こなたの事サ。
大藏　家來の身で、舌の根が伸びやうがな。
十三　才原どのゝ子息の大藏どの、御家督の定まらぬうちなんの爲に敬ひませう。
一角　矢ッ張り今までの通りに、同輩の大藏どの。
兵庫　後室のお胤と云うても。
是妙　自らが詞を背くか。
一角　こればつかりは用ひませぬ。
兵庫　用ひさせて見せう。
十三　見事こなたが。
兵庫　見せるぞよ。
一角　見物いたさう。
トまた詰める。
淺香　マア／＼、お扣へなされませい／＼。
皆々　お扣へなされませ／＼。

ト兩方を宥めるうち、花道を橋がゝりより、才原勘解由、秋塚帶刀、出て

兩人 待つた。双方とも先づ扣へられてよからう。

兵庫 扣へとは。

帶刀 秋塚帶刀、只今出着いたしてござる。

勘解 才原勘解由、歸館いたしてござる。

ト此せりふ云ひ〳〵、兩方より兩人、同勢を連れ出て、よき所へ立つ。此うち

是妙 兩家老の者。

萩の 待ち兼ねましたわいなう。

帶勘 ハア。

兵庫 勘解由、大儀々々。

大藏 早速ながら、この場の樣子。

勘解 あれにて一々承知いたしした。

一角 國詰めの秋塚さま、幸ひの折柄、今日御家督相定むる時節、思ひがけなきこの有樣。

帶刀 具さに聞き屆けました。

勘解 京都の樣子、先達て飛札にて承知いたしした。今日御家督相續の出會、何れも御苦勞に存ずる。

帶刀 一別以來、打絕えました才原どの。

勘解 遠來の秋塚どの、先づは御健勝で。

兩人 互ひに大慶至極に存じまする。

皆々 御兩所樣、マア、お通りなされませ。

ト兩人ズッと本舞臺へ引分れ直る。同勢皆々入る。

勘平 委細お聞きなされた上は、申すに及ばぬこの座の論。才原どのには、如何思し召すた。

是妙 其方の詞一つで、自らが思案にあるぞや。

萩の 殿六角さま、京都に於てお身御放埓。武將よりのお咎めを請け、蟄居なされてござる折柄、一家中の心にてどのやうにならうも知れぬ家の跡目。兎角頼むは秋塚。鶴若、サア、詞をかけやいの。

鶴若 秋塚、才原、頼んだぞや。

勘解 栴檀は雙葉よりと、ハテ、爭はれぬ御器量でござるなア。

一角 秋塚どの、して、お跡目の評定は

十三 如何でござるな。

帶刀 尤も鶴若丸さまは、先六角さまの奥方、これなる萩の方さまの腹をばかり、御出生なされたれば、鶴若丸さまをお家の柱と相立て、跡目を御願ひ申すに、誰が異論の打つ者なく、下世話で申す定石の思案、されどもこれまで、お身持ち惰弱ゆゑ、京都に於て蟄居押籠めの先殿。

そのお胤押出して、跡目に立てんとは武將の聞え、殊に先々大殿、大領さまのお胤、まつたあれなる是妙院どのにお宿りなされ、才原どのへ下し置かれた、あの大藏どの、かゝる砌り、跡目には、願うてもない替へ代の若殿。

萩淺　ヤア、。

帶刀　大藏さま、こなたならでは、跡目御相續はござらぬぞや。

兵庫　すりや、大藏に

大藏　跡目を繼がす所存ぢやな。

帶刀　即ちそれが順道でござる。

勘解　例へ放埓にもせよ、一旦家國相續なされた六角さま、お身に誤まりあるにもせよ、云はゞ武將へ對しての狼藉と云ふにもあらず、こりや定まつた掟と云ふもの。

兵庫　ヤ、なんと。

勘解　秋塚どの、この才原が心底は、斯くの通りでござる。

帶刀　ハヽヽヽ、そりやお家贔屓の引倒しとやら、放埓の筋目を敬ひ、又ぞろや家國を取亂す基の跡目、この帶刀、御意得ませぬ。

淺香　コレ申し、そりやお前、なんとしたお詞。たつた今一角さま十三さまも、お前の御思案待ち受けてござりました。それにマア、大藏さまにお跡目を繼がさうとは、そりやマア、どうしたお心でござります。

帶刀　女の知つた事ぢやない。扣へて居やれ〳〵。

一角　ムウ。すりや秋塚どのは、大藏さまを相續の心であつたか。

十三　それに又、才原どのの今のお詞。

一角　ハテ、定かならぬ事ぢやなア。

萩の　賴みに思ふ帶刀の今の詮議。我が君樣は蟄居の御身分。こりやマア、なんとせうぞいの。

淺香　お道理でござりまする。

是妙　先々の大殿、自らが夫大領さまは、三年以前、家の重寶牛王吉光の刀を携へ、歌枕修行の爲と云ひ殘されて、お行くへ知れず。忘れ形見の大藏は、才原へ遣はし置いたところに、今度自らとは生さぬ仲の、六角が不行跡。その伜の鶴若、跡目に立てば家の不吉。それゆゑあの大藏を取戻し、跡目に立てうと、兄兵庫どのと云ひ合せた心をもどき、鶴若に家督を定めるとは、才原、エエ、其方は不忠な奴ぢやなア。

勘解　イヽヤ、不忠ではござらぬ。こりや勘解由が眞直ぐ

を申するのでござる。

大藏　すりや、眞實アノ鶴若を

勘解　跡目に立つる才原に向つて、外から非太刀打つてお
見やれ。

帶刀　我が守り立てた幼君を措き、當才子に同然の、鶴若
さまを世に立てんとは何が眞直ぐ。國家老を勤むるこの
帶刀が呑み込まぬ跡目。餘人の采配、無益々々。

勘解　そこを拙者が擢んでゝ、鶴若さまを

帶刀　大藏どのを御代に立てる。

勘解　鶴若どのを。

帶刀　大藏どのを。

勘解　鶴若どのを御代に立てる。

兩人　御代に立てゝ見せう。

ト兩人、キッとなる。花道戸屋の内より

呼び　御上使。

兩人　ナニ、御上使とは。

一角　すりや、先達て御内意あつた

大藏　跡目定める御上使樣。

淺香　何にもせよ、急いで御案内。

小姓　ハア。

ト四人、バラ〳〵と花道へ出迎ひ

御上使樣には、お通りあらせられませう。

ト岩倉主膳、上下にて出る。後より、將監、同じ形、
親仁にて、侍ひ大勢付き出る。

主膳　出迎ひ、大儀々々。

トすつと上へ通る。皆々こなしあつて、二重舞臺の上
へ直る。

一角　御上使樣、御苦勞千萬に存じまする。

十三　親人樣、御上使のお迎ひ、御大儀に存じまする。

將監　伜十三、してお跡目の用意はよいか。

帶刀　後室のお腹をかられた大藏さまより、この家國納め
る者は外に知らぬ。

勘解　御上使樣へ申し上げまする。跡目の儀は、六角どの
の嫡子鶴若どのへ。

主膳　等閑ならぬ當家の跡目、極まる印に家の重寶、萩の
一卷、武將の御前へ持參ある吉例。今日執行はんとあつ
て、これある將監、上使迎ひに立越されしゆゑ、早速御
上意承つて參つた岩倉主膳。跡目の相續、依怙なきや
うに、才原、秋塚兩家老の計らひ、とくと決定して、聞
き屆けるは上使の役。

淺香　すりや、鶴若さまとも大藏さまとも
十三　相極めたその上で
一角　お跡目を願へとな。
主膳　萬端兩家老の立合ひの計らひが、至極に存ずる。
ト帶刀、勘解由、こなしあつて
萩是　イカサマナア。
主膳　別して仰せ渡さるゝは、先つ頃東山どのより、相檢められんとある當家の重寶、西天草の一本。元この西天草は、淳和天皇の御宇、丹波の國水の江、浦嶋と云ひし者、龍宮城より種を傳へ、この日の本に芽を生じ、卽ち和名をまたしびと呼び來る。急病急難は云ふに及ばず、如何なる金瘡諸毒をも、忽ち平癒し、一命を助けずと云ふ事なき稀代の名草。日本に種をおろせし事、我が朝の譽れなりと持て囃すところに、唐にも早種を分ち、剩さへ中天竺まかだ國へ相廣まり、唐土に木天蓼、天竺にては西天草と賞名を稱へ、土地相應せしにや、中天竺に出生の草は、唐土日本より相勝れて、効能强しと世上の風說。足利どの聞き及ばれ、先年渡天の折から、上意を以て取寄せられし西天草の分け根五本。その頃老中山名細川、當佐々木の家、某が祖先岩倉左衞門、この四奉行へ分ち與へ、相殘る一本は、東山の御文庫に納めると云へども、斯程得難き重寶なれば、疎かならん事を惜しまれ、この度右四奉行へ、西天草檢められんとの御上意。當家までも傳へしところ、六角どの放埓ゆゑ、その儀延引いたせし段、武將の本意に相叶はず、この度跡目相極まらば、時日を移さず家の重寶、西天草を持參いたせよとある、內意の御諚、謹しんで承知せられい。
勘解　殘る方なき內意の御上意、委細畏まり奉りまする。
帶刀　ナニサマ、ハヤ、武將にも據ろなく思し召さるゝ當家の跡目、內議に及びまする暫時の間、對客の間へお入りあられ、御休息願ひ奉ります。
主膳　跡目極まる間、暫らく猶豫いたさう。
一角　小姓衆、御上使御案內。
小姓　ハツ。
淺香　お二方とも、暫らく一間へ。
勘解　秋塚どの。
帶刀　才原どの。
主膳　何れも後刻。
皆々　先づお入りあらせられませう。
ト唄になり、この一まき皆々入る。淺香、殘り

淺香　存らへばまだこの頃や忍ばれん、憂しと見し世ぞ今は戀しき。エヽ、戀しい〳〵。その以前、あの萩の方さまの御前を勤めて居た時に、あの秋塚さまも奥勤め、互ひにソッと云ひ交して、只ならぬ身となり、惡事千里とツイ御前のお耳に入り、不義の科を赦されて、その上のお情に、晴れて夫婦となり、程なう無事に產み落し、親子一緒に暮らすうち、兄才原どのゝ心のつれなさ、秋塚どのと不和となり、その中に立つたこの身の悲しさ。薩と日向で暮らすうち、兄さんは京都のお勤め。殊にその頃お產みたての、鶴若さまへ乳を分けたが、夫婦の別れ。お國から程遠き、この兄さんの中屋敷へ、御前樣や鶴若さま諸とも、別れ暮らした六年振り。日頃戀しい懷かしい、夫に逢うても、積る話しも語られぬ武士の行作。何かにつけて宮仕へ程、辛氣なものはない。シタガ、御前樣もこの淺香も、杖柱とも思うて居た、秋塚どのゝ今のお詞。殊に何かを思ひ合せば、心得ぬ事もあり、こりや樣子のありさうな事ぢやわいの。

ト此うち、帶刀、奥より出かけ

帶刀　女房淺香、無事にあつたか。

淺香　エヽ……帶刀どの、マア、何から云はうやら……坊は達者で居りますかえ。

帶刀　隨分堅固で、三田兵衞が介抱して居る。

淺香　今年はどこも疱瘡が流行つたが

帶刀　去年の冬、疱瘡も輕くしたわい。

淺香　それはマア、何より嬉しうござります。

帶刀　淺香、其方にくれる土產がある。

淺香　私しに土產とは、お國の名物、信夫摺りの小袖と云ふやうな物かえ。

帶刀　土產は則ちこの文箱。

ト帶刀、懷中より箱を出す。淺香キッと見てこなしあり、花活けの杜若の花を取つて來て

淺香　そんならわたしも、お前樣へ馳走のこの一本。

帶刀　すりや、この一本を。

淺香　この文箱と、紫の色とはなしに杜若、それとは見れど影やうつらふ。

帶刀　面白い。その文箱の內の一通。封印を切つて見やれ。

ト淺香、右の箱の封を切る。內に菖蒲の一輪と狀と出る。

淺香　こりや花菖蒲の一輪。

帶刀　いづれあやめと引きぞわづらふ。

淺香　ハテナア。

ト右の狀を開き見て

ヤア、こりやお前の自筆の去り狀。

帶刀　土産と云ふはその一通。

淺香　イ、ヤ、去られますまい。

帶刀　去られぬとは。

淺香　お前樣には去られますまい。

帶刀　如何にも、去るまい筈の帶刀が、自筆の去り狀。

淺香　跡目の定まるその間に

帶刀　取るか

淺香　戻すか

帶刀　杜若のこの一本。

淺香　心を探る花あやめ。

帶刀　その一通と

淺香　その花と

帶刀　返事は後まで。

淺香　必らず互ひに

兩人　待つて居るぞや。

ト唄になり、兩人、こなしあつて奥へ入る。向うより高尾、綿帽子、抱へ帶にて、本舞臺にてこなしあつて

高尾　どうやら斯うやら、この屋敷へ忍んでは來たが、どうぞ十三さんに。

トいろ／＼奥を見るうち、十三郎、出て、こなしあつて

十三　頼みに思ふ秋塚どのは、打つて變つた大藏贔屓に、才原どのゝ今の詞……こりや深い樣子がありさうな事ぢやわい。

ト後より、高尾、いろ／＼こなしあつて

高尾　十三さんぢやないかいなア。

十三　なんぢや、十三とは。

ト見て

ヤア、高尾ぢやないか。

高尾　十三さん、逢ひたかつた／＼わいなア。

ト抱きつく。

十三　エ、滅相な。殿のお手にかゝつて、其方は死んだと沙汰がしてあるのに、爰へ來ると云ふ事があるものか。殊に今日はこの中屋敷で、鶴若さまをお跡目に立てる評定。首尾よく成就するやうにと、奥では祈禱の最中。コレ、この松は鶴若さま、御誕生の折からの樹木。殊に御秘藏ゆゑ、アレ、あのやうに注連を張つて、お家相續の妨げ

のないやうに、評定を糺すどうぶくらへ、其方のけびら見せては事やかましい。なんの、おぢやらいでも大事ない事を。

高尾　何を云はしやんすやら。ちつとの間ぢやと云はしやんしてから、敵之助さんの所へ預け、それから狀一通さへおこさんしやんせぬに依つて、あんまり〳〵案じられて、來たのでござんすわいな。

十三　つい來るのに、派手な形でおぢやつたなう。

高尾　ツットモウ、わしが氣になつて見たがよい。

ト奥より人音する。

十三　アレ、誰れやら來るやうな音がする。マア、ちやつと隠したいものぢやが。

高尾　エヽ、ツット。話しせうとすると人が來る。

十三　ちやつと隠れや〳〵。

トこなしあつて、橋がゝり柴垣の間へ隠す。此うち腰元二人、鎗を持ち出て、十三郎が後へ廻り

兩人　十三どの、やらんぞ。

ト兩方より突きかける。十三郎、悧りして鎗を拂ひ

十三　エヽ、悧りさした。こりや、ちよつぱり達、何するのぢや。

腰一　何するとは、覺えがあらう。

腰二　女子でこそあれ、頼まれた二人が加勢。

ト無理に突きかゝる。鎗をもぎ取り

十三　なんぢや、頼まれたとは、そりや誰れに頼まれたのぢや。

千草　その頼み手は、私しでござんす。

ト奥より、千草、出る。

十三　ヤア、一角どのゝ妹御、千草どの。

千草　よもや忘れはさしやんすまい。それ程よう覺えて居て、浴びる程やる文の返事は、なぜしては下さんせぬ。た心が濟まぬに依つて、今日爰へお出での様子を聞いて、兄さんにも隠し包んで、裏門から忍んで來て、云ひ寄る便りに、あの衆頼んで

腰一　サア、千草どのゝ云はしやんす事、聞いて上げまして下さんすか。

兩人　返答は、なんとでござんすえ。

十三　ても、仰山な口説きやうぢや。なんとせう。斯く取卷かれし上では、所詮遁がれぬ。如何にも心に從ひませう。

ト此うち、高尾、柴垣より出かけ、ならぬと云ふこな

し
とサア、合點ぢや〳〵……云ひたいけれど、何を隱しませう。エヽ、私しは、大事の願ひあつて、假にも女中の側へ寄らぬ。寄りませぬ。
千草　ムウ、その願ひと云はしやんすは、あの高尾どのとやらへの事かえ。
十三　エヽ。
千草　よう知つて居やうがな。
十三　滅相な。その高尾は後の月、晦日の晩に、殿樣のお手にかゝつて、御座船から海へずどんと、提け切りにあひ、ナ、コレ、必らず死んだその高尾が、爰へ出ては詰まらぬぞ。
ト高尾、いろ〳〵こなし。
千草　サア、そんならわたしに從うて下さんすか。
十三　サア、それは。
千草　但し、外に云ひ交さしやんしたお方でもござんすかえ。
十三　イヤ、さうではないが。
千草　應と云うて下さんすか。
十三　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵。
三人　どうでござんすえ。
ト此うち、淺香、出かけ
淺香　その戀わたしが、取持つて上げませう。
十三　ヤアヽ。
千草　淺香さま、そんなら樣子を。
淺香　聞いた〳〵、聞きましたわいなア。
千草　そんならこの戀を
淺香　取持つて上げる程に、わたしに任して、マア、奧へ行て、ちつとの間待つて居やしやんせいな。
千草　でも、それでは、
淺香　サア、皆呑み込んで居るわいな。
千草　奧で待つて居るその間に、
淺香　細工は流々、わたしが仕上げを見やしやんせ。
千草　必らずお賴み申しますぞえ。
ト唄になる。千草、腰元兩人、奧へ入る。
十三　淺香さま、あのやうにお請合ひなされ、滅多に奧へおやりなされたお心は。
淺香　高尾さんと、すつぼりと話させませう爲。
十三　エヽ。

浅香　隠れずと出やしやんせ。
　ト高尾、出て、
高尾　聞き及んだ浅香さま、ても粋なお詞。
十三　すりや、あの高尾が來た樣子を、
浅香　知つては居れど、一旦殿のお手にかゝられし、お志
　しの籠つた女中。樣子はその時立聞き、それと云はねば
　彼の血筋、知つて居るわたしが寸志。
十三　すりや、何事も
浅香　よう知つて居りまする。
十高　エヽ、忝なうござりまする。
　ト此うち、奥より腰元二人出て
腰一　申し〳〵浅香さま、千草どのがお返事を、待ち兼ね
　てござりまする。
腰二　大抵待つてぢやござりませぬわいなア。
　ト十三郎、ちやつと高尾に綿帽子を被せる。
浅香　オヽ、忙しない。其やうにちつきりちやつと、どうマ
　アその返事が出來るものぢやぞいな。
　ト腰元兩人、高尾を見て
腰一　しをらしい風俗な女中さん。
腰二　ありや、マア、誰れでござんすえ。

高尾　エヽ、私しは。
十三　ほんに、誰れやらぢやあつたが。
兩人　誰れでござんすぞいな。
浅香　ありや、人ぢやわいな。
　トちよつと案じて
　ほんにそれ〳〵、人の女子ぢや。
腰一　女子は、どこの女子ぢやいなア。
浅香　エヽ、根問ひする子ぢや。あれはの、ソレ、彼のぢ
　やわいなう。
腰二　彼のとはえ。
浅香　ありやアノ、拜みこぢや。巫子なア。大事の身の上、
　見咎められては、先殿樣のお志しも背く。それでマア、
　拜巫子でござんせうがな。
　ト高尾へ呑み込ます。
高尾　アヽ、アイ……成る程、巫子ぢやさうにござんすわ
　いな。
腰一　そりや幸ひ。そんなら千草どのにさう云うて、喜ば
　しませう。
浅香　さうさんせ〳〵。
　ト腰元兩人、奥へ走り入る。

十三　これは一入勿怪なものぢや。
高尾　なにを。相手にならしやんすさかいぢやわいな。
淺香　それはさうと、どうぞマア高尾さんを、隱して上げたいものぢやがなア。
　ト千草、奥より出で
千草　淺香さま、巫子どのとやら云ふ女中は、どこにござんすえ。
　ト此うち、十三郎、高尾が煙管筒の打紐を外し、內なる煙管の羅宇を拔き、弓にして床の間の亂れ箱に載せて、仔細らしう持つて出て、眞中へ直す。と高尾、矢張り綿帽子をかぶりながら、びんしやんと眞中へ直り、右の弓を取上げ
高尾　天淸淨地淸淨、菅丞相とは天神樣の事なり、內儀樣淸淨六根淸淨、大磯に虎少將、中にも日柄の御神なり、天の神樣地の神樣、鏡臺はんぞう白粉箱、かけ香伽羅の神樣、千草結びの神樣まで、集め〳〵て八百萬の、小間物屋の神樣、さて又苦界の仙さん方、まづ第一に夏書する、觀世音毘沙門樣、金毘羅樣、日新樣、普賢菩薩は江口の君なり、鬼子母神樣妙見樣、三十番神その外には、身仕舞ひ部屋の隅々隈々掃き廻り、箒菩薩も只目の前にうか〳〵と引かれ誘はれ冥土から、高尾が爰まで顯はれ來たわいなア。
淺香　そりやこそ、そろ〳〵寄つてござるぞ。
高尾　なう恨めしや、千草さま。
千草　エヽ、この千草を恨めしいとは、如何なる恨みでござんすぞいなう。
高尾　外に恨みはあら金の、土になつても忘られぬ、いとし可愛と云ひ變した、大事の〳〵十三さん、如何にこの世に亡いわしぢやとて、踏みつけて寢取らうとは、これが恨めしかるまいか。
十三　アレ、あのやうに冥途から、悋氣の持越しぢや。こりやモウ、止しにしたがよいわい。ナウ、淺香さま。
淺香　イヤ〳〵、何事もこの淺香が胸にある。マア〳〵、よいわいなア、イヤナニ、十三さま。
高尾　エヽ。そりやなんと云はしやんす。
　ト十三郎の側へ寄らうとする。淺香、こなしあつて
淺香　コレ〳〵、お巫子樣〳〵。
高尾　エヽ。
淺香　ハテサテ、お前は黑格子のお巫子樣、口寄せて居る事を、必らず〳〵忘れまいぞ。

高尾　ほんにマアはしたない。所詮この世に亡いこの高尾。サア、高を括つて、悪性はさせませぬぞいなう。
千草　ナア、そこがお前は冥途の人。
高尾　オ、、嫌いの〳〵。
千草　嫌でも應でも、惚れかけたこの千草。十三さまは貰ひました。
高尾　命にかけた大切の男を、なんの遣らう。娘御だてら、なめくさりなんすないなア。
　ト浅香、十三郎、氣の毒なるこなし。
千草　何をマア厚かましい。この世にも居ぬ形をして、見事添つて見やしやんせ。
高尾　オ、好かんやの。未來よりはこの世で、わしが男にするわいな。
千草　さうはなるまい。
高尾　どうしてならぬ。
両人　イ、ヤお前は。
　ト両方、思はず掴み合ひ、浅香、十三郎、いろ〳〵留め
浅香　これはマア。お前は巫子ぢやないかいの。
高尾　エ、。

十三　巫子が、こりやなんの眞似するのぢや。
千草　ほんに、あの人は巫子。それにマア、變つた人ではあるわいの。
高尾　サア、巫子ぢやけれど、あんまり腹が立つに依つて。
千草　ヤア、。
　ト不思議さうに高尾が顔眺める。十三郎こなしあつて
十三　サア、それは……エ、、さてこそな。
　トきつとして身構へする。高尾、浅香、悄りする。
千草　すりや、この巫子に付いて居るは、高尾が冥途の幽靈ぢやな。
浅香　さうぢや。幽靈は幽靈ぢやが、ハテ、不氣轉な幽靈ぢやなア。怖い事もなんともない。其やうに懐へずと、あら恨めしやと、あの十三さんを惱ましたがよいわいなう。
十三　さうぢや。惱ました〳〵。
高尾　ほんにさうぢや。エ、、腹の立つ、恨めしやなア。添ふに添はれぬこの身の悲しさ。千草さんも諸ともに、冥途の苦患を見せんとて。
　ト十三郎にかゝらうとする。十三郎、いろ〳〵苦しめられるこなし。連理引きにて引かれたり、宙返りした

り、いろ〳〵ある。淺香は舞臺をドロ〳〵と叩き居るうちに、十三郎、小柄を落す。大藏、出かゝり見て居る。

千草　ヤ、、十三さま、怖いわいな〳〵。

ト寄るを高尾、引退け、淺香、高尾を宥める事、いろいろあつて

淺香　十三さま、もう堪らぬ。幽靈も大分草臥れが來たさうな。この間に早う、逃げさんせ〳〵。

十三　オツと合點ぢや〳〵。

ト十三郎、逃げる。

千草　コレイナア、十三さま〳〵。

高尾　イヤ、待たしやんせ〳〵。

ト十三郎を追はへ、皆々入る。唄になる、と大藏、出て、こなしあつて

大藏　すりや、高尾めは堅固でこの世に。ハテナア。

トこなしあつて、落しある小柄を拾ひ

こりや十三めが小柄。これを以て。

ト神木の松を切り

勘平參れ。勘平々々。

ト奥より、勘平、出て

勘平　御用でござりまするか。

大藏　密々の用事。この松の枝にこの小柄諸とも、奥の檀上の大館法印に諜し合せて

ト囁く。

呑み込んだか。

ト松の枝、小柄を勘平に渡す。

勘平　委細畏まつてござりまする。

大藏　早う。

勘平　ハツ。

ト唄になる。勘平、右の二品を持ち、橋がゝりへ入る。大藏、こなしの所へ、勘解由、奥より出て、

勘解　伜大藏、奥で兵庫どのに承れば、何か密談の仔細、其方へ仰せつけられたとあるが。

大藏　成る程、拙者承り居りまする。

勘解　ムウ、して、その密談の仔細は。

大藏　その仔細は、なんでござる彼の……覺悟。

ト切りにかゝる。

勘解　伜、コリヤ、親をなんとする。

大藏　吐かすまい。親でない。

勘解　親でないとは。

兵庫　その仔細、身が云うて聞かさう。

　ト奥より出る。

勘解　聞くに及ばぬ、大藏どのは後室のお腹をかり、出生なされ、先々の大殿大領樣のお胤ゆゑ、親でないと一圖に思し召すのであらう。

兵庫　吐かすまい。今まで臣下に某諸とも、連なり居る口惜しさ。鬱憤を晴らすはこの時。大藏を跡目に定め、この家國の相續はなぜ相願はぬ。鶴若を跡目とは、賴まれて慾に耽る所存ぢやな。

勘解　ハテ、性急な兵庫どの。まだ／＼申し開くにも及ばぬ事。才原が底意を、とくと御覽なされい。

兵大　底意とは。

　ト勘解由、こなしあつて、あたりを見て、手を叩く。舞臺先の井戸より忍びの者出る。兩人、恟りする。

勘解　どうぢや。手に入れたか。

忍び　仰せつけられましたる一品。

　ト小さき壺を勘解由に渡す。

勘解　犬猫にも知らさぬ密事。出かした／＼。何者にも見付けられはせなんだか。

忍び　その儀は少しもお氣遣ひあられますな。

勘解　褒美は追つて。休息せい。

忍び　ハッ。

　ト橋がゝりへ行かうとする。とウンと反り、死ぬる。

兵大　これは。

勘解　他言を憚る隱し手裏劍。大藏どの、死骸を目立たぬやうに。

　ト大藏、死骸を井戸の内へ入れる。勘解由、右の壺を出し

御覽じましたか。

兵庫　そりや、兼ねて云ひ合した

大藏　高野山玉川の毒水。

勘解　シイ／＼……京都の留守中、某がこの中屋敷へ取込んで、密かに毒害する某が所存の底意。毒藥も仕掛けました。この水を罐子へ。

　ト大藏、こなしあつて、罐子へ水を入れ、元へ直す。

兵庫　面白い。すりや鶴若諸とも、邪魔になる者どもを、あの茶の水で鏖殺しに。

勘解　ハテサテ、聲が高い。

兵庫　出來た／＼。

勘解　最前國家老秋塚が、大藏どのを跡目と云ふも、身が

所存を揺らん爲。それを氣取つて此方から、鶴若を跡目
とは、こりや双方の裏を行く謀り事。

兵庫　誠に。

勘解　大藏どの、この器も目立たぬやうに。

大藏　合點ぢや。

ト縁の下へ突ッ込む。

勘解　萬事の手當は後室諸とも、謀し合す手段もさま〴〵。

兵庫　才原、お來やれ、

勘解　先づ、お入りあられませう。

ト唄になる。勘解由、兵庫、大藏、奥へ入る。淺香、
右の樣子を聞きたるこなしあつて、奥より出て

淺香　ても恐ろしい兄さんの企み。上邊は鶴若さまを跡目
相續と氣を緩ませ、後室さまや兵庫さまと……それを覺つ
て西國へ引込み、久し振りでの秋塚どの。

ト去り狀を出し

花菖蒲のこの去り狀。謎のこの花、今の樣子。こりや油
斷がならぬわいなア。

トこなしあつて、あたりを見廻し、縁の板を上げると、
縁の下より、敵之助、蜘蛛の巣だらけになり、右の壺
を持ち、下家よりズッと出る。兩人、こなしあつて、

敵之　あたりを窺ひ

淺香　敵之助どの、今の樣子。

敵之　一々聞き屆けた。三十日餘りの下家住ひ。ヤッとこ
の壺。

淺香　兼ねての思案は爰の事。どのやうな事のあらうとも
必らず外に構はずと、鶴若君さまを

ト云はうとして囁く。

敵之　脇ひら見ずにお供。

トこなしあつて

合點でござる。

淺香　必らずぬかりなされな。

ト唄になり。敵之助、下家へ入る。淺香は奥へ入る。
と奥より高尾出る。大藏、後より、そろ〳〵付いて出
る。

高尾　屋敷の勝手は知らず、見付けられては惡いと云はん
すに依つて、ツイどこへやら見失つた。

ト大藏、後より

大藏　コリヤ、してやつた。

高尾　エヽ、誰れぢや。放さんせぬと聲立てるぞえ。

大藏　ハヽヽヽ、聲立てるとは、こりやをかしい。大藏ぢやが、それでも聲立てるか。
高尾　エヽ、嫌ぢやわいな。
ト振り放し
ヤア、大藏さま。
大藏　高尾、惡う聲立てると、おれよりは、わが身の上であらうぞよ。
高尾　わが身の上とは。
大藏　いつぞや京都遊興の節、六角どのにぶち殺されたと聞いたが、高尾、その起りゆゑ六角どのは押籠め。その殺されたわれが、れい／＼とこの屋敷へ、なんで來たのぢや。
高尾　エヽ。
大藏　今まで首丈け脊丈けと云はうか、モウ／＼、ずぶ濡れになる程惚れたこの大藏。われが生きて居るに合點がゆかぬけれども、抱いて寢る。この屋敷に其方を見知つた者は、おればかりぢや。得心して應と云ふか。嫌と云ふと、われが生きて居る樣子、言上して評議にかけうか。
高尾　ニヽ、トツトモウ、わしや高尾ぢやござんせぬ。今日、雇はれて來た巫子ぢやわいなア。

大藏　さうは拔けさせぬ。コレ、最前からチラと見たゆゑ、心のたけを書いて置いた。氣の急くまゝに文字ばかりで讀み憎からうが、志しぢや。これも取つて置きや。
ト狀を出す。
高尾　エヽ、狀どころぢやないわいなア。
大藏　そんなら心に從ふ氣か。
高尾　エヽモウ、わたしやそんな事は。
大藏　嫌と云ふは、十三への心中。生きて居る詮議せうか。
高尾　イエヽ、このわしが身の上は、段々入組んだ事が。
大藏　聞かしてくれるか。
高尾　そんなら云うて聞かす程に、マア、話しを聞いて下さんせ。
大藏　聞かしてくれるなら聞いてやるぢや。サア、その譯は。
高尾　その譯は、後に云ふわいな。
ト突き飛ばし、西の片障子の内へ逃げ込む。大藏、さうはさせぬと追ひ驅け入る。主膳、すつくりと立つて居る。大藏、憚りして
大藏　ヤア、御上使樣。南無三。
ト逃げうとする。主膳、捉へ

主膳　對客の間へ法外者め。

ト引戻す。大藏、逃げうとする。主膳、當てる。大藏、障子の内へ倒れる。

ハテ、馬鹿な奴め。

ト障子ピツシャリ締める。唄になる。奥バタ／＼。兵庫、十三郎を引摺つて出る。後より、萩の方、勘平、是妙院、付き出る。

兵庫　主殺しの大罪人、動くな。

十三　必らず麁相なされますな。

萩の　こりや、十三に何科あつて、手籠めになされますな。

兵庫　その科、いま顯はして見せう。法印をこれへ呼べ。

勘平　ハア。大館法印、これへ出やれ。

法印　ハア。

ト法印、山伏の形にて、松の枝と小柄を持ち出る。

是妙　法印、今の樣子、遠慮せずと云や。

大館　ハツ。この度御家督相續の爲、勘解由さま、某を召され、鶴若さま安全の爲、一間を出來、人を忌み、丹精を凝らし祈るところに、今日御家督定めに當り、俄に御幣の折れしは、正しく凶事と檢むるところ、この小柄に松の枝を添へ、檀上の下に隱せしは、正しく鶴若さまを調伏。兵庫さまへ申し上げしところ、この小柄を檢められ、こなたの仕業に評議一決。叶はぬところぢや。白狀さつしやれ。

十三　最前落せし小柄。すりや、この十三に意趣ある奴がその紛れに拾ひ取つて、恐ろしいこの企み。

兵庫　ナニ、それでも云ひ譯あるか。

將監　伜、云ひ譯あらば申し上げい。

十三　サア、その申し譯は。

萩の　大事の所ぢや。十三、氣を靜めて云ひ譯しや。

十三　小柄を失ひし樣子は……ハア。

ト俯向いて居る。千草、奥より出て

千草　十三さま、よいやうに云ひ譯して下さんせいな。

是妙　ヤア、わりや一角が妹千草。

兵庫　コリヤ、十三と不義の正銘。調伏の科。重々の名古屋十三。ソレ勘平。

勘平　腕廻せ。

ト立ちかゝる。

十三　必らず粗相なされますな。

ト此うち、一間より、一角、出かけ見て居て

一角　待つた勘平、扣へ召され。

ト出る。

兵庫　科人を詮議するを、扣へいとは。

一角　十三どのに、若君様調伏の誤まりない。

是妙　誤まりないとは。

一角　これサ、この竹に雀の小柄は、先六角さまより先つ頃、お鷹野の時節、十三が拜領せられし事、一家中に誰れ知らぬ者もない小柄。落ちてあつたが十三が科でない證據。

兵庫　證據を捉へて科でないとは。

一角　誠調伏の仕業ならば、見覺えある小柄を添へ、檀上へわざ／＼持ち行き、我れと我が手に科かけるやうに拵らへやうか。こりや調伏の大罪を、十三郎に塗らん爲、外より仕組んだ拵らへ事。

兵庫　何がなんと。

一角　一角が睨んだ眼、滅多に違ひはござるまい。枝に小柄の添へてあるが、野心ないと云ふ明白。但し批判がござるかな。

兵庫　サア、その批判は。

一角　惡く騒ぎ立てなさるゝと、御詮議がむづかしからう。兵庫どの、十三に御詮議はござるまいがな。

兵庫　ムウ。ハヽヽ、濡れ合うた妹背を庇ひ、法度嚴しき屋敷の行儀、一角の妹が、誤らしても大事ないか。この云ひ譯立たねば、十三郎千草は不義の誤まりだ。

ト此うち、淺香、出かけ見て居て

淺香　イヤ、そりや不義の誤まりにはなりませぬ。

兵庫　淺香、どうして不義の誤まりにならぬか。

淺香　萩の方さまの云ひつけで。

兵庫　ヤ、なんと。

淺香　萩の方さま、密々の御用にて、密かに召し寄せられた千草どの。この場へ忍んでござんしたは、據ろない主命。主命に依つてござんした千草どのを、不義者とは申されますまい。兵庫さま、この淺香が申したが、僻事でござりまするか。

兵庫　イヤサ、それは。

淺香　なんと二人に、不義の科はござりますまいがな。

兵庫　すりや、アノ、萩の方さまのお指圖で。

淺香　ナア奥樣、左樣ではござりませぬか。

ト萩の方に呑み込ます。萩の方、こなしあつて

萩の　それ／＼、鶴若の慰みに、琴を聽かさうと、表向き

安永三年二月大坂角の芝居

上演の繪番附

は遠慮に思うて、密かに呼び寄せたこの屋敷。
千草　エ、。
淺香　サア、あの通り御用に依つてと、ツイ云うたがよい
事を、若いと云うて、氣の付かぬ事ではあるぞ。
十千　エ、、忝なうござりまする。
ト萩の方、淺香を拜む。
將監　兵庫どの、すりや件には、誤まりござるまいの。
一角　伯父御樣、一角めが妹にも、不義の誤まりはござり
ませぬか。イヤサ、無くば無いと御意なされ、未だお疑
ひ晴れずば、御返答承らうか。
兵庫　サア、そんなら、マア、無いわサ。
大館　何れも樣、御油斷あられますな。まだこの外に若殿
樣を、呪詛いたす者がござりまする。
一角　何がなんと。
大館　御幣の折れしを怪しく存じ、金輪の法を行ひました
るところ、あの芽生えの松の元に、鶴若さま呪詛の願書、
納めあるに極まりました。疑はしくば皆々寄つて、檢め
て見られませい。
皆々　ヤア。
萩の　捨て置かれぬ一大事。

一角　勘平、早く掘つて見い。
勘平　ハツ。
ト侍ひ皆々、鋤鍬を持ち、松の根本を掘る。中より箱
出る。
案に違はず、この箱を掘り得ましてござります。
兵庫　さてこそ。
ト兵庫、箱を開き、内より願書を出し
大館法印、披見しやれ。
法印　ハア、○仰ぎ願ひ奉るは、鶴若丸の命を斷ち、當家
の斷絶希ふ條件の如し、年月日、願主名古屋十三、乳
人淺香敬白」と。
淺香　エ、、その願書は。
兵庫　十三、淺香を取卷け。
皆々　やらぬ。
ト取卷く。
淺香　待つた。
十三　こりや、なんとするのぢや。
兵庫　あらがましい。目前知れた呪詛の願書。
十三　イヤ、全く以て。
一角　云ひ譯あらば早くさつしやれ。

兵庫　覺えなくば願書の名書の、云ひ譯あるか。
是妙　慥かに二人が云ひ合はした企み事。
十淺　これは又情ない。
一角　コレ、大切な所ぢやぞ。
兵庫　但し又、呪詛せぬ證據があるか。
十淺　サア、それは。
兵庫　有やうに白狀するか。
十淺　サア
兵庫　サア
皆々　サア／＼。
兵庫　どうぢや。
十淺　ハア、。
兵庫　締め上げて白狀させい。
皆々　胸廻せ。
主膳　イヤ、兩人を糺明には及ばぬ。
兵庫　及ばぬとは。
主膳　粗忽の詮議、控へ召され。
ト主膳、西の障子の内より出る。皆々恂り、座を下がり、こなし。
兵庫　御上使主膳さま、主たる者を呪詛の兩人、糺明いたすを粗忽とは。
主膳　すべて罪ある者を糺すに、理法權の三つを兼ねるが政道の第一。理に勝つ法はあれど、法に勝つ理法はない。理強き上に權を用ひて、政道を取裁かば、その身も罪なき者にもせよ、佞人讒者の落し穴に、陥るは必定。斯くある時は政道は暗闇。そこを緩めて問ひ落すが律例の大法。その大法に心を付けずして、迂濶に縄ぶち、もし彼れらに過ちなき時は、此方の不調法と、かけたる縄が緩めらるゝか。
兵庫　サア、それは。
主膳　とくと實否も糺しても、遲かるまじき縄捌き。如何に一家なればとて、餘り權の勝つたる詮議。貴殿も人の理非を糺す、拙者とは相役。それになんぞや騷々しき立振舞ひ。心を鎭め、控へ召され。
兵庫　すりや、主膳どのには、この詮議を。
主膳　當家の跡目を聞き屆け、申し上ぐる拙者が役目。鶴若に跡目極まらば、聞捨てられぬ呪詛の願書。相改めた上の事。その願書これへ。
十三　ハア、。
ト右の願書、主膳の前へ持ち行く。主膳、とくと見て

懷中より大藏が持つて居た狀を出し、引合せ見て、こなし。

主膳　ハテ、似寄りの手蹟も、あればあるものぢやな。

兵庫　すりや、その手蹟に似寄つた手が。

主膳　あるとも〳〵……兵庫どの、それ讀んで見られい。

ト狀を拋る。兵庫、取り、不思議さうに開き

兵庫　「一筆啓上しめし參らせ候ふ、今は命も斷絕するばかり、久々思ひに堪へ兼ね筆紙に云はせ奉り候ふ、色よき返事願ひ候ふ」こりや訝しげな艷書。

主膳　奧なる宛名を讀んで見られい。

兵庫　「高尾の君さま、大藏」

ト云はうとして、吃りし、靜まる。

主膳　隨分我が手蹟に似せまいと、心がけて書きたれども顯はるゝは筆法氣勢。

兵庫　ヤ、なんと。

一角　すりや、その願書と、その艷書と。ハテナ。

主膳　この願書を兩人の科とは突ツ込まれまい。兵庫どの、斯程の願書に名を顯はす淺智こりや意趣ある者の仕業。短慮の才覺、その筆蹟の筆法、この願書の筆勢、詮議しつめたらば、誠の科人が出來さうなもの。

兵庫　すりや、この狀は

一角　いづくの誰れが所持いたしました。

主膳　兵庫どの、對客の間開いて見やれ。

ト兵庫、不思議さうに顏見て障子開き

兵庫　ヤア、こりや大藏。

トこなしあつて、息を入れ、氣を付ける。大藏、氣が付いたるこなし。

コリヤ、氣が付いたか〳〵。

ト大藏、こなしあつて

大藏　兵庫さまか。ヤア、御上使樣。

ト氣味惡さうにする。

主膳　休息の間へ驅け込むゆゑ、暫らく呼吸を留め置いた。この願書、その一通の手蹟の似寄つたは、詮議の一つ。胡亂の奴等一々に、骨を拉いでならば、明白に顯はるゝは必定。キッと拷問の云ひつけ、詮議しぬいてもと、サ、拙者が座敷でもなし、殊に家督相續の砌り、他家の某が致して益ない事。兵庫どの、穩便に詮議あるが、我が名の爲。とくと思案し召されい。

兵庫　サア、この詮議は。

主膳　但し兩人に疑ひ晴れずば、問ひ狀にかけうか。

兵庫　滅相な。
主膳　云ひ分ないか。
兵庫　サア、それは。
主膳　詮議粗忽と差留めた、拙者に誤まりあるか。
一角　兵庫どの、御上使への御返答はな。
兵庫　兩人に疑ひはない。
主膳　大藏とやら、其方も云ひ分ないか。
大藏　云ひ分ござりませぬ。
主膳　後室始め、その外の者までも。
皆々　申し分はござりませぬ。
主膳　一々疑ひ晴れたか。
一角　御上使の御賢慮を以て
十三　無實の惡名も遁がれ
淺香　曇りない身の明りも立ち
兩人　有り難うござりまする。
是妙　一度ならず疑ひかゝつた十三、此まゝでは勤められまい。
ト十三郎、こなしあつて、向うへ出て
十三　家中の禍ひ防がん爲の切腹。親人樣、お許されて下さりませ。
ト腹切らうとする。千草、留め
千草　コレ、早まつて下さんすな。
萩の　十三待て。其方は勘當ぢや。
十三　エヽ。
萩の　科極まらぬ其方に、切腹は云ひつけぬ。この場より勘當。
一角　御前の御意ぢや。立つて行きやれ。
千草　南無阿彌陀佛。
ト死なうとする。
淺香　コレ、早まるまいぞ。
千草　一旦不義の疑ひ受けた申し譯に。
一角　妹千草、勘當ぢや。
千草　エヽ。
一角　御前の御内意とは云ひながら、謂れざる場へ立會うた不屆き。兄が不興の勘當ぢや。
千草　そんならわたしも。
淺香　よい道連れがあつても叶はぬ。何國へなりとも離れ離れに、立退かしやんせ。
千草　エヽ、有り難うござりまする。
ト拜み泣く。

将監　何れも様のお情……憎くい伜め、勘當ぢや、立つて
うせう。
十三　ハツ。
主膳　コリヤ待て。勘當された日蔭者へ、道連れをくれう。
十三　道連れとは。
主膳　最前の女參れ。
高尾　アイ。
ト高尾、綿帽子にて出る。
十三　ヤア、其方は。
主膳　コリヤ、その女は都の巫子とある。謂れざる所に長
居無用。幸ひの道連れ。
高尾　そんならわたしも。
主膳　都は紅葉の最中、高尾栂の尾、いづくの山の奥まで
も、便りなき旅の女。六角どのゝ底意、仇に思はぬがよ
いぞよ。
十三　すりや、御上使様にも。
主膳　知つた知らぬは云はれぬ指圖。旅は道連れ世は情。
互ひに心を付け合うて……早く行け。
高尾　段々の御芳志。
十三　一方ならぬ

淺香　この場の納まり。
十三　長居は恐れ。
三人　おさらば。
主膳　行け。
ト三人、こなしあつて、橋がゝりへ入る。此うち大藏、
いろ／＼あせる。兵庫、無念のこなし。七ツの鐘鳴る。
兵庫　ありや、七ツの鐘。
ト勘解由、帶刀、兩方の一間より出て
帶刀　御上使樣の御賢慮。
勘解　違亂の愚意を恐れ
兩人　扣へ居りましてござりまする。
主膳　先達て申し達した跡目の一件、秋塚才原兩家老ども、
返答聞きたい。
勘解　大殿大領さま退去いたされ、好める道とて五ケ年以
前、歌枕に發足の砌りより、歸國なき音信不通。
帶刀　これ以て安心ならず、又ぞろやこの度の跡目。大切
なる家名相續。一家中一決の上、再應繼目願ひ上げたく、
大藏どのとも鶴若どのとも
勘解　今日の評定、一決の不定。今暫らくの延引。
帶刀　御賢慮のお執成しを以て

勘解　御延引下さらば、御厚恩の段
帶刀　斯く申す我れ〳〵までも
兩人　有り難う存じ奉りまする。
主膳　退去召されし大領どのには、生死不定の旨、先達て聞き及んだ。心遣ひ推察いたす。今暫らくの延引、武將の御前は執成してくれう。併し家の後見たる兵庫どの今日一決せざる段、御對顏の上お願ひ申されてよかろう。
兵庫　イヤサ、拙者は後の評議を。
主膳　すりや、この家督は大切、武將の御機嫌は損じても苦しうないか。
兵庫　イヤサ、その儀は。
主膳　但し、武將はあつててならうても。
兵庫　然らばお供仕らう。
主膳　才原秋塚、兵庫どのを同伴いたし、お願ひ申せ。兩人のうち、一人は萩の一卷持參し、武將の御覽に入れ、今日の延引、追つて家名の相續、お願ひ申してよからう。
兩人　委細畏まり奉りまする。
主膳　家督相續極まらば、西天草の一本、早速御覽に入れねばならぬぞよ。

ト勘解由、帶刀、ギックリとして
兩人　ハッ。
主膳　然らば退出いたさう。
萩の　御上使樣。
皆々　御苦勞に存じまする。
一角　御上使のお立ち。
侍ひ　ハア、。
ト侍ひ大勢、麻上下、股立ちにて出て、主膳、威儀を繕ろひ靜々立ち、兵庫、大藏、目配せして、不承々々供する。皆々兩人を送り、こなし。主膳、花道の方へ行きかゝり、氣の付きたるこなしにてとまり
主膳　鶴若どのの乳人淺香とやら、これへ參れ。
淺香　ハア。
ト側へ寄る。
主膳　今日は鶴若どの、終日の馳走、祝着いたした。何かなおましたいものなれど、云はゞ少人の儀。ホウ、幸ひの持遊び。主膳が志し、些少の一器、納めてくれやれ。
ト懷中より小さき蒔繪の箱を出し、淺香に渡す。
淺香　これは冥加ないお詞。鶴若さまの身に取りまして、有り難い御餞別。

ト蓋の書付けを見て
こりや西天草。
主膳　コリヤ、最前も云ふ通り、鶴若の代になれば、早速武將の御前へ差上げねばならぬ一器。もしや紛失：イヤサ、紛失などせぬやうに、念の入れたがよいぞや。この一器は身共所持の西天……イヤサ、身が細工の草結び、諸毒を救ふ子供の守。淺香、他人の手に渡さず、大切に持遊びにせよ。
淺香　この上もなき草結び、鶴若さまになり代り、淺香が頂戴いたしまする。
トしいなりとなり戴く。
主膳　兩家老の面々、萩の一巻、追つて持參しやれ。
兩人　ハツ。
ト辭儀する、唄になる。主膳、兵庫を連れ、静かに花道へ行く。侍ひ大勢付き入る。皆々見送り、こなしよろしくあつて
大藏　ヤレ〱、七むづかしい御上使。ほつとり草臥れた。
是妙　萩の一巻は一角が預かり、持つて行くは兩家老の者。一角、一巻を持つておぢや。
一角　畏まつてござりまする。

萩の　情ある御上使様のお詞。兩人のうち、萩の一巻を持つて、家督延引のお斷わり。
淺香　左様がようござりませう。この願ひのお使ひ、兄様か、夫帶刀どのがようござりませう。
是妙　イヽヤ、惡からう。勘解由、持たしやれ。
大藏　こりや、さうがよくござりませう。
將監　イヤ〱、矢張り秋塚どのが。
勘平　イヤサ、勘解由どのがようござる。
萩の　この爭ひがあらうかと、拵らへ置きたる御鬮の箱。小姓ども、その箱を持參せい。
小姓　ハア、。
ト御鬮の箱と長き錐を持ち出て、よき所へ直す。
萩の　秋塚才原二人のうち、神慮に任せ、御鬮の札、突き當てるは淺香が役。サア、突きや。
淺香　アイ〱、畏まりました。私しが突き當て、お目にかけませう。
是妙　なんとも呑み込めぬ御鬮。
大藏　依怙があつたなら免さぬぞ。
淺香　なんの依怙いたしませう。お二人様、鬮に當つたその折、競合ひはなりませぬぞ。御合點でござりまするか。

帯刀　神慮に任す御鬮の札。
勘解　違背はござらぬ。
淺香　サア、突きますぞえ。どうぞ秋塚……イヤサ、今ぢやぞえ。
是妙　早く突き上げい。
淺香　サア、突きますぞえ。お二人たから儘を取らしやんせえ。サア、今突くぞえ。
ト いろ／＼こなしあつて、鬮を突き上げ
小姓　才原。
ト ちやつと札を箱へ落す。
大藏　今のはどうぢや。
勘解　どうでござりますな。
萩の　早う讀みやいなう。
淺香　サア、今のはツイ落しました。サア、今突きますぞえ。
小姓　才原。
ト 又ちやつと札を落し箱へ入れる。
將監　今のはどうでござる。
是妙　どうぢやぞいやい。
淺香　エヽ忙しない。今度も落しました。祝うて三度。今度がほんのでござりまする。
ト また突き上げる。
小姓　才原勘解由。
ト また落さうとする。大藏、その手を取り、ちよつと立廻りあつて札を取る。
大藏　御鬮は才原勘解由どの。
勘平　御苦勞に存じます。
ト 淺香、將監、顔見合せ、本意なきこなし。
是妙　御鬮は才原に極まつた。一角、萩の一卷を早う持て。
一角　ハア、。
ト 一卷を臺に載せ、ムッとしたるこなしにて持ち出て、勘解由に渡す。勘解由、受取る。
大藏　最早黄昏、灯を持て。
腰元　ハア、。
ト 腰元、小姓、手燭を持ち出て、勘解由、一卷を検め、少し驚いたるこなしにて、一卷を元の如く卷き戻し、懐中し、花道の際へ直り、こなしあつて
勘解　秋塚どの、申し分はないか。御鬮に當れば家督延引、萬端拙者が心任せに言上するが、申し分ないか。萩の方さま、仰しやり分はござらぬか。一角、貴殿も云ひ分な

いか。コリヤ妹、其方も云ひ分はあるまいな。
ト各々右せりふに付き顔背ける。
ム、、ハ、、、、神慮に叶つた拙者、行かずばなるまい。曲つた根性からは、いろ／＼とあせると云うても神は正直、行かぬ事ぢや。云ひ分はないな。最早暮れに及んだれども、御老分方へお斷わり申し入れずばなるまい。
ト威儀を繕ろひ、落ちつきたるこなしにて、靜々花道へ行きかゝる。

帶刀　才原待ちやれ。
ト勘解由、構はず行く。
才原勘解由、待ちやれ。
ト靜々行き
その萩の一卷、似せ物と知つて持參するか。御老分方への申し譯に、わりや腹切る覺悟で行くか。

勘解　何がなんと。
ト帶刀、刀を拔き、御鬮の箱を切り割る。札を摑み
何枚突いても才原勘解由、其方が心を引き見ん爲、奥方萩の方さまと申し合せ、わざと役目に使はん爲、突き上げた札。善で行くか、惡で行くか。邪正二つの返事が聞きたい。

帶刀　トきつと云ふ。勘解由、ヂッととまり、氣を替へ、靜々と後へ戻り。よき所へ坐り、皆々こなしあつて
才原、返答はどうぢや。

勘解　參るまい。

帶刀　なぜ行かぬ。

勘解　只今のを承つては、どうも行かれぬ。

一角　すりや、その萩の一卷を

帶刀　似せ物と聞いての臆れか。

一角　但し、善惡の返事が出來ぬか。

帶一　サア、返答聞かう。どうぢや。
ト勘解由、物云はず居る。此うち、大藏、將監、是妙院、氣味惡きこなし。淺香、最前の壺を出し

淺香　兄さん、これ覺えがござんすか。
ト勘解由、大藏、是妙院、ギョッとする。
エヽ、お前はなう。お前の心が心ぢやゆゑ、久々で逢うた夫に去り狀を貰うた。サア、惡心を翻へし、善心になつて下さんせいなう。
ト泣く。

勘解　ナニ、この才原を惡心とは。

淺香　エヽ、まだ云はしやんすか。知るまいと思うても、

コレ、高野山玉川の毒水を、お茶の湯へ仕掛け、鏖殺しにせうと云ふお前の企み。天命と云ふもので知れたわいなう。

ト勘解由、こなしあつて

勘解　大藏、その銚子を持て。

大藏　エ、。

勘解　早く〳〵。

大藏　ハイ〳〵。

ト慄へ〳〵、銚子を持ち出て、側へ直す。

勘解　茶具もこれへ。

大藏　ハイ。

ト怖々持ち行く。

勘解　妹、その湯を注げ。

ト淺香、物云はずに銚子の蓋を取り、袖を口へ當て、茶の湯の心にて、湯を汲むこなし。勘解由、右の湯を呑む。皆々息詰めて居る。勘解由、こなしあつて

勘解　才原が本心、斯くの通り。

ト皆々勘解由の顏を見て、毒が廻るかと云ふこなしあつて、淺香、試すこなし。

淺香　兄さん、心持ちはどうでござりますえ。

勘解　身心ともに、ずんと健かな。

淺香　エ、、この毒水を呑んでも。

勘解　元よりこれは金生水。

淺香　エ、、そんなら毒水と云はしやんしたは、

勘解　後室是妙院どの、伯父兵庫どのゝ惡心、お家の騷動防がん爲、わざと今日まで一味の才原勘解由。毒水と云ひしも大きな僞はり。

ト是妙院、大藏、ギョッとする。

淺香　そんならこれが。

トこなしあつて、一つの湯を注ぎ、こなしあつて

兄さんと一つでない云ひ譯。

ト呑み、こなしあつて

ほんに、なんともない。

大藏　ヤア、そんなら。

ト湯を注ぎ、呑まうとして下に置く。是妙院、大藏を突き退け、右の湯を呑み試し見て、茶碗を打ちつけ、勘解由を引きつけ

是妙　エ、、玆な犬侍ひめ。おのれ、兵庫どのや自らに、一大事を頼まれ、ようも〳〵今まで騙かつたなア。一大事を知らるゝ上は、もう破れかぶれぢや。マア、鶴若め

を
ト行かうとする。

萩の　待つた。
ト寒がる。

淺香　申し、コレ。
ト取りつき引退けて、行かうとする。勘解由、是妙院を一刀に切る。倒れる。

大藏　この通りを伯父兵庫どのへ。
ト行かうとする。勘解由、懐中鐵砲にて打つ。大藏、橋がゝりでこける。

將監　これは。

勘解　兼ねて嗜なむ懐中鐵砲。

是妙　おのれ、コリヤ、おれを殺すか。
ト是妙院、かゝるを、突き立て

勘解　後室、こなたの惡心。息あるうちに才原が、本心の云ひ譯。苦しくとも堪えさつしやれ……何れも、御對面なされ。
ト橋がゝりの方、檀上の方へツカ〳〵と行き、一間を明ける。大領、大殿の形にてゐる。

是妙　ヤア、大殿大領さま。

帶刀　誠に大領さま。

一角　御主人様。

皆々　ハア、、思ひがけなきお目見得いたしまする。

大領　勘解由がいたはりとて、この程これへ密かに參つた。大領は無事で居るぞ。

是妙　ヤア、大殿は無事なか。ヤア〳〵。
ト驚ろく。

帶刀　すりや、才原どのゝいたはりで

一角　大殿様には御堅體。

萩の　今まで惡人と一味ぢやと

將監　疑ひ居りましたが

淺香　そんならお前の

皆々　本心はな。

勘解　大殿歌枕御發足の折柄、伯父兵庫どの、これなる後室是妙院どのと心を合せ、大藏を世に立て、國郡を押領せんと、某を密かに招き、據ろなきお頼み、違背なさば事急になり、一國の騷動、家の瑕。それゆゑわざと一味と見せ、密かに大殿を手にかけしと僞はり、今まで事を延せしは、御家門の兵庫どの、佐々木の家に瑕を付けまい爲。

帶刀　すりや、萩の一卷は。
勘解　オヽ、紛失せしと云ふ事、一卷を見るより知れども、わざと御老分方へ持參し、寶の紛失何事も、才原が身に引ッかぶり、秋塚どのに一紙を殘し、國家の騷動の無きやうにと、認め置いたがこの一書。
　ト一通を渡す。
帶刀　大殿の御安泰、斯程の忠臣とも知らず
一角　疑ひし惡口雜言。
兩人　眞平御免下されい。
淺香　兄さん、最前からの憎て口、堪忍して下さりませ。
勘解　オヽ、疑ひ晴るればこの世の本望。後室是妙院どの、大藏を手にかけて、寶を摺り替へて置いたりや、武將の御所へ申し上げ、兵庫どのを押籠め、鶴若さまに家督を繼がせ、寶の詮議、拙者がこの場にて切腹。
一角　イヤ、御切腹には及ばぬ。寶紛失の申し譯は、この一角が仕らう。
　ト腹へ突ッ込む。皆々愕り。
勘解　ハレ早まれた一角。この勘解由、萩の一卷紛失の科も、身に引請ける兼ねての覺悟。秋塚、貴殿の心底を探り、後れしか。ハテ殘念な。

帶刀　萩の一卷紛失ゆゑ、申し譯の切腹尤も。才原
一角　預かり人のこの一角、庇はれし申し譯の切腹。
　どのゝお命捨てらるゝには及びますまい。
勘解　イヤ／＼、いま本心を明かし、是妙院どのの大藏を手にかけし大罪、後日の外聞を請け／＼より、腹切つて相果つるは、命を捨てゝ立てる忠節。
一角　すりや、どうあつても一命を。
勘解　死ぬるも忠義、殘るも忠義。秋塚どの、貴殿はこの似せ物を以て、岩倉どのへ右の樣子を。
帶刀　申し上げるも忠義なれども、一角どのと云ひ、勘解由どのまで。
勘解　ハテ、時移る。兵庫どのに氣取られては一大事。さりながら、大殿樣御存命にて上使を僞はり、まつた是妙院どの、かゝる企み沙汰あつてはお家の疵。この場の一件、後日に他言せまじき誓言の神文、銘々に認め、大領公に預け置かば、お家の疵を包むの面晴れ。
大領　家名を思ふ皆の者の忠節。オヽ、過分なぞよ。この事を他言せまいと云ふ誓紙、血判して身共に渡せ。
皆々　畏まつてござりまする。
大領　料紙を持て。

ト内にて

小姓　ハア、、

ト小姓、腰元。帶刀、一角、將監、萩の方、淺香、勘解由、銘々に硯箱、筆紙一つ宛前に直す。

勘解　身共が心底、斯くの通り。

ト以前の一通を披き、指を切り、血判する。此うち、帶刀、一角、萩の方、將監、淺香、各々筆を取り、誓紙へ血判する。

帶刀　この場の一件、他言せまじき

皆々　一紙の誓言。

大領　早くこれへ。

ト淺香、大領が前へ持ち行く。

家を思ふ忠臣、皆の者、喜ばしいぞよ。

是妙　エ、、樣子を聞くにつけても、憎い勘解由め、喰ひついてなりとも。

トかゝるを引きつけ

勘解　斯くなればお家磐石。こなたの惡事を包む引導。未來は成佛。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト殺す。と後夜の鐘鳴る。

勘解　サア、思ふ事はない。主殺しの勘解由が切腹。將監どの、イザ、御苦勞ながら御介錯。

將監　是非に及ばぬ刀の役目。

帶刀　死を遁がれたる秋塚、忠臣の詞に從ひ、岩倉どのへこの似せ物を持參して、事の樣を申し上げう。

淺香　どうあつても兄さんは、御切腹なさるかいなう。

勘解　秋塚どのと仲好くして、忠義の子孫を傳へよ。

淺香　アイ。

ト泣く。此うち、帶刀、花道へ靜かに行きかゝる。

一角　拙者は才原どのゝお供、淺香どの、御苦勞ながら御介錯。

淺香　アイ。

ト泣く。此うち、勘解由、肌脫ぎ、帶刀、ちよつと見返り、淺香、切なきこなし、いろ〳〵ある。と、バタバタにて、侍ひ、花道より狀箱を持ち、走り出て

侍ひ　御家老片桐さまより、秋塚さまへ時ぎりの早打ち。

帶刀　ヤア。

ト侍ひ、狀箱を帶刀へ渡し入る。

ナニ〳〵「殿六角さま遠處のうち、當月五日亥の刻過ぎに御逝去」。

皆々　ヤア、。

ト驚ろく。と皆々苦しむ。帶刀、ガックリと膝突く。淺香、ウンと反り苦しむ。勘解由、將監が首切り、萩の方、血を吐く。一角、苦しむ。

一角　ヤア〳〵、こりや、萩の方さま。

ト勘解由、大殿へ手裏劍打つ。大領、板がへしにて、衣裳ながら骸骨となる。

淺香　ヤア、こりや大殿樣は、骸骨におなりなされた。

皆々　ヤア〳〵〳〵。

トへたばり苦しむ。此うち、勘解由、ノサノサと二重舞臺へ上がり、ドッカリと坐り、莨のみ居る。

勘解　秋塚、苦しいか。

帶刀　なんと。

勘解　妹淺香、一角、早くくたばつてしまへ。

帶刀　すりや、我れ〳〵を。

勘解　一應では行かぬ奴等ゆゑ、いま誓紙を認める筆に、悉く毒藥を仕込み、役に立たぬ婆アめを打ち殺し、大領めを引摺り出し、物を云はせたゆゑ、計略に落入つたか。

帶刀　すりや、大殿と見せしは。

勘解　博物誌に、死んで三ケ年越えざる屍、山牛房の根に埋み、白鹿の油を焚き、怪力松根の法を行へば、忽ち蘇生の姿を顯はす。

大館　その祈り手はこの大館法印。

ト一間より出る。

勘解　大藏、もうよい〳〵。

ト大藏起きて

大藏　太股をかすつた鐵砲、首尾よう參りました。

勘解　餘程骨を折らし居つた。あれ見よ。苦しむ〳〵。腕くワ腕くワ。ム、ハヽヽヽ。ハテ、心地よやなア。

ト莨盆に凭れ嘲ける。

一角　エヽ口惜しい。深手の上に毒藥。うぬ。

ト刀を突き立てうとして苦しみ死ぬる。此うち、淺香、長押の長刀を取り、身拵らへする。帶刀、苦しみながら花道にて、刀を杖に突きながら

帶刀　例へ肉身は碎けるとも、やみ〳〵と此まゝに死なうか。この樣子を岩倉どのへ。

大藏　それ注進させてよいものか。

ト行かうとする。淺香、飛びかゝり長刀にて鬪ひ

淺香　身はししびしほになるとても、一太刀なりとも勘解由どの。エヽ、こなたはなう。

勘解　なぶるな。狂ひ死する死人めら、腕かせて置け〳〵、

安永三年二月大坂

向の芝居上演繪番附

霧が廻ると追ツつけ殘らずくたばる。構ふな〱。

淺香　爰構はずと岩倉さまへ。

帶刀　未來で逢はう。

　ト帶刀、苦しみながら花道へ入る。

大藏　うぬ。

　ト淺香にかゝる。立廻り。勘解由、キツと見得。淺香、大館法印を切る。法印、逃げる。勘解由、大藏、淺香、ドツコイととまる。返し。

造り物、城の高塀。アリヤ〱にて道具とまる。

　ト十三郎、高尾、千草、逃げ出る。勘平、侍ひ、大勢追ひかけ出る。

勘平　ソリヤ。

　ト皆々かゝる。十三郎、高尾、千草を圍ひ

十三　こりや狼藉な。なんとするのぢや。

勘平　聞きたくば冥途で聞け。

十三　狼藉すると免さぬぞ。

勘平　ソリヤ。

　ト皆々かゝる。十三郎、追ひ拂ふ。家來皆々逃げる。十三郎、家來を追ひかけ行く。高尾も後を追ひ行くを、勘平やらんと行かうとする。千草、取りつくを切り倒し走り入る。ト法印、侍ひ大勢、弓鐵砲を持ち、バタバタと出て、此うち帶刀、花道より刀を杖に突き、苦しみながら出る。眞中程にて、弓鐵砲打つ。帶刀、刀を拔き切り拂ふ。この見得にて舞臺へ來ると、皆々かかる。

帶刀　ヤア、無念な。とても岩倉どのまで行かれずば、勘解由めが素首を切り落す死物狂ひ。

勘平　ソリヤ。

　トこれより、飛び道具のタテいろ〱あつて、皆々を追ひ込む。と石垣を碎き、敵之助、鶴若を脊に負ひ出る。勘平、侍ひ、後より付け出る。敵之助、身を固め行かうとする。

皆々　やらんぞ。

　ト敵之助、キツとなる。

敵之　大勢を見捨てたも、鶴若さまのお供せう爲。うぬら、邪魔ひろぐと撫切りぢやぞ。

勘平　ソリヤ。

　トこれよりタテいろ〱あつて、ト、侍ひを見事に切り倒して向うへ走り入る。道具元へ戻る。

ト淺香、大勢とタテして居る。この見得にて、道具とまる。ト帶刀、大童にて矢を受けたる體にて暴れ、切りに切り倒れる。淺香も倒れる。

淺香　ヤ、、こりや手を負はしやんしたかいなう。

帶刀　必死の深手、エヽ、口惜しい。して、鶴若さまは。

淺香　氣遣ひあるな。敵之助どのへ渡し落しました。

勘解　コリヤ、うぬら、まだくたばらぬか。

ト靜々と出る、

帶刀　ヤア、才原、帶刀が冥途の供、覺悟せい。

勘解　浮世渡平、うぬ、よく身を誑かつたな。

帶刀　この秋塚を渡平とは。

勘解　秋塚内記が双子の悴、町家に別れ育つとの噂。ハレ、よく似たり、よく誑つたな。

帶刀　なんと。

勘解　秋塚が家は代々秋葉權現を信じ、家を繼ぐ者は不死身なりと聞き及ぶ。誠帶刀が身體には、劍戟は立たぬわいやい。

ト帶刀、ギックリする。

淺香　コレ、最前の杜若。

帶刀　菖蒲の去り狀。

兩人　委細は冥途で。

ト此うち、法印、侍ひ、出かけ

大館　うぬ。

勘解　ヤイ妹、最前岩倉に貰ひし西天草を渡せ。

淺香　誠に敵の手に渡さうか。冥途の土產。

ト西天草を出し、口へ啣へる。

大館　それを。

ト立廻りにて切り倒す。帶刀も侍ひを切り倒す。その刀を勘解由へ打ちつける。勘解由、身を躱す。と柱に立つ。帶刀、淺香、ハッと兩方一度にこける。と淺香、前なる川へこける。途端にて

勘解　ハレ、首尾ようくたばつた。

トきつと見る。

幕

三段目　まんぢう屋の場

役名＝片桐彌十郎。婆、おとら。道心者、宗壽。鮒屋卯兵衞。若黨、秋篠平七。男達、神並正九郎

實ハ才原大藏。同、針金文七。同、せんの清平。同、とくい天右衛門。同、おての七右衛門。澤井屋勘十郎實ハ澤井勘平。女房、おせん。傾城、薄雲實ハ高尾。勘十郎妹、おるい。名古屋十三郎。鐵八弟、銅吉。まんぢう屋鐵八實ハ松島敵之助。浮世渡平實ハ秋塚帶刀。

造り物、三間の間、重ね戸棚。眞中暖簾。下座の方、折り廻り障子屋體。橋がかり、大格子。門口に、まんぢう屋と云ふ掛け行燈かけあり、騒ぎ唄にて幕明く。

トおとら、老婆の形にて箒持ち出る。

とら　エ、情ない。どこも彼も埃だらけぢや。コリヤ、女子ども。どこへ入つて居るぞ。おまんよ、おますよ。

ます　アイ〳〵。何の用でござんすえ。

トおます、おまん出る。

とら　何の用どころか、嫁は居ず、姉は坊を連れて寺參りする。内に人がなうて、てん〴〵舞うて居るのに、おのれらは、どこへ入つて居る。

ます　アイ、わたしは薄雲さまの側に居たわいなア。

まん　淋しい程に、なんぞ彈いて聞かせと云はんしたに依つて、おますどのと「隱れんぼ」を彈いて居たわいなア。

とら　なんぢや。隱れんぼをして居た。

まん　エ、「隱れんぼ」と云ふ唄の名でござんすわいなア。

とら　エ、三味彈いて居たか。

二人　アイ。

とら　アタ榮耀らしい。じやら〳〵と。内にお茶引いて居て三味どころかい。

ます　それでも旦那樣が、なんでも薄雲さまの機嫌を取れと、云ひつけでござんすわいなア。

とら　そんなら聟の云ひつけばかりを聞いて、おれが用は聞かんのか。

ます　さうぢやござんせんけれど、マア、旦那さんの用を聞かにやならぬわいなア。

とら　おのれらは、憎い奴等ぢやなア。

ト箒で叩き廻す。所へ道心者宗壽、坊主の形、衣を着、卯兵衛、講中にて、棺桶の上に經帷巾、卒塔婆を載せ、内へ入る。誤まつて二人を打つ。

宗壽　アイタ〳〵。

卯兵　こりや婆樣、なんとさつしやるぞいなう。

とら　何とするとは、おのれらは。
ト顏見合せ
宗壽さまか。
宗壽　えらい目に遭うたぞえ。
とら　ハヽヽヽ、間違ひぢや。料簡して下さりませ。
まん　ほんにお前方も、こんな物を持つて來るといふ事が
あるものか。
宗壽　イヤ／＼、わが身達は合點のゆかぬ筈ぢや。此方の
題目講は、此やうに經帷子、棺桶まで拵らへて、月々の
當りへ預けて置くが、講中の格式ぢやわいなう。
ます　それは强い手廻しぢやな。
卯兵　來月は婆樣の當番ぢやゆゑ、持つて來ましたぞや。
とら　そんなら爰へ持つて來ずと、隱居へ持つて來てくれ
たがよいわいなア、
宗壽　如何にも。それで隱居へ行たれば、戸が閉めてあつ
たゆゑ、母屋にぢやあらうと思うて。
とら　ア、いかいお世話でござりまするな。
宗壽　八日は月次の題目講ぢやぞや。
とら　合點でござります。
卯兵　もう去にませう。

ト連れ立ち入る。
とら　直ぐに隱居へやりたいものぢやが、人はなし、どう
せうなア。
ます　內儀さん、よい妙があるわいなア。
とら　どうせう。
ます　お前、爰へ入らんせ。火屋へやつてしまふわえ。
とら　何を吐かし居る。
ます　何も手廻しでござんすわいなア。
とら　エヽ、いま／＼しい。奧へうせう。
ト箒で叩き廻す。おます、おまん、逃げる所へ、女房
おせん戻りかかるを、おますおまん、おせんが後へ隱
れる。
せん　これはしたり、また母さんの機嫌を害ねやつたかい
なう。
とら　オヽ、姉、いま戻りやつたか。
せん　アイ、いま歸りました。コレ、わが身達も、ちつと
嗜なみや。
とら　イヤモウ、わが身が內に居やらぬと、いつも手に合
ふ事ぢやない。
せん　お道理でござります。さうして主は留守かえ。

とら　イヤモウ、片時も内に居ぬ。女房の役ぢや、意見しやいなう。

せん　ちつとづゝの樂みは有うちぢや。少々の事は大目に見て居やしやんせいなア。

とら　敷金の代りに連れて來た薄雲は、なんの彼のと吐かして、ぬき花一つ賣らぬやうにする。我まゝにしてもらうては身の上の破滅。わが身もちつと思案しや。

せん　ア、、もうようござります。其やうにせか〳〵氣を揉んで、積でものぼりや……マア、お前は奧へ行て休ましやんせ。

とら　エ、、慈な結構者。餘り男にはまらるゝが笑止さに氣を附けてやつても、ちろりくわん。ア、、構ふまい構ふまい。

せん　世話燒きではあるぞ。

ト在郷唄になる。銅吉、阿房の形、前髮にて、南京瓜を繩にて括り、提げ出る。

オ、、嬉しや〳〵、戻つたぞ〳〵。

ト内へ入る。草臥れし體。

せん　銅吉、戻りやつたか、

銅吉　アイ、いま戻りやんした。

せん　其方もマア、在所に居たがよいわいなう。

銅吉　それでも、早う戻れと狀が來たもの、

ト狀を出す。

せん　ほんになう。面妖な。おるいと緣切つたのに、内に其方を置くと、なんの彼のとやかましい。マア當分、在所へ去なして置いたがよいと、こちの人が。

銅吉　また戻れか。なんぢややら、おれを飛脚かなんぞのやうに、行たり戻つたり、相場を知らすやうぢや。

せん　道理々々。さぞ辛どかろ。

銅吉　なんのいな。在所に居る時分は、朝から晩まで立ちすくみであつたけれど、今は爰の内へ寢たり起きたりして、旨い物ばかり食うて居たものが、久し振りで在所へ去んだら、モウ〳〵肴はなし、不自由で〳〵なるもんぢやなかつた。

せん　そんなら肴で飯食ひや。

銅吉　たま〳〵肴と云へば、えその燒き物、ちんからりのかますより外は、何もなすびの香の物で、麥飯ばつかり。

せん　不自由にあらう〳〵。

銅吉　不自由だらけぢや。おるいと別れてから

ト思ひ入れ。

せん　又それを云やるかいの。主の耳へ入ると、大抵の事ぢやないぞや。おるいを寄せやんなや。

銅吉　わしや寄せぬ氣ぢやけれど、あつちから來てくりや、どうもせう事がないわい。

せん　せう事がないでは濟まぬ。斷わり云うて去んでもらや。

銅吉　皆まで云ふまい。呑み込んだ。

せん　その早合點は糠に針ぢやわいの。

銅吉　でも豆腐に鎹よりましぢや。

せん　仇口きかずと、奥へ行て飯でも食ひや。

銅吉　また叱られた。兎角姉と病には勝たれぬ。女子ども、サア、箸箱持て。

ト奥へ入る。下女のおます、おまんも入る。唄になり、正九郎、文七、七右衛門、天右衛門、清平、男達の形にて出る。女房おせん、煙草のんで居る。

文七　コレ／＼お頭、惣別男の達引は、ざわ／＼せずと、とつくりと氣を沈めて、のツし／＼やりかけるが、喧嘩の發端でえす。

正九　よう嘗め過ぎた二才めではある。今日の達引は萬鐵めに逢うて、薄雲をくれるか、くれんかの達引するのぢや。嘗めた事を云はずと、おれ次第にして來いやい。

文七　氣遣ひさんすな。この針金の文七が居るからは、滅多にマア引け取らしやせんぞ。

正九　そんなら、われはマア先へ立つて、せりふせい。

皆々　見事せりふするかよ。

正九　ざわ／＼云はずと、もう爰らで先へ入れ。

文七　サア、わせられい。

ト入る。おせんが前へどつかと坐る。おせん愕り。

文七　サア、逢ひに來たのぢや。出せ／＼。

ト云ふ。正九郎、立ちはだかり居る。

せん　イエ、お前は見知らぬお方ぢや。誰れに逢ふと云ふのぢやえ。

文七　爰の亭主、萬鐵に逢はう。亭主を出せ／＼。出しやうが遅いと、盆がひツくり返るぞ。

せん　オヽ、折惡しう今は留守でござんす。

文七　お頭、聞かれたか。

正九　オヽ、萬鐵は留守とあれば、達引にも及ばん。薄雲が居やう。直ぐに逢うて返事聞かうわい。

ト行かうとする。二階より薄雲出る。

薄雲　その返事、わしがしやんせう。

ト正九郎、思ひ入れ。
正九　いよ〳〵さうぢや。マア、われを。
ト行かうとするを、おせん留め
せん　ア、、コレ〳〵、亭主の留守に迂濶に踏ん込んで、後であやまるまいぞ。コレ、薄雲どの、大事の身で、滅多にこんな所へ出るといふ事があるものかいなア。
薄雲　大事ござんせぬ。その返事を、わしに聞かうとは、なんの返事ぢやえ。
正九　知れた事。この間からこの里へ、突き出しの薄雲太夫、ついに顏は見ねど名に惚れて、方々から呼び出しても、ついに一度も送らぬゆゑ、様子があらうと、とつくりと聞き合せ見りや、爰な萬鐵めが咥へて居るげな。今日爰へ直に仕掛けたは、萬鐵に逢うて達引する氣。留守なりや、せう事がない。そもぢを直に連れて行くのぢや。サア、素直に行く氣か。どうぢや。
薄雲　否でござんす。そんな事ならとつく、返事せうもの。否でござんすわいなア。
せん　オ、、コレ〳〵薄雲どの。そりや何云ふのぢや。イヤ申し、お前が今のやうに云はしやんしたに依つて、ツイ氣に觸つて、今のやうな返事でがなござんせう。薄雲どのは突出しのその日から、揚詰めの約束。その日柄さへ切れたら、わたしが世話して、お前さんに逢はさうわいなア。
正九　すりや、約束の日柄さへ切れたら
せん　お前さんの方へ。
正九　と云うて今日の所をぬつぺり、そんなぢやない。
文七　なんの彼のはない。引立てゝ行かれいなう。
正九　ソリヤ、皆の者。
ト顏で敎へる。天右衛門、清平、七右衛門かかる。所へ鐵八戻り、三人を見事に投げる、文七、鐵八を見て惘り。
文七　イヤ、われは。
せん　オ、、旦那どの、よい所へ戻つて下さんしたなう。
鐵八　オ、、今戻つた。ソレ、皆の衆へ茶でも進ぜい。
正九　ムウ、貴様が御亭主でえすか。御亭主が留守の内へ、マア澤山な。料簡さんせ。貴様がこの里で男を磨く、まんぢうや鐵八どのでごんすか。
鐵八　ア、、まんぢうや鐵八、短かく云へばまん鐵。マアこなさん方は、どこからごんした。
文七　オ、、おいらが爰へ來たは、貴様と出入りをしに來

たのぢや。

鐵八　そりや氣味の惡い事ぢや。そりやマアなんの出入りだ。

正九　出入りと云ふは、貴樣と薄雲太夫を。

鐵八　こなんが惚れて、せつ〳〵呼びにおこせど、おれが送らぬ。それで金を出して呼びにおこすのに、なぜ送らぬといふ、出入りをしようと思うてごんしたか。

正九　マア、そんなものぢや。

鐵八　手剛い出やうぢや。大概な事は恂りともせぬまん鐵ぢやが、此やうに大勢來ては、どうやら氣が後れて、物が云ひ出し憎いてや。

せん　コレ旦那どの、日頃に似合はぬ、そりやなんでござんす。酒でも呑んで氣をしつかりと、持たしやんせいなア。

鐵八　イヤ〳〵、酒ぢや屆くまい。此やうな胴慄ひの出る時に、よい藥があるてや。

せん　印籠取つて來うかえ。

鐵八　イヤ〳〵、こんな時は酒でもお茶でも去らぬ。

せん　そんなら、なんで癒りますえ。

鐵八　この胴慄ひを癒すには、何奴なりと、人の頭を五つ六つ打割ると、とんと直るてや。

ト文七、氣味惡がり竦む。

變つた藥もあるものぢやないか。おれもどうぞ割らぬやうにしようと思へども、なんぼうでも慄ひが止まぬてや。マア、どの頭から打ち割らうぞ、

ト一々見る。文七頭を押へ

文七　ア、申し〳〵、わたしが頭は、いつち堅うござります。お解りなさつたら、他の頭をお割りなされませ。

鐵八　イヽサマ、螺のような頭ぢや。

文七　エヽ、よいお見立でござります。

鐵八　おれが留守のうちにうせて、薄雲を連れて去なうとは、薄雲にはおれが惚れて居る、女房も同然ぢや。やる事はならぬ。

正九　人もなげな廣言。その又、薄雲を身請けしたらなんとする。

鐵八　こなんが身請けする氣でも、おれがさゝにやどうする。

正九　所を身請けして見せう。

鐵八　どうして。

正九　この證文で。

鐵八　それは。

ト取らうとする。左へ持ち替へ

正九　それから〳〵……「薄雲が身請け五百兩に極め、手附け百兩慥かに受取り申し候ふ」なんと、これでも身請けはなるまいか。

鐵八　サア、それは。

正九　なんと。

せん　コレ、旦那どの。お前、あんな證文、覺えがあるかえ。

鐵八　なんのマアおれが。

とら　その證文は、おれが書いた。手付けもおれが取つた。

ト云ひ〳〵出る。

せん　母さん、主にも知らさず、お前はなんで手付けを取らしやんした。

とら　取らいでぢや。鐵八は入り聟。こりや、おれが身代ぢや。その入り聟が、おれが抱への女郎に惚れて、勤めに出さぬと云ふは、えらい貧乏神。そんならずに、この身代棒に振らさうより、五百兩に極めて、百兩の手付け取つたが、なんとした。

せん　そりやお前、あんまり我まゝぢやぞえ。

とら　何が我まゝ。エヽ、すつ込んで居れ。サア、薄雲をキリ〳〵あなたへ渡してしまへ。

鐵八　渡しませう。

せん　コレ旦那どの、何云はしやんす。

鐵八　よいてや。

薄雲　誰れさんがなんと云はしやんしても、わしや身請けしられては。

鐵八　ハテ、默つて居やいの。

薄雲　でもお前。

とら　サア渡せ。

鐵八　渡すは渡すが、今夜はならぬ。薄雲は揚詰めのうち。その揚げのうちに渡しては、二重賣りするやうなもの。其やうな非道な事したかと思はれては、このまん鐵が男が立ちませぬ。

正九　すりや、今夜中は揚げのうち。

とら　夜半が明けたら、嫌と云はさぬぞや。

鐵八　そりやその時の事。

正九　面白い。有無の返事は夜半の鐘。

とら　マア、それまで離れ座敷で一つ上がりませ。

正九　イカサマ、斯うしても居られまい。皆の者、出口へ

行て待つて居よ。
天七　合點ぢや。
文七　お頭、後に。
正九　お婆。
とら　サア、お客様。
とら　聟どの。
正九　キツと詞を番うたぞよ。
ト唄になる。正九郎、おとら奥へ入る。合ひ方になる。
せん　ほんに薄雲どの、氣が揉めたであらうなう。
薄雲　わたしや、どうなる事ぞと、ハア／＼思うて積が、
せん　道理々々。幸ひ爰に酒がある。一つ呑みんか。
ト杯を持ち出る。
鐵八　オヽ、こりや氣が附いた。女房の役ぢや。薄雲と爰で樂しむ程に、酌せい／＼。
せん　エヽ。
鐵八　何もキヨロリ／＼する事はない。酌して、床も取つてあてがへ。
せん　そりやお前あんまり……と云うたら又。ドリヤ、床取つて上げうか。
ト入る振りにて小蔭に聞いて居る。鐵八、後を見送り、

門の戸を閉め
鐵八　高尾どの、いつぞやお館の騒動より、密かにお供し立退いても、便る方ない浪人の身。過ぎし時、繼母の從姉とやら、女房の縁で爰へお供して參りましたれども、今お聞きなさるゝ通りの邪慳の姑。打割つて云はれもせず、薄雲と名を替へさしまして、新造の突出し傾城。これを敷金につこらしう、嘘はついても詰まらぬは客先のやりくり。今日も／＼揚詰めの金に詰まつて、澤井屋の勘十郎と云ふ弟嫁の兄を騙し、借り受けた五十兩。今日まではつばめ合しましたが、もう明日からは手詰めの難儀は今の身請け。云ひ抜けならぬ手詰め。明日は養子親の豆腐屋權兵衞方へ、密かにお供しませう程に、何にも苦になさらずとも、マア、御酒でも上がつて、お氣を晴らされて下さりませ。
薄雲　一方ならぬ心遣ひ、嬉しうごゝる。これまでツイにお目にかかつた事はなけれども、今日はお果てなされた父様の日。
鐵八　成る程、大殿大領さまの御命日。若殿と御一緒に。
ト戸棚を明け、鶴若を出し
薄雲　せめて心ばかりの御回向を。

ト懐中より小さい位牌を出し、手水鉢の上に直し、花活けの花を供へ、回向する。

白樂院獨窓宗雪大居士。

鐵八　出離生死頓生菩提。

三人　南無阿彌陀佛々々々々々々く。

ト拜み泣く。おせん、この間より出て、ハアと泣く。鐵八、悄りして

鐵八　女房ども。

薄雲　おせんか。

せん　旦那どの、堪忍して下さんせ。

鐵八　ヤ。

せん　薄雲に心を掛け、ちよつとも外へ出さぬ心中立て。エヽ、腹の立つ、嫉ましいと思ひながらも、胴慾な母さんの耳へ入れては、猶お前の爲にならぬと、ヂッと堪えて居ても、忘られぬは女子の因果。二人の酒事睦事嫉ましさに、立聞きして今の樣子。

鐵八　ヤア、すりや今の樣子を。

せん　皆聞きました。

薄雲　そんなら、わたしに疑ひは。

せん　晴れましたわいなア。

鐵八　女房、今まで隱したは、邪慳な阿母への氣兼ね。

せん　そんなら十三さまも。

鐵八　シイ。

ト氣を附け

奥には先刻の身請けの客。

薄雲　阿母の手前。

鐵八　覺られては一大事。

せん　聞いた者はわたし一人。

ト思ひ入れあり、鶴若を戸棚へ入れる。

鐵八　お二方をお供して、奥へおぢや。

ト唄になる。鐵八、奥へ入る。

せん　如何に時世と云ひながら、淺ましいそのお姿。

薄雲　夫婦の樂のいかい世話。忝なうござるぞや。

ト正九郎、ツカ〱と出て薄雲を引立て

正九　高尾、抱いて寢る。來い。

薄雲　滅相な。わたしは薄雲。

せん　高尾さんは品川で

正九　殺されたとは大きな噓。存命で居るとの噂。この間から手を替へ品を替へ、呼び出しても來ぬ。合點のゆかぬと町人と姿を替へ、入込んだればこそ見屆けた高尾。

今までは常の傾城ぢやと思うて居たが、樣子を聞けば、親仁の外戚腹とあれば、おれが爲にも兄弟同然。其方と女夫になつて家國を治むれば、ゲツとも云はさぬ殿樣、なんと嬉しいか。手付けにちよつと口々を

薄雲　エヽ、嫌らしい。否と云ふに。

正九　嫌と吐かしや、この戸棚の中の、

ト戸棚の戸明けようとする。

せん　アヽコレ。

正九　エヽ、死太い。いつそ。

ト薄雲を引立て行かうとする。此うち鐵八、奥より出かけ

鐵八　おれが抱への薄雲を、なんとするのぢや。

正九　薄雲といふは高尾。

ト行かうとする。ちよつと立廻りにて

鐵八　イヤ、滅多に自由にはさせまい。

正九　妨けひろげば、ソリヤ、家來ども。

皆々　やらぬぞ。

トばた〳〵と鐵八を取卷く。

先達て樣子はとくと見屆けた。

正九　遁がれぬところ、十三、高尾を渡せ。

鐵八　待つた〳〵。十三高尾を隱まうた覺えはないぞ。

正九　異議に及ぶと、ソリヤ。

トこれよりタテ、いろ〳〵あり。

皆々　腕廻せ。

鐵八　無體ひろぐと命がないぞ。

正九　御上意。

鐵八　ハア。

ト下がる。正九郎キツとなる。

正九　先君義網公、お家の重寶、泰山府君の尊像、並びに萩の一卷奪ひ取り、立退きし名古屋十三、その上殿のお心かけられし高尾と不義の科、まつた傾城は手討になせし體に見せかけ、身を遁がれ、薄雲と名を替へ、上を恐れぬ振舞ひ、不屆きなるゆゑ、繩かけて來れとの上意、異議に及ばゞ其方も同罪。尋常に渡すか。但し踏みつけて繩かけようか。

四人　サア〳〵どうぢや。

鐵八　事露顯の上は是非に及どぬ。

正九　繩かけ渡すか。

鐵八　ハツとお受け申す所なれども、なんと云うても、その十三郎が

正九　行くへ知れずば夜半までに、尋ね出して渡すか。
鐵八　サア、その儀は。
正九　この戸棚の中を改めようか。
鐵八　如何にも夜半までに。
正九　キッと細かけ渡すか。
鐵八　暫らく暇乞ひさせる爲、何卒
正九　猶豫してくれろ。詞違へば、この家は燒打ち。
鐵八　サア、如何にも夜中までに。
正九　キッと詞を番うたぞ。
ト唄になる。正九郎、皆々連れ入る。おせん、こなしあつて鐵八の側へ寄り
せん　コレ、こちの人、夜半までに、高尾さんや十三さまに、細かけて渡すのかえ。
ト鐵八、物云はずに中二階へ薄雲を連れ行き、障子をさす。
コレ、旦那どの、そんなら高尾さんは。
鐵八　この敵之助がお隱まひ申すからは、お二方のお身の上に、指もさゝす事はならぬわい。
せん　それでも二種の寶が、夜中までに知れねば
鐵八　お二人の身の云ひ譯。
せん　明りを立てる思案がござんすかえ。
鐵八　大恩受けたお家の御難儀。
せん　その二種の寶がなければ。
鐵八　東山どのへ云ひ譯は
せん　この夜中まで。
鐵八　さつぱりと詮議して
形ん　なんぞよい思案があるかえ。
鐵八　爰は端近。奥へおぢや。
ト唄になり、二人入る。勘十郎出る。
勘十　まん鐵めが内に居ればよいが。
トおるい、娘の形にて出る。
るい　マ、待つて下さんせ。
勘十　なぜ留ゆるか。
るい　オ、お前はこの間、わしを連れて戻らしやんす時、イ、いとしなげに銅吉さんを、タ、叩いたり、フ、踏んだりさしやんしたに依つて、イ、行かしやんしたら、マ、マ又その意趣で、ひよつとケ、喧嘩にでもなれは、ワ、惡い。今日行かずと、ヨ、止しにして下さんせいなア。タ、賴みます。
勘十　何を吐かすぞい。われを連れて戻つても、肝心の暇

の狀を取らぬうちは、どこへもやる事はならぬわい。

ろい　ナ、なんの、ワ、わしがどこへ行かうぞいなア。

勘十　イヤ、やらにやならぬ。われを欲しがる所へやれば、五貫目と十貫目は取れる仕事。今日めつきしやつきに行て、去り狀を書かさにやならぬわい。

ろい　ソ、それでも、オ、お前が行かしやんしては、イ、意地づくになつて、ナ、なんの相談も出來ぬ程に、マアワ、わしが行て、去り狀とやらも、ト、取つて來る程にわし任せにして下さんせ。

勘十　ハテ、それ程に思ふ事なら、どうなりとぢや。

ろい　忝なうゴ、ござんす。お前は去んで下さんせ。

勘十　イヤ、そんなべん／＼とした事ぢやない。おりやちよつとの間あつちや町まで行て來う程に、その間に書かして置けよ。

ろ吉　ガ、合點でござんすわいな。

勘十　暇がいると、おれが迎ひに來るぞよ。

ろい　ア、あい／＼。

勘十　エ、、いま／＼しい。いろ／＼の事に使はれるわい

ト云ひ／＼入る。

ろい　ア、嬉しや。ド、どうぞ内にならよいが。

ト云ひ／＼内へ入る。銅吉、中より出て

銅吉　ヤレ／＼、飯食つたら、どつかりとした。

ろい　ヤア。

ト走り寄り縋り泣く。

銅吉　エ、、恂りしたわいの。おるい、わが身はなんで泣くぞ。

ろい　なんでとは、わしやお前に、ワ、別れてから、泣いてばかり居たわいなア。

銅吉　おれも其方に別れてから、直に在所へ行たゆゑ、よう逢ひに行かなんだ。

ろい　ソ、それはさうと、姉樣フ、夫婦の、ゴ、御機嫌は直つたかえ。

銅吉　そりや知らぬが、今も今とて、必らず寄せなと云はれた程に、マア去んでたも。

ろい　コ、こちの兄樣も同じ事で、ゴ、ござんすわいなア

銅吉　こちの姉者人、姉聟の氣が短かい。見付けられぬうちに、サア／＼、早う去んでたも。

ろい　イエ／＼、わしや去にやせぬ。ア、姉御さんや鐵八さまにも、詫び言をするコ、心で、キ、來ましたわいなア。

銅吉　エ、其やうにキ、ニ、ト、と云うては、詫び事したとて聞く和郎達ぢやない。拜む。去んでたも〳〵。

ろい　キ、聞かしやんすか。キ、聞かしやんせぬか。ぬしやテ、鐵八さまに逢うてから。

ト行かうとするを銅吉止めて

銅吉　其方が行くと、おれが叱られるわいの。

ろい　エ、ハ、放しやんせいなう。

トせり合ふうち、橋がかりより箱提灯、若黨平七附き乘り物舁き据ゑ出る。

平七　誰ぞ頼まうぞや〳〵。

銅吉　そりやこそ頼みませうがある。マア〳〵待ちや。待ちくされやい。

ろい　ド、どうでも鐵八さんに、ア、逢はにや置かぬ〳〵

トせり合ひ、銅吉、おろいに囁く。おろい、炬燵へ隱れる。

平七　誰れも居らぬか。頼まう〳〵。

銅吉　お前は誰れぢや。新造でも呼ぶのか。

平七　イヤ、まんぢう屋鐵八宅はこれか。

銅吉　宅といふは知らぬが、まんぢう屋は、此方ぢや〳〵

平七　宅に居るなら、早く呼び出してくれ。

銅吉　オイ〳〵、呼んでやらう。兄貴々々。コレ、知らぬ侍ひが逢ひに來たぞえ。コレ、早いこつちや。まんぢう屋を尋ねに來た。うまいこつちや。早いこつちや早いこつちや。

鐵八　ヘテ仰山な。知らぬ侍ひとは。

ト云ひ〳〵内より出る。

平七　鐵八どの、イヤ、身共ぢや。

鐵八　エ、平七さま。なんと思し召して。

平七　旦那のお供いたして。

鐵八　これは〳〵、御苦勞に存じまする。マア、これへお通り下さりませ。

平七　この間の茶入れの事につき、御覽になりたいとのあるゆゑお供した。

鐵八　それは有り難うござりまする。マア〳〵これへ。

平七　然らばこれへお通し申さう。

ト乘り物へ手を突き

申し上げまする。鐵八宅に居りまする。イザ、お通りなされませ。

ト戸を開く。中より彌十郎、靜々と出で、ツッと内へ上がる。

鐵八　これは〳〵、見苦しい所へ冥加至極もない。銅吉、お茶持て。

銅吉　オイ〳〵。

ト煙草盆を直し、置き炬燵へ隱れる。

彌十　イヤ〳〵、心遣ひは無用。ついに對面いたさぬが、家來秋篠平七より噂に聞けば、其方、聖賢の茶入れ所持いたし居るとの噂。左やうか。

鐵八　成る程、ちつと由緒ござりまして、持ち傳へ居りまする。當時片桐彌十郎さまは、お茶をお好みなさりますると承りましたゆゑ、御家來平七さまにお頼み申しましてござりまするが、お求め下さりませうならば。

彌十　如何にも求めくれうが、代は何程ぢや。

鐵八　外に類のない茶入れでござりますれば、六百兩。

彌十　求めくれう。代の高價なるは、茶入れに値打の附くといふもの。併し、身が求めるではない。武將義政公の御懇望。岩倉主膳とのゝお取次を以て、献上の茶入れ。ちよつと見ようかい。

鐵八　お目にかけませう。

ト戸棚の中より茶入れを出し、彌十郎の前へ直し

ハイ、御覽下さりませう。

彌十　ドレ〳〵。

ト改めて見て

とても片桐づれが眼力に及ぶ事ではない。先づ見事ぢや。

鐵八　彌十郎さま、商ひ口ではござりませぬが、なか〳〵似せても似せられるものぢやござりませんてや。

彌十　成る程見事。東山どのへ差上ぐる道具、輕々しく計らはれまい。明日目利き者に改めさせ、聖賢の茶入れに相違なくば、求めてくれう。

鐵八　先づお有り難うござりまする。左やうならば何してもお手附けをお渡し下さりませうならば、私し儀も落ちつきまするでござりまする。

彌十　成る程尤も。平七、金子を持て。

平七　畏まりました。

ト挾み箱より金子百兩出し、彌十郎の前へ直す。

彌十　ヤイ、鐵八とやら、手附け金百兩相渡す。殘り金五百兩は、明日目利き者どもに持參いたささう。

鐵八　然らばお手付け百兩、お受取り申しまする。

彌十　大切の茶器、必らず疎略なきように。

鐵八　イヤモウ、如才は毛頭ござりませぬ。

彌十　身共は最早歸らう。

平七　ハア、。お立ち。

ト乗り物廻す。鐵八、送り出す。

鐵八　左やうならば、いよ〳〵明日。

彌十　此方に相違はない。鐵八さらば。

鐵八　ようお出で遊ばされました。

ト唄になる。乘り物橋がかりへ入る。

ハア、。先づ有難い。

ト茶入れを箱へ入れ、袱紗に包む。

銅吉めは、何して居る。銅吉。

銅吉　オイ〳〵、ハア、もう侍ひは去んだか。

鐵八　ヤイ〳〵。どこへ入つて居た。ハア、また撮み食ひか。たつた今飯を食つて。ヤイ、茶を一つ飲ませ。又よい加減にしてうせう。

ト銅吉、立ちながら呑んで見て

銅吉　サア、茶の加減ぢや。

ト呑みさしをやらうとする。

鐵八　エ、、馬鹿め。人に呑ます茶を、おのれが喰うて見るといふ事があるものか。

ト此うち銅吉、百兩の金取り、ひねくり廻し見て

銅吉　サア〳〵けうとい。この金は何貫つた金ぢや。

鐵八　この茶入れを六百兩に賣つた手附けの金ぢや。先づ納めて置かうか。

ト抽出しへ入れ、錠おろし

コリヤ、明日おれがひよつと留守のうちに取りに來たら金五百兩とこの茶入れと引換へぢやぞよ。

銅吉　ヤア、そんならまだ五百兩持つて來るかえ。サアサア、なんぼ榮耀しても大事ないワ。

鐵八　また仇口きくまいぞ。オ、、夜の更けた加減か、いから寒くなつた。ドリヤ、炬燵へあたらうわい。コリヤおせん、先づ火を入れてたもや。

せん　アイ〳〵。

ト火掻きに火を入れ持ち出る。銅吉悃り、立ちふさがり

銅吉　イヤ、どこへ〳〵。滅相な。その火を入れて堪るものか。

せん　でも、火がないと風邪引かしやんすりや悪い。

鐵八　早う入れてたも〳〵。

トおせん、火を入れる。鐵八あたらうとするを引き退け

銅吉　ならぬ〳〵。この炬燵へあたる事はならぬぞ。ア、

どこでやらこんな事を見たが、オヽ、それ〳〵、いつやら筑後の芝居でした、重井筒のお房德兵衞、水炬燵で兄弟に意見する所に、よう似た事ぢや。
せん　いつの間に芝居を見に行くやら。よう知つて居る。
鐵八　オヽ、よう知つて居るぞ。いろ〳〵に云ふのにアタ野太い。コレ、いつ見たぞ。此奴は智慧のない奴なれど、その筈の事ぢやわい。
せん　それでもあの子は發明な子ぢやに依つて、よう云うて聞かしたら、合點がゆかうぞいなア。
鐵八　よう聞けよ。今つき絡うては、勘十郎とおれとが云ひ分になつて、意地づくになると、品に依つて、一生の別れにならうも知らぬぞよ。
せん　阿房な者につき絡うて下さる志し、憎うはない。サア、其方は可愛いけれど、兄御の姿が悪いに依つて、こちの人がせいとうさしやんすのぢや程に、早う去なんせや。
鐵八　さうぢや。互ひに顔を合しては、云ふやうになると結句悪いに依つて、おりや炬燵へあたらぬぞよ。
せん　大方合點がいたぢやあらう。もうあたらずと措かしやんせ。
鐵八　ヤイ、おのれも炬燵へ、ツイちよこ〳〵とあたつてしまへ。帶を解いてあたる事はならんぞ。
せん　阿房の癖に、兎角炬燵入りをしたがる程に。
鐵八　エヽ、憎い奴ではあるわいの。
ト唄になる。鐵八入る。
せん　鼻でもかみや。
ト入る。銅吉、後を見送り
銅吉　ハヽヽヽ、うまい和郎ではある。おれが炬燵へおるいを隱して置いたを、二人ながら知らぬわい。コレ〳〵もうよい。サア、出や〳〵。コレ、出やいなう。
ト蒲團まくると、おろい、火に醉うたる體にて出る。銅吉に取りつき、苦しきこなし。
オヽ、赤い顔ぢや。どこで酒呑みやつた。ムウ、炬燵の火に醉うたのか。アヽ、それには何やらの水が藥ぢや。オオ、花活けの水ぢや。幸ひ花活けもある。ドレ〳〵。
ト花活けの水をおろいに呑まし、仰山にする。おろい氣のつきたるこなし。此うち勘十郎出かけ居る。
ろい　アイ〳〵、モヽもうよござんす。措いて下さんせ。
銅吉　先づ命は取止めたワ。サア、氣が附いたら去んでたも。

ろい　アイ〳〵、姉さん、ゴヽ御夫婦の今の御意見、キ聞いて去にますでござんす。カヽ書いて下さんせ。

銅吉　なんぢや、かいてくれ。どこぢや。大方ちりけ元であらう。ドレ〳〵。

ろい　エヽ、その事ぢやァないわいの。

銅吉　その事でなしにかけとは、エヽ滅相な。おりや恥かしい。

ろい　エヽ辛氣な。コレヽキヽ起證を書いてクヽ下さんせ

銅吉　起證とは、なんの事ぢや。なんぼ其やうに云やつても、おりやとんと合點がゆかぬもの、

勘十　合點がゆかざ云うて聞かさう。

ト中へ入る。二人、悔りして

銅吉　勘十郎さん、おるいは一人來たのぢや。わしや知らぬぞえ。

勘十　ヤイヽ女郎め、なんぼ云うても聞かぬな。聞かねばおれが仕樣がある……と云ふのは、銅吉に起證を書かしてやらう。

ろい　そりやほんのコヽ事かえ。

勘十　なんの噓を云はう。いま書いてやるわい。銅吉、爰へ來い。

銅吉　と云うて叩くのぢやないかえ。

勘十　イヤ、叩きやせぬ。高う云うて鐵八が聞きや面倒な。

銅吉　アイ、サア來たが、何ぢやえ。

勘十　いま妹が欲しがる起證といふ物の譯。合點のゆくやうに云うて聞かすのぢや。

銅吉　如何にも、こりや聞き事ぢや。さらば聽聞仕らう。

勘十　コリヤ、よう合點せいよ。われと妹が緣切らうと云ふは、われが姉聟鐵八との意地づくぢや。

銅吉　ムウ、意地づくぢやワ。

勘十　それで緣は切りたれども、妹がわれに惚れて居るしわれも又妹が可愛いさうな。

銅吉　可愛いさうな。

勘十　そこで互ひの心が變らぬやうに、われに起證を書いてくれと云ふのぢや。なんと呑み込んだか。

銅吉　如何にも呑み込んだが、その起證の書きやう知らぬわい。

勘十　そりやおれが敎へてやらう。

銅吉　敎へて下さんすりや、朝から晩まで何本でも書くぢや。

ト硯出し、墨摺る。

勘十　妹、起證の文句、望みはないか。
ろい　イエ〱、キ、起證でさへありや、ようござんすわいなア。
勘十　おれが文句好んでやらう。
ろい　アイ〱。
ト喜ぶこなし。銅吉、紙を取つて
銅吉　書きかかつて暇が入ると病氣になる。ちやつと教へて下んせ。
勘十　ハテ、大きな聲すると鐵八が聞くと惡い。人の聞かぬやうに、われに囁く程に、書けよ。
ト囁く。銅吉、呑み込み
銅吉　よし〱。預かり申す金子の事。
勘十　イヤ〱、聲が高い。心で思うて書けやい。
銅吉　アイ〱、斯うかえ。起證にも金の事を書くものかえ。
勘十　オヽ、書かにやならぬ。そこが誠のところぢや。オヽ、これでよい〱。これから血判せにやならぬ。どの指を切つて、血をこれに附けにやならぬ。
銅吉　エヽ、滅相な。指切つて堪るものか。
勘十　さても〱臆病な者ぢや。そんなら印判はないか。

銅吉　判かえ。判なら、なんぼでも出す。ドレ〱。
ト戸棚の抽出しにかゝる。
ヤヽ、こりや戸棚に錠がおろしてある。
勘十　エヽ、埓の明かぬ。おれが明けてやらざなるまい。
ト行かうとする。おろい留め
ろい　コヽコレ、待たしやんせ。そんなコヽ怖い事を、オおいていなア。
勘十　損ねんやうに明ける。銅吉、金槌ないか。
銅吉　アイ〱。
ト金槌を渡す。勘十郎、銅吉に囁く。銅吉、拍子取り
〽内を窺ふ竹瓢簞、がらつかすれど寢入り端。
ト淨瑠璃語る。この拍子に合はせ、勘十郎、錠を叩き明け、抽出しを持ち
勘十　もうよい〱。サア、判を出せ〱。
銅吉　お前は下地があるわいの。
ト判を出し、これを渡す。
勘十　ドレ〱、名の所へよう捺して、明白な所。これでよし〱。サア、よいか妹。ドリヤ、おれが預かつて置から。
ろい　そりやどうなりとお前次第……忝なうござんす。

ト此うち抽出し入れようとする。

勘十　コリヤ銅吉、その抽出しの中に、紙に包んである物は何ぢや。

銅吉　これかえ。こりや小判百兩。なんと、よい身代ぢやあらうがな。

勘十　オヽ、けうといものぢや。さて銅吉、おるいを連れて去ぬるについては、あれを女房にやつた時附けておこした、百兩の敷金を持つて去ぬる。サア渡せ。

銅吉　エヽ、敷金とは、なんの事ぢや。

勘十　ハテ、祝言の晩におこした百兩。しかもわれに渡したが、覺えの惡い者ぢやな。

銅吉　イヤ、わしやその時の事覺えて居るは、寢てからの事ばかり、外の事は知らぬ。おるい、覺えて居やるか。

るい　イヽエ、そんな事は、ナアなかつた。アヽ、兄さん、いろ／＼の事云はんす。

勘十　ない事云うて堪るものか。大方その金がさうであらう。ドレ／＼、此方へおこせ。

ト銅吉、金を出し

銅吉　これかえ。こりや先刻に茶入れの手附けに取つた金ぢや。

勘十　なんぢや、茶入れの金ぢや。それが又、茶入れの金と云ふ證據は。

銅吉　證據見せうが。コレ／＼、この茶入れを六百兩に賣つた、百兩の手附けの金ぢや。

ト箱より茶入れを出し、見せる。

勘十　これ程結構な金になる物持つて居て、五十兩の金は戻し居らぬ。鐵八め、エヽ、けたいな。

ト打ち割る。おるい驚ろく。

銅吉　ハアヽ、割れたワ。ホウ、こちや知らぬ／＼。おるい急いで

ト云ひ／＼、その茶入れを拾ひ箱へ入れる。

るい　コヽ、コレ兄さん、コヽ、この茶入れが割れては、ドヽどうせうと思はしやんす。マア、ソヽ、その金戻さしやんせ。

ト金取らうとする。勘十郎、面倒なと突き放し、行かうとする。銅吉、取りつくを、さん／＼打擲する。所へ鐵八、おせん、出かけ見て恟りし、中へ入る。銅吉恟り飛び退く。勘十郎、構はず行かうとする。

鐵八　勘十郎待て。

勘十　用があるか。

鐵八　われが妹を打擲するは、勝手にしたがよいが
せん　此方の銅吉は、なんで叩かしやんした。
勘十　叩いた樣子云はうか。
鐵八　云はさにやならぬわい、
勘十　云ふぞよ。
せん　その譯は。
勘十　おるいを妾の内へおこした時、敷金の催促に來たれば、幸ひの百兩の金、この金を持つて去ぬるのぢや。それをこの銅吉が邪魔ひろぐゆゑ、打ち据ゑたがなんと。
鐵八　この箱は銅吉、われが明けたか。
銅吉　イヤ、勘十郎さんが金槌で明けさんした。
鐵八　わりや、敷金取つた覺えがあるか。
銅吉　イヽエ、覺えはない。ナウ、おるい。
るい　アイ、ナ、ない事でござんす。
鐵八　勘十郎、その金戻せ。
勘十　この金を、おれが盜んだ證據は。
鐵八　證據は今聞く通りぢや。置いて行け。
勘十　イヤ、あんな馬鹿な奴の證據にやならぬ。この金を戻す事は、マアならぬわい。
鐵八　戻さにや斯うして取るわい。

　ト勘十郎が懐へ手を入れる。
勘十　何する……敷金の證據見せうかい。
鐵八　面白い。證據があるなら見ようかい。
勘十　證據見せた上で、存分にするぞよ。
鐵八　證據見せた上で存分にせい。サア出せ。
勘十　さらばお目にかけよう。耳をさらへてよう聞けよ。「預かり申す金子の事、一つ金百兩なり、右はこの度其方殿妹るい、此方銅吉女房に貰ひ候ふ敷金として、慥かに受取り申し候ふ、萬一不祿につき、右るいをお引取りなされ候はば、右の金子百兩きつと返濟申すべく、後日敷金預かり一札斯くの如し。澤井屋勘十郎どの、まんちうや鐵八、判。」
鐵八　オヽ、この證文は銅吉、其方の手ぢや。
勘十　ソレ、目を明けて判もよう見い。
せん　この證文は、いつの間に書いてやつたぞ。
銅吉　それでも、あの和郎が書けと。
鐵八　そりや銅吉に證文書かせ、判はおれが判。ハテ。
　ト勘十郎、鐵八が首筋を取り
勘十　動きやがるな。なんぢや、おれを盜人ぢや。コリヤヤイ、盜人はおのれぢやわ。おれが金を五十兩借つて居て

今日の明日のと云うて戻さぬ事は拋つて置いて、正直正路なおれを、なんぢや盗人ぢやとは、この頬桁で吐かしたか。これでか〳〵。

トさん〳〵に打擲する。おせん、これはと寄る。同じく引きつけ振り廻す。銅吉、隅に屈み慄へて居る。おろい、この時より戸口に俯向き居る。勘十郎、鐵八おせんを突き放す。鐵八、無念のこなし。おせん、勘十郎に詰めかけ

せん　エヽ、こなたはなう。

勘十　なんぢや、あんまり氣を揉むと腹がへる。損ぢや。グッとしごいて白ばな垂れさゝねば、料簡のならぬ所なれど、金さへ取りやよい。料簡して去んでこます。置き土産に、ドリヤ、ま一つお臑を參らさう。おれが踵の鹽梅、よう頬に覺え置け。大盜人め。

ト鐵八とおせんを踏み飛ばし入る。唄になり、鐵八、砂場にこけ居る。銅吉、側へ寄り

銅吉　姉者人、痛からうなう。鐵八さま、堪忍さんせ。彼奴が踵は大抵堅い踵ぢやない。

トおせん思ひ入れあつて、鐵八を抱き起し

せん　イカサマ、あんな無法な奴を相手にして、此方の命を仕舞ふは損ぢや。無念にあらうけれど、堪忍して下さんせえ。

鐵八　それもさうぢや。みす〳〵百兩騙られたやうなものなれど、五十兩借つて居れば損は五十兩。六百兩に賣つた茶入れを、五百五十兩に賣つたと思へば濟む事ぢや。ア、まゝよ〳〵。

銅吉　コレ、その五百兩の茶入れ、當にさんすな、それ見さんせ。

ト茶入れを鐵八見て、銅吉を引きつけ

鐵八　ヤイ、この茶入れは、どうして割つた。サア、その譯云へその譯云へ。

銅吉　イヤ、おれぢやない。それはナ、勘十郎さんが、けたいなとて割つたわい。こつちや知らぬ〳〵。

ト鐵八、思ひ入れあつて表へ駈け出る。おせん悄りし附いて出る。鐵八立戻り、茶入れを取上げ見て

鐵八　東山どのへ差上げる茶入れは割れ、金は騙られ、彌十郎さまへ云ひ譯。ハア、なんとせう。

せん　エヽ、彼の時この事を知つたら、のめ〳〵去なしはせんのを。

鐵八　ソレ、申し譯には勘十郎。うぬ。

ト鐵八、走り入る。おせん、これはと走り入る。銅吉一人殘り

銅吉　おるい〳〵。エヽ、そこに居やるか。喧嘩はもう仕舞うた。サア、これから二人炬燵で遊ばう。サア、炬燵へあたりや。

ト手を取る。おるい、顏振り上げ、思ひ入れあつて

るい　サア、遊びたう思へど、ダヾ大事の用があつて、行かねばならぬわいなア。

銅吉　そんならそうと、先刻にから云うたがよい。サアサア、ちやつと行て、早う戻つてたもや。

るい　ツ、ツイ戻らうと思うてか、戻られぬ所でござんす

銅吉　そりや變つた所ぢやの。どこぢやいの。

るい　アイ、ト、遠い所でござんす。もし戻られぬ時は、ワ、わしがやうなおるいを、コ、拵らへて、カ、可愛がらしやんすかえ。

銅吉　イヤ〳〵、外のおるいは、おりや嫌ひぢや。其方の戻りやるまで、百日でも待つて居るわいなう。

るい　オヽ、よう云うて下さんした。忝なうござんす。

ト取りつき泣く。

銅吉　エヽ、なんぢやぞいの。泣くならわが身ばかり泣いたがよい。人にまで移して。

るい　未來は必らず女夫でござんすぞえ。

ト泣く。

銅吉　なんで未來は女夫ぢやぞいの。

るい　サア、その譯は、兄樣のコ、心が惡いに依つて、今頃はキ、切り合うてがな居さんせう。ド、どうでこの世で添ふ事はならぬ。イ、生きて憂き目を見ようより、いつそシ、死んでしまふ心ぢやわいな。

銅吉　其方が死んでしまやつたりや、おりやなんとせう。一緒に行くやうにしてたも。

るい　アノ死ぬるのは、ク、苦しいものぢやぞえ。

銅吉　ちつとの間、痛いのを辛抱すれば、女夫になられるぢやないかいなう。

るい　なられる段か。もうコ、爰から手を引いて、ツ、連れ立つて行くわいな。

銅吉　オヽ、死なう〳〵。それ聞いたら、急に死にたうなつたわいなう。

るい　オヽ、死出の晴れ小袖は、幸ひのキヨ經帷子。

銅吉　これを着るものかや。こりや葬禮の儀式ぢやの。アア、どうやら風邪など引きさうなものぢや。

トめりやすになる。經帷子を着て、銅吉も着替へさす帶をして手を引き、砂場に連れ行き、よき所に坐らせ懐劍を銅吉の側へ置き、その身も剃刀を持ち

ろい　サ、わしからサ、先へ、コ、殺して下さんせ。

銅吉　イヤ／＼、おれを先へ殺してたも。男は女房より先へ行くものにしたものぢや。サア世話ながら殺してたも。

ろい　そんなら一時に、サ、シ、死にませう。

銅吉　おるい、其方は淨土、おれは法華、淨土と法華は仲の惡いものぢやが、死んでから別々に行きやせまいかいなう。

ろい　イヤ、そりや氣遣ひさしやんすな。ワ、分けのぼるフ、麓の道は、オ、多けれど、同じ雲井の月を詠めん。

銅吉　同じ月なら一緒に突かう。おぢや、南無妙法蓮華經

ろい　南無阿彌佗佛。

兩人　サア／＼／＼。

ト兩人一度に自害する。銅吉、懐劍腹へ突ッ込み苦しむ思ひ入れ。蘇枋になる。兩人悔り探り寄り、手を取り交し抱きしめる。所へ鐵八、勘十郎、おせん出る。兩人を引上げ、顏を眺め、思ひ入れあつて首切る。銅吉の首、炬燵の上へ出る。おるいの首は帳箱の上へ出る仕掛ある。おせん、硯箱を取り墨摺る。おるいの顏に眉を引くこなし。銅吉の首に鐵八元服さすことなし。この間勘十郎、俯向き泣いて居る。おせん、最前の卒塔婆二本に戒名を書く。

せん　弟の戒名は洞穴信士、おるいはなんと云ひますえ。

勘十　妹が戒名は華月妙具信女。

せん　コレ、眉引いて目の上の入れ黒子。

鐵八　高尾どのに生き寫し。

せん　弟の銅吉は、

鐵八　元服させたりや、十三どのに瓜二ツ。

せん　お前も

鐵八　わが身も

勘十　こなた衆

せん　古主のお爲、命をたもと、云ふに云はれぬ義理ある弟。

鐵八　嫁御とは云ひながら、町人の妹。一大事を明かされもせず

勘十　斯う云ふ譯と、おれを男と見かけての頼み。とは云ふものゝ可哀さうに、まんざら手にかけて殺されもせず

せん　どうぞ我が手に死ぬやうに

鐵八　金や茶入れの拵らへ事。
勘十　アヽ、悪い事はせまいものぢや。いつぞや大蔵に飼まれ、さま〴〵の似せ狀で、儲け溜めたおれが身代。慾の報いが目の前、妹が命を棒に振つて、割れたこの場の身替り。
鐵八　當つて碎けた勘十郞どのゝ佛性。
せん　イヽエ、佛と云ふはこの二人。
鐵八　死ぬる今まで胴慾者。
勘十　この兄や
せん　無得心な姉ぢやと、愚かしい生れつきでも、心の中では
鐵八　恨んでなんとせうぞいなう。
せん　もし逃げ隱れては、お主樣の大事とばかり心得て、包み隱した身の口惜しさ。
鐵八　女房ども。
勘十　夫婦の者。
鐵八　如何に忠義が立てたいとて
勘十　無得心な事ばかり。
鐵せ　エヽ、可愛い事をしましたわいなう。
ト泣く。

勘十　ハヽ、さていつまでも泣いたとて還らぬ事。如何に妹の纖ぢやとて、あんまり内股膏藥と思はるゝも面目ない。サア、さつぱりと、切つた〳〵。
鐵八　何がなんと。
勘十　ハテ、高が知れた町人、この大事が顯はれる時は、ひよつとおれが口走つたかと思はれては立たんわい。
鐵八　勘十郞、其方を疑ふ敵之助なりや、この事を明かさんうちに、兄弟ともに殺らとてしまふわいなう。
勘十　そんなら疑ひはないか。一人の妹を殺して、なんの慾徳。この金も要らぬ、戻しまする。
鐵八　でも、このうち五十兩は。
勘十　二人の香奠。
鐵せ　すりや、この金で。
勘十　せめて二人前に……ドリヤ、寺へ行て葬禮の拵らへせうか。
ト唄になり、勘十郞、ツイと向うへ入る。と彌十郞出て、
彌十　敵之助夫婦、今の忠義に免じ、亡君になり代り、この彌十郞が勘當赦してくれう。
せん　すりや、夫の勘當を

彌十　お赦さるゝぞ。喜び下され。
鐵八　エヽ、有り難うござりまする。
彌十　町人なれど勘十郎とやらんが心底。この彌十郎計略に加はりしは、一旦武將の上意を立てる爲。高尾、十三が身の云ひ譯。ハテ、不便の最期を見る事ぢやなア。
ト少し落涙の思ひ入れ。九ッの鐘鳴る。
せん　ありや約束の夜半の鐘。
鐵八　大藏が來る時刻。
ト正九郎出る。
正九　契約の夜半の鐘。
鐵八　申し譯に切腹いたした兩人が首。
正九　ドレ。
見て、
生き顔と死顔、滅多には受取られぬ。これこそ十三、高尾に相違ないといふ
彌十　その證人はこの彌十郎。
正九　すりや、御自分が。
彌十　相違ないといふ詞は金鐵。
正九　尤も。
鐵八　日本一の證人があるからは

正九　疑ひ晴れた。この家の圍み引かしてくれう。
彌十　然らば一刻も早う、この旨を言上仕らう。さらば。家來、供せい。
ト入る。後見送り
鐵八　マア、この通りを十三さまへ。
ト云ひ〳〵炬燵の炭櫃を開け、十三を出す。
彌十　オヽ十三、御健勝でござつたか。
十三　これは彌十郎さま。この十三が曇りなき申し譯の
彌十　この一品をお身にくれる。受取り召され。
ト封印の箱渡す。
十三　封印のこの箱を
せん　十三さまのお身の
鐵八　云ひ譯とはな。
彌十　その封印は未來にお居やる、秋塚どのに開いてもらへ。
十三　ナニ、この封印を
鐵せ　未來にござる
十三　秋塚さまに
鐵八　開いてもらへとは。
十三　して、この箱の中は。

彌十　玉くしげ蓋取りあはぬ君が身を、あけながらへば見んと思ひし。ナア、あけながらへば見んと思ひし。とくと工風をしてお見やれ。して、この高尾どのは。
せん　ほんに高尾さまは、どこにござるやら。こりや高尾さんは。
　ト つか／＼と二階へ行て、愕りし、紙入れを拾ひ取る
　おとら出て
とら　オヽ、高尾は盗み出して、大藏さまへ、おれがやつたわい。
皆々　ヤア、。
　ト 愕り。此うちおせん、紙入れより狀を出し
せん　コレ、この狀は。
　ト 差出す。
彌十　ドレ。
　ト 見て
　すりや、萩の一卷は大藏が。うぬ。
　ト 狀を口に啣へ、向うへ走り入る。
鐵八　何にもせよ、大藏に追ひついて。
　ト 行かうとするを、おとら引きつけ
とら　どこへうせる。

鐵八　サア、高尾どのを、
　ト 行かうとする。天右衛門、文七、この間に窺ひ居て
兩人　どつこい。
　ト 二人を引きつける。鐵八また行かうとするを、おとら引きつけるゆゑ
鐵八　母者人。
　ト 胸倉を取つて引据ゑ
　エヽ、こなたはなう。
　ト 無念のこなしあつて力むと、早鼓。前一面の黒幕下りる。本雨降る體。松原となる。侍ひ、提灯燈し、駕籠一挺舁き出で、後より正九郎、合羽傘高足駄にて出る。
駕舁　申し旦那、どうぞ笘をかけさして下さりませ。
正九　ハテ、急ぎの用。駕籠の損じ賃は望み次第出さう。急げ／＼。
駕舁　左やうならば、ようござりまする。
　ト 向うへ行かうとする。彌十郎、走り出て、棒鼻を持つて後へ押し戻し
彌十　待つた／＼。

正九　彌十郎か。
彌十　大藏どの、エ、、こなたはなう。裏道から高尾を連れて退くとは、武士に似合はぬ。
正九　コリヤ〳〵彌十郎、裏道から連れて行くのが卑怯なか。わりやよう似せ首を摑ませたなア。いつそ手近に高尾から。
ト駕籠へかゝらうとする。
彌十　ア、コレ、早まるまい。すりや、こなたは高尾どのを殺す氣か。
正九　イ、ヤ、口說き落して
彌十　女房にする氣なら、この彌十郎が口說き落してやらうが、その代り、ちつと共許へ。
正九　無心と云ふのは。
彌十　萩の一卷が貰ひたい。
ト正九郎、ギックリとして思ひ入れ。
正九　萩の一卷とは、なんの事ぢや。
彌十　ハテ、隱さつしやるな。こなたの爰にあるわいの。
正九　彌十郎、わりやこの大藏を盜賊にしたなア。
彌十　イヤ、盜ましやつたとは云はぬ。
正九　それに又、一卷を出せとは。

彌十　この一通で
ト右の狀を見せる、
正九　ヤア。
ト懷中を見て、恟りしたこなし。
彌十　なんと……こなたが高尾を奪ひ取つて去んだ、後の座敷に落ちてあつたこの狀。文言見れば萩の一卷、詮議嚴しく候ふ間、肌身離さず所持してあり、宛名はなけれど、こなたが持つて居るに違ひはない。
正九　知らぬ。そんな物持つて居た覺えはない。
彌十　ハテ、これ程慥かな證據があるに。
正九　證據があらうが、狀があらうが、おりや知らぬ。
彌十　さう云はしやると、こなたの懷中を
正九　見事詮議するか。面白い。もし一卷のない時は。
彌十　存分になりませう。
正九　必らずさうぢやぞよ。
彌十　手向ひせぬといふ證據。
ト大小を抛り出す。正九郎、思ひ入れあつて
正九　サア、有るか無いか詮議せい。
彌十　ハテ、一卷は爰に。
トいろ〳〵探す。

正九　有るかの。有るか。無いぞよ……ヤイ、うぬはこの大藏を盗賊にしたがよいか。これがよいか。

ト引きつけ、さん〴〵むがうする。

サア、手向ひせぬか。なんとして、初手からの約束ぢや、存分にならうと吐かした。頰桁へこれ喰へ。

ト下駄にていろ〳〵むがうする。眉間打ち割る。彌十郎ムッとするを

何をびこつく事ぢや。手向ひさらすと、駕籠の中の高尾を、たつた一突き……サア、手向ひひろがぬか。なんとして〳〵。コリヤ、今までとは違ふ。大殿のお胤ぢやぞよ。追ツつけ佐々木の家を横領するこの大藏。われが為にもお主ぢやぞよ。その主を、うぬは盗人とは、この顔で吐かしたか。

ト唾を吐きかけ、くらはす。

わりや武士か、侍ひか。頰を灰吹にしられても無念とは思はぬか。ハヽヽヽ、張合ひのない泥坊ぢや。

ト蹴倒す。彌十郎、思ひ入れ。

彌十　ハテ、手向ひせぬと云うた彌十郎。どうなりとこなたの存分。

正九　オヽ、存分にする。マア、おれが存分と云うたりやうぬ斬ら。

ト切りかけるを、傘にて受け留め

彌十　その存分ばかりは、マアなるまい。

ト唄になり、正九郎が帯の端より一卷出る。

正九　ならねば斬ら

彌十　さてこそ。

ト取らうとする。正九郎、後へ隠さうとする。兩人押へる。この間、渡平、非人にて出る。一卷を正九郎後へ抛る。渡平、ちよつと取る。

彌十　ハテ、變つた所に隠したなア。

正九　オヽ、この大藏が帯の芯は、何時でも萩の一卷ぢやと思へ。

彌十　もう一卷が知れるからは、覺悟せい。

正九　あれが出るからは、もう破れかぶれぢや。うぬから先へ高尾を

トかかるを引きのける。大タテさま〴〵あり、正九郎を切る。彌十郎、駕籠の縄を切り、薄雲出る。

彌十　サア、高尾どの。

薄雲　彌十郎さま。

波平　ソレ、萩の一卷。

ト拋ろ。

彌十　忝ない。

ト頂く。

正九　それを。

トかかるな彌十郎、ボンと切り

彌十　ございませ。

とよろしく、幕。

四段目　藤棚の場

役名‖‖二九壓源右衛門。一文奴、三太兵衛。館準甚五兵衛。數高屋齋七。惣嫁、おみちや。同、おせり。同、おくり。同、おくぼ。娘、おぬい。惣嫁、おきぬ實ハ帶刀妻淺香。

造り物、本舞臺一面に藤の棚。臆病口、葭簾圍ひの茶店。見附け所に大きなる藤の幹あり、橋がゝり黑幕。西寄りに惣嫁の小屋、蓆がこひ、舞臺先に茶屋の床几二脚程直し、毛氈かけてあり。幕の内より茶店の亭主、茶沸し居る。仕出し大勢ゐる。在郷唄にて幕開く。

仕出　なんと、見事な藤の盛りぢやないかいの。

同　さればいの、爰は昔、佐々木の三郎さまとやらいふお人が、木曾どのや手塚の侍ひと、軍さしやつた所ぢやに依つて、雨の降る夜は火が燃えるげな。この藤の見事に咲くのも、その血汐の業でがなあらうぞいなう。

同　さつても謂れ有馬の藤ではないか。毎年々々此やうに、三尺ばかり咲くと云ふは、盛りの時分は群集ぢやて

亭主　サア、お腰かけられませ。藤の下名物の出し茶一盛り、喜撰宇治見山、一煎じが二十四銅。お望みならば藤見酒、白酒が一杯八文。

仕出　コレ／＼、其やうに云ふには及ばぬ。ツイ腰かけて番茶一杯呑んで去にたい。それとても値段聞かねば呑まぬぞ。

皆々　さうぢや／＼。

亭主　常のお茶なら、御一人前に二文づゝでござりまする。

仕出　ムウ。それでは五人で十文ぢやの。内で沸す思ひをしては廉いものぢや。

亭主　サア、お休みなされませ。

仕出　マア、止しに致さうわい。

亭主　なんの事ぢや。

仕出　十文の茶の錢出さうより、内へ去んで唐の茶を貫徹いたさう。

同　それがよからう〳〵。

同　十文で思ひ出した。この中からこの藤の棚へ、よい惣嫁が出ると聞いたが

同　夜ならぞめいて行かうものを

皆々　エヽ、殘り多いなア。

ト仕出し皆々花道へ入る。

亭主　えらいしつたぢや。これでは水も呑めるものぢやない。

ト橋がゝりより、二九屋源右衛門、袋入りの刀を持ち出る。

オヽ、こりや源右衛門さま。マア、お休みなされませ。

源右　オヽ、こりやア精が出るの。そりやさうと、爰へわしを尋ねて來た人はなかつたかの。

亭主　イエ、どなたも見えませなんだ。

源右　おれより先へ來る筈ぢやが、どこで間違うた知らぬ。ちつとの間、待ち合さうかい。

亭主　出花上げませう。

ト茶を出す。源右衛門取つて

源右　アヽ、名代程あつて、夕暮れの藤、見事ぢや。見事な次手に毎晩々々、見事な惣嫁が出るといふ評判、貴樣知らぬか。

亭主　これから東は、私しの支配の立場。成る程〳〵、器量といひ物腰、可愛らしいと云はうか。幕の内のこちらも、一寸出かける氣でござりまする。

源右　サア、さう聞いた。おれも用をしまうたら、一きり買うて去なうかい。

亭主　お前の仁體で惣嫁とは。

源右　さうでないの。何も勘定ぢや。惣嫁を二十で一切り買うて、五文で風呂へ入つて、煮賣り屋で十文とり、六文の汁、八文の酒呑んで、内へ去んで寐るところは、太夫買うたも同じ事。百文かゝる樂を、錢三十九文でしまふ事ぢやもの。仁體のすたる位にお構ひはないてや。

亭主　これも澁い柿の種ぢや。

源右　萬事に斯う氣をつけねば、金儲けはたらぬて。

ト此うち、橋がゝりより、數高屋善七出て、顔見合せ

善七　エヽ、これは源右衛門どの、定めて待ち兼ねてごんせう。

源右　待つた段ぢやない、貴樣は先へ見えたぢやないか。

善七　サア、道にちつと寄つた所があつて、隙どつた。さうして、その牛王善光の刀は。

源右　ア、コレ……イヤ、茶店の。一杯呑みたい程に、なんぞ肴拵らへて下んせ。

亭主　ハイ〳〵。心得ました。ドリヤ、料理拵らへようか。

ト葭簀の内へ入る。善七、思ひ入れあり

源右　善七、嗜なみや。後先を見て物を云やいなう。

善七　なんの、あいらに解るものかい。大事ない。

源右　イヤ、さうでないてや。この牛王善光の刀は、佐々木の家の家老、才原勘解由さまが、様子あつて御所持なされてござるのを、御子息の大蔵どのが、悪所通ひに詰まらつしやれて、この刀を盗み出し、おれの所へ二百兩の質に取つてくれいと云はれて、おれもなんぞになさりうな物ぢやと呑み込んで、二百兩に取つて置いたが、聞けばこの頃佐々木の家の浪人どもが、この一腰を欲しがつて、内證で方々尋ねると聞いたれども、彼奴等は皆なすびぢやに依つて、どうぞ金になる買ひ手でも出やうかと貴様へ相談しかけたのぢや。

善七　幸ひ、その勘解由さまから、善光の刀をお望みの様子を聞いたに依つて、福德の三年目と、わしが世話を焼くのでえすわいの。

源右　サア、いよ〳〵それがほんの事なら、巧いてや。

善七　コレ、ほんか噓かは、追ッつけ爰へ向けて、元利合せて三百兩、其方とおれとが名宛にして、狀が來る筈ぢや。

源右　ヤア、狀が來る。狀では濟まぬわいの。狀で濟むものかいの。

善七　ハテ、狀が來たら、ツイ讀んで見たがよいわい。

源右　イヤ〳〵、狀では濟まぬ。それとも狀で譯するのなら、貴様、どつこへも行かずに一緒に讀んで見や。

善七　ハテサテ、おれが側に居ても、貴様が讀めば濟むわいの。

源右　氣のもや〳〵とする時、こで〳〵讀んで居られるものかいなう。阿房くさい。

ト源右衛門、ムッとして云ふ。

善七　貴様は無筆ぢやの。察するところ明盲目ぢやの。

源右　エヽ、阿房らしい。なんぢやの。書くわいの。

善七　イヤ〳〵、仰せられな。貴様と深い馴染みではないゆゑ、委細を知らなんだが、この間試して見るに、無筆ぢや。コレ、さすものぢやない。隱さずと云うてしまや。

源右　目高め。さうずかれては隱されぬ。有やうは一字も讀めぬてや。
善七　ハヽア、そりや惜しい事ぢやの。
源右　なんでも、これを賣つて强か金にする氣ぢや程に、間違ひはないかや。
ト亭主より、酒肴持ち出る。
亭主　マア、取敢へず、この一種で上げませう。
源右　なんぢや。古臭い田樂か。
亭主　惡口云はずと上がりませい。
源右　ドリヤ、呑みかけうか。
善七　ドリヤ、お合ひ仕らうか。
源右　これはつぽぢや。
亭主　さらばお酌いたしませう。
ト娘おぬい、花道より「この娘賣り物」と云ふ札を掛け、拍子木打つて出る。
ぬい　アリヤ〳〵〳〵ヨイヤサア。
ト一文奴三太兵衛、反古鎗振り出る。
三太　とつかけべい。先退けろ。お鍋がかい餅ねれたら持て來い。合點だ。昨夜も三百張り込んだ。アリヤ〳〵。
トいろ〳〵振つて居る。源右衛門、善七、酒呑み〳〵見て
善七　ハア、變つた奴が來たワ。
源右　拍子木は女子の子と見える。奴が形は餘ッぽど不恰合な形ぢやなア。
亭主　イヤ、あれはこの間からこの邊を振り廻つて、錢を貰ふ親子連れの奴でござりまする。
源右　得てはあんな敵討があるものぢやて。
亭主　こりや出來ました。
ト三太兵衛、振りしまひ
三太　只今振つて通りました、一文奴めでござりまする。一錢あまり、かつつくばいして、取らしてやつて下さりませうならば、有り難くござりましてござり申す。
源右　ヤイ〳〵、一文よ、餘り立派でもない形で、其やうに食ひ物の側あたりへ寄つてくれな。
三太　ナイ〳〵。イヤ、ちよつと宿入り、下馬先の鳥毛捌きを。
源右　コレ〳〵。たつた今受けた杯へ、千手觀音が身を投げられた。エヽ、あつたら酒を捨てるわいやい。
三太　ところを捨てぬぢや。それ捨てさせては奴めが、腦天から爪の先まで、冥加に盡きるといふものでごわりま

する。そこを存じて拙者め
ト腰より古き水呑み出し
この酒を斯う移して、足らぬところは、この燗鍋のこの
酒を移して。
ト燗鍋の酒を注ぎ足して、じく／＼と呑む。
亭主　ヤア、うぬは野太い。何しおる。
三太　野太うても、死太うても、酒と見れば只置く奴ぢや
ごわりませぬ。
ト引つかけ／＼呑む。皆々呆れる。
ぬい　コレイナウ。其やうに滅多に酒を呑ましやつたら、
また酔ひが出やうぞや。さうして、マア、滅相な。人さ
んの呑めとも仰しやりませぬのに。申し、皆さん、お免
されて下さりませえ。
源右　ても大人しい子ぢやなア。
三太　奴めが育てがら。なんと、けうといものでごわりま
せうが。
源右　さうして、ありや、われが娘か。
三太　イヤ、娘ではござりませぬ。マア、娘と云ふやうな
ものでござります。
源右　見りや、首に、この娘賣り物と書いてあるが、マア、
何奉公に賣る心ぢや。
三太　イヤ、モウ、奴めが堂とも宮とも思ふ娘でごわりま
すれば、何奉公の望みもござりませぬ。兎角金の餘計く
れる奉公に、賣りたくごわりまするてや。
善七　ハテ、如才のない云ひやうぢや。
ト源右衞門、札を讀むこなしあつて
源右　ムウ。賣り物／＼。うは請け人のうの字。りは利銀
の利の字。こりや、札附きの娘なら、世話して賣つてや
るまいものでもないが、われが娘でなうて、マア、娘と
云ふやうな、その譯聞きたいてや。
三太　お聞きなされて下さりませ。この子の親は、さるお
大名の御家中。ざつと口に餘る程、知行も取つたお侍ひ
でござりましたが、ちつと譯がござりまして、今では兩
親はござりませぬ。孤兒同然のこのお子。いとしや、子
心に孝行を辨まへ、わしをどこへなりと賣つて、父様や母
様のとひ弔ひをしてくれいと、明けても暮れてもその事
をお頼みだけれど、近づきはなし。おらは斯ういふ一文
奴。誰れを相談相手にせう人もなし。思ひ切つて、この
娘賣り物といふ札をかけさし、方々と連れ立つて歩きま
す。誰れぞ買ひ手があるならば、賣らうと思うてごわり

まする。

源右　ハテ、それは不便な事ぢやなう。おりや女子の子を抱へる商賣ぢやなけれど、おれが近附きに女郎屋も多いが、そこへ肝入れてやらうかい。

三太　それは幸ひの事でごわります。どうぞお世話を、お頼み申したらごわりまする。

源右　イヤモウ、頼まれて餘徳の行く事ぢやなけれど、餘り娘の心意氣がいぢらしいてぢや。

三太　コレ、あの通りに仰しやる程に、ちやつとお禮仰しやれい。

ぬい　どなたかは存じませぬが、いかいお世話樣でござりまする。

源右　オヽ、よう云やつた。世話燒いてやりませう。もう日も暮れる。爰は人立ち。爰の内で相談せう。

三太　よろしうお頼み申しまする。

善七　そんなら私れも呑みかけて、今の便り待ちませう。

源右　これは大きな雜用倒れぢや。サア、一文どの。

三太　マア、お出でなされませい。

ト入相の鐘鳴る。と唄になる。源右衛門、善七、亭主入る。三太兵衛殘り、いろ〳〵こなしあつて、おぬいを連れ、向うへ出て

ア、おぬいさま、今日は餘ッぽど歩きましたれば、いから草臥れました。

ぬい　サイナウ。餘ッぽど歩いても、抱へてやらうと云ふ人がないゆゑ、勢がなかつたが、今の人が世話して下さつたらよいが。

三太　よう云はつしやりました。如何に世の成行きとは云ひながら、誰れござらう、佐々木の御家老、秋塚帶刀さまの御息女。

ト云はうとして

エヽ、又おつかない、僻事思ひ出して……イヤ、おぬいさま、お前樣のお生れ立ちから、附きまして居る。三太兵衛。いつぞやの騷動に駈けつけたれば、御主人は才原が爲に討死。その場に殘りし肩衣の、引裂けしを出し、その血汐に染みし御定紋の肩衣を、お筐に取り歸り、せめては御出立の節、仰せ置かれし入用金、たんだか知らぬが十三さまや、高尾さまへ貢げとあるお詞。その御心持ちを立てん爲、經巡り歩くこの體。お前も冥途のお旦那へ、お孝行と思し召さばこそ、此やうな賤しい境界、勸めも致せば合點もなさるゝ。併し、今の人の世話

で、抱へてくれ手があればよけれど、もし其方が間違へば、また脇の國へ賣りに行くが、お前樣はどこへでも行く、お心か。どうでござりまするえ。

ぬい　冥途の父樣のお爲になる事なら、どこの國へでも賣られて行く氣ぢやわいなう。

三太　お年もゆかぬに、お孝行な事、よう仰しやりまするなう。さうして、お父樣の事ばつかり仰しやるが、母樣の事は、なんとも思はつしやりませぬか。

ぬい　父樣のお果てなされたその場から、行くへの知れぬ母樣。殊に母樣の兄樣は惡人ぢやさかい。で、逢うたまま物云ふなと、國取りの父樣の云ひつけ。物云うたら、おれが子ぢやないと云はしやんしたゆゑ、母樣の事は、なんとも思やせぬけれど、この母樣は、なんとさしやんした事ぢややら。

ト三太兵衞、隱してちよつと泣く。

三太　オヽ、出かしやつた。さうぢや〳〵。さうなけりや侍ひの娘ぢやない。とは云ふものの、その心根が。

ト三太兵衞こなしあり

亭主　奴どの〳〵、座敷から呼んでおやわいなう。

ト三太兵衞、塵紙を出し、鼻をかみ

三太　オヽ、まゝよ。百千萬だら云つたとて、なんの役に立たぬ事。おぬいさま、サア、お出でなされませ。

ト唄になる。三太兵衞、おぬいを連れて入る、と、おせり、おみちや、おくり、おくぼ、惣嫁の形にて出る後よりおきぬ、同じ惣嫁の形、傘提げて花道より來る。いづれも本舞臺へ直る體。亭主、奥より出て

亭主　オヽ、こりやア皆の衆、今夜は早かつたの。

おみ　アイ、どうやら空も曇つた。早うしまつて去なうと思うてぢやわいなア。お前は立場の勘定取らうと思うて早う掃除にかゝらんしたなア。

亭主　そりやア知れた事。早う立たしてしまはすが用心がよい。

せり　なんぼう早う去にたうても、どうやら今夜は、お客のなささうな夜さりぢやわいなア。

くり　あのやうに、この水茶屋の亭主樣さへ、立場の割合を取り外さぬやうに、こちらが比翼の床まで取つて、妓夫や廻しの役目を勤めさしやんすと錢儲け。こちらもお客のなささうな今夜方は、立場を替へようと思うて居る、あの土手の下の榎の木の下へ行て立たうわいなう。

くぼ　コレ〳〵、榎の木の下は、わしが立場ぢや。今夜は

文さんが見える筈ぢや。キッとせりふせにやならぬわいなう。

せり　ア、其方はよい楽しみがある。おみちやや、おくりも、思惑があるさうな。こちらはとんと楽しみがなうて持てぬわいなう。

おみ　イヤ、モウ、辛い勤めのその中に、楽しみがなうては勤まらぬ。おせりも色を拵らへや〳〵。

きぬ　ア、コレ、こなさん方も、楽しみの。色のと、嗜なまんせ。斯らいふ淺ましい勤めのうちに、なんの楽しみがいる事ぢやぞいなア。其やうな事に氣を移して居やしやんすに依つて、通りの客樣方を捉へ損なうて、淋しい〳〵と云はしやんすわいなア。善太さん。

亭主　それ〳〵、こなさんの云はしやる通りぢや。併し、おれが立前取つて見て居れば、おいらが申し〳〵と捉へると、ちよつと足に留めるけれど、顔を見ると、振り切つて去ぬる客ばつかりぢや。こなさんはどこから働らきに出やんすか知らぬが、こんな勤めをさすは惜しいものぢや。こなさんがこの藤の下へ出てから、外の子供は上がつたりぢや。明日からどこぞ外へ行てもらふぞや。

きぬ　アイ〳〵、明日から外へ參りませう。今夜は爰に置かしやつて下さりませえ。

亭主　オヽ、今夜は爰に居たがよい。サア、みな立場へ行きや〳〵。

四人　アイ〳〵。

亭主　コリヤ、後で錢取りに廻るぞよ。

ト唄になる。いづれも別れ入る。おきぬ、殘り居る。亭主も木蔭へ入る。所へ、法華坊主の仕出し、お經讀み〳〵出る。おきぬ、向うへ立つ。坊主おきぬを見ながら橋がゝりへ行く。

きぬ　お前樣、大事なくばお遊びなされませ。

坊主　大事ない。遊ばしておくれえ。

トおきぬ、手を取り、小屋の内へ入る。橋がゝりよりおくり、おくぼ出る。

くぼ　コレ〳〵、おくり、たつた一つ、その小豆餅たべいなう。

くり　ア、措いてたも。身の油で買うた物。たゞ遣つて堪るものかい。

くぼ　イヤ、只は貰はぬ。錢は明日やる程に、二つ賣つてたも。癪が起つて小豆餅が食べたい、食はぬと癪で勤め惱いわいなう。

くり　オヽ、勤め憎けりや、勤めずと置きや。たつた十の
餅、二つ遣ると、おれがひだるいわいなう。
　ト云ひ〳〵、小豆餅食ふ。茶店より、善七出かけ居る
くぼ　イヽヤ、貰ひかゝつた小豆餅、貰はいでは意氣地が
立たぬ。サア、おこしや〳〵。
くり　イヽヤ、遣らぬ。
くぼ　おこしやらぬか。
　ト兩人せり合ふ。
善七　ヤア、ザワ〳〵と騒がしい。
兩人　ヤア、お前は。
善七　ヤア、おくりとやら、友朋輩の附合ひぢや。その小
豆餅を二つ買つてやりや。二文はわれらが取替へてやら
うわい。
くり　ヤア、お前はしぶさん、お前は兎角あのおくぼの肩
持ちぢや。エヽ、好かんぞえ。アタ嫌らしい。
くぼ　コレ、おくり、其方は味な事を云やる。わしが馴染
みのお方ぢやに依つて、肩持たさんすりや、どういふ事
で好かんぞ。
くり　云はいでぢや。あのさんには、日柄の事までを頼み
置いた。お客様まで、わが身の肩持たしやんすが、好か
んといふことぢやわいなう。
　ト善七を、おくぼ引き摺り
くぼ　コレ、ござんせ。こなさんは、あのおくりと譯があ
るかえ。それではわしへ、お前、立つまいがな。
善七　コレ〳〵、心意氣の附合ひに、そんな事は云はぬも
んぢや。殊におれは儲け事の返事の遅さに、聞きに行く
のぢや。隙が入つては金儲けの妨げになる。サア、放せ
放せ。
くり　イヤ〳〵、コレ、ござんせ。おくぼの今の詞の端で
は、こなさん、おくぼに逢うてかえ。
善七　サア、逢うたでもなし、逢はぬでもなし、そこらは
一向無茶々々ぢやわいやい。
くぼ　イヤ〳〵、こちや無茶々々では、濟まぬ〳〵。
善七　エヽ、外聞の悪い。
　ト引摺る。退け、逃げる。
コレ、待たんせ〳〵。
　ト追はへ入る。と小屋の内より坊主、泣き〳〵出る。
　おきぬ、しをれ出る。
坊主　アヽ、さても〳〵哀れな話しを聞きました。おれが
娘の事を思ひ出して、いとしや〳〵。葬禮に行て、お花

施に貰うた金が、大方三文程ある。これをどうぞ貰うて下され。また貰うたら持參して進ぜうぞや。

ト泣き〳〵包み金を、おきぬに遣る。おきぬ、取り戴き

きぬ　お志し、エヽ、忝ならござりまする。

坊主　なんの禮には及びませぬ。隨分煩らはぬやうにさつしやれ。さても、いとしや〳〵。

ト お經讀み〳〵花道へ入る。おきぬ、財布へ金を入れる所へ、橋がゝりより、烏帽子白丁の神道者、鈴を振り出る。おきぬ、右の向うへ立ち

きぬ　申し〳〵、お遊びなされませぬかえ。

ト神道者、思ひ入れして橋がゝりの方へ歩き歩き、いろいろこなしあり

神道　とうかみえみため、祓ひ給へ淸め給へ。ひめろきひあろきの餘を以て、あまつのつと……遊ぼかえ。

きぬ　お遊びなされて下さりませ。

神道　オヽ、嬉し。

ト連れ立ち、小屋の内に入る。と内より、善七を追はへ、後より、おくぼ、おくり出で、善七が胸倉を取る。

善七　アヽ、コリヤ、其やうにせり合うても、どちらにどうとも片附けられぬ。マア〳〵、氣を靜めて聞いてくれい。

くり　イヤ〳〵、聞かぬ〳〵。お前とわしがその仲は、大抵深い事かいな。それにおくぼに譯惡う見替へさんすは、マア、わしに愛想が盡きたかえ。エヽ、聞えぬ。腹が立つ〳〵。

くぼ　誠に勤めは相互ひ、おくりの今の恨みも道理。みんなお前の惡性からぢやぞえ。

善七　サア、その返事は思案がある。

兩人　思案とは〳〵。

善七　いづれ劣らぬ戀の道。この上は上十五日はおくり、われと色になる。下十五日はおくぼ、われを色にする。なんと、これで双方云ひ分はあるまいがな。

くぼ　おくりさん、お前はよいかえ。

くり　お前がよけりや、わしもよいわえ。

くぼ　コレ〳〵、二人の氣の濟む證據をお見せ。

善七　その證據見せう。

兩人　見せうとはえ。

ト善七、懷中より饅頭二つ出し

善七　コレ、見たか。爰に饅頭二つ。これを二人に

兩人　下さんすかえ。

善七　イヤサ、一つはおれが道の慰み。殘る一つを、コレ先づ此やうに割つて……半分はおくり、其方に遣る。また半分はおくぼ、其方に。なんと、これで員賞は見えやうがな。

兩人　すりや、この饅頭を。

善七　ソレ、割れたる饅頭の、しつくりと合ふやうに、緣と月日の時節を待て。

兩人　エヽ、忝ない。

善七　兩人とも、其うち逢はう。

ト唄になる。仔細らしう向うへ入る。おくぼ、おくり饅頭喰ひ〳〵橋がゝりへ走り入る。小屋の内より神道者、泣き〳〵出る。おきぬ後よりしなれ出る。

神道　アヽ、さても〳〵、こなたは誠のある女中ぢやなう。その志しが通じて、願ひも叶ひませう。コレ〳〵、僅かぢやけれど、爰に錢が二百ばかり。これをこなたに遣る程に、今夜は早うしまうて去なしやれ。

ト祓ひの箱の内より出して、おきぬに遣る。

きぬ　有り難うござりまする。

ト錢を戴く。

神道　アヽ、いとしや、進ぜる錢は少なけれど、こなたの願ひの叶ふやうに、中臣の祓ひしてやりませうぞや。アヽ、いとしや〳〵。

ト唄になる。神道者、泣き〳〵向うへ入る。おきぬ、そろ〳〵と花道の中程まで見送り行き、こなしあつて

きぬ　アヽ、人の身の上と、水の流れはさま〳〵。喜びあれば悲しみも、あるが中にもわしが身程、情ない事が世にあらうか。情ある人さんの、身分相應とは思ひながら、僅かなお錢を貰うて、有り難うござりますると、押戴くやうになつた。これが秋塚帶刀が女房の有樣か。エヽ。

ト泣き落す。此うち奥より、三太兵衛出かけ、こなしあつて、手拭を頬被りにして花道へ行きかける。おきぬ、件の錢を財布へ入れ、本舞臺へ戻り、よける事二三度あつて、本舞臺へ直る。三太兵衛、ツカ〳〵と戻り、又おきぬが向うへ立ち塞がる。おきぬ、臆病口へ行かうとする。

三太　コレ、惣嫁、おれが買はう。マア、待て。

きぬ　オヽ、憎てな事仰つしやる。お遊びなされて下さりませ。

三太　オヽ、客になつて遊ばうわい。

きぬ　ト頬かむり取る。おきぬ、驚ろき
ヤア、こなたは國で別れた三太兵衞。
ト逃げようとする。三太兵衞、引きとめ。

三太　コレ、惣嫁、客を捨てどこへ逃げるのぢや。客にな
らう。

きぬ　三太兵衞、面目ない對面をするなう。

三太　ヤア、何云ふのぢや。おりや惣嫁に近附きはない。
三太兵衞と云はれる覺えはない。
トおきぬ、ムツとして

きぬ　コリヤ、秋塚帶刀が女房淺香、家來の三太兵衞、わ
りやこの淺香を見忘れたか。

三太　ハヽヽ。旦那秋塚さまの奥様に、惣嫁があつてつ
まるものかいの。わりや惣嫁ぢやワ。但し惣嫁ぢやない
か。惣嫁ぢやに依つて、おらが抱いて寐る。コレコレ、
花代の廿文、繫いで持つて來た。サア、客になる。抱か
れて寐る。花代の錢廿文。受取り居らう。
トおきぬが側へ錢廿文打ちつける。おきぬ、錢取上げ

きぬ　エヽ、口惜しい。
ト身を顫はして泣き落す所へ、内より、おぬい走り出
て

ぬい　三太兵衞々々々々。どこに居やる。
トおきぬ、おぬいを見附け。

きぬ　ヤア、其方は娘のおぬいぢやないか。
ト側へ寄らうとする。

ぬい　アヽ、コレ〳〵、滅多に側へ寄つて下さんすな。わ
しやお前と近附きではない程に、物云うて下さんすなえ。

きぬ　ヤヽ、なんと云やる。この母樣を近附きでないとは
何ゆゑそんな事を云やるぞいなう。

ぬい　アイ、父樣の仰しやるには、お前と物云ふと、おれ
が子ではないと云はしやつたゆゑ、この世では母樣とは
申しません。堪忍して下さりませ。
ト泣く。おきぬ、思ひ入れして

きぬ　オヽ、大人しい事、よう云やつたなう。
ト泣く。

三太　コレ、こりや、なんのこつちや。コレ、このお子は
の、秋塚帶刀さまといふ武士の娘御ぢや。こなたのやう
な惣嫁の口から、娘出かしやつたかとは、穢らはしい。
この娘御が穢れる。なんにも云はしやるな。コレ、おぬ
いさま、惣嫁といふ者はこんな者ぢや。物仰しやるな。

ぬい　サア、さう思うて居るけれど。

三太　それでも、お前は、物云ふお心か。

ぬい　イヽヤ、父様のお詞を背いて、物云ふ氣はないわいの。

三太　オヽ、さうぢや。それでこそ、この三太兵衛が育てたお子程ある。出かしやりました。お前様のやうな賢いお子が、あんな畜生の腹から、ひよつくりひよんと、マア、どうして出た事ぞいなう。

ト泣く。此うち、源右衛門出かけ

源右　奴々。オヽ、爰にか。幸ひおれも用があつて、いま先へ行く程に、いよ／＼この娘を遣る氣なら、先へ遣る金が爰に五十兩持つて居る。いつそ先へ連れて行て、埒明けてしまはうかと思うて。

三太　これは段々のお世話、忝なうござりまする。なんと仰しやる。五十兩の金をお前様が、そこに持つてござりまするか。左樣ならば、直ぐにお供いたしませう。サアおぬいさま、お出でなされませ。

きぬ　コレ、申し、お待ちなされませ。只今承りますれば、このお子を五十兩で、奉公にやると仰しやるが、あの年のゆかぬ子に五十兩とは、何奉公にやるのでござりますえ。

源右　ハテ、知れた事、お山奉公に。

きぬ　イヤ／＼、ならぬ／＼。このお子を、そんな奉公にやる事はならぬ。こりや、わしが大事の一人娘。親のわしが得心もせぬものを。滅相な、コレ、娘、この母さんの側に居や。騙さりやんなや。爰にヂッとして居や。エヽ、ひよんな事ではあるぞ。

ト源右衛門、三太兵衛が側へツカ／＼と行き

源右　コリヤ、奴、滅相な。わりや今、この娘に親はないと云うたぢやないか。それに今聞けば、わしは母ぢやと云ふ。ムウ、こりやアおれを、おのれがやり事にかけるのぢやなア。

三太　イエ／＼、ありや母親ぢやござりませぬ。ありや、アノ……氣狂ひでござります。私しがあの氣狂ひと娘御の事を今、說破してお知らせ申しませう程に、五十兩の金を持つてござるこそ幸ひ、アレあの離れ座敷に、ちつとの間お待ちなされて下さりませ。

源右　待つてくれいなら、待ちもせう。彼これ隙入つて惡い。早うしまうておぢや。暫らく待つて居るぞや。

ト三太兵衛、いろ／＼こなし。おぬいを引分け

三太　何するのぢや。この奴は工面があつて、おぬいさま

も得心で、金才覺するのぢや。邪魔さつしやるな。サア
お出でなされませ。
トおぬいを連れ行かうとする。おきぬ、取りつき
きぬ　イヤ〳〵、この子はどつちへも遣る事はならぬ。な
らぬ。
三太　面倒な。邪魔さつしやると、こなたをカウ〳〵。
ト取つて投げる。また取りつくを、三太兵衞、背打ち
にて散々に叩き据ゑ、胸倉摑んで引据ゑる。おぬい心
遣ひあり、泣いて居る。
エヽ、こなたはなう。コレ、この奴はなう。都の樣子を
聞くと等しく、宙を飛んで行て見れば、旦那にはもう討
死となつた後の祭。こなたもその場で毒に中り、死なし
やつたとの噂。それにマア、麗々としたこの有樣。ハテ
合點のゆかぬ。フウ、それはマアそれにして、コレ、よ
う聞かしやれや。お旦那が國を出さつしやる時、おぬい
コレ、よう聞けよ、女房とても油斷のならぬ、才原が妹
淺香とても呑み込めぬゆゑ暇をやる。この後必らず母と
思ふな。親子ぢやないぞよ、物云うたら七生まで勘當ぢ
やと、仰しやつたを、子心にもよく覺えてござつて、今
のやうに愛想づかしを仰しやつても、心の内にはこなた
の事を苦にして、烏の啼かぬ日はあれど、この有樣は、
どこにどうしてござるぞと、朝も晩も泣いてばつかりご
ざるわいなう。それにこなたの態は、こりや、なんぢや
暇の狀を取つたを幸ひに、この態で徒らするのが面白い
か。こなたのやうな人は、おりや又主とも家來とも思は
ぬゆゑ、おらが又この土足かけて、カウ〳〵する。
ト散々に踏み、またおきぬを引据ゑ
とても徒らするなら、大名の妾、或ひは白拍子、まだし
も太夫、天神なりとなつて、なぜ世過ぎはさつしやりま
せぬ。僅か廿や卅の撮み錢で、帶紐解いて抱かれて寐る
が面白いか。中間、奴に白丁稚の、慰さみ物になるのが
樂しみか。爰などう犬め。どう畜生め。どう狐、どう猫
どうすつぽんどの。腹が立つて物が云はれぬわいなう。
エヽ、こなたはなう〳〵。とは云ふものゝ、淺ましい心
にならしやりましたなう。
トいろ〳〵あつて、泣き落す。おきぬ、ソロ〳〵起き上
がり、懷中より財布取出し、三太兵衞が前へ抛り出し
きぬ　三太兵衞、尤もぢやが、心を靜めて、それを見てた
も。
ト三太兵衞、こなしあつて財布を改め

三太　小判が廿兩ばかり。一歩に交り、丁銀錢も少々。コレ、こりやどうします。

きぬ　夫帶刀どのは、御息災で、この世にござるぞや。

三太　エ、。

　ト恟りして、思はず後へ飛び退ろこなし。

きぬ　まして鶴若さまを御機嫌よう、敵之助どのへお渡し申し、御養育の爲に無ければならぬ金の才覺。成る程、其方の云やる通り、わしがやうな不束な者でも、人さんにお頼み申したなら、廓へ行て傾城の勤めがなるまいものではなけれども、主を持つては一日でも、この身が我まゝに自由がならうかや。淺ましい勤めぢやけれど、斯ういふ身には、主がなければ義理もなし、爰に三日あそこに五日、所を定めず方々を、うろ／＼とうろたへ歩くは、連合ひ帶刀どのに尋ね逢ひたいと、思ふ願ひぢやわいなう。シタガ、氣遣ひしてたもんな。斯うした淺ましい勤めはすれど、つい／＼に一度も帶紐解いて、身を穢した事はないわいなう。

三太　エ、。

きぬ　サア、人さんといふ者は、正直な情のある者。武家方の家來衆のお客ぢやと見る時は、お主樣への忠義の話しを云ひ立て、義を立て通す詞。坊樣客には長々と、帶は解かずに此方から、談合を解いての六字。商人衆には算盤の、たまに逢ふ夜の水上げ帳、消して云はさぬ口拍子。屋根屋大工の客衆はに、心の底のきよかんな、かけて去なして、又明日の夜は、百姓衆は律義な者、そこへ附け込む年貢の話し、親の爲にこんな形でござんすと云へば、田もやろ、畦もやろと、鍬をぬかして去なしやんす。神道者には正直顔、目に諸々の不淨と僞はり、必らず心に諸々の、恨みを籠めて下さんすな、留めずに去なすその後へ、座頭の坊は見ぬ戀に、憬れ來たと琴唄の、十二調子は狂はねど、此方は狂ふ糸竹の、一夜を千代と明かしかね、遠寺の鐘と諸ともに、泣いて明かした事とては、幾夜さといふ事はなかつたわいなう。世にある人の千金、萬金より、僅かづゝお錢を貰ひ溜めて、やう／＼と、それ程拵らへ、今でも夫に廻り逢うたら、斯う／＼云ふ譯で、これ程拵らへましたと云うたら、なんぼ氣強い夫でも、オ、、出かしたと、褒めてもらはうと、そればかりを樂しみに、思うて居るに、其方は胴慾な。わしが斯ういふ勤めするは、丁稚中間小者の弄り者になつて徒ら惡性するのとは、酷い事をよう云やつたなう／＼。

久し振りで逢つた娘、お前は母樣ぢやござんせぬと云はれて、賢い事よう云やつたと、褒めるわしが心を、なぜ推量してたもらぬか。久し振りで逢うたぢやないかいなう。御息災でござつたかと、につこらしう物も云うて、その後で叱る事があるなら、なんぼなりと叱つたがよいこなたのやうな人は、近附きぢやないの、畜生ぢやのと踏んだり蹴たりして、此やうな事になつても、心まで變りはせぬ。わしがこれまでの心を知らぬかなんぞのやうに、あんまりと云へば胴慾な。酷いわいの〳〵。

ト泣き落す。三太兵衞、大きにあやまり、おきぬを介抱し、脊中を擦り、いろ〳〵有り金を財布へ入れ、鼻紙の上へ載せ、辭儀をして

三太　申し奧樣、お免されて下さりませ。御堪忍なされて下さりませ。下郎めが突き詰めた根性から、申しました事、併し私しが今のやうに申しましたので、お前樣の、その操正しいお心が、知れましたと申すものでござります。有り難うござりまする。また天道樣も聞えませぬ。奧樣をこの下郎が、この手でくらはした時、天道樣が正直ならば、なぜこの下郎めに罰を當てゝ、手ないぼうにはして下されぬ。この泥脛で踏んだ時、おらを腰拔けになぞして下されぬぞいなう。あやまりました。有り難うござりまする。只今のやうに申しましたは、なんにも存じませぬ阿房な心から申しました事。御堪忍なされて下さりませや。これまでの通り、お心持ちなうお使ひなされて下されませ。御料簡なされて下さりませ〳〵。

ト泣く。

きぬ　なんのいなう、わしを思やるから、そんなら疑ひは晴れたかや。

三太　晴れいでなんと致しませうぞいなう。

きぬ　主も

三太　家來も

きぬ　斯程まで

三太　變れば變る

兩人　有樣ぢやなう。

ト手を取り合ひ、大泣き。

ぬい　コレ、三太兵衞、もう母樣に物云うても大事ないかや。

三太　オヽ、だんない段ぢやないち。やつと行て、抱かれさつしやりませいなう。

トおぬい、おきぬに縋りつき

ぬい　母樣、先刻から物が云ひたかつた。堪忍して下さりませ〳〵。

トおきぬ、おぬいを膝に上げ

きぬ　オヽ、よう云うてたもつた〳〵。

三太　親子といふものは、深切なものぢやなア。

ト泣く。

きぬ　いま聞けば、この子を奉公にやると云やつたが、金はわしがどうなりとせう程に、どこへもやつてたもんなや。

三太　そりやお氣遣ひなされな、これまで四五度も奉公にやりまして、金を取ると連れて戾つて、埋んで置いては外へやり、こりや私しがかけろく仕事。難儀になる時はこの奴めが素ッ首を投げ出す分の事。なんにもお案じなさるゝ事はござりませぬ。今のお詞では、どうやら旦那樣は生きてござるやうなお話し。その樣子は。

トおきぬこなしあつて、三太兵衞に囁き

きぬ　爰は往來も繁い。わしが隱れ家は。

ト三太兵衞に囁き

きぬ　そして、マア、其方衆は、今はどこにどうして居やるぞいなう。

三太　イヤ、モウ、どこをどうと申したら、斯うした商賣をして、あのお子を賣つて取戾し〳〵するゆゑ、毎日毎日家主からは附け屆け。町からは月のうちには五六度程は追ひ立てる。夜拔けと駈落ちとにかゝつて居りまする。然らばおぬいさまを連れまして、お前樣が隱れ家で、何かの事は緩りとお話し致しませう。おぬいさまを、お前樣へお手渡し致しまする筈なれど、旦那の仰しやつた御一言もござりまするゆゑ、マア、お供して歸ります。追ッつけ御一緒に暮らせます時節もござりませう。冷えますに、お前も早うしまうて、お歸りなされませや。

トしなれる。

サア、おぬいさま、母樣にお暇乞ひなされませ。

ぬい　母樣、また逢ひませうぞや。

きぬ　隨分達者で、三太兵衞の云やる事を、アイ〳〵と云うて、煩らはぬやうにしや。久し振りで逢うて、今直ぐに別れるとは、よく〳〵薄い親子の緣ぢやなう。

三太　ハテサテ、やんがてこの三太兵衞が、思し召しの儘に致しまする。サア、ござりませ。

ぬい　母樣。

三太　奧樣。

きぬ　さらば。

ト胡弓入り唄になる。三太兵衛、おぬいを連れ行く。三太兵衛もしめ泣きに泣く。おぬいツカ〳〵と立戻り、おきぬに取りつき泣く。三太兵衛、ツカ〳〵と行き、引分けて連れ行く。おぬい、おきぬを見い〳〵、三太兵衛と連れ立ち行き、また振り切り、立戻り取りつき泣く。三太兵衛、いろ〳〵こなしあり引き放し、おぬいが顔に袖を當て、あちらを隠し、こちらを隠し入る。おきぬ殘り、思ひ入れして、亂れたる髪をからげ、着物の砂を拂ひ、いろ〳〵思ひ入れして居る所へ、源右衛門、少し酒に醉うたる氣色にて出かける。

源右　奴、奴はどこに居る。奴々、奴も目を明けと云ふ。

トおきぬを見附け

姐さん、お前はそこに何して居やんすえ。

きぬ　わたしかえ。わたしはちつと苦になる事があるゆゑそれを先刻から案じて居りまする。

源右　なんの案じる事がある。わしが云ふ事を聞いておくれるなら、なんにも案じる事はないてや。

きぬ　何を好い加減な。たつた今逢うたわたしを、どんな氣な者ぢややら、お前、知りもせいで、何を嘘ばつかり。

源右　イエ、嘘ぢやない。お前さへ、わしが云ふ事を聞いてさへ下さんすりや、起請でも誓紙でも何枚でも……書く事はならぬか、オヽ、それよ、お前に見せる物があるコレ、爰に金が百兩ある。女房にさへなつて下んすりやこの百兩の金、再び手に取らん法もあれ、でごんすわいなう。

きぬ　ホウ、こりや金かえ。

ト思ひ入れ。

源右　オウ、金ぢや。小判ぢや〳〵。

きぬ　お前は可愛らしいお方ぢやなア。お前さへ、ほんの事なら、相談の出來まいものでもないわいなア。

源右　そりやアほんまかえ。ほんまなら、こりや、どうもならぬわい。手附けにちよつと口々を。

トおきぬに抱きつき、いろ〳〵こなしあつて

きぬ　アヽ、コレイナア。

トこけながら、源右衛門を抓ると、源右衛門退き

源右　アヽ、痛い〳〵。抓るといふ事があるものか。なぜ噛んではおくれぬぞいなア。

きぬ　滅相な。お前と逢うたは今が始めて。それになんぢやら、女夫になるなら杯でもしてから。其やうに忙し

ない事は、わたしは嫌ひなア。

源右　ハア、お前は忙しない事は嫌ひかえ。忙しないのは大抵、マア、よいものぢやないに。そんならどうでも杯せにやならぬかえ。

ト最前の呑みし杯を見附け、源右衛門持ち出て

幸ひ、最前の呑んだ杯が爰にある。サア、爰で杯せう。杯したら嫌と云ふ事はならぬぞえ。

きぬ　杯する上は、ほんの女夫ぢやわいなア。

源右　忝ない。サア、呑んでおくれ。

トおきぬ呑み、源右衛門へ献す。向うより熊津甚五兵衛、若黨の形にて、弓張り提灯持ち出て、兩人に行き當りおきぬ、後に聞き入る。

エ、、滅相な。提灯持つて行き當るといふ事があるものか。滅相な。

甚五　オ、、御免なされ〳〵。氣の急くまゝ思はぬ粗忽。免しやれ〳〵。ちと物が尋ねたい。藤の下の掛け茶屋は、どこでござる。敎へて下され。

源右　藤の下の掛け茶屋といふは爰ぢや。

ト腹立て云ふ。

甚五　オ、、成る程、爰ぢや〳〵。然らば二九屋源右衛門といふ人が、爰へ見えてる筈ぢや。もし、貴樣知つて居るなら、敎へて下され。貴樣は知らぬか〳〵。

源右　ナニ、二九屋源右衛門、どうやら聞いたやうな名ぢや。

甚五　それは幸ひ。どうやら早く敎へて下され。

源右　聞いた筈ぢや。二九屋源右衛門は、わしぢや。

甚五　お身が二九屋源右衛門。なりや、數高屋善七といふ人は見えなんだか。

源右　ハア、すりや、お前は才原さまからのお使ひではござりませぬか。

甚五　成る程、才原どのからの使ひぢや。

源右　お前樣が遲いに依つて、善七はお前へ參りました。

甚五　そんなら道で間違うたものであらう。ヤア、コレ〳〵旦那勘解由さまから御狀が參つた。早くお返事をなされい。

ト狀を渡す、源右衛門取り

源右　ハイ〳〵、これは〳〵、御苦勞樣でござります。然らば提灯お貸しなされ。あなたはそれでお煙草おあがり下されませい。

ト狀を披き見、一字も讀めぬこなし。おきぬ、覗き居る。

甚五兵衛が側へ、源右衛門行き

お手紙拝見仕りました。して、その様子は如何でござりまする。

甚五　拙者はお使ひの事ゆゑ、委細は知らぬが、その状に詳しく認めあると仰しやつた程に、とくと讀んで、早く返事をしやれ。早く歸りたい。

源右　すりや、委細は御状で知れますぢやな。ハ、、、、私しとした事が、口ばかり讀んで、奧の方を見ませなんだ。お使ひ御苦勞でござりまする。折惡うお茶さへ上げませぬ。

ト また元の所へ來て又狀を披き見ることなしあり。おきぬまた後より狀を見ることなし、いろ〳〵あり、源右衛門腰に差して居る袋入りの刀を見附け、嬉しがることなし、いろ〳〵あつて、源右衛門、また甚五兵衛が側へ行き

成る程、お手紙拜見仕りました。お使ひの樣子は、どうでござりまするな。

甚五　エ、、不埒な男ぢや。身はお使ひの事ぢやに依つて、譯は知らぬ。お身、その狀が讀んで見たぢやないか。

源右　ハ、、、、有やうは恥を云はねば理が聞えませぬ。何を隱しませうぞ。お恥かしい事ぢやが、私しはアノ、

有筆でござりますてや。

甚五　有筆ならば、その狀は讀める筈ぢやが、ハ、、、、こりや、お身は無筆ぢやの。無筆ぢやか〳〵。

源右　サア、その無筆なら、ようござるけれど、私しは矢ッ張り有筆でござりますてや。

甚五　ホウ、それは不自由な事。然らば苦しうなくば、その狀おれが讀んでやらう程に、直ぐに返事なされい。それでは拙者も、早く歸れるといふものぢや。

源右　ハア、それは御苦勞でござりまする。左やうならばお讀みなされて下さりませ。

ト 件の狀を、甚五兵衛へ渡し、甚五兵衛披き見る。おきぬ、此うち心遣ひ、いろ〳〵あり

甚五　ドレ〳〵、提灯これへ。ホウ、なんぢや。未だ御意得ず候へども、わざ〳〵飛札を以て申し入れ候ふ、然らば數高屋善七物語りにて承り候へば、牛王善光の刀、貴殿所持……

ト 讀むうちおきぬ、源右衛門が腰の脇差を拔き、甚五兵衛の首を切る。源右衛門、恟りし、飛び退く。おきぬ顫へ居る。

源右　ハア、人殺しぢや〳〵。

ト顏へ居る。

きぬ　アヽ、コレ〳〵、聲が高い〳〵。

源右　それでも、人殺しぢや〳〵。

きぬ　アヽ、コレ〳〵、使ひを切つたは、お前の爲ぢやわいな。

源右　とんと合點がゆかぬ。あの使ひに狀を讀んでもらうて居たら、後からポン。なんの事ぢや。

きぬ　エヽ、惡い合點ぢや。コレ、この脇差は、お前の脇差。その脇差に血が附いてあるゆゑ、お前が切らしやんしたと云はうぞえ。オウ〳〵、マア、その狀になんと書いてある。讀んで見なされいなア。

源右　サア、その狀が讀めぬゆゑ、讀んでもらうて居たら後からポン。なんの事ぢや。

きぬ　そんなら、あの狀をわたしが讀む程に、よう聞きなされえ。

源右　むづかしながら、讀んで聞かせて下され。

ト狀を、おきぬ讀む。

きぬ　よう聞きなされや、「未だ御意得ず候へども、わざわざ飛札を以て申し入れ候ふ。拙者數高屋善七物語りにて……數高屋善七と申す者は強い嘘つきにて御座候ふ、善七が云ふ事をほんまになされ候はゞ、當が違ひ申すべく、さて又急な事御座候ふて、其許の命の入る事が出來申し候ふ、近頃割なき御無心に御座候へども、其許の命を少々おくれなさるべく、その代りとして金子百兩持たせ遣はし候ふまゝ、その金が屆いたら、早々命を下さるべく候ふ、委細は夕方、ちと〳〵遊びにお出で下さる可く候ふ」とある狀ぢやわいな。

源右　そんなら、その狀に、おれが命をくれと書いてあるか。

きぬ　命くれいの段か。ヤヽ、コレ〳〵、返す〳〵も早う命をおくれなさるべく候ふ。めでたくかしくと書いてあるわいな。お前は先へ行かしやんしたら、命がない。それでわたしが使ひを切つた。大事に思うて居るお前に別れて、明日から誰れを便りにせうぞいな。

ト空泣きする。源右衛門泣き出し

源右　エヽ、忝ない。さても其方は心中な人ぢやなう。嚊大明神、手を合す。これぢや〳〵。待ちや、其の狀に、この使ひに百兩持たせてやると書いてあるぢやないか。

きぬ　アイ、さう書いてあるわいなア。

源右　そんならあの使ひが、その金持つて居るかいなう。

おりや、見てから程に、其方もそれから見て居てたも。
それから見て居や。
　ト源右衛門、甚五兵衛が懐中へ手を入れ、金取り出し
オヽ、あつたぞ〳〵。これ見や〳〵。
　トおきぬに見せる。
きぬ　最前貰つてやらうとお云やつた娘は、わたしがちつと遁がれん者ぢやけれど、ちつと急な事で賣るのぢやげな。先刻には五十兩とお云やんしたけれど、この金で、どうぞ百兩で世話してやつておくれ。わたしや先刻の奴どのを呼んで來う。アノお前には、まだ何やかや、たんと云はにやならぬ事がある程に、ナア、どつこへも行かずと、そこに待つて居ておくれえ。ドリヤ、奴どのを呼んで來うえ。
　トおきぬ行かうとするを、源右衛門留め
源右　アヽ、コレ、其やうにあちらこちらする事ぢやない。この金、大儀ながら持つて行てやりや。
きぬ　イエ〳〵、わたしやそんな自墮落な事は嫌。奴どのを呼んで來う程に、證文でも書かして。
源右　エヽ、コレ〳〵、さりとは大事ない。其やうになぜ分け隔てをしやるぞいの。おれが女房にすると、こんな使ひは皆、わが身にさす。わが身の爲に遁がれんと子たら、おれが爲にも遁がれん子。大事ない。持つて行て、早う遣つてたもいなう。
　ト金を、おきぬに遣る。おきぬ取り
きぬ　其やうに云はしやんすに、そんなら持つて行てやつて來う程に、お前はその死骸を、人の見ぬうちに、早う片附けて、そこに待つて居ておくれえ。わたしやお前にまだたんと云はにやならぬ事がある程に、どつこへも行かずと、待つて居ておくれえ。金といふ物は重たい物ぢやなア。
源右　オヽ、おりや爰に待つて居る。早う行ておぢや〳〵。
きぬ　アイ〳〵。
　ト臆病口の方へ入る。源右衛門見送り
源右　氣を急いて怪我しやんなや。
　トこゝらをウロ〳〵見て、死骸を見附け、足にて奥へ入れる。
ヤレ、結構な鳩を持つた氣ぢや。
　ト此うち、善七橋がゝりより出かけ
善七　もう才原さまから、返事が來る筈ぢやが。
　ト源右衛門に行き當り

ヤア、源右衛門ぢやないか。
ト源右衛門と顔見合せ
源右　わりや善七ぢやないか。おのれに逢ひたかつたわい
妾へうせ居らう。
ト善七が胸倉を取り、引据ゑる。
善七　ア、コレ〳〵、粗相しやんな。おりやなんにも覺えはないぞ。
源右　覺えない。おのれは刀を才原さまへ三百兩に賣つてやらうと云うて、おれが命を百兩に、よう賣つてやつたなア。サア、そこへ直れ。打ち殺してしまふ。
善七　エヽ、何をキヨト〳〵と、そんな事おりや覺えない。
源右　覺えない。コリヤ、その狀を讀んで見い。
ト狀を拋り出す。善七、狀を取り
善七　これ見りや知れるか。なんぞや「未だ御意得ず候へども、わざ〳〵飛札を以て申し入れ候ふ。然らば數高屋善七物語りにて承り候へば、牛王善光の刀、貴殿御所持なされし由、我れら三百兩に調へ申すべく、手附け金百兩持たせ遣はし候ふ、殘り二百兩は、此方屋敷にてお渡し申すべく候ふ、二九屋源右衛門、數高屋善七どの、才原勘解由」これ見や。首のくの字も書いてないぞや。
無筆も餘ツぽどよいわいの。
源右　すりや、おれが首の事は書いてないかや。こりや、又やられたわい。もう料簡ならぬわい。
ト行かうとする。此うち、おくぼ、おくり、おみち、おせり、出かけ居て
四人　待ちや。
源右　ヤア、惣嫁めら。うぬらは。
四人　オヽ、樣子は殘らず皆聞いた。
くぼ　牛王善光の刀褒美にする。此方へおこしや。
源右　わいらが貰うて、なんの役に立たん物ぢや。
くり　おいらが仲間へ貰うて金にする。おこしや〳〵。
源右　さう吐かしや、もう料簡ならぬ。
ト脇差を拔き、追ひ拂はうとする。とおきぬ、後より出る。四人立ちかゝり、いろ〳〵タテあり。源右衛門、刀を取り向うへ入る。おきぬ追はへ向うへ行く。いづれも追はへ行く所へ、源右衛門、脇差を持ち走り戻る。奧より、三太兵衛走り出て、源右衛門に行き當り
三太　コレ〳〵、惣嫁が人を切つたとは、どんな惣嫁で、その惣嫁は、どつちへ行きました。
源右　美しい惣嫁で、あつちへ行つた。

ト脇差を前へ返し、顔へ〱云ふ。

三太　ハテ、心元ない。

ト向うへ走り入る。源右衛門、向うへ逃げようとする。うろたへ、いろ〱あつて、最前の傘を見附け、件の脇差を傘に突ッ込み、藤の棚へ抛り上げ、臆病口へ走り入る。おきぬ、向うより走り出て、本舞臺へ倒れ、起きて思ひ入れ。

きぬ　エヽ、思ひがけない手に入つた牛王善光の刀、また奪ひ返されたか。ハテ、殘り多い事をしたわいなう。

ト泣き落す。と大雨、雷、橋がゝりの方にて、本の釣り鐘鳴る。此うち、始終めりやす入り。兩方の窓閉める。暗闇になる。物凄き氣色。おきぬ、行かうとする。雨風にけしこみ、顔へ居る。藤の棚の下、右手の内より、樟腦の火燃える。おきぬ見附け、恟りして、花道の方へヂリ〱と行く。見得にてとまる。

ハテ、心得ぬ。惣じて人の臟血に穢れし物、年經て風雨に浸せば、燃ゆると兼ねて聞き及びしが、まして爰は古へ佐々木の三郎高綱さま、手塚の殘黨を討ち給ひし古戰場。今また藤の棚より、陰火れつ〱と燃えさがり、下なる火止むる氣色。上の火は招魂の氣、下の火はしようしやくの火。陽火に恐れ、下の火の、さもさう〱と飛び散る風情。誠や名作の威徳には、如何なる妖龍鬼神ないとも、そのあたりに近付く事能はずと、聞き傳へしがもし、名作の威徳ではあるまいか。ハテ、稀代の不思議を見る物ぢやなア。ソレ、最前刀を盜みは盜みながら、隱し所がなさに、あの藤の棚の上へ隱し置いたといふやうな事ではあるまいか。オヽ、それよ。なんにもせよ、あの藤の棚、さうぢや。

ト身拵らへして藤棚へかゝり、あちこちして、後の方、藤の幹より棚へ這ひ上がり、棚の上を方々尋ね廻り、藤の花散る仕掛け。橋がゝりの方、仕掛けにて藤棚下がり落ち、梯子の體になる。おきぬこけ落ちて、また身繕ろひ、いろ〱あつて、件の梯子を登りかゝり、辷り落ちたり、いろ〱見得ありて、難なく登り、傘を見附け、取上げる。脇差を見附け。

ヤア、こりや、善光の刀。有り難い。大願成就、忝ない〱。

ト橋がゝりより、おぬい、走り出て

ぬい　三太兵衛〱〱。どこに居やるぞいなう〱。

ト源右衛門、臆病口より出かけ、おぬいを見附け

源右　ヤア、おのれは最前の娘。うぬには詮議がある。サア、うせう。
ト引立て行かうとする。藤の棚の上より、おきぬ、傘さし、抜き身を持ち、見得よく
きぬ　ヤア、待つた〳〵。その娘に聊爾すると免さぬぞ。
源右　待てとは。
ト見得よくとまる。
きぬ　待つた〳〵。
トその形にて、藤棚より飛び下り、おぬいを奪ひ取る。源右衛門、おのれとかゝるを、おきぬ、一刀に切る。また源右衛門起き上がり、かゝると、又一刀切る。源右衛門、見得よく倒れる。
ぬい　ハア、。
ト泣く。
きぬ　構はずと、ちやつと行きや。
トおぬいを逃れ、花道へ見得よく走り入る。

幕

五段目　豆腐屋の場

役名　片桐彌十郎。名古屋十三郎。傾城、高尾。醫者、山井養仙。惡者、雲七實ハ雷雲右衛門。同、笘藏。同、玉六。同、八八。孫、捨松。娘、おぬい。浮世渡平實ハ秋塚帶刀。おきぬ實ハ帶刀妻淺香。豆腐屋權兵衛。

造り物、平舞臺、向う赤壁、納戸口、佛檀ある。臆病口、中二階、橋がゝりも中二階、門口よき所にあり、紺ごし浮世豆腐と云ふ看板かけてある。庭に豆腐の道具ある。しめやかなる唄にて、幕明く。
ト名古屋十三、藥を煎じて居る。橋がゝりより、豆腐屋權兵衛、渡平の子捨松の手を引いて出る。山井養仙、付き出る。
權兵　ア、ヤレ〳〵、よい所でお目にかゝりました。
養仙　よい所で逢ひましたなう。
權兵　左樣でござりまする。
ト兩人、挨拶しい〳〵門口より

養仙　拙者案内いたさう。ものもう。山井養仙お見送り。

十三　ホウ、養仙どの、權兵衛どの、捨松、戻らさしやつたか。

ト三人、内へ入る。

權兵　アイ、いま戻ります道で、養仙さまにお目にかゝり同道して參りました。坊主、ひだるうはないか。

捨松　イヤ〳〵、まだひだるうはない。ちやつと父さんを呼んで下され。

權兵　それに如才はないわいやい。

養仙　親仁どの、渡平はまだ戻りませんか。

權兵　まだ歸りませぬ。馴染みのない當所へ引越して參りましても、兄めは刀連れ學問連れから、目立ちまするゆゑ、爰へ引越しまするについて、思ひがけないお前のお世話で、この借り屋敷を借家に直して借りてもらひ、家移りするやせずに、兄めはフト出て居ませぬゆゑ、近所の衆を頼み、方々尋ね居りまする。

養仙　爰の聟が家に居ぬので、家主からおれが方へ、せきせきの使ひぢや。その譯は、渡平には喧嘩の尻があると云うて、家主の所へ方々から斷わるげな。こなたとは七八年も疎遠になつては居れど、大きな事まで頼む仲ぢやに依つて

權兵　ア、イヤ〳〵、お前が所を替へさつしやりまして、七八年もお目にかゝりませなんだが、不思議にこの度お目にかゝつた昔語り。隙な時に又ゆるりと致しまするでござりませう。

十三　ア、養仙どのとは深い馴染みでござりますか。

養仙　馴染みの段かいの。家の事を世話して、息子どのゝ尻が來ると云うて、やかましうてならぬわいの。

權兵　兄めも、前は喧嘩が好きでござりましたが、學問好きになりまして、喧嘩はとんと止めましたが、いつからか健忘とやら云ふ病で、氣拔けのしたやうな物忘れを致しまする。宿替へて間もないに依つて、もし家内を忘れて戻り居らぬかと思へば、一倍心にかゝりまする。

十三　この間からお世話になつて居りまするが、渡平どのには、まだお目にかゝりませねど、あの子が父さんを尋ねるが、いぢらしうてなることつちやござりませぬ。

養仙　オヽ、さては子息は健忘病みぢやの。今でも戻つたら、耆婆扁鵲が匙を以て、本腹さして進ぜう。本腹で思ひ出した。病人はどうぢやの。

十三　アレ、爰のお醫者樣が匙をお捨てなされた病人で、

頼み少ない。

權兵　ハテ、お氣の弱いお人ぢや。藥さへ相應用ひたら、ツイ本腹でござりませう。サア〳〵、連れましてお出でなされませ。

養仙　昨日加減を致して置いた。マア〳〵、連れてお出でなされい。

ト十三郎、辛氣の體にて、一間より高尾をいたはり出る。

十三　サア〳〵、そろ〳〵歩みや。

ト高尾、病氣の體にて出て、よき所へ坐る。

高尾　お醫者樣、御苦勞に存じまする。權兵衞さん、段々のお心遣ひ、例へ死んでも忘れは置きませぬ。由ないわたしがあるゆゑに、十三さんの重なる御難儀。思ひ廻せば廻す程。

權兵　ア丶、埓もない。別してもない事を、きな〳〵思はしやりますゆゑ、氣で氣を煩らはすやうなものぢや。十三さま、情ない顏せずと、力を付けて介抱さしやりませ。

養仙　さうとも〳〵、病氣は看病が大切ぢや。側から力を落すまいぞ。先づお脈を伺はう。ドレ〳〵。

ト高尾の脈を見る。十三郎、介抱する。

ア丶、きつい衰へやうぢや。こりやモウ氣が疲れ切つて陽氣は微塵もない。イヤ〳〵、どうか加減の致しやうがござらう……南無三、藥箱を失念いたした。宿元で調合いたして、家來に持たしておこしませう。

高尾　同じ家筋に生れても、わたしは境涯が拙さに、まして輪廻が深いゆゑ、由ない人までにお世話をかけ、わしが亡いなら、お前もこれ程に御難儀はさせまいものを、越し方行く末を思へば、いつそ死にたうござんす。

十三　國を出てから、いろ〳〵の心遣ひ。疲れが出るも無理ではない。どこを當途ど云ふ事なく、さまよひ歩く道での病氣。夜に入れば身内は大熱、狂人も同然。此やうに惱ましては、衰へるも

ト云ふ。

權兵　ア丶、わつけもない。御病人の氣が揉める。奧へ連れ立つてござりませ。

高尾　思はぬ病氣に難儀の場所へ、思ひがけたうお前に逢うて、お世話をかける御介抱。死んでも忘れ置きませぬ。

權兵　ハテ、しつこい。そないに思うては病は重る。サアサア、十三さま。

十三　サア、奧へ來て休みや。

高尾　お二人様、後にお目にかゝりませう。
ト十三郎、いたはり奥へ入る。權兵衞、しか／＼あつて
權兵　養仙さま、物入りはいとひませぬ。どうぞ本腹がござりませうかな。
養仙　あの病は急症氣狂ひと云ふ。心臟の陽氣うせて、夜に入れば陰火高ぶり、大熱になつて氣狂ひ同然になる。藥方醫論の外にある難病の一つ。妙藥はあれど、滅多に金づくではゆかぬてや。
權兵　常體の藥では本腹はござりませんか。いとしなげにどうぞ好い藥もないかいな。
ト此うち、町人大勢、橋がゝりより、渡平を連れ、ヮヤワヤ云うて出て
町人　こなたの内ぢや。ござれ／＼。
渡平　いかいお世話でござりまする。
町人　サア、息子どのを連れて戻りましたぞや。
ト口々やかましう云うて入る。
權兵　オヽ、渡平か、よう戻つたな。皆様、御苦勞でござりまする。捨松よ、父が戻つた。ちやつと行け。
皆々　父様、戻らしやつたか。
渡平　親仁様、御苦勞をかけました。坊主よ、待つて居たであらうな。
權兵　待ち居つた段かいやい。わりやマア、なんで戻らなんだ。
渡平　お家主へ宿替への挨拶せうと、出たは覺えて居りましたが、それからウツトリとなつて、なんの用でどこへ行くやら、門がどこにあるやら、ツイ浮か／＼歩いて居りや、渡平かわりやどこへ行くぞ、マア此方へ來い／＼と友達が所で四五軒も泊つたやうには思ひますが、それもどこに泊つたやら、とんと覺えませぬ。
町人　イヤモウ、埒もない人ぢや。こなたの頼みで、やうやう見付け出し、家内さへ知らぬ人を、捉まへて戻りました。
同　どうでも氣拔けのしたやうな人ぢや。滅多にどこへも出さつしやるな。こちらはもう歸りまするぞや。
權兵　いかいお世話でござりました。マア、お茶でも。
町人　慥かに渡しましたぞや。サア／＼、皆ござれ／＼。
渡平　御苦勞でござりました。
ト　わや／＼云うて橋がゝりへ入る。
權兵　兄よ、わりやマアよい年をして、物忘れをすると云

ふ事があるものか。これからどつこへも出しやせぬぞ。内にチッとして居い。

渡平　我が身ながらも合點のゆかぬ、情ない物忘れ。引込んで居りまする。

養仙　それはあるぢや。健忘の病と申して、醫論にキッと出てござる。拙者が匙で療して進ぜう。

渡平　親仁樣、あなたはどなたでござりまする。

權兵　あなたは七八年以前まで、フトした所で馴染のお醫者樣ぢや。

養仙　拙者山井養仙と申して、權兵衞どのと馴染みでえす斯樣に輕う暮らしては居れど、金銀に事缺かぬでえす。

權兵　ずんと內福なお方ぢや。お近付きになつて置きや。

渡平　これは如何な事。御挨拶も申しませぬ。渡平と申すは私し。お見知り置かれ下さりませ。

養仙　以來別懇に頼みます。イヤ、頼みます次手に、肝心の事忘れて居た。權兵衞どの、貴殿が頼んだ嫁があつてしかも敷金は百兩、八つばかりの娘の子を連れて、追ッつけ嫁が來るぞや。

權兵　エ、、そんなら百兩持つて、娘連れて參りまするか。

養仙　オ、、交際ひ中へ話して置いたりや、豆腐屋權兵衞さんなら、どうぞ世話してくれいと云うて、今朝連れ立つて見えた。先の人が爰まで來る筈ぢや。

權兵　それはお世話でござりまする。シタガ、今日は大切の精進日。大勢の佛の當日ぢやが。

養仙　ハテ、そりやよいわいの。旨い物は宵に喰へ、善は急げぢや。マア、取込んでしまはしやれ。

權兵　それもさうかい。なんぞ精進肴を。

渡平　そりやわしが拵らへませう。最前から見ますれば藥鍋、どうやら病人のある體。病人の客でもござりますか。

權兵　オ、、わが身の留主の內に、十三どの夫婦。イヤ、こりや奧でゆるりと話す。和御寮も草臥れたであらう。坊主め連れて、トロ／＼とやりや。養仙さま、お前も奧で一つ上がりませぬか。

養仙　イヤ／＼、おりや一歸り去んで、嫁がわせたら連れ立つて來ませう。

權兵　そりや御苦勞樣でござりまする。

養仙　苦勞を致すも、敷金の步一が欲しさ。精進でなりと酒肴を拵らへて置かしやれや。

權兵　段々御苦勞にござります。渡平奧へおぢや。

養仙　二人ながら去んで來ませう。

渡平　御苦勞に存じまする。
ト唄になる。渡平、權兵衞、捨松を連れ、奧へ入る。
養仙、門へ出て行かうとする。此うち、雲七、橋がゝりより出て行きとまる。
雲七　コレ〳〵、養仙どのぢやないか。
養仙　さう云ふは雲七ぢやないか。
雲七　養仙どの、急用がある。ちよつと。
ト兩人、花道へ出て
養仙　急用とはなんぢや。
雲七　才原解御由どのより急のお使ひ。渡平が實否、秋塚帶刀が生死。
養仙　シイ〳〵。渡平めは、やう〳〵今戻つた。帶刀が渡平か、實否を糺す仕様は、コレ
ト囁く。
ナ、合點か。
雲七　呑み込んだ。
養仙　才原さまのお庇で、大分金を貰ひ、國を立退き、樂樂と暮らす養仙。これと云ふも毒藥を筆に。
雲七　コレ、大切な一大事。おれも廓で敵之助めに切りちやちやくられ、膏藥だらけの雷雲右衞門。相好の變つたを幸ひに、渡平が實否を糺し
養仙　眞實の金は摑み取り。確かに奧の病人は高尾、介抱するは十三郎。
雲七　そんなら二人が
ト行かうとする。
養仙　待つた。急いては事を仕損じ勝ち。大事の前の小事二人の奴等も。
ト囁く。
雲七　成る程、そんならこなたの家來。
養仙　萬事は今云うた通り。そこらに忍んで門の様子を。
雲七　合點ぢや。
養仙　ドリヤ、行て來う。
ト唄になる。雲七、こなしあつて、内へ忍び込む。養仙、入る。
權兵　今日は大勢の命日、三回忌の祥月。
ト佛檀を開き、伽羅の下駄を出し、向うへ直し、火打ち箱を出し、火を打ち、燈明を上げる。始終めりやす
戒名位牌は伽羅の下駄……有緣無緣法界萬靈頓生菩提。
トこれより、鉦撞木にて靜かになる。念佛になり、花道より、おきぬ、綿帽子、袋入りの刀を持ち、養仙、

手を引き出る。おぬい、後より付き出る。

きぬ　いかいお世話でござりまする。

養仙　いま迎ひに行く所でござつた。

　ト こんな事云ひ〳〵門口へ寄り

ハア、もう爰が聟どのゝ内ぢや。マア、わしが案内しませう。

きぬ　よろしうお頼み申しまする。おぬい、御挨拶申しや

ぬい　お世話様でござります。よろしうお頼み申しまするぞえ。

養仙　オヽ、悧巧な子ぢや。嫁御の器量と云ひ、娘御と云ひ、敷金まで、こりや鴨炊いた後で餅搗いて、玉子と砂糖をかけて食ふやうな事で、あんまり旨過ぎて、うま餅を食ふやうな事ぢや。

きぬ　何を仰しやりますやら。はしたない親子の者。斯うなりまするも不思議の縁。よろしくお頼み申し上げまする。

養仙　歩一を致さう爲、お世話申すも身が可愛さ。ドリヤ、案内仕らう……權兵衛どの、見えたぞや。嫁御と娘御と、敷金の約束のが見えたぞや。これはしたり、看經どころかいなう。

權兵　オヽ、養仙さま、もうわせたかな。

養仙　表に待つて居やしやるわいの。

權兵　そんなら聟を作らざなるまい。お前も手傳うて下さりませ。

養仙　疾から拵らへて居たがよいわいの。

　ト 佛檀の下より古き上下出して着る。養仙、手傳うてやる。

權兵　久し振りでの聟事。どうやら恥かしいやうなわい。

養仙　イヤ〳〵、天晴れの聟振り。マア〳〵、嫁御もお娘も此方へ入らしやれ。ドレ〳〵、仲人が手を取りませう

　ト 養仙、おきぬ、おぬいの手を取り内へ入る。おきぬ恥かしきこなし。權兵衛、いろ〳〵あつて

權兵　養仙さま、誰れぞ覗いたら惡い。爰は締めて置きませう。

養仙　それがよからう。

　ト 權兵衛、表を締める。皆々並みよく並ぶ。

さて、これから祝言の杯ぢや。銚子杯はあるか。

　ト 杯を拭き、銚子を振つて見て

南無三、銚子がない。誰れぞ銚子持つてござれや。イヤモウ、引合さう。これがおきぬどのと云うて、百兩と云

ふ敷金に、箔の付いた今夜の花嫁。あちらのが、ア、、なんとやらぢやなう。

ぬい　おぬいと申しまする。

養仙　オヽ、ぬい〳〵。即ち連れて見えたお娘。さて、こなたが浮世豆腐屋權兵衞どのと云ふ花聟。先づ引合せは斯くの通り。サア、聟どの、御挨拶なされ。

ト權兵衞、恥かしきこなしあつて

權兵　これは如何なる宿世の因緣で、思ひも依らぬ一蓮託生の因緣を結びまする。斯うなるからは、隨分御影の道も共に、極樂淨土へ參りませうぞや。

ト珠數繰り云ふ。おきぬ、始終術向いて居る。

きぬ　ほんにマア、不思議な緣で、娘まで連れまして、お世話になりまするでござりまする。斯うして參りまするには、譯もござりますれは、お心措きなう。不便がつて下さりませ。お賴み申しまする。

養仙　ハア、。下さり〳〵。

ぬい　申し母さん、お前はアノ爺樣と、祝言とやらをさしやんすえ。

きぬ　何を滅相な。そんな事云はぬものぢやぞ。

ぬい　イ、エイナア。父さんに逢ひたくば、わし次第にして居れと云はしやんしたが、お前はあの白髮の生えた親仁樣と、祝言をさしやんすかえ。

きぬ　何を云やるやら。好んで嫁入りしたは、アノ渡平さんの心底を

ト權兵衞を見て、恟りして

申し、お仲人さん、あなたは誰れでござんすえ。

養仙　ハテ、聟どのぢやわい。

きぬ　エ、滅相な。わたしが云うたは、立派な男盛りの聟さんぢやわいな。

養仙　でも、小間物屋が云ふには、豆腐屋へ嫁入りしたいと、云はしやると聞いて幸ひ、親仁が敷金のある女房を欲しがる。開いた口へ餅ぢやと思うて取持つたは、あの白髮の聟ぢやて。

きぬ　オ、笑止やの。わしが云ふは、豆腐屋の浮世渡平さん。あのやうな親仁樣に、百兩の敷金持つて來ては、わしや嫌いなア。

養仙　ぢやと云うて、どうせうぞいなう。

權兵　あんまり旨過ぎたと思うたてや。

きぬ　こりやマア、どうせうぞいなア。

權兵　こなたの云ふは、息子の渡平の事ぢや。捨松と云ふ

坊主を殘し、先の嫁が死んでから、女房と云うては持たず、外を内にする腕白。この頃は物忘れの健忘を煩らひ出し、二十日振りで、やつとたつた今戻りました。

きぬ　どうぞ渡平さまにお目にかゝつた上、お前樣と聟樣を、替へておくれなされんかえ。

ト權兵衞、ムツとして

權兵　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト珠數繰つて居る。

養仙　こりや何とも氣の毒なものぢや。高が親子の事ぢやどちらも不承し合うて、廻り喰ひすりや濟みさうなこつちや。マア〳〵、なんでも酒の上で挨拶にしよ。渡平どの、銚子持つてござれや。掛り人の若い人、肴持つて來ぬかいの。氣の付かぬ、どうぢやぞいの。

ト小やかましく云うて呼び立つ。とオイ〳〵と十三郎銚子を取り、渡平は取肴を持ち、兩人、奥より出る。

十渡　サア、持つて參りました。

ト挨拶しい〳〵、十三郎、渡平、おきぬと顏見合せ

十三　ヤア、お前は。

きぬ　お前は……ヤア、帶刀どの。

ト云はうとして、十三郎、恟りして銚子鍋を落す。渡平、恟りして取肴を落す。養仙、權兵衞、恟りして

養仙　勿體ない。何するのぢやぞいなう。

權兵　粗相な。どうするぞいやい。

ト權兵衞、肴を拾ひ、硯蓋へ入れる。養仙、溢れし酒を吸ふこなし。

十三　あんまり思ひがけなさに

きぬ　慥かにそれとは。

渡平　エヽ、なんぢややら、ツイに見た事もない衆。キョロキョロと、なんぢやぞいの。

十三　これはこれぢやが、淺香さまが

ト云はうとする。

きぬ　アヽコレ、淺……淺ましいわたしら、滅多にお近づきではない。ナ、お近づきでない程に、さう思うて下さんせえ。

渡平　ハテ、こなさんは敷金の嫁御ぢやよな。

トおぬい、渡平を見て

ぬい　ヤア、お前は父樣。

ト云はうとする。おきぬ、ちやつと口を押へ

きぬ　これはしたり、まだ祝言の杯も濟まず、どれが父樣ぢややら、まだ譯も知れぬ事を、ツカ〳〵と、なんの事

ぢや。女の子は差出ぬものぢやと、平生云ひ付けて置くのに、不行儀な、どうした事ぢや。滅多に物を云ふまいぞ。

ぬい　アイ、堪忍して下さんせ。餘り逢ひたい〳〵と、常住思うて居りまするゆゑ、粗相な事を申しました。堪忍して下さんせえ。

きぬ　オヽ、逢ひたい筈ぢや。わしとても逢ひたい……サア、逢ひたうても見たうても、そこが縁づく。儘にならぬが浮世ぢやわいなう。

十三　見れば見る程、とんと秋塚どのに

ト云はうとする。

渡平　エヽ、何やらキヨロ〳〵と、ツイに見た事もない人ぢやが、エ、聞えた、こりや親仁様が噂なされた、掛り人はこなたぢやの。どうやらウロ〳〵と、取締めのなささうな人ぢや。

十三　縦から見ても横から見ても、矢ッ張り……面妖な。

ト一間より高尾、十三さん〳〵と呼ぶ。

エヽ、又なんぞ用があるさうな。

權兵　氣に構や悪い。ちやつとござりませ。

十三　どのやうに見直しても矢ッ張り……面妖な。

ト入る。

養仙　なんのこつちやぞいの。親仁どの。こりやマアどうせうぞいやい。

權兵　どうと云うたら、縁のものぢや。どうなと積みまする。

養仙　よいやうにと云うたてヽ、おれが持ちもんぢやなし、こりや親仁の相談づくにして、女房の福引をしたらよからう。

渡平　何を仰しやりまするやら。この渡平は、女房と云うては持ちません。矢ッ張り親仁様に祝言さして下さりませ。

權兵　イヤモウ、嫁斟酌せずと、いつそ和御寮持ちや。

渡平　何をじやら〳〵と云はつしやります。お前、女房になされませ。

權兵　イヤモウ、和御寮のにしや。

渡平　ハテ、お前様のに。

權兵　イヤ、和御寮のに。

トせり合ふ。

養仙　こりや、どうぢやぞいなう。

ト三人しか〳〵あり。此うち、八八、苫蔵、玉六、各々

八八　顔に疵の付いたる惡者の形にて

もう爰ぢや。早う歩め〳〵。

ト橋がゝりより、ヲヤ〳〵云うて出る。

サア爰ぢや。なんぢや、戶を締めて居る。戶を開けて渡平に逢はせ。

苫藏　譯立てに來た。渡平に逢はせ。

三人　開けぬかい〳〵。

ト三人、やかましう云うて戶を叩く。

權兵　ヤア〳〵、こりや所の惡い奴等が、もう水浴せに來たさうな。養仙さま、どちらぢややら極まらぬけれど、嫁御に怪我がありや惡い。マア、奥へ連れて行て下さりませ。

養仙　ア、、おれも草臥れた。嫁御を相手に奥で內證酒をたべませう。サア嫁御、娘御、奥へござれ。

トおきぬ、氣の濟まぬこなし。

きぬ　戀しさは我が面影に月冴えて、有りとはされど合はぬ移り香。お二人樣、後程お目にかゝりませう。

ト唄になる。養仙、おきぬ、おぬい、入る。渡平、始終知らぬ體にて居る。此うち、三人、表の戶を開けい開けいとやかましう云ふ。

權兵　オイ〳〵、いま開けるわいの。

ト表の戶を開け

サア、開けたがなんぢや。こなた衆はどこの人ぢや。

八八　後の月宿替へて來た、浮世豆腐屋は爰ぢやな。

權兵　オ、、浮世豆腐屋の權兵衞はおれぢやが、嫁入りの水浴せなら、まだ肝心の聟が知れぬ。祝ひ延ばしてもらひませう。

八八　浮世豆腐屋と知つて來たのぢや。息子の渡平を出せ。

苫藏　浮世渡平に逢ひに來たのぢや。渡平を出せ〳〵。

渡平　渡平と云ふはおれぢや。やかましい。わいらは誰れぢや。

八八　渡平、誰れぢやとは、恍けるないやい。顔の知れたこちとら、こんな目に遭はして置いて、よう逃げ隱れするなア。

苫藏　折節は飲み喰ひもした仲ぢやぞよ。それに此まゝで濟むか。玉六、八八、苫藏ぢやぞよ。うぬ、恍けて濟むか。誰れぢやとはどうぢや。

ト渡平、三人を見知らぬこなし

玉六　誰れぢやとは白化けな。

苫藏　手たゝけ喰はすと、代官所で達引するぞ。

八八　誰れぢやとは、どう吐かすのぢや。

　ト口々にやかましう云ふ。渡平、こなしあつて

渡平　成る程、三人見知て居る。餘り思ひがけなさに、ツイ今のやうに云うたが、わいらはなんの用で來たのぢや。

八八　なんぢや、思ひがけがない。なんの用とは、どうぢやい。

苫藏　われが三人に相對をして置いて、なんの用とはどうぢやい。

八八　訝しげな顏して、コリヤ、空惚けするないやい。

玉六　本惡と出るのか。そんならいつそ役所へ來い。

苫藏　鏡にかけて達引せう。うせい。

渡平　ハテ、性急な。代官所へ行くにや及ばん。成る程、その用も知つて居る。サア、その譯は、どうも今では。

八八　ならぬと云ふのか。

苫藏　待つてくれと云ふのか。

渡平　オヽ、その待つてもらひたい。

八八　イヤ、ならぬわい。此やうに疵付けさらして、待つてくれいで濟まうと思ふか。濟まざ約束ぢや、取つて置け。

　ト金壹兩抛り出す。

苫藏　出來ざその時云うたやうに、取つて置け。

　ト一兩抛り出す。渡平、氣の付きたるこなし。

渡平　成る程、わいらと出入りをして、酒機嫌の上ツイ付けた、疵の扱ひ金の事。その足らずを取りに來たな。さうぢやらう。さうであらうけれど、もつと待つてくれ。

　ト三人顏そむける。

わいらも男ぢや。顏立てる同士ぢや。互ひづくぢや。待つてくれ。

權兵　情ない。こりや喧嘩の尻か。わりや學問に氣を移して、久しうこんな事はなかつたが、こりやどうぢやぞいやい。

八八　親仁、こなたは知つた事ぢやない、すツ込んで居や。渡平、養生代ぢやないぞよ。扱ひぢやないぞよ。

渡平　そりや、わいら、どう云ふのぢや。

八八　出來ざ、頭へ來い。

玉六　頭へ來て仲間入りせい。

渡平　そりや、なんの仲間へ。

八八　巾着切り盜人仲間へ。

權兵　こなた衆は、はつとした事云ひ出したが、和御寮達は

八八　オヽ、盗人、晝がんどう、宵睨み、家尻切り、押込みの仲間へ渡平を入れに來たのぢや。
權兵　ヤア／＼、そりやどうした譯で。
八八　渡平、悧けて居ては濟むまいぞよ。五月の朔前に、われが泊つて居るとも知らず、桔梗屋へ身請けの金を付け込んで仕掛けたれば、おのれが居り合せ居て、おいらをしなすかいな目に遭はしたぞよ。
玉六　その意趣を晴らさうと、仲間の者が一つになり、おのれを野中で追ッ取り廻し、きつばしたを忘れたか。
苫藏　おのれいつそ敲き殺さうか。但し仲間へでも入るかそれがならざアこの後、邪魔せまいと云ふ一札。
八八　その夜の働らき代に添へて、仲間の者へ渡せ。それがならざア仲間へ入れと、頭と達引したぞよ。
玉六　その時われが働らき代、五拾兩渡さう程に、仲間入りは堪えてくれと、キッと云うたぞよ。
　ト此うち、雲七、出かけ見て居る。
三人　サア、五拾兩の金受取らう。
渡平　サア、その五十兩の金は。
三人　サア、受取らうか。
渡平　サア、それは。
三人　仲間へ入るか。
渡平　サア。
三人　サア／＼／＼。どうぢや。
　ト雲七、ツカ／＼と出て
雲七　渡平、よう逃げ隱れするなア。おのれは／＼。
　ト振り廻す。權兵衞、渡平、悔りして
渡平　此奴、膏藥だらけの面で、コリヤ、何しさるのぢや。
　ト雲七を見事に投げる。直ぐに起き
雲七　コリヤ、投げたぞよ。うぬ、こんな目に遭はして、その上に投げてもよいか。おのれとは懷奕の相棒、雲七を忘れてよいか。マア、わりやおれを忘りやせまいな。
　ト渡平、こなしあつて
渡平　オヽ、雲七、覺えて居る。その雲七が何用ぢや。
雲七　なんの用とは、おのれに逢うて達引せうと、やうやう爰を聞き出して來た。逃げ隱れさすまい爲、最前から忍んで居た。サア、覺えがあらう。譯立てい。
　ト此うち、養仙、出かけ見て居て
養仙　雲七ぢやないか。茲な大盜人め。うぬは／＼。
雲七　ヤア、旦那樣でござりますか。
養仙　旦那樣かやい。おのれ、兩替屋へ持たしてやる、爲

替金五十兩、よう盗んで駈落ちをしたな。爰で見付けたは天命。茲な大盗人め。その金どうした。

ト散々にやり廻す。

雲七　マア、お待ちなされて下さりませ。その譯、今いたします。

養仙　云ひ譯あらば今しおろう。

權兵　なんぢややら、むづかしうなつたワ。

雲七　渡平、しかまの万助が胴の時、ちよつと見舞ひに寄つたりや、われが前が淋しかつた。おれが顔見て、のつてくれと云ふ。日頃組合ふこつちやに依つて、二三兩乘り合うたが因果の始まり。旦那の為替金五十兩、われに張込んでしまうたぞよ。夕方までに戻すと云うて、その場で別れて埒が明かぬゆゑ、われが内へ行て見れば、宿替へしてそこにや居ぬ。われと胴と一つになつて、おれをやり事にかけたな。旦那に逢うたが百年目、サア、いま爰で譯立てい。

養仙　雲七、もうよい。それで飢が知れた。退いて居い。退いて居い。

ト養仙、渡平が胸倉を取り

和御寮は〱、若い者を唆かして、やり事にかけるのか不實な事ぢやと思うて、白化けを喰はしても、この養仙がさゝぬわい。サア、いま戻すか。戻さにや代官所へ連れて行くと、コリヤ首が無いぞよ。雲七ばかりぢやないわれがこのてん〱もないぞよ。五十兩の金戻すか。サア、どうぢや。

八八　五拾兩の譯立てるか。但し仲間の割符を取つて置くか。

雲七　サア、五拾兩譯立てるか。

養仙　譯が立たざ、代官所ぢやぞ。

渡平　見す〱これは覺えのない。

皆々　白化けにはさすまいわい。

ト此うち、好き時より、片桐彌十郎、虚無僧の形にて花道より出て、竹を吹き、門口にて竹を止める。

權兵　エヽ、時も時、竹どころぢやない、通らしやれ。兄よ、どうせうと思ふ。

渡平　どうせうと云うたら五十兩の金。

養仙　金が出來ぬか。

渡平　サア、その金は。

皆々　返事せい。どうぢや。

ト渡平、俯向く。此うち、おきぬ、敷金を百兩。二つ

に分け持つて出て

きぬ　その金は、爰にござんす。

トおぬいが手を引き出る。

權兵　金があるとは。

きぬ　敷金の百兩。二つに分けた五十兩、役に立てゝ下さりませ。

權兵　敷金を望んだも奥の病人……時の用には花嫁の五十兩……サア、渡平、兩方へ渡せ。

渡平　この金は使はれませぬ。

權兵　そりや、なんで。

きぬ　わたしが芳志の百兩。なんで使はれませぬえ。

渡平　心が知れぬ。

きぬ　誰れが心が。

渡平　花嫁御の心が。

きぬ　エヽ。

渡平　忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず、その實否の知れぬ金、どうも役には立てられぬ。

きぬ　つい聞かしやんしたら、惡性とも思はんせうが、いろいろしたその金は、秋塚どの……飽きも飽かれもせぬ二世の契りが結びたさ。

渡平　そりや誰れに。

きぬ　お前様に。

渡平　婚姻は萬政の始め、昔は兎もあれ、今では男を磨くこの渡平、色に迷ひはしませぬぞや。そりやこの金はこなさんが、賤しい勤め身を粉にして、溜めさんした金でもあらうが、マア、それは格別、兄才原……サア、こなさんの兄親の心が知れん。ナ、肉身分けさんした兄親の心が知れんゆゑ、この金は一兩も、えゝ使はんのでごんすわいの。

きぬ　折角心を盡した金。

權兵　手詰めの難儀ぢや。マア、使やいの。

渡平　渡平が命を捨てましても、この金は使はれん。

養仙　使はれるあの金が、ならぬと云ふは、わりや白化けにだゝけるのぢや。

ト渡平を引きつけ

ヤイ、大騙りめ。息子を見るやうな者を捉へて、惡者に仕込むな。この養仙、長袖ぢやと思ひ、だゝけるのか。鬼養仙と呼ばるゝおれぢや。おのれらに蹴込まれて居やうかい。大泥坊め、大すりめ。

トむがう突き飛ばす。

八八　さうぢや。おいらの身分、高括りして、有り金使はぬは、おいらより上を行く大盗人め。

ト皆々散々に踏み擲る。奥より捨松出て

捨松　父さん、たんで踏まれさつしやる。おれが仕返ししてやらうかや。

ト渡平、捨松を抱き

渡平　渡平が血筋程あつて、悧巧な事よう云うたなア。コリヤ、父はあの衆に請合うた金、見す／＼覺えのある金……云ひ譯なさに踏まれたり敲かれたりするのぢや。仕返しする事はならぬ程に、われも堪えて、チッとして居いよ。

雲七　イヤ、堪えまい。われに金に貸したゆゑ、難儀したこの雲七。おのれ、腹癒せに、うぬ。

ト雲七、渡平を踏む。皆々立ちかゝり、散々に踏む。と彌十郎、竹を止め、養仙、雲七、八八、苫藏、玉六五人を引退け、尺八にて打つ。

彌十　うぬら一々動きやアがるな。

權兵　これは。

彌十　通れとあるゆゑ詭り通つた、梵論字が手の内。五十兩の二包み、親子の衆へ報謝いたさう。

ト五十兩包み二つ抛る。權兵衛、渡平、取上げ

兩人　この金は。

彌十　袈裟を掛ければ假の佛身。難儀を救ふは修行一體。

きぬ　それではわしがこの金は。

彌十　花嫁御の敷金、帶も解いてしつぽりと、夫婦になるべき時節があらう。マア／＼扣へてござれ。

ト渡平、權兵衛、おきぬ、三人顏見合せ

三人　ハテナア。

ト不審のこなし。五人、體の痛むこなしにて起き上がり

養仙　ヤイ、虚無僧め、なんで投げた。

雲七　さうぢや。おいらを投げさらしても大事ないか。

皆々　なんで投げたのぢや。

ト口々に云ふ。

彌十　家來參れ。

家來　ハア、。

ト家來バラ／＼出て來る。

彌十　この頃町家に無法の輩まゝ多しとの噂。代官所よりの隱し目付け。笠を取らぬは虚無僧の定め。見逃がしくれるはおのれらが仕合せ。取替へくれた二包み、持つて歸

ればよし。何か否めば笠取つて、一々理非の面縛せうか。
皆々　エヽ。
ト養仙、雲七、二包みの金を取り、行かうとするこなし。
彌十　何事も殘らず聞き屆けた。合點のゆかぬおのれら。拷問にかけ詮議せば、明白に知れう。所存あつて今は見遁がす。早く立つてうせう。
皆々　ハア、イ。
ト養仙、雲七、皆々袖引き合ひ、行かうとするこなし
彌十　ウロ〳〵すると、繩ぶつて代官所へ連れ歸らうか。
皆々　ハアヽイ。
ト皆々表へ駈け出て
養仙　歸ります〳〵。併し、妙な手から貰つたこの金。
彌十　繩ぶつて詮議せうか。
養仙　イヤ、繩ぶつに及びませぬ。お侍ひ樣、緣あらば重ねて。
ト外より表の戸をピッシャリ締める。唄になる。養仙、仔細らしく橋がゝりへ行くこなし。ちよつと橋がゝりへ入る。皆々こなしあつて
權兵　手詰めになつた詮議の場所へ

きぬ　思ひがけない虛無僧樣の二包み。
權兵　マア、お前樣は。
彌十　家來、渡平を圍へ。
家來　ハツ。
トばら〳〵入る。やらんと取卷く。
渡平　待つた。こりや何科あつて。
彌十　いつぞや都に於て佐々木の家中、大勢を手にかけしその科。家中の掟を取り行ふ、片桐彌十郎が繩ぶつて連れ歸る。サア、腕廻せ。
ト笠を取る。
きぬ　ヤア、お前樣は。
彌十　淺香どの、生死不定と承つたが、御健勝でござるぢやな。
きぬ　ハイ、御健勝やら御健勝でないぢややら、變り果てたるこの時節。
彌十　その儀は追つて承らう。渡平、早く腕廻せ。
渡平　すりや、廓にて大勢を、手にかけし科にてとな。
彌十　遺恨の相手は松島敵之助と聞いたれども、其方が手にかけしとの風聞。繩かゝる覺悟あらば、彌十郎が繩かける。但し、云ひ分あらば聞かう。

渡平　サア、その儀は。
彌十　なんとでござる。
ト此うち、十三郎、出かけ
十三　大勢を殺したは、名古屋十三でござりまする。
ト割の入りし封印を持つて、彌十郎が前へ出る。
彌十　名古屋十三、廓に於て冥途の秋塚帶刀どのに、封印解いてもらはれよと、渡し置いたる箱の封印。その返答はな。
十三　サア、その冥途の秋塚どの。
ト渡平を見て
サア、その封印もたゝ解きませず、殊に高尾は夜に入れば、氣狂ひ同然。賴み少たい難病。科に科を重ねしこの身、生きて居て甲斐ない。申し、彌十郎どの、大勢を殺せし科人、御成敗は如何やうとも賴み上げまする。
權兵　待たしやれませ。大勢を殺したる科人は、外にござりまする。
彌十　外にあると。
ト佛檀より伽羅の下駄を出し
權兵　有緣無緣法界萬靈。これ見知つてござりますか。
十三　こりや、伽羅の下駄。
權兵　いつぞや廓で味な意見がお氣に入つて、殿六角さまのお手づから下された下駄。コレ、この下駄に血が付いた遺恨から、事の起つた人殺し。お前方をお世話申すも秋塚さまのお家には、由緒のあるこの親仁、ちやに依つて渡平が難儀……サア、渡平に難儀はかけられぬ。わしとお山の買ひ論に依つて、御家中の角力取どもを切りました。アイ、慮外ながら、ちやく〳〵むちやくに切りましたこの親仁。科人ぢや、繩をサア打たしやれませ。
きぬ　どれをどうとも分けられぬ、人殺しの御詮議。彌十郎さま、御思案はござりませぬか。
ト彌十郎、十三郎引退け、箱を渡平おきぬの前へ直し
おぬいが側へやり
彌十　秋塚どの。
ト渡平、ギヨッとする。
イヤサ、秋塚どのは死去なされたと聞いた。その冥途の秋塚どのに、解かせねばならぬこの封印。渡平とやら、その淺香どのと相談して、冥途に居らるゝ秋塚どのに、封印を解かす思案をせい。
渡平　なんと。
彌十　その封印の解くるまで、人殺しの詮議待つてくれう。

權兵衞とやら、二人の子供は秋塚の娘、渡平が悴、詮議濟むまで其方に預ける血筋の繩。十三郎はとくと尋ねる詮議もある。家來どもは旅宿へ。十三郎、お立ちやれ。

ト十三郎を引立てる。

十三　すりや、私しに御詮議が。

渡き　この封印を。

權兵　この子供を。

彌十　確かに預けた。渡平とやら、返事待つて居るぞよ。

ト唄になり、皆々當惑の體。彌十郎、こなしあつて、十三郎を連れ入る。權兵衞、おぬい、捨松、兩人を連れ、心を殘して奧へ入る。渡平、おきぬ、殘り、家來は皆々橋がゝりへ入る。兩人、こなしあつて

渡平　この箱の封印を、冥土の秋塚さまに解いてもらふ思案をせい……ハテ、どうぢやな。

ト思案する。おきぬ、渡平が側へ寄り兼ねる思ひ入れいろ〳〵あつて、煙草盆を側へやり寄る。

きぬ　申し〳〵こちの人、よう無事で居て下さんしたなア。

ト渡平、思ひ入れして、右の箱を持ち、奧へ行かうとする。おきぬ止めて

こちの人、なぜ物云うて下さんせぬぞいの。

渡平　おれが名は浮世渡平。淺香どのとやら云ふ人に、こちの人と呼ばれる覺えはごんせぬ。

ト突き放し行かうとするを止めて

きぬ　コレ、待つて下さんせ。そりやお前、あんまり氣強うござんす。いつぞや兄様中屋敷で、久し振りでお目にかゝつた、秋塚さまの物腰恰好、よう似たと云はうか、その前のお前、誰れが見ても取違ふが、わしやなんぼうでも取違やせぬ。互ひに奧勤めのうち、恐ろしい御家中の目を忍び、云ひ交した大切の殿御。奧様のお情で、世間晴う夫婦となり、おぬいと云ふ子仲まで生したお前、見違へてよいものか。互ひに月日を送るうち、コレ淺香この頃殿のお身持ち放埒、後室是妙院さまを始め、伯父御兵庫どの、其方が兄勸解由まで、御意見せぬは何とも呑み込めぬ。この秋塚がお諫め申すを、曲事とあつて國詰めを仰せ付けらるゝ、某歸るまで鶴若さまに付き添ひ、例へ命を捨てゝも忠義を盡し、合點のゆかぬ事あらば、早速に知らせいと、段々のお頼み。身はしゝびしほになるというても、鶴若さまに凶事なきやう、大切にいたします、氣遣ひ遊ばすなと誓ひを立て申したれば、夫の忠義を立てる女房、わが身のやうな可愛い者はない。そ

の代り、例へ萬年隔てゝ居ても、わが身より外の女子の肌へは觸らぬ、さう思うて辛抱して、忠義を必らず忘れなと云はしやんしたぢやないか。それからが出世の思ひ、ほんに／＼いろ／＼の心遣ひ。その思ひやりもなう、よう浮世渡平どのを……サア、その時に下さんした、菖蒲の去り狀。お前も心があるぢやないか。なぜ斯う／＼した譯ぢやと、打明けて下さんせぬ。コレ、隱すも人に依ります。こちの人、面々ばかり合點して居ずと、わたしが心も濟むやうに、云うて聞かして下さんせ。あんまり胴慾ぢやわいの。

渡平　成る程、その恨みは尤もさうなが、おれが秋塚でないのが、マア、こなたの仕合せであらう。

ト此うち、權兵衞、出かけ聞いて居る。

きぬ　さう云はしやんす程、樣子聞かにやなりませぬ。

渡平　ムウ、そんなら尋ねる事がある。包まずと云ふ氣か

きぬ　これまでわたしが、何隱した事があるかえ。

渡平　そんならこなたの前生が聞きたい。

きぬ　エヽ。

ト渡平、懷中より西天草一本出し

渡平　この渡平が願ひがあつて、岩倉主膳さまに申し受けた西天草の小枝。この一本は、こなたの手にあらうがの

きぬ　エヽ。

渡平　唐土にては木天蓼、天竺にては西天草、俗に云へばまたしびの木。この草を服すれば、死したる者も蘇生する不思議の名草。今その形になつたおきぬどの、淺香と云ふ前生の話しが聞きたい。

きぬ　そんならわたしが、一旦死んで生き返つた樣子まで。

渡平　知つたはコレこの草の小枝。おきぬと生れ替らぬ先、淺香と云うた中屋敷の樣子、誰れが企みで斯う云ふ事と前生の物語りが聞きたい。

きぬ　サア、その樣子は。

渡平　罪一人に極まらば、親子眷屬、みな八ツ裂きの大罪。

きぬ　エヽ。

渡平　兄へ立つるか、夫へ立てるか。彼の世この世の緣の切れ目。おきぬどの、思案して返事を待つぞや。

ト唄になる。渡平、箱を持ち奧へ入る。おきぬ、ナツとしめ泣きに泣く。權兵衞、そろ／＼とおきぬが側へ行き

權兵　淺香さま、おきぬ女郎、樣子が何やらむづかしさうな事ぢや。シタガ、心を籠めて持つてござりました敷金、

おれが改めて仲人して夫婦にする。渡平と秋塚帯刀さまは、一腹一生の双子ぢや。

きぬ　サア、その事も中屋敷で。

權兵　聞いたり話したりする事もあり、マア、奥へござりませ。

ト唄になる。おきぬ、氣の濟まぬこなしにて、權兵衞と奥へ入る。渡平、伽羅の下駄を持つて奥より出て、こなしあつて、下駄を前に直し

渡平　月は替れど今日は命日。せめて手向けは伽羅の下駄俗姓浮世渡平、頓生菩提南無阿彌陀佛……同腹同生の双子なれども、この身に劍戟は立たぬ不死身。渡平は其まゝの肉身なれども、祟るとある詞を恐れ、一つには秋塚の家の恥と、藁の上よりこの浮世豆腐屋へ、乳人を頼み遣はしたとある、母人の物語り。父の筐と懷かしく、人知れず名乘り合せしが、天晴れ親人の御胤とて、文武に嗜なむ器量者。この度の一大事、頼むに引かず、某に成り代り、屋敷にて死せしとある。正しく才原が企みと知れども、それと云ふべき證據もなく、無念の月日を送る口惜しさ。

ト此うち、おきぬ、袋入りの刀を持ち、おぬいを連れ後に聞いて居て、おぬいに囁き、刀を渡し、好き時分に入る。此うち

後日の證據になるべき物と、淺香が渡せしこの書狀。何を云うても千裂れ／＼。これと云ふ證據なければ無駄死に、肉身を嚙む秋塚が、無念を推量してくれい。

トいろ／＼こなしあつてしめ泣きに泣く。

ぬい　申し父樣、なんで泣かしやんすえ。

ト渡平、恟りして下駄を隱し

渡平　オヽ、この子は滅相な。わしはこなさんの父ぢやないぞや。

ぬい　イヽエ、わたしが父樣ぢや。この脇差を上げます程に、母樣と元の夫になつて、父樣と云はれて下さりませ。

渡平　なんぢや。この一腰は。

ト右の刀を出し、いろ／＼あらため

こりや大殿の御祕藏ありし、牛王善光の脇差。

ト障子屋體より彌十郎出て

彌十　その一腰の功に依つて、娘と云うて遣はされい。

渡平　ムヽ、なんと仰しやる。

彌十　大殿歌枕の節、帶せられたその一腰。生死の知れぬ

大殿の詮議には、好い手がゝり。秋塚帶刀どの。
渡平 イヽヤ、帶刀ではござりませぬぞ。
彌十 帶刀どのでなくば、斯う。
ト切りかける。立廻りのうち、彌十郎、手裏劍打つ。
渡平、中にて握る。
渡平 コリヤ、何なさるゝ。
彌十 不死身の正銘見屆けた。無念の堪え、小事を捨て、ぶち打擲の恥を忍び、忠義一圖に思し召す、天晴れ大慮の秋塚どの、驚ろき入りましてござる。
ト敬ふ。
渡平 すりや、秋塚と見極められたか。
彌十 代々の御家老職、下賤の心勞、感じ入りましてござる。
渡平 忠義金鐵の彌十郎、連判しやれ。
ト一卷出す。
彌十 忠義の諸士を集むる連判。
トこなしあつて懷中より一卷を出し
拙者も忠士を集むる連判。互ひに血判取交しませう。
渡平 差當つて不死身の帶刀。
彌十 血判のなされやうがある。
トおぬいを側へ突きやり
サア、この肉身の心の臟の血判、秋塚どの、お手際が見たい。
渡平 何がなんと。
彌十 こりや其許の御息女、才原勘解由が妹淺香どのゝ腹より、出生した御息女でござるぞや。
渡平 如何にも。疑ひかゝつた才原が妹、その心血の……尤も。
彌十 忠臣は油に煮られ胸を裂く。
ト側なる銚子鍋を帶刀が前へ直し
忠義の諸士へ疑ひ晴らし。秋塚どの、五ツの鐘の鳴るまでに、血判のお手際が見たい。
渡平 望みの血判、五ツの鐘の鳴るまで、この銚子に移してお目にかけう。
彌十 互ひに念晴れ。
ト連判状を取替へて
マア、それまでは
渡平 一間にて御休息なされい。
ト唄になり、奥へ入る。帶刀、殘り、いろ／＼あつて
おぬいを向うへ連れ出て

コリヤ、おぬいよ。成る程、おりや秋塚帯刀、わが親ぢや。わりや、この父が可愛いか。但し母親が可愛いか。

ぬい　アイ、お前は大切の父様、母様も可愛いけれど、お前には替へられぬ。御大切にござりますわいな。

渡平　オヽ、さうありさうなものぢや。コリヤ、この秋塚が子になるからは、忠義と云ふ事を知つて居やうがな。

ぬい　アイ、そりやよう合點して居りまする。

渡平　オヽ、出かす〳〵。相傳の御主人へ忠義、親の孝行になる事なら、どのやうな事でも合點してくれるか。

ぬい　アイ、そりや命でも上げますわいな。

渡平　オヽ、その命が欲しい。命くれいよ。

ト詞を突込んで云ふ。

ぬい　エヽ。

ト飛び退き慄ふ。渡平、氣を替へ、おぬいを引寄せ、いたわり

渡平　オヽ、恂りしたも道理ぢや〳〵。

ぬい　父樣、なんでわしが命くれいと云はしやんすえ。

渡平　サア、其方が死んでくれると、鶴若さまを御代に出し、忠義も立ち、諸士へ云ひ譯になるわいやい。

ぬい　父樣やお主樣の爲になる事なら、ツイ殺して下さんせ。

渡平　そんなら得心して死んでくれるか……可愛や〳〵。

ト泣き落す。トこれよりしめやかなる胡弓入りの唄、合ひ方になる。渡平、いろ〳〵思ひ入れあつて、この間おきぬ出かけ、渡平に物云ひさうなこなし。渡平、おきぬを見て、額を外けて、そろ〳〵立ち、莚と手水桶を屋體へ直し、おぬいが帶を解き、襦袢一つにして莚の上へ上げ坐らす。この間おきぬ、合點のゆかぬ思ひ入れにて、ウロ〳〵するこなし。渡平、肌を脱ぎ、襦袢に荒繩の襷をかけ、刀を拔いて繩にて寢刃を合はし、刀を逆手に持つて、おぬいが側へ寄らうとする。おきぬ、恂りして渡平を引据ゑ。

きぬ　コレ、待たしやんせ。

渡平　コリヤ、なんとする。

きぬ　なんとするとは秋塚どの、あの子をなんとするのぢや。

渡平　ヤイ女房、娘おぬいはうぬが心で、殺すわいやい殺すわいやい。

きぬ　コレ、如何に女房ぢやとて、無理云はしやんしてもこればつかりは負けては居ぬ。どうした事で、わしが心

で殺すのぢや。

渡平　コリヤ、最前も云ふ通り、中屋敷での樣子、その仔細が知れぬゆゑ、渡平代つて命を捨てたも、この秋塚が辛苦も無になり、その云ひ譯には娘が心臟の血を取り、疑ひの血筋を切るのぢやわいやい。おのれが心で殺すと云ふが、おのれが心には、こたえぬか〱。

トおきぬ、何やら云はうとして云はれぬ思ひ入れにてしめ泣きに泣く。渡平、氣を替へ、おきぬを切らうとする思ひ入れして、また氣を替へ、おぬいが側へ行き顏を上げ、ヂツと見て、しめ泣きに泣く。此うち、權兵衞、東の障子を開け、樣子を聞いて居る。

ぬい　申し、父樣、お前は泣かしやんすかえ。

渡平　オヽ、健氣な其方が顏を見て、おりや嬉しいぢや。併し、お主の爲に命を捨つるは、武士に生れた身の譽れ。我がお主の爲でもなく、由ない奴の腹をかつたゆゑ、無駄死にするか。果報拙ない生れ付きぢやなア。

ぬい　申し、父樣、わしや親の爲に死ぬれば、嬉しうござんす。斯うして居ると、何やらたんと悲しうなります。早う殺して下さんせ。

渡平　オヽ、出かす〱。なんぞ云ひたい事があるなら、なんなりと遠慮せずと早う云へよ。

ぬい　わしやなんにも望みはないが、わしが死んだと聞いたらば、在所に居やる三太兵衞が、定めて泣きやるであろ。在所から戻りやつたら、お前の爲に死んだと云うて下さんせえ。

渡平　オヽ、氣遣ひすな。忠義深い三太兵衞、斯う云ふ事と聞いたなら、喜ぶであらうぞい。

ぬい　も一つ願ひがござんす。わしが死んだら、母樣の事を堪忍して、一緒に寐て下さんせえ。ならう事なら父樣や母樣の眞中で、機嫌よう寐んねこして、さうしてから死にたうござんす。

渡平　あれ聞き居れ。可愛や〱〱。

ト泣く。トおきぬ、可愛やと云ふ心意氣にて、渡平の顏を見、袖を啣へ、しめ泣きに泣く。渡平、堪えるこなしあつて

エヽ、役にも立たぬ事を、くど〱と。

ト泣く〱向うへ出て、莚の上へ上がり、手を合せ刀を紙にて卷き、おぬいが側へ寄る。

おぬい、今が最期ぢや。念佛申せ。

ぬい　南無阿彌陀佛。

渡平　南無阿彌陀佛。
ト突ッ込まうとする。おきぬ、渡平を突き退け、おぬいを圍ひ
きぬ　コレ、待つて下さんせ。マア／＼、待つて下さんせいな。
渡平　人畜め、退から。
ト引退ける。おきぬ、その手に縋り、よろしく留めて
きぬ　コレ、中屋敷での樣子は、兄樣の皆企みぢや。
渡平　才原が企みとは。
きぬ　鶴若さまへ忠臣の體に見せ、筆に毒を仕掛け、渡平さまを始め、その場の家中を鏖殺し。
渡平　すりや、推量に違はぬ兄の才原。
きぬ　義理大恩のある兄樣の身の上なれど、今のを見ては包まれぬ。どうぞ娘は助けて下さんせいな。
渡平　それ聞いたら、猶その血筋を。
ト又おぬいにかゝらうとする。おきぬ、取りつき、渡平、蹴飛ばす。おきぬ、その足に取りつき引摺られながら
きぬ　コレマア、待つて下さんせ。わたしは勘解由どのゝ血筋ぢやない。わしや藁の上から捨てられて、才原右門さまに拾はれ、大恩受けた義理に絡まれ、見す／＼兄の大罪と、最前打解けなんだ。こちの人、わたしが眞實の兄でなけりや、その子の爲にも血筋ぢやない。捨子の證據はこの守り袋。お前の愛想が盡けうかと、今まで樣子を隱した。これを見て、疑ひ晴らして、その子を助けて下さんせいなア。
ト取りつきながら片手にて守り袋を見せる。此うち、權兵衞、出かけ、後に居る。
渡平　この期に及んで云ひ譯暗い。彌十郎どのへの云ひ譯そこ退から。
ト蹴飛ばす。兩人よろしくあつて、渡平、おぬいを引寄せる。此うち權兵衞、おきぬが守を拾ひ取つて
權兵　待たしやりませ。
ト渡平を突き退け、立廻りにておぬいを圍ふ。
秋塚さま、マア／＼待つた。
渡平　權兵衞、渡平をこれまで養育、過分な。何かは追つて。そこ退け。
權兵　サア、斯う邪魔が入つては殺されまい。この子の血は私しが取つて上げませう。心血の血は、私しが取りまする。

渡平　イヽヤ、其方が手際心元ない。矢ッ張りおれが。

ト　おぬいを引寄せろ。おきぬ、留める。權兵衞、立廻りにておぬいを脇挾み、銚子鍋を持ち、ツイと一間へ入る。渡平、行かうとする。おきぬ、引退け、兩人よろしくあつて、二階へ上がらうとする。ト障子にパッと裲袍を當て、此うち、五ッの鐘鳴る。渡平、おきぬかゝる。渡平、見て立廻り、堪える。と一間より

彌十　五ッの刻限、契約の血判はな。

ト　出る。と二階の障子を開け、權兵衞、兩手を血に染め、刀を拭つて銚子鍋差出し

權兵　秋塚さま、おぬいさまの心血、お受取りなされませ。

ト　差出す。渡平、物云はずに取り、兩人、顏見合せ、權兵衞、障子ピッシャリ閉す。渡平、その銚子持ち、片手にて連判を出し廣げ、その上へ直し

渡平　秋塚帶刀、肉身に疑ひを絶つ心血の血判。彌十郎どの、イザお受取り下されい。

ト　彌十郎、一間より十三郎、高尾を連れ出て、兩人を莚の上へ直し、兩人、思ひ入れあつて坐る。彌十郎、懷中より連判狀を出し、指を切り、血判して

彌十　忠義を磨く互ひの血判、イザ、お納め下されませう。

ト　渡平、彌十郎、互ひに卷き物を納め、銚子を取り、杯を二人の前に置き

高尾どの〻病症は、急病氣狂と云うて、助かり難き難病にて、そこを存じてこの杯。

渡平　如何にも、殿のお胤の高尾どの。十三郎どのと改めてその杯。

ト　西天草を出し、右銚子へ入れ

サア、改めて祝言の杯。

彌十　忠臣固めの血汐、十三どの、頂戴召され。

高尾　アノ十三さんと、未來永々女夫と云ふ

渡平　固めの杯、早う〳〵。

高尾　お嬉しうござんす。

ト　杯へ受ける。彌十郎、注ぐ。高尾、呑み憎いこなしあつて呑み、十三郎へさす。

彌十　サア、十三さま、頂き召され。

十三　忠臣固めの杯、お頂き申しまする。

ト　彌十郎、注ぐ。十三郎、呑み、此うちに高尾、いろいろ苦しむこなし。

高尾、こりやなんとしやつた。

ト　いろ〳〵いたはる。高尾、苦しむ體にて倒れる。

安永三年二月大坂

角の芝居上演縮番附

ヤアコレ、高尾、コレ、高尾いなう。
トいろ／＼して
申し、秋塚さま、片桐さま、高尾を息が致しませぬ……
こりや死んださうにござりまする。コレ、高尾いなう。
氣を付けてくれい。高尾いなう。
ト取りつき泣く。渡平、最前預かりし箱を出し
渡平　彌十郎どの、この封印は。
ト彌十郎、十三郎を引起し
彌十　十三どの、今こそ冥途の秋塚どのに、封印切つても
らはれい。
十三　ハイ、よろしう頼み上げまする。
ト高尾の方へ心遣ひ、いろ／＼あり。渡平、封印の箱
を持ち、鎗の穂先を出し
渡平　この穂先の血汐に染みしは。
彌十　白樂天お能の時、殿六角さまへ打ちかけた手裏劍。
即ち西天草の盗賊。
渡平　すりや、この鎗が
ト検め、思ひ入れあり
こりや、名古屋の家の秘藏、十三郎所持の鎗。
彌十　サア、それゆゑにこの封印、秋塚どのは如何思し召
す。
渡平　よもやとは思へども
ト十三郎を引起し
十三どの、こりや貴殿が所持の鎗。この穂先を手裏劍に
打ちかけたゆゑ、殿のお手疵。
十三　エ、。
ト恟り。
彌十　その疵口より破傷風、お上への聞えを憚り、御病死
と披露したれども、殿の敵はこの鎗。
十三　エ、。
ト鎗を取り、いろ／＼あつて
こりや、いつぞや廓にて、紛失いたした私しが鎗。
彌十　その鎗が殿の敵。
渡平　主殺しの大罪。
十三　勿體ない。三代相恩の御主人樣を、身に取つて覺え
は
彌十　無いと云ふには證據があるか。
十三　サア。
渡平　泰山府君の一軸は。
十三　サア、その一軸も。

渡平　在所が知れぬか。
十三　いつぞや廓に於て盗み取られました。
彌十　彼れと云ひ
渡平　これと云ひ
彌十　云ひ譯立たねば主殺し。
十三　エヽ。
渡平　申し開きは出來ぬか。
彌十　サア。
三人　サア／＼。どうぢや。
十三　ハアヽ。
　ト泣き入り、俯向く。
渡平　當惑の心。彌十郎どの、十三の云ひ譯立つまで、この詮議を猶豫仕らう。
彌十　高尾どのゝ難病は、心血の生血に西天草を注ぎたれば、本腹に疑ひない。
渡平　牛玉善光の一腰も手に入りました。
彌十　紛失の萩の一巻、大藏めを廓にてぶち殺し、彌十郎が手に入りました。
　ト一巻を出し見せる。
渡平　成る程、その儀も先達て見屆け置きました。

彌十　貴殿には、どうして御存じ。
渡平　その時の非人は某。
彌十　さては貴殿であつたよな。
渡平　この上は一刻も早う、岩倉主膳さまへ申し上げ、兵庫どの勘解由が奸謀、佐々木の家名、鶴若さまに繼がせる密談。
彌十　發足の用意、萬端。秋塚どの。
渡平　片桐どの。
兩人　奥にて申し談じませう。
　ト唄になる。兩人、思ひ入れあつて、彌十郎、一間へ入る。渡平、兩人を見て、奥へ入る。十三郎、始終俯向き居る。高尾、氣の付きたろこなし。いろ／＼あつて
高尾　どうやら胸がさつぱりとした。
　トあたりを見て
　コレ十三さま、喜んで下さんせ。わしや氣色がようなつた程に、喜んで下さんせ。コレ、十三さん／＼いな。
　ト十三郎を搖る。十三郎、氣の狂うたろこなし。
十三　ヤア／＼、太夫が死んだに依つて泣くか。イヤ／＼そんなこつちや泣かぬ。ヤア／＼、殿樣をおれが殺

した。そりや胴慾ぢや。殿様を呼び返して來にや、おりやどうも生きてゐられぬ。殿様を呼んで來い。高尾も呼んで來い〳〵。

ト泣く。此うち、雲七、表に忍び聞いて居る。

高尾　エヽ、お前は氣が狂うたか。わしが今氣を取失うた時、死んだと思はしやんしたゆゑ、お氣が狂ひましたかコレ、十三さん、氣を付けて下さんせいなア。

十三　ヤアヽ、わりや高尾の幽靈ぢやな。こりや面白い。幽靈と連れ立つて行て、冥途にござる殿様呼びまして來う。サア行かう〳〵。

ト門口へ出やうとする。雲七、向うへ塞がり

雲七　どこへ。十三高尾見付けた。二人とも動くな。

高尾　ヤア、こなたは雲七どの。

雲七　高尾を引摺つて行て、褒美にするわい。

ト かゝる。高尾、嫌がる。

十三　ハアヽ、角力取るか〳〵。おれも取るぞ〳〵。

ト三人立廻りあつて、十三郎、花道へ狂ひ走る。高尾コレ〳〵と云ひ〳〵走り入る。雲七、こけて居るおきぬに躓く。

雲七　高尾やい〳〵。コリヤ、してやつたワ。

ト顔見合して

エヽ、南無三、こりや違うた。

ト二人の後を追ひ駈け入る。合ひ方になると、おきぬ、氣の付きたるこなし。

きぬ　コレイナウ、おぬいはもう死んだかいなう。あんまり心強い。ヤア、この血汐は。

ト銚子を取り

可哀や〳〵。

ト泣き落す。

夫に見替へられ、一人の娘はこの血汐。さうぢや。

ト側にある鎗の穗先を取り、死なうとする。權兵衛、出て、その手を取り

權兵　コレ、死ぬに及ばぬ。秋塚さまにこの權兵衛が、逢はせます。

ト右の鎗を取り、腹へ突ッ込む。

其方を捨てた眞實の親、守り袋の主はおれぢや。

きぬ　エヽ、その父父樣がなんで。

權兵　死ぬるは其方が不便さ。おぬい、今のを持つて來い。

ぬい　アイ〳〵。

ト小さき箱を持ち出る。おきぬ、取りつき

きぬ　ヤア、其方は殺されはせぬかいなう。
ぬい　イヽエ、わたしは死には致しませぬ。
きぬ　そんならこの銚子の血汐は。
權兵　權兵衞が心血の血汐。おぬいを助けた云ひ譯は、その箱を開けて見や。
ト兩肌を脱ぐ。左の腹、血だらけになつてある。
きぬ　エヽ。
ト悔りして右の箱を開き、筆を出し
この筆を云ひ譯とは。
ト此うち、渡平、野袴合羽にて西の障子開けて聞いて居る。彌十郎、同じ形にて、東の一間に聞いて居る。
權兵　最前其方が云ひ譯を聞くに、中屋敷にて才原勘解由知らねども、養仙に頼まれ七年以前、云ひ合せて大分の鏖殺しにしられたる、毒藥の筆の片しろ。向うは誰れと金儲けたは、渡平が大病助けたいばつかり。
ト此うち、養仙、玉六、八八、苫藏、皆々身拵らへして居る。
この親仁が元は筆結ひ。秋塚さまへお出入りして、双子の恥を包んでくれと、養仙に貰うた渡平が、大病助けう爲に、拵らへたこの筆ゆゑに、渡平まで命を捨てたは惡の報い。
きぬ　エヽ、そんならこの筆が片しろ。
養仙　それを。
トかゝるを、おきぬ突き退ける。皆々切りかける。よろしく立廻りのうち、渡平と彌十郎出て、皆々と立廻りにて引退け
渡平　この筆を詮議の種。女房淺香、疑ひ晴れた。
きぬ　エヽ、そんならわたしを
ト苫藏、刎れ返す。おきぬ、透さず押へ
元のやうに女夫になる、この菖蒲の去り狀。
ト渡す。渡平、取り
渡平　オヽ、未來永々變らぬ夫婦。謎の去り狀。
ト引裂く。
きぬ　エヽ、忝なうござんす。それを土產に。
苫藏　うぬ。
ト刎ね返し切りかける、おきぬその刀を取り、苫藏を見事に切り、その刀にて自害する。おぬい、取りつき泣く。權兵衞、渡平、彌十郎、驚ろく。
渡平　コリヤ、淺香、何ゆゑに
彌十　自害するのぢや。

ぬい　母様、なんで死なしやる。
權兵　娘よ、わりやナなんで死ぬる。
きぬ　父様、お前の懺悔にて、夫の疑ひ晴れたれば、藁の上から育てられ、大恩受けた冥途の父母へ、義理ある兄様の惡事、訴人した云ひ譯。義理と忠義に捨てる命。どうぞ娘が行く末を。
彌十　氣遣ひ召さるな。この彌十郎が養ふ娘、弟辨次郎に娶合せ、片桐の家相續。
きぬ　エヽ、忝なうござりまする。
權兵　渡平が伜この捨松も
渡平　オヽ、秋塚が家の惣領。
きぬ　嬉しや思ひ置く事ない。
權兵　詮議のこの鎗、お返し申す。
ト鎗を引廻す。
彌十　せめて冥途の門出には
渡平　穢れを拂ふ伽羅の下駄。
ト七輪へ下駄を削り焼べる。煙り立つ。
權兵　娘よ、さらば
きぬ　父様、さらば。
權兵　捨松。
きぬ　おぬい。
權きぬ　無事で居いよ。
渡平　南無阿彌陀佛。
皆々　南無阿彌陀佛。
ト權兵衛、おきぬ、思ひ入れあり、發仙、八八、二人が愁ひの隙を見て
兩人　うぬを。
ト振り放し、渡平、彌十郎にかゝる。立廻り、おきぬ八八を見事に切る。刀を捨て反り返る。權兵衛、倒れる。
彌十　捕つた。
ト押へる。おぬい、おきぬに取りつく。捨松、權兵衛に取りつく。足摺りして泣く。渡平、彌十郎、顏を背ける。各々よろしく。

幕

大詰

對決の場
玉川の場

役名━━岩倉主膳。秋塚帶刀。佐々木鶴若丸。一子、捨松。淺井兵庫。坊主、象傳實ハ渡井銀兵衛。

雷雲右衛門實ハ神沼勘左衛門。名古屋十三郎。大館法印の亡靈。菅沼小助。松島敵之助。奴、三太兵衛。玉川のおりく。玉川の小浪。傾城、高尾。才原勘解由。

造り物、屋敷の體。上の段に岩倉主膳、淺井兵庫、衣裳上下にて坐り居る。兩人の前に書き物あり、式臺に才原勘解由、衣裳上下、同じく侍ひ三人。秋塚帶刀、同じく侍ひ三人、双方に別れ並び居る。臆病口、よき所に紅梅の盛り仕掛けあり、橋がかり、塀。幕の内より勘解由、帶刀、せり合ひ居る。この見得早鼓、鈴の音、祈りの囃子にて幕明く。

勘解　過言であらうぞ。

帶刀　何が過言。

ト幕の内よりしか〳〵せり合ふ。

兵庫　待て〳〵。佐々木家の騒動は、家の伯父この兵庫に裁許を仰せつけられ、才原勘解由番代として、無難に納まりある儀を、先月二十日の願ひと云ひ、又ぞろや今日の裁斷取混ぜて、加持祈念の體。主膳どの、御所存あつての儀かな。

主膳　六十餘州の政道を預かる、大老職の我れ〳〵。國家安全武威繁榮の爲、月毎に一七日は大般若の執行。室町どのゝ長久を願ふ、私しならぬ主膳が裁斷。御さつとばしござるかな。

兵庫　イヤサ、その儀は。

主膳　なんとでござる。

兵庫　尤もさうな儀でござる。

帶刀　恐れながら、先月廿日より、御訴訟申し上げ奉りし佐々木家の相續。鶴若どのに仰せつけられ、才原が不埒の仕方、御吟味下さらうならば、有り難う存じまする。

勘解　默れ秋塚。この勘解由に不埒あらば、證據を以てなぜ願ひは。

帶刀　先達て差上げし、數通の狀が慥かな證據。

ト兵庫、前なる狀を取り

兵庫　この書狀には名宛がない。オヽ、破れちぎれた書狀何本あつても反古同然。

主膳　身共へ差出した一通には、慥かなる名宛があるぞや。

帶刀　渡井銀兵衛より、是妙院どのへの密書。才原、この儀はなんと。

勘解　その是妙院どのは、さる頃死去召され、誰れを捕へ、

なんの詮議。誠に銀兵衛が書翰ならば、早々召出し、拷問して白状させい。

帯刀　サア、その銀兵衛は。

兵庫　その銀兵衛を引出さぬか。

侍皆　早く銀兵衛を引出せ。

ト勘解由方侍ひ口々に云ふ。

帯刀　いつぞや廓騒動より、銀兵衛は逐電いたした。

勘解　イヤ、さうは抜けさせぬ。是妙院どのゝ死を幸ひ幼少の鶴若どのを云ひ立て、佐々木の家を横領する邪非道の秋塚が願ひ。それぢやゆかぬ。そりやゆかぬ事ぢや。誠に跡目を願ふならば、西天草の紛失、泰山府君の一軸、この二種を尋ね出し、疑ひかかりし名古屋十三、なぜ縄打つて刑罰に行はんぞ。

帯刀　西天草府君の一軸、十三が行くへも尋ね出し、其方達が企みにて、大藏と入れ替へ置いたる大領。この誠のお胤高尾どのと祝言させ、佐々木の家のかんはうは、名古屋十三どのにさすわい。

兵庫　黙り居らう。佐々木のかんはうは、忝なくもこの淺非兵庫、即ち佐々木家の感状に、室町どのよりこの兵庫へ、仰せつけられたる添へ翰。

ト懐中より袋入りの添へ翰を出し

なんと見たか。この二種を上げぬうちは、横車の願ひはなるまい。

勘解　兵庫どのの權威を妬み、この才原が廉直を妬む人非人、犬侍ひ。古手な辯を以て云ふとも叶はぬ事。ゆかぬ事。武將室町公の御添へ翰、反古にせうといふ願ひか。

帯刀　サ、それは。

兵庫　但し武將の御意を背くか。

帯刀　イヤサ、その儀は。

勘解　秋塚、なんと。

帯刀　ハア。

ト俯向く。

主膳　ム、ハ、、、忠臣を妬む佞人、賄賂を取入れ、無理無法に押しかかつても、横車は押されぬ天理。秋塚、なんと胸にこたえたか。

ト主膳、當てつけて云ふ。帯刀、無念の思ひ入れ。

兵庫　誰れ様が贔屓をしても、武將の添へ翰には叶はぬ。主膳どの、なんとさうではござらぬか。

主膳　佐々木家の感状と云ひ、家のかんはうを預かるとある、室町どののお添へ翰、二種を所持いたさるるからは、

佐々木の慥かなかんほう。二種差上ぐるまでは、むざと裁許は、マア、致し憎い、

ト此うち鼠一匹出て右の前を走り、よき所へ隱れる

兵庫　さうござらう。惡う横出しにするや否、家の感状、お添へ翰もどうしようと、この兵庫が心任せサ。

勘解　心から出國の秋塚、今日を佇みかねての邪魔願ひ。お詫び申しておドげを願へ。相役のよしみだから、相應の合力は、才原がしてくれう。非を改めてお詫びを願へサ。

主膳　さうぢや。誤まりましたとお下げを願へ。惡く意地張るや否、感状添へ翰、この兵庫が心任せ。叶はぬ事。アヽ、これにや叶ふまい〳〵。

ト主膳さしつけ憎う云ふ。此うち、前の鼠、二人の前を二三度通る事あり。兵庫の顏へ飛びつく。兵庫、恟りする。右の鼠、添へ翰、感状を啣へ、天井へ柱を傳ひ隱れる。皆々驚ろき思ひ入れ。此うち少しドロドロ。

兵庫　南無三、感状添へ翰、鼠めが奪ひ取つた。主膳どの、お抱への猫はないか。早く鼠めの詮議をさつしやれ。身が家來ども、天井を毀ち床を外して、鼠めの詮議を致せ。うぬ、なんとしてくれうぞ。

トやかましう云うてあわてる。

勘解　ハテ心得ぬ。

ト天井目がけて行かうとする。

帶刀　コレ才原、大老の御前、扣へ召され。

ト殿と云ふ。勘解由、こなしあつて

勘解　ハテ、殘り多い。

兵庫　主膳どの、こりやどうしませう。家來ども、弓鐵砲の用意をせい。言語道斷の鼠め。

トあわてたるこなしにて云ふ。

主膳　コレ、兵庫どの、あわて騷いで何事ぢや。お下にござれ〳〵。

兵庫　イヤサ、鼠めがお添へ翰を。

主膳　ハテ、よくござる。只今の鼠めは、よも唐天竺へは行くまい。やうやく百間四方の身共が屋敷、詮議して受取りまする。其許にお世話はかけぬ。お下にござれ〳〵

兵庫　イヤサ、氣が沈められませぬ。室町どのよりこの兵庫へ、お預けなされたお添へ翰感狀。

主膳　貴殿より拙者に受取る佐々木の跡目相續、邪正を糺し、云ひつけよとある、室町どのよりの御書。

ト御書を懐中より出す。

兵庫　なんと。

ト右の御書を開き

主膳「申し下す一條、一つ、佐々木の騒動風聞分明ならず候ふ間、淺井兵庫に預け置きたる家の感状、並びに添へ翰其方へ受取り、理非明白に糺さるべく候ふ、岩倉主膳どの、室町在判、石堂監物、細川右馬頭判」。

兵庫　すりや、室町どのよりその御書を。

主膳　今朝到着せしゆゑに、身が屋敷にて火急の裁斷。凶事なく受取らんと存じ、貴殿の趣意を見合すうち、鼠に取られさつしやつたは、其許の油斷ゆゑ。身が屋敷にての紛失、どうで受取らねばならぬ添へ翰。貴殿の粗相にはせぬ。拙者が詮議して受取る。何も氣遣ひはない程に、安堵さつしやれ〱。

兵庫　アヽ、お世話でござる。エヽ、こんな所へも鼠なんかが出て來らば、摑み殺してくれうもの。

ト此せりふのうち、鼠一匹出て、右の前を通り、主膳へ飛びつき、御書を取らうとする。主膳、扇にてあしらひ、扇にて鼠の頭を打ち割ることなし。鼠、庭へ飛び、飛石の蔭へ隱れる。少しドロ〱。

帶刀　ハテ心得ぬ。

ト立つて行かうとする。

勘解　御大老の御前、尾籠な。扣やれ。

帶刀　ハテ、怪しからぬ今の有樣。

主膳　窮鼠却つて猫を嚙む。ハテ、騒々しい四足どもぢやな。

兵庫　主膳どの、こりや、その御書を以て、跡日の再論、きかつしやるか。

主膳　如何にも糺し御目にかけよう。秋塚、才原、六角どの死後の砌り、遺言狀などと云ふやうな物はないか。

帶刀　ハツ。

ト急ぎ、臺植ゑの白梅を主膳の側へ直し

六角死後に至り、家の大事に及ばん時、岩倉さまへ差上げよと、申し送りし箱植ゑ。恐れながら御上覽下さりませう。

主膳　勘解由、其方の遺書は。

勘解　ハツ。

ト牡丹の箱植ゑを主膳の側へ直し

六角兼ねて申し置きしは、この箱植ゑを御前へ差上げよと申し殘してござる。恐れながら御上覽下さりませう。

主膳　南枝花始めて開く、梅は詠木の兄、今を盛りの白梅ハテナア。
兵庫　主膳どの、その箱の牡丹はな。
ト主膳、牡丹の花を見ようとして、側へ寄らぬこなし
主膳　未だ如月の上旬、盛りを含む花の口きり、富貴草とも花王とも云ふ。ハテ、どうがな。
兵庫　その梅は盛りを見せても、この牡丹の咲き揃ふまでは、この裁許はなりますまい。この牡丹の開くまで、とくと工風して云ひつけさつしやれ。今日の裁許はこれまで。双方ともに、立て／＼。
主膳　イヤ、待て／＼。
兵庫　なぜ留めさつしやる。
主膳　この牡丹の咲き揃ふまでは、餘程の日數もあり
兵庫　もし其うちに凶事あつては。
主膳　サア、そこを存じてこの主膳は、白梅と牡丹の箱植ゑ、遺書の工夫を致すうち、兵庫どのには暫時のうち、一間へござつて休息召され。才原、秋塚、其方どもは間を隔てて次へ立て。
勘解　ハツ。
兵庫　すりや、二種の工夫をして、今日中に佐々木の跡目。

主膳　キッと裁許申しつける。
兵庫　牡丹の開かぬ其うちは、跡目は極められまい。非道と云へども、時を知る花も心がござらうがや。
勘解　すりや、その牡丹
兵庫　その白梅
主膳　遺書の心は追ッつけ知れう。兩人ともに次へ立て。
ト云ふ。
兩人　ハッ。
ト唄になり、兵庫、勘解由顔を見合せ、牡丹が咲いてはつまらぬと云ふこなし、牡丹を指さしこなしあり。勘解由、顔にて押へる。兵庫、主膳に辭儀なして、勘解由に目を附け、牡丹箱を見、鼠の隠れたる所へ目を附け寄らうとする。勘解由、咳拂ひして、帶刀は心を殘して橋がかりへ入る。勘解由、主膳、ヂッとして居る。これより合ひ方になる、勘解由、主膳と顔見合せ氣の盡きたる思ひ入れにて、主膳に辭儀なして橋がゝりへ行き、よき所にて
主膳　コリヤ待て。
勘解　ハッ。
ト戻らうとする。

主膳　イヤ、其方ではない。行きやれ〳〵。
勘解　ハッ。
　ト靜々橋がかりへ行く。
主膳　不破の伴作待て。
　ト勘解由、思ひ入れありて、素知らぬ體にて靜々行く。
　主膳、勘解由を試し見る。よき所にて
用がある。待て。
　ト勘解由、キッと留り、思ひ入れあり、體を正し靜々
　よき所に居る。
勘解　待てと御意なされましたは、拙者めでござるや。但
し餘人の儀でござるや。御用承りたう存じまする。
　ト主膳、勘解由を見て、初めて氣の附いたるこなしに
　て
主膳　ア、イヤ、名を呼びかけたは其方が事ではない。
先つ頃、反逆を起し、亡びたる明智光秀が一族、不破伴
作と云ふ者、佐々木の家へ奪ひ取られし、牛王善光の
刀望むとあり、この曲者を見出したらば、何もかも知れ
さうなものと、心に思ふ工風の餘り、明智が一族待て：
：ハハ：思ひ中にあれば色外に表るゝとは、この事。勘
解由。さうは思はぬか。

勘解　御意の通り、伴作とやら云ふ曲者、在所を探し、面
縛いたさば、然るべう存じます。
主膳　いつぞや其方が、預かりの中屋敷へ立越し後、行く
への知れぬ佐々木大領。三年振りで無事に歸られたとの
風說。才原、この儀は實說か。
勘解　武術修行とあつて、出國なされし大殿大領、中屋敷
へ歸館などとは、毛頭覺えなき雜說。お疑ひの一言、恐
れ入りましてござりまする。
主膳　オヽ、さうありさうな事。外に用事はない。休息し
やれ。サア、行きやれ〳〵。
勘解　ハッ〳〵。
　ト唄になる。勘解由、主膳へ辭儀して油斷せしこなし
　靜々と橋がかりへ入る。主膳、始終目をつけ、勘解由
　を見送り、これより合ひ方になる。と庭の紅梅へ鶯來
　て鳴く仕掛けある。主膳、向うへ出て思ひ入れあつて
主膳　ハア、春知り顏に來て鳴く鶯。遺言のこの白梅。ハ
テ、どうがな。
　ト思案すると、橋がかりより三太兵衛、木綿厚袍に麻
　上下、おづ〳〵出て、主膳へ何やら云ひたさうにして
　恐れ入るこなしあつて手を突き

三太　恐れながら御大老岩倉主膳さまへ、下郎めがお願ひお聞き届け下さりませうならば、廣大のお慈悲、有り難うござりまする。

ト恐れ入つて云ふ。主膳、氣の附かぬこなしにて、鶯の聲を聞き、石臺の白梅見居て

主膳　誠や、孝謙天皇の御宇、大和の國高間寺、軒端の梅に鶯の來りて啼く聲を聽けば、初陽每朝來不相還木と啼く。文字に寫してこれを讀めば、初春の朝每には來れども逢はでぞ歸る元の住み家にと鶯の歌。白樂天の謠の意味、逢はでぞ歸る元の住み家に。ハテナア。

ト思案する。始終合ひ方。鶯程よく啼く。

三太　私しめは秋塚が小切米を頂く、三太兵衞と申す下郎め。お次に扣へ居りまして、最前からの樣子、旦那の引けにもならうかと、胸の中はモヤクヤ〳〵。才原めが雜言、五臟六腑は碎ける無念さ。憚りをも顧ず、身の程知らぬ下郎めがお願ひ、その牡丹は咲きませずとも、鶴若さまに譬へたる白梅の箱植ゑ。今日後日仰せつけられ下し置かれませうならば、生々世々の御恩、下郎めまで有り難う存じ奉りまする。

主膳　地水火風空五行、皆元に返る。花は根に、鳥は古巢に、逢はでぞ歸る元の住家へ……察するに、この木の元に。

ト白梅の石臺を扇にて打つと、仕掛けにて箱割れる。白樂天の面出る。主膳、取上げ

さてこそ一物。

ト面を見て

六角どの愛せられし白樂天、能の節まで手に觸れられしとあるこの面。裏に血汐を以て書きしは、青苔衣を帶うて、巖の肩よりかかり、白雲帶に似て、山の腰を繞る。こりや白樂天の詩賦。

ト面を見て思ひ入れ。

三太　何卒跡目は鶴若さまに、仰せつけられ下さらば。

主膳　ムウ、そちや秋塚が家來ぢやよな。

ト主膳、氣のつきたることなし。

三太　三太兵衞と申す下郎めでござりまする。

主膳　聞き及んだ忠義の奴。十三が身の云ひ譯、鶴若を名跡に立てる賜物くれう。その料紙を持て。

三太　ハツ〳〵。

ト側にある硯を持つて行く。主膳、懷より用意の日記より、たとふ紙出し、裏表に歌を書く。此うち三太兵

衞、天を拜み、方々を拜み、こなしよろしくあり

主膳　コリヤ、三太兵衞、先日野路の玉川邊を、內川あつ
て通りしに、いま初春の餘寒强きに、時を過ぎたる萩の
盛り。コリヤ、今日跡目を極めたくば、この箱植ゑの牡
丹を、暮れ六ッまでに花を咲かせよ。

三太　エヽ、廿日餘りも日を隔たねば、咲き揃はぬ牡丹の
箱植ゑ。

主膳　その咲かせやうはこの一首。この面と諸とも、十三
が隱れ里、玉川の女に見せ、夫を思ひ家を思はば、暮れ
六ッまでに咲かせと、小波高尾に云ひ聞かせい。

三太　すりや、十三どのゝ隱れ家も

主膳　知つた知らぬは追つての沙汰。コリヤ、白樂天に凶
事ありしは、名古屋帶と云ふ十三が替へ名。疑ひかゝり
し主殺し。誠の敵は衣を覆うて、世を忍ぶと云ふこの詩
の心。

三太　すりや、その敵を詮議仕出し、暮れ六ッまでに牡丹
の花を

主膳　咲かす奇妙は府君の一軸。西天草諸ともに、暮れ六
ッまでに詮議せい。

三太　と云うて僅か二時あまり、玉川までも三里の道。

主膳　その返事では心許ない。

三太　忠臣貞女の力比べ、お使ひ、首尾ようして見せませ
う。

主膳　エヽ、愛い奴。早く行け。

三太　ハッ。

ト唄になる。三太兵衞、たとふ紙と面を持ち、向うへ
走る。主膳、後を見送り、石臺の牡丹の側へ寄られぬ
思ひ入れ。心を殘し奧へ入る。これよりめりやす。と
帶刀、橋がかりより出て、あたりを窺ひ、刀の鐺にて
欄間を叩く。仕掛けにて天井の欄間を碎き、敵之助、
鼠縞子の形にて、口に感狀と御添へ翰を啣へ、欄間よ
り横さまに顏を出し

敵之　御用でござりますかな。

帶刀　何者も居らぬ、敵之助これへ。

敵之　ハッ。

ト天井より飛び降り、あたりを窺ひ

御意に任せ、天井に忍び、佐々木家の感狀、まつた室町
のお添へ翰、首尾よく手に入りましてござる。

ト差出す。

帶刀　津賀流の忍びの術、一妙を得し鼠の働らき。忠義の

辛勞、大儀々々。
敵之　イザ、お受取り下さりませう。
ト二品を渡す。帶刀受取り
帶刀　エヽ、有り難や。兵庫どのを荒立てなば、二品に凶事あらんかと、主膳さまにお願ひ申し、心を盡せし感狀御書、事なく手に入りしは松島が働らき、エヽ、忝なやなア。
ト帶刀、天を拜み喜ぶ。此うち紅梅の蔭より小助、忍びの形にて窺ひ
小助　その感狀を。
ト取りにかかる。敵之助、引きのけ、立廻りにて見得よく引きつけ
敵之　うぬ、才原が家來菅沼小助、及びもせぬ鼠の術。
帶刀　眉に疵を受けたるは、主膳さまの扇の手の内。疑ひもない鼠の本體。
小助　それ知られたら。
トかゝる。敵之助、立廻り、見得よく押へると、主膳出て
主膳　ヤレ音高し秋塚松島、佐々木の感狀、お添へ翰は。
帶刀　岩倉さまの御思慮にて、事なく手に入れたる二品。お受取り下さりませう。
ト渡す。主膳、受取り
主膳　出かした兩人。室町の御書手に入る上は、佐々木の跡目は今日中。
帶刀　エヽ、有り難う存じます。
敵之　して、この忍びの落着は。
主膳　箇條の一つ、引立てい。
帶刀　心得ました。うせう。
ト小助を引ッかたげ、向うへ走り入る。勘解由、兵庫出て、小柄を拔き、敵之助を目掛け、手裏劍を打つ。帶刀、兩方の手裏劍を中に見得よく捉る。敵之助は向うへ走り入る。
帶刀　兵庫さま、才原勘解由。コリヤ、何をなさるゝな。
兵庫　イヤサ、それは。
帶刀　才原、なんと。
勘解　お庭を走る鼠を、仕留めようと存じましてサ。
帶刀　其方の御勝手のお邪魔をいたすは、不死身の一德、鶴若さまに御家督極まり、不日返禮仕らう。
ト打ち返す。兵庫、勘解由、留め
勘解　イヤ、この牡丹の開かぬうちは、佐々木の跡目は極

められまい。
兵庫　今日の裁許はこれぎり。ソレ、秋塚を引立てい。
ト侍ひ三人、帯刀を取巻く。
侍ひ　御意ぢや、立たう。
帯刀　なにを。
主膳　アイヤ、跡目は今日中、陰陽げきせしこの箱植ゑの牡丹、遺言に詮議あり。才原を圍へ。
ト侍ひ三人、勘解由を取巻く。
侍ひ　御意ぢや。動くな。
勘解　聊爾なさるな。
兵庫　秋塚立て。
皆々　立たう。
帯刀　なにを。
ト各々見得よく、帯刀、捕り手、立廻りになると、廻り道具。
造り物、三間の間、綺麗なる大和葺きの屋根。向う赤壁、納戸口、前に竹緣廻らし、障子、欄間附き、門口藁葺きの屋根、短き繩暖簾。臆病口、塗垂れ。前に牡丹の花壇、未だ花の咲かぬ景色。後に花咲く仕掛けあり、在寺の塀門あり、右塀に高提灯、三萬日囘向永福寺と書きつけある。但し、右屋體の前、臆病口へかけ萩の盛り、玉川の體。隨分綺麗なる在の體。緣側に前垂れを着け、手拭にて、おりく、糸紡いで居る。庭先に小浪、高尾、前垂れ並びに手拭、十三、木綿の鉢卷、各々在所模樣にて、筵の上に麥を置き、空竿打つて居る。この見得、在郷唄になり廻り道具とまりて
りく　マア、煙草をのまぬかいの。
十三　サア、一服せう〱。
小浪　休ましやんせ〱。
ト口々云ひ、各々煙草を吸ひつけ
十三　ほんに、緣はをかしいもので、この玉川のおりくどのが、三太兵衛の伯母樣であらうとは、思ひも依らぬ事ぢや。
りく　さればでござりまする。そこに居やる小浪も、あの三太兵衛も、わたしの兄弟どもの子なれど、兩親に離りやつて、三太兵衛は百姓を嫌ひ、秋塚さまへ奉公に行て久し振りで内に戻り、今ではあの鶴若さまを。
十三　ア、、コレ〱、その鶴若さまを云はぬ事。兵庫ど

のや才原勘解由が、鶏の日膳の日、詮議する若殿。怪我にも本間の名は云ふまいぞ。

高尾　さうでござんす。敵之助さまの方へ手を廻して、詮議するゆゑ、覺られぬやうにと、おりくさまや小浪さまの、いかいお世話。

小浪　何を云はしやんすやら、わたしらが爲にもお主筋。殊に十三さまと、こないに一つに居るこつちやに依つて、一倍大切にせにやならぬわいなア。

ト高尾、ムツとして

高尾　ヘエ、、そりや結構な事でござりまする。

小浪　ハイ、結構でなうてや。いつぞや廓で別れてから、もう訪ねてお出でなさんすか、今日は見えるかと、待つてばかり居るのに、アタ辛氣らしい、氣狂ひにまでなり一緒に連れ立つて居たいとは、あんまりしつからうて、おかしいわい。

高尾　主の氣の狂つたを、お前の構ひになるかえ。思ひも依らぬ所へ三太兵衛どのがござんして、氣の狂つてある主も、わたしも無理に、爰へ連れてござんした。わたしらが頼んだ事ぢやないぞえ。

小浪　そりやさうばかり。わしが十三さまの事を、常住云うて居るに依つて、従弟の三太兵衛さまが、十三さまを連れ立つてこそ戻らしやんした。それにマア、アタ厚かましい。

ト空竿にて麥を打つ。

高尾　オ、いしこ。唐天竺へ行かしやんせうが、わしが離れてよいものかいなア。アタ好かんらしい。

ト空竿にて麥を打つ。

十三　これは如何な事。おれが爰の内へ來たれば、直ぐに氣狂ひが癒つたぢやないか。なんでも爰の内に結構な物があるぢやあろと思うて居る。

ト小浪、胸に當るこなし。

それぢやに依つて、わが身も合點ぢやないか。それに又なんのこつちや。小浪、わが身も、あの高尾が事は呑み込んで居るぢやないか。それに、又しても／＼、アタしつこい。

ト麥を打つ。

小浪　なんぼ合點して居ても、厚かましう云はしやんすに依つて。

高尾　よう合點して居ても、恩に着せたらしう云はしやんすに依つて。

ト麥を打つ。
十三　そこを料簡したがよいわい。
ト麥を打つ。
小浪　エ、、アタ鈍らしい。
ト麥を打つ。
高尾　阿房らしい。
十三　又かいやい。
小浪　嫌らしいぞ。
高尾　エ、、好かぬ。
十三　料簡せい。
ト三人、拍子にかゝり空竿にて打つ。
小浪　厚かましい。
高尾　なめくさり。
十三　堪忍せい。
ト三人こんな口拍子にて走りかかり打つ。
りく　これはしたり、こりやなんぢや。大事の疱瘡子のお
目が明くわいの。
十三　それ見やつたか。
小浪　エ、、こちや云やせぬけれど、高尾さまが
高尾　エ、、小浪さまから云うて置いて

トせり合ふ。
りく　又せり合ふのかいの。鶴若さまのお目が開くわいな
ア。
ト叱る。此うち障子の中なる枕屏風を退け、鶴若、疱
瘡の形、紅木綿の頬かむりをかけ、ツカ〳〵と出て
鶴若　皆の者、鯛の魚で飯食はう。
りく　オヽ、お目が開いた。これはマア端近な。
ト鶴若を上へ直し、各々並みよく並び
時世とは申しながら、見苦しいこの茅家で
高尾　鶴若さまの御疱瘡。輕うお仕舞ひ遊ばすと云ふも、
即ち御運の開ける瑞祥。
小浪　こんな輕い御疱瘡は、世界の子達にあやからしたい
程のこつちや。
りく　今日は秋塚帶刀どの、跡目御相續の御願ひ。
十三　片桐どの敵之助を始め、主膳さまの屋敷へお願ひ。
才原勘解由との爭論、紛失したる西天草、泰山府君の高
像、鎗を打つたる敵の詮議に、差留められたるこの十三。
小浪　その代りに三太兵衛さまが、屋敷の様子を知らせの
早打ち。様子はどうぢやぞいなア。
りく　早う様子が聞きたいなア。

ト此うち橋がかり、バタ〳〵にて駕籠舁き五人、木綿の鉢卷、襷がけにて、棒鼻に引き繩附け、駕籠の中にも下げ繩けはしき體にて、表へ舁き据ゑ

侍ひ　頼みませう。片桐さま松嶋さまより、十三さまへの急狀。

ト文箱を差出す。皆々惘り。

十三　ナニ、急用とは。

ト狀を出し、開き見て

「鶴若さま御相續につき、秋塚才原只今爭論、急ぎ相談致ふ間迎ひ遣はし候ふ、この者御同伴にて岩倉どの館まで火急に御越し下されたく候ふ。名古屋十三どの、松嶋敵之助、片桐彌十郎」心ならぬこの急用。小浪、高尾、大小上下持ちや。

兩人　アイ〳〵。

ト小浪、高尾、大小上下持ち出で、兩方悋氣のこなし思ひ入れあつて、まんがちに上下を着せ、大小を差さす。十三、氣の急くこなしにて、早う着せいと二人を叱る。凛々しく身拵らへをする。帶締め、木綿の後ろ鉢卷をして

十三　おりくどの、大事ない。そのお子な、御大切に、合點か。

りく　御家督のお喜び、奥で御膳を差上げませう。氣遣ひせずと、行てござんせ。

高尾　このマア三太兵衞は、このお迎ひにもなぜござんせぬ。

小浪　ほんにマア、なぜござんせぬぞいなア。

トせりふ云ひ〳〵、十三を身拵らへさす。

十三　屋敷の雜澁、そこ所へは行くまい。二人とも小さいのに氣を附けやうぞ。

高尾　アイ、合點でござんす。

ト十三、駕籠に乘り、下げ繩を持つて

十三　おりくどの、氣を附けさつしやれ。早打ち早う。

駕籠　ハツ……エイ〳〵〳〵、サアサ〳〵〳〵。

ト五人の早打ち、一人は向うの引き繩を持ち、花道へ急ぎ入る。

小浪　早う戻らしやんせえ。

高尾　待つて居るぞえ。

ト口々に云ひ、見送つて

小浪　アヽ、もう影も見えぬわいなア。

りく　コレ小浪、高尾さま、こんな時は信心が大事。銘々

に祈念をさつしやれ。鶴若さま、奥で御膳を上げませう
サア、お出でなされませい。
ト おりく、鶴若の手を引き奥へ入る。
高尾 十三さまの事は、常住祈つて居るに依つて、神さま方も合點してござんす。
小浪 オヽ、まんがちに云はしやんす。わたしも祈つて居るわいなア。
高尾 なんぼ祈りやんしても、わしがやうにはなるまい。
小浪 オヽいしこ。
ト せり合ふ。橋かかりバタ〳〵にて雲右衛門、黑裝束、目ばかり頭巾にて、はんがいを負ひ出る。捕り手追はへ出る。散々に切り散らす。捕り手、橋がかりへ逃げ込む。雲右衛門、内へ駈け込み、はんがいを下ろし
雲右 人を殺め立ち退く者。このお寺へ由緣のはんがい。お住持にこのはんがい、お匿まひ下さるやう、早く申して下され。
高尾 エヽ、お寺なら、あちらぢやわいなア。
小浪 水福寺は隣ぢやわいなア。
雲右 住持に由緣の者でござる。
ト 急いたるこなしにて云ふ。此うち捕り手、バラ〳〵出て
捕手 ソリヤ。
ト 雲右衛門にかかる。
雲右 なにを。
ト 大勢を切り立て、橋がかりへ追ひ駈け入る。小浪、高尾、驚ろく思ひ入れ、いろ〳〵あり
小浪 これな。コレ、滅相な。寺は隣ぢやわいなア。
高尾 粗相なお人さん。コレイナア、コレ……もうどつちへやら行たわいな。
小浪 滅相な。後も先も云はずに、滅相なお人ぢや。
高尾 いつそ隣へやらうかいな。
小浪 後でもやついたりや惡い。サア、手を貸しやんせ。隣へやつて來う。
高尾 アイ〳〵、それがよからう。
ト 兩人、はんがいにかかり、重たきこなしあつてねつから上がらぬわいなア。
小浪 どうぞ上げたいものぢやが。
ト 兩人いろ〳〵あり、此うち花道より駕籠舁き五人、木綿の後鉢卷、襷がけ、棒鼻に引き綱を附け、早打ちの體。駕籠の内に三太兵衛、後鉢卷、腹帶、首に狀箱

を掛け、綱を持ち

エイ〳〵、サッサ〳〵〳〵。

ト右の早打ち、駕籠を内へ舁き込む。小浪、高尾また

惘りして

兩人　オヽ、又、なんぢや來たわいな。

ト駕籠を覗き

高尾　オヽ、三太兵衞さまぢや。

小浪　ほんに三太兵衞さまぢや。伯母様、三太兵衞さまが

戻つてぢやぞえ。

りく　オイ〳〵、合點ぢや〳〵。

ト奥より白粥を持ち出て

ソレ、ちやつと呼び生けやいの。

兩人　アイ〳〵。

ト兩人、側へ寄り

三太兵衞さま〳〵いな。氣が附いたかえ〳〵。

ト兩人いろ〳〵あり。三太兵衞、氣の附くこなし。

高尾　高尾ぢやわいなア。

小浪　小浪ぢやわいなア。

ト三太兵衞、兩人を捕まへ

三太　高尾どの、小浪。

トこなしあつて

三太　皆の衆、大儀。

かご　ハッ。

ト早打ちの駕籠、臆病口へ入る。

りく　幸ひの白粥。マア、これを食べさしてたも。

兩人　アイ〳〵。

ト高尾、小浪、椀と箸とを持ち、兩人、くくめにかかる。

三太兵衞、椀と箸を引取り、一口、二口かき込み

三太　咲かさにやならぬ……咲かさにやならぬ。

ト急いて云ふ。

三人　マア、急かずと食はしやんせいな。

トまた一口かき込み

三太　咲かさにやならぬ〳〵。今の間に〳〵。

ト急いで云ふ。

高尾　そりや、なんのこつちやぞいな。

三太　咲かさにや秋塚方の負け。鶴若さま、秋塚さま、十

三さまの爲にもならず、秋塚方は腹せにやならぬぞ……

咲かしたい〳〵〳〵。

皆々　エヽ。

りく　コレ、咲かせいとは、なんぢやぞいな。

三人　なんでござんすぞいなア。
三太　牡丹を。
皆々　エヽ。
三太　岩倉さまにての立合ひ、石臺の牡丹、今の間に咲いてくれねば、秋塚さまの負け。御前には片桐さま、敵之助さまを始め、一人も叶はず、三太兵衞も間を隔てて、胸が碎くる。氣が揉める。苦しいわい／＼。
高尾　牡丹が咲かねば負けになる。
皆々　その樣子わえ。
三太　委細の譯直にや聞かぬ。彌十郎さまの云ひつけ、岩倉さまが御詮議のうち、下されたこの書付け。一老職お嗜なみのお手日記のたとう紙。これを見た／＼。
ト首に掛けたる文箱を開き、短册のやうなるたとう紙を出し、急いたるこなしにて見せる。高尾、取上げ
高尾「咲きしより散り果つるまで見し程に、花の元にて廿日經にけり」こりや牡丹を愛せし貫之の歌。
三太　裏にもある程に、小浪に見せいとある。裏を早う。
ト高尾、小浪に渡す。
高尾　ちやつと見やしやんせいな。
ト小浪、取上げ

小浪「明日も來ん野路の玉川萩越えて、色なる浪に月宿りけり」……こりやこの野路の玉川をお詠みなされた俊頼さまの御歌。表の歌「咲きしより散り果てるまで見し程に、花の元にて廿日經にけり」花の元にて廿日經にけり
りく　色なる浪に月宿りけり。
ト思ひ入れあつて
三太　コレ、悠長にして居られぬ。たつた今咲かさにやならぬぞ。小浪に渡せとあつたこの歌。高尾どのと相談して、屋敷へ上がつた箱植ゑの牡丹。今の間に咲かしてたも。
兩人　エヽ
三太　エヽと云うて居ては濟まぬ。この早打ちに戻つたに、十三さまは何してぢや。なぜ爰へ出さつしやれぬ。
りく　十三さまは、片桐さまや松島さまから、急用事があると云うて
小浪　それ／＼、御状で迎ひに來たゆゑ、たつた今、早駕籠で岩倉さまのお屋敷へ
高尾　行かしやんしたわいな。
りく　其方、道で逢はなんだか。
三太　ヤア、十三さまは顏を出すと、却つて爲に。

ト云はうとして

ソ、そりや、どんな者が迎ひに。

高尾　狀持つて駕籠が來やんした。オ、氣を急いて、その狀は爰に落ちてあるわいな。コレ、見やしやんせ。

ト渡す。

小浪　早う讀んで見やしやんせいな。

三太　面妖な。呼びに來る筈は

ト云ひ／＼狀を開き

ヤア、こりや眞赤いな。

小浪　なんとしたえ。

三太　慥かに敵から廻し者。

小浪　エヽ、なんと云はしやんす。

三太　虚實は措き、ほッついて十三どのに。氣遣ひない。コレ、箱植ゑの牡丹が咲かねば、十三さま秋塚さま、一味の忠には皆切腹。裁斷所にある箱植ゑを、爰から咲かす工風。

兩人　ニヽ。

三太　時刻移ると十三どのも切腹。

りく　ぢやと云うて、マア、牡丹が急に。

三太　咲く咲かぬは生死の境。

小浪　そんならどうでも。

三太　花を咲かすが二人の心中。

小浪　成る程、咲かせて見せませう。

三太　迎ひのこの狀、心元ない。

ト三太兵衞、右の狀を持ち、花道へ走り入る。唄になる。小浪、高尾、おりく、見送り

小浪　なんぢややら、無理の有り條。六七里も隔てたお屋敷の、その箱植ゑの牡丹をば

高尾　爰から咲かせとある難題。

小浪　咲かせやうはこの歌と、裏表に二首の歌。

小浪　どうぢやぞいなア。

ト思案する。

りく　思案して居る間はない。コレ、あの花壇には、時は來ぬ牡丹の芽出し。どうぞ試して見やらぬか。

高尾　ほんに、牡丹の開くは二十日餘り。その日のうちに一輪二輪開く花。

りく　その日を待たずに咲かせとある難題。

高尾　ハテ、どうぢやいな。

小浪　コレ／＼、あの枝を切つて暖めて、室咲きとやらにしようぢやないかえ。

高尾　ほんにさうぢや。寒梅の事を思や、室で咲かすはよい思案。花壇の枝を切つて、室咲きにして見ようかいな。

りく　そんな事で、七里も隔てた箱植ゑの牡丹、咲きさうなものぢやないぞや。

小浪　どうせうぞいな。

ト此うち奥より

鶴若　誰れぞ來て、遊ばしてくれいやい／＼。

ト呼ぶ。

りく　アイ／＼、鶴若さまが呼ばつしやる。ちよつと奥へ行て來る程に、花の咲く工風をしや。

鶴若　誰れぞ來いよ／＼。

ト忙しなう呼ぶゆゑ、おりく、こなしあつて入る。兩人殘り

小浪　なんぼうあのやうに云はしやんしても、どうも思案がない。

高尾　マア、あの牡丹の蕾を切つて、室へ入れて、お前とわしとが祈つたら、あつちにある石臺の花も、咲きさうなものぢやないかえ。

ト小浪、思案して

小浪　さうぢやわいな。可愛と思ふ男の爲。

ト少し凄う云ふ。

高尾　ソレ、夫を思ふ女子の念力。

トきつと云はうとして

マア、蕾を切らうかいな。

ト小浪、氣を替へ

小浪　それ／＼、蕾を切るは切らしやんせぢやが、その室には何をせうぞいなア。

高尾　ほんに、その室には。

小浪　なんぞよい室に。

ト右のはんがいを見付け

コレイナア、最前置いて去んだはんがい。時の用には花の室咲き。こりやどうあらうぞいな。

高尾　ほんに幸ひなはんがい。中の物を皆引出して、蒲團や小夜着を中へ入れて、わしもお前も中へ入つて、あの蕾を暖めたら、つい咲きさうなものぢやぞえ。

小浪　そしてお前と祈つたら、咲かぬと云ふ事はあるまい。一枝折つてござんせ。わしやこのはんがいを開けるわえ。

高尾　アイ／＼、さうしやんせう。サア、錠を開けさしやんせ。

小浪　アイ／＼、合點でござんす。

ト高尾は花壇の牡丹の枝を折り、小浪、はんがいの錠をいろ／＼して

高尾　コレイナア、根ッから開かんわいな。エヽ、辛氣な。早う開けさしやんせ。わしも手傳はう。

ト いろ／＼して

小浪　いつそ叩き開けうわいな。錠を叩き碎いてこまそ。

ト兩人、庭の石を拾ひ、錠を叩き開けることなし、いろいろあつて

高尾　アヽ、嬉しや開いたわいな。

小浪　サア、早う蓋を開けう。お前、そちら持たしやんせ

高尾　アイ／＼、合點でござんす。何が入れてあるぞいなア。

小浪　開けたら知れうぞいな。

ト云ひ／＼兩方へ手をかけ、兩人、はんがいの蓋を開けると、銀兵衛、がつそう頭、破れ衣、木綿どてら、凄きつくりにて、スックリと立つ。兩人悧り。

兩人　アレエヽ。

ト飛び退き

小浪　思ひがけないはんがいから、目やら鼻やら鬚だらけな怖いお方。何をして居やしやんした。

ト慄へ／＼云ふ。

高尾　化け物か仙人か、お前さんは誰れぢや。

ト慄へ／＼云ふ。

銀兵　坊主ぢや。譯があつて久しう高野に引ッ込んで居たが、その山もしくじつて、此方の方へ出かける道、なんのかのとぼくが高いゆゑ、匿まはれに行くはんがい住居。怖い事はない。人間の坊主ぢや。

小浪　エヽ、そんなら隣の寺へござんす、匿まはれの坊さんかえ。

銀兵　イヽヤ、寺へと云つたは嘘。詮議があつて爰へ來たのぢや。わいらに問ふ事がある程に、慄はずとそこへ出い。

高尾　エヽ、そんなら最前の侍ひと云うたも

小浪　寺へ預けると云うたのも

銀兵　みんな云ひ合せぢや。うじ／＼し居るな。

トそろ／＼出て、門口の戸を締め、かけ金をかけ

怖い事はない。爰へ來い。

高尾　わしや仙人の坊樣に、近付きはないぞえ。

銀兵　小浪も見知つて居る。廓でよう揩替へたなア。

小浪　こちやはんがいの化け物さんに、逢つた事はないもの。

銀兵　奥に居る疱瘡子は、佐々木の相續を願ふ鶴若であらうがな。

兩人　エヽ。

銀兵　コリヤ、慄へなやい〳〵。生けて置いては、なんのかのとやかましい。實否糺して仕樣がある。鶴若ぢやと云うてしまへ。隱しやアがると喰ひ殺すぞよ。

高尾　サア。

　ト慄ふ。

銀兵　小浪めにや、まだ問ふ事がある。いつぞや十三が失ひ居つた、泰山府君の一輪、われが隱して置いたであらう。早う出して渡し居らう。ヤイ、おれが物にして置いた物、おのれ、よう摺替へ居つたなア。

小浪　ア、コレ、覺えないぞ。そんな事は知りませぬぞ。

銀兵　吐かすな。おのれが持つて居る證據は、時過ぎた萩の盛り。泰山府君の尊像は、物の榮えを守りの神。玉川の流れの藻に、隱し置いたに違ひはない。秋の盛り春へ持ち越し、散りづく萩の枯れもせず、盛りを見するも府君の尊像、隱し置いた慥かな證據。責めせつちやう受けぬうちに、早く出し居らう。

　ト小浪、恟りして慄ふ。

高尾　ほんに、今の詞を聞けば、時を過ぎてのこの萩。小浪さま、そんならお前が府君の一輪、出して置かしやんしたかいなア。

銀兵　隱しても隱さゝぬ府君の一輪、一種でも缺いて置くが、マアおいらが身の安穩。否でも應でも出さす。高尾、おのれにや又、子悴が詮議。爰の子ぢやと云ふは僞はりあの餓鬼めは鶴若。

高尾　サア。

銀兵　吐かさにや摑み殺すぞよ。二人ながら、キリ〳〵吐かせ。

兩人　サア、その譯は。

　トこれより付け廻し

銀兵　喰ひ殺さうか。

兩人　サア。

銀兵　云はぬか。

兩人　サア。

銀兵　どしつこい。うぬ。

　ト兩人を引寄せる。兩人、逃げうとする。引付け、側

なる空棹にて兩人を打ち据ゑる。小浪、高尾、苦しき
思ひ入れ、いろ／＼あり。

サア、吐かさねばこの通り。叩き殺すがどうぢや。

ト片足にて高尾を踏まへながら、棹にて小浪を打つ。

小浪　ア、コレ、成る程樣子云ひませう。日頃の悋氣は女の因果、先殿樣のお胤のあなた、殺さしましてはどうもならぬ。免して上げて下さんせいなア。

銀兵　免して欲しくば早う吐かせ。

トくらはす。

小浪　成る程、廓で府君の尊像、わしが取つて隱して置いた。どうぞ十三さんが尋ねて見えるやうにと、思うて隱して置いた府君の尊像。十三さんの顏見た時、返さうかと思うたれど、そしたらツイ去なしやんせうかと、今まで隱しました。高尾さん、堪忍して下さんせ。

ト泣く。

高尾　夫を思ふは相互ひ。恨みに思ひませぬ。ちやつと妾を逃げて、十三さんにその一軸を上げて下さんせい。早う上げまして下さんせいな。

銀兵　例へ府君の一軸があつても、盜まれた西天草、鎗の穗先の云ひ譯がなけりや、十三は云ひ譯立たぬわい。

ト小浪を踏みつける。高尾を空棹にて押へ

これからはおのれぢや。サ、鶴若か、鶴若でないか。有やうに吐かし居らう。

トくらはす。

高尾　イヽヤ、鶴若さまぢやない。ありやおりくどのゝ子ぢや。

銀兵　エヽ、けち太い。小浪、とてものこつちや、その一軸の隱し所を云へ。

小浪　イヽヤ、こなたに渡す事はならぬ。

銀兵　吐かさにや二人とも、カウ。

ト兩人を打ち据ゑる。

どうで滅多に吐かすまい。合點のゆかぬは、この玉川岸を。

ト思ひ入れあつて川岸の石を上げ、卷き物の箱を出し中より一軸を出し

さてこそ一軸。

ト開かうとする。此うち、小浪、高尾、起き

兩人　ドツコイ。

ト取らうとする。三人立廻りあつて、銀兵衛、小浪、立廻りのうち、一軸を拔き、見得にて引ッ張る。高尾

かゝるを投げると、玉川の萩殘らずこける。三人キッ
と見得になると、面白きめりやすになる。

高尾　ハテ、怪しや。この玉川に埋みし一軸、開けば忽ちこの萩の花、時節枯れ葉と枯れ果てしは、さては今まで月過ぎて、盛りの萩は府君の尊像、一軸の德であつたよな。

小浪　隱せし頃は萩の盛り、月日を越えて枯れざりしは、一軸の御惠み。

高尾　傳へ聞く、櫻町の中納言重範、櫻を御寵愛あり、庭前の櫻花盛りの遲きを喞ち給ひ、泰山府君の神を祈り、月の始めよりの花を咲かせ給ひし事、偏へに府君の御利生。

小浪　傳へ／＼てこの尊像、萩の歌を見るにつけ、二十日時刻を今の間に、榮えを祈る牡丹の花。

高尾　道は何里と隔つるとも

小浪　夫を思ふ一念力、榮えは通ずる花壇の花。高尾さん。

高尾　小浪さん。

兩人　咲かさいて置かうか。

ト小浪、一軸を引取り、高尾、共に見得よく飛び退きキッとなる。

銀兵　ハテ、恐ろしい根性。ヤイ、例へその花が咲いても西天草がなけりや、跡目の論には勝たれぬわいやい。

小浪　すりや、こなたが西天草を所持して居るのぢや。

高尾　白樂天能の折から、鎗の穗先を手裏劍に打ち、西天草を奪ひ取つた

兩人　渡井銀兵衞ぢやよな。

銀兵　銀でも金でもいらざる問ひ事。一軸を早く渡せ。

ト雲右衞門、鶴若を引立て奥より出て

雲右　渡井銀兵衞、云ひ合せの通りにして、鶴若めはしてやつた。

トおりく、出て

りく　その若殿を。

トかゝる。立廻りにて當て、鶴若の首を切る。

高尾　ヤア、若殿を。ハア。

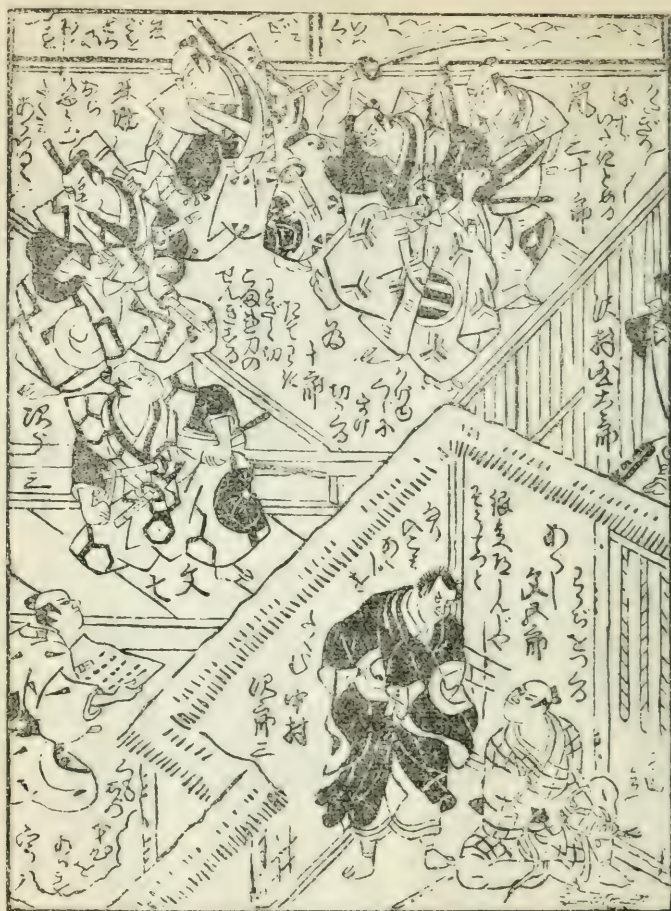
ト泣き落す。

銀兵　雲右衞門、出かした。コリヤ、西天草、首諸とも、此方へ家繼ぎの極まるまで、才原の隱れ里へ。

ト西天草の箱渡す。雲右衞門、取り

雲右　合點ぢや。後から一軸を持つて來い。

ト向うへ走り入る。

安永三年二月大坂角の芝居上演繪番附

銀兵　コリヤ、斯うしたら叶はぬ。十三めも三太兵衞も、よいやうに手廻ししてある。おのれらも冥途へ行て、十三に逢へ。
　ト側なる鍬にて打ちかける。小浪、鋤を取り、見得よくとまり
小浪　コレ、高尾さん、例へ若殿は殺されても、今日の論に秋塚さまの負けになつては、無念の無念。若殿はござらずとも、花を咲かすはお家の榮え。氣を落さずともその一軸。
高尾　さうぢや。花を咲かして才原方、追ひ込めるが殿様への追善忠義。この尊像に血を注ぎ、夫の命、お家の榮え、盛りを見いで置かうか。
　ト烈しき三味線にて一軸を開き、見得になる。
銀兵　うぬを。
　トかゝる。小浪、引退け、高尾、立廻りのうち、尊像を櫻の木にかけ、銀兵衞、邪魔する。三人立廻り、この見得にて橋がかりの櫻へ釘打ち、めりやすになる。櫻の前、一面に吹き水上がる、ドロ〳〵にて、牡丹花櫻、一面に咲く仕掛け、此うち、小浪、立廻りにて、銀兵衞の懷中より連判狀を引出す。

高尾　嬉しや尊像の威德。花は殘らず咲いたわいな。
銀兵　ヤア。うぬ。
　ト高尾を引きつける。小浪、かかるを引きつける。と三太兵衞、十三郎、橋がかりよりバタ〳〵にて走り出で、銀兵衞を引退け、
十三　渡井銀兵衞、動くな。
銀兵　身共を渡井銀兵衞とは。
十三　雲右衞門が返り忠にて、みな顯はれた。
三太　兵庫逆謀も追ッつけ自滅。
皆々　遁がれぬ所、覺悟せい。
十三　おりくどの、若殿をお供さつしやれ。
りく　畏まりました。
　ト誠の鶴若を抱き、奧より出る。
銀兵　ヤア、この鶴若は。
三太　最前討つたは渡平が悴、疱瘡を幸ひに、鶴若さまのお身替り。
十三　西天草を取返さう爲、雲右衞門と云ひ合せ
三太　殿様の敵。
高尾　兄さんの敵。
皆々　遁がれぬ。覺悟。

銀兵　銀兵衞が死物狂ひ。返り討ぢや。覺悟せい。
皆々　ヤア／＼。
ト各々立廻り、右のタテにて、いろ／＼模樣あつて、
此うち道具廻る。
造り物、元の座敷になる。主膳、兵庫を留め、牡丹
の箱植ゑを見て居る。兵庫、牡丹の箱切らうとする。
捕り手、勘解由を取卷き居る。
ト鈴音、祈りの體にて道具戻る。
兵勘　狼藉すると免さぬぞ。
主膳　ハテ、怪しや。花忽ち開くワ／＼。
勘解　その牡丹花を。
ト かゝらうとする。帶刀出て、勘解由を留める。主膳
は兵庫を留め
主膳　誠や佐々木の家の重寶、泰山府君の尊像に、一心籠
めて祈れば、草花盛りを見するとある。
帶刀　すりや、尊像の威徳にて、牡丹の花咲きしとな。
主膳　牡丹の花殘らず開けば、佐々木の跡目は今日より、
鶴若に申しつくる。兵庫どの、覺悟召され。
帶刀　お家を亂す大罪人。才原、覺悟せい。

兵勘　我れ／＼を大罪とは。
主膳　雷雲右衞門、參れ。
雲右　ハア、。
ト上下衣裳にて、西天草の箱を持ち出て
兵庫どの、才原勘解由、一味同心の雲右衞門、生薫の者
の成行き、秋塚さまへお詫び申し、返り忠の雲右衞門。
神沼勘左衞門と改名し、返り忠の奉公始め、銀兵衞めを
一杯喰はせ、奪ひ返せし西天草。イザ、お受取り下さり
ませう。
ト帶刀へ渡す。
兵庫　おのれ、俗性賤しき奴。無二の同心一味と思ひ、大
事を明かして殘念なわやい。
主膳　遁がれぬ所。才原勘解由、中屋敷にて毒の樣子、有
やうに白狀せい。
勘解　毒藥とは覺えない。
帶刀　惡事の根固め、證據を見せうか。
勘解　その證據とは。
主膳　修驗者ども、大館法印をこれへ出せ。
內で　ハア、。
ト祈りきびしうなる。

帶刀　大館法印、早く參れ、
大館　ハア、。
ト法印、修驗者の形にて出る。
勘解　イヤア、そちや過ぎつる中屋敷にて、淺香に討たれ死したる法印。れい／＼として蘇生せしは。
帶刀　三ケ年越えざる屍、山牛房の根に埋み、白鹿の油をたき、招魂の法を以て蘇生させしは岩倉さま。博物誌を明察あり、大殿大領どのゝ屍を祈り戻せし、法印を蘇生さして、何もかも白狀をさせたる、計略の裏。勘解由、これにも云ひ譯あるか。
大館　空々寂々たる法印。再び蘇生したる恩返しに、殘らず白狀いたした。兵庫どの、才原勘解由、遁がれぬ所、覺悟せい。
勘解　さては岩倉秋塚が、計略に落入つたか。敵は秋塚、うぬ。
ト立廻り。帶刀を一太刀切る。帶刀、切られなら見得よく留め
帶刀　岩倉さま、牛王善光の二腰揃ひ、不死身の切れ味、御賢慮の通り。
主膳　出かした。牛王善光の雌雄の、この二振り揃ふ時は、如何なる盤石金鐵たりとも、切りつける稀代の名劍。明智が一族不破の伴作、サア、覺悟せい。
勘解　この勘解由を不破伴作とは。
敵之　證人はこの切り首、遁がれぬ所、覺悟せい。
ト敵之助、切り首を持ち出る。
帶刀　忍び入つたる菅沼が首。
敵之　何もかも白狀させた。明智が末子不破伴作、腕廻せ。
勘解　重ね／＼の心外。秋塚、うぬ。
ト切りつける。立廻りにてぬける。ト牡丹の箱植を切りつけると、地雷火の仕掛け、煙硝火、鐵砲の音にて法印へ當る。投返しにて法印、白骨になる、皆々恟り。
兵庫　南無三、うぬ。
ト主膳を切らうとする。立廻りにて留め
主膳　石臺に仕込みし地雷火、花を囮りにこの主膳を、討たんとは愚か／＼。
帶刀　白狀したれば用なき法印、地雷火の手盛りをば喰うて、伴作、さぞ無念にあらう。
敵之　遁がれぬ所ぢや。繩かゝれ。
ト取卷く。
勘解　父明智光秀が修羅の妄執晴らさん爲、大事を思ひ立

つたる、伴作が死物狂ひ。覺悟せい。

主膳　捕り手を揃へ、搦め捕れ。

大勢　やらぬぞ。

ト遠攻めになる。

勘解　なにを。

ト勘解由、大勢を追ひ廻す。敵之助、雲右衛門、追ひ駈け出る。兵庫、かゝらうとする。主膳、向うへ抛る。とバタ〳〵にて、小浪、高尾、府君の一軸、連判狀を持ち、向うより走り出て、こける。

主膳　ヤアレ、慌たゞしい、なんぢや。

高尾　アイ、私しは傾城高尾。

小浪　私しは玉川の小浪。

高尾　府君の一軸。

小浪　連判狀。

兩人　お受取り下さりませ。

主膳　天晴れ貞女。手柄々々

ト向うよりバタ〳〵にて、銀兵衛、十三郎、三太兵衛、本舞臺へ走り出て

十三　動くな。

銀兵　ドッコイ。

帶刀　主殺しの渡井銀兵衛、疵つけずと搦め捕れ。

十三　覺悟せい。

ト立廻りになり、と向う打拔き大庭、蘇鐵、燈籠、石橋、庭の模様見せ、但し道具西東へ引分ける。と好き所に勘解由、脫ぎかけ、鎖帷子にて暴れ居る。組子大勢、高挑灯、弓張り、松明、長道具十手にて、敵之助、雲右衛門、十三郎、三太兵衛、大勢と一緒に取卷き、この見得にて、向うへ出て、タテいろ〳〵あつて留める。

皆々　伴作、遁がれぬ所、腕廻せ。

ト帶刀、銀兵衛に繩かける。主膳、兵庫を締め上げ

主膳　如何やうに働らいても、遁がれぬ天命。サア、腕廻せ。

帶刀　渡井銀兵衛も搦め捕り、兵庫どのも繩ぶつぞ、

勘解　運命盡きたる不破伴作。父光秀への云ひ譯。

ト腹へ突ッ込む。

皆々　惡人亡ぶる上は

主膳　佐々木相續は鶴若。

帶刀　執權は片桐秋塚。

主膳　めでたい國入り。

ト打出し太鼓、

幕

けいせい睦玉川（終り）

前座

上林の葛城が傳
身替と婚禮を
對染たる九日小袖

東山殿御伽草紙

後座

三浦の高尾が傳
心中と敵討を
縫合たる八朔縞衣

阿國
劇場
濫觴
不破
名越
實錄

伊達染仕形講釋

四番續

享和三年二月中村座再演繪本表紙

伊達染仕形講釋

三建目　北山鬼貫館の場

役名――名古屋山三元秋。同女房、葛城。同一子、小山三。石堂内記。大江鬼貫。醫者、南都正庵。山伏、高慢院。下郎、團平。名和官藏。仁木軍藤次。小野のお通。男之助妹、初風。不破伴左衛門重勝。

本舞臺、三間の間、一面の上げ障子、舞臺先へ雪板、石燈籠、生垣、上下の柱、梅の立ち木、一面に雪の降り積りたる體、爰に奴四人、いづれも雪掻きを持ち、雪を掻いて居る。白囃子にて、幕明く。

皆々　よんやサ。

ト雪掻きを置き、皆々寒き思ひ入れ。

奴一　オヽ、冷たい／＼。なんとマア、此やうに寒い事もないものだ。二月に入つて此やうに雪の降ると云ふも、珍らしいぢやアないか。

奴二　おらアもう寒くつて／＼、睾丸も何も縮み上がつてしまつたわいの。

奴三　なんと、朝ツぱらから雪を掻いたれば、おなかも餘ッぽど北山のこの御殿、今日はお客でもある事かな。

奴四　ある所か。今日この鬼貫さまの御殿へ、不破の伴左衛門さまを、この雪を幸ひに、茶の湯にお呼びなさるとの事だげな。

奴一　そんならお客は、アノ不破の伴左衛門さまか。

奴二　それサ、茶の湯にお呼びなさるとよ。

奴三　ハテ、よい茶と云ふものは、逢つたものだ。おいらは茶の湯より、グッと煙草で一杯やらかしたいものだな。

奴四　なんだか寒いので、ガタ／＼慄へる奴サ。

奴一　コレ、見やれ、水ツ洟だ。鼻の下へいつそ氷が張る奴サ。

奴二　こんな時は山鯨か、鐵砲汁で呑みたいわえ。

奴三　ア、コレ、なんぞ斯う云ふ所へ旨い物が來ればいゝなア。

皆々　ト向う幕の内にて

つう　百歳も踊り忘れぬ村雀、小鳥を買つて下さんせいなア。

奴一　アレ〱、向うから商人が、何やら擔いで

皆々　來るワ〱。

ト摺り鉦入りの出の唄になり、花道より、お通、やつし袖なし羽織、頰冠りにて、放し鳥の荷を擔ぎ出て來り、花道にて

つう　雀子や明り障子の竹の影、昔し〱の舌切り雀、源すみに雀が巢を組んで、さぞや住みよき殿造り、お得意に入つては蛤と、なりも形も繕ろはぬ、ふくら雀に里雀、方をぢやわ〱と、云ふ事知らぬ小鳥賣り、お求めなされて下さんせと、ホヽ敬つて、御用はござりませぬかいなア。

皆々　ヤンヤ〱。

奴一　シタリ、面つきなら、器量なら、くつきりとした小鳥賣り。ドレ〱買つてやるべいか。

奴二　さうだ〱。見れば見る程、可愛らしい女の商人。お主とともに、どんぐるみにして買つてやるべい〱。

つう　ハイ〱、有り難うござります。サア〱、お求めなされて下さりませ〱。

奴三　待ちやれ。時に、この小鳥は、買ひは買つても、どうするものぢやな。

つう　サイナア、この小鳥は、生けるを放つ放生會、お放しなされますると、功德になりまするわいなア。

奴四　そんなら、この雀を放してやれば、功德になるかの。

つう　サア〱、お放しなされませ。

奴一　おきやアがれ。食ひ物かと思つたれば、とんだ物を買つて來たな。放し鳥は氣がない。歸れ〱。

皆々　サア〱、歸れ〱。

つう　モシ〱、そしてマア、このお屋敷は、どなたのお屋敷でござりまするえ。

奴二　知れた事だ。賴兼公の御伯父君、大江の圖幸鬼貫さまの、北山のこの御殿。それを聞いて何にする。

つう　サイナ、義政公にも賴兼さまにも、御風雅なお殿樣。コレ、此やうに珍らしい如月の大雪。所は名におふ雪の北山、名所ではござりませぬか。そんならお前さん方も、雪見の趣向に、なんぞ好いお樂しみが、ありさうなものではござりませぬかいなア。

奴一　イカサマ、啗まされて云ふぢやアないが、珍らしい如月のこの雪。雪見の趣向に、なんぞ好い思ひつきがあ

りさうなものだわえ。

奴二　成る程、お主が云やればそんなものだ。コレ、雀賣り、そもじは、なんぞ好い思ひつきは、あるまいか／＼。

つう　ござりますとも／＼。なんと、斯うなされてはどうでござりませうぞ。

皆々　云つて見やれ／＼。

つう　お前さん方は、なんと、酒はお嫌でござんすかいなア。

奴三　酒が嫌ひで堪るものか。呑みたいは呑みたいけれど、酒と云つちやァ爰にやないワ。

つう　サア、そこでござんすわいなア。その酒があるぞえあるぞえ。

皆々　ヤア、酒がどこにある／＼。

つう　その酒はこの雀。

皆々　その雀が酒とは、どうだ。

つう　サア、雀と思へば雀、酒と思へば雀も酒、この雀を酒にして、なんと一羽づゝ、あの笹藪へ放してやつてはどうぢやいな。

奴四　酒に雀は有り難い。そんならこの雀を酒だと思つて、なんと一羽宛、放してやるべいぢやァないか。

奴一　面白い／＼。一杯呑むと思つて一羽放し、二杯呑んだと思つて二羽放して、なんとこの雀で、酒盛りを始めちやアどうであらう。

奴二　待ちやれや。雀の値をして置かざア、後の勘定がむづかしからう。こりやァ一羽では幾らに賣る氣だ。

つう　そりやモウ、どうなりともよいやうにして、買うて下さんせいなア。

奴三　よいやうにと云つたところが、後の身詰まり。コレ、爰に南鐐が一つある。これで勘定してもらふべい。サア、前金だぞ／＼。

ト腰提げの中より貳朱を一つ出してやる。

つう　これはお有り難うござりまする。サア／＼、そんなら早う酒盛りを、お始めなされたがようござんすわいなア。

ト鳥籠を持つて出る。

奴四　ドレ／＼。サア、これからは此方のものだ。酌は幸ひ姐え、頼んだぞよ／＼。さらば始めてさすべいか。

つう　サア／＼、お上がりなされませいなア。

ト雀を出して奴一へ渡す。

奴一　この雪を見て、一つ請けたところは、どうも云へぬ。

さらば一思ひにグッと放すべいか。

ト一羽放す。差し金の雀飛ぶ。

オヽ、よい氣味だ〳〵。サア〳〵、お主も一つ呑みやれ。

奴二　おらア先刻から、放したくつて〳〵、咽喉がグビグビして居た。ドレ〳〵、そもじの酌でやッつけべいか。

つう　お前もどうやら、なりさうなわいなア。

奴二　おらア、モウ〳〵、雀と云つちやア目のない男だ。さらば雪消しに、一つやらかさうか。

ト雀を取つて放してやり、舌打ちをして

甘露々々。

奴三　ドレ〳〵、おれも寒さ凌ぎに一羽放すべいが、こぼれぬやうに寄越してくりやれ。なんでもこれから大雀盛りにせにやならぬ。幾らでも放しやれ〳〵。

奴四　合點だ〳〵。さらば雀の瀧呑みをお目にかけうか。

奴一　おれが百杯呑みを御覽に入れようか。

つう　サア〳〵、なんぼなりと、わたしが酌をしやんせう。

皆々　こいつは有り難い〳〵。

トこれより雀を籠より幾らも出して、皆々放してやる。この雀、後の雀數へ入り、啼く聲する。皆々醉うたる思ひ入れにて立ち上がり

奴一　ヤレ〳〵、とんだ放しやうをしたわえ。どうやら足が、ヨロ〳〵として來た〳〵。

奴二　どうか御殿中が、グル〳〵と廻つて來たわえ。

奴三　おれも後の一羽が過ぎたさうだ。

奴四　喧嘩でも出來ないうち、サア、部屋へ來やれ〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

奴一　山寺のや、春の夕暮れ見てあれば。

ト皆々酒醉ひのこなし、口拍子を取りながら、四人の奴、下座へ入る。あと合ひ方。お通、思ひ入れあつて

つう　ほんにマア、どれも〳〵氣のよい人さん方ではあるぞ……それはさうと、此やうにあられぬ姿になつて、この御殿へ入込んだこのお通、賴兼さまのお身の仇たる伯父鬼貫さま、今日は雪見のもてなしとて、伴左衞門も來るとの事。これにはなんでも樣子がなけりや叶はぬ。それにつけてもお家の重寶、東山より若君鶴壽丸さまへ進ぜられたる、寶方卿御秘藏ありし、御手洗のお香盒、紛失は盜賊の仕業。その手がゝりもあらんかと、來るは來ても女子の身の上。マア。どうしたらよからうぞいの。

ト向うにて「鬼貫公お入り」と呼ぶ。

ヤア、館の主鬼貫さまのお入りとの事。目にかゝつては

この身の難儀。忍んで樣子を聞かうかいの。オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れあつて下座へ入る。と又一鬼貫公お入り―と呼び、誂らへの合ひ方になり、花道より、鬼貫、羽織衣裳にて庭下駄を穿き、弓矢を持つて出て來る。後より、仁木軍藏次、上下衣裳にて、長柄の傘をさしかけて出る。後より、名和官藏、上下衣裳にて、三方に繪圖を載せ持つて出て來る。その後より、男之助妹初風、梅の枝に雉子を付け、これを持つて出て來り、皆々花道に並び

鬼貫　誠や、梅花を折つて冠に差せば、二月の雪衣に落つると、その唐歌も目前に、見渡す庭の面白さ、眺めに盡きぬ雪景色。實にも興ある風情だなア。

初風　限りあれば、富士の深雪の消ゆる日も、消ゆる氷室の山の下柴。それに引替へ限りなき、貢ぎの雪の此やうに、降り積りたるお庭の眺め。よい景色ではござりませぬかいなア。

軍藏　イカサマ、二月に稀れなこの大雪。鬼貫公の御趣向は、丁度な所へ持つて北山、この御殿にてお茶の催ほし。時雨にまさつた、よい思し召しでござります。

官藏　客は名におふ伴左衛門、相客なしとの思し付き。お茶より先の雪見酒、これにて一獻召上がられ、然るべう存じまする。

鬼貫　成る程、皆を相手にして、この鬼貫も一獻酌まん。方々參れ。

皆々　先づ、お入りあられませう。

トまた又合ひ方になり、皆々舞臺へ來り、鬼貫は褥の上に住ふ。

軍藏　早速ながら申し上げまするは、先刻より不破の伴左衛門重勝、御殿に相詰め罷り在りまする。時に、心なりませぬは名古屋山三元秋、推して推參仕りましたるは、如何の事でござりませうな。

鬼貫　心得ぬ名古屋山三、某が招きもせぬに參りしとは、差當つて不審の一つ。こりやア聞えた。先年より彼れが預かりし、丹波丹後の國境、谷地八千石、これまで山三が領するところ、この度名和無理之助が願ひに依つて、八千石を三分に分け、その一つを預からんとの願ひ。斯く云ふ鬼貫聞き届け、申しつけたる谷地の繩張り。それを遺恨に挾み、推參したるものであらう。

官藏　左樣でござりませう。拙者が同苗無理之助、今日右

の御用につき、參上いたす筈のところ、所勞に依つて斯く申す、名和官藏を以ての名代。只今あれにて見ますれば、名古屋山三が悴小山三、石堂内記共々に、お次に扣へて居りました。何は兎もあれ、繩張りの繪圖面、鬼貫公へ御覽に入れん。

ト繪圖を鬼貫が前へ持つて行く。

鬼貫　谷地を繪圖に認めしとは、出來たく。先づ山三めは差措いて、小山三石堂兩人を呼び出し、この旨を申し聞けん。仁木軍藤次、兩人をこれへと申せ。

軍藤　畏まつてござりまする。ドレく。ナニ、名古屋小山三、石堂内記、鬼貫公のお召しだ。早くお出やれ。

兩人　畏まつてござります。

ト鼓の合ひ方になり、向うより、小山三、上下衣裳にて、竹の石臺を持ち出て來る。後より内記、上下衣裳にて出て來る。兩人、花道に扣へて

小山　お召しに從ひ、罷り出ましたる名古屋小山三、何がな御機嫌伺ひの印と存じ、持參いたせし寒竹の石臺、所謂る竹はこの君と稱する、當時足利家の御後見、遊ばされまする鬼貫公へ、聊かの獻上物。御前よろしうお取次、賴み存じまする。

軍藤　シタリ、鬼貫さまをおはむきの、寒竹の石臺は、茅場町の藥師や、藥研堀の緣日に買へば、僅か五十か百出せば、提げて來られるこの鉢植。鬼貫さまへ獻上とは、ザッと笑つた詮鑿だ。取次をする事は、この仁木軍藤次は否だ。キリく持つて下がらつしやい。

内記　アイヤ、仁木どの、獻上のこの品を、蔑みなさるゝ只今のお詞。輕微な物とお云やれど、鬼貫公を重んじて、差上ぐるその趣意を御存じなくば、石堂内記が申し上げん。既に和歌にも、君ゆゑに虎伏す野邊に身を捨てん、竹の林の跡を尋ねてと、寸忠を顯はしましたる、寒竹の石臺、お取次の程賴み存じまする。

鬼貫　流石は名古屋の一族、石堂内記が申し條、鬼貫これにて聞き屆けた。仁木軍藤次、あの石臺をこれへ。

軍藤　畏まつてござります。

ト石臺を鬼貫が前へ持つて來る。

煤掃き竹にも短册竹にも、間拔けのしたこの石臺、いつその事根こぎにして、藥罐銅子直しにでも、おやりなされたがようござりまする。

初風　誠に名古屋山三どのゝ事は、義政公の御先祖、義教公のお目鏡に依つて、代々の執權職、尊氏公より傳はり

し、刑部太郎の御印籠、蒔繪の模樣は花がつみ、世に類なきその品を、お手づから名古屋山三どのへ、下し置かれしとの物語り。家柄と云ひ筋目と云ひ、恥かしからぬ親子。鬼貫さまにも小山三どのを、お目かけられて遣はされませい。

軍藏　名古屋山三が山三なれば、不破の伴左衞門も伴左衞門。常々伴左衞門が帶するところの刀こそ、御先祖義持公よりの拜領。

官藏　それ〳〵、その牛王吉光の刀まで、下し置かれし執權職、山三ばかりが侍ひぢやござらぬぞ。

兩人　イケ馬鹿々々しい。

鬼貫　それはさておき、兩人には、鬼貫が詮議がある。これへ參れ。

兩人　ハツ。

ト舞臺へ來り

小三　して、我れ〳〵に御詮議は。

内記　如何の儀でござりまする。

鬼貫　外でもない、其方達兩人は、鶴壽丸が近習の者。先達て義政公より、鶴壽丸へ賜られしところの、實方卿の重寶、御手洗の香盒、紛失なして行くへが知れぬ。その盜賊が出ぬに於ては、差當つて山三親子に、東山との丶疑ひがかゝつて居る。石堂内記も遁がれぬ罪科、この云ひ譯が卽答になるか。なんと。

小山　そのお香盒の事は、先つ頃より紛失いたし、所々詮議仕れど、今以て在所も知れませぬやうにござりまする。

内記　藤原の實方卿、陸奧へさすらひの折柄、加茂の橘本へ殘し置かれしとある、御手洗のお香盒、草を分つて尋ねますれど、その盜賊今に於て相知れませぬ。常ならぬ曲者の仕業、追ッつけ詮議仕り、若君樣へ香盒は差上げまするでござりませう。

鬼貫　その香盒の在所が知れねば、わいら二人は云ふに及ばず、山三までの身の上だぞ。それのみならず、名古屋山三が預かり置くところの、丹波丹後の國境、八千石の谷地、この度、その三分一を、名和無理之助が預かりたき願ひ、取上げくれたこの鬼貫。三分一の繩張りの繪圖面、立會つて檢めろ。

兩人　畏まつてござりまする。

ト立寄つて繪圖面を檢め

小山　ヤ、丶、この繩張りの繪圖面は、谷地のうち三分一を、名和無理之助どの丶お預けなさるべき、先達ての御

せなるに、その二つを無理之助どのへお預けなされ、その一つを山三へお預けなさるゝとは。

内記　思ひも依らぬこの繩張り。斯くは兎もあれ、三分の二つを、無理之助どのへお渡し申し、一つを受取り歸つては、名古屋山三へ石堂内記が相立ち申さぬ。是非とも二つを召上げられなば、一應山三へ對談いたし、その上にてお請け致さん。直ぐさま今日畏まつたと、お請けの儀は相成りませぬ。

鬼貫　ヤア、默れ石堂。當時賴兼が叔父たる大江の鬼貫、我が料簡の以て認めさせしその繪圖面。三分の二つはまだな事、殘らずともに取上げても、點の打ち手は一人もない。

軍藤　こみづをつかずと石堂内記、畏まつたとお請けをさつしやい。

官藏　鬼貫公の御意を受け、繪圖に寫せしこの繩張り。四の五の云やア我れ〱が

兩人　お相手になりませうか。

内記　石堂内記がこの一命、容易うは捨て憎けれど、事に臨みし今日の御差配。命一つを失ふからは……どなた樣でもお相手に。

鬼貫　ヤレ待て内記。イカサマ、其方が詞も一理あれど、この鬼貫、斯くまでに云ひ出せし事、反古にもならぬ。その預かり置く八千石、二つは獻じ、一つを受取り、今日は立歸れ。その代りには紛失の、香盒詮議を暫しの宥免。

ト これにて、内記、思ひ入れ。

内記　左樣ござらば何がさて、承知仕つてござりまする。

小山　繩張り檢分首尾よく相濟み、三分の二つは事ゆゑなく、返し奉つてござりまする。

官藏　返し奉らないでどうするものだ。その二つは卽ち、この名和官藏が受取つて、無理之助へ渡すでござるワ。

初風　何事も鬼貫さまの仰せ出され、お氣に染ますとこの場は故なう、お濟ませなさるが何かのお爲。香盒詮議もこれゆゑに、暫しがうちの御宥免。

小山　もし香盒の出ぬ時には。

鬼貫　わいらが身の上。

軍藏　死支度をして待つてお居やれ。ハ、、、。

官藏　預かり置いたるその谷地、三つの物を一つにされ、歸るとは、ハテ、よい見世物でござるわえ。

軍藤　立會ひが濟んだからは、キリ〱御前を下がらつし

やい。
内記　然らば退出仕りませう。
鬼貫　待て兩人、其方達には、まだ用がある。アレ、消え殘つたる雪のあまびで、一獻酌んで物語らん。鬼貫に續いて奥へ參れ。
兩人　畏まりましてござりまする。
鬼貫　方々こなたへ。
皆々　先づ入らせられませう。
ト管絃になり、鬼貫、先に、初風、小山三、内記、思ひ入れあつて奥へ入る。
官藏　軍藤次どの、東山どのより鶴壽丸へ、讓られし御手洗の香盒、高倭院が首尾よく手に入れましたかな。
軍藤　成る程、まんまと奪ひ取り、某まで持參いたしたが、この香盒の不思議には、雀となつて奥州より、この都まで飛び來り、臺盤所の飯をはみし、實方の靈魂殘り、ややもすれば雀を集むる一つの怪異。滅多な所へ置かれもせず、これ此やうに肌身離さず懷中いたして罷りあるて。
ト袱紗に包みし香盒を出して見せる。
官藏　イカサマ、實方卿奥州へ左遷の折、加茂の橋本へ殘されしとあるその香盒。執念の殘つて、矢ツ張り今も雀を集めると申すは、不思議な事でござるな。
軍藤　名古屋親子、石堂内記が詮議して居れば、持つて居るは危ないもの。どこぞへ隱して置きたいものだ……オオ、幸ひ〳〵、この寒竹の石臺へ、埋めて置きやア氣は付くまい。
官藏　成る程、こりやアようござらう。ちつとも早くおツ隱さつしやい。
ト官藏、あたりを窺つて居る。軍藤次、この石臺の中へ香盒を隱し
軍藤　これでよい〳〵。萬事は奥にて、官藏どの。
官藏　仁木どの、ござれ。
軍藤　イザ、お來やれ。
ト合ひ方になり、兩人、奥へ入る。とドロ〳〵になり以前の雀夥しくこの寒竹の石臺へ群がり集ると、障子の内にて
葛城　鳴子引、田毎の風に靡きつゝ
伴左　なみよるくれの
山三　村雀かな。
ト唄になり、障子引上げる。三人出る。伴左衛門、山三、兩人長上下。眞中に葛城、三方に掛け物を載せ、

持つて居る思ひ入れ。

葛城　お二人樣、アレ、あの雀を御覽なされましたか。

伴左　誠や揚寳は、病雀を養つて白くわんを得たり。

山三　王祥は孝感に依つて數雀その幕に集まる。

葛城　雀は短尾の小鳥なり、簷の瓦の間にあらで

伴左　藩籬の元に樂しみを極め

山三　雪間に漁るその風情。

葛城　ても、眺めある

三人　景色ぢやなア。

ト思ひ入れ。鳴り物打上げる。

伴左　なんと元秋どの、御覽なされい。梅の盛りも稍ふけて、櫻が枝に火を灯す、いま如月の折に望み、なんと珍らしい雪ではござらぬか。

山三　左樣でござる。それゆゑ拙者は、賴兼公の伯父君樣、鬼貫公へ時候のお伺ひに推參仕つてでござる。其許には兼ね〳〵の、お約束でござるかな。

伴左　左樣でござる。今日の雪を幸ひに、鬼貫公のお茶を下されんとの事。伴左衞門も好む道でござれば、早速參上いたすでござる。時に承りたいは、山三どのゝ御内證葛城どの、この北山の御殿へは、何御用あつてお上がりなされたぞ。

葛城　ハイ、私しは鬼貫さま、兼ねて土佐の光起どのをお賴みなされまして、島原の傾城三浦屋の太夫職、高尾の君の繪姿を、お畫かせなされしこの掛け物。幸ひ今日のお茶の湯に、お掛けなされんとの事ゆゑ、持參いたしましたわいなア。

伴左　その儀は先達て、承り及んだる太夫高尾が繪姿、土佐の光起の筆とは、何よりのお物好き。後刻拜見いたすでござらう。

山三　時に伴左衞門どの、伯父君鬼貫さまには、その島原の傾城高尾に、事ない御執心との事でござるが、いよいよ左樣にお噂もござるかな。

伴左　成る程、鬼貫公には高尾の君に、お心をかけられ、忍び〳〵にお通ひ路、現を拔かしてござれども、宿々事の下紐も、又と思ふ男ならでは解かぬとの事。それゆゑ、鬼貫さまにも、當時その事のみと見えまする。

山三　併しながら、鬼貫さまの奧方は、管領職のその一人、山名宗全公の御息女樣、もしも鬼貫さま、より〳〵遊里へお通ひなさるゝなどゝ申す事聞えましては、お家のお爲になるまいではござらぬか。

伴左　そりやア、お云やるな。奥方は奥方、浮かれ女は浮かれ女、高がお慰みになさるゝ事。鬼貫公の御意に叶つたる太夫高尾、妾てかけになされても大事ござらねども、何を申すもその高尾には、深間がござつて、鬼貫公の思し召しにも任せぬが、なんと氣の毒な事ではござらぬか。

山三　ムウ、左樣ござれば高尾には、深間とやらがござるとな。

伴左　コレ〳〵山三、モシ、深間とやらとはどうでござる。其許にはその以前、只今の御内證葛城どの、まだ上林にて全盛の折柄、通ひ召されたではござらぬか。太夫高尾も深間がござるて。

山三　そりや何者でござるな。

伴左　外でもござらぬ、太夫高尾が深間と申すは、鬼貫公の甥君、御家督の頼兼公でござる。

葛城　エヽ、そんならなんと仰しやります。アノ島原の高尾どのは、頼兼公のお相方ゆゑ、鬼貫さまのお心に、任せぬとの事でござりますか。

伴左　左やう〳〵、取りも直さず、この伴左衛門を嫌ひ召されて、それなる山三どのと夫婦になられし葛城どの、マア其やうなものでござる。

山三　さてこそ某が推量に違はず、鬼貫公と頼兼公の御仲のふさわしからぬは、傾城高尾より起りし事か。その虚に乘つて佞人輩、足利のお家を騷動させんと、事を企むは必定。ハテ、情ない事ぢやな。

伴左　元秋、扣へ召されい、鬼貫公へ荷擔人なし、事を企らむ佞人とは、そりや何者の儀でござる。

山三　伴左衛門どのには、異な事をお咎めなさるゝ。それぞと姓名は申さずとも、お家の騷動を好みまする、奸曲邪智の族がござるて。

伴左　そりや何者でござる、伴左衛門承らう。

山三　左樣に尋ね召さるゝなら、明らさまに申さうか、

伴左　承らうか。

山三　しかと左樣か。

伴左　なんと。

ト伴左衛門、山三、刀に手をかけて詰め寄る。葛城、驚ろき中へ入り

葛城　モシ、これはマア、どう致した事でござりまするぞ。伴左衛門さまには鬼貫さまの、お茶に召されたではござりませぬか。連合ひには鬼貫さまの、御機嫌伺ひにお上がりなされたではござりませぬか。それにマア、あられ

もない御挨拶。マア〳〵、お扣へなされませいなア。
山三　鬼貫公に取入り、頼兼公鶴壽丸さまの、御身の仇と
なるべき伴左衞門が胸中、一物あらん。
伴左　汝一人、忠臣を面に顯はし、心正しき、身共に對し
て、侫人などゝは、奇ッ怪千萬。
山三　何がなんと、
伴左　推參な。
ト詰め寄る。
葛城　コレ申し。
伴左　ム、。
山三　ハ、。
伴左　ム、。
山三　ハ、。
兩人　ム、、ハ、、。いかい白痴。
ト兩人、笑つて思ひ入れ。
葛城　そんなら今のは、御座興でござりますかえ。
山三　座興でなうて、どうするものぢや。
伴左　山三と伴左衞門が、口論に及んでよいものか。
山三　何やら味な話しになつて、免さぬの推參なのと申し
たは、御免々々。

伴左　左樣仰せられては面目次第もござらぬ。お互ひ〳〵。
葛城　わたしや又、本當の事かと思うて、悔りしたわいな
ア。
兩人　なにサ〳〵。
葛城　ヤレ〳〵、それで落ちついたわいな。
山三　伴左衞門どのには、前の武將より、牛王吉光のお刀
御拜領、東山のお家に於て、誰れ肩を並ぶべき者もない
當時の一人。なか〳〵拙者などが、同席いたすも畏れ入
つてござる。
伴左　これは〳〵、御挨拶でござる。山三どのには義政公
より、刑部太郎の御印籠、拜領と承つてござるが、未
だ拜見仕らぬ。只今御所持でござるかな。
山三　左樣でござる。朝夕大切に仕り、肌身も離さず、所
持仕り居りまするて。
伴左　然らば拜見を願ひませうか。
山三　お易い儀でござる。イザ〳〵、御覽下されませう。
ト腰の印籠を出して伴左衞門へ見せる。
伴左　これは〳〵忝ない。ドレ拜見仕らう。
ト扇を開き、下に置き、その上にて印籠を見る。
承り及んだる刑部太郎の御印籠、蒔繪はしをらしき花

享和三年二月再演繪番附

がつみ、緒〆は珊瑚珠、絶品々々。根付けはちやらんの鴛鴦。さて／＼よう彫りましてござるな。

山三　名にしおふ義政公御秘藏の御印籠、何から何までお物好きではござりませぬか。

伴左　誠によい折柄、拜見いたして忝なうござる。隨分ともに御大切になされい。

ト印籠を戻す。

山三　悴小山三へ讓りまするに、何よりの品でござりまする。

ト云ひながら頂き、また腰へ提げる。

伴左　時に元秋どの、春とは申しながら、雪の降りました所爲か、なんと寒い事ではござらぬか。

山三　如何にも、時ならず殊の外感じまする。サア／＼、火鉢を差上げませう。

ト火鉢を出す。

伴左　これは／＼。なんと山三どの、追ッつけお茶の下されうが、それより前に雪消しに、一献たべたいものでござるな。

山三　御酒よろしうござりませう。拙者も今朝より相詰めましてござれば、少々欝散いたしたうござる。コリヤ葛城、お賄ひへ參つて、御酒を願うて參れ。

葛城　モシ、それには幸ひな事がござんすわいな。鬼貫さまの奥樣より、頂きましたる酒がござりますわいな。

山三　取敢へず御酒があるとは、何より／＼。サア、これへこれへ。

葛城　ハイ／＼。サア／＼、お一つお上がり遊ばしませ。

ト銚子杯を持つて出て、伴左衞門が前へ置く。

伴左　シタリ、流石は元秋どのゝ御内證、葛城どの、事に馴れたる銚子杯、伴左衞門も、こりや一つ下されずばなりますまいか。

葛城　サア／＼、お一つお上がりなされませ。お酌はわたしが致しませう。

伴左　これは／＼忝ない。然らば慮外ながら、お頼み申さうか。

葛城　サア／＼、お出し遊ばしませい。

ト葛城、酌をする。伴左衞門、一つ受けて

伴左　イカサマ、斯樣に山三どの、葛城どのと交りまして一献たべますれば、その以前島原の揚屋に於て、雪見を致した遊興を思ひ出しまして、一入よい樂しみではござらぬか。

山三　左やう／＼。
伴左　その折柄葛城どのに、斯く申す伴左衞門。度々通ひ口說きました儀もござつた。ハヽヽ、斯樣な事は申さぬ事でござつた。慮外ながらこの杯は、其許へ進上仕りませう。
山三　頂きまするでござりませう。
伴左　サア／＼、慮外ながら。
山三　なんの／＼。
ト杯を取上げる。葛城、酌をする。
葛城　サア／＼、お前もお一つお上がりなされませい。
ト注ぐ。山三、一つ請けて
山三　伴左衞門どのヽお杯、一つ請けましてござる。
伴左　これは／＼忝ない。とてもの事に、なんぞお肴を進上いたしたい。お待ちなされい。
山三　お肴とは忝ない。
伴左　折に觸れたる口取りには、幸ひ／＼、雪間に漁るあの小鳥、燒き鳥にして進上いたさう。
トあたりを見て、有り合せたる弓矢を取つて射ようとする。
山三　伴左衞門どのには、小鳥狩がお好きぢやさうな。

伴左　左やう／＼。拙者が生國は、美濃の國不破の關。幼少たる砌り、鷄籠山に於て小鳥を射んと、深く分け入り、暮れに及んで道に迷ひ、既に狼の爲に命を失はんと致せしが、只今の帶したる、牛王吉光の刀を以て、二太刀刺し通し、存命なして立歸りし伴左衞門。天命を知る齡に傾き、未だ殺生を好みまする。イヤ、一羽射てお目にかけん。
ト雀を射ようとする。ドロ／＼にて、拳すくんだる思ひ入れ。
射術は勿論、舊年の手練、小鳥を射んと覘ふところ、自然と拳の定まらざるは、こりやどうだ。
山三　弓は魔障を破却するの神器なり、明士にあらんずは帶すとも、なんぞ利を得んや。重勝ほどの武士が、引き絞つたる手前を忘れ、射る事ならぬこの場の不審。世にも稀代の有樣ぢやなア。
伴左　察するところ寒竹の石臺、この土中にこそあれ。
トまた射ようとする。ドロ／＼にて、苦しみ、持つたる弓矢を取落す。この時、懷中より一通を落す。山三、これをソツと取つて袂へ入れる。伴左衞門、やうやく心付きたる思ひ入れ。

伴左　俄かに持病差發つて、眩暈仕つたさうな。暫らく休息仕らう。
山三　然らば拙者は、御前へ罷り出まするでござりませう。
伴左　その儀は罷りなり申さぬ。
山三　拙者は御前へ叶ひませぬか。
伴左　義政公より若君へ、お譲りありしところの御手洗の御香盒、紛失なせしは盜賊の仕業。それと在所の知れるまでは、お疑ひのかゝつたる山三親子、鬼貫公の御前へは叶はぬ。キリ／＼お次へ立ち召されい。
山三　お家の重寶御手洗の御香盒、紛失なせしが越度となり、アノ御前へは叶ひませぬか。
伴左　如何にも。
山三　ヘイ。
伴左　在所を求めて差上げ召されい。山三どの御夫婦、後刻。
ト唄になり、伴左衛門、奥へ入る。時計の音する。これにて下座より、小山三、出て來り
小山　親人樣、これにお出でなされまするか。
葛城　其方は小山三かいの。サア／＼、爰へおぢや／＼。
山三　ムウ、伜小山三。して、谷地繩張りの儀は如何いたした。
小山　親人樣へ申し上げまする。丹波丹後の兩國を詳しく繪圖に認め、八千石のその高を、三分一に仕り、その二つを親人へお預け、殘る一つを無理之助どのへ預けられんと承りしところ、最前鬼貫公の御前にて、思ひの外違變いたし、その一つを親人へ預けなされ、殘る二つを無理之助どのへ預けられんとの仰せ渡されでござるゆゑ、親人樣の仰せの通り、その一つを預かり奉り、事なく相濟みましてござりまする。
山三　難題と知つて云ひ渡さるゝ難題、違背に及ばゝその時こそ、某を罪に取つて落さんと、兼ねて企みし谷地の繩張り。罠にかけるを知つたるゆゑ、預かり置いたる八千石を、殘らすなりとも相渡せと、其方へ申し付け、手段に乘らぬ某が計らひ、油斷ならざる企みではないか。
小山　まだその上、紛失なしたる御手洗の御香盒、在所知れねば我れ／＼親子が越度となり、申し譯立ちませねば、義政公よりお咎めを蒙むりまするとの、鬼貫公の御内意でござりまする。
山三　實方中將、陸奥へ左遷の折から、加茂の橋本へ殘し置かれたる、御手洗の御香盒。やゝともすれば執念止ま

つて、雀を集める稀代の香盒。尋ね求むる分別が、ありさうなものぢや程に、必らず〳〵氣遣ひ召さるゝな。

葛城　其やうには仰しやれども、その御手洗のお香盒の、もしや在所の知れぬ時には。

小山　斯く申す小山三が、親人樣に成り代り、申し譯には潔う、見事に切腹仕りまする。

葛城　これはしたり、どうして其方に其やうな事、させてよいものかいなう。義理ある仲のこの葛城、もしもの事があるならば、妾が自害するわいの。短氣な心を持ちやんなや。

山三　役にも立たぬ親子の挨拶。事に臨んで某が、一命を惜しまんや。謂れざるお身達の料簡、重ねて口を出すまいぞ。

葛城　ハイ、左樣ならば私しは、持參いたせしこのお掛け物。鬼貫公へお上げ申しませうか。

ト山三、以前の文を出して

山三　葛城の君へ岩はしより。

葛城　モシ、その文は。

山三　見知りがあるか。

葛城　サア、それは。

山三　葛城、こなたへ。

小山　先づお入りなされませう。

ト唄になり、山三、葛城、小山三、奥へ入る。直ぐにてんつゝになり、花道より、南都正庵、醫者の拵らへ、後より、團平、草履取りの形にて、風呂敷に包んだる藥箱を手に持つて出て來り、花道にて

正庵　アヽ、降つたる雪かな。それ藪醫者は鵞毛に似て飛んで歩き

團平　供は看板を着て二百取ると云へり。

正庵　とつけもない。二月へ入つてこの大雪。病もみんな體の中へ、氷りついて居ると見えて、病人が一向ない。誠に塵功記と云ふ書物の内に、天道人を殺さずと出て居るが、此やうな事では、天道醫者殺しと云ふもの。さりながら、團平喜べ。どういふ病人があるか知らぬが、鬼貫さまのこのお屋敷から、見舞つてくれいとの文通。もしこの病人に匙が合へば、身代を起すと云ふもの。どうぞむづかしくない病氣なればよいが。

團平　左樣でござりまする。モシ、旦那え、わたしやアお宿で承らうと存じましたが、あんまり氣の毒さに承りませぬが、先日お藥を遣はされました、さわらぎ町の

正庵　あの肴屋の病人は、おれがかゝるとピン〳〵して居たものが、たうとうあがつたさうな。
團平　アノ柳の馬場の飛脚屋の狀配りは、どう致しました。
正庵　あの飛脚屋も、おれが藥で、たうとう息ついてしまつたわえ。
團平　二條新地の左官屋わえ。
正庵　あの左官屋も、一廻りでこねたさうな。
團平　ついぞあなたのお藥で、本腹してお禮に參られた病人衆もござりませぬが、こりやマア、どう致した事でござりまする。
正庵　成る程〳〵、匙と云ふものは、合はぬ時には牛若の千人殺し、また合つた日には湯灌場で、藥を盛つても驗を見せるが廻り合せ。果報は寢て待てと云ふに依つて、物も食はずに待つて居るのぢや。サア〳〵、斯うして居るうちも、肌薄で雪風が身に浸み渡る。團平參れ。
團平　サア、お出でなされませ。
ト舞臺へ來り
正庵　南都正庵でござる。お見舞ひ申す。どなたぞお取次を頼み存ずる。

官藏　心得てござる。ドレ〳〵。
ト奥より官藏出て來り
これは〳〵正庵老には、ようこそ〳〵。この寒いのに御大儀千萬。最前から鬼貫公にも、お待ち兼ねでござる。サア〳〵、御前へお通りなされい。
正庵　昨日の御文通には、御病用との事でござるが、如何でござるな。
官藏　委細の事は、御前に於てお聞きなされい。某に續いて奥へ。
正庵　御案内をお頼み申しまする。
官藏　斯うござりませう。
正庵　團平參れ。
團平　畏まりました。
ト管絃になり、官藏に付き添ひ、正庵、團平、奥へ入る。と下座より、石堂内記、白木の箱を抱へて出て來り
内記　頼兼公鶴壽丸さま、この御二方樣の爲には、鬼貫公は現在の伯父君。如何なる事にや、お家の騷動を好まれ、折もやあらば鶴壽丸を、失ひ奉らんとの企てある由。聞きしに違はず、この器は、頼兼とあるこそ訝かしきこ

の箱。中を檢めて。

ト箱を開ける。中より願書と藁人形出る。

ヤ、これこそ若君を調伏なしたるこの人形。ても恐ろしき鬼貫どのゝ企み。何にもせよ、願書諸とも室町の館へ持參なし、男之助へも斯くと告げん。ソレ。

ト箱を抱へて花道へ行きにかゝる。後へ、奴二人、窺ひ出て取卷き

兩人　動くな。

内記　こりやア、わいら、石堂內記をなんとする。

奴一　その器こそ調伏の人形、願ひの筋は知らねども、渡してやつちやアならぬから、おいら二人に渡して行け。やだアと吐かしやア手をかけて、物の見事に奪ひ取るぞ。

奴二　早く往生すればよし、四の五の吐かしやア腹切りだ。鬼貫さまのお館を、辨まへもなく身を知らず、手向ひひろぎやア繩かけるが、キリ／＼その箱

兩人　渡すまいか。

内記　尋ね求めしこの願書、わいらに渡して詰まるものか。そこ押ッ開いて通せばよし、妨げひろぐと撫切りだぞ。

兩人　その箱渡せ。

内記　ならぬ。

兩人　渡せ。

ト立廻りあつて

三人　ドッコイ。

トこれより誂らへの鳴り物になり、よろしくバタあつて、トヾ內記、兩人を見事に切り倒し、箱を抱へ、一散に向うへ駈けて入る。と直ぐに管絃になり、奧より伴左衞門、初風、出て來り

初風　伴左衞門さまへ申し上げまする。追ッつけ鬼貫公にも、お逢ひなさるゝとの事でござりまする。それまでのうち御挨拶に參りました。御用もござりまするならば、何なりとお心措きなう、仰しやつて下さりませ。

伴左　これは／＼、殘る方なき鬼貫公の仰せつけられ。殊に物和らかな女中方のお取持ち、一段喜ばしう存じまする。

初風　ほんに伴左衞門さまを、お堅いお方ぢやと思うたれば、見かけと違うて今のお詞、大抵や大方、粹なお方さんではあるわいなア。

伴左　有やうに申せば、拙者女がきつい好物。打寬ろいで暫らく話しませうか。

初風　御存じの通り、世間を知らぬお屋敷者。野暮ぢやと

云うて笑はれまするが、ほんに氣の毒でござりますわいな。

伴左　なんの〳〵、當世は色里の女子より、お屋敷方の女中衆が誠の大通。斯く申す伴左衞門、未だ妻もござらねば、何卒相應なる緣もあらば、申し入れたう存するが、なんとお世話なされて下さるまいか。

初風　そんなら伴左衞門さまには、まだ奥樣はござりませぬかえ。

伴左　左やう〳〵。

初風　其やうに仰しやれども、どこぞに歷とした、お方があらうわいな。

伴左　誓文〻〻、首を提げらるゝ法もあれ、未だ獨身で罷り在る。なんと取持つては下さるまいか。

初風　そりや、モウ、あなたの仰しやる事でござりまするに依つて、お取持ちは致すまいものでもござりませぬがマア、お心當りは、どなたでござりまするえ。

伴左　サア、それは。

初風　仰しやつて御覽じませ。

伴左　身共が執心と申す、その女中は。

初風　どなたでござりまするぞ。

伴左　サア、それは。

初風　仰しやつて御覽じませ。

ト伴左衞門、扇を口へ當て、云ひ兼ねる思ひ入れ。

伴左　斯樣いたさう。認め參つたる艶書にて、その人の名をお目にかけうか。

初風　そんなら、それがようござりまする。お書きなされたその文を、早うお見せなされませいな。

伴左　ドレ〳〵、お目にかけようか。

ト懷中を探し

合點のゆかぬ。最前この所まで懷中なしたるあの一通、いづれにて失ひしや。人手へ入つては云ひ譯もなきあの艶書。慥かに爰に於て。

トあたりを尋ねる思ひ入れ。奥にて「鬼貫公お入り」と呼ぶ。

初風　最早鬼貫さまのお入り。左樣ならば伴左衞門さま、後程お目にかゝりませう。

ト管絃になり、初風、奥へ入る。と又「鬼貫公お入り」と呼ぶ。この管絃にて、正面の障子を引上げる。此うちに以前の女郎の繪の掛け物を掛け、風呂を飾り、茶の湯道具一式飾り附け、鬼貫、袱紗を敷き、茶碗を持

つて居る。伴左衞門と顏を見合せ

伴左　あなたは鬼貫公。

鬼貫　不破の伴左衞門重勝。

伴左　ハツ。

鬼貫　今日の茶の會は、人に與ふる茶にあらず、斯く云ふ鬼貫が肺肝洗ひ、其方へ與ゆる某が手前。イザ、服加減のお見やれ。

伴左　ハツ。鬼貫公の肝肺を洗ひ給ふお茶ならば、某も心腹を洗つて下さるべし。

ト茶碗を受取り、平伏して呑んでしまひ

鬼貫　伴左衞門が挨拶を聞いて、亭主も甚だ感悦いたした。有り難うござりまする。

伴左　お物好きは申さずとても、東山どのゝお好み、取分けて今日のお掛け物、傾城の姿繪を掛けられましたが、定めてこれには

鬼貫　仔細のある事。

伴左　左樣でござりませう。伴左衞門へ仰せ聞けられ下されませうならば、有り難う存じ奉りまする。

鬼貫　この傾城の姿繪は、島原に隱れなき。三浦屋の太夫高尾が姿繪。なんと美しいものではないか。物云はず笑はずとても鬼貫が戀人、手活けの花と詠めんと、夜毎夜毎に通ひしところに、賴兼めにさへられて、逢ふ事ならぬこの鬼貫。賴兼こそは戀の仇、何卒彼れを失はんと、立浪灘藏、黑雲林八と云ふ惡者を付け置き、途中に於て殺らしてしまひ、太夫高尾を我が手に入れんと、思ひ凝つたる某が胸中。其方へ話すも面目ないわえ。

伴左　御尤もなる御憤り。立浪黑雲二人の者を

鬼貫　賴兼へ付け置き、途中に於て。

伴左　コレ‥して、その上の御所存わな。

鬼貫　當時賴兼が行跡を見るに、婬酒の二つに長じたれば足利家の相續心元ない。鶴壽丸未だ幼少、毒害なしておッ殺せば、この鬼貫は寬平法王、大國を以て報ぜんが、我れに與みする心はなきか。伴左衞門、なんと。

伴左　こは有り難き鬼貫公の嚴命。如何でか背き申すべき。そつともお氣遣ひあられまするな。

鬼貫　然らばこれへ血判いたせ。

伴左　ハツ。

ト血判をして鬼貫へ差出す。

鬼貫　過分々々。その一卷は、卽ち汝へ預け置く。ナ、合點か。

作左　畏まつてござります……して、毒殺の御用意は。
鬼貫　誰れかある。正庵をこれへ伴へ。
軍藤　心得てござる。
　ト管絃になり、下座より軍藤次、正庵を伴つて出て來る。後より團平、藥箱を持つて出て、そこへ置いて柴垣の蔭へ扣へ居る。
あれに御座なさるゝは鬼貫公。イザ、お目見得。
正庵　ハツ、思ひも依らぬ今日のお召し。御病用の趣きを仰せ聞けられ下さりませう。
軍藤　鬼貫公の御用と云ふは、外でもござらぬ。
作左　コリヤ〳〵仁木、大切な儀でござれば、他言いたすまいと云ふ、神文を取り召されい。
軍藤　イカサマ。ドレ〳〵。
　ト硯箱と牛王を持つて出て
サア、正庵老、鬼貫公のお頼みの儀、他言いたすまいと云ふ、神文の書き召されい。
正庵　何事かは存じませぬが、お歴々のお頼み。神文認めまするでござらう。
　ト牛王へ神文を書き、指を切つて血判する。
して、お頼みの樣子は、如何でござるな。

鬼貫　出來た〳〵。今日其方を、この所へ招き寄せたる事、餘の儀でない。何卒毒藥を調合なしてはくれまいか。
正庵　エヽ。
　ト悔りする。
鬼貫　毒が盛つてもらひたい。
正庵　仰せにはござりますけれど、醫者の身に取りましては、人を助けまするこそ本意。人を殺しまする毒藥の儀は
鬼貫　ならぬと云ふのか。
正庵　その儀は。
鬼貫　仁木、ソリヤ。
軍藤　正庵覺悟。
　ト鐵砲を構へる。
正庵　ア、コレ〳〵、早まり召さるな〳〵。毒藥調合仕りませう。
鬼貫　しかと左樣か。
正庵　命に替る寶がござりませうか。早まり召さるな。
　ト鬼貫が前へ手を突き
恐れながら毒藥調合の儀は、やきがこうがまに、よせきさんせきを加へ、用ゆる時には、立ち所に命を絶つ。な

れども、よせきさんせきと申す藥種は、平常用ひまする藥なれば、所持いたしてござりますれど、何を申しても三蟲の毒藥なければ。
軍藤　その三蟲の毒藥は、鬼貫公の仰せにて、先達て取寄せ置いた。この三蟲揃ふ上は、毒藥調合おしやれ。
ト壺を持つて來り、正庵が前へ置く。
正庵　ムウ、如何にも三蟲揃ひまする上は、毒藥調合いたしませう。
ト管絃になり、正庵、よろしく毒藥調合の思ひ入れあつて
毒藥調合仕つてござりまする。
鬼貫　出かした。
正庵　して、この毒藥は、何者へお用ひなさるゝのでござるな。
鬼貫　鶴喜代丸へ服ませるのだ。
トこの時、垣の蔭の團平出て
團平　エヽ。
ト驚ろく。
皆々　これは。
ト皆々膽を潰す。團平、花道へ行かうとする。

鬼貫　下郎め、待て。
團平　ヘイ。
鬼貫　近う參れ。
トこれにて團平、本舞臺へ來る。
鬼貫　其方は何者ぢや。
團平　私しは正庵が召使ひ、團平と申す下郎めでござります。
鬼貫　ムウ、正庵が召使ひ團平とな。
團平　ヘイ。
鬼貫　只今の樣子を殘らず聞いたか。
團平　その儀は。
鬼貫　なんと。
團平　殘らず承りました。
鬼貫　仁木、ソリヤ。
軍藤　團平覺悟。
ト切りかゝる。立廻りあつて
團平　滅多な事なされまするな。只今の樣子、殘らず承りましたが、見た事は明き盲目同然、聞いた事はそれからそれまで、左樣な事を覺えて居りまするやうな下郎めではござりませぬ。何卒命はお助けなされて下さりまし

只今私しが相果てましては、親が二人ござりまする。此やうに見えましても、女房の外に妾が三人、兄弟が八人、居候ふが十六人、小舅ともに五十六人口。私しが脛一本にて過して居りまする。どうぞ命をお助けなされて下さりませう。

軍藤　大事を聞いた下郎め、助け置かれぬ。觀念なせ。

ト拔いて切りつける。手桶にてあしらひ、よろしく立廻りにて、團平、手桶にて受けとめ

團平　滅多に切られるやうな、下郎めではござりませぬ。

軍藤　觀念。

トまた立ちかゝる。

伴左　仁木、扣へ召されい。

軍藤　でも。

伴左　ハテ、扣へ召されい。

ト立廻りにて、團平を中へ挾み、軍藤次、下の方へ行く。伴左衞門、スラリと拔いて見得あつて

下郎め動くな。一大事を聞いた科人、やわか命を助けんや。それへ直れ。

團平　すりや、どうあつても。

伴左　くどい。

團平　へイ。

伴左　鬼貫公兼ねて御所望ありし、牛王吉光の刀、一大事を聞いたる下郎め、仇に命を取らんよりは、彼れが生胴を試して御覽に入れん。下郎め、それへ直れ。

團平　すりや、どうあつても下郎めが命を。

伴左　くどい／＼。

團平　へイ。

トこれより眞下に直つて

裸で生れて裸で死ぬ、男は裸百貫だ。イザ、すつぱりと遊ばされませう。

ト伴左衞門、切らうとして、よろしく思ひ入れあつて

伴左　命は助けた。

團平　エ、。

伴左　イヤ、一命は取る。

團平　なんと。

伴左　一大事を聞いたる科人、命助けるその代りに、伴左衞門が頼みたき仔細があるが、頼まれてくれうか。

團平　樣子は何か存じませぬが、事に依つたら

伴左　頼まれるか。

團平　マア、仰しやつて御覽じませ。

ト伴左衛門、懐中より連判狀を出し、團平に見せる。團平、ムウと思ひ入れ。伴左衛門、團平が首へ刀を當て

伴左　今日只今鬼貫公へ、お味方仕つた下郎め、汝が大丈夫の魂ひを見屆けた。その上は、イザ血判。

ト團平、思ひ入れあつて

團平　お硯。

ト軍藤次、硯を出す。これにて團平血判して

イザ、血判仕つてござりまする。

伴左　出かした。

團平　して、お頼みの様子は。

伴左　いま汝が承つた毒薬、鶴壽丸へ。

ト思ひ入れあつて

もし露顯なさば、その時汝を引出し拷問にかける。その時の白狀には、この毒殺は名古屋山三、荒獅子男之助兩人の仕業なりと白狀いたせ。山三男之助兩人さへ亡き者ならば、東山は鬼貫公。申さば一大事の役目、仕負ふせるものならば、武士に取立て大祿を得させん。嫌と云へば命がない。二つに一つの返答ぶて。下郎め。ナ、なんと。

團平　血判の上は、毒薬の科人名古屋山三、荒獅子男之助と白狀仕りませう。

伴左　しかと左様か。

團平　命にかけて。

ト伴左衛門、思ひ入れする。

軍藤　下郎め、捕つた。

ト團平、尋常に繩かゝる。

伴左　鬼貫公の一大事を聞いたる下郎、命助けて敵を計る謀り事。下郎めに繩かけましてござりまする。

鬼貫　伴左衛門出かした。正庵、これへ。

正庵　ハツ。

ト正庵、側へ行く。鬼貫、一札を書いて正庵へやる。正庵、取つて見て

ナニ〳〵「毒薬調合の上は、大祿を宛て行ふものなり、正庵老へ、鬼貫判」有り難うござりまする。

鬼貫　下郎め、引立て召されい。

軍藤　下郎め、立て。

ト管絃になり、軍藤次、團平を引立て奥へ入る。正庵、薬箱を持つて向うへ入る。伴左衛門、鬼貫、あと見送りて思ひ入れ。この時、奥より、お通、ツカ〳〵と出

て來る。兩人、ハツと思ひ入れ。
鬼貫　待て。
つう　ハイ。
作左　近う參れ。
　ト お通、側へ來て思ひ入れ。
そちや何者ぢや。
つう　わたしや小鳥を商ひまする、商人でござりまする。
作左　なんぢや、小鳥を商ふ商人ぢや。ても美しい者ぢやな。まだ作左衞門も無妻で居るぞ。
　ト 思ひ入れあつて
近う參れ。
つう　ハイ。
　ト うぢ／＼して居る、
作左　近う參れ。
つう　アイ。
　ト 癪の發つたる思ひ入れにて、チツとこなし。
作左　そちや何としたぞ。
つう　ハイ、つかへが發りました。
作左　なんぢや。つかへが發つた。
　ト 鬼貫と顏を見合せ、目で知らせる。鬼貫、呑み込み

鬼貫　イカサマ、癪には好い藥がある。ドリヤ／＼。
　ト 藥を茶碗へ移し、作左衞門へ渡す。作左衞門、取つて
作左　コリヤ女、そちや仕合せ者ぢやわえ。御前よりお藥を下さるゝ。有り難う頂戴いたせ。
つう　ハイ、有り難うござりまする。
　ト 受取つて服まうとして取落し、茶碗を割る。
作左　大切なる御秘藏の井戸茶碗、打割りし不調法。助け置かれぬ。
　ト 刀に反りを打て立ちかゝる。後へ葛城、出て、立廻りにて支へる。
葛城、なぜ留め召された。
葛城　サア、御大切なる茶器を割りました科人は私し。さつぱりとお手におかけなされませ。
鬼貫　その女めをぶッ放せ。
作左　畏まりました。女め、覺悟。
　ト 切りかゝる。葛城、割れたる茶碗を集めて、作左衞門の目先へ差出し
葛城　筒井筒五つに割れし井戸茶碗、科をば我れがおひにけらしな。茶器を割つたる科人は私し。さつぱりと遊ば

せ。
伴左　筒井筒五つに割れし井戸茶碗。
葛城　科をば我れがおひにけらしな。
伴左　シタリ、器量がよければ心まで、井筒業平の古歌を引いて、女の命を助けんとは、伴左衛門、感心いたしてござる。
ト鬼貫へ向ひ
茶器を割りましたる科人は、伴左衛門へお預け下さりませう。
鬼貫　茶器を割つたる科人、助け置いては後日の仇。某は奥へ参つて、傾城の掛け地を肴に一献酌まん。女は其方にキッと預けたぞよ。
伴左　先づお入りなされませう。
ト唄になり、鬼貫、奥へ入る。伴左衛門、上の方にて莨のんで居る。
葛城　お通さん、どうしてマア此やうな姿で、爰へござんしたぞいなア。
つう　葛城さま、危ない難儀をお救ひなされて下さりまして、有り難うござりまする。私しが爰へ参りましたは、紛失なしたる御手洗の御香盒、詮議せんと姿をやつして、参りましたわいなア。
葛城　その香盒の在所が知れねば、山三どのゝ難儀。ともども詮議しやんせう。爰に居さんしては爲にならぬ。早う奥へござんせいなア。
ト目遣ひして
お通さん。
つう　葛城さま。
ト両人、こなし、合ひ方になり、お通、奥へ入る。
葛城　さらばわたしも、奥へ参りませう。
ト奥へ行かうとする。
伴左　科人待て。
葛城　エ。
伴左　茶器を割つた科人待て。伴左衛門が手にかける。これへ参れ。
ト葛城、思ひ入れして側へ寄り
葛城　茶器を割つた科人、さつぱりとお手におかけなさんせ。
ト思ひ入れ、伴左衛門、黙つて居る。
エ…サア、さつぱりとお手におかけなさんせ。
ト葛城が手を取つて

伴左　うせう。
葛城　エ。
伴左　屋敷へ引立て、茶器を割つた科人、存分に計らふ。
　うせう。
葛城　わたしにに
伴左　山三と云ふ夫がある。
葛城　それぢやに依つて
伴左　矢ッ張り惚れて居る。
葛城　まだかいな。
伴左　まだかいなア、とは葛城、つれないぞや。この伴左衞門は山三と買ひ論に負けて、武士道が廢つた。山三を打ち放し、刺し違へて死なうとは思へども、そこが色は思案の外。生き存らへて居るも、一度は手に入れようと思ふばつかり。葛城、返事はどうぢや。
　ト手を取る。葛城、困つたる思ひ入れ。
葛城　伴左衞門さん、それ程までに思うて下さんす、お芳志は嬉しうござんすが、お前の心が知れぬわいなア。
伴左　これ程までに生恥をかいた伴左衞門、心が知れぬとは。
葛城　サア、ぢやに依つて、お芳志は嬉しうござんすが、嘘ぢや。
伴左　大誓文。
葛城　イ、エ。
　ト頭振る。
伴左　頭を振るは嫌か。嫌なら茶器を割つた科人、身が手にかける。
葛城　心中が見えぬ。
　ト伴左衞門が手を取つて、小指をキッと見てこの指は。
　ト伴左衞門、ムウと悯りして、石臺にて指を切る。ドロドロ、雀集まる。伴左衞門、思ひ入れあつて
伴左　葛城、其方へ心中に指を切つた。伴左衞門が武士道はもう廢つた。葛城、返事をしてくりやれ。
葛城　嬉しうござんす。心中見た上は、お前の自由になるわいな。
伴左　そりや、ほんの事か。
　ト葛城へ抱きつき
　其方は、ほんに指を貰うてくれるか。
葛城　大事にかけて持つて居るわいな。して、そのお前の指は。

山三　ト兩人、指なきゆゑ、あちこちと見る思ひ入れ。この時、山三、後へ出て來り、指を鼻紙にて取上げ、二人が中へ入り

山三　葛城、其方の尋ねる小指はこれか。

葛城　エヽ。

　ト葛城、伴左衛門、思ひ入れ。

山三　但しこちらか。兩人ともに動くまいぞ。

伴左　改めて名古屋山三が女房葛城は、伴左衛門が貰つた。武士に女房貰ひかけられ、一分が立つまい。拔き合せて勝負しろ。サア、拔け。但し此方から拔からうか。サアサア、どうだ。

山三　これは伴左先生、どうでえす。それ程お氣に入つた女房葛城、くれろならくれろで濟みますわいの。女房葛城を、其許へ進上いたすぞ。

伴左　武士に女房貰ひかけられ、挨拶なしに嘲弄するか。サア、拔け〳〵。

山三　ハテサテ、只今申す通り、葛城は進上いたす。

伴左　怒りを面へも出さず、挨拶に及ぶ名古屋山三。しかと女房葛城を貰ひ申したぞ。

山三　進上いたした。

伴左　とても事に、去り狀を付けて貰ひたい。

山三　それには及びさうもないものでござる。

伴左　去り狀が貰ひたい。

葛城　山三どの、アノ本心に、わたしを去らしやんすか。

山三　人も知つた上林の葛城と山三が仲、どうして緣が切らるゝものぢやぞいやい。

伴左　詞が違ふとぶッ放すぞ。

葛城　本心に緣を切らんすか。

山三　夫婦の緣は切つて、今日よりしては身が妹となつて、若君樣のお乳人役を仕れ。

伴左　山三が女房葛城、若君樣のお乳人役とは、心元ない。

山三　名も變へて遣はさう。葛城、この印籠は我が君義政公より御拜領仕つた、刑部太郎が蒔繪の印籠。蒔繪は即ち花がつみ、陸奥の淺香の沼の花がつみ、かつみし人を戀や渡らん。今日よりしては淺香と改め、若君樣へお宮仕へを致せ。心得たか。

葛城　なんにも申し上げませぬ。そのお詞、如何にも若君樣のお宮仕へを致しませう。

伴左　花も實もある名古屋山三、妹ならば身が女房。キッと詞を番つたぞ。

山三　この印籠を義政公と思うて、若君様のお宮仕へ致せ。
葛城　畏まりました。模様は即ち花かつみ。
山三　かつみし人に
伴左　戀や渡らん。
山三　葛城ならぬ妹淺香、奧へおぢや。
葛城　アイ。
ト唄になり、山三、思ひ入れあつて、葛城の手を引き、奧へ入る。伴左衞門、思ひ入れあつて、呼子を出して吹くと、敷舞臺の内より、高慢院、毬栗、鼠坊主にて出て來る。本神樂、高慢院、思ひ入れあつて
高慢　伴左衞門さま。
伴左　コレ。
高慢　合圖の呼子は、御用かな。
伴左　高慢浣、今日只今鬼貫公へ、お味方なしたる某、毒藥を以て院壽丸を失なひ奉る。それより前に御寢所へ忍び込み、鶴壽君を只一刀に、合點か。
高慢　心得てござる。我が忍びの術と云つぱ、大玄谷神にへんまんなし、忍び入るには自在を得たり。所も去らず眼前に、この所に於て我が術をお目にかけん。
ト印を結ぶ。ドロ／＼にて、上の方へセリ下ろす。伴左衞門、思ひ入れ。
伴左　誠に稀代な術も、あればあるものぢやなア。
ト悠々と花道の方へ行く。後より山三、葛城、手燭を持つて出て
山三　伴左衞門待て。
伴左　エイ。
ト手裏劍を打つ。
山三　合點だ。
ト有り合せたる石臺にて受けとめる。仕掛けにて、石臺割れ、中より以前の香盒出る。葛城、これを取上げ
葛城　ヤ、こりやコレ、御手洗の香盒。
山三　忝ない。
ト兩人、よろしくあつて
伴左　まゝよ。
ト思ひ入れ、これにて出端の鳴り物になり、伴左衞門、悠々と向うへ入る。後シヤギリ。

幕

四建目　青柳の場　高尾丸の場

役名——足利頼兼。石川兵左衛門。尤道理之助。醫者、南都正庵。太鼓持ち、里十、同、多吉。仲居、おたけ。同、おとわ。同、おしな。同、おつち。同、おせな實ハ渡邊民部女房萩の戸。船頭、音。料理人、幸助實ハ土子泥之助。傾城、高尾。

本舞臺、三間の間、正面青柳の道具、向う見附け黒塗り骨障子を建て、軒に青柳と一字づゝ書きたる團子提灯を掛け、その外掛け行燈。平舞臺上の方に石燈籠、植込み、鐵砲垣、すべて物好きなる庭のかゝりよろしく取りつけ、爰に幕の内より二重舞臺。上の方に、頼兼公、羽織着流しの形にて扇を持つて、盃を引請けて居る。この脇に、兵左衛門、袴羽織の形にて扣へ居る。おやな、前垂れ仲居の形にて酌なして居る。おたけ、おとよ、おしな、おつち、同じく赤前垂れにて頼兼公を取卷いて居る。里十、多吉、羽織着流しの形にて扇を持つて當て振りに踊つて居る。音、やつし船頭の形にて吸ひ物臺を運んで居る。硯蓋、その外銚子杯臺、井鉢肴大分に取散らし、隅田川名所にて賑やかに幕明く。ト里十、多吉、無性に當て振りに踊つて縁より落ちる、

皆々　ハヽヽヽ。

女四　危ないわいな〳〵。

ト立ちかゝる。

頼兼　出かした〳〵。二人ながら振り事は、きついものぢや〳〵。

やな　それでも今、落ちかゝつた形と云ふものは

四人　ほんにをかしいわいな。

里十　なんだ、をかしい、

多吉　をかしいと云はれちやア、濟まない〳〵。

里十　これから矢ッ張りこぢつけて、おつこち踊りを所望ぢやが、合點か。

多吉　おゝさて合點だ。

トまた踊り地になり、里十、多吉、無性に踊つて、兵左衛門を浮かさうとして、いろ〳〵兵左衛門が側へ來り、こじつけ、トヾ兵左衛門が上へまた轉びかゝる。

皆々　ハヽヽヽ。
　ト笑ふ。兵左衞門、腹の立ちたるこなしあつて
兵左　コリヤ／＼、身共をなんと致す。殿の御前と云ひ最
　前よりの餘りの無禮。サア、もうよい加減に致さぬか。
　トこれにて白けて、兩人畏まり
兩人　眞ツ平御免なされませ／＼。
兵左　餘り不作法千萬な致し方ぢや。
　ト賴兼、こなしあつて
賴兼　コレサ／＼、兵左衞門、捨て置け／＼。
兵左　おやと申して、餘りと申せば、法外なるあの者ども。
賴兼　ハテ、これはどうぢや／＼。イヤモウ、野暮にはと
　んと困り果てる。あいらが此やうに踊り狂ふも、某が
　心を慰めんと思うて致す事ぢや。必らず叱るな／＼。
兵左　悉皆狂亂の沙汰でござりまする。
賴兼　イヤモウ。
里十　サア／＼、これよりは踊りを止めて、わつさりと酒
　酒。
多吉　酒この度の酒盛りは、酒のさの字は酒屋のさの字で、
　サアのさの字で、サの字が知れぬ。てんもちゝちもちゝ
　のやア。

　トまた浮かれ立つ。
兵左　もう洒落とやらは止めぬか。
兩人　ヘ、イ。
　ト兵左衞門、賴兼へ向ひ、手を突き
兵左　御前へ申し上げます。古へより酒計りなし、人酒を
　呑む、酒、酒を呑む、酒人を呑むと、彼れらが興に乘じ、
　御酒が長ずれば、お館へお歸り遊ばさるゝに遲刻と罷り
　なります。世俗に酒は氣狂ひ水と申せば、最早御酒は御
　容赦遊ばされませう。
賴兼　コレサ／＼、兵左衞門、どうしたものぢや。今日は
　この賴兼が、島原の太夫高尾を身請けして、山崎の別莊
　へ連れて行くのではないか。それゆゑ伴左衞門、皆の者
　も合點で、高尾といふ船まで造らせて、直ぐに爰から皆
　を連れて、その船に乘つて行くではないか。そんならい
　つそ、ならずと一つ過して、賑やかに面白う、座敷をせ
　うとは思はず、無用ぢやの止めいのとは、如何に年寄り
　なればとて、其やうな淋しい事は、重ねてから申すな…
　…なんと仲居ども、さうではないか。
　トおたけ、おやなと顏見合せ、思ひ入れあつて
たけ　サア、こちらも機嫌が惡いさうな。

やな　なんのマア、御前のお供を致しまして、これまで參りまするもの。どう致してお心に障りまする事を申し上げませう。承りまする事は、夫渡邊民部之助が申しつけまして

ト此せりふを消して

賴兼　アヽ、コレ〳〵、其やうな事を云うてくりやんな。この賴兼が高尾と二人、幾日も〳〵樂しんで、屋敷へとては歸られぬゆゑ、この身持ちでは義政公の思し召しに叶はぬの、管領への聞えが惡いのと云うて、ふつ〳〵耳やかましう、每日の意見諫言、其やうな事を知らぬ賴兼でもないわいの。アヽ、モウ、一人は白髮交りの侍ひ、一人は箸の上げ下ろしに、むづかしう云うて居る仲居なり、とんと欝いだ〳〵。どうぞしてくれぬかい〳〵。

ト賴兼、醉うたるこなしにて、鼻紙も、襟に掛けたる守り袋も取散らし寢轉び

サア〳〵、この高尾はどこへ行つたのぢやぞいの。早う呼んでたも〳〵。

たけ　ハイ〳〵、高尾さんは、いま風呂へお入りなさんして、身仕舞ひなされてゞござりますわいな。

とわ　もう今に高尾さんも、お出でなされませうわいな。

賴兼　サア〳〵、早う呼んでくれぬかい〳〵。

やな　モシ〳〵、御前樣、お守り袋が此やうに、お粗末になつてござりまするぞえ。

賴兼　イヤモウ、この守り袋の、此やうに粗末になるも、あの高尾を身請けして、別莊へ連れて行くゆゑの事。聞いてたも。昨日までも今朝までも、この守り袋の中へ、高尾が起證を入れ置いたゆゑ、大事々々と思うたが、もう身請けをすれば奧も同然。起證はあつても反古も同然。自體この守は、叔父御鬼貫どのより、この鶉の目貫を片し入れて下されたれど、これとてもなんの役に立たぬ、目貫の片し。此やうな物を襟に掛けて居るも、高尾が起證が有り難いゆゑぢや。なんと、人の心といふものは、いろ〳〵に變るものではないか。

兵左　憚りながら、叔父御鬼貫公なればこそ、お守り袋へ入れさせられたる、その目貫片し。定めて深い御樣子もござりませう。先づ〳〵隨分と、お大切に遊ばされまするが、よろしうござりまする。

賴兼　また堅いワ〳〵。まだ高尾は來ぬ事か。モウ、わし一人爰に居ても面白うない。サア〳〵、船へ行からではないか。

里十　それもようござりませう。斯う又見晴らした春の最中に屋形船とは、こりやア餘ツぽど新らしうござりますわいな。

多吉　それ〳〵、モウ、どうしても今から先は、水邊の事サ。野暮は土用のうちばかり、屋形船に施餓鬼でもするやうに乘つて見たがるが、また今日この頃のよい風に、屋形船に、互ひが思ひ合つた賴兼公と高尾の君、比翼連理の浪枕、搖られ流れて居たら、こいつも堪るまいぢやアないか。

賴兼　サア〳〵、その事ぢや〳〵。サア、船へ行から行かう。

しな　モシ〳〵、もう高尾さまにもお出でなされませう。

たけ　マア〳〵、お待ち遊ましませいな。

賴兼　イヤ〳〵、この賴兼が側に居もせぬ高尾、此やうな所に長居せうより、これから竹銘が所へ行てやらうか。但し船へ行つて、この川中の四ツ手を稼ぎする者を申しつけてやらうか。なんぢや〻ら、味な心持ちになつて來た。サア〳〵、行く風が立つて來た。サア、皆おぢや皆おぢや。

やな　マア〳〵、其やうな事を仰せられませずと、マアマア、お待ちなされませ。

ア、お待ちなされませ。

賴兼　イヤ〳〵、留めるな〳〵。

ト賴兼、無理に歸らう〳〵と口でばかり云つて、落ちついて居る。おやな、皆々、立ちかゝり留めて居る。此うち唄になり、奥より高尾、着流しの形にて、鼻紙を持つて出て來る。

四人　サア〳〵、高尾さんがお出でなされましたわいな。

やな　サア〳〵、御機嫌をお直しなされませいなア。

ト此うち高尾、賴兼が側へ坐り、煙草盆を引寄せる。賴兼、これを見て見ぬ顏して

賴兼　イヤ〳〵、此やうに腹が立つて來ては、爰に居ても面白うない。サア〳〵、兵左衞門、船はどうぢや〳〵。

兵左　へイ〳〵、只今申しつけましてござります。

賴兼　サア〳〵、そんなら行かう〳〵。

ト行かうとする。高尾、賴兼が裾を扣へる。

高尾　殿さん、待たしやんせ。

賴兼　イヤ〳〵、留めるな〳〵。放せ〳〵。

高尾　マア、聞きたい事がござんす。マア〳〵、お待ちなさんせいなア。

賴兼　コレ、高尾、この賴兼に聞きたい事とは。

高尾　わたしやまだ、島原の傾城でござんすかいな。
頼兼　知らぬわいの。
高尾　知らしやんせぬゆゑ、わたしが云ふのでござんす。モシ、殿さん、わたしや矢ッ張り傾城でござんすかいな。
頼兼　コレ、高尾、其方はおかしい事を云やるわいの。
高尾　そんなら、なんでござんすえ。
頼兼　知れた事、昨日までは島原の傾城、今日からはこの頼兼が、廓の内を根曳きして、山崎の別莊へ同道すれば、奧も同然。そりや云はずとも知れた事ぢやわいの。
高尾　サア、それ程知れた事ならば、なぜに其やうに腹立てゝ、物を云はしやんすぞ。
頼兼　なぜに〳〵。わしが腹で、わしが腹を立てるに、なんの其方の構うた事はない。云はいでもよい事を云うて人に腹を立たせたものぢや。重ねてからこの頼兼へ、何も云うてもらふまい……と云ふは嘘、有やうは其方の來やうが遲さに、今のやうに云うたのぢやわいの。
高尾　なんぼお前が腹立てゝ云はしやんしても、お前さんには、薄雲さんといふ、お嗜なみの色事があるゆゑ、わたしや面白うもござんせぬ。今日から殿さん、物云うても下さんすな……と云ふは嘘、ほんまの事は、いつまでも、あなたのお側を離れず、ひつたりと引ッ附いて居たいわいな。
頼兼　そんなら其方は、この頼兼が側を、眞實離れぬ心か。
高尾　すりや、殿さんにも、このわたしを、お側に置いて下さんすお心かえ。
頼兼　お心なればこそ、あの廓を根曳きしたではないか。
高尾　さう云ふお前のお心なら……ちよつと此方へ寄つて下さんせ。
頼兼　そんなら斯うか。
ト寄り添ひ、互ひに顏見合せ
高尾　アノ憎らしい。
頼兼　可愛らしい。
高尾　エヽ、モウ、どうせうぞいな。
ト頼兼に抱きつく。皆々、思ひ入れ。里十は、おやな、多吉は、おたけに抱きつく。兵左衞門、まぢ〳〵として居る。おやな、里十を突き倒し
やな　サア〳〵、これからワッサリと、御酒になされませなされませ。
トこれより皆々、云ひ合せの酒盛りになると、垂乳根の唄になり、花道より幸助、やつし着流しの形にて、

下駄を穿き、肩へ手拭をかけ、肴籠に鯛、小魚、大根、人蔘、いろ〳〵入れて提げ、片手に靑柳と書いたる團子提灯を提げ出て來る。後より南都正庵、やつし羽織に脇差を差したる藪醫者の形にて、小提灯を提げ出て來て、花道の中にて

正庵　モシ〳〵、ちつと物が問ひたうございます。

幸助　なんでございますな。

正庵　イヤ、このあたりに、靑柳といふ料理茶屋は、どれでござるな。

幸助　靑柳かえ。靑柳は、わしが行く所でごんすが。

ト提灯にて、正庵を、よく〳〵見て

どうか客のやうでもなし、何しに靑柳へはござりますな。

正庵　サア、わしが靑柳へ尋ねて參るは、なんでござる。さるお歷々樣が、島原の傾城高尾太夫を同道なされしとの事。その女中に用事あつて、尋ねて參る者でござります。靑柳のお人とあらば、幸ひの事、どうぞ案內しては下さるまいか。

幸助　コレ〳〵、その靑柳へは京のお客て、一昨日からの亂騷ぎ。なか〳〵こな樣たちがござつても、誰れも構ふ者はござらぬ。わしやこの通り生物を持つて居りますから、急ぎます。サア、歸らつしやれ〳〵。

ト行くを留めて

正庵　コレサ〳〵、さうではござらうが、是非その高尾太夫に用事がござるに依つて、どうぞ逢はせて下されい。偏へに願ひます〳〵。

幸助　ハテ、サテ、しつこい醫者どのだ。ア、、聞えた。お身樣のその形が目にかゝらないか。臭い物身知らずと、さう云ふなり形で、あの高尾太夫に逢はせてくれろも氣が強い。なんでもこなたは、斯う見たところが、錢貰ひか、いたぶりか、筋骨を拔かれないうちに、早く歸りやれよ。

正庵　ア、、コレ〳〵、必らず粗忽な事を云ひ召さるゝな。手前ことは、撞木町の焙烙長屋に居る、南都正庵といふ本道でござるぞ。なんのその、はしたない强請り者ではござらぬぞ。

幸助　それ〳〵、その撞木町の焙烙長屋が氣障だ。なんでも歸りやれ。歸りやアがれ。

ト正庵を突き倒す。正庵、起き上がつて

正庵　もう料簡がならぬわえ。どういふ事で突き倒したのぢや。云ふまいとは思へども、此やうな目に遭うたから

は云はにやならぬ。その頼兼どのゝ氣に入つて、お請け出しなされた、高尾が親の正庵といふ者ぢや。それにしの正庵を、強請り騙りのやうに惡口申すな。これからは、おれが方からそびいて行く。サア、あの青柳へうせ居らう〳〵。

幸公　コレヤイ、そんなけじめを食つて、おたまりがあるものか。どのやうに吐かしても、うぬがその一錢二錢の御合力といふやうな身で、高尾さまの親だとは、なんでも騙りに違ひない。この上にしつッこく吐かしやア、叩きのめすぞ。

正庵　サア、叩かれるなら叩いてお見やれ。高尾が親を、どうするのぢや〳〵。

幸公　どうするも斯うするもいらぬ。川の中へ叩ッ込んで水を喰はせてやるべい。サア、うしやアがれ。

ト正庵が襟髮を取つて、引摺つて來る。この時、内より、晉、駈けて出て來り、この中へ入つて

晉　コレ〳〵、おぬしやア幸公ぢやアないか。どうしたのだ〳〵。

幸助　聞いてくりやれ。此奴がこの形で、高尾さまの親だから、逢はしてくれと云つて、うしやアがつたが、なんと、飛んだいけッ太い奴ぢやアないか。

晉　ドレ〳〵、待ちやれよ。

ト提灯にて、正庵を見て

モシ〳〵、お醫者樣、お前は高尾さまの親御樣でござりやすかえ。

正庵　成る程、高尾が親と申すも、近頃面目なくござれども、南都正庵と申す本道でござる。

晉　よもや〳〵と思ふが、もしやひよつと高尾さまの親御なれば惡い程に、マア〳〵、待ちやれよ。

幸助　どうして〳〵、これがほんの親で、おたまりがあるものか。

正庵　決して僞はりは申さぬ程に、なんであらうと、先づ高尾に逢はせて下され。

晉　モシ〳〵、そんならわしが高尾さまに逢はせて進ぜませう程に、マア〳〵、爰に待つて居さつしやりませ。

ト正庵、こなしあつて

正庵　エヽ、有り難うござります。

晉　コレ、幸公、おぬしやアあのお座敷へ行つて、この樣子を話すがよい。

幸助　よし〳〵、そんならおれがさう云ふべい。思へば思

ばへ太い奴ぢやアないか。
ト幸助、吾、舞臺へ來て
幸助　モシ〳〵、ちッとお靜かになされませ。飛んだ者が參りました。
やな　そりや、どのやうな者が來たのぢやぞいの。
幸助　お聞きなされませ。あの高尾さまの親御だと申しまして、年の頃四十ばかりの、撫でつけの藪醫者が、みすぼらしい形で尋ねて參りましたが、なんとマア、飛んだ事ぢやアござりませぬか。
ト高尾、合點のゆかぬこなし。賴兼、思ひ入れ。
やな　そんなら、アノ高尾さまの親御ぢやと云うて、醫者衆が見えたかいの。
吾　なんでも逢はねばならぬ用があると云つて、あの表の鐵砲垣の側で待つて居ります。
やな　どうも合點のゆかぬ。マア〳〵、なんぢやあらうと、わたしが逢うて樣子を聞かうわいの。
トおやな、二重舞臺より下りて來る。あと白けて銘々煙草をのんで居る。
モシ〳〵、お前が高尾さんの親御さんかいな。
正庵　其許樣は、どなたか存ぜぬが、手前ことは高尾が父親でござる。承れば今晩、賴兼さまの御別莊へ請け出されて參るとの事。さすれば親子の對面いたす事も今晩限り、どうぞ一生の別れに、ちよつと挨拶が致したうござるに依つて、どうぞ逢はせては下さりますまいか。
やな　そんなら、なんと云はしやんす。賴兼公の御別莊へ高尾さんがお出でなさんすれば、高尾さんにも親子の挨拶もならぬと云はしやんして、それゆゑ尋ねてお出でなさんしたかいな。
正庵　左やう〳〵、今晩この暗いのに、子ゆゑの闇に迷ふとやら。九ツの年に別れましたるかの娘、どうぞ顏なりと一目見て、暇乞ひがしたうござりまする。ちよつとどうぞ逢はせては下さりますまいか。
トおやな、合點ゆかぬ思ひ入れあつて
やな　ほんに、其やうな事もござんせうわいな。そんならわたしが、高尾さまに逢はせて上げやう程に、ちよつとの間、そこに待つてお出でなされませ。
正庵　よろしうお願ひ申しまする。
トおやな、こなしあつて
やな　ハテ、高尾さんの親御さんで……あつたかいな。
ト高尾が側へ來て

サア、高尾さん、お前の親御さんぢやと云うて、尋ねてお出でなされましたお方があるわいな。ちよつとお逢ひなさんせいな。

高尾　どうも合點のゆかぬ。どうしてわたしが父さんが、斯ういふ所へ尋ねて見える筈はござんせん。どうも合點がゆかぬわいな。

兵左　イヤ／＼、兎角危ふきに近寄らずと申せば、左樣な者には、先づ／＼お逢ひなされぬがようござりませう。

やな　イエ／＼、さうぢやござんせぬ。もしも誠の親御さんかも知れぬゆゑ、マア／＼、ちよつとなりとお逢ひなされたがようござりまする。其うち御前には、また奧で一盞ぎやりませうか。

里多　それがようござりませう。

賴兼　イカサマ、それもよからう。先刻にから、何やらかやらで、座敷が滅入つて面白うない。コレ／＼、高尾、其方の親ぢやといふ事なら、ちよつと逢うたがよからうぞや。

高尾　そんなら、ちよつと逢うても大事ござんせぬかいな

賴兼　大事ないとも／＼。ハテ、假にも親といふではないか。又なんぞ用事があらば、心措かずとな、合點がいたか。高尾、必らず遠慮しやんな。

皆々　サア、入らつしやりませ。

ト賴兼先に兵左衛門、刀を持ち、里十多吉、仲居四人附いて奧へ入る。晋、幸助は下座へ入る。あと合ひ方。高尾、合點のゆかぬこなしにて正庵が側へ來て

やな　サア／＼、此方へお入りなされませ。

正庵　そんなら高尾に逢はれますかな。

やな　ちやつと今のうち、お逢ひなされたがようござんすわいな。

正庵　ヤレ／＼、それは忝ない。ドレ／＼、早う逢はせて下さりませ。

やな　サア／＼、此方へお出でなさんせいな。

正庵　ヤレ／＼、イカサマ、お世話になりまするな。

トおやな、煙草盆を出して

サア、緩りとお話しなさんせえ。

ト合ひ方になり、おやな、合點のゆかぬこなしあつて奧へ入る。高尾、こなしあつて

高尾　高尾に逢ひたいと云ふお方は、お前かえ。

正庵　左樣でござりやする。して、あなた樣は、どなたでござりまする。

高尾　わたしや高尾ごどざんすわいな。
　ト正庵、思ひ入れあつて
正庵　ヤア、そんならお前が高尾さまかえ。
高尾　アイナア。
正庵　ヤア〳〵、そんなら娘ぢや〳〵。ヤレ〳〵、大きうなつてくれたなア。コレ、高尾、わしは其方が親の正庵ぢや。其方が九つの年に別れ、逢ひたい見たい懐かしかつた娘。マア〳〵、病ひ氣もなうて、よう此やうに美しう、よい器量に成人してくれたなア。
　ト高尾、合點のゆかぬ思ひ入れにて
高尾　どうもわたしや合點がゆかぬわいな。わたしが父さんは、九ツの時に死なしやんしたと、親方さんの兼ねての話し。
　ト此せりふを、正庵、消して
正庵　オヽ、尤もぢや〳〵、その筈〳〵。親方どのに逢つて、この正庵が死んだと云うて置いて下されいと、頼んだ心はな、身貧に暮らす此やうななり形で、其方に逢うたら、定めて外聞が惡からうと思うて、この正庵は死んだ分になつて居たわいの。其方の爲には眞の親。ヤレヤレ、娘、おりや此やうな嬉しい事はないわいの。

高尾　エヽ、そんならなんと云はしやんす。わたしが爲には眞實の父さん、さういふ身貧なお前ゆゑ、今までわたしに逢はずに居て下さんしたか。勿體ない〳〵。九ツの年お果てなさんしたと、今日の今まで思うて居たに、ようマア尋ねて來て下さんしたなア。父さん、お懐かしうござんしたわいなア。
正庵　サア、おれも疾から尋ねようと思うたれども、其方は島原で、一と云うて二のない全盛の太夫職、高尾が親にも此やうな、見苦しい醫者があつては、其方の外聞にかゝはる事と、あの大門まで行きかゝつては戻り、九ツの年から十二年、現在娘はありながら、世間へ恥ぢて娘の顔、よう見ずに暮らしたも、元はと云へば貧の病ひ。親子の縁は切つても切れぬ肉親の其方、不思議に今日といふ今日名乘り合ひ、此やうな嬉しい事はないわいの。
高尾　わたしも幼ない時で、様子は知らねど、九ツの年に別れし父さんに、巡り合うたと思へば、此やうな嬉しい事はござんせぬわいな。
正庵　オヽ、さうであらう〳〵。
高尾　ほんに父さん、何は差措き、お前に話して喜ばす事がござんすわいな。

正庵　オヽ、そりやマア、何か様子は知らぬが、喜ばすとは耳寄りな事ぢや。

高尾　マア、喜んで下さんせ。わたしも頼兼さまのお氣に入つて、あの島原の廓を請け出され、山崎の別莊へ、あなたと一緒に行きますわいな。

ト正庵、こなしあつて

正庵　コレ〱、待ちや〱。その頼兼さまといふは、あの義政公の若殿様の、頼兼さまの事かいの。

高尾　アイ〱、その義政公の若殿、頼兼さまでござんすわいな。

正庵　すりや、義政公の若殿様の、頼兼さまの事か。

高尾　アイ、その頼兼さまの事ぢやわいな。

正庵　ヤヽヽヽ。コレ〱娘、飛んだ事ぢや〱、

ト驚ろく思ひ入れ。

高尾　モシ〱、父さん、なんの事でござんすぞいな。

正庵　オヽ、わが身は合點がゆくまいが、その頼兼さまといふは、コレ、高尾、其方の爲には兄様ぢやわいの。

高尾　エヽ、そりや又どういふ譯でござんすぞいな。早う云うて下さんせいな〱。

ト驚ろくこなし。正庵、思ひ入れあつて

正庵　成る程、藪から棒を出したやうに、其方と頼兼どのを兄弟ぢやと云うたら、成る程驚ろかいでなんとせう。コレ〱、慥かな事はこの守り袋、コレ、この中にある鶉の目貫もこの短冊も、とつくりと見やいの。

ト襟に掛けたる守り袋を出して、高尾に見せる。

高尾　どうも合點のゆかぬ事を云はしやんす。この目貫や、この短冊を出して、これが慥かな證據とは、つんとそウ、いろ〱な事云はしやんすわいな。

ト云ひながら、短冊を取上げ

「父くひと同じ鶉のこの目貫、哀れなる子を取上げよかし」この短冊が、どうしたのぢやぞいなア。

正庵　それ〱、その短冊は其方の實の親御、義政公の御手蹟ぢやわいの。

ト高尾、初めて惘りして

高尾　エヽ、そんならわたしは。

正庵　勿體なくも東山義政公の、血を分けられた娘。その短冊と目貫を附けて、あの黒染の門前に、捨てゝあつた其方は、義政公のお胤ぢやわいの。

高尾　エヽ、そりやマア、ほんの事かいなア。

正庵　サア、縁でがなこの正庵が拾ひ上げ、當才子から九

つの歳まで、手鹽にかけて育て上げたれども、折も折とて女房の長煩らひで、自滅はならず、仇ではなし、泣きの涙であの廓へ、其方を賣つてやつたわいの。わしもどうぞ外々へ、其方の出世して行く事なら、なんの外聞惡う親子の名乘りをせうぞいの。義政公の若殿、賴兼どのの所へ、身請けされしと聞いたゆゑ、あるにもあられず尋ねて來た、譯といふはこの事ばかり。その片目貫が兄弟の證據。コレ、高尾、其方は義政公の娘ぢやわいの。

高尾　エ、、、。

正庵　その驚ろきは尤もぢや。お部屋腹に出來た其方、御臺所の嫉妬深う、人知れず墨染へ捨てられた其方。取上げて育てたはこの正庵。なんと、緣といふものは不思議なものではないかいの。

ト此うち高尾、思ひ餘つて「ハア、」と泣き落す。正庵、介抱して

尤もぢや〳〵。

高尾　マア、此やうな事が、廣い世界にあるものかいなア末の末まで云ひ交した賴兼さま、わたしが爲に兄さんとは、こりやマア、夢ではないかいな。逢はぬ先ならまだしもの事。いつそ死にたい〳〵わいなア。

正庵　尤もだ。道理だ〳〵。

高尾　コレイナア、父さん、わたしやモウ、今から賴兼さまのお顏を見る事も、恥かしい、恥かしいわいな。

ト泣き伏す。此うち正庵、支度して

正庵　高尾、今この正庵は腹切つて死ぬる程に、必らず留めるな。さらばぢや。

ト腹切らうとする。高尾、驚ろき、手に取りつく。正庵、また振り放す。この張合ひに、正庵が懷中より紙入れ落つる。

高尾　マア〳〵、待つて下さんせ。なんでお前は腹切つて死なしやんすえ。

正庵　なんでとは高尾、義政公の息女と知つて、育ては育て上げたれども、貧苦に迫り九つの年、其方を賣らずば斯ういふ切ない思ひは見まいもの。君傾城になつたばつかりに、血を分けた兄賴兼どのと、枕を交させたが口惜しい。其方に無理はちつともない。科人はこの正庵。其方への云ひ譯に、腹切つて死んでしまふ。今までの事は娘、堪忍してくれ。南無阿彌陀佛。

トまた腹切らうとする。高尾、その手に縋り

高尾　マア〳〵、待つて下さんせ。わたしへばかりの云ひ

譯に、お前は死なうとさしやんすけれど、コレイナア、一日の恩でも親は親、藁の上より九つまで、育てられたる大恩のお前、例へわたしが今爰で、この身を恨みて死ぬればとて、どうしてお前が殺されませう。必らずともに早まつて下さんすな。

正庵　それ程までにこの正庵が事を、大事に思うてたもるかいの。忝ない〳〵。さりながら、とても死なずに居られぬ體。サア〳〵、放して殺してくれいやい。

ト　また死なうとする。高尾、しつかりと留めて

高尾　待ちなさんせ。なぜに死なねばならぬぞいな。

正庵　サア、例へ死んでも云うまいとは思うたが、それ程までに其方の孝心な心に免じ、云はれぬ事を云ふ程に、娘、聞いてくれ…　死なねばならぬ譯といふは、高尾、なんと嫌ぢやあらうが、どうぞわが身、鬼貫さまの所へ行てはくりやるまいか。

高尾　エ、、、。

ト　驚ろく。

正庵　サア〳〵、嫌な筈〳〵。その心をよう知つて居る程に、例へ死んでも云ふまいと思うたれど、萬々一其方が行つてたもれば、この正庵は左團扇、活計歡樂な身になつて、死前を樂にするといふもの。サ、、嫌であらうが、なんと鬼貫さまの所へ行てくれる心はないか。高尾、どうぢや。

高尾　どうして、マア、大概な事云はしやんせいな。あの賴兼さまに、添ふに添はれぬ身の上になつたさへ、悲しうてならぬもの、まだその上に思ひも寄らぬ、嫌ぢやと思ふ鬼貫さまの所へ、どうして行かるゝものぢやぞいな。

正庵　サ、、尤もぢや〳〵に依つて、無理にとは云はぬ。それぢやに依つて、矢ッ張りおれが死んで仕舞へば、事は濟む。留めるな。

ト　また引拔いて腹切らうとする。高尾、また留めて

高尾　マア〳〵、待つて下さんせいな。

正庵　サア、この正庵を殺すまいと思はゞ、ソレ、鬼貫さまの所へ行つてくれるか。

高尾　サア、それは。

正庵　嫌なら死なうか。

高尾　サア、それは。

正庵　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト　高尾、こなしあつて

高尾　參りませう。
正庵　なんと。
高尾　參りまする、
正庵、アノ、鬼貫どのゝ所へ。
高尾　アイ、得心して行きます程に、必らず早まつて下さりますな、
正庵　オヽ、嬉しいぞよ高尾。それ程までにおれが詞を立てゝくれるは、エヽ、忝ない〳〵。そんならおれは死なぬ程に、鬼貫どのゝ所へ行くか。
高尾　アイ、所詮賴兼さまとは、どうで添はれぬわたしが身の上。お前のお爲になる事なら、鬼貫……さまの所へ行かいではいな。
正庵　オヽ、よう得心してくれた。そんなら其方の、これ程深切に思うてくれる事を、鬼貫さまへ申し上げ、追ッつけ迎ひの駕籠を持つて來る程に、必らず詞を違へてたもるな。
高尾　ちつともお案じなさんすな。そんならお前は、歸らしやんすのかいな。
正庵　歸りませう〳〵。とは云ふものゝ、好いたと思ふ男とは添はせもせず、嫌なと思ふ鬼貫どのへ、勸めてやるこの正庵が心の切なさ苦しさを、推量してたもいなう。オヽ、それ〳〵、此やうな事云うて居て、ひよつと人目にかゝつては其方の恥。そんなら高尾、もう行きますぞや。
高尾　隨分ともに、怪我なさらぬやう、氣を附けてお出でなさんせ。
正庵　アヽ、うるさの娑婆の世界。生き過ぎたりや十五年、二十五の歳傷寒で死んだなら、この悲しみは見まいもの。オヽ、可愛や〳〵。そんなら高尾。
高尾　父さん。
正庵　さらばぢや。
ト唄になり、正庵、涙ながら提灯を灯し、とぼ〳〵思ひ入れあつて花道へ入る。高尾、後を見送り
高尾　モシ、父さん、其やうに云うたのは、爰でお前を殺すまいと思うたばかりに云うた事。例へどのやうな事があればとて、賴兼さまと、添はれぬからは、なんの鬼貫が所へ行かうぞいな……と云うて、とても長らへ居られぬこの身。せめてま一度賴兼さまへ、餘所ながらのお暇乞ひ。お顏を一目
ト心附き、口を押へて思ひ入れあつて

さうぢや。
ト唄になり、高尾、涙を隠し奥へ入る。あと合ひ方。
弾き續き、奥より、おやな、道理之助、出て、窺ひ窺
ひおやなと顔見合せ
道理　なんと仲居衆、爰でちつと鬼の留守の洗濯と致さう
かい。
やな　わたしもちつとのうち、爰で酔を醒まさにやならぬ
わいな。
ト兩人、あたりを窺ひ
道理　渡邊民部どのゝ御内證、萩の戸どの。
やな　コレ、道理之助どの、滅多にその名を云ふまいぞ。
兼ねて妾を始め、姿を替へ、頼兼公へお宮仕へを申し上
げるも、お家をお大切に思はれての夫の云ひつけ。殿に
はそれ程にも思し召さず、明暮れ酒宴に長じ給ひ、お館へ
とてはお歸りなく、高尾の君も根曳きなされ、高尾丸と
云ふお船までしつらはせ、山崎の御別莊まで入らせられ
んとの事。道理之助どのにはこの事、夫民部どのへお話
しなされましたかな。
道理　左様でござりまする。お館にては名古屋山三どのを
始め、民部どの、荒獅子男之助どのまで、鬼貫公に與み
なしたる者どもを、何卒退けんと、晝夜心を痛めらるゝ
との事。委細の儀は此うちに。イザ〳〵。
ト道理之助、鼻紙袋を出して、おやなへ渡す。おやな
取つて
やな　ドレ〳〵。人目を憚り、文箱ならぬこの紙入れ。
ト内より一通を出し讀んで
そんなら鬼貫公を始め、伴左衛門どの企みの様子、細川
勝元さままで、名古屋山三どの、近々お願ひなさるゝと
の事。これにつけても頼兼公のお供して、ちつとも早う
お館へ。
道理　然らばお供の用意いたさせ、お船を岸まで廻させま
せう。
やな　早う〳〵。
道理　心得てござる。
ト合ひ方になり、道理之助、奥へ入ると、後口より、
幸助、出て來り、おやなが懐中の紙入れを取つて行か
うとする。立廻りあつて
やな　コリヤ、この紙入れをなんとするのぢや。
幸助　伴左衛門どのゝ、身の仇となるこの一通。おれが貰
つた。爰放せ。

やな　よう安穩で渡さうか。やる事ならぬ。渡しや。
幸助　貰つた。
やな　ならぬ。
兩人　ドッコイ。
ト騷ぎになり、手ばしつこい立廻りあつて、幸助、おやなを當て、紙入れを持つて小隱れする。おやな、やうやう起き上つて、あたりを見て、以前正庵が落し置いたる紙入れを取つて戴き、懷中して、思ひ入れあつて奥へ入る。時の鐘になり、花道より正庵、思ひ入れあつて、出て來て、笛を吹くと、幸助、出て來る。
正庵　泥之助どの。
幸助　正庵老。
正庵　喜ばつしやい。鬼貫さまのお頼みの通り、まんまとあの高尾めをやらかして、あなたの所へ行くやうに、騙りが巧く行きました。
幸助　出かした〱。そんならあの頼兼と、ほんの兄弟だと思つて、縁を切らうと吐かしたのか。
正庵　それ〱、この正庵を假の親だと思ひけつかつて、首尾よく參つて。
幸助　重疊々々。正庵老は鬼貫公のお頼みの通り、巧く行つたからはこの上は合點のゆかぬ仲居のおやな。彼奴が身の上も。
正庵　拔かり召さるゝな。身共はこの由、鬼貫さまへ。
幸助　正庵、お行きやれ。
トこの後へ、若い者、出て居て
若衆　樣子は聞いた。この通り勝元公へ注進をする。ソレ。
ト行かうとする。正庵、引き戻して拔討ちにポンと切る。
幸助　出かした〱。
ト正庵、脇差を納め
正庵　ドリヤ、歸りませう。
ト唄になり、正庵、花道へ入る。幸助、あたりを窺ふこなしよろしく、チョン〱〱〱と幕引くと、直ぐに神田丸になり、ツナギ打つゞけて、この幕を引返す。

本舞臺、三間の間。大柱より外へかけたる誂らへの屋形船。高尾丸と書きし額を掛け、紫の幕、團子提灯大分並べかけ、舳先に蒸の物を飾り立て、船の内上の方に、頼兼公、高尾、おたけ、おとわ、おしな

おつぢ、里十、多吉、いづれも以前の形にて、高尾を浮かし立てゝ居る。杯臺、杯銚子、硯蓋、大鉢、いろ〳〵取散らし、祇園囃子にて幕明く。

頼兼　サア〳〵、なんなりとして、太夫が心を浮かしてくれ。なんぢやゝら、いかう浮かぬ高尾が顏色。氣合ひでも惡いか。コレ、太夫、ちと浮き〳〵としやいの。

ト高尾、俯向いて欝いだろこなし。

たけ　こりや、てつきり太夫さんの心には、口舌の種があると見えますわいな。

とわ　ソレイナア、よく〳〵心に濟まぬ事があればこそ、ほんに顏色までがお惡いやうぢやわいな。

しな　どうぞ早う高尾さんの、お氣の結ぼれをほどいて、上げたいものでござんすなア。

つぢ　何から何まで殿さんの、お心遣ひなさんすが、お氣の毒ぢやわいな。

里十　サア、これからこの丼で、鯉の瀧呑みと致してお目にかけませうか。

多吉　私しはこの銚子の口から、この鼻の穴へ注ぎ込んでお目にかけませう。

たけ　その後の銚子の仕樣がないわいな。

頼兼　コレ〳〵、モウ〳〵、その曲呑みは面白うもない。太夫が心を浮かす事はないか。どうぢや〳〵。

里十　サア、兎角心の浮きまするは、踊りも古し。

多吉　何がようござりませうな。

頼兼　オ、、そんなら二人して、思ひ入れ洒落て見せい。

里十　ヘイ、洒落と申しましても。

ト高尾を見て、もぢ〳〵して居る。

頼兼　洒落られぬと申すか。

里十　ヘイ、洒落ろと仰しやりますと

多吉　どうも洒落憎うござります。

頼兼　さうして、どう云へば洒落るのぢや。

里十　サア、どうと申して。

トつかへる。いよ〳〵白ける。頼兼、ムツと　思ひ入れ。

頼兼　此やうに申して洒落ぬか。

たけ　サア、殿さんのあれ程に仰しやる事。早う洒落なさんせいな。

頼兼　サ、洒落ぬか、どうぢや。

ト里十、迷惑さうに

重十　ヘイヘ、、、、洒落ろとあるなら面白狸の腹鼓でご

ざります。
多吉　ほんにこれが、有り難山の鳶烏でござります。
ト頼兼が顔を見て
兩人　ハヽヽヽ。
ト追從に笑ふ。
頼兼　もう、洒落はそれつきりか。サア〳〵、下がれ〳〵。
兩人　ヘイ。
ト手持ちなき思ひ入れ。
頼兼　下がれと申すに下がらぬか。
ト癇癪の思ひ入れ。兩人「ヘヽイ」とおづ〳〵して下がる。
サア〳〵、其方達も、行きやれ〳〵。
四人　でも、太夫さんの事が案じられまして。
頼兼　ハテ、大事ない〳〵。太夫はおれに任せて行きやれ。
行きやれ。
四人　ぢやと申しましても。
頼兼　ハテ、サテ、行けと云ふに。
四人　ハヽイ。
ト四人、心を殘して同じく供船へ下がる。これより本調子の合ひ方になり、高尾、矢張り俯向いて居る。頼兼、いろ〳〵こなしあつて
頼兼　コレ、高尾、なんで其方は浮かぬのぢや。この頼兼が根曳きすれば、奥も同然。コリヤ、其方の心に、なんぞなうては濟まぬ。サア、あたりに何も遠慮はない。其方と二人水入らず、さつぱりと心の曇りを晴らしてたもいの。
ト高尾、思ひ入れあつて、有り合せたる茶碗へ酒を注ぎ、吞まうとする。
コレ〳〵、太夫、それを其方は吞みやるかいの。
ト留める。
高尾　吞まいでわいな。
ト手を振り放して、涙を隠し、グツと吞み乾す。
頼兼　イヤ、呆れたものぢや。こりや、只事ではないわいの。
高尾　殿さん、なぜ物を隠しなさんす。
頼兼　ヤア、何を其方に隱さうぞいの。
ト思ひ入れあつて
ア、聞えた。あの薄雲の事か。
高尾　イヽエ。
頼兼　その外に其方へ、何を隱さうぞいの。

享和三年二月中村座再演繪番附

ト高尾、こなしあつて

高尾　殿さん、外の事でもござんせん、あなたは目貫を片し、お持ちなさんしたでござんせうがな。

頼兼　オヽ、成る程。しかも鶉の目貫の片し。太夫、どうして其方は知つて居やるぞ。

高尾　あなたの事を、わたしが知らいでよいものかいなア。それぢやに依つて、なんでもお隠しなさらぬがようござんすわいな。

頼兼　どうして其方に隠す心があらう。しかも、コレ〳〵、其方の起證を入れて置いたこの守り袋。此やうな目貫が片しあるわいの。

ト守り袋を明け、中より出して、高尾へ見せる。高尾見て

高尾　ほんに、こりや鶉の片目貫……そんなら

ト悄りして胸を擦り、また銚子を引寄せ、茶碗へ注ぎ、三つ程グッと呑み干し思ひ入れ。頼兼、思ひ入れあつて

頼兼　コレサ、高尾、よしやいの。さうして呑む酒は、わが身に中るわいの。

高尾　サア、わたしもこの酒になと中つて、早う死にたうござんすわいな。

頼兼　これはどうぢや、高尾。この頼兼は、其方と斯うして居るならば、賤が伏屋も玉の床、軒漏る月の楽しみと思うて、根引きした其方。それに死にたいとは、どういふ事ぢやぞいの。マア〳〵、こちら向きやいの。

ト膝へ手をかける。高尾、振り放して

高尾　エヽ、モウ、措いて下さんせ。嫌ぢやわいな。モウモウ、わたしやフッツリと飽き果てたわいな。

頼兼　そりや、誰れに。

高尾　アノ、お前さんに。

頼兼　ヤア。

高尾　また嫌になるまいものかいな。なんぞと云ふと二言目には、身請けぢやの、イヤ、根引きしたのと云はしやんすが、そりや殿さんにも似合はぬ。さもしい事云うて下さんすないなア。

ト頼兼、こなしあつて

頼兼　オヽ、成る程、こりや悪かつた。この上は身請けの事も、フッツリとも云ふまい。堪忍してたも。それ程の事を心にかくる、其方でもないが。

高尾　エヽ、モウ、嗜なまして下さんすな。これを思へば

色事で逢うて居た、あの浮田の左金吾さん、殿御ぶりと云ひ、ほんに琴なり三味線なり、座敷が面白うて、居續けに居なさんす時にも、頼兼さまとはきつい違ひ。野暮な事はちつともなく、ほんに腹をお立てなさんすな。お前さんはあんまりな野暮。ほんに野暮と云ふにも、餘ッぽどの間のある野の字でござんすぞえ。ほんに請け出されて口惜しいわいな。

ト頼兼、カッとすれども又思ひ直して

頼兼　ハ、、、。コレ、太夫、又おれを焦らしやるのかいの。今フッと思ひ出したやうに、廓の話し。浮田左金吾がどうしたの、斯うしたのと、あの左金吾が事は、振つて振つて振りつけて、座敷へも入れぬ客ではないかいの。

高尾　ソレ、さう云はしやんすが、矢ッ張りお前の薄鈍おやわいな。惚れた男を客人の前で、惚れて居やんすと云ふやうな、手のない女郎があるものかいなア。殿さん、わたしやお前に飽き果てたわいな。

頼兼　サア〳〵、なんなと云やいの。其方の云やる事、なんとも思はぬわいの。

高尾　これ程にわたしが云うても、腹は立たぬかえ。そんなら身請けしたこの高尾ぢやに依つて、金が惜しいのかえ。

トこれにて、頼兼、思ひ入れ。

モシ、殿さん、お前も足利の若殿様。わたし等づれの女郎を、五人七人身請けなさんしたと云うて、なんの事があらうぞいな。モウ〳〵、お前のやうな野暮なお方に身請けされたと思へば、腹が立つて〳〵。

ト高尾、茶碗へ酒を注ぎ、呑まうとする。頼兼、その酒を取つてグッと呑んで思ひ入れ。高尾、これを見て刀掛けにありし小さ刀を持つて、頼兼が前に投げつけ

サア、切らしやんせ〳〵。お前も足利の若殿、女子に騙されて、助けて置かしやんしては、お前の武士が立ちますまい程に、サア、切らしやんせ〳〵。

ト頼兼へ體を摺りつける。頼兼、ヂリ〳〵としてこなしあつて、また思ひ直して、小さ刀を上の方へ投げやり

頼兼　オヽ、高尾、嬉しい〳〵。よく〳〵この頼兼が心を知つたればこそ、其やうな愛想盡かしを云うて、心を引いて見て、わが身の遊びにしやるのか。ハ、、、、もうよいわいの。太夫、よい加減にしやいの。

ト後より抱きつく。高尾、振りはなし

高尾　エヽ、モウ、アタ好かん。嫌ぢやわいな。

ト上の方へ行かうとする。また頼兼、抱きつく。いろいろあつて、高尾、頼兼を突き倒し

ほんに、どうでもしつこいお屋敷さんぢやわいな。

ト云ひ捨て、上の方へ行かうとする。頼兼、堪り兼ね高尾が髻を摑んでグッと引寄せ、急き込んで物が云はれぬこなしあつて

頼兼　エヽ、おのれはなア。

ト口惜しき思ひ入れあつて

最前よりの有様も、一夜流れの遊び者とは思へども、一旦情をかけし者と思ひ、心で心を取り直し、命ばかりは助けんものと思へども、餘りなる惡口雜言。もう、この上は。

ト突き放して、小さ刀を取るより早く抜き放し

是非に及ばぬ。

ト胸元へ白刃を突きつける。高尾、手を合せて、頼兼が顏を見て、ホロリとする。頼兼、口惜しく思ひ餘つて、刀を抛り上げる。この途端よろしく、拍子幕。

ト祇園囃子になる。と幕の外舞臺先より、花道へかけたる浪板、仕掛けにて打ち返す。血汐流るゝ。雷の音。高尾が吹替への衣裳、舞臺先を流るゝ。祇園囃子打上げる。直ぐにシャギリ

大詰　對決の場

役名――細川修理太夫勝元。山名宗全持豐。名古屋山三元秋。山中鹿之助。斯波左門。一藤太國景。荒川次郎時綱。大江圖幸鬼貫。奴、團平實ハ渡邊民部早友。不破伴左衛門重勝。

本舞臺、三間の間、結構なる高足の御殿。切り目緣。白洲階子、すべて管領館のかゝり。爰に、一藤太國景、麻上下股立ちにて、雪洞附きの手燭を持ち、立ちかゝつて居る。これを荒川次郎、同じく麻上下、股立ち、手燭を持つて、國景が刀の柄を扣へ留めて居る。この見得、早舞ひにて幕明く。

次郎　一藤太國景、待つた。

國景　荒川次郎、某をなぜ止め召さるゝな。

次郎　今日は名古屋山三が訴へに依つて、山名宗全どの、細川勝元どのお立合ひにて、不破の伴左衛門、名古屋山三が對決の當日。それに宗全どの、おしつらひとは心得

ぬ。案内おしやれ。某御容體を伺ひませう。
國景 そりやア、罷りなり申さぬ。兼ねて宗全どのと勝元どのとは、不和なる御挨拶。それゆゑ今日の對決に、如何なる事も出來なさんと、思し召しての御病氣は、宗全どのゝが御尤も。見苦しい、爰放し召され。
次郎 イ、ヤ、放す事罷りならぬ。日頃伴左衞門を御贔屓なさるゝ宗全どのは、鬼貫どのと聟舅のお間柄ゆゑ、伴左衞門が無理も理窟になるところを、勝元どのでは內證のからくりが違ふに依つてのおしつらひか。大切なる今日の立合ひゆゑ、宗全どのに御意得た上、御胸中を承る。案内おしやれ。
國景 イヤ、どこがどこまでも、御病氣の宗全どの。逢はする事は罷りならぬ。
次郎 イヤ、御容體を伺ふワ。
國景 罷りならぬ。
次郎 アノ貴樣が。
國景 おてまへが。
番人 なにを。
ト思ひ入れ。向うにて「勝元公お入り」と呼ぶ。
次郎 ナニ、勝元どのゝ
國景 入來とや。
兩人 ムウ。
ト思ひ入れ。又「お入り」と呼び、太鼓になり、花道より勝元、長袴にて出て來る。
次郎 細川修理の太夫勝元どの。
國景 只今御入來遊ばされましたか。
勝元 御兩所の爭ひ、無益の至り。先づ／＼控へ召されい。
兩人 ハッ……イザ先づ、お通りあられませう。
ト勝元、思ひ入れあつて上へ通り
勝元 當今、御花園院の撰せられたる風雅集の和歌に「深き山に澄みける月を見ざりせば、思ひ出もなき我が身ならまし」とある、和歌の心を思ふにつけ、思ひ出もなき賴兼公のお身の上。東求堂へ入らせられ、お世繼ぎは即ち義政公御末子鶴壽丸君、御家督御相續相濟むと云へども、不破の伴左衞門が逆意の企みに依り、足利のお家騒動に及ぶ事、未だ赤松滿祐如き逆徒ばら、徘徊なすゆゑと思へば、靜謐ならざる御代の有樣。ムウ、
ト思ひ入れあつて
さて御兩所、今日は伴左衞門、山三が對決。いづれか企みの露顯なさん事日のあたり。それにつけ、心元なきは

只宗全どのゝおしつらひのみ。荒川どの、御容體を伺ひ召されたか。

次郎　その儀につきまして、先刻より罷り越し、御容體を伺はんと申せば、これなる一藤太、遮つて留めらるゝは察するところ、おしつらひとは僞はり、御他出あつて鬼貫どのゝ屋敷で、何かの云ひ合せ。

國景　默り召されい。宗全どのに於て、當時鬼貫どのゝ屋敷へ出入りはなされぬぞ。

次郎　イヤ、山三、伴左衞門が對決の折なれば、忍んで罷り越されたものサ。

國景　ヤア、勝元どのへ左樣な儀を云ひ上げ召さると、某が手は見せぬぞ。

次郎　見せぬと云つて、如何おしやる。

國景　何がどうした。

次郎　小癪な。

ト思ひ入れ。向うにて

宗全　方々、待つた。

番人　なんと。

宗全　山名持豐入道宗全、それへ參つて勝元どのへ、御意得申さん。

ト太鼓謠にて、宗全、ざん髮、法眼袴にて、上下侍ひ兩人連れ出て來り

宗全　今日は某、所勞と云へども、大切なる足利家の裁判、推しての出勤。先刻より勝元どのゝお入りを待ち兼ね、氏神八幡への參詣。それをも知らぬ一藤太が粗忽の挨拶。扣へ召されい。

兩人　ハツ。

ト思ひ入れ

勝元　これは／＼宗全どの、この勝元をお待ち兼ねとは氣の毒千萬。先づ／＼これへ。

宗全　如何にも。

トこれにて、宗全、舞臺へ來る。

勝元　今日は卽ち名古屋山三元秋、先達て願書を以て訴へたる、伴左衞門が逆意の趣き。裁判のお役目、御苦勞に存じまする。

宗全　そりや御同然に役目の儀……して、御兩所、不破名古屋の兩士、鬼貫諸とも、はや相詰めましたか。

次郎　如何にも、先刻よりお次に

兩人　扣へさせましてござる。

勝元　然らば、この所へ呼び出し、仔細をお聞きなされま

せぬか。

宗全　如何にも、双方を呼び出し召されい。

次國　心得てござる。

宗全　イザ、勝元どの、御座をなされい。

勝元　先づ／＼御老體の其許から。

宗全　然らば御免下されい。

ト互ひに辭儀をして、二重舞臺の上に上がり、上の方、宗全が前に火鉢置く。勝元、よろしく住ふ。國景、東の歩み、次郎、花道の角へ來り

國景　大江の鬼貫、不破の伴左衞門。

次郎　名古屋山三、斯波左門。

國景　双方御前へ。

兩人　罷り出ませい。

ト東西の揚げ幕の内にて

四人　畏まつてござりまする。

ト時の太鼓になり、東の棧敷下より鬼貫、伴左衞門、花道より山三、いづれも尉斗目麻下にて斯波左門、白木の箱を持つて出て來る。

國景　大江の鬼貫、不破の伴左衞門。

次郎　名古屋山三、斯波左門。

國景　双方相詰め

兩人　召されたか。

四人　ハツ。

次郎　御大法なれば、兩腰を

兩人　渡し召されい。

四人　ハツ。

ト大小を渡す。

宗全　それに扣へたる名古屋山三、其方が訴への趣き、大江の鬼貫、不破の伴左衞門、その外一味連判なし、足利の家を押領せんとの企み。まつた鶴壽丸を調伏の企み、頼兼に淫酒を勸め、遂に東求堂へ押籠めしと、三箇條の訴人。いよ／＼これに相違ないか。

山三　ハツ、書附けに認め、差上げたる通り、頼兼公へ淫酒を勸め奉り、遂に東求堂へ移し申し上げ、まつた鶴壽丸どのを調伏の企み、足利の家を押領せんとの一味徒黨の企み、とくと御吟味下さりませうならば、有り難う存じ奉りまする。

勝元　いづれも、よつく承れ。天下の政事は、法を以て人を糺し、道を以て人を敎へる、さるが中にも名古屋山三、鶴壽丸を調伏の訴へこそ輕からぬ。鬼貫どのは御存

じかな。
鬼貫　ハツ、この鬼貫は夢にも存ぜぬ。委細の譯は不破の伴左衞門にお聞き下されい。
宗全　イカサマ、これはさうありさうなもの。不破の伴左衞門、名古屋山三が訴へ、一々申し譯があるであらうな。
伴左　御意でござりまする。身不肖なれども不破の伴左衞門、足利家の執權を仕れども、調伏の企みなどゝは、存じも依りませぬ儀。殊に連判徒黨とは、跡方もなき彼れが僞はり。とくと御吟味下さりませう。
山三　待つた伴左衞門、先達て某がお訴へ申せし三箇條。一味徒黨を集めし事、列侯の御前も恐れず、存ぜぬとはよくも申されたり。然らば賴兼公の昵近として、淫酒を勸め奉り、島原の傾城高尾へ通はせらるゝ途中に於て、何卒失ひ奉らんと、立波瀧藏、黑雲林八といふ兩人の者へ申し附けしは、其方が指圖。この云ひ譯があるか。なんと。
伴左　賴兼公、淫酒の二つに溺れ給ふゆゑ、諫めを入るゝは臣下の役。度々御意見申し上げても、一向お聞き入れなければ、是非に及ばず。また立波瀧藏、黑雲林八とやらは、この伴左衞門、ついに逢つた事もない者。左樣な事は存じ申さぬ。
左門　イヤ、憚りながら、御前をも顧ず、申し上げまするやうにござりまするが、伴左衞門ことは、かね〲鬼貫と申し合せ、鶴壽丸を調伏せんとの企み。慥かな證據はこの一品。鬼貫どの、伴左衞門、なんと覺えがござらうがや。
鬼貫　サア、それは。
左門　なんと。
伴左　只今も申せし通り、若殿調伏の儀は、斯く云ふ伴左衞門は、どこがどこまでも、存ぜぬ知らぬぞ。
鬼貫　それ〲、兩人が如何ほどに申しても、知らぬ〲。
勝元　ハツ。斯波左門、その箱が調伏の證據の品とは。
左門　白木を以てしつらひし怪しの箱、蓋の表を見ますれば、願主兩人と書き記しござりますれば、疑ふところもなき調伏の器物。只今御前に於て、檢めてお目にかけませう。
ト箱の蓋を明け、内より、藁人形と願書を取出し
御覽下さりませう。四寸二分の藁人形へ、四十九本の釘を貫き、願書を認め秘め置きしは、若殿を調伏のしるしかゝる證據の出る上は、最早、陳するところはあるまい

がな。

鬼貫　サア。

　ト思ひ入れ。作左衞門、鬼貫が方へ思ひ入れあると、鬼貫、呑み込む。

次郎　鬼貫どの、あの一品に覺えがござるか。

鬼貫　イヽヤ、覺えござらぬ。

左門　アノ、この品に。

鬼貫　如何にも。名古屋山三、斯波左門、鶴壽丸を調伏の願書を、この場に於て白狀なせ。

山左　何がなんと。

鬼貫　此方に覺えもなき事云ひかけるは、わいらが企みであらうがな。

左門　ヤア覺えなきとは、御卑怯々々〳〵々。眼前に證據の願書、

　ト披き

ナニ〳〵「一七々四十九日の間に、四十九本の釘を打たば立ち所に鶴壽丸の一命失ひ奉らん」とあるこの一通。箱の表に二人と書いたる願主の姓名。願書の奧を檢めて……ヤ、、、。名古屋山三、荒獅子男之助。こりや、どうだ。

山三　すりや、若殿調伏の願書に、山三、男之助が姓名を現はせしとか。ムウ、企んだな。

宗全　ムウ、調伏の願書の奧に、名古屋山三、荒獅子男之助とあるからは、最早この上詮議に及ばぬ。上へ對し、僞はりを言上なす、盜な山三の不屆き者めが。

山三　イヤ、例へ願書に我れ〳〵が、姓名記しござればとて、身に取つて調伏の覺えござりませぬ。

宗全　達て陳ずれば、拷問の上白狀さするぞ。

山三　この上は、如何やうなる御詮議仰せつけられましても、毛頭覺えござりませぬ。

國景　管領職へ對して、詞を返す名古屋山三。扣へぬか扣へぬか。

山三　ハツ〳〵〳〵。

　ト思ひ入れ。

勝元　コリヤ、斯波左門、其方が持參なしたる調伏の願書に、願主名古屋山三、荒獅子男之助とあるに依り、上を僞はると宗全どのゝお憤り、強く、三箇條の願ひ訴狀も水の泡。事を企まんと思ふ者は、密謀を施して人を惑はすと云ふ所へ心も附かず、かゝる器を持參なしたるうつけ者。今日は大切なる立合ひといふ所に心が附かぬか。

タ、白痴者めが。

伴左　山三と云ひ、左門と云ひ、不埒者の寄り合ひ。ハテ

サテ、氣の毒千萬な。

山三　よくも企みし伴左衛門が謀計。若殿調伏の證據となるべき願書にて、却つて我れ〳〵が科人となりしは

左門　いよ〳〵手段に落入りしか。

山三　左門どの。

左門　元秋どの。

兩人　エヽ、殘念な。

トばた〳〵になり、花道より山中鹿之助、麻上下にて首桶を抱へ走り出て來り

鹿之　ハツ、御訴訟の者。お取次下されい。

次郎　今日は足利の執權、不破名古屋の立合ひ。

國景　他事の訴へは、お取上けない。そこ罷り立て。

鹿之　ハツ、卽ち某は足利の御內にて、山中鹿之助と申す者。不破と名古屋の對決の儀につき、訴へに出ましたる者、お取次の程、偏へに願ひ奉ります。

次郎　兩管領には只今の訴へ、お聞きあられましたか。

勝元　如何にも。山中鹿之助とやら、不破、名古屋の立合ひに附いての訴へとは、仔細ぞあらん。これへ〳〵。

鹿之　ハツ。

ト舞臺へ來り、次郎、大小受取る

斯く申す山中鹿之助、これまで持參いたしましたるこの器は、卽ち鶴壽丸を亡き者にせんとなす、鬼貫、伴左衛門が證據となる一品。御覽下されませう。

ト舞臺先へにじり出て

サア、鬼貫どの、伴左衛門、若殿鶴壽丸さまを失ひ奉らんとなされたる、證據の一品出る上は、最早遁がれぬところ、尋常に白狀おしやれ。

鬼貫　默れ鹿之助、斯く云ふ鬼貫、鶴壽丸を亡き者にせんと企んだ覺え、曾てないぞ。たつた今も斯波左門が、由なき物を持參して、山三が越度の罪の上塗り。大概な物ならば、出さずと早く持つて歸れ。

鹿之　ムウ、斯波左門が、どんな物を持つて來て、山三が越度になつたか知らぬが、この鹿之助が持參の品を、一目見たなら肝玉がでんぐり返り、忽ち罪に服さずばなるまい。さらば持參のこの一品、管領職の御前に於て、御披露いたすでござりませう。サア、鬼貫どの、伴左衛門と心を合せ、云ひつけさしつた名和無理之助、忍びに妙を得たるを幸ひ、若君を害なさんと、御寢所目がけ窺

ひ寄つたる無理之助。イザ、とつくりと御覧なされい。
ト首桶の蓋を取る。中より無理之助が首出る。伴左衛門、鬼貫、顔見合せて思ひ入れ。
サア、動きはとれまいが。皆兩人の企みだと、有やうに白狀さつしやれ。

鬼貫　サア、そりやア。

鹿之　なんとでござる。

伴左　コリヤ、山中鹿之助、成る程無理之助は存じ居れども、我れ〳〵が頼み、御寢所へ忍び込ませしなどゝは、跡方もなきなんのたは言。毛頭覺えない事だぞ。よしあつたればとて、死人に口なし、首討つてしまへば、それからそれまで。役にも立たぬその生首、貴人の御前穢らはしい。キリ〳〵持つて下がり召されい。

鹿之　無理之助を首になせしは、男之助が武骨、この所へ持參なしても、死人に口なし、この首が企みの證據にならざるか。

伴左　知れた事だワ。

鹿之　エ、、殘念なア。
ト思ひ入れ。

宗全　ム、、ハ、、、。寄るも觸るも、うつけ者ばかり。

こりや全く伴左衛門が出頭を嫉み、寄りたかつて伴左衛門を、罪に取つて落さんと計る山三が計略とは、鏡にかけて見え透いてある願書の表。サア、眞直ぐに白狀いたせ。名古屋山三。

山三　宗全公の嚴命、恐れ入つてはござりますれども、少しにても我が身に不忠の覺えあつて、かゝる訴へがなりませうや。御賢慮めぐらされ下さりませう。

勝元　コリヤ、山三、いま兩人の若い者の訴へ、一つとして證據にならざる上に、却つて其方の越度をも引出すべき不調法。今日一擧に定まる足利家の裁判、心を靜めて返答いたせ。

山三　ハツ、有り難き勝元公のお詞、畏まり奉りましてござります。

伴左　如何に山三、其方が只今の一言、少しにても不忠の覺えあつて、かゝる訴へはならぬとの詞について、この伴左衛門、貴殿へ三箇條の不審あるが、一々返答おしやるか。

山三　如何にも。その三箇條は、何やうなる問ひ事かは存ぜねども、身に覺えなき條々、速やかに返答いたさん。

伴左　さあらばこの場で承らうか。

山三　御返答仕らうか。
伴左　イザ。
山三　イザ。
　ト兩人、舞臺先へにじり出る。
宗全　山三が訴訟の三箇條を、問ひ返す伴左衞門が、三箇條の不審。勝元どの、こりや、聞き事でござらうが。
勝元　如何にも左樣でござる。
國景　大切なる立合ひ、双方とも潔白に
次郎　急いで早く申してよからう。
伴左　ハツ、名古屋山三へ伴左衞門が、尋ねる三箇條。第一の不審は、鶴壽丸どのを調伏なす只今の願書。二つには足利家に忠義を盡す者、汝一人に非ず、然るに其方一人、遮つて御訴訟申せし事、三つには宮城野數馬兄弟を引き込み、鶴壽丸どのゝお側役に附け置きし事。この三箇條、御前に於て速やかに返答おしやれ。
山三　如何にも、若君調伏の事は、何度お尋ねにあづかるとも、この身に覺えある器を、何しに左門に持參いたさすべきや。これにて存ぜぬといふ事は明白たり。まつた足利家に忠義の者ども、數多あれども、出る杭打たるゝ世の譬へ。一味徒黨の後難を恐れ、その職にあらざるを以て、口を塞ぐるに依る。山三一人ぬきん出て御訴訟申し上げしは、我が寸忠を顯はしたるところ。宮城野數馬兄弟が儀は、志賀大膳に親を討たれ、その仇を報はんとする志しに愛で、匿まひ置きしは、畢竟孝道を重んずる武士の情。それを難じらるゝ仁こそ、却つて訝かしき胸中。三箇條の不審、これでは申し譯が相立ちませうがな。
伴左　然らば山三、お身ばかりが理非潔白で、斯く云ふ伴左衞門、お家の爲には不義非道な侍ひか。鬼貫どのに意趣あらば、意趣あるやうに身一分の事には致さず、何ゆゑ主君のお家を騷動なすぞ。
山三　伯父君鬼貫どのへ、斯く云ふ山三が遺恨とは。
鬼貫　オヽ、それこそは丹波丹後の國境、谷地八千石を三つに割り、その三分の一を其方へ與へしは其が指圖。その時の無念を晴らさんと、血を狂ほせる名古屋山三。これに違ひはあるまいが。
伴左　ハツ、恐れながら、この度の山三が訴へは、鬼貫に遺恨を含みしゆゑの儀と存じられます。とくと御吟味下されませう。
宗全　分地なれども鬼貫は、主人の片割れ、その仁に對して遺恨を含みしなどゝは、名古屋山三の不屆き者。そこ

立つて下がらう。

勝元　イヤ〳〵、宗全どの餘り左樣に仰せられまするな。彼れも名古屋山三元秋、故なき事も申すまい。コリヤ山三、只今の儀は、鬼貫の申さるゝ通りか。なんとぢや。

山三　勝元どのゝお尋ねの上は、申し上げませぬも無禮。當時一天下の間に、山名宗全公の御威勢を恐れませぬ者は、一人もござりませぬ。殊さら鬼貫どのとは御内縁もござりまして、何事に依らず、宗全公のお指圖とのみ存じ居りますれば、なか〳〵我れ〳〵しきの一分を立てまする儀は思ひも寄らず、谷地割りの難題も、早速承知仕り、野心を挾みまするやうな、未練なる心底はこの山三めに於きましては、毛頭ござりませぬ。只恐れまするは宗全公の仰せ出され、然るべく御推察の程、偏へに願ひ奉ります。

勝元　神妙なる汝が詞、勝元具さに聞き屆けた。

山三　有り難う存じ奉ります。

宗全　勝元どのには、何を聞き屆けられたか存ぜぬが、この宗全は一圓會得仕らぬ。最前よりの兩人が立合ひ、何一つとして取り所もなきたはけた評定。最早この上は鬼貫件左衛門には、科はないと申すものでござる。

勝元　イヤ、未だ詮議が殘りました。

宗全　ナニ、詮議が殘つたとは。

勝元　山三が書附けを持つて、訴へたる三箇條のうち、鶴壽丸調伏の儀、賴兼を途中にて失はんと致せし二箇條とても、未だ双方云ひじらけの上、今一つの一味徒黨を企てし趣き分明なれば、左樣にお急きなされずとも、先づ先づお煙草でも召上がられ、彼れらが立合ひをお聞きされいサ。

ト宗全、勝元、思ひ入れあつて、煙草盆を引寄せて煙草をのむ。山中鹿之助、思ひ入れ。

鹿之　山三どの、元秋どの、只今の宗全公のお詞、勝元どの仰せをお聞きなされたか。

左門　今日の立合ひ、三箇條のうち、一つにても其許樣の申し分立たざれば、これまで心を盡されし事も、水の泡となりまするぞ。

鹿之　お家靜謐の御賢慮、とくとめぐらされい。

兩人　元秋どの。

山三　委細心得ある。管領の御前ぢや、扣へ召されい。

兩人　ハツ。

ト兩人扣へる。

享和三年三月中村座

再演繪番附

山三　如何に伴左衞門、汝が逆意の企てに依つて、管領の御前にて、今日の對決。退引きならぬ證據の品を出さぬうち、若君を毒害なさんと企みし事を、白狀おしやれ。

伴左　默れ、山三。最前より、出しても〳〵役に立たざる證據ばかり、まだこの上に恥辱を取る氣か。毒害の企みのとは、なんのたは言。伴左衞門、どこまでも覺えはないわえ。

勝元　伴左衞門、そりや知らぬとは申されまい。汝足利の執權職ならずや。例はゞ東山どの、物好きの茶器を伴左衞門預かり、盜賊の爲めに奪はれ取られても、その品紛失の儀は存ぜぬと申して、云ひ譯が立つべきか。奪ひ取らるれば伴左衞門が越度、足利家の執權職は、なんの爲。足利の家の騷動は、正しく伴左衞門が爲す業。これにも云ひ譯があるか。

伴左　サア、その儀は。

勝元　なんと。

伴左　ヘイ。

ト當惑する。

山三　しかのみならず、正庵といふ醫者を語らひ、毒藥調合なしたる事明白たり。サア、有やうに白狀いたすまいか。

鬼貫　伴左衞門、其方は覺えがあるか。知らぬか、某は知らぬぞ〳〵。

伴左　ハテサテ、左樣にブリ〳〵と。そりやなんの態でござる。正氣なき事にうろたへて、罪に落ちるやうな伴左衞門ぢやござらぬ。ヤイ、名古屋山三の僞はり者めが。コリヤ、伴左衞門に僞はりがあれば、天道が許さぬ。若君を毒害なした覺えはない。

山三　ハ、、、、その罪を遁がれんとて、辯舌を以て云ひかすむるとも、毒害の科に依つて、罪科遁がれぬ。サア、速やかに申し上げい。

鹿之　只今山三が申し上げまする通り、鶴壽丸へ毒害の企みに、相違ござりませぬ。

左門　伴左衞門、有やうに申し上げまいか。

伴左　伴左衞門は知らぬワ。

鹿之　ヤア、知らぬとは卑怯〳〵。

山三　有やうに云いまいか。

ト山三、鹿之助、左門、伴左衞門へ詰め寄りする。宗全、鬼貫へ思ひ入れ。鬼貫、呑み込んで

鬼貫　コリヤ〳〵、名古屋山三、最前よりの爭論、不破の

伴左衞門を罪に取つて落さんとすれども、何も慥かな證據がない。鶴壽丸を毒殺の企みに、語らひしとある正庵を、この所へ同道なしたか。

山三　サア、その正庵儀は。

宗全　同道は致さぬか。

山三　サア。

宗全　名古屋山三の不屆き者めが。最前と云ひ、又もや證據なき事を訴へたのか。

山三　サア。

伴左　この場に於て證據があるか。

山三　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

宗全　名古屋山三、返答はどうだ。

山三　ハツ、正庵は同道仕りませぬが、その座に立合ひましたる、下郎の團平を、この所へ呼び出し、企みの樣子を一々申し上げさせまするでござりませう。

伴左　アノ團平を。

山三　如何にも。

伴左　ムウ。

ト思ひ入れ。

山三　鹿之助、團平をこれへとお云やれ。

鹿之　ハツ。

ト花道の角の所へ來り

お次に扣へし下郎の團平、急いで御前へ罷り出ませい。

民部　畏まつてござりまする。

ト鼓の合ひ方になり、花道より民部、上下衣裳にて、三方に一通を載せ、持つて出て來り花道に扣へる。

鬼貫　ヤ、、、正庵が下郎の團平、大小を挾さみ、裃のこのいでたち。こりやどうだ。

民部　兼ねて鬼貫どのと伴左衞門が、逆意の企み見出さん爲、名古屋山三と心を合せ、姿を替へたる下郎の團平。衣服大小改むれば、鎌倉にて人となつたる、渡邊民部早友といふ、お家譜代の忠義の侍ひ。なんと肝が潰れたか。山三どの、民部これまで罷り出ましてござります。

山三　これは〳〵御大儀千萬。サア、渡邊民部、鬼貫どのと伴左衞門が、企みの樣子、御前に於て申し上げ召されい。

民部　ハツ、恐れながら只今の判斷は、若君へ毒害の一事に極まる。その證跡を御前にて、宗全公のお叱り。山三元秋が差當つてのこの場の當惑。その儀について御前へ

召されし渡邊民部。伴左衞門が毒殺の企み、慥かな證據はこの一通。イザ、御披見なし下されませう。

勝元　出かした民部。その所に於て一通を讀み上げい。

民部　ハッ。

ト一通を披き

「この度鶴壽丸を毒殺の企ては、名古屋山三、荒獅子男之助が賴みなりと、白狀に及び候ふやう、賴みの趣き承知の上、男之助が業なりと白狀に及ばれ候ふ上は、一命を助け大望成就の上、大祿を宛て行ふものなり。月日、團平へ、不破の伴左衞門重勝」

山三　さてこそ。

ト民部、舞臺へ來り、次郎、大小受取る。

民部　伴左衞門、團平へ渡せしこの一通、なんと覺えがあらうがや。慥かな證據出るからは、遁がれぬ所だ伴左衞門。サア、毒殺の企み、有やうに白狀々々。

伴左　コレ〱、渡邊民部とやら、その一通を伴左衞門へ見せう。團平とやらに左樣な書附けを渡してやつた覺えはない。

民部　覺えないとは卑怯であらう。この一通は汝が手蹟。ソレ、檢めてお見やれ。

伴左　ドレ。

ト取つて見て

こりや某が手跡ではない。書き手も知れぬ似せ筆を、毒殺の證據とは、渡邊民部のうろたへ者めが。キリ〱持つて下がり居らう。

ト民部へ投げつける。民部、急いで一通を持つて詰め寄り

民部　そんなら、なんと云ふ。この一通に覺えはないとか。

伴左　某が書いたのぢやないワ。

民部　みす〱汝が書いた一通、覺えないとは卑怯な一言。さはさりながら、理を非に曲げて書かぬとあれば、この一通爰にあるとて、役に立たぬか。エヽ、殘念な。

ト思ひ入れ。山三、この時、懷中より三建目の文を出し

山三　然らば伴左衞門、この一通に覺えがあるか。

ト伴左衞門に見せる。伴左衞門、恟りして

伴左　その一通は。

山三　覺えがあるか。

伴左　覺えがある。

山三　なんと。

伴左　その一通は葛城の君へ岩橋、岩橋とはこの伴左衛門が替へ名、葛城と云ふは島原の傾城、さま〴〵の遊興に、通ひ馴れたる朱雀の廓。つれ〴〵の餘りに逢つたるその艶書、伴左衛門が手蹟に相違ない。役にも立たぬ艶書を取出し、事ありさうになんの態だ。こりやア血道をぶち上げて、氣が違うたか。ハレヤレ、笑止千萬な。

山三　すりや、この艶書は、汝が手蹟に相違ないか。

伴左　如何にも。反古同然なその艶書。おれが書いたに違ひはない。

　ト山三、一通を取上げ、よく〳〵見て

山三　この艶書が其方の手蹟なら、この一通も汝が同筆。爭つても爭はれぬ毒殺の企み。サア、有やうに云ふまいか。

　ト文と一通を以つて詰め寄る。

勝元　サア、伴左衛門。かゝる證據の出る上は、最早陳ずるところはあるまい。速やかに白狀なせ。

皆々　サア〳〵〳〵。

宗全　コリヤ〳〵、山三、その書き物をこれへ。

山三　イザ〳〵、御覽下されませう。

　ト文を宗全へ渡す。

宗全　成る程、葛城の君へ岩橋と書きたるこの艶書は、某も見覺えある伴左衛門が手蹟。察するところこの一通は、伴左衛門が似せ筆。この似せ筆にて罪に取つて落さうとは、不屆き者め。これが證據になるものか。

　トずた〳〵に引裂き、山三へ打ちつける。

山三　ヤ、ヽ、すりやこの一通は、この場の證據にはなりませぬか。エ、ヽ殘念なと申したら、各々方の御勝手にはよろしうござりませうが、マア、左樣には仕りますまい。今日の只今まで、一味徒黨の企みある事、よつく存ぜし山三元秋。足利のお家、こと故なく納まる事もござらば、一々姓名は出すまじと存ぜしが、最早叶はぬこの場の手詰め。慥かな證據はこの連判。伴左衛門、なんと覺えがあらうがや。

　ト懷中より連判を出す。伴左衛門、思ひ入れ。

伴左　ヤア、その連判は。

山三　女房葛城が手段に落ちて、奪ひ取られしこの連判。

　ト錫の器に入れたる小指を袂より出し

また爭へばこの小指、この連判と内紙の血汐、遁がれぬところぢや、伴左衛門。

　ト差しつける。

伴左　ムウ。
　ト思ひ入れ。
鹿左　サア、速やかに繩かゝれ、
伴左　サア、それは。
四人　サア〳〵〳〵。
山三　ナヽ、なんと。
伴左　ムウ。
　ト思ひ入れ。
鬼貫　エヽ、こりやア、某が身の上も、怪しくなつたワ。
　伴左衛門、思案があるか〳〵。
勝元　ヤア、見苦しく動き召さるな。大江の鬼貫。
鬼貫　もう斯うなつちやア、意氣地やアござらぬ。
勝元　如何に伴左衛門、その連判狀出る上は、一言の答へなきは、皆汝等が企みよな。大罪人の分として、卑怯未練にも詞を飾り、毒殺の罪を隱さんとする不敵の極賊。最早陳ずるところはあるまい。速やかに刑罰を待て……ナニ、宗全どの、最前よりお聞きの通り、伴左衛門が罪明白に顯はれし上は、急ぎ罪科に行なはれ、御尤もに存じまする。
宗全　イヤ、まだ罪には行はれぬ。

勝元　そりや又、何故な。
宗全　ハテ、一應も再應も糺した上、我れと自身の白狀に及ばぬうちは
勝元　罪科には行はれませぬか。
宗全　如何にも。
勝元　斯くまで服する伴左衛門、手延びに召さるゝ宗全どのゝ御胸中、なんとやら一物あつて笑止千萬。左樣なされても、天下の掟が立ちますか。
宗全　サア、それは。
勝元　サヽ、なんとでござる。
宗全　どう云へば斯う云ふと、よくも差出る勝元の名古屋贔屓。例へなんとお云やつても、東山どのへ上聞に達せぬうちは、刑罰の儀計らはれぬ。
勝元　然らば宗全公には、上聞に達せられまするか。
宗全　如何にも。其うちは貴殿にも、暫らく休息召されい。
勝元　ナニ、伴左衛門、まだも申し譯な願ひの筋もあらば、ナ、ソレ、鬼貫と申し合せて、合點か。
　ト伴左衛門、思ひ入れ。
伴左　有り難う存じまする。
勝元　名古屋山三を始め、渡邊民部、斯波、山中、斯樣に

企み露顯の上は、足利の家の礎堅き汝等が忠心。この上
ともに心を附けい。
四人　有り難う存じ添りまする。
宗全　方々へ大小渡せ。
次國　ハア、。
ト以前の大小を持つて出る。
イザ、大小を受取り召されい。
勝元　コリヤ、罪科極まる上は、伴左衞門、鬼貫へは、大
小無用。宗全どの、なんと左樣ではござらぬか。
宗全　そりや兎も角も。
次郎　イザ。
ト山三、民部、鹿之助、左門へ大小渡す。
宗全　この所へは山三、伴左衞門、兩人ばかり殘し置き、
その外は休息の間へ扣へさせい。
次郎　畏まつてござります……いづれも、立ち召されい。
三人　ハア、。
宗全　勝元どの。
勝元　宗全どの。
宗全　後刻
勝元　御意

兩人　得ませう。
ト時の太鼓になり、宗全、勝元は奥へ、鬼貫へ國景、
大小を持つて附き添ひ、東の方。民部、鹿之助、左門、
次郎附き添ひ、双方へ別れ入る。伴左衞門、山三、兩
人殘る。合ひ方。伴左衞門、思ひ入れあつて
伴左　成る程、天命といふものは爭はれぬものだ。葛城が
色香に迷ひ、私しの宿意を以て、一國亂を起す。既に家
名も今日限り。この上は切腹するより外はない。
ト大小なき思ひ入れあつて
フウ、。よくも武運に盡き果てたか。ヘイ。
ト思ひ入れあつて、山三へ向ひ
イヤ、ナニ、山三どの、御立腹の段は、誠に一言半句の
詞とてもござらぬ。御尤もでござる。この上は某は、切
腹するより外はござらぬ。この所に於て切腹仕らうと
は存ずれども、御覽の如く差添とてもござらぬ。この上
武士のお情に、某許樣の差添を、お貸しなされては下さ
るまいか。
山三　科極まつたる伴左衞門、名古屋山三が差添は貸され
ますまい。
伴左　イヤ、それ程の事に心の附かぬ、某でもござらぬが

足利家の執權、伴左衞門ともあらう者が、如何に不忠をなしたればとて、死罪に行はるゝも餘り本意なし。鳥の將に死せんとする時、その啼く聲悲し。人の正に死せんとする時、その言ふ事よしとの金言。山三、モシ、お家の一大事を白狀仕らう。その代り其許の差添を、貸しておくりやるまいか。

山三　お家の一大事とは。

伴左　さればサ、禁庭より賜はつたる世繼の綸旨、先達てより紛失仕つてござるが、其許には御存じかな。

ト山三、驚ろいたる思ひ入れ。

山三　ナ、なんとお云やる。

伴左　サア、その盜賊を白狀仕らうが、差添を貸してはおくりやるまいか。

山三　左樣までにお云やる事ならば、如何にも差添を貸し申さうが、して、その盜賊は何者でござる。

伴左　その盜賊は拙者でござる。

山三　アノ、其許が。

伴左　卽ち爰に所持いたして罷りある。

ト懷中より出して

この綸旨、其許へ渡し申さう。武士の情ぢや、差添を貸しておくりやれ。ならぬとお云やれば、この綸旨を引裂からうか。

山三　コリヤ、聊爾召さるな。

伴左　すりや、差添を貸さるゝか。

山三　然らば綸旨と引替へに。

ト綸旨と差添を互ひに取替へて、山三、綸旨を取る。この時伴左衞門、懷劍を出して切りつける。立廻りよろしくあつて山三を切り殺す所へ、バタ〳〵にて花道より、民部駈けて出て來り、この體を見て驚ろき、直ぐに伴左衞門を一太刀切る。伴左衞門、起き上がつて直ぐに民部に切りつける。これよりよろしく仕組みにて、民部、伴左衞門、互ひに手負ひ、民部、伴左衞門を抉り殺す。伴左衞門、この刀に取りつき思ひ入れ。

民部　大惡人の伴左衞門、思ひ知つたか〳〵。

伴左　山名宗全、鬼貫と心を合せ、賴兼を馬鹿者に仕立て、鶴壽丸を殺害なし、義政は流し者、我れ一天下の武將となり、海內に威を振はんと、思ひ立つたる大望も、名古屋山三に見顯はされ、渡邊民部が手にかゝり、この場に於て命を落すか、殘念な。

民部　もう、この世では叶はぬ反逆。冥途へ行つて旗上げ

しろ。

ト思ひの儘に抉り、刀を拔く。伴左衞門、バッタリと
なる。直ぐに乘りかゝつて止めを刺す。それなりに、
ウンと倒れる。花道より、鹿之助、左門、次郎、出て
來り、民部を引起し介抱する。

左門　コリヤ〱、渡邊民部、急所を除いて疵は淺いぞ。
鹿之　心を慥かに持ち召されい。
次郎　管領職の館でござるぞ。
三人　民部早友どの。

ト思ひ入れ。管弦になり、奥より勝元、藥湯を銀の茶
碗に入れ、袱紗に載せ持つて出て

勝元　出かした渡邊民部。かゝる忠義の武夫を持たれし鶴
壽丸は、果報人と云はん、また果報拙なきと云ふべきや
物の數にはあらねども、細川修理の太夫勝元、汝が忠誠
を感じ、藥湯を得させん。苦痛を遁がれよ。
三人　ハッ〱。有り難い仕合せに存じ奉ります。

ト介抱する。民部、心附き

民部　管領職の勝元どのより、自ら藥湯を給はる事、冥
加もなき仕合せ。さりながら、血汐の穢れ恐れあれば、
仰せつけられ下し置かれませい。
勝元　苦しうない〱。サア〱、苦痛を遁がれい〱。
民部　然らば頂戴仕りませう。

ト喜びながら茶碗を取りて呑む、側より皆々、寄つて
介抱する。

勝元　アヽ、これにつけても、忠義ゆゑとは云ひながら、
山三元秋、あつたらしき武夫を、むざ〱殺せし殘念さ
よ。
左門　ハッ。恐れ入りましてござります。

トこの時、後へ、宗全、出かゝり居て

宗全　この所へ踏み込み、伴左衞門を手にかけしは、上を
恐れぬ渡邊民部。勝元どの、其まゝに置いては政道が立
つまい。この宗全がぶち放す。そこ退き召されい。
勝元　お騷ぎあるな宗全どの、最前より事に准へ、鬼貫伴
左衞門を贔屓召さるゝ貴殿の心底。大名の館をも憚らず
劍戟に及びしは、不屆きとは云ひながら、渡邊民部なか
りせば、伴左衞門その身の立ち難きを存じ、如何やうな
る不屆き働らかんも計り難し。さあらば却つて鶴壽丸の
身の爲にもなるまじ。民部が事より宗全どの、斯くなる
上は速やかに、反逆人の張本と白狀おしやれ。
宗全　ヤア、この宗全に反逆などゝは、何を以て。覺えは

ない。
勝元　覺えないとは云はれまい。論より證據はこの連判。
ト連判を見せる。
宗全　それを。
ト取りにかゝる。勝元、手ばししく開き
勝元　大江の鬼貫、伴左衞門を始めとして、謀叛の張本山名宗全。なんとこれでも爭ふか。
宗全　サア、それは。
三人　速やかに白狀あるか。
宗全　サア。
皆々　サア／＼／＼。
勝元　ナ、、なんと。
宗全　勝元觀念。
ト切つてかゝる。立廻りにて留め、勝元この連判を火鉢の中へくべる。煙硝火立つ。
皆々　これは。
勝元　斯くの如く煙りとなしたるは、寛仁の政道。山三、伴左衞門討ち果す上は、一味徒黨の詮議はこれまで。鶴壽丸どのゝお家は萬代不易。冥途の家土産、民部喜べ。
民部　エ、、有り難い。
ト手を合せる。
三人　コレ。
ト思ひ入れ。
宗全　さはさりながら。
ト拔きかゝる。
勝元　ムウ。
ト思ひ入れにて留め。
いづれも退出。
皆々　ハア、。
勝元　これより二番目の始まり。
ト打込みにて、皆々、よろしく

幕

伊達染仕方講釋（終り）

東山殿戯場趣向
雪身行成卯花月
更衣共　貢物榮
雙顔覧

目録

一　伽羅大盡が廓通ひは
一座つらなる色世界
浮世戸平が物語り

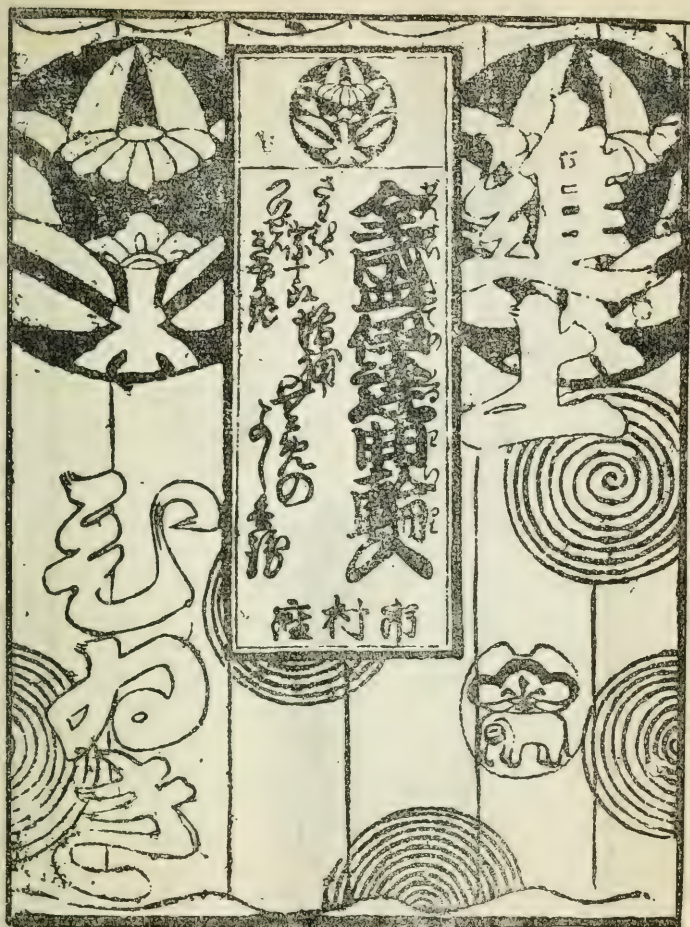
一　逸友仁木が鞘當論は
顔に紅葉の初戀路
豆腐屋三婦が昔語

その頃の狂歌にも
皆人の色に引かれて登りけり

京の高尾も
江戸の高尾も

全盛伊達曲輪入

揚屋
酒器　四番續

初演繪番附表紙

全盛伊達曲輪入

三建目　島原揚屋の場

役名――足利頼兼。傾城、高尾。同、薄雲。同、三ツ花實ハ逸友妹政岡。角力、小波勝之助。同、荒磯大右衛門。尤道理之助。名和無理之助。傾城、小百合。彈正妹、田村。腰元、花の井。同、増花。醫者、飛田剛敵。浮世戸平。

本舞臺、正面、二重舞臺、派手なる唐紙。上の方。長暖簾、三浦屋と染めたるを掛け、左右櫻の大樹。すべて島原揚屋の模様よろしく、所作の鳴り物にて幕明く。

ト直ぐに誂らへの黒木賣りの所作のかゝりになり、向うより、傾城小百合、彈正妹田村、腰元花の井、同じく増花、傾城三ツ花、いづれも練りの手拭を頭に置き、いづれも一様の形、鹿の子絞りの手甲、褄からげにて、銘々黒木を頭へ置き、踊りながら出て來る。面白く振りあつて

五人　オヽイ〳〵。

ト花道を招く。出の鳴り物になり、向うより、傾城薄雲、練りの手拭、振り袖、鹿の子の手甲にて、牛の綱を引いて出る。この牛に褥を敷き、その上に足利頼兼、羽織衣裳、紫の袱紗を敷き、横に乘つて出て來る。高尾の禿二人、煙草盆、煙草袋を持ち出て來る。後より、尤道理之助、上下衣裳にて、長柄の傘をさしかけ出る。後より、名和無理之助、上下衣裳。その後より、荒磯大右衛門、小波勝之助、角力取の形にて出る。その後より、浮世渡平、奴にて出て來る。皆々花道にとまる。

薄雲　雪ならば幾度袖の花吹雪、積る思ひの解け兼ねて、わざくれ酒の居續けに、どうぞと思ふお心を、繋ぐ縁の綱手綱。

頼兼　引く手に靡く薄雲が、戀のほだしに乘せられて、江口の君にあらねども、廓へ伊達の揚屋入り。

道理　その行列に差かけし、長柄も泥田棒だらり、左様然らば三つ指に、これは尤道理之助。

無理　此方は無理な無理之助、無理に强ひたる無意氣呑み。

荒磯　ちよつとお合ひのお手元のと、ひねる手先を口車、差すも刎ねるも角力の手。

小波　土俵の上の達引なら、例へ拳酒拳角力、かたやにかけて取らせない、行司の團扇を引かぬうち

戸平　名乘りをあげし一聲は、てんぺんかけて皆様へ、今日お目見得の初々しく、花も蕾の落し差し。

薄雲　花の道中引返し、牛の角文字直ぐな文字。

賴兼　忍ぶといへど小原女の、しどけ形振り取なりは

道理　今日の趣向の十五點。

無理　その秀逸は

荒磯　薪に花を折り添へて

小波　八瀨や小原女芹生の里。

戸平　木幡の里の馬ならで、君に引かれて、マアあれへ。

薄雲　そんなら殿さん。

賴兼　薄雲。

薄雲　子供來や、

禿皆　アイ〳〵。

ト清搔になり、皆々舞臺へ來る。女形殘らず立ちかゝつて

女皆　殿さん、きつう遲うござんしたなア。

賴兼　サア、早う來ようと思つたけれど、この牛めがのらりくらりと、ツイ遲うなつた。サア〳〵、戸平、下ろしてくれ〳〵。

戸平　ハツ〳〵。

ト賴兼を抱き下ろす。三ツ花、牛の褥を取つて上の方へ敷く。賴兼、その上へ乘る。

賴兼　ヤレ〳〵、しんどい事であつた。もう黑木は取措いて、皆も元の新造になるがよい。兎角廓でなければ酒も呑めぬわいの。

三花　ほんにマア殿さんは格別、薄雲さんは、さぞしんどうござんせう。

女皆　マア〳〵、抱へを取らしやんせいなア。

ト皆々抱へを取る。薄雲、こなしあつて

薄雲　サイナア、いつも〳〵お心の濟まぬ殿さんのお遊び、どうぞ御機嫌の直るやう、あられもない黑木の手業。さぞ皆さんが笑うてであらうわいなア。

無理　イヤ〳〵、なか〳〵見事であつた。取分けそもじの牛飼ひ姿。我が君のお氣に叶うたやら、御機嫌の御様子、我れ〳〵も祝着に存ずる。

荒磯　ア、モシ〳〵、無理之助さま、今日はその堅くろしい事は、堅く禁制々々。
無理　ぢやと云つて、我が君の御前なれば。
賴兼　ヤイ〳〵、無理之助、そりや何を申すのぢや。四角四面に陳分漢を聞くのが鬱陶しさに、役人どもを相應に難非難を付けて、目通りを遠ざけ、廓の供と云うては、伯父御樣よりの附き人、あの小波に荒磯ばかり。其方も身が詞を背くと、目通りを遠ざけるぞ。
無理　ハツ、あやまり入り奉りまする。
　ト きつと云ふ。
賴兼　また奉つたか。いま云ふ舌も乾かぬうち。ハテ、困つて奴ぢやわえ。
道理　無理之助どの、お嗜なみなされい。
女皆　オ、笑止。
田村　申し殿さん、お酒になさんせいなア。
賴兼　酒にしよう〳〵。銚子持て〳〵。
女皆　ソリヤ、お酒になつたわいなア。
　ト 皆々立ち騷いで、銚子杯を持つて來る。賴兼、杯を取上げる。小百合、酌をする。賴兼、一つ請けて、高尾が事を思ひ出したるこなしにて、あたりを見廻し

賴兼　もう酒も措かうわいの。斯う一つ請けても、この杯の仕樣がない。
　ト 酒を杯臺へ明け、杯を下に置く。
小百　殿さん、その杯をどうさんすえ。
賴兼　どうなと勝手にせい。
　ト 高尾が居ぬゆゑ、焦れるこなし、皆々氣の毒なるこなし。
薄雲　ほんに、高尾さんのつかへも、困つたものぢやわいなう。
田村　この頃は、度々發つてぢやわいなア。
三花　そりやモウ、苦界の身なれば、せき〳〵つかへが發るまいものでもなけれど、よく〳〵に思し召せばこそ、身請けなされてお館へ、お連れなされんとあるを、病氣病氣と、あんまりぢやわいなア。
田村　ソレイナア、ちつとは殿さんのお心を汲んで、例へ氣合ひが惡くとも、せめて座敷ばかりは、付合うて下さんすりやよいに。
女皆　ほんに、あんまりぢやわいなア。
　ト 小波、貰のみながら
小波　ハテ、廓の苦界と云ふものは、また別なものだなア

お心に叶うた高尾との、身請けなされてお館へ、お連れなさらうと云へば、病氣々々と氣隨氣儘。何事もお心の儘に、人も羨やむお身の上。それをマア澤山さうに。

ト思ひ入れ。

戸平　儘にならぬが浮世とは、唄の文句や浄瑠璃に、云うてはあれど、思うて見れば、丁度頼兼公の今のお身の上。任せぬ事にお心を勞せらるゝは、この上の御修行でがなございませう。

頼兼　ヤイ〳〵、其方達が申す事は、どうやら因果物語を聞くやうで、座敷がきつう滅入つて來た。なんぞ面白い事を、致して見せい〳〵。

道理　サア〳〵、御前の御意ぢや〳〵。

小百　小波さん、なんぞお心の浮く、お慰みをなさんせいなア。

小波　お慰みと云つても、わしどもが藝と云つては、碁盤の角でもとツつかまへ、蠟燭の火でも煽り消す位。ナア荒磯。

荒磯　それ〳〵、いつそ俵の曲持ちでも致しませうか。

戸平　コレサ、そんな不粋な事が、お慰みになるものか。

女皆　なんぞお心に叶ふやうな事が、ありさうなものぢやか。

ト皆々考へる。頼兼、こなしあつて

頼兼　オヽ、好い事を思ひ出した〳〵。

戸平　なんぞお心に、叶ひました儀がございますか。

頼兼　あるとも〳〵。最前新造どもが踊は見物した。これから其方達が踊を見物しよう。サア、踊れ〳〵。

女皆　こりや、ようござんせうわいなア。

ト男皆々驚ろき

無理　アノ、武骨な我れ〳〵どもに。

搔花　そのをかしいところが、お肴ぢやわいなア。

道理　ぢやと云うて。

トうぢ〳〵する。

頼兼　これは斯うせう。誰れ彼れなしに、おれが鬮を出す程に、長いを取つた者が、人身御供に當つたやうに、否應は云はさぬぞ。

皆々　こりや、ようございます。

頼兼　サア〳〵、鬮の用意せい〳〵。

女皆　アイ〳〵。

トてん手に鬮を拵らへ、頼兼に渡す。

頼兼　サア〳〵、皆爰へ來て、鬮を取れ〳〵。なんでも長

いを取つた者が、踊るのぢやぞ。
皆々　畏まりました。
ト捨ぜりふにて、男皆々、鬮を取る。
頼兼　長いは誰ぢや〳〵。
男皆　私しのは、この通りでござりまする。
ト短い鬮を出して見せる、此うち、荒磯、長い鬮を持つて、皆々の鬮と見比べ、頭を掻き〳〵花道へ行く。
女皆　荒磯さん、待たしやんせ。
ト引留める。
小波　荒磯、お主はどこへ行くのだ。
荒磯　サア、ちよつと地取りをして來ようと思つて。
女皆　アレ殿さん、逃げますわいよア〳〵。
頼兼　ヤイ〳〵、荒磯、卑怯な。鬮を出せ〳〵。
ト女皆々かゝつてこそぐる。
女皆　サア〳〵、鬮を出さんせいなア〳〵。
ト無理に鬮を引出す。
頼兼　ハテ、横着な奴ぢや。サア〳〵、荒磯、踊れ〳〵。
女皆　踊らんせぬと、こそぐるぞえ。
ト皆々かゝる。
荒磯　馬鹿々々しい。踊が踊られるものか。

女皆　踊らんせぬと、こそぐるぞえ。
トまた皆々かゝる。
荒磯　アヽコレ、あやまつた〳〵。
皆々　サア、踊つた〳〵。
荒磯　よい〳〵。どうするものだ。思ひ切つて踊るべい踊るべい。おれが隠し藝の、秋田音頭を踊るべい。
頼兼　こりやよからう。
戸平　サア〳〵、秋田音頭が
皆々　所望ぢや〳〵。
トこれより下座へ取り、秋田音頭になり、荒磯、無性に踊る。よき所にて、向うより、飛田剛敵、惡婆頭、藪醫者の拵らへにて出て來り、荒磯が踊を見て、思はず浮かれ〳〵舞臺へ來る。荒磯、これを知らずに剛敵を刎ねのける。これにて、剛敵、ウンと目を廻し倒れる。これにて皆々驚ろき、女形は頼兼を圍ふ。戸平、見て
戸平　ヤア、此奴は藪醫者の飛田剛敵だ。
皆々　目を廻した〳〵。
ト皆々立騒ぐ。戸平、小波、呼び活ける。
女皆　氣が付かぬわいな〳〵。

トうろ〳〵する。

戸平　これサ、さう騒ぐ事はない。此奴は醫者だから、定めし氣付けを持つて居るであらう。懷中を見るがよい。

皆々　それ〳〵。

ト剛敵が懷中より紙入れを出し、小貝を見付け

小波　なんだか貝殼に練り藥が入れてあるが、てつきりこれが氣付けであらう。

皆々　早く服ませるがよい。

ト皆々捨ぜりふにて、小波、貝殼の藥を指に付け、剛敵に服ませる。荒磯、引起して呼び返す。

荒磯　剛敵やアい〳〵。

トこれにて、びく〳〵動き、しやつきり立ち、をかし味。荒磯、首を押へ

皆々　氣が付いたか〳〵。

ト剛敵をこづき〳〵、これを動かすこなし。

荒磯　ハテ、きつい熱だ。おれが手をドッキ〳〵と刎ね返すやうサ。

無理　そしてマア、どこも彼所も筋張つて。

道理　顏の色が紫色に光ります。

ト剛敵、苦しがつて無性に反る。

荒磯　ア、コレ、さう反つては惡い〳〵。

ト押へる。剛敵、苦しみながら何か云へど、呂律が廻らぬこなし。

小波　此奴は呂律が廻らない。よい〳〵になつたさうだ。おれが末斯の水を呑ませてくれべい。

ト手桶の水を柄杓にて呑ませる。剛敵、心よきこなしにて、ベタ〳〵と下へベッタリと坐る。

皆々　剛敵々々、氣が付いたか〳〵。

ト剛敵、正氣になりしこなし。この騒ぎに、薄雲、見物に見えるやうに文を落す。これを戸平拾ひソッと披き、下の方にて讀む。剛敵、あたりを見廻し

剛敵　ヤレ嬉しや、死にはせぬさうな。

ト脈を見て

今これへ來ると、頭がガンと鳴つたと思うたが、ハ、ア、目を廻したさうなが、この口中のひりつきは、ハ、ア、世界の譬への通り、世に人鬼はないとやら、わしが苦しむのを見て、どなたか藥をくれられたと見えるわい。

小波　あんまり見る目がいとしさに、わしが藥を服ませてやりました。

剛敵　それは關取、忝ない。

ト丁寧に辭儀をして
ハテ、結構な藥ぢやさうで、今に舌がヒリ〳〵致すが、
これはマア、なんと申すお藥でござるな。
小波　何か知りませねが、こなさんの紙入れの中の練り藥、
大方氣付けであらうと思つて進ぜました。
剛敵　手前紙入れに、氣付けはない筈ぢやが。
ト合點のゆかぬ思ひ入れ。
小波　それでも見さつしやい。コレ、この紙入れの、この
藥を進ぜました。
ト紙入れを見せる。剛敵恟りして
剛敵　ヤ、、とひやうもない藥を服ませたものぢや。こり
や、用ひる所が違ひますわいの。
ト苦々しきこなし。
荒磯　それでも人參が多いから、とんだ逆上せやうだ。
小波　して、こりやアなんの藥だ。
剛敵　サア、恥かしながら、これは手製の長命丸でござる。
皆々　ヤア。
ト呆れる。
賴兼　氣付け代りに長命丸とは、出かしをつた。ハ、、、
サア、これに參つて、一つ呑め〳〵。

剛敵　ヘイ〳〵、有り難うござりまする。
皆々　ソリヤ、御機嫌が直つたわいなア。
荒磯　サア〳〵、剛敵老あれへ〳〵。
剛敵　イヤ〳〵、拙者儀は、高尾太夫積氣ぢやと申して、
逢ひを得ましてござります。病氣でござれば、ちよつと
見廻りまして參じませう。
賴兼　それ〳〵、太夫が積氣ぢやと申して、今日も文顏さ
へ見せぬ。早う見舞うてやれ〳〵。
剛敵　左樣ならば御免下されませ。いづれも後刻。
ト合ひ方になり、剛敵、奧へ入る。賴兼、此うち、横
になり、ウト〳〵眠つて居る。戸平、最前の文を讀み
しまひ
戸平　浮さま參る、御存じより。この手蹟は。
ト薄雲、恟りして
薄雲　ヤア、それは。
トちやつと取つて懐中する。戸平、思ひ入れ。荒磯、
ソレと薄雲にかゝる。と小波、隔て
小波　こりや、何をするのだ。
荒磯　浮さまへ御存じと書いたは、慥かに東江流。聞かず
と知れた高尾が間夫、浮田左金吾と云ふ蟲があるから、

病氣々々と何を引摺り込んで置かうも知れない。高尾が部屋へ踏み込んで、間夫の尻尾を押へるを、お主はなんで支へるのだ。

小波　サア、そりやア。

薄雲　ア、、これはなア、荒磯さん、滅多な事を云はしやんすな。こりや其やうな物ぢやござんせぬ。

ト頼兼へ心遣ひのこなし。頼兼、ウト／＼眠つて居る。

荒磯　例へあらうがあるまいか、乘りかゝつた間夫の詮議。高尾ぐるめにそびいて行く。

ト行くを留めて

小波　ハテ、待ちやれな。お主ばかりはやられない。鬼貫さまの指圖で、お側に附き添ひ居るからは、默つて見ても居られない。おれも一緒に行くべいワ。

荒磯　そんならお馬を乘り出して

小波　お主と一緒に

荒磯　高尾が部屋へ

小波　荒磯來やれ。

荒磯　合點だ。

ト行かうとする。兩人を戸平引留め

戸平　關取待たつしやい。

小波　なんで留める。

戸平　先刻にから押默つて聞いて居たが、こさなん達は廓の所謂は眞暗だ。さう木折りに行かぬが戀路の習ひ。間夫を迫くのは遣り手の役。一夜流れの身の上でも、力づくや金づくで、女郎の誠が買はれるものか。所詮内外の目を抜いて、間夫狂ひでもする働らきのない女郎なら、御前のお氣にも叶ふまい。それをマア小波が、間夫の詮議と馳け出すが、毛を吹いて疵とやら、お家のお名の出た時は、却つて御前のお爲にもならぬ程に、マア、待ちやれよ。

小波　ハア、この男はとんだ絡んだ事を云ふわえ。例へお名が知れたればとて、誰れに遠慮。間夫の詮議をしぬいて見せるワ。

戸平　面白い。おれが又、邪魔して見せるワ。

小波　アノお主が。

戸平　なんでもない事。

小波　そりや又どうして。

戸平　斯うして。

トかゝる。立廻り。薄雲、三ツ花、この中へ入る。荒磯、戸平へ詰め寄る。いづれも思ひ入れ。頼兼、目を

覺まし

賴兼 ヤイ／＼、そりや何を爭ふのぢや。折角面白う結んだ夢を覺ましてしまつた。憎い奴等ぢや。扣へ居らぬか。

兩人 へ、、イ。

トこれにて扣へる。

賴兼 こりや、どうもならぬ。今一寢入りしよう。誰ぞ枕を持て／＼。

三花 アイ／＼。そのお枕は、私しが差上げます。

ト合ひ方になり、三ッ花、そこらを見廻し、戸平が持つて來た伽羅の下駄を見付け、こなしあつて、賴兼が前へ持つて來り

ハイ、殿さん、お枕を上げうわいな。

賴兼 これは三ッ花か。ドレ

ト下駄を見て、こなしあつて

いま三つ花が持參なしたる枕を見れば、こりやコレ予が物好きしたる伽羅の木履。ト、、流石は傾城、沓新らしといへど冠にならすと、世の諺をも辨まへず、伽羅は貴き物とのみ心得居るな。コリヤヤイ、木履が枕になるものか。たはけ者めが。

三花 左樣ならば木履は、むさい汚ない物と、お心が付きましたかな。

賴兼 なんと。

三花 そのお心が付きましたら、何ゆゑお身持ちをお嗜なみなされませぬ。

賴兼 なんと。

三花 伽羅は諸木に勝れて、その香氣高く、人も敬ひ尊めど、木履となれば自ら、誰れ取上げる者もなく、遂には泥に朽ち果つる。先づその如く、お家譜代の御家來をお嫌ひなされ、追從輕薄する人を

トあたりを見て

まさかの時の御用には、立ちますまいかと、憚りながら存じまする。

賴兼 ヤ。

三花 サア、その佞人が、まさかの時の御用に立つならば、伽羅の木履もお枕の、代りになるまいものでもござりませぬ。

賴兼 ヤア、傾城遊女と容赦すれば、我れに詞詰め。察するところ汝も

三花 矢ッ張り傾城遊女に違ひござんせん。斯う申すがお腹が立たば、どうなりとなされたがよいわいなア。

トつかうどに云ふ。頼兼、怺へ兼ね

頼兼　もう料簡が。

ト小さ刀へ手をかける。戸平、ツカ〳〵と寄つて、三ツ花を圍ひ、しつかと留める。

コリヤ、戸平、なぜ留めた。

戸平　イヤ、お留め申しは致さねど、高で傾城、彼れらが詞をお取上げござつては、却つてお刀の穢れ。先づ〳〵お止まり下されませう。

トこれにて、頼兼、こなし。

無理　最前よりも餘程の間。御前にはお座を移され、然るべう存じまする。

頼兼　如何にも。これより新造どもを相手に鬱散せん。荒磯小波も奧へ參れ。

皆々　先づ入らせられませう。

ト唄になり、頼兼、行かうとするを、三ッ花寄らうとする。戸平、これを支へる。頼兼に付き、皆々奧へ入る。戸平、三ッ花、殘る。合ひ方。

戸平　政岡さま。

三花　戸平。

戸平　只今の御様子では。

三花　幾度お諫め申しても、お聞入れはござりますまい

戸平　この上は、高尾どのゝ首尾の解るまでは

三花　こりや、滅多に廓は放れられぬわいなう。

戸平　すりや、政岡さまには。

三花　イヤ、我が若御歸館あるまでは、矢ッ張り元の三ッ花太夫。

戸平　そんなら花魁。

三花　戸平さん。

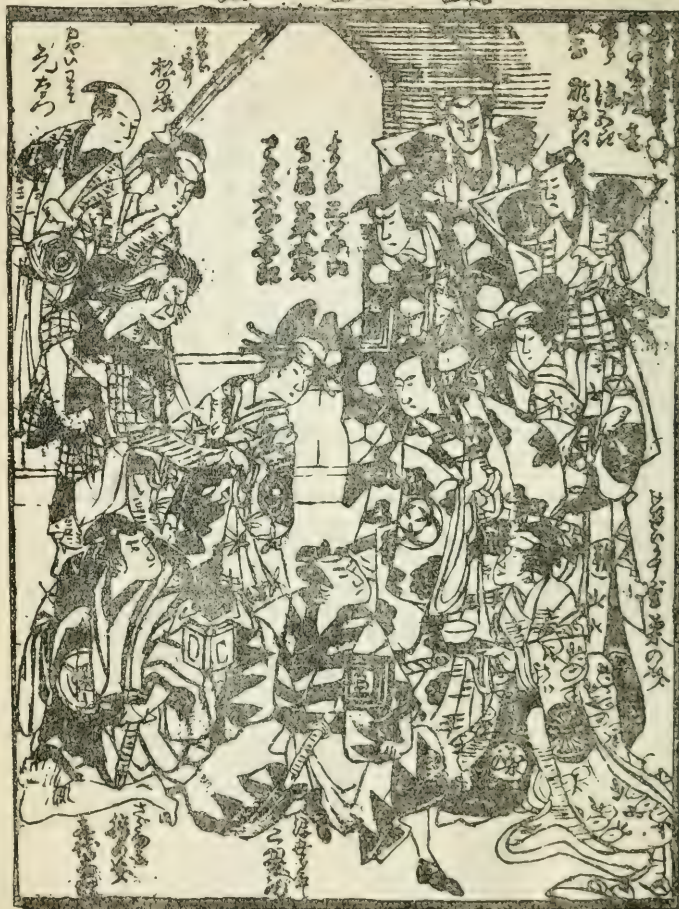
戸平　サア、來なせえ。

ト唄になり、三ッ花が手を引き、奧へ入る。合ひ方にて、薄雲、出て來て

薄雲　今の様子を聞けば、あの三ッ花さんも、矢ッ張り殿さんのお内方。あれ程までに御意見をなさんすをも、お聞入れなう、身請けの相談まで極まつた殿さんを、嫌はしやんす高尾さんも、高尾さんぢやわいなア……それに引替へこの薄雲は、どうした因果か、あの殿さんに……叶はぬ戀路と諦らめても、どうも思ひ切られぬ、切られぬわいなア。

ト泣き落す。奧にて

頼兼　薄雲や〳〵。

初顔の絵番附

ト合ひ方にて、賴兼出て來る。

オウ、薄雲、其方は爰に居やつたか。

トこれにて薄雲、泣き顏を隱し

薄雲　殿さん、なんぞ御用でござんすかえ。

賴兼　サイノ、其方を尋ねるは、高尾が病氣。ちつとも心よいか、樣子が尋ねたけれど、高尾の部屋へ行たなら、結句氣むづかしう思ふであらうと思つて。

薄雲　ほんに御前樣は、御深切でござんす。せめてはその百分一。

賴兼　ヤ。

ト薄雲、こなしあつて

薄雲　マア、下にお出でなさんせいなア。

ト賴兼が側へ寄り

ほんに御前樣は、おめでたうござんすなア。

賴兼　何がいなう。

薄雲　高尾さんの身請けが濟んで。

賴兼　サア、太夫が身請けの事は、執權彈正が指圖で、マア身請けは濟んだれど、何を云うてもあの病氣。

薄雲　サイノ、高尾さんを根曳きなされたからは、もうこの廓へはお出でなさんすまいなア。

賴兼　イヤ〳〵、根曳きはしたれど、高尾が館へ行くのを嫌がつてぢやに依つて、勤めを引かせて親方に預けて置けば、矢張り今までの通りに通ふわいの。

薄雲　そんなら矢ッ張りお通ひなさんすかえ。

賴兼　通はいでよいものかいの。

ト薄雲、嬉しきこなしにて

薄雲　わたしや又、高尾さんが館へ行かしやんしたら、もうお顏は見られまいと思つて。

賴兼　そりや、誰が顏を。

薄雲　エ。

ト思ひ入れあつて

アノ、高尾さんの顏を。

ト賴兼、呑み込みこなし。

賴兼　なんの、病氣なればとて、病氣々々と爰へ顏さへ持つて來ぬあの高尾。せめて其方なと爰へ來て、伽をしてたもらぬか。

薄雲　ニ、アノ、わたしにかえ。

賴兼　サア〳〵、爰へ來て、話しやいなう。

薄雲　ハイ〳〵。

ト嬉しきこなし、側へ寄らうとして

イエ〳〵、お淋しくば爰に居りまする。あなたと差向ひで、爰に居りまして、ひよつと高尾さんに。
ト方々見廻し、屏風を見て取つて來て、眞中へ立て、
斯う隔て〻置かねば。
ト二枚屏風を楯にする。
頼兼　ハヽア、男女別ありと出おつたな。
薄雲　さうではなけれど、高尾さんが見やしやんした時は悪うござんすわいなア。
頼兼　さう心遣ひする事なら、側に居てもらはないでもよいぢや。シタガ、斯う一人つくねんとして居ると、退屈なものぢやが、アヽ、誰れぞ話し相手を。
ト云ひながら、フト屏風の繪を見て
文屋の康秀、小野の小町。ハヽア、どれも近付きな顔ぢや。中にも小町の詠歌は、色見えてうつらふ物は世の中の
薄雲　人の心の花にぞありける。エヽ、いたづらしい歌のさま。人の心が花やら嵐やら、上邊から見えぬものぢやなア。
頼兼　イヤ、味に絡んだなア。随分上からも見えるぢや。オヽ、次は僧正遍照。お前は御出家ぢやから、戀の意味は御存じござるまい。傾城は元人を騙す空涙。何かは玉と欺むきまする。
ト薄雲へこなしあつて
イヤ、欺むきまする高尾が目顔を、忍んでどうやらわたしに。
トこなしあつて
サテ、まんざら嫌ではなけれども、誠それが定ならば、此やうなよい首尾は、又とあるまいてなア。
ト薄雲が方を見い〳〵こなし。薄雲もこなしあつて
薄雲　オヽ、きつう寒うなつたわいなア。酒一つ呑んで見ようかなう。
ト銚子杯を持つて來る。
頼兼　ホウ、薄雲は酒がなるか。
薄雲　ハテ、この杯で一つ二つは。
頼兼　それはよい樂しみぢや。おれも一つ呑まう。爰へ持つておぢや〳〵。
ト薄雲、嬉しきこなし。
薄雲　アイ〳〵、あなたも上がるかえ。
ト杯を持つて來る。
頼兼　マア〳〵、お主、毒味してたも〳〵。

薄雲　ハイ〳〵。

ト一つ呑んで

頼兼　ハイ、お毒味を致しました。

頼兼　斯う、其方が呑んで、斯うさすと云ふは、これは何やらの時の杯のやうぢやの。

薄雲　そんな事は存しませぬわいなア。

頼兼　エヽ、姉女郎を見習ひをつて、よう存じて居らうが。

ト薄雲を引寄せる。薄雲こなしあつて

薄雲　それでも人が來ると、惡うござりまするわいなア。

頼兼　ハテ、人が見ても、名代ぢやに依つてよいわサ。

薄雲　でも、ひよつと高尾さんへ知れては。

頼兼　ハテ、その時は又、どうなと仕樣があらうわいの。

薄雲　そんならよいかえ。

頼兼　ようならてわいの。

ト引寄せる。

薄雲　殿さん。

頼兼　薄雲。

薄雲　オヽ、嬉し。

ト抱きつく。奥にて

剛敵　イヤ〳〵、大事ござらぬ。もう大方それで納まります。

ト兩人飛び退き

頼兼　あの聲は。

薄雲　殿さん、そんならわたしが部屋で。

ト頼兼、こなしあつて

頼兼　薄雲、おぢや。

ト唄になり、頼兼、薄雲を連れ奥へ入る。暖簾口より剛敵、出て來り

剛敵　アヽ、大名でも、全盛でも、病には勝たれぬわいの。

ト云ひながら、こなしあつて、あたりを見廻し、懐中より伽羅の下駄を出し

これこそ頼兼が物好きしたる伽羅の木履。鬼貫さまへ持參すりやア、この身の出世。ソレ。

ト行かうとする後へ、戸平、出かゝり居て

戸平　待ちやアがれ。この戸平が預かつたその下駄を、どこへ持つてうしやアがる。

剛敵　知れた事。鬼貫公の御前へ持つて行く。奴め、邪魔せずと爰放せ。

戸平　細言吐かさずと爰放せ。

剛敵　邪魔せずとそこ退け。

戸平　爰放せ。
剛敵　ドッコイ。
トこれより下駄を枷に、少し立廻りあつて、ドッコイと見得になる。チョン／＼にて、この道具ぶん廻す。
本舞臺、正面、高尾が部屋、茶の湯座敷のかゝり。上の方、床の間、好みの掛け物、活け花よろしく、上の方に粋なる竹垣、下草見合せ、手水鉢、座敷よき所に風呂を据ゑ、茶器いろ／＼取揃へ、爰に高尾襠裲衣裳、莨盆を置き、煙管を杖に俯向き、屈托の思ひ入れ。誂らへの靜かなる鳴り物にて、道具納まる。
ト高尾、床の間の掛け物を見て
高尾　逢ふ事のなきをうき田の森に住む、呼子鳥こそ我が身なりけれ。この御手蹟を見るにつけ、只懐かしきは左金吾さん、今はどうして居やしやんすやら、問ひ訪れもなる事か、獨りかたしく袖の露。床は海枕は山と立昇る胸の焔の晴れやらぬ、因果なこの身と思ふ程、いつそ死にたい死にたいわいな。
トこなしあつて、矢張り合ひ方にて、頼兼、少し醉うたるこなしにて、奥より出て來り、圍ひの口より
頼兼　そこに居やるは高尾か。先刻にから逢ひたうてならなんだが、今日も其方は病氣と云ふ事ぢやに依つて、この頼兼、其方に逢うて、また機嫌が惡うならうかと思うて、遠慮して見たが、逢うて云はにやならぬ事があるに依つて、案内もなくこの圍ひへ來たのも、其方の顏が見たいが山々。高尾、堪忍してたも／＼。
高尾　殿さん、じやら／＼と、不束なわたし、情を賣る勤めの習ひとは云ふものゝ、人に任せぬわたしが
トせりふを消して
頼兼　コレサ、高尾、どうしたものぢや。又ふさぐ事を云うてくりやるかいの。其方ゆゑならこの頼兼は、命も惜しまぬ。これも思へば、大名の惚いのも見憎いもの。ちつとは又、わしが心も晴るゝやうに、高尾、どうぞ仕様は。
トあたりを見て、釜のたぎるに目を付け
オヽ、たぎるワ／＼、どうも云へぬ。釜のたぎるは松風、その風に從ふ高尾の君の柳腰、これも又風雅ではないか。
ト高尾へしなだれるこなし。高尾、ツンとして
高尾　殿さんの久しいものぢやわいなア。

頼兼　餘りよう湯がたぎつた。なんと高尾、一服おねだり申さうか。

高尾　どうしてアマ、殿さんの前で、不束なわたしが手前。

頼兼　そこが風雅の道ではないか。

高尾　そんならどうでも。

頼兼　所望したいわいの。

高尾　薄雲さん〳〵。

薄雲　アイ〳〵。

ト合ひ方にて、薄雲、出て來り

殿さん、爰にお出でなさんしたかえ。

トこなしあつて

高尾さん、なんの用ぢやえ。

高尾　殿さんが茶が飲みたいと云うてぢやに依つて、一服立てゝ上げさんせ。

薄雲　不束な手前、どうしてマア。

ト頼兼、こなし。

頼兼　イヤ、太夫が名代に、薄雲が手前、大事ない〳〵。

トこなしあつて

ア、、折角太夫が手前を望んだに、惡い所へ水さしの、袱紗を我が物と、思ひ黄袱紗取揩いて

高尾　ほんの手補も打こえて、人の目に立つ紅袱紗。

薄雲　結ぶ綱手の細すだれ。

頼兼　三疊天目の……心の鬮ひ。

高尾　幸ひお客を待合の

頼兼　辻切りならぬ向う切り。

薄雲　互ひに思ふ中潜り、

高尾　解けた心も水こぼし。

頼兼　文玉章は幾度も、はこぶ手前の座敷立。

薄雲　そんなら一服。

頼兼　所望しようか。

ト竹笛入りの合ひ方になり、薄雲、手水を遣つて圍ひへ上がり、茶を立てにかゝる。高尾、こなしあつて、有り合せたる硯箱を取り、卷紙を取上げ、文を書く。頼兼、後よりこれをソッと覗く。高尾、これをちよつと見て、書きさしの文、引裂き、破つて捨てる。これを頼兼ソッと取つて袂へ入れる。高尾、また文を書く。頼兼、手持ちなく

オヽ、花がよう入つたわえ。

高尾　ほんの投入れでござんすわいなア。

頼兼　コレ高尾、なぜに其やうにつれなうしてたもる。雨

の夜雪の夜もいとはず、君に思ひは深草の、少将を打越したこの頼兼、武士は物の哀れを知る。傾城は色に焦る情を知る。なんと高尾、思ひ直してたもる心はないか。

ト高尾、こなしあつて

高尾　縁は異な物、味な物でござんすかいなア。

頼兼　そりや餘りつれないぞよ。

ト引留めるを、つれなく振り切る。頼兼、この時フト掛け物を見て

逢ふ事のなきをうき田の森に住む、呼子鳥こそ我が身なりけれ。

トこなしあつて

あの手蹟は。

ト高尾、こなしあつて

高尾　殿さん、腹が立つかえ。

頼兼　斯う云ふ事があるゆゑに。

ト思ひ詰めたるこなしにて、スッと立つ。この時、薄雲、袱紗に持ち添へ茶碗を出す。頼兼、氣を變へ、下に居て、茶碗を取り、一口呑んで

こりや服加減。

薄雲　どうでござんすやら。

ト後へ小波出かけ、窺うて居る。

頼兼　高尾、なんと一口呑みやらぬか。

ト默つて居る。

オヽ、幸ひの口取り。

ト身請け證文を出し、抜き差出す。高尾、これを見て

高尾　こりや、わたしが身請けの手付け證文。

頼兼　これでは呑んでたもらずばなるまい。

ト茶碗を差つける。高尾、證文を取つて寸々に引裂き打ちつけながら茶碗を打ち落し、スッと立つを、頼兼裾を押へる。薄雲、心遣ひのこなし。

薄雲　覆水再び盆に返らず。

高尾　アタしつこいお屋敷さんぢやわいなア。

ト裲襠の裾を拂ふ。頼兼、堪え兼ねて刀へ手をかける。後より、小波、走り寄つて頼兼を留める。薄雲、高尾を隔てる。頼兼、口惜しき思ひ入れ。高尾、こなし、

ホヽヽヽ。

ト笑ふ。これをキッカケに各々よろしく

ひやうし幕

四建目

豆腐屋の場
月見橋の場

役名——足利頼兼。豆腐屋三郎兵衛。同女房、お國實ハ薄雲。同丁稚、豆助。常陸國幸鬼貫。多澤見次郎。下部、三平。醫者、富田剛敵。判人、田町の銀七。角力、小波勝之助。豆腐屋庄兵衛。

本舞臺、三間の間、世話場の道具。正面に押入れを見せ、大釜を据ゑ、豆腐船、岡持、その外見得よく取付け、門口据ゑ物。爰に下男豆助、前垂れ襷にて豆腐を切つて居る。お國、世話女房の形にて、前垂れ襷にて豆を挽いて居る見得。てんつゝにて、幕明く。

ト仕出しの買ひ手二人、勇みの形にて、いろ／＼入れ物を持つて來て

仕出　オイ、小半丁、八はいに切つてもらはう。

豆助　オイ／＼。

ト切つてやる。

仕出　油揚を四つくんな。

豆助　オイ／＼。

ト油揚をやろうとする。

仕出　イヤ、おらアお娘の手からでなけりやア取らねえよ。

豆助　そりやアなぜ／＼。

仕出　ハテ、知れた事。評判の浮世豆腐屋の内の娘は、美しい者との噂。それで喰ひたくもない油揚を買ひに來やしたも、お娘の手でも握らうと思つて……どうだお娘、斯う云ふ心中者、あまり憎うもあるまいが。

トお國に抱きつく。豆助、中へ入り

豆助　そりなやらない。浮世豆腐屋三郎兵衛が身内に於てさる者ありと聞えたる、足の裏の豆助。主人の難儀見捨て難く、ちよつと邪魔になりに出た。なんと剛氣な忠臣であらうがの。

仕出　エヽ、いま／＼しい二本棒め。此奴に構ふ事はない。

同　お娘、爰へ來な／＼。

トまた取りつくをお國振り放し

くに　エヽ、惡い事さしやんすな。わたしや三郎兵衛さんと云ふ、主のある身でござんすぞえ。

二人　ヤア、そんならもう亭主を持つて居るか。
豆助　持つて居るも凄まじい。しかも好い男が二人あるわい。
二人　でも、澤山に持つて居るなア。
豆助　わいらは知らぬが、先に入つた聟どのは、此方のかみさんの甥御、大工の庄兵衞と云うて、此奴も男は高麗藏もどきだけれど、底心の悪い犬の胸氣。どうでも何やらも悪いかして、お國さんが不承知。それで三郎兵衞と云ふ代りが入つた。此奴は又、男も好し氣立もよし、彼の味ひも好いかして、お國さんと剛勢に仲がよい。それに、うぬらだてらにてんがうされちやア、一體病身者が腎虚でもして死なんしては、おれが小遣ひを貰ふ施主がない。買ひ物を買つたら、とつとゝ去んでもらはうわい。
仕出　いま〳〵しい。道に幾らもある豆腐屋を乘り越して爰へ買ひに來るのも、有やうは娘を張らう爲ばかり。
同　それ〳〵、今のを聞いては脈が上がつた。
同　エヽ、あつたら娘をいま〳〵しい。ドリヤ、歸らうぢやないか。
同　サア〳〵、來やれ〳〵。
ト通り神樂になり、兩人、向うへ入る。

くに　エヽモウ、つッと阿房の癖に恥かしい。男が二人あるの三人あるのと、いろ〳〵の事を云やるの。
豆助　でも、嘘ぢやアなし。
くに　アレ、又いの。そんな事を云やる手間で、挽きさしの豆を早う挽いてしまやいの。
豆助　アイ〳〵。
ト臼の側へ行て
晝はおれが臼で豆を挽く。夜はお前の臼を三郎兵衞さんが
くに　アレ、又いの。
豆助　ドリヤ、だんまりで豆を挽かうか。
トまた通り神樂になり、剛敵、三建目の醫者の形にて田町の銀七、後より町人の形にて、夕立にあひしこなしにて、連れ立つて出て
銀七　モシ〳〵、飛田剛敵さん、どこへ行きなさる。
剛敵　こりやア田町の銀七さん、玉買ひ出しに行かつしやりましたか。
銀七　今年はとんと奉公人が少ないから、藪の下まで行きましたが、大きに降られて困り山サ。
剛敵　ハテナ、此方は只ばらついたばかり。併し、主は雨

性だよ。
銀七　なぜ〳〵。
剛敵　ハテ、どこへ行つてもふられるぢやないか。
銀七　何を云はつしやる。時に、どこへござるのだ。
剛敵　醫者がどこへ行くものだ。病家へ行きますワ。
銀七　アノ、お前の藥を服む人がござりますか。
剛敵　とんだ事を云つたものだ。あの豆腐屋の娘の薄雲もぶら〳〵病。わしが癒したその緣引きで、聟の三郎兵衞が引風も、たうとうおれが藥で、瘧とまでは重うした。
銀七　ハテ、それはお巧者だ。わしもあの薄雲には、勤めてあつた時懸り合ひで行かにやならぬ。そんなら一緒に行きませうか。
剛敵　それは幸ひだ。そんならこの藥箱を持つてござれ。
ト懷中より藥箱を出す。
銀七　アノ、これが藥箱か。辨當箱が呆れるワ。
剛敵　無駄を云はずと、銀七供せい。
銀七　おきやアがれ。
トまた通り神樂になり、舞臺へ來て
剛敵　飛田剛敵お見舞ひ。
ト內へ入る。

豆助　オヽ、剛敵さん、お出でなさつたか。隱居さん、コレ、醫者さんの剛敵さんがござんしたぞえ。
ト奥より
きた　オイ〳〵、なんぢや、剛敵さんがお出なさつたとか
トお北、婆の形にて出て
オヽ、これは剛敵さん、ようお見舞ひ下されました。
銀七　お北さん、この頃はお目にかゝりやせん。
ト門口を覗く。
きた　オヽ、これは銀七さんかいなア。あつちは降りましてござりますかえ。
銀七　降つた段か、づぶ濡れサ。
ト入る。そこにある手桶にて足を洗ひ
剛敵　時に、病人は如何でござる。
きた　この頃は、大分心よいと申して、商ひに參りました。
剛敵　ハテ、發り覺めのする瘧病の習ひ、外歩きしてぶり返して、この生藥師の名の出ぬやうにしてもらひませうぞ。
銀七　イヤ、それよりは此方の出入り。爰に居る薄雲どの、まだ小二年は殘つて居る年の內なれど、知つての通り勞症。殊にこなさんが涙をこぼして、內へ下がつて療法し

たいと、おれへの頼み。それゆゑ三浦屋へは、いろ〳〵と云つて、殘金を三十兩に負けてもらひ、下げは下げたが、親方からの立て催促。それに今日の明日のと隙入つて、こりやマアどうする氣でござんすぞいの。

豆助　ハテ、どうする氣は戻さぬ氣サ。

きた　コリヤ、默らぬか。

豆助　オツと默つた。

きた　イヤモウ、疾に御挨拶も致しまするのでござりまするが、剛敵さんはお心安いゆゑ、お隱し申す事はござりませぬが、打續いての不仕合せ。殊にこのお國と私しとは腹替り、粗略にしては過ぎ行かれし、先の三郎兵衞どのへどうも……と申して女子の手一つ。それゆゑ私しが甥の大工の庄兵衞、喧嘩から大工仲間を刎ねられ、うろついて居るこそ幸ひと、お國が廓から戻つて、本腹しやると一つにしようと、家へ呼び入れ置きましたが、兎角止めぬ喧嘩好き。後の月の四條河原の大喧嘩、それから五十日の科證手金。今日も今日とて家主樣が、お連れなされて御代官所へ、お檢めに參りまする。

剛敵　成る程、爰の庄兵衞どのゝ喧嘩で、相手の頭をぶち毀した時も、この剛敵が一寸一兩で繕ひました。町内から出た金で、この節句前は福徳の三年目。

きた　それゆゑに、庄兵衞には斷わり立て、今の三郎兵衞を一家からもらふ時、いろ〳〵やかましう云やつたれど、どうでも緣のあるかして、その女夫仲のよさ。

豆助　ソレサ、夫婦仲で起請まで取交して、ちん〳〵鴨。アノ旦那さんの病氣も、慥かに腎虛に極まつたなゝます、隱居さん。

きた　また差出るわいの。

豆助　オツとしよ。

銀七　成る程、それで二人聟の譯が解つたが、氣の毒なのは庄兵衞どのゝ身持ち。

剛敵　サア、あの身持ちは耆婆扁鵲が藥でも癒らぬ。また三郎兵衞も、おれがかゝつて居ると、どこぞでは殺さにや置かぬ。いつそ二人の聟を追ひ出して、おれにかゝる氣はないか。拙者などは見さつしやる通り、名さへ飛出剛敵。コレ、所持の釘も剛敵、病家も剛的。ナウ、銀七どの。

銀七　それ〳〵、今で流行の、醫者人を殺す事が大名人。かゝつた者こそ因果歷然。

剛敵　エヽ、おきやアがれ。

銀七　何を云うても、こなさんは女子の事。三郎兵衛どのに逢つた上での、めつきしやつき。マア、それまでは、奥で歸りを待ちませうか。

剛敵　拙者も今日の容體を見て歸らう。お國どの、案內。

くに　サア、案內はするけれども、必らず冗談をなさんすなえ。

剛敵　何を手もやらせもせんで。

きた　マア、奥へ行てお涼みなさんせ。

くに　サア、お二人さん。

二人　ドレ、奥へ行かうか。

　ト唄になり、おくに先に銀七、剛敵、奥へ入る。

きた　ほんに、今日は親仁どのゝ逮夜、庄兵衛も、もう戻るであらう。聟の三郎兵衛も、商ひから今に戻らぬが、道で瘧が又返りはせぬか。ア、世話な事ではある。

豆助　隱居さん、わしやお前に、ちつと相談せにやアならぬ事があるわえ。

きた　ムウ、相談とはなんぢや。

豆助　なんと、あの三郎兵衛さんを達者にして、庄兵衛さんに瘧を煩らはせて、頓死でもさせる魂膽はあるまいか

きた　何を云ふやら。それが自由になるものでの。

豆助　それでも庄兵衛さんは、わたしを叱つてばかり。

きた　ハテサテ、そんな事を云ふ手間で、庄兵衛が戻つたら、行水の湯でも沸かして置け。

豆助　ハア、お前、庄兵衛さんを可愛がるのは、こりや氣があるね。

きた　又そんな事を。

豆助　それでも蔭裏の婆アも、はぢける時ははぢけるわいの。

きた　エヽ、何を云ひ居るやら。

豆助　ドレ、洗足の湯を沸かさうか。

　ト唄になり、奥へ入る。トこの唄をかつて向うより、三郎兵衛、木綿やつし前垂れにて、岡持を提げ出て來る。頼兼、羽織衣裳、自墮落形にて、伽羅の下駄を穿き、小波、三建目の角力の形にて、頼兼が刀を持ち出て、花道にて

頼兼　勝之助、もうどうも歩かれぬ〳〵。

　ト花道へつくばふ。

小波　左樣でござりませう。さう存じましたゆゑ、お駕籠を申しつけませうと申し上げましたを、無理におひろひ遊ばし、力づくなら餘り人には負けまいと存じまするが

歩く事ばかりは叶ひませぬ。それに又、折悪う夕立で、上辷りが致して、十俵の上でさへ轉ばぬ者が、泥だらけになりました。

三郎　お道理でござります。もそつとおひろひなされますると、私しが家。お足を濯いでゆつくりとお休め申し、お駕籠にでも召させ申してお出でなされませ。

小波　それは忝なう存じまする。

三郎　サア〳〵、お出でなされませ。

　ト唄の切れにて皆々門口へ來る。

即ちこれでござります。サア、お入りなされませ。

　ト内へ入る。兩人は門口に居る。

戻つたぞよ。

豆助　アイ〳〵。

　ト出て

オ、よい方の旦那さん、お歸りかえ。

三郎　何を吐かす。さうして、母者人や女房どもは。

豆助　アイ、母者人も女房どもゝ息災で、奥に知らぬ人と話して居ります。

三郎　そんならよい。サア、これへお通りなされませ。

小波　そんなら許さつしやりませ。

ト頼兼、スツと通る。小波が側へつくばふ。豆助、見て恟りして

豆助　なんだ、イケぞんざいな奴が來た。そしてこちらの

　ト小波を見て

エ、お前は角力取の小波だの〳〵。ほんに娘子供や博奕打ちから、小波々々と云ふ筈だ。剛氣に美しい若衆だ。

小波　成る程、わしは小波勝之助と云ふはした角力サ。このお方は、據ろなきお方ぢやが、最前の雨に大難儀。道道もお頼み申す通り、暫らくこれにて休ませ申して下されまいか。

三郎　何がさて、遠慮には及びませぬ。途中で雨に逢うたは、いかう難儀なものでござりまする。マア、御ゆるりとなされませ。

頼兼　小波々々、おれはいかう草臥れた。爰で寢るぞよ。

小波　それがようござります。時に御亭主、わしはちよつと駕籠を雇うて參りたい。少しの内お頼み申しまする。

三郎　隨分お易い事ぢや。氣遣ひせずと、ちやつと行てござりませ。

小波　左様ならば、お駕籠でお迎ひに參りませう。

頼兼　オ、早う行て來い。

小波　早速立歸りまする。そんならお頼み申しまする。
三郎　お案じなく。
小波　御亭主、行つて參りませう。
ト時の鐘鳴る。向うへ入る。賴兼、こなしあつて、豆助、この間に行燈に火を灯す。
賴兼　コリヤ、今の鐘は何時ぢや。
三郎　ヘイ、暮れ六ツでござりまする。
豆助　頭横柄な奴だ。
賴兼　きつう足に泥が付いた。コリヤ、そな者、早う足を洗へ洗へ。
豆助　なんだ、足を洗へ。
トむつとする。
三郎　コリヤ、洗へと仰しやるならば、早う洗うて上げませい。
豆助　いろ〳〵な奴がうせるワ。
ト手盥へ手桶の水を入れる。
三郎　コレ〳〵、見たところが、常のお方でもないさうな。釜の湯を上げませい。
豆助　湯はあやまる。こりや庄兵衞さんとおれが、行水のにするに沸かして置いた湯だ。
ト呟き〳〵湯を入れて
サア〳〵、足を出したり〳〵。ドウ〳〵。
ト馬の裾をするやうに洗ふ。
賴兼　ハヽヽ、此奴、面白い奴ぢや。コリヤ、われに褒美を取らすぞ。
豆助　イヤ、此奴は有り難い。さらば御褒美。
賴兼　エヽ、なんぞ遣りたいな。オヽ、よい〳〵。これなと遣はさう。
ト下駄を足にて一つ宛脫いでやる。三郎兵衞はこの間に莨のんで居る。豆助、不承々々に下駄を取上げ
豆助　褒美々々と大層に云ふから、南鐐の一枚もくれる事かと、手を出して……足を頂く下駄さかな。こいつはあやまる……併し、貰はぬにはましぢや。
賴兼　きつう眠たうなつた。誰ぞ枕を持て〳〵。
ト手を叩く。
三郎　ソレ、枕と仰しやる。女房ども、枕を持つておぢや。
ト合ひ方にて、奥より、お國、枕を持つて出で
くに　アイ〳〵……こちの人、枕を何にさしやんすえ。
ト三郎兵衞が側へ持つて來る。
三郎　イヤ、今日フト道で賴まれ、御同道申したそこなお

客人いかう草臥れて居さつしやる。早うその枕を上げ
ましてたも。
くに　アイ〳〵、サア、お枕をなされませい。
ト枕を持ち行き、頼兼を見て
ヤア、あなたは。
頼兼　薄雲。
三郎　そんなら女房ども、其方はお近付きか。
くに　アイ……イ、エ。
頼兼　ムウ、薄雲を女房と云ふからは。
くに　これには段々。
ト取りつくを振り放し
頼兼　亭主、後に逢はう。
ト唄になり、頼兼、奥へツイと入る。お國、こなしあ
つて
くに　さうぢや。
トついと奥へ入る。三郎兵衛、豆助、呆れて居る。
三郎　なんの事ぢや。
ト豆助、尻を絡げ、側にある棕櫚箒を持つて、いろい
ろと振り廻し思ひ入れ。
繩が燈心を遣ふやうに、そりやマアなんの態だ。

豆助　三郎兵衛さん、一大事ぢや〳〵。なんでもお國さん
は今の眼中、今來た鈍間めに大分氣があると見えるわえ。
いま奥へ行つて、かぶせかけるも知れない。お前、さう
して居る所ぢやあるまいがな。
三郎　何を吐かし居るやら。お國に限り、なんのそんな事
があらう。大方廓での近付きと云ふやうな事であらうぞ
い。
豆助　イエ〳〵、油斷は大敵。一體あのやうな者を連れて
戻ると云ふやうな事があるものかいなア。よい〳〵。早
う去なす呪ひがある。こりやコレ彼奴に貰つた下駄。こ
れに灸を据ゑると、急に彼奴が歸りたうなる。艾の代り
に、おれが菜の燒味噌がある。これで灸を据ゑて、さら
ば去なしかけうか。
ト誂らへの合ひ方になり、豆助、下駄に燒味噌を艾の
代りにして、火を吹きつけるをかし味、いろ〳〵あつ
て
エヽ、燒味噌には火のつかぬものぢや。いつそ直燒きに
してこまさう。
ト下駄の裏へ火を載せる。と三郎兵衛、こなしあつて
三郎　ムウ、この薫りは。

ト　おたりを見廻し、思ひ入れ。豆助、鼻をひこつかせ
豆助　こりやア剛氣にいゝ匂ひだ。
三郎　正しくこの香氣は。
トきつとこなしあり
そんなら。
ト奥を見て
ムウ。
ト思ひ入れ。唄になる、三郎兵衞、下駄を持ち奥へ入る。後に豆助、箒を持ち思ひ入れ。
豆助　正しく箒は……そんなら。
ト箒を取り直す拍子に、棕梠の先、鼻の穴へ入る。
ハツクシヤン。
ト嚏をする。唄になり、豆助、奥へ入る。この唄をかりて花道より、庄兵衞、中月代、浴衣、單羽織、懐手にて出て來る。外に二人、家主五人組の形にて附いて出て花道にて
庄兵　不慮な事で、度々御厄介にあづかります。
家主　暑い時分の手金は、さぞ難儀でござらう。
庄兵　難儀どころではござりませぬ。どうでも汗で、封印が摺れますゆゑ、大抵心遣ひな事ではござりませぬ。
五人　これで、ちつと懲りさつしやるがよい。
庄兵　モウ／＼、これに懲りませぬ事はござりませぬ。とんと心を改めまする。
家主　それも久しいものぢや。サア／＼、行きませう。
ト舞臺へ來る。
庄兵　伯母御、いま歸りました。
トお北、奥より出て
きた　これはお家主様、お組合様、いつも／＼お世話になりまする。今日はいつもより遲いゆゑ、きつう案じました。
家主　さうでござらう、今日は年貢の檢めで、お取込みゆゑ手間が取れました。さぞ案じさつしやつたでござらう。
五人　併し、今度で懲り／＼したと云はるゝからは、この末はもう樂でござらう。
きた　先の三郎兵衞どのゝ居られた時分は、ついに一度もお家主様へ、御厄介をかけました事もござりませぬが、庄兵衞を家へ入れましてから、イヤ切つたワ突いたワとお前様方へ御苦勞をかけまして、毎度お氣の毒に存じまする。
庄兵　イヤ、伯母者人、もう案じさつしやりますな。今ま

では心得違ひで、お前にも苦勞をかけ、御町内のお世話、とんと向後は心を改めて、お前にも孝行にして、朝は暗いうちから起きて豆を挽き、降る時ばかりに豆腐の荷、京町中を擔ぎ商ひ、あれが庄兵衞かと云はれる程に、身を落さうと極めたからは、一日も早く手錠を赦されて、惡者と云はれた恥辱を雪ぎたいと思やア、月日の經つが嬉しうござります。

家主　なんと聞かつしやれたか。生れ變つたやうになられました。

きた　あのやうに申します事が、ほんの事でござりますればようござりまするが、ちつと身儘になると、また病が發り、なんぼでも直る事ぢやござりませぬわいなア。

庄兵　伯母御、わしをいつまでも二才野郎のやうに思つて居さつしやるが、一つ宛も取る年だものを、善い惡いの辨まへのない事もござりませうか。わしが身で愛想が盡きた。只今までの身持ち、愛想も盡きず、よくも世話をして下さつたと思へば、親より深いお前だもの、心が付かいで、ハア、、勿體ない〳〵。

五人　それ〳〵、伯母は母同然。殊に一家内から、お國どのゝ聟どのゝ三郎兵衞どのも入つた事なれば、負けず劣らず孝行にさつしやるがよい。

家主　そんなら、もう行きます。

五人　隨分封印に氣を付けさつしやりますがよい。

庄兵　畏まりました。

きた　度々御苦勞でござりまする。

ト兩人入る。

庄兵　おいらが大家のやうに、ぶる〳〵怖がる奴はない。封印がちつとばかり損れると云うて御大層な。

きた　ソレ見やれ。いま口を引かぬうちに、其やうな憎まれ口。大切な手錠ぢやもの、粗末にした時には、町役をなさる云ひ譯がないわいの。殊に其方の身の上は、常の身ぢやないぞや。わしが兄の藤太夫どのは、赤松家の

ト云ふを庄兵衞打消し

庄兵　ハテ、わしだと云つて、まんざらの馬鹿でもござりませぬわいの。

きた　ほんにさうぢや。それはさうと、お國が事で、銀七どのも見えての。三十兩の金を立ていとのやつさものさ、

庄兵　ハテ、それもようござりまする。わしが逢うて結び開きをしませう程に、ちよつと爰へ寄越して下さりませ。

きた　そんなら、爰へ寄越しても大事ないかや。

庄兵　大事ござりませぬ。私しが挨拶をしてしまひまする。
きた　さうしてたもれば、落ちつきますわいの。
庄兵　ハテ、今までの庄兵衛ではござりませぬわいの。
きた　ドレ、そんならおこしませう。
ト合ひ方になり、おきた、奥へ入る。庄兵衛、ニッコリして
庄兵　おらが伯母御のやうな正直者はない。人が嘘をついても誠と思ふやつサ。成る程、手錠のかゝつたは、恰好の悪いものだ。蚊が喰つても手が出されず、これがほんの手のない男になつたのだ。ドレ、一寝入りやらかさうか。
ト以前の枕を足にて引寄せ、寝轉ぶ。唄になり、花道より、當麻の鬼貫、羽織、野袴にて、後より、奴三平付いて出て來り
三平　あれがお尋ねの、庄兵衛が宅でござりまする。
鬼貫　宿に居るか。そと見て參れ。
三平　畏まりました。
ト門口へ來り、さし覗き、戻り
鬼貫　コリヤ。
庄兵衛はふせつて居ります。
三平　ハッ。
ト囁く。
ト呑み込み、門口へ來て
ちつと買ひ物がある。明けさつしやい。
庄兵　オイ〳〵。コレ〳〵、買ひ物買ひが來た。誰れも居ないか。
ト奥を見て、立ち上がり、足にて門口を明け
わしは手が叶はぬから、豆腐でも油揚でも、要る程持つて行かしやりませ。
三平　そんなら要る程持つて行かう。
ト入りながら庄兵衛が足を取る。
庄兵　何をしやアがる。
ト立廻りにて、三平を足にて投げ退け、又かゝるを踏み倒し、上へ乘りかゝり
なんの意趣があつて、兇狀のある庄兵衛を手籠めにするのだ。なんぼ手錠をいとつても、うぬらがやうな體は、片足にも足りねえワ。身動きするとぶち殺すぞ。
鬼貫　ヤレ、早まるな庄兵衛、その力量を試さん爲、某が計らひ。聞きしにまさるをこの者。無禮の段々、免してくりやれ。

初演の繪番附

ト鬼貫、笠を取り、悠々と内へ入る。庄兵衛、恟りし
て、三平を放し

庄兵　して、あなた様は。

鬼貫　定めて仁木彈正に聞きつらん。足利賴兼が伯父、當麻の鬼貫だワ。

庄兵　又その鬼貫さまが、何ゆゑ斯くはお計らひなされまするな。

三平　その譯はこの三平が申す。お旦那鬼貫さま、其許に折入つてお賴みなされたき思し召しなれども、お腹は立たれな、高が町人、斯程の事ではあるまいと存じの外、驚ろき入つたる御手練、感心いたしてござる。

鬼貫　その手の内を見るからは、賴みたき一儀。なんと賴まれてはくりやるまいか。

庄兵　何事かは存じませぬが、鬼貫さまがわざ〳〵お越しなされてのお賴み、身に應じました事ならば、承りませうが、御覽の通り手錠の身分、赦りまする日數は五十日、所詮お話しなされところが、お間には合ひますまい。

鬼貫　すりや、今でも手錠赦されたら

庄兵　例へ命にかゝる事でも、男と見かけてお賴みなれば

鬼貫　叶へてくれるぢやまで。

庄兵　御念には及びませぬ。

鬼貫　ムウ。

ト懷中より鍵を出し、三平へ渡す、三平、立寄り手錠
を取る。

庄兵　こりや、拙者が手錠を

鬼貫　今日より御赦免。

庄兵　とは、どうも合點が參りませぬ。

鬼貫　不審は尤も。管領山名持豐どのとは、內緣ある某。汝が訴訟お聞き屆けあつて、代官を呼び寄せ、卽ち手錠の鍵を預かり、持參なしたる鬼貫は、よく〳〵の願ひと思へサ。

庄兵　五十日のこの手錠を、お赦しなさるゝ御恩送り。身不肖なれども、惡い事なら拔け目のない、命知らずのお先者。マア、お賴みの一通り、仰しやつて御覽じませ。

ト三平、あたりへ心を付ける。

鬼貫　一通り云つて不得心なら

庄兵　すつぱりと。

ト首を差伸べる。鬼貫、こなし。

鬼貫　武士も及ばぬ大丈夫。賴みと云ふは外でもない。定めて噂にも聞いたであらう。足利賴兼、鶴千代の後見し

て、萬事政事を預かりながら、島原の傾城三浦屋の高尾に現をぬかし、大國の主でありながら、只一僕にて夜の歩行。日頃の大望時節到來。兼ねて仁木が荷擔の庄兵衞。廓に歸りを待ち受けて、今宵のうちに。

庄兵　もう後は仰しやりますな。先達て彈正さまと心を合せ、堀川の月見橋の袂、菅根の水より室町まで、暫時に通ふ拔け道あれば、あの橋詰に待ち合せ

鬼貫　廓歸りを

庄兵　たつた一討ち。

鬼貫　コレ。

ト思ひ入れ。奥にて

銀七　庄兵衞どの／＼。

鬼貫　あの聲は。

庄兵　萬事は奥で。

鬼貫　三平參れ。

三平　ハツ。

ト唄になり、鬼貫、奥へ入る。三平、下座へ入る。奥より、銀七、外に惡者二人、向うより出て

三人　親分。

庄兵　皆の者。

銀七　こなさんの賴みだから、薄雲が病氣を幸ひに、二三年の年を面づくで貰うて來た。いよ／＼金にする心か。

庄兵　貰つた年に三十兩の尻があると、伯母御を一杯喰はせたのは、それを囮に年一ぱいに賣る魂膽。それよりは金になる仕事がある。コリヤ。

ト三人囁く。

銀七　そんなら似せ代官を拵らへて、三郎兵衞めを釣り出して

惡一　後へ廻つて似せ迎ひで、賴兼をそびき出し

惡二　月見橋に待伏せして

庄兵　三人ともに合點か。

銀七　合點だ。來い。

ト二人を連れて向うへ入る。奥より、お北、出る。庄兵衞、ちやつと懷手になる。

きた　コレ庄兵衞、銀七どのは。

庄兵　サア、いろ／＼と申したけれど、得心せず剩へ、この事を家主へ訴へると云うて

きた　ヤア。

庄兵　伯母御、おさらば。

ト行かうとするをお北留めて

きた　コレ、其方はどこへ行くのぢや。
庄兵　どこへ行くとは知れた事、薄雲が挨拶をしくじり、なんとお前に顏が立ちませうか。その上、この事を銀七に訴へられては、科に科を重ねる庄兵衞。お前に苦勞をかけうよりいつそ堀川へ身を投げて。
　トまた行かうとする。お北、留めて
きた　コレ、待ちや。待つてたも。
庄兵　イヤ、放して殺して下さりませいなう。
　ト泣く。
きた　コレ、さう云ふ氣なら死ぬには及ばぬ。金はあるわいなう。
庄兵　エヽ、なんとえ。
きた　わしがまさかの時の枕金、親子の衣類を質物に入れやう〳〵と拵らへた三十兩。これを銀七に渡して、娘が譯立て。庄兵衞。其方を頼むぞや。
　ト懷中より金を出す。
庄兵　そんならこの三十兩の金で
きた　手の不自由な其方、苦勞にはあらうけれど。
　ト云ひ〳〵三十兩を懷中へ入れてやる。
庄兵　なんの苦勞もお國が爲なら、わしは一走り。
きた　オヽ、大儀ながら行て來てたも。
庄兵　委細承知。ドリヤ、行て來うか。
きた　親は泣寄りぢやなア、
　ト唄になり、お北、萎れ、奧へ入る。庄兵衞、捨ぜりふにて、門へ出る心にて、足を出したり引込めたりして居る。懷中より小判を出し、ニツコリ笑ひ、頂いて
庄兵　先づ三十兩はしめこの兎。これから褒美の金。お國を賣れば身の代金。段々と取込むばかりぢや。こりや拍子まんが直つて來たわえ。
　トばた〳〵にて、奧より、剛敵、お國を追はへて出る。これにて、庄兵衞、大釜の脇へ隱れる。
くに　エヽ、モウ、嫌らしい。モウ〳〵、堪忍して下さんせいなア。
剛敵　これサ、ほんの事だ。生眞面目だよ〳〵。
くに　ほんの事なら、こちの人に告げるぞえ。
剛敵　三郎兵衞に云はうが、お北どのに云はうが構はぬ。幸ひあたりに人もなし。ちよつと〳〵。
　ト逃げ廻るを、無理におつこかして乘りにかゝる。庄兵衞、ツツと出てお國を押し退け、剛敵を押へ
庄兵　間男見付けた。動きやアがるな。

くに　オヽ、庄兵衛さん、よい所へ來て下さんしたなア。

剛敵　ナニ、よい所なもんだ。まだよくもなんともない所だ。

庄兵　うぬ、この分では濟まないぞ／＼。

剛敵　コレ、庄兵衛、間男ではない。療治だ／＼。

庄兵　女をおつこかして上へ乘つかゝるは、なんの療法だ。

剛敵　サア、こりやア。オヽ、それ／＼、足力導引だ。

くに　イエ／＼、間男ぢや／＼。不義に違ひはござんせぬわいなア。

庄兵　女の口から白狀するからは、もう遁がれぬ所だ。覺悟しやアがれ。

剛敵　お國ぼうが口から、さう云へば仕方がない。それ程までに思つて居ながら、嫌だ／＼と云つたのは、そんなら憎いの裏であつたか。

庄兵　隣者どの、不義に違ひはあるまいがな。

剛敵　隣者樣左樣でござりまする……とは云ふものゝ、間男ではないぞ。

庄兵　なぜ／＼。

剛敵　ハテ、なぜと云ふ事があるものか。こなさんは爰の甥で、尤も祝言をさせうと云つて、爰の内へ入つたは入つたが、爰に居るお國ぼうに嫌はれ、今では三郎兵衛と云ふ亭主があるに依つて、それだから間男ではないぞないぞ。

庄兵　サア、三郎兵衛と云ふ亭主があれば、嫌はれて三郎兵衛になり代り、名代に間男詮議をするのが誤まりか。

剛敵　サア、それは。

兩人　サア／＼／＼。

庄兵　論は無益だ。並べて置いて四つにする。

ト豆腐庖丁を振り上げる。

剛敵　エヽ。

ト庄兵衛、お國に早く逃げろと云ふ思ひ入れ。お國、呑み込み、ソツと奥へ入る。

庄兵　ヤア、いつの間にお國、逃げをつた、憎い奴だ。

剛敵　待つた／＼／＼。せめての情に、あのお國が命は助けて、その代りにこの剛敵を存分にせずと、どうぞ助けて下され。ア、色男には何がなる。可愛の者の有樣ぢやなア。

庄兵　それ程に云ふ事なら、助けてやらうが、昔から御大法の首代、七兩二分出せ。

剛敵　エヽ、アノ脈を見たばかりが七兩二分か。そりやあ

んまりむごいと云ふものだ。
庄兵　そんなら重ねて四つにしようか。
剛敵　ぢやと云うて七兩二分は。
庄兵　但し四つか。
剛敵　河豚は喰ひたし
庄兵　命が惜しくば金を出せ。
剛敵　金と云はれて剛敵辟易、身ぐるみ脫いでも、上の貳分も出來まいし、お國が命は助けたし、ア、、金が欲しいなア。
ト奧にて
鬼貫　その金身共が出してくれうワ。
ト奧より出る。
剛敵　ついにお目にかゝらぬ、あなた樣が私しに。
鬼貫　難儀と見かけて、持ち合せの金七兩二分。
ト出す。
剛敵　差當るこの場の難儀、お禮は後にて。左樣なら拜借いたすでござります。
鬼貫　心措きなく遣はつしやれ。
剛敵　エ、、有り難うござりまする。
ト取つて庄兵衞が前へ持ち行き

サア、首代の七兩二分、渡すからは云ひ分はあるまいがな。
庄兵　知れた事だワ、命と釣替への七兩二分、よもやと思ふに、飛んだ所から金が出て、命冥加な剛敵。金は慥かに受取つた。
剛敵　ヤレ〳〵、これでちつとしんほうらくが納まつた。又もお禮に參る爲、あなた樣の御家名が、承はりたうござりまする。
鬼貫　イヤ、名乘るに及ばぬ。千金積んでも替へ難い一命を、助けし上は命の親でないか。
剛敵　左樣でござりまする。この御恩は、死んでも忘れは致しませぬ。
鬼貫　その恩をかけずに、藥が賣つてもらひたい。
剛敵　御覽じます通りの懷ろ醫者、足の乘り物手の奴、藥箱持ちさへ連れぬ貧醫、七兩二分のお藥は
鬼貫　持つて居る事を知つて貸したる七兩二分。
剛敵　どうも合點が參りませぬ。
鬼貫　毒が盛つてもらひたい。
剛敵　エ、。
ト悄りする。庄兵衞、門口を締める。奧より、三平、

種ヶ島を持つて矯めて居る。

庄兵　南蠻流の毒藥を、持つて居ると云ふ事を、申し上げた上からは、外に遠慮も何もない。キリ／＼盛りやアがれ。

剛敵　そんなら庄兵衞も。

庄兵　一つ懐ろ。その毒藥が欲しいから、罠にかけた狐醫者。聲を立てりやア

三平　たつた一撃ち。

　ト剛敵、ブル／＼して居る。

庄兵　否か。

鬼貫　應か。

庄兵　これぞ誠の生死の境、毒を盛るか。

兩人　どうだエ、。

剛敵　マ、、待つて下さりませ。急くまいぞ／＼。醫道は仁術と云うて、伏羲神農へ誓ひを立て、毒は盛らぬ法なれど、命には替へられませぬ。

鬼貫　そんなら盛るか。

剛敵　モウ、盛りまする／＼。

　ト合ひ方になり、懐中より藥包みを出して

これが天竺のひつぱらそふ、放して置けば祟りはなけれど、白蛇の肝と合すれば大毒藥。

鬼貫　して、その白蛇の膽は。

剛敵　氣遣ひなされますな。即ちこれ。

　ト印籠より出して

もう、斯う合すれば、口の端へも寄せられぬ、南蠻流の毒藥。

　ト包みを渡す。鬼貫、思ひ入れ。庄兵衞、ソツと茶碗を出す。鬼貫、藥を入れる。

これでようござりまする。

鬼貫　過分々々。三平引け。

三平　ハツ。

　ト剛敵、胸を撫でて居る。庄兵衞、此うち茶碗へ水を入れ、剛敵が前へ盛つて來り

庄兵　さぞ膽を潰さしつたらう。サア／＼、水でも呑んで落ちつくがいゝ。

　ト渡す。剛敵、がつ／＼して頂き呑む。

鬼貫　コレ、これでどうぞ巧く行けばよいが。

剛敵　イヤ、その儀はお氣遣ひなされますな。私しが家の祕法。ア、コレ、誰れぞに呑ませたいが。

　ト云ふうち、苦しみ出し、いろ／＼あつて、トヾ血を

吐いて死ぬ。鬼貫、見て
鬼貫　ハテ、凄まじい妙藥だなア。
庄兵　彼れこれいらぬ毒の試み。お喜びなされませ。
三平　手盛りを喰つた上からは、外へ洩るゝ氣遣ひなし。
して、この死骸は。
ト庄兵衛、剛敵が死骸を井戸へ打込み
庄兵　この上は、ちつとも早う彈正さまへ、お知らせなさるゝがよろしうございませう。
鬼貫　イカサマ、毒藥調合の上からは、直ぐさま館へ立歸らん。軍勢催促の山鳥の印の行くへは如何。
庄兵　その山鳥の印は、宇治の里に蟄居なす、浮田左金吾と申す浪人者が、所持いたす由、聞き出したる上からは、忍びの術で手に入れ差上げませう。
鬼貫　その左金吾も高尾が深間、とてもの事に人知れず
庄兵　心得ました。
鬼貫　身共は歸る。三平、今の用意のナ……供せい。
三平　ネイ。
ト唄になり、鬼貫、三平を連れ、向うへ入る。と庄兵衛、以前の金を出し
庄兵　また七兩二分あつたまつた……エヽ、忝けない。

ト頂く所へ、奥より、豆助、以前の下駄を持つて出る。庄兵衛、ちやつと金を懐中へ入れ、こなしあつて
このべら坊め、見りやア下駄を持つて、何をうろつきやアがるえ。
豆助　エヽ、この下駄かえ。この下駄は、あの生酔に貰ひやしたから、取つて置かうと思つたを、三郎兵衛さんが引ツたくつて、佛樣へ差上げてございやした。これがおれがした事なら、馬鹿の八百でも云はれるとこだ。
庄兵　なんだ、三郎兵衛が佛壇へ下駄を上げたとか……フム、ドレ、その下駄を見せろ。
ト引ツたくつて
これこそ正しく東山どの、國阿上人へ寄附ありし伽羅の焚きさし。
豆助　ナニ、釜の焚きさしだえ。
庄兵　頼兼この下駄を足にかけ、國土の寶を穢せし、疑ひかゝりしこの下駄。どうしてわれが
豆助　貰ひやした。
庄兵　して、その侍ひは。
豆助　いま奥に寝て居やすゝ。
庄兵　それこそてつきり。

豆助　エヽ、なんとえ。
庄兵　てつきりサ。
豆助　てつきりとわえ。
庄兵　てつきりと云ふ物が、入用だから買つて來い。
豆助　てつきりと云ふ物は、どこで賣りやす。
庄兵　どこで賣るか、おれも知らない。なんでも川東から
北へ眞直ぐに、大佛前の方を尋ねて來い。
豆助　アノ、夜中にかえ。
庄兵　知れた事サ。
豆助　そりやアお前、とんだ道だ。
庄兵　とんだ道でも頓着はない。邪魔になるから早く行け。
急に要る物だから、二日かゝつても三日かゝつても大事
ない。早く行つて遲く歸れ。
ト豆助を外へ突き出す。
豆助　あんまり無理だ。てつきりと云ふ物は、どんな物か
ついに見た事もない。
庄兵　方々歩けば知れるわい。
豆助　てつきり〳〵はつきり病切り。アヽ、灸の事で
あらう。
庄兵　まだうしやアがらないか。

豆助　アイ、行きやすわいな。
ト豆助、捨ぜりふにて向うへ入る。合ひ方。此うち庄
兵衛、押入れをソッと明け、脇差を出し、目釘をしめ
し、身繕ろひして行かうとする。三郎兵衛、出る。庄
兵衛、恟り、脇差をちやつと隱して
庄兵　三郎兵衛か。
三郎　庄兵衛か。
庄兵　其方はどうだ。氣色はよいか。
三郎　アイサ、昨日からさつぱり落ちたやうで、今日は商
ひにも出る。月代も剃りやんした。
庄兵　ハテナウ、瘧は月代を剃つては惡さうな事だ。そり
や醫者にでも聞き合せたのか。
三郎　ほんに、醫者に聞くのをとんと忘れた。こなたは剛
敵さんを知らずか。
庄兵　ヤ。
三郎　今まで聲がしたが、こなさん、剛敵どのに逢はしつ
たであらうがの。
庄兵　成る程〳〵、逢ひは逢つたが、もう歸つてしまつた
三郎　ヤ。
庄兵　サイナウ、いま逢つて、一つ二つ話して居たが、病

家へ急に見舞ふと云つて、いま歸られた。
三郎　ムウ、剛敵どのは去なされましたか……オ、爰に血が大分。
ト寄るを突き退け
庄兵　吐血した。
三郎　エ、。
庄兵　今おりやア凄まじく、大層に云やア四五升も吐いたわいの。
三郎　それはマア、怖い事であつたが、見りやアこなさんは、いつの間にやら手錠が。
庄兵　ヤ。
三郎　ハテ、よくビク／＼する男だわいの。
庄兵　貴樣程こせ／＼尋ねる者はないわえ。
三郎　それでも五十日と限つた手錠が
庄兵　早く赦されたのは譯がある。ドリヤマア、ゆるりと話さうか。マア、差當つて問ひたいのは三郎兵衛、こりやアなんだ。
ト下駄を見せる。三郎兵衛、取らうとする。庄兵衛、ちやつと持ち替へる。三郎兵衛、恍けて
三郎　ハテ、そりやア知れた事、下駄ぢやないか。

庄兵　サア、下駄は下駄でも、この下駄は伽羅の下駄と云うて、足利の重寶。この下駄を穿かん者は、御連枝賴兼どのより外にない。その又下駄を阿房めが、貰つてゐて、なんで持つて居る。
三郎　さればなう、喧嘩の尻見屋ぢやアあるまいし、なんで下駄をば預かつて戻り居つたやら。
庄兵　三郎兵衛、恍けやんな。賴兼どのの獨り歩き、お主が道で出ッくはして、お供申して戻つたであらうがな。
三郎　何か知らぬが、道で逢つて賴まれたゆゑ、客人を連れて戻つたが、あのお國が廓で近附きだと云うて、奥の間で話しをして居るが、また賴兼ならば、貴樣は又どうする氣だ。
ト庄兵衛、立つて盆に豆腐ときらずを載せて持ち出て
庄兵　三郎兵衛、お主の商賣から、耳近い物で云うて聞かさう。コレ、この豆腐と云ふやつは、元來豆で拵らへれども、その豆の本體は無くて、落ちぶれては奴ともなり、また貴人高位となつて、絹漉しの衣服を着し、吉原豆腐へ通ひ詰め、傾城の油揚に現を拔かせど、先の傾城が蒟蒻玉があるゆゑ、じやらくら餅の燒豆腐。雷豆腐に摑まれたやうに、うろたへて居る所を、八はい豆腐見るやう

に、切つてしまはうと思ふが、但し、こちらのきらずか。
三郎兵衛、どうしたものであらうなア。
トいろ〳〵思ひ入れ。三郎兵衛もこなしあつて、あたりを見廻し、大工道具を持ち出て
三郎　コレ、大工道具はこなたの商賣。耳近い譬へで云うて聞かさう。成る程、こなさんもその以前は、足利の御譜臣……イヤ、サ、家の普請を請合つて、コレ〳〵、この釘抜ならぬこの鑿の瀬戸際。遂に軍も叶はぬ鐵槌。陣所で腹を切らうとして、さつと軍は墨壺墨金、その才槌を遁がれても、矢ッ張り懲りずに曲つた差し金。其やうな積り細工は止めにして、仕覺えた大豆と豆腐屋、どちら外さぬ鋸商ひがよからうぞや。
ト庄兵衛、件の豆腐の上へ鎹を置いて
庄兵　最前からの長談義、道具盡しの强意見、面白さうな事なれど、おれが耳へは、コレ、この通り。
三郎　ムウ。すりや何を云うても意見しても
庄兵　豆腐に
三郎　鎹。
庄兵　役に立たぬと云ふ謎だ。
三郎　そんなら貴樣は、この豆腐を
庄兵　オヽ、切つて〳〵切りこまざくワ。
三郎　但しはきらずに丸うするか。
庄兵　とつくりと思案を
三郎　庄兵衛。
庄兵　三郎兵衛。
三郎　ヤア、後に逢はう。
ト唄になり、三郎兵衛、ちよつと下駄を取らうとする。庄兵衛、引ッたくるこなし。三郎兵衛、奥へ入る。
庄兵　彼奴はおへないわい。時に、この伽羅の下駄も、香具屋へ捨賣りにしても金になる代物。おれが持つて居ちやア取られる。どこぞへソッと隱して置きたいものだ。
ト方々見廻し、頷き、岡持を持つて來て、件の下駄と三十兩の金を別々に二つの桶へ入れて、元の通りにして
斯うして置けば、よし〳〵。
ト合ひ方になり、こなしあつて奥へ入る。と引違へて奥より、賴兼、お國付いて出て
くに　マア、待つて下さんせいなア。
賴兼　ハテ、聞分けのない。放せと云ふに。
くに　そんなら、これ程までに申し上げましても

頼兼　頼兼放埒懦弱といへども、不義の汚名は受けぬわやい。
くに　すりや、私しを不義者と仰しやるのかえ。
頼兼　知れた事。そちや男を持つたでないか。
くに　エヽ。
頼兼　最前の三郎兵衛を、こちの人と云ふからは、夫のある身を以て、この頼兼を慕ふは、なんと不義ではあるまいか。
くに　サア、それは。
頼兼　云ひ譯があるか。
くに　サア。
頼兼　サア〳〵〳〵。爰な徒ら者めが。
　ト三郎兵衛出て
くに　イヽヤ、薄雲は徒らでない、不義ではござりませぬ。その證人は、この三郎兵衛でござりまする。
頼兼　ムウ。現在の夫が、徒らでない、不義でない證人とは。
三郎　口でまだ〳〵申しませうよりは、お國、そのお主の起證を、あなたにお目にかけや。
くに　アイ〳〵。
　ト守り袋を外し
申し、頼兼さん、御覧じて下さりませ。
　ト守り袋を渡す。頼兼、取つて見て
頼兼　天罰起證文の事……こりや二人の起證ではないか。
三郎　サア、マア、その起證を御覧なされて下さりませ。
　ト頼兼、こなしあつて
頼兼　「天罰起證文の事。一つ、其方様と夫婦の契約致し申さず候ふところ實正也。然る上はこの後とても互ひに不義がましき儀申し候はゞ、日本六十餘州の神々の御罰を請け申すべく候ふ、仍つて證文件の如し、お國どのへ三郎兵衛」。
三郎　なんと、へんちきな起證でござりませうがな。
くに　高尾さんと云ふお相手の、あるを知りつゝ惚れた薄雲。廓でいろ〳〵申し上げても、お聞入れはなし、わたしはそれが嵩じてぶら〳〵病。親方さんも愛想盡かして二年の年を其まゝに、内へ戻れば母さんに、末の便りと從弟同士の、庄兵衛さんを入り聟。わたしは斯うした譯があるゆゑと、たつた一度のお情を
　ト思ひ入れあつて
いろ〳〵と云ひ譯しても聞入れなく、いつそこの身を亡

きものと、思案の間に庄兵衞さん、不時な喧嘩に咎めの身の上。ア、嬉しやと思ふ間に、また一家衆が寄り合つて、この三郎兵衞さんを二度の入り聟。

三郎　お國が器量は知つて居る一家同士、なんでもしめたと、いそ〳〵しよき〳〵、聟入りの晩に抱いて寢て、すはといふ時右の入り譯。樣子を聞いて詰まらぬはおれが身の上。聟入りして嚊に嫌はれ、出て行くのもあんまり手がなし。また折角立てる貞女の道、破らすのも本意でもない。又おれが出て行つては、惡者の庄兵衞めが、後でどんな無體な事しやうやら、よいワ、いつその事女夫になつて、お前樣に巡り逢はせ、お國が望みを叶へてやろ、マアそれまでは相蓆、踏むまいと云うても疑ふは女の情。側へも寄るまい、不義がましい事も云ふまいと、起證まで取られても、表向きは睦ましい女房の顏。男の顏。何喰はぬ顏ではない、何やらも喰うて居る顏は、年寄つた母への氣休め。正味のところはあなた樣の、門番を致して居りますわいの。

くに　ほんに三郎兵衞さんの御深切。

三郎　お國が慕ふ志しを思し召し

くに　どうぞ今一度のお情を。

三郎　申し、

兩人　おかけなされて下さりませい。

賴兼　成る程、聞けば聞く程、三郎兵衞が深切。殊に薄雲が志し。

兩人　すりや、お叶へなされて下さりまするか。

賴兼　ハテ、この上はどうなりと。

くに　エ、嬉しうござります。

ト抱きつく。

三郎　千秋萬歳の

トあたりを見廻し、豆腐箱の上のきらずの玉を載せ、仔細らしく目八分に構へ

豆腐箱のきらずの玉を奉る。ハヽヽ、先づいつまでもきらず玉とは、めでたい〳〵。

ト此うち多治見次郎、門口へ代官の形、捕り手大勢連れて門口へ出かけ、爰にて

次郎　ソリヤ。

ト三郎兵衞を取卷く。三郎兵衞、恟り。お國、賴兼を圍ふこなし。

三郎　こりや狼藉な。何事でござるな。

次郎　ヤア、吐かすまい。足利賴兼、傾城狂ひに身持ち放

埒、剰へ家の重寶伽羅の下駄を穿き、奢りの條々。まつた爰に一宿の聞え不屆きとあつて、主人山名持豐、引き來れとの仰せを請け相向つた。サア、頼兼どのを此方へ渡せ。

三郎　存じませぬ。頼兼とやら、こま兼とやら、厘毛爭ふ商人の内へ、何しにお出でなさるゝもの。そりや人違ひ、門違ひでござりませう。憚りながら、脇を御詮議なされまするが、肝要かと存じまする。

次郎　ヤア、主人持豐を不吟味なりと、云はぬばかりの返答。さほど潔白ならば、屋敷へ參つて云ひ譯いたせ。

三郎　イヤモウ、屋敷は愚か、唐天竺へでも參りませう。

次郎　ソレ、家來ども、油斷なく引立てい。

家來　ハツ、立てやい。

三郎　ハテ、町人一人を仰山な。コリヤ、女房ども、おりや一通り山名さまのお屋敷まで行て來る程に、ナア、この場を早う。よう留主しや。

くに　そんなら、こちの人、早う戻つて下さんせ。

捕手　立てえい。

三郎　ハテ、仰山な。

ト唄になり、三郎兵衛、前後に目を配り、取卷かれながら向うへ入る。引違へて三平、駕籠を吊らせて出て來る。門口を明けて入る。

三平　殿のお迎ひ。

くに　オウ、お供の衆、よい所へ。三郎兵衛さんの心遣ひ、ちやつとお歸りなされて下さんせいなア。

頼兼　して、小波はなんとした。

三平　只今後より參りまする。御退屈にござりませうから、早くお館へお供せいと、勝之助申しつけましてござりまする。

頼兼　退屈どころか。サア〳〵、歸らう〳〵。

くに　そんならお歸りなされまするか。せめて一夜……と云ふに云はれぬ今の體裁。

頼兼　薄雲、追ッつけ館より、迎ひの者を寄越すであらう。三郎兵衛へもよいやうに。

三平　サア、邪魔のないうち、一時も早う。

ト頼兼を駕籠に乘せる。

くに　ぢやと申して、いつか又。

ト立寄るを、三平引退け、駕籠を閉めさせ

三平　急ぎやれ。

ト時の鐘になり、駕籠を舁き、向うへツイと入る。銀

七、庄兵衛、お國を捉へ

兩人　してやつた。

くに　こりや、庄兵衛さん、なんとさしやんす。

庄兵　なんと云つたらこの庄兵衛、嫌やアがつたその代り

銀七　又ぞろ賣つて金にする。

庄兵　おとほね立てると面倒だ。引ッ縛つて猿轡を嵌めて置け。

銀七　合點だ。

ト　お國を括り、猿轡を嵌める所へ、お北出て

きた　こりや、娘をなんとする。

ト取りつくを庄兵衛引きつけ

庄兵　ソレ、此奴も一緒に繋いだり。

ト突きやる。

銀七　受取つた。

ト同じく縛る所へ、向うより三郎兵衛走り戻り、庄兵衛、銀七兩人を引退け、お北を圍ひ

三郎　こやりア母者人、何事でござりまする。

きた　何事か知らぬが、娘をあのやうに括し上げて、金にすると云ふゆゑ、支へたればわしにまで。

三郎　もうようござりまする。庄兵衛、山名からの代官ぢやと云うて、おれを外へ誘き出したは、ア、、こりやお國が得心せぬゆゑ、意趣に持つて。

庄兵　イヽヤ、意趣ぢやない、挨拶だ。

三郎　挨拶とは、なんの事だ。

銀七　なんの事とは忘れたか。薄雲が殘り年の、三十兩に負けさせたこの銀七。

庄兵　サア、われが女房のお國が、殘り年の三十兩、見事にわれが立てゝ見るか。

三郎　サア、それは。

銀七　三十兩受取らうか。

きた　イヤ、その三十兩は最前庄兵衛に。

庄兵　庄兵衛にいつ。

きた　ソレ、最前。

庄兵　どこに。おらはなんにも聞かねえよ。

三郎　コレ母者人、そんなら三十兩の金は

きた　あの惡者に渡したわいの。

庄兵　アレ又、あんな云ひがけを吐かす。でも怖い婆アめだなア。

三郎　ようごんす。もう斯うなるからは此方も自暴。覺えがあらうがあるまいが三十兩、最前取られた下駄ともに

取返す。さう思つてうしやアがれ。

庄兵　此奴、太じるしと出かけたな。細言云はずと疊んでしまへ。

銀七　合點だ。

トかゝる「何を」と立廻り、いろ／＼あるうち、三郎兵衞、瘧の起るこなしにて慄へ出す。

三郎　時も時、折悪い瘧の病ひ。

銀七　親分、三郎兵衞が慄ひ出したは、最前聞いた瘧の發り日。

庄兵　イヤ、瘧とは忝ない。もう千人力ぢや。

ト尻をからげる。お國、お北、それを留めるを、ポンポンと庄兵衞當てる。兩人倒れる。向ふより、次郎走り出て

次郎　首尾ようやツつけた。安心しやれ。

庄兵　出かした。コレ、見ろ、三郎兵衞は瘧で、どうせうと此方の儘。ヤイ、うぬは脛も立たぬ癖に、三十兩の金も伽羅の下駄も、取返すも凄まじい。おれ様の手へ入つた物が、再びこの世へ出ると云ふ例しがあらうか。大べら坊め。さりながら、今ぶち殺してしまふ奴、末期の水だ、何もかも云つて聞かせる。コリヤ、よう聞けよ、おれが先祖は、われも知つて居る通り、賴兼には仇あるゆゑ、鬼貫と一つになつて、滅亡さすと云ふは嘘だ。誠は當分金が欲しいゆゑ、鬼貫どのに賴まれて、毒藥の調合で、七兩二分あたゝまつた。また伽羅の下駄も賣り渡してあたゝまる。これからおれを嫌ふ薄雲め、その返報に銀七と云ひ合せ、貰つた殘り年を三十兩あると云つて、死にくじけめから金を取つて、その後に胴殼も、鞍替へさせて金にする。イヤモウ、金儲けで一ぱいぢや。ホイ、話しするうち、金のおくびが出る。うぬは早くたばつて、地獄の釜で豆を炊いて、三途川の冷奴、あつたかにならぬうち、地獄中をば賣り歩け。アノ茲な豆粕野郎め。うぬ。

ト三郎兵衞を蹴りとばす。銀七、三郎兵衞を引きつけ

銀七　コリヤ、われは仕合せ者だぞよ。誰れあらう、田町の銀七さまが、只今引導をお渡しなさるゝ。南無阿彌陀ぶ。

ト蹴る。

次郎　南無あみ豆腐。

ト蹴る。

銀七　なまいだ／＼。

ト責め念佛にて、兩方より苛なむ。三郎兵衛、無念の思ひ入れ。この間庄兵衛、始終脂下がりに煙草をのんで居る。

三郎　エヽ口惜しい。折惡い瘧の病ひ。金も寶の下駄も奪はれ、女房を打擲され、この身も共に命を果すか、無念やなア。

庄兵　オヽ存分に泣け、喚け。死人になつては物は云はれぬ。それでもうよいか。今が最期。觀念。

ト拔いて切りかゝる。三郎兵衛、摺り拔け、刀の手をキッと持つて

三郎　すりや、どうあつても、おれが命を取るか。

庄兵　知れた事だワ。

三郎　エヽそりやあんまり胴慾ぢやわいの……と云つたらよからうが、マア、さう自由には

ト庄兵衛を取つて投げる。銀七、次郎、われをとかゝるを、ポン／＼と投げる

なるまいわいやい。

ト尻引ツからげる。庄兵衛、悯りして思ひ入れ。

銀七　ヤア／＼、俄かに強くなりおつたワ。そんならわりやア瘧が落ちたか。

三郎　べら坊め、瘧は疾に落ちたれど、わざと慄へて見せたのは、企みの一々云はさう爲、ちつとの間辛抱して、叩かれて居たればこそ、何もかも企みの手目あげだ。サア、いま吐かした寶の下駄も、金も一緒に渡すまいか。

庄兵　ヤアいま／＼しい、しくじつた。

銀七　瘧に水は藥なれど

次郎　うぬが爲には命の毒水。

銀七　末期の水だ。これを喰へ。

ト岡持の水を兩方より三郎兵衛に浴せる。中より三十兩の金、伽羅の下駄出る。

三郎　ヤア、こりや尋ねる下駄と金。

庄兵　エヽ、何もかも惡い手番ひ。いつそうぬを。

トかゝる立廻り。

三郎　二種取返す上からは、今の仕返し、三人ともに、それへ直りやれ。

三人　オヽ、斯うして直らう。

ト四人いろ／＼立廻りあつて、ドッコイと見得になる。これより誂らへ鳴り物にて、大タテいろ／＼ある所へ、小波、大バタ／＼にて、向うより走り出て內へ入る。

小波　ヤア、これは何事だ。

ト三人を投げ退ける。皆々逃げ入る。此うち三郎兵衞、
お國とお北を介抱して繩を解く。
くに　オヽ、よい所へ小波さん、庄兵衞さんの拵らへ事で、殿さんを似せ迎ひ、駕籠へ乘せまして、連れ申して行たわいの、
三郎　ヤア〳〵。
くに　コレ、出合ふ所は堀川の月見橋。
小波　ナニ、堀川の。
ト行かうとする。
三郎　關取、待つた。
小波　用があるか。
三郎　お家の重寶。
ト下駄をやる。小波、取つて
小波　忝ない。
ト次郎、銀七、出かけて居て、それをとかゝるを三郎兵衞、投げ退けるうち、小波、門口へ出る。庄兵衞門口に刀を携へて居る。
庄兵　若衆め、觀念。
ト切つてかゝるを、小波、かい潜り、はずみを取つて内へ投げ込む。庄兵衞、起きて行かうとする。三郎兵衞、立廻りにて留める。
三郎　構はずと、ござりませ。
小波　合點だ。
ト見得よく向うへ走り入る。後にて皆々立廻りよろしくあつて、幕、引返し。

本舞臺、うしろ黑幕、正面に月見橋を取りつけ、一面の枝柳、芹根の水と書いたる石碑を立て、雷の音、雨車烈しく、幕明く。
ト以前の駕籠に三平付いて下座より駈け出る。木蔭より惡者兩人出て
兩人　三平さんぢやアごんしないか。
三平　二人の者か。
惡一　そんならその駕籠は
三平　彼の代物だワ。
惡二　直ぐに河原へ持込むがよい。
三平　二人とも來やれ。
ト花道へかゝる。向うより、小波、一散に出て、この棒鼻を摑み
小波　待つた〳〵。この駕籠一番待つてもらはう。

打滿の繪番附

ト押し戻す。

三平　棒鼻取つて突き据ゑるは、道稼ぎか追ひ落しか。邪魔せずと通すまいか。

小波　道稼ぎでも夜盗でもない。小波勝之助だワ。

頼兼　ヤ、勝之助か。

ト駕籠より云ふ。

小波　そのお聲は我が君。この勝之助に先駈けして、似せ迎ひの泥坊め、誰れが指圖だ。それを吐かせ。

三平　オヽ、その指圖は

兩人　斯うだわえ。

トかゝる。立廻りにて、皆々を投げ退け

小波　さぞお待ち兼ねでござりませう。

頼兼　其方が指圖ぢやと云うて、駕籠を持つて來たゆゑ、乘ると其まゝ駈けおつて、モウ〳〵、腰が痛うてならなんだ。こりやマア、なんと云ふ乘り物ぢや。

小波　エヽ、うぬらは太い奴等だ。何も御存じない殿様を、どうせうと思ふのだ。

三平　どうと云つたら慾の世の中。頼んだ人はそんぢよソレ。

惡一　頼兼どのゝ笠の臺、叩き落せばこの身の出世。

惡二　うぬが命も寢莫つたわえ。

小波　頼んだ人は問はずとも、此方もそれとそんぢよソレ、外の供ならイザ知らず、この小波が付き添うては、廻しへも取ッつかせないぞ。

三平　なんぼ體は小粒でも、ひりゝと胸へ向うづけ、引く手すまどり腕どり。

惡一　矢柄やたらに摑みつき

惡二　鴫の羽返し腰車。

三平　無双にかけて

三人　踏み碎くぞ。

小波　吐かしたりな腹櫓、なんぼ左を差し込んでも、三人一緒に脊負投げは、土俵の上で覺えあり。幸ひ空も晴れ勝負。爰は名に負ふ月見橋、御前がかゝりで容赦はないぞ。

頼兼　これは何よりの慰みぢや。さらば爰にて見物せう。

ト駕籠より出て、橋の上へ上がり、見て居る。

小波　イザ。

三人　イザ。

四人　イザ。

ト四人キッと見得。向う揚げ幕、若い衆五人、角力の太鼓を打ちながら出て來る。尤も取組みを呼びながら

中の間を通り、下座へ入る。この太鼓を借りて、皆々四股を踏み、小波、角力のタテ、誂らへの鳴り物にていろ〳〵あつて、ト〻三平を投げ、悪者両人を肩車に乗せて、小波、見得。頼兼、扇子を上げて

頼兼　勝ち角力、小波々々。

ト名乗りを上げる。小波、腰を入れて默禮をする。頼兼、あふぎ立てる。下座より、櫓太鼓を打ち込み、よろしく

ひやうし幕

五建目

足利裏門の場
表門の場
馬殿の場
高尾丸の場
床下の場

役名　足利左馬頭頼兼。同姉、橘立御前。一子、鶴千代君。斯波外記左衛門。當麻圖幸鬼貫。名和無理之助。尤道理之助。横山彌惣。非筒女之助。逸友妹、政岡。刀屋石見。筑波婆ア。彈正妹、田村。腰元、闇屋。同、宿木。同、夕風。荒川藏人。土手泥之助。奴、砂利平。同、柚平。太秦の强寂法印。佐々良三平。多治見次郎。田邊金兵衛。荒獅子男之助照秀。浮世戸平。仁木彈正左衛門直則。

本舞臺、三間の間、足利の裏門にかゝり。下の方、井筒を取りつけ、爰に柚平、砂利平、狀箱を爭ひ摑み合つて居る。早神樂にて、幕明く。

ト立廻りあつて

砂利　コリヤ奴め、放さないか。

柚平　イヽヤ、ならない。大切の使ひのその道で、狀箱を取られちやア、扶持方樣へ奴が立たねえ。そこを退いて通せ。

砂利　貳合半に放れても、見かゝつたその狀箱、慥かにわりやア左金吾が奴であんべい。それぢやア猶々渡されねえわえ。

柚平　さう云ふぬも、鬼貫どのゝ砂利平と見た。その狀箱を渡せ。

トかゝる。立廻り。

砂利　さうはならねえ。其方の狀箱、それからそれへ。

柚平　取る心か。
砂利　取つて見せうワ。
柚平　どうして。
砂利　斯うして。
兩人　ドッコイ。
ト誂らへの鳴り物になり、狀箱二つを枷に兩人タテあつて、トゞ柚平を當て、砂利平、向うへ行く。柚平心付き、これを追はへて入る。直ぐに行列三重になり、向うより、竹に雀の紋付いたる箱提灯を持ち、中間二人出て來る。また侍ひ二人、麻上下にて、乘り物に付き添ひ出て來る。この後より、筑波婆ア、乞食の拵へにて、下さいまし〳〵と云ひながら舞台へ來る。
筑波　結構なおいで樣でござりやす。お米でもお金でも、取らせてやつて下さりやせう。
侍ひ　さま〳〵の慮外。
中間　下がりおらぬか〳〵。
ト駕籠の内より
鬼貫　家來ども、聊爾いたすな。
ト駕籠の戸を明ける。鬼貫、長上下にて居て、筑波婆アを見て
當麻の闘幸鬼貫、登城の歸るさ、慮外を吐かしたはわれか。
筑波　オヤ〳〵、お殿樣でござりやすか。
鬼貫　なか〳〵の魂ひぢやわえ。
筑波　なんでござりますな。この殿樣とした事が、上げたり下げたり、白痴が貼拔きを貼りやアしめえし、そんな事を仰しやらねえで、おやんなさりやしよ。
鬼貫　如何にも取らしてくれう。
筑波　ホヽヽ、そりや有り難うござりやす。
鬼貫　繩を打て。
侍ひ　ハツ。
ト侍ひ倚つて筑波婆アを縛る。
筑波　こりやア何をなされます。
侍ひ　動くな。
鬼貫　家來ども、この婆アめを爰に差置き、乘り物には某居る體にもてなし、西の門から立歸れ。
皆々　ハツ。
ト皆々駕籠ともに下座へ入る。此うち、土子泥之助、荒川藏人、出て居て
泥之　鬼貫公、最前より御歸館を

文化七年九月中村座上演

澤村源之助の賴兼　關三平郎の戸平

藏人　お待ち請け申してござりまする。

鬼貫　ナニ、泥之助、申しつけたる一品は。

泥之　仁木彈正、父滿祐より傳はつたる陣扇、調伏の人形諸とも、持參いたしてござる。

　ト調伏の箱を出す。

鬼貫　出かした。この上は調伏の願書諸とも、館の丑寅の間に埋め、賴兼始め鏖殺し。一刻も早く。

泥之　お氣遣ひなされまするな。兼ねて湯となり水となり、妙火とひるがへる稀代の密法、やつたものではござりませぬ。

藏人　鬼貫公、この乞食婆アめはな。

鬼貫　某、用事あつて召連れた。

兩人　然らば御用が。

鬼貫　如何にも。

兩人　婆アめ、そこへ出ろ。

筑波　ハイ〳〵、やう〳〵此方の番になつて來た。斯う縛られちやア向う腮だ。お前さんがアノ、高尾太夫を身請けなされましたお殿樣かえ。オヤ〳〵〳〵、お顏に似合はない、小嫌らしいお殿樣だア。乞食も相應にやア用がござりますわな。取らせてやつて下さりやせう。

鬼貫　ハヽヽヽ、高尾太夫を身請けせしは、某が甥賴兼、それはさて措き、望みの通り取らせてやらう。

　ト懷中より包み金を出し、筑波婆ァに投げてやる。

筑波　オヤ〳〵、こりやアお金かえ。なんでも四五十兩の嵩だ。取らうと思へば手が。エヽ、小自烈てえ。この繩を解いて下さりませ〳〵。

鬼貫　その筈〳〵、縛しめ置きしは某が計略。その金が欲しいか。

筑波　オヤ、馬鹿らしい。金が欲しくなくつて。にきびの出る程頂きたうござりやす。

鬼貫　金が欲しかア賴まれろ。

筑波　そりやハヤ、乞食相應の御用なら。

鬼貫　賴まれてくれるぢやまで。

兩人　返事次第で命がないぞ。

筑波　命と釣替への五十兩、どんな事でも惡い事にやア、鳴つて出す雷から、思ひ付いた筑波婆ア。斯う見たところがお前さん方も、あんまりお心のよい方ぢやあるめえ。お賴みの事なら、矢尻でも切りやせうに。

鬼貫　早速の承知、滿足々々。ソレ繩。

藏人　ハツ。

ト藏人、繩を解く。

筑波　して、お賴みの筋は。

鬼貫　賴みと云ふは、これだワ。

ト懷中より證文を出して見せる。

筑波　こりや、高尾が年季證文。

鬼貫　わりやア文字も働らくな。

筑波　わしも今でこそ乞食婆ア、おしやらくをやつた時には、參らせ候ふも書きやした。

鬼貫　その證文に記しある、高尾が幼な名生國まで、とくと覺えたその上で、高尾が親だと僞はつて

泥之　無理こじつけにこじつけりやア

藏人　褒美はまだ／＼望み次第。

ト筑波婆ア、金を取上げ

筑波　お金は頂きやす。仕事が巧く行つた後ぢやア

鬼貫　この鬼貫が心にある。

筑波　すつぱりとやつてお目にかけませう。

ト證文を懷中する。

鬼貫　出かす／＼。泥之助には調伏の用意、拔け井戸より寢所へ忍び、賴兼と見たならば

兩人　たつた一討ち。

鬼貫　コリヤ……筑波婆アは身と一緒に、北の門から、合點か。

筑波　お供いたすでござりませう。

鬼貫　提灯これへ。

ト中間、提灯を持ち、鬼貫が前へ出る。鬼貫、拔打ちにポンと切る。

三人　これは。

鬼貫　下郎は口のさがなき者。

筑波　呆れたもんだ。

藏人　鬼貫公。

鬼貫　忍べ。

ト時の鐘になる。鬼貫、筑波、藏人、下座へ入る。泥之助、井戸へ忍ぶ。矢張り時の鐘にて、花道より賴兼、羽織衣裳、後より、戸平、奴の拵らへにて出て來る。

賴兼　戸平々々。

戸平　ハッ／＼。

賴兼　もう何時であらうな。

戸平　最早七ッでもござりませうか。

賴兼　さうでもあらう。この小波は、なんとしたものだ。もう追ひつきさうなものぢやな。

戸平　左樣でござりまする。月見橋で折よく參り合せた私し、いづれに致しても、參りますではござりませうが、先づ〳〵もそつとおひろひ遊ばされませう。

賴兼　イヤ〳〵〳〵、モウ〳〵歩けぬ〳〵。其方も休め休め。

戸平　これは又、如何いたした儀でござりまする。お館までは今少し。サア〳〵、おひろひ遊ばされませう。

賴兼　そんならどうでも行かねばならぬか。歩かれぬ〳〵。高尾に逢はぬ辛さを思へば、物かはぢや。戸平、供せい。

戸平　先づ入らせられませう。

ト兩人、舞臺へ來る。

我が君樣へ申し上げまする。最早爰が室町のお屋敷で、裏門でござります。

賴兼　サア、裏門と聞いては猶歩けぬ〳〵。戸平、早う開けさせい〳〵。

戸平　畏まりましてござります。

賴兼　早うせい〳〵。

戸平　ハツ。

ト門に向ひ

御門番の衆中、只今御歸館でござりまする。御門を開けられませう。

賴兼　早うせい〳〵。

戸平　ハツ〳〵。如何でござるぞ。只今君の御歸館でござるぞ。

ト門の内にて、横山彌惣

彌惣　左馬頭賴兼公、お身持ち放埒につき、御門出入り夜中は叶はぬ。

ト賴兼、急く。

賴兼　戸平々々。それぢやと云うて開けさせい。

戸平　左樣には候はんが、卽ちお供いたせしは浮世戸平。相成りませう儀にござらば。

トまた門の内にて

彌惣　ヤア、今宵の宿直は横山彌惣。裏御門を固め居り、夜中と申し、果して狼藉者ならん。侍ひども、一人も殘らず討つて取れ。

侍ひ　ハツ。

ト大勢、門の内にて云ふ。

戸平　なか〳〵左樣な。

ト云ふうち、賴兼、急きたるこなし。

賴兼　戸平々々。

戸平　ハツ〳〵。
頼兼　横山彌惣と云ふ奴では、この門からは入られぬ。こりやどうしたらよからうぞい。
戸平　イカサマ、殿の御放埒とあつて、固められたるこの御門。横山どのゝござつては、御對面も如何。表御門より入らせられませう。
ト花道へかゝり、頼兼、足の痛むこなし。兩人、中の間の歩みにかゝる。と道具替る。
本舞臺、結構なる朱の表門。破風付き赤銅樋、敷石、金紋丸小雀を付け、誂らへの通り道具納まる。
トこれまでに西の花道へかゝり、中程に居り、手を打つ。
戸平　御用にござりまするかな。
頼兼　ホウ、其方一人であつたなア。餘り歩いた所爲か、息が切れた。湯を申しつけい〳〵。
戸平　畏まつてはござりまするが、爰は途中でござりまれば。
頼兼　そんなら途中では湯は呑めぬか。
戸平　左樣でござりまする。

頼兼　ハテ、途中と云ふものは不自由なものぢや。せう事がない、高尾ゆゑぢや。高尾に揉まれて、この頼兼は綻だらけになつたわえ。モウ〳〵、歩けぬ〳〵。駕籠になりと乘せてくれいやう。
戸平　お駕籠を申しつけましても、夜明けませねば、このあたりにはござりませぬやうにござりまする。
頼兼　さう云ふ事なら、夜の明けるまで、爰に休んで居やうわいの。
戸平　これは又、如何いたした儀でござりまする。夜明けますれば人の見る目。夜のうちお供仕るこの戸平。表門までは今少し。刻限も早し、おひろひ遊ばされませう。
頼兼　また歩くのかやい。いから歩かせる奴ぢやな。表門までは餘程あるか。
戸平　今半丁もござりませう。
頼兼　もそつとぢやな。いから風が身に沁むやうぢやわやい。
戸平　夜明け前でござりまするか、明るくなりましてござりまする。
頼兼　戸平參れ。
ト兩人、本舞臺へ來り

サア／＼、爰が表門ぢやな。開けても開けいでも。歩けぬ／＼。早うせい／＼。

戸平　畏まりました。

　ト門に向ひ

殿の御歸館でござる。御門衆中、明けた／＼。

　ト門の内にて默つて居る。

御門の衆中、居らぬかな。明けた／＼。

　ト默つて居る。

頼兼　どうぢや／＼。

戸平　只今御歸館でござるぞ。

　ト默つて居る。頼兼、思ひ入れ。

頼兼　戸平、叩け／＼。

戸平　ハツ、……只今殿の御歸館でござる。密かに御門開けられては下さるまいか。お頼み申す。御門衆中。御門衆中。

　ト云へど挨拶なければ、頼兼思ひ入れあつて

頼兼　最前より両三度に及んで、返答せぬは奇怪千萬。數代扶持なす番の者、この所には居り合さぬか。打ち叩け。戸平、打て／＼。

ト戸平、門に立寄り、頼兼、急く。鷄の聲する。戸平、

　思ひ入れあつて

戸平　はや、一番鷄の告げ渡れば、是非に及ばぬ。

　ト思ひ入れ。

左馬頭頼兼公、只今御歸館。開けた／＼。

　ト門の内にて

外記　ヤア、何者なれば夜中の狼藉。その名を名乘れ。なんと／＼。

戸平　最前より數度申すに聞入れなきか。左馬頭頼兼公、御歸館でござるぞ。御門開き召されい。

外記　ヤア、跡方もなき僞はり事。見れば主從僅かに二人、頼兼公とはなんの寐言。門の開かせ、狼藉なさん手段なるか。この門に何者が固め居ると思ふぞ。外記左衞門固め居れば、樣子に依つては聞捨てならぬ、疾々そこを立去るまいか。

戸平　何ゆゑ以て僞はり申さう。頼兼公に相違ござりませぬぞ。

外記　又してもうつけ者。我が君頼兼公は、諸侯多しと云へども、三四と下らぬ大名なり。他行の節は譜代の諸士、數百人召連れ給ひ、まつた兵亂の變あれば、七萬餘騎の大將なり。それになんぞや只二人にて、門の開けとは何

初演の繪番附

事。大家なればそれ〳〵に知れざれども、侍ひ方は帳面に扣へあれば、姓名を引合せ、その姓名に依つて門の開くべし。この返答、なんと〳〵。

ト これにて兩人當惑する。鷄の聲数多啼き出す。

頼兼　戸平。

戸平　ハツ。

頼兼　外記左衛門、爰に居る上は力及ばず、斯く引しらふ其うちに、夜も明け人にも逢はなん。外記左衛門この所に固め居るは、某が行跡、東山へ洩れ聞えしと見えるなり。コレ、頼兼この所にいつまでか居られう。戸平、密かに云うて見い。早う〳〵。

戸平　ハツ……外記左衛門さまへ申し入れまする。誠頼兼公に渡らせ給へば、御放埓は若氣の誤まり、夜の明けぬ其うちに、御門の開き下さるまいか。外記左衛門さま。外記右衛門さま。

ト ひつそりして居る。

夜明けなばお家の大事、只管お頼み申しまする。如何でござる。御挨拶はござりませぬか。外記左衛門さま〳〵。

ト 兩人顔見合せ

頼兼　戸平。

戸平　我が君様。

頼兼　誠に頼兼、家國を忘れ、東山への聞えも如何。はや東も白み、夜も明けなん。某殆んど當惑したわえ。

戸平　御尤もなれども、夜毎日毎の御遊興。佞人お側に多きゆゑ、一つは御身の不忠となる。家中の嘲り人にも、御主人ゆゑと堪えますれど、四門を閉ぢて出入りさへ、自由ならねば退ッ引きならず、拙者が不運。死後の恥辱は未來から申し上げまする。我が君様、南無阿彌陀佛。

ト 腹を切らうとする。頼兼、留めて

頼兼　ヤレ待て戸平。國家を忘れしこの頼兼。切腹は某。

ト 腹を切らうとする。戸平、留めて

戸平　先づ〳〵お待ち遊ばされませう。あつて益なき下郎が命。必らず聊爾遊ばされますな。

頼兼　イヤ、この頼兼が生害なす。放せ〳〵。

ト 兩人爭ふ。門内にて

外記　生害待つた。

兩人　なんと。

外記　外記左衛門、申し上げたき一條あり、暫らくお待ち下されい。

ト 外記左衛門、上下衣裳、大小にて、門より出る。提

灯持ち二人付き添ひ、外記左衞門、平伏して

東山どのより仰せを蒙むり、我が君へ御諫言を申し上ぐべき、彈正左衞門まで、口を噤んで申し上げず、お大名にあるまじき輕々しき御有様。晝夜分たぬ遊里の放埓。後人進めばお家の滅亡、目のあたり。お氣に入らずば御手討。この御返答が承りたい。

賴兼　あやまつた〱。賴兼心を入れ替へた程に、料簡せい〱。早く寐かしてくれいやい。

外記　何がさて、御跡館とござれば何時なりとも。

賴兼　そんなら、もう行ても大事ないか。

外記　某、御供いたすでござりませう。

賴兼　ヤレ〱、嬉しや〱。併しながら、この小波は、いかう遲いが、月見橋の狼藉者。

外記　狼藉者とは。

戸平　アイヤ、まだ明け殘る月見橋。少しの間も御寢所へ。

賴兼　イカサマ、外記左衞門、參れ。

外記　先づ入らせられませう。

ト時の太鼓にて、賴兼、外記左衞門、戸平、門の内へ入る。チョン〱にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、高足の御簾屋體、高欄結構にして納まる。

ト賑やかなる三味線入りの出の鳴り物になり、下座より土子泥之助、荒川藏人、社杯にて出る。向う揚げ幕より足利鶴千代君、壺折、小さ刀。後より橋立御前、補襠衣裳、金銀の扇を持つて出る。續いて政岡、振り袖の形。彈正左衞門妹田村、腰元關屋。鬼貫、長社杯、小さ刀にて出て、花道にて

橋立　月重山に隱れては、扇をあげてこれを例ふと、兼ねては大德の聞えある、夢窓國師の御弟子となし、出家得脱の鶴千代ながら、弟賴兼放埓にて、穩やかならぬ館の様子。天滿宮へ祈誓をかけ、三七日の朝詣で。木の間隱れに殘る月。なんとよい景色ではないか。

政岡　左様でござりまする。この上は天滿宮の御神力で、我が君様の御本心に、おなりなされまするに疑ひはござりませぬわいなア。

田村　ソレイナア、ちつとも早く打揃うて、お禮詣りの一様に

關屋　お供が致したらござりまするわいなア。

鬼貫　さればこそ鬼貫も、晝夜心は痛むれども、馬鹿に附ける藥とやら。彈正左衞門、東山への伺ひは、事故なく

家督を繼がせん爲ばかり。何は兎もあれ橋立どのには、先づ先づあれへ。

橋立　左樣ならば鬼貫どの。

田鶴　先づ入られませう。

ト鳴り物の切れにて、皆々、本舞臺へ來る、此うち下座より、斯波外記左衞門、横山彌惣、以前の形にて出て來る。

外記　これは〳〵、鶴千代君を始め、御兩所樣、一音寺の御歸館とは、お早い儀でござりまする。

橋立　外記左衞門始め、皆の者大儀。

外記　ハツ、橋立御前さまへ申し上げまする。最早一音寺の御祈禱も、明日が終りと承りまするな。

彌惣　左樣々々。丁度今日が三七日の二十日目。君には募る御放埒惰弱。神の力にも參らぬ事かと見え申すて。

橋立　神力應護も及び難きか。祈禱祈念も盡き果てゝ、如何の事にや鼠の妖怪、鶴千代に害をなし、頼兼が淫酒の放埒、館の諸士も思ひ〳〵の心のうち、東山への聞えも如何と、彈正左衞門が勸めにて、鬼貫さまの御推擧に、太秦のほとりに、貴き修驗の在する由。これが一つの頼みぢやわいなう。

外記　御僧入來のその上は、定めし驗ある事ならん。昔を思へばかゝる例しも又ある慣ひ。修驗のお出でをお待ちなされい。

鬼貫　强寂法印參りなば、忽ち障化は退くでござらう。

ト　ばた〳〵にて、幕明きの杣平、砂利平、狀箱を奪ひ合ひながら出て來る。泥之助、藏人、出て

泥之　何事だ。下がらねえか。慮外者めが。

藏人　扣へぬか〳〵。

杣砂　ネイ〳〵、眞平御免下されませう。

泥之　さう云ふわれア、杣平ぢやないか。

杣平　泥之助さまでござりまするか……オヽ、爰は御殿のお庭先だ。お旦那もお出でなさらア。密事のお使ひを幸ひ爰で。

ト云はうとする。鬼貫、此せりふを消して

鬼貫　何を吐かす。默らねえか。泥之助、詮議を致せ。

泥藏　畏まつてござりまする。

砂利　イヤ、御詮議なくとも申し上げまする。何かは知らずこの狀箱を、引ッ浚つて駈け出しまするゆゑ、そこでこの奴めが。

杣平　コレエ〳〵、默りやアがらねえか。この奴は大事な

御用。彈正さまから密事のお使ひ。

鬼貫　まだ吐かすか。

柚平　それでも、このお返事を。

鬼貫　イヽヤ、知らねえ。あたりへ心が附かぬか。大くら坊め。

外記　コリヤ〳〵下郎め、お大名のお座近く、無禮な奴。何は兎もあれ、怪しき兩人。その狀をこれへ。

兩人　畏まりました。

ト鬼貫、柚平が狀箱を外記に見せては惡いと云ふ心遣ひ。

外記　早う〳〵。

藏人　云ひ譯は後で致せ。その狀箱はこれへ。

ト砂利平が持ちたる狀箱を取つて、藏人、外記へ渡す。泥之助、柚平が狀箱を取つて鬼貫に渡す。

泥藏　イザ、御披見あられませう。

ト鬼貫、外記、狀箱を開き

鬼貫　浮さま參る、高尾より。

外記　名宛の知れざるこの一通。

ト封を切り

ナニノヽ「御紙面拜見仕り候ふ、さて飛田剛敵を相賴み、一藥調合いたし候ふ由承り、大望成就喜悦お察し下さるべく候ふ、舜君より彼の仁によろしくお賴み下され候ふ」……ハテナア。

ト鬼貫、取違へたる外記が見て居る一通を見て

鬼貫　慥かに密書。

ト鬼貫、寄らうとする。

外記　鬼貫公、詮議の狀箱、なんとなさるゝ。

鬼貫　サア、それは。

ト思ひ入れ。外記、持ち直して

外記　名宛は何か白紙に、封じ籠めたるこの一通。とくと詮議を致すでござらう。

柚平　なめら三方。そんなら狀箱が違うたか。その一通を。

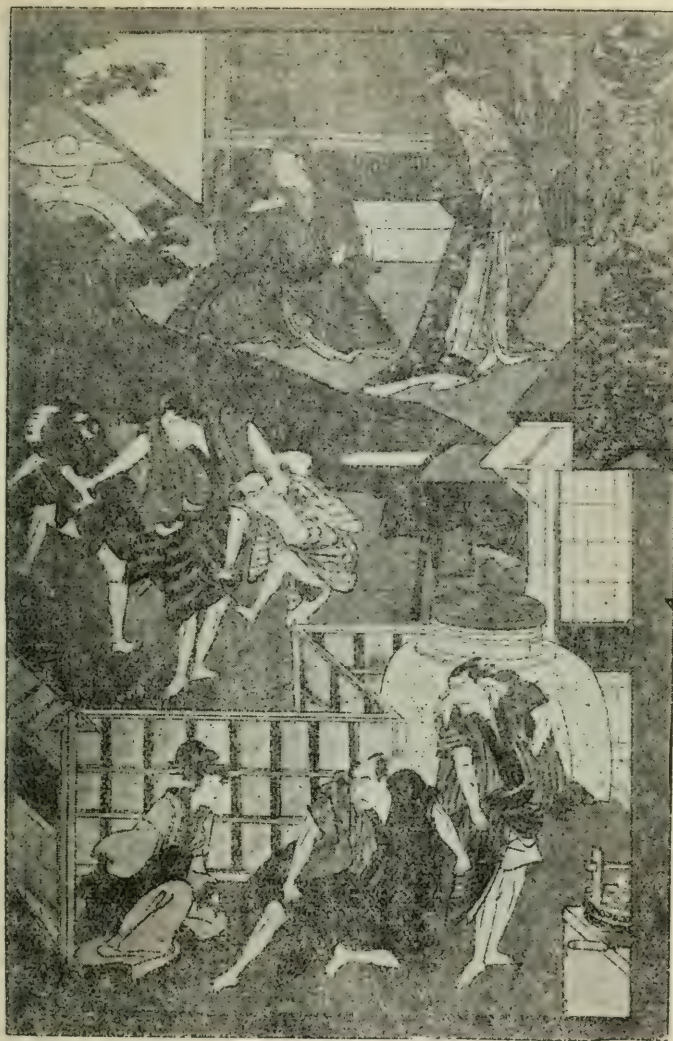
ト外記にかゝる。見事に投げ

外記　慮外な奴の。

砂利　申し上げまする。下郎が命は兎も角も、身にも命にも替へられねえその一通。どうぞお返しなされて下さりませ。

泥之　イヽヤ、さうはならねえ。なんだか知らねえその狀箱。

橋立　イヽヤ、泥之助、待ちや。

初演當時發行されたる

三枚つゝき連續錦繪

泥之　何ゆゑお留めなされまするな。

橋立　サア、この場で詮議なすならば、賤しい者の切なさに、どのやうな……サア、誰れに難儀がかゝらうも知れぬ程に、この詮議は、幸ひ〳〵、横山彌惣、兩人を召連れ詮議しや。

彌惣　すりや、この詮議を拙者めに。

橋立　餘所ながらなるゝにつけてなか〳〵に、思ふ心も漏らし兼ねつゝ。

彌惣　そのお心は。

橋立　漏らしかねつゝ。

トこなし。彌惣、呑み込み

彌惣　そんなら此まゝ見遁がせと

橋立　ハテ、キッと詮議しやいなう。

彌惣　委細承知仕りました。

ト向う揚げ幕にて

女形　殿様、お危なうござりますわいなう。

外記　最早頼兼公のお入りでござれば、鬼貫公にも今暫らく。

彌惣　奴ども、立たう。

杣砂　ネイ。

鬼貫　とは云へ一通り。

ト思ひ入れ。

外記　マア、お下にござりませう。

ト鬼貫、思ひ入れ。彌惣、砂利平、杣平を連れて下座へ入る。賑やかなる淸搔やうなる誂らへの出唄になり、花道より夕凪、腰元の形。高尾が紋の附いたる大提灯を持ち、足利頼兼、夕凪が肩へ手をかけ、庭下駄にて出て來る。後より術木、長柄をさしかけて出て來る。名和無理之助、上下衣裳、紅麻の手拭を頭へ巻き、客のこなし。尤道理之助、同じ上下衣裳、手拭をかむり、前垂れにて遣り手のこなし。禿、頼兼が側へ附き添ひ出て、花道に並ぶ。

禿　殿さん、お危なうござんすぞえ。

頼兼　辛からば只一筋に辛からで、情交りの詞さへ、この頼兼にはかけ居らいで、手活けの花になりながら、身を喜ばす太夫が姿。今日は詞かけ居るか、明日は返事し居るかと、今も高尾が道中を、爰に寫して曳舟禿。

無理　幇間末社を引連れて、御前の御意に是非もなく、大盡姿は無理之助。

夕凪　お庭の内は仲の町、張出す簾はお簾の下。

宿木　此方は末社若い者、お連れ申して格子先。
無理　オッと、危ねえ。
女二　御酒機嫌。
道理　オヤ／＼、どうせう、太夫さん、主がいつそお待ち兼ね。早うあれへ。
皆々　入らせられませう。
頼兼　皆参れ。
道無　アイ／＼。
ト鳴り物の切れにて、皆々、本舞臺へ來り、上へ通り
頼兼　サア／＼、これからは酒ぢや。銚子持て／＼。
外記　頼兼公の御行跡、最前とは事替り、只今の御有樣。外記左衛門、一圓合點が
頼兼　參らぬとか。また飲めぬ奴が出かけ居つた。最前おれが切腹と云うたを
外記　お覺えござりまするか。
頼兼　キッと覺えて居るぢや。最前左樣申さねば、いつまでも果しがないに依つて、其許を騙し申した。斯樣でなければ兵亂の節、軍師にはなれぬ。ハヽヽヽ。
外記　すりや、最前のは。
頼兼　大の萬八、命がなうては、高尾にも逢はれず、酒も呑めぬ。サア、注げ／＼。
橋立　コリヤ、頼兼、この所には鬼貫さまもお出でなさる。いづれぢやと思うて居やるぞ。
鬼貫　橋立どのもお出でなさるゝが、目に見えぬか。
頼兼　これは／＼、お歴々の御座とも存ぜず、殊の外酩酊いたした。御免なされい／＼……サア、呑めぬワ。座敷を替へて呑み直さう。皆來い／＼。
外記　頼兼公、暫らくお待ち下されませう。
頼兼　また留め出るかえ。免してくれい／＼。
外記　エヽ、お情ない我が君樣。東山どのより引續き、足利家萬代不易と存ぜしに、親兄の禮も失ひ、頼兼公御先祖普照院どのへ對し奉りて、莫大の不義不孝。お聞入れなき其うちは、この座は立ちませぬ。御返答は如何でござりまするな。
頼兼　その返答は。
外記　その御返答は。
頼兼　ちつともない。御免々々。
橋立　外記左衛門待ちや。所詮足利家を頼兼に任せ置いては、滅亡は目のあたり。見るもなか／＼涙の種。誰れかある。申しつけた品をこれへ。

泥之　畏まつてござりまする。

ト三方に腹切り刀を載せ、持つて來り、頼兼が前へ直し、下に扣へる。

外記　然らば頼兼公には

皆々　御切腹とな。

橋立　家の大事には替へられぬわいなア。

鬼貫　こりや、斯うありさうなものだわえ。

外記　すりや、どうござりましても。

橋立　侍ひらしう切腹さしや。

鬼貫　キリ〳〵用意。

ト向うにて

彈正　待つた。

皆々　待てとは。

彈正　仁木彈正左衛門、直さまそれへ參つて、申し開き仕らう。方々、扣へ召されい。

ト太鼓謠になり、花道より仁木彈正左衛門、長裃にて出て、花道に平伏する。

外記　彈正左衛門どの、只今出仕

皆々　召されたかな。

彈正　今朝未明に東山御所へ參り、壽照院君の御機嫌の伺ひ、下城の折から、橋立御前のお入りの樣子承り、早速出仕いたしてござる。

橋立　絶えて久しき彈正左衛門、堅固の體、滿足〳〵。近う近う。

彈正　ハツ。

ト鳴り物の切れにて、舞臺へ來て、眞中に居る。

鬼貫　彈正左衛門、東山どのには打絶えて面談せぬが、如何渡らせ給ふな。

彈正　壽照院君には、政事を山名細川にお任せなされ、東永堂へ引籠られ、惣あみ長命の象り、庭には奧の松島象潟を寫し、四時の壯觀、誠に太平のいさをし。臣等の喜び、この上やござりませうか。

鬼貫　尊氏の軍功も、濡れ手で粟の活計歡樂。その弟足利頼兼、登り詰めたる不行跡。彈正左衛門、云ひ譯あらば聞いてくれうワ。外記左衛門、箇條の趣き云ひ聞かせてよからう。

外記　お情なきは頼兼公。亂酒に性根を奪はれ給ひ、筋目知れざるあぶれ者を、召連れられての途中の狼藉。無理　まつた三浦の傾城高尾を、身請けのその價は二千貫目。

泥之　舟遊山のまなびとて、座敷を舟に作らせて、晝夜に絶えぬ琴三味線、
藏人　高尾丸の額を掛けさせ
無理　しつかい屋形は遊里同然。
道理　諫むる者は皆お手討。
外記　依つて諫言申す者もなく、お家の沒落目のあたり。諫めを入れても取上げなく、石に物云ふ同然なれば、御切腹を勸むる折から、止め召されし彈正どの、これ程の不行跡、知らぬとは云はれまい。御返答が
皆々　承りたい。
彈正　これは外記左衛門さまのお詞とも存ぜぬ。身不肖なれども彈正左衛門、東山どのより賴兼公の御行跡、何しに打捨て置かれませうぞ。
橋立　打捨て置かぬ其方が、何ゆゑ諫めはしやらぬぞ。
彈正　橋立御前の御意にはござりますれども、生得柔和のお生れつき、軍學にお心を勞せられ、おしつらひをいとひ、僅かの御遊興はお身の爲。まつた廓通ひに名もなき者を附け置くは、お家の名を出すまい爲。强ひて諫言仕らば、燃え火に薪を燻べるも同然。殊に御若年の賴兼公、一度は若氣のお至り、高尾太夫を呼び寄せしも、全く殿の御存じなき事。この彈正が計らひにて、外へ漏れざるお庭の遊興。高尾の亭の舟造りも、お足を止むる少しの計策。お心任せのその上にて、何となく御意見申さば、實に尤もとお聞入れあつて、御合點ゆかんはコレ必定。もし又お聞入れなきその時は、眼を拔いて東門に曝す吳子胥が例し。忠義一圖の仁木、直さま殿の御病氣、舊鼠の祟りも三七日がその間、大乘經の修せられし、强寂法印の同道いたせば、お家長久近きにあり。只貴殿と某が、仲を裂かんず讒者の計らひ。必らず取上げ召さるゝな。
外記　何がさて、拔け目なき彈正どの、御切腹と申したも、我が國を思し召すよりの事。君君たらねども臣たる仁木どの、御前、お聞き遊ばされましたか。
橋立　賴兼とても自らが弟の事、何しに憎う思はうぞ。
外彈　ハツ。
鶴千　伯父君樣、どうぞお心を、お直しなされて下さりませい。
政岡　我が君樣、鶴千代君のいたいけな仰せ。お詞を進ぜられませう。
賴兼　誰れかと思へば、大きな若殿、早く足利の武將にな

つて、たんと女郎を買ひなされい……ア、、最前からの長談義に、いから退屈した。サア／＼、これから高尾太夫が、麗はしい顔を見て、呑み直さう。女子ども參れ。

女形　ハッ。

ト唄になり、頼兼、夕風、關屋、宿木、下座へ入る。鬼貫あと見送り

鬼貫　取り所もない大白痴。橋立どの、どうでござるな。

橋立　無法と云はうか、亂心同然……イヤ、ナニ、鬼貫さま、御推擧の強寂とやらんは、未だ見えられませぬかな

鬼貫　イカサマ、最早入來ありさうなものでござる。

ト彈正、ちよつと印を結ぶ。薄ドロ／＼にて、強寂法印、鼠衣の形にて花道へセリ上がる。皆々思ひ入れ。

強寂　太秦の強寂、參上。

彈正　これは／＼強寂法印、遠方の所、御苦勞。

橋立　思ひがけなき道德の聖。先づ／＼これへ。

強寂　へつらひなきが山寺育ち、許し召されい。

ト上へ通る。外記左衛門、思ひ入れ。

外記　正法に奇特なし。誰れ訪なふ者もなく　これへ來るはかつまぼろし。滅多に奥へは通されぬ。

彈正　外記左衛門、異な事を申さるゝ。某推擧の強寂僧都、迂濶にこれへ呼び申すか……客僧、必らず心にさへられ召さるな。

強寂　なんの／＼、人に對して爭ふは、これ第一の佛の戒め。墨の衣の墨染なるらん。苦しうござらん／＼。

鬼貫　眞に悟りし大導師。鬼貫殆んど感心いたした。

ト薄ドロ／＼にて鼠數多出て、鶴千代君が側へ來る。

鶴千　怖いわいなう。

ト政岡、鶴千代を圍ふ。強寂僧都、珠數にて拂ふ。鼠消える。橋立御前、外記左衛門、思ひ入れ。

外橋　さては。

ト寄らうとするを、彈正、隔てゝ

彈正　先づ入らせられませう。

ト管絃になり、この人數殘らず奥へ入る。バッタリと音して、下の網代垣より白刃を突き出す。非筒女之助、若衆、頬かむり、黒羽二重、浪人者の形にて顯はれ出る。下座より政岡、出て、窺ふ。女之助、刀を納め、奥へ行かうとするを引留め

政岡　待ちや。見れば怪しい形をして、闇はあやなし木蔭より、忍ぶ覺悟の黒仕立て。女子だてらも宿直の役。やる事ならぬ。マア待ちや。

ト立廻り。女之助、顔を隱す思ひ入れ。よいキッカケに頰かむりを取る。兩人、顏見合せ。

ヤア、お前は女之助さま。

女之　政岡どの。

政岡　主は誰れとか山吹の

女之　問へど答へぬ勘氣の身の上。

政岡　知らぬ事とて

女之　危ない事で

兩人　ふつたなア。

政岡　今も今とてお前の事、吉光の刀紛失ゆゑ、御勘當のお身の上。どうして爰へは、お忍びなさんしたぞいなア。

女之　成る程、不審は尤も。殿より預かり奉りし、吉光の刀紛失、申し譯なく立退く某。この程聞けばお館の騷動。せめては讒者を見出さん爲、さてこそ忍ぶこの樣子。必らず人に沙汰ばし召さるな。人目にかゝらば互ひの難儀。政岡どの、重ねて。

ト行かうとする。

政岡　マア／＼待つて下さんせ。明暮れ慕ふわたしが心、よう顏見せて下さんせいなア。

ト引留める。

女之　この場に及んで、嗜なみ召されい。

政岡　イエ／＼、どうでも話さにやならぬ事があるわいなア。

女之　イヤ、爰放した。

ト女之助、行かうとする。政岡は留める。此うち下座より、砂利平、以前の形にて

砂利　ネイ／＼、有り難うございまする。

ト捨ぜりふを云ひながら出て來り、この中へ入る。政岡、砂利平を引留める。砂利平は女之助を引き合ふ。下の方より大きなる鼠、文を啣へて出て來り、この中へ惑ふ。

政岡　アレ／＼、鼠が／＼。

砂利　此奴は何か啣へてうせるわえ。

政岡　アレ／＼、其方へ／＼。

ト此うち鼠、長押を渡る。砂利平、脇差の小柄を拔き、エイと手裏劍を打つ。鼠落ちる。砂利平、文を取上げる。

政岡　そりや、文ではないかい。

砂利　ハテ、變つた物を啣へて來たわえ。

ト懷中する。

女之　政岡どの、重ねて逢ひ申さう。

ト行かうとする。

政岡　マア〳〵、待つて下さんせ。

ト留める。下座より鬼貫出て

鬼貫　不義者動くな。

女之　南無三。

ト逃げようとする。下座より泥之助、無理之助、道理之助、藏人、出ろ。

泥之　不義者と仰せらるゝは

皆々　何者でござるな。

鬼貫　腰元政岡、相手は井筒女之助。

泥之　追放されしお館へ

無理　忍び込んだは盜賊夜盜。

道理　形もそぼろな素浪人。

藏人　薄汚ない態をして

四人　なんで不義をひろいだのだ。

鬼貫　エヽ、女之助、勘當の身を以て忍び込みしは、ア、聞えた。この程館の鼠の妖怪、さちやアわれが仕業だな。

女之　滅多な事、仰しやりまするな。

鬼貫　滅多もはつたもいらない。お暇の出たこの館へ、入込んだにやア樣子があらう。眞直ぐに吐かすまいか。

砂利　モシ〳〵、必らず聊爾なされまするな。私しがよく存じて居ります。この二人は、不義者ではござりませぬぞ。

鬼貫　さう吐かすわりやア、左金吾が二合半だな。

泥之　われにも詮議が殘つて居るぞよ。

砂利　わしに詮議が殘らうが、どうあつても二人の衆は、色事ぢやアござんせぬぞ。

皆々　何がどうした。

ト簾の内にて

橋立　その兩人は不義者ぢやぞ。

女政　あのお聲は

四人　橋立御前。

ト管絃になり、御簾上がる。眞中に橋立御前、左右に彌惣、外記左衛門、以前の形にて並ぶ。

政岡　ヤア、御臺樣。

女之　父上樣、面目次第も

兩人　ござりませぬ。

彌惣　白痴者めが。勘當したれば赤の他人、身のたゝずみがない儘に、我れにまで恥辱を與ふる不所存者めが。

外記　横山どの、おてまへには勘當なされたからは、今は他人の女之助。あの政岡は刀屋石見が娘なれど、某親分にてお側勤めを致すからは、越度は拙者、面目次第もございませぬ。
橋立　弟頼兼惰弱につけ、心ならざるこの時節、人の嘆きを餘所に見て、館へ來るのみならず、政岡と不義いたづら。自らが聞く上は、其まゝには濟まされぬ。横山も外記左衞門も、必らず遺恨に思ふまいぞ。
彌惣　御法を破れば件とて、容赦はござらぬ。
外記　御存分に遊ばされませう。
鬼貫　悪い所へ橋立御前と、思ひの外に不義の成敗。面白い。
橋立　紫雲一つ根より生じ、葉は兄弟の禮を分つと、草木さへ禮あるもの。頼兼が不行跡、上を學ぶ下とやら。不忠不孝の見懲らし。兩人に繩打て。
外彌　ハッ。
ト外記左衞門は政岡、彌惣は女之助を縛る。
橋立　誰れかある。刀屋石見をこれへ伴なや。
ト下座にて
戸平　畏まつてござりまする。
ト刀屋石見、袴羽織にて、袋に入れし白鞘を持ち、浮世戸平附き出る。
刀屋石見を召連れましてござりまする。
石見　女之助さま、娘お花がこの縛しめは。
橋立　ナニ、石見とやら。
石見　ハッ。
橋立　申し附けたる仁王國淸の刀、持參いたしたか。
石見　卽ちこれへ持參いたしましてござりまする。
ト刀を出す。
橋立　研はよいが、切れ味が心元ない。幸ひ二人の不義者を、土壇を築いて試し者。
石見　アノ、この刀で娘を。
鬼貫　して、土壇の役目は、誰れに云ひつけ召さる。
外記　二人を重ねて二つ胴、拙者に仰せつけられい。
彌惣　イヤ、拙者めに。
兩人　仰せつけられ下さりませう。
橋立　イヤ、その役目は……戸平、それへ。
戸平　ネイ。
ト眞中へ出て
御用でござりまするかな。

橋立　いま聞く通りの二人の者、檢分の役は横山彌惣、外記左衛門。

戸平　ナニ、アノお二方の胴試しを。

橋立　其方を見込んで自らが指圖。なんと違背はあるまいがな。

戸平　身にも應ぜぬ事ながら、否と云はれぬ御前の御諚。委細承知仕りましてござりまするが。

鬼貫　ヤア、下郎、家中並み居るその中で、いよ〳〵われが試して見るか。

戸平　イヤ、伯父御様、斯様に申さば、どうやら自慢がましうござりまするが、この奴めもちつとくやつとく、覺えがなくて、この役目が受けられませうか。まだ〳〵手が外れたら、どなたに當らうも知れません。お危なうござりまする、

鬼貫　鬼貫に向つてさう云ふ過言。その舌の根を。

ト抜きかゝる。その手をしやんと留め

戸平　ドッコイ……習ひ覺えし流儀の奥儀。呼吸を止める眞々柔術。これではなんと動かれませうかな。

ト鬼貫、身内の痛むこなし。戸平、鬼貫を突きのける。

泥之　慮外な奴め。胴試しは我れ〳〵が。

道理　ぶつ放すワ。

ト立ちかゝる。

橋立　イヤ、さうはならぬ。

鬼貫　そりや又なぜ。

橋立　二人を試し、その後では、鬼貫さまも御相伴。試し者の御上客でござりまする。

鬼貫　この鬼貫は何誤まり、何科で。

ト橋立御前、思ひ入れあつて

橋立　左金吾が下郎とやら、最前拾うたその文を、これへ持ちや。

砂利　アノ、この文を。

ト懷中より出す。

橋立　サア、この場で讀み上げや。

ト鬼貫、文を見て

鬼貫　それを。

トかゝるを隔てゝ

砂利　中は何かは封じ目も、切らねど知れし樣參ると、手渡す中途で上げた上書に、たえまなく焦るゝ身より。

鬼貫　なんと。

砂利　たえまとかけし枕詞、なんと覺えがござりませうが

な。

ト砂利平、披げ、讀みにかゝる。上の振り出しより、強寂僧都出て、印を結ぶ。薄ドロ〳〵にて煙硝火パッと立ち、この文燃える。

砂利　これは。

鬼貫　方々、お來やれ。

敵四　ハヽア。

ト管絃になり、鬼貫、先に振り出しの強寂僧都、泥之助、無理之助、道理之助、藏人、いづれも下座へ入る。戸平、思ひ入れあつて、女之助、政岡が繩を解く。

戸平　下郎めに仰せつけられましたる胴試しは、斯樣な事でござりませう。

橋立　流石に敏き戸平が計らひ、それで政道は濟んだわいなう。

彌惣　すりや、二人の者を。

橋立　助けん爲の心遣ひ。

女政　エヽ、有り難うござりまする。

橋立　これに居合す刀屋石見、娘お花がその死骸を、人目にかゝらぬ其うちに

石見　引取りまするでござりませう。

外記　して、女之助がこの死骸は。

橋立　元の所へ埋めて置きや。

戸平　して、この刀の胴試しは。

橋立　われ人も色に引かれて上りけり、京の高尾も江戸の高尾も。

戸平　京の高尾も、江戸の高尾も。

ト戸平、思ひ入れ。

そんなら高尾を。

橋立　コリヤ。

ト皆々、思ひ入れ。

早く死骸を片附けい。

ト戸平、刀を拔きかけ、ギックリ思ひ入れ。皆々、よろしく。この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、屋形船に仕立てたる亭座敷。蹴込み、船縁を取りつけ、楫と舳を見せ、欄間に高尾丸と書きし額を見せ、一面の紅葉の附きし提灯を下げ、紫の幕を掛け、舞臺先、杜若の流れ。いづれも結構に仕立て、爰に高尾、蒔繪の料紙硯を並べ、經木に念佛を書いて居る。田村、夕風、關屋、宿木、

いづれも腰元の拵らへ、この經木を池へ流して居る。この模樣よろしくあつて、誂らへの鳴り物にて道具納まる。

田村　ト皆々、烟草盆、茶など持つて出る事あつて高尾さん、新たに出來た船作りのこの御殿。中洲や兩國のやうに、琴三味線の舟遊山かと、樂しんで居りましたに、此やうにお念佛ばかり申してお出でなされまするは、どうも合點が參りませぬわいなア。

宿木　ソレイナウ、お館へお出でなされては、佛いぢりばつかり。太夫樣と云ふものは、派手なものと思ひの外。

關屋　ほんに坊さんのやうな、お身持ちでござんすわいな。

夕凪　ちつと面白い事なされませいな。却つてお身の

四人　毒ぢやぞえ。

高尾　成る程、さう云うて下さんすは、嬉しうござんすわいなア。見る影もないやうな賤しい身を、我が國に替へて請けられし私しが身の上。定めし面白う酒の相手に、ささうと思うて居やんせうが、屋形造りの亭座敷も、此やうに偈書を流す、川施餓鬼がしたいばつかり。日毎に流す念佛の、數は千遍二千遍、千僧萬僧の供養より、これがわたしが願ひぢやわいなア。

田村　モシイナア、この偈書を水へ流し、なんとするお願ひか。

夕凪　後世の爲でござんすかいなア。

高尾　この偈書を水へ流すのはな、有り難い御出家樣の、お經にある事ぢやと仰しやつたゆゑ、供養の爲でござんすわいなア。

關屋　高尾さんとしたことが、今を盛りの身を以て、佛いぢりはいらぬもの。

皆々　ほんに、ちつと浮き／＼なさんせいなア。

ト ひんと心にと云ふ流行り唄になり、鬼貫、羽織衣裳にて、筑波婆アを連れ出て來り

鬼貫　これはこの頃出來た、高尾丸の亭座敷。なんとよいか。どうだ。

筑波　どこもかしこも芬々として、古木の匂ひとは違うて、御繁昌なお家樣でござりやすなう。

鬼貫　高尾太夫は、今日はまだ逢ひませぬ。もうこの鬼貫は、つれないお主が事は、フッツリと思ひ切つた。今爰へ來たは、其方に逢ひたがる者があるに依つて、それでわざ／＼來たのだ。

高尾　わたしに逢ひたい人とわえ。

筑波　わたしでござりやす。

ト高尾、筑波婆が姿を見て、合點のゆかぬ思ひ入れ。

高尾　エ、……お前はどこの婆さんでござんすえ。

筑波　ホ、、、この子とした事が、餘所々々しい。マア、よく顏見せて下されいなう。

ト寄り添ふ。

高尾　アノ、滅多に側へ寄らしやんすな。お前はどなたさんぢやえ。

女皆　マア、そこを下がりやいなう。

筑波　お女中さん方、あんまり叱つておくんなんすな。わたしやア高尾が母でござんすわいな。

高尾　エ、、。

筑波　御繁昌の旦那の、お圍ひ者になつたに依つて、御祝儀に參りやした。大勢ぢやアござりやせん。婆ア一人でござりやすわな。

田村　そんなら主が

夕風　高尾さんの

高尾　なんのいの、どうしてわたしが母さんは。

筑波　コレ、娘、情ない事云ふわいの、小さい時に別れたゆゑ、知りやるまいが、常陸の鹽原村で親仁樣の名は重兵衛、其方の名はおみやと云うたを、覺えて居やうがの。

高尾　成る程、父さんの名は重兵衛さんとは云うたけれど、わたしは胤が變つて居るわいな。

筑波　サア、その譯も話したけれど。

ト女形に心遣ひ。鬼貫、呑み込み

鬼貫　コリヤ〳〵、女子ども、次へ立て。

高尾　モシ、お前方は居て下さんせいなア。

四人　ハイ。

鬼貫　コレサ、親子話す事もあるものだ。氣を利かせ〳〵。

四人　左樣ならば阿母さん、緩りとお話しなされませ。

ト四人、下座へ入る。

鬼貫　阿母、遠慮はない程に、積る話しをしたがよい。

高尾　どうも、どのやうに云はしやんしても、ついに見た事もない怖らしい婆さん。すつきり合點がゆかぬわいなア。

筑波　モウ、何から云はうやら、胸まで出て、口へは出ぬわいな。

鬼貫　その筈〳〵。久し振りで逢うたゆゑ、嬉しいばかりで口へ出ぬは尤も。コレ、高尾、お主が父、太田道三に遣はれた腰元だワ。

文化十年中村座上演

尾上松之助の高尾　澤村田之助の頼兼

高尾　コレ、滅多な事を云はしやんすな。あの道三とやら云はしやんすは。

鬼貫　イヤサ、隱すな。一歲道三、岩手山の狩倉の折から、一村雨の雨宿り、爰はなきかと立寄る折

高尾　住み荒したる庵より、一人の女子立ち出でて、恥らひながら山吹の、枝を手折つて差出せば

鬼貫　道三これをキッと見て、七重八重花は咲けども山吹の

高尾　みの一つだになきぞ悲しき。

筑波　その女子はわたしぢやわいの。ツイ雨宿りに濡れ初めて、また逢ふまでの筐とて、下さんしたる香包み。それからお腹が大きうなり、産み落したは其方。その時香包みを守り袋へ入れて置いたが、定めし持つて居やらうが。

高尾　成る程、父さんの筐とて、下さんした香包み、肌身離さず持つて居るわいな。

筑波　それで疑ひ晴れたであらうがの。

高尾　五つの年にお別れ申した母さんゆゑ、お顏は知らねど、香包みと云ひ、鹽原村と云はしやんすからは、そんならお前が母さんかいなア。

筑波　娘、よう顏見せてくれいやい。

鬼貫　コレ、高尾、其方は正しき道三が娘。さすれば足利は父の仇、恨みがあらうが。

高尾　その恨みがあるゆゑ、この年月枕交さぬ傾城の、張りにたゆまぬ賴兼さま、身請けされても解けぬ胸。定めてつれない胴慾と、思し召してゞあらうけれど、現在父の仇敵、肌を觸れぬがせめての云ひ譯。義理も情もよう汲み分けて居るけれど、孝にとゞまるわたしが身の上。よう詫び言して下さんせいなア。

鬼貫　さう云へば親孝行に聞えるが、誠は毛利の討ち漏らされ、宇治の浮田に蟄居なす、左金吾へ立てる心中か。

高尾　なんの左金吾さんへ。

鬼貫　心が殘らずば、賴兼を刺し殺せ。

筑波　それ〱、賴兼どのに身を任せ、寢入つた所をたつた一突き。それが親への孝行ぢや。

高尾　ぢやと云うて、其やうな事が。

筑波　親の詞に背きやるか。

高尾　サア、それはな。

鬼貫　そんなら殺すか。

三人　サア〱〱。

筑波　返事がならずば、いつそ斯うして。

ト筑波、高尾を引きつける。外記左衛門出て、筑波を見事に投げつける。

鬼貫　誰れだと思やア外記左衛門、身が召連れたる老女を、何ゆゑ投げた。

筑波　コレ、お侍ひさん、なんで投げさつしやりました。

外記　イヤナニ、樣子は存ぜねども、むさくろしい形をして、お館へ踏み込む狼藉は、見遁がしならぬ拙者が役目。

鬼貫　外記左衛門、形はそぼろでも、あれは高尾の母だワ。

外記　あの老母めが。

高尾　お恥かしうござんすわいなア。

外記　なに恥かしい事がござらう。斯う見たところが、どうか母御のやうに見えます。常陸の國柴原村の百姓、先達て通達でも致せば、致し方もあらうのに。併し、推して參る筈もない。ハヽア、こりや何者にか頼まれたな。

筑波　娘に久しう逢はぬに依つて、逢ひに來たのぢやわいの。

外記　イヤ／＼、外の者はイザ知らず、某が怪しいと見拔いたからは、一詮議いたしてお目にかけう。

ト奥より賴兼、泥之助、藏人、無理之助、道理之助、銚子杯を持ち出て來り、賴兼、外記左衛門を中啓にて打ち据ゑる。外記左衛門、思ひ入れあつて

お待ちなされいお殿樣、この外記左衛門、なに誤まりござつて、御打擲は遊ばされました。

賴兼　詞を返せば矢張り誤まり。何ゆゑ老女に慮外申した。

外記　御意にはござれども、母と僞はり御殿へ參りし曲者ゆゑ。

賴兼　例へ僞りにもせよ、高尾が母と申して來たからは、何ゆゑ馳走は致さぬ。あのやうな者には構はずと、これへ參れ／＼。

筑波　賴兼どの、許さつしやい。

ト上へ直り

久しぶりで旨い酒でも呑みませうか。

賴兼　ソレ、酒持て。

四人　畏まりました。

ト銚子杯を持つて來る。

筑波　イヤ／＼、こんな所で呑んでは身にならぬ。奥へ行て心の儘に、酒にしようわいの。

賴兼　そりや兎も角も。

筑波　アイ／＼、そんなら皆、これにえ。

ト合ひ方にて、筑波婆ァ奥へ入る。頼兼、こなしあつて

頼兼　コレ、太夫、この頼兼はこれ程までに思うて居るに、さう氣強うはならぬもの。既のことにおれも最前

ト腹を切る眞似をして

斯うしようとしたを、やう〳〵あやまつて、今ではどこへも出る事はならぬ。なぜに浮き〳〵しやらぬぞ。

高尾　斯く賤しき身ながらも、君の求めに應じて流れの身の詮方なく、お館へ請けられしが、よく〳〵思へば大國の主、わたしが醜き形を愛でさせ、夜毎日毎のお詞も、勿體ない有り難しと、心には思へども、身にも願ひのあるゆゑに、飾りは取らねど尼法師。出家の心でござんすわいなア。

頼兼　サア〳〵、又しても佛いぢりか。サア、ちつとわつさりと心を持つたがよい。サア〳〵、一つ呑みや。一つ呑みや。

ト頼兼、呑んで、高尾に獻す。高尾、ふさいで居る。

サア、一つ呑みやいの。

ト默つて居る。

鬼貫　コリヤ、高尾太夫、某相手になり申さう。一つ呑み召されい。

高尾　お志しは嬉しうござんすが、わたしや酒は絶ちましたわいの。

頼兼　そりや又なんの願ひで。

高尾　菩提の爲に。

鬼貫　イヽヤ、間夫に添ひたい願ひであらう。

高尾　エヽ。

鬼貫　頼兼、杯を獻し申さう。

ト鬼貫、以前の砂利平が所より取りたる文を出し、頼兼が前へ投げてやる。頼兼、見て

頼兼　浮さま參る高尾より。

高尾　その文は。

ト寄らうとする。

鬼貫　お身の心に隨はぬ、病といふはその文の主。

ト頼兼、急いて

頼兼　外記左衞門、讀み上げい。

外記　ハッ。

ト取上げ披き

「急ぎ文して申し上げ參らせ候ふ、我が身こと流れの憂き身を立てしより、行くへも知れぬ枕の數々多きその中

にも、其許樣と二世の語らひ渡し候ひしに、賴兼の君、千金の價を以て、妾が身に替へさせ給ふ上は力なし、自らは賤しき川竹の身なれど、誠を盡すは其方樣ばかりに御座候ふ、只々未來の契りを念じ參らせ候ふかしこ。浮さま參る、高尾より」。

ト賴兼、始終思ひ入れ。

賴兼　浮さま參るとは問ふに及ばず

鬼貫　浮田左金吾。

高尾　イエ／＼、左金吾さんぢやござんせぬぞ。

賴兼　して、この浮とあつたるは。

高尾　サア、その浮と書いたは。

四人　浮さま參るは。

ト下座にて

戸平　浮世戸平の浮でござりまする。

皆々　なんと。

ト合ひ方にて、戸平、出る。

戸平　高尾が勤めの浮と云ふ、高尾の深間、御存分に遊ばされませう。

ト首差伸べる。

高尾　コレイナア、それではこなさんの難儀。

戸平　ハテサテ、斯うなるからは隱すに及ばぬ。年月馴染んだ高尾も、君の御意なればこそ、これまで包みし同じ名の浮田左金吾。暫しも御前を僞わりしが、退引きならぬこの場の手詰め。人に難儀をかけんより、明かさば浮田も助かる道理。爰の所を聞き分けて、名乘るが人の僞でござらう。

ト高尾、こなしあつて

高尾　成る程、その文は、浮世戸平さんの浮でござんす。

鬼貫　そんなら高尾が間夫といふは。

戸平　小賤ながら、この奴めでござりまする。

ト賴兼、立ちかゝり、ウムと刀を拔きかける。外記左衞門、留めて

外記　御前、只今お目が覺めましたか。譬への通り傾城傾國、一夜流れの浮かれ妻、お刀の穢れになりまするぞ。

賴兼　ムウ。

外記　人の難儀を身に。サア、我が身を捨てゝ明かせしは、どうで命は突出しからの、馴染とあれば先客。御前は後げん。なんと左樣ぢやござりませぬか。

鬼貫　定めて手討と思ひの外。せめての事にぶちのめせ。

四人　ハツ、上意。

ト四人かゝつて、戸平を打ち据ゑる。

高尾　そりや又あんまり。

ト寄るを、外記左衛門、隔てる。

頼兼　これで心が少しは晴れた。廓のうちは間夫も有うち。今は我が館へ來る上は、廓は過去、爰は現世、逢ふ事のなきを浮田に譬へたる、浮世戸平が憂き身の上。ハテ、うい奴の……うい奉公のその日より、これまで盡す忠義は水。憎くき奴。只この上は、高尾の返事が生死の境。心を定めて思案をせい。

ト唄になり、頼兼、先に、外記左衛門、鬼貫、皆々、殘らず奥へ入る。高尾、戸平、殘る。

高尾　戸平さん、嬉しうござんす。よう左金吾さんの名を出さず、身に引繼いで下さんした。物堅いお前の心で、高尾が間夫と云はしやんしたその時は、さぞ術なかつたでござんせうと思うたゆゑ、あれは僞はり、實は浮田左金吾さんと、云ふに云はれぬ父上の、御所持なされし山鳥の印。末の誓ひとお預かり申せし上からは、もしも御身に凶事あつては、願ひも叶はず剰へ、山鳥の印まで人手へ渡すが本意なさに、矢ッ張りお前を間夫にして、一寸遁がれは、詞に云はれぬわいなア。

戸平　ナニ禮に及びませう。浮と云ふ字を幸ひに、名乗つて出たは、矢ッ張り君のお爲なれば、禮は却つて此方から。伯父御鬼貫さま、お家を押領せんと、様々の企み事。連れて來りしあの老女も、母と僞はり頼兼を討たせんと、早くも計り知つたるゆゑ、仲を裂くには屈竟の、浮さま參るのあの手紙、巧くいつたと思ひの外、まだも執心殘りし様子。いつそ打明け老母の身の上。

高尾　わたしもさうは思へども、少さい時に別れたゆゑ、お顔も覺えず、ほんに憎い母さんではあるわいなア。お前はあの侍ひ衆に叩かれさんしたので、きつう髪が損ねたぞえ。さぞ腹が立つたでござんせうなア。

戸平　なにサ、斯う云ひ出しちやア、お手討になるは覺悟の前。これで濟めば、わしが仕合せだ。

高尾　さぞ鬱陶しうござんせう。つい撫でつけて上げうかえ。

戸平　そりやあんまり憚りだね。

高尾　髪は愚か、お前には、どのやうな事して上げても、飽きはないわいなう。

戸平　そんならお詞に甘へまして、撫で上げておもらひ申しませうか。

初演の繪番附

高尾　サア、爰へござんせ。
　ト戸平、池の側へ寄り
戸平　只ザッと撫で上げて下さりませ。
高尾　ドリヤ、取上げてあげうかいなア。
　ト獨吟になり、高尾、戸平が髪を撫でつけろ。此うち戸平、池に映りし高尾が顔を見て思ひ入れ。唄一くさり切れる。合ひ方。
戸平　誠や、褒姒が笑に國家を傾け、貴妃が國色も馬嵬が驛に白骨を曝すと、賴兼公が迷はれしも實に尤も。ハテ、あでやかなる容貌ぢやなア。
高尾　コレ、戸平さん、何を云はしやんすぞいなア。
　ト戸平、心附き
戸平　地に映りし座敷の提灯、誠に星と欺かれ、見事ぢやと申した事サ。
高尾　なんぼ池が見事でも、屋敷の内。この身は矢ッ張り足利の、啼かぬ鶉、金銀をちりばめし、籠の内に飼はれんより、野に放せと云ふ通り。願ひは屋敷を出たいわいなア。
戸平　今にも屋敷を放れたら、さぞや心も浮田の森。
高尾　エ、。
戸平　サア、浮田の森の夕烏。
　ト獨吟になり、切れるまでよろしくあるべし。トゞ高尾に戸平、無理無體に抱きつく。恟り。
高尾　戸平さん、冗談どころぢやあるまいぞえ。
戸平　イヽヤ、座興でござらぬ高尾どの、惚れました。
高尾　エヽ、お前は氣でも違うたかえ。
戸平　如何にも氣が違うた。殿のお爲、左金吾どのを救はんと、浮と云ふのは我れなりと、名乘つて出たのが縁となり、池に映りし姿を見て、今まで女に見向きもせぬ、戸平が心は入れ替り、幾度思ひ直しても、思ひ切られぬ身の因果。情を商ふ高尾どの、どうぞ叶へて下されいなう。
高尾　ムウ。てんがうぢやと思ひの外、そんならお前は。
戸平　眞實底から惚れ込んだ。コレ、拜みますわいの。拜みますわいの。
高尾　成る程、この高尾が事は身に引請けて、世話になつたお前ぢやもの、それ程までに思はんす事、ツイ返事したけれど、夜毎に變る枕にも、二世と思ふは左金吾さん、今日まで立て拔く心の操。どうマア破つて、返事がならうぞ。どうもこの身は。

戸平　随はれぬか。
高尾　今は賤しき流れの身なれど、太田道三が娘、足利へ恨みあるゆゑ、頼兼さんにさへ任せぬ身を。推量して下さんせいなア。小宰相の局は海に入つて、その名を清く殘せしとやら。
ト池の菖蒲を取上げて
わたしが心は、これでござんす。
戸平　ウム……茅が軒端の俤を、かりふく宿のあやめにて見る……そんなら願ひが。
高尾　イヽや、今宵また菖蒲を添へて結ぶかな、かへぬ假寐の草の枕に。
戸平　すりや、矢ツ張り浮田に心を立てる菖蒲草。
高尾　泥より出でて、泥には穢れぬ女の操。
戸平　如何程引きぞわづらうても。
ト高尾を引寄せる。筑波婆ア、奥より走り出て
筑波　さうはならぬワ。
ト戸平を引退け、高尾を引立てようとする。戸平、拔討ちに筑波婆ァを池に切り込み、高尾、行かうとするを、しッかと押へ
戸平　命に替へて背に立つたも、色よい返事が聞きたいばかり。返事次第で高尾どの、命は戸平が貰ひますぞ。
高尾　例へこの身は提げ切りにあふとても、どうマア心に従はれうぞいなア。
戸平　斯程理を責め事を分け、云ひ聞かすのに返事がならずば、是非に及ばぬ。覺悟。
ト切つてかゝる。けはしき立廻りにて、高尾が肩先を切る。高尾。タヂ〲として苦しみながら
高尾　嬉しや願ひが。
戸平　ヤア。
ト高尾、戸平が側へしやんと坐り、首差伸べて手を合せる。戸平、拔き身を振り上げる。これをキッカケに、拍子幕。引返し
本舞臺、平舞臺三間の間、大簾の御殿。直ぐに大太鼓入りの鳴り物になり、キッカケにて佐々良三平、多治見次郎、無理之助、田邊金兵衛、一對、鼠の四天にて、てんでに鎗を持ち、男之助、筋隈裃、股立にて、よき見得にてセリ上がる。
三平　この程鼠の慾ひと云ひ
無理　鰹蜥蟋蟀見るやうに

見次　縁の下にしやツ屈む

金兵　胡散臭いかぶつきり。

三平　鬼貫公の云ひつけで、ぶッちめに來た。

四人　覺悟なせ。

男之　何を小積な蚊蜻蛉めら。ならば手柄に搦めて見ろ。

三平　ソレ。

四人　やらぬワ。

ト大太鼓入りの華やかなるタテの鳴り物になり、男之助、四人を相手に華々しくタテあつて、トゞ下座へ追ひ込むと、また下座より大きなる縫ひぐるみの鼠、一巻を啣へ、走り出て、男之助を見て飛びかゝる。これを足下にかけ

男之　ハテ、怪しや。いま荒獅子男之助照秀が、鶴千代君のお身の上心元なく、御寝所の床下より、宿直なすともイザ知らず、窺ひ寄つたるどぶ鼠め、うぬも只の鼠ぢやアあるまい。この鐵扇を喰はぬうち、とつとと姿を消えろエヽ。

トちよつと立廻り。鐵扇にて鼠を打つ。鼠逃げて花道の切り穴へ入る。男之助、タヂ〳〵となる。ドロ〳〵にて、切り穴より彈正、長𧘕𧘔、四天にてセリ上がる。

さてこそ曲者。

ト彈正「エイ」と手裏劍を打つ。男之助、受け留め取逃がしたか。

ト見得になり、よろしく　　ひやうし幕

ト早送りにて

彈正　ハヽヽヽ。

ト笑ふ。太鼓、出端になり、彈正、悠々と向うへ入る。直ぐにシヤギリ。

六建目　　足利館對決の場

役名――細川修理太夫勝元。山名宗全持豐。賴兼姉、橋立御前。石堂兵庫逸友。當麻闘幸鬼貫。多治見次郎。荒川藏人。足利鶴千代君。斯波外記左衞門。八田八郎。彈正妹、田村。腰元、關屋。同、宿木。名和無理之助。田邊金兵衞。强寂法印。仁木彈正左衞門直則。

本舞臺、三間の間、緣頭附きの金襖屋體。欄間に二

つ引の幕を打つて、爰に橋立御前、鶴千代君、鬼貫、以前の形にて、田村、宿木、外記左衛門、八郎、居並び、時の太鼓にて幕明く。

ト直ぐに、山名宗全、花道より、法眼袴にて出る。多治見次郎附いて出る。

宗全　二條の關白兼良公の上使として、管領山名宗全參着。

橋立　關白殿下の御上使とあれば、上座は恐れ。

ト下へ下がる。

鬼貫　橋立鶴千代、お出迎ひ申しましてござりまする。

橋立　イザ先づこれへ。

皆々　お通りなされませう。

ト太鼓謠の切れにて、宗全、上座へ通り、二重舞臺へかゝる。次郎、下に扣へる。

鬼貫　お待受けとして當麻の岡幸鬼貫。

外記　斯波外記左衛門。

八郎　八田八郎。

次郎　多治見次郎。

橋立　上意の趣き

皆々　仰せ聞け下されませう。

宗全　上意の趣き、餘の儀にあらず。武將足利義政、東山東永堂へ引籠られ、天下の政事は斯く云ふ山名宗全、取り行ふにつき、よきに計らへとの御諚ゆゑ、殿下へ伺ひ奉りしところ、當時の武將は義政なれど、引籠り居ては足利の館、扣へなうては叶ふまじ。舍弟頼兼は身持ち惰弱の由、鎌倉へ押籠め、當麻の岡幸、名代として禁庭へ勤めよとの御諚。

橋立　すりや、足利別家の相續を

皆々　鬼貫さまへお預けとや。

外記　ハッ。殿下の御諚を背きまするではござりませねど鶴千代と申す若君ござりますれば、御伯父君へ跡目相續とは、如何の儀でござりまするか。

八郎　外記どのゝ云はるゝ通り、誠しからぬ

兩人　殿下の御諚。

宗全　ヤア、默らう。兼良公の御意は綸言も同然。鬼貫、早くお請けをおつしやれ。

鬼貫　近頃迷惑にはござれども、綸言とござりますれば、辭退いたすは違勅同然。

橋立　ちやと申しましても、跡目は伯父御、よもや上意は。

田村　左樣でござります。今一應お伺ひをお立てなされて

女皆　御覽じませ。

次郎　女中方、扣へ召されい。關白殿下に直奏の宗全公、なんの僞はりを仰せらるゝものか。滅多な事を云ひ出して、主人の首へ繩を附けないやうにおしやれサ。

宗全　外より指圖は空吹く風。取上げないワ。いよ／＼跡目は鬼貫なれば、橋立どの、早くお請けをなされい。

橋立　ハツ。その儀は執權仁木彈正とも、とくと熟談いたしまして。

宗全　默り召されい。勅使なれば、彈正と相談も何もいるものか。遲なはれば違勅の罪だぞ。

橋立　サア、只今と申しましては。

宗全　なり申さぬか。

橋立　サア、それは。

宗全　サア／＼／＼。

兩人　勅答は、なんとでござる。

　トきツとなる。揚げ幕にて又、上使と呼ぶ。皆々、恟りして

橋立　又も上使の

皆々　お入りとは。

　トまた呼ぶ。太鼓謠になり、花道より、細川勝元、長社杯、小さ刀にて出る。後より、荒川藏人、社杯股立ちにて刀を持つて來り

藏人　關白殿下の上使として、細川權の太夫勝元公參着。

　ト宗全、鬼貫と顏見合せ、思ひ入れ。

鬼貫　先達て山名どの、上使とあつて、卽ちこれに。又ぞろ殿下の御上使とは。

勝元　ナニ、我れに先立ち、山名どのゝお越しとや。

　ト思ひ入れ。

　兼良公の上意でござれば、イカサマ、それへ參り對談いたせば、解る事でござる。

橋立　先づ／＼これへ

皆々　お通りあられませう。

勝元　上使なれば、上座いたす。許し召され。

皆々　ハツ。

　ト謠の切れにて、勝元、上へ直り、二重舞臺へ上がる。宗全、手持ちなき思ひ入れ。

勝元　これは／＼宗全公には、何御用あつて、この館へお出でなされた。

宗全　イヤナニ、宗全これへ參つたは、オヽソレ、關白殿下の上意でござる。

勝元　ハテ、異な事を御意なさるゝ。足利列家の跡目につき、兼良公、某へ仰せつけられしを、又ぞろ宗全公へ御意とは心得ぬ。出でゝ再び返らざる殿下の御意も、これでは當になりませぬ。ハ、、、。

宗全　イヤ、其許の御意ではござれど、身共は一老の事。それは世上の政事は、皆貴殿の執り計らひなれば、萬端取込んでござらうと存じて、せめて手助けにもならうかと存じて。

勝元　それゆゑ拙者に先立つて、お越しなされたか。

宗全　左様でござる。

勝元　それは近頃忝なうござる。これは先づ私し事。二條關白兼良公の上使。

皆々　ハツ。

勝元　足利義政公、御家門頼兼覺悟惡しき上、淫酒に心亂れたる條、跡目は鶴千代どの願ひなれども、今年やうやう九歳の事なれば、後見は家中の願ひに任せんとの綸命。まつた足利の代替りには、牛王吉光の刀、呼子鳥の一卷、上覽に備へ、檢めの上預けらるゝが先例なれば、見て參れよとの仰せを受け、わざ〳〵發向いたしてござる。

橋立　ニヽ、左様ならば跡目は鶴千代どのとの、御意でござりまするかな。

勝元　如何にも。

橋立　外記左衞門喜びや。

三人　有り難う存じ奉りまする。

鬼貫　イヤ、鬼貫は喜ぶまい。宗全公の仰せには、鬼貫へとの仰せ。

橋立　まつた細川さまの仰せには

皆々　鶴千代君。

橋立　いづれがいづれ

鬼貫　しかとお請けは

皆々　致されますまい。

藏人　御前、お聞き遊ばしたか。

勝元　すりや、宗全公には、いつ御意をお請けなされて、上使にはお出でなされましたな。

宗全　兼良公より貴殿へ御意の下つた通りや。

勝元　拙者へ御意の下りましたは、跡目は鶴千代と仰せられて、また貴殿へは鬼貫どのとは、どうやら身贔屓のやうに見えまする。お請けが濟みますれば、元へ戻されませぬが、いよ〳〵跡目は鬼貫どのと、御意が下りましたかな。

初演當時の

繪本番附

宗全　ムウ、慥か鬼貫。
勝元　綸言は汗の如し。慥かでは濟みますまい。
宗全　そんなら身共が聞き誤まりと云へば、一老職の詞が
無になり、天下の政事は　其許の役目。好きにおしやれ。
勝元　左樣なら、お聞き誤まりでござらう。鶴千代、鬼貫、
どうやら似ましたやうな名でござりまする。ハヽヽヽ。
管領の上に立たるゝ程ござつて、人の役目を先潜りは
……ハテナア。もう半時遲參いたしたなら、鬼貫どの
ト思ひ入れ。
御後見の儀は、御熟談の上、承るでござりませう。跡
目は今日より、鶴千代どのでござるぞ。
皆々　有り難う存じまする。
藏人　いづれもお聞きなされたか。仁心深き勝元公の計ら
ひ。
八郎　左やう〳〵。天下の御掟を聞き損なつたとの云ひ譯
を、お爭ひ遊ばされぬは、誠に寛仁大度でござる、
藏人　鳥に似たる蝙蝠、人に形は似たれども、奸曲邪智な
倭人達。
次郎　倭人とは誰れが事だ。
外記　いづれも。御上使の御前でござるぞ。

三人　でも。
外記　扣へ召されい。
ト勝元、鶴千代を見て
勝元　幼なけれども今日より、足利別家のお跡目は鶴千代。
早うお請け遊ばされい。
橋立　今に始めぬ勝元どのゝ執成し。鶴千代お禮を。
鶴千　勝元、嬉しいぞや。
勝元　ハツ。
外記　宗全公の御掟に當惑の折から、勝元公の入らせられ
しは、御運の强さ。たゞ〳〵
皆々　おめでたう存じ奉りまする。
宗全　惡い所へ細川。
勝元　なんと致したな。
宗全　サア、跡目の事は鶴千代にして置くがよいが、無く
て叶はぬ呼子鳥の一卷、牛王吉光の刀。ほのかに聞けば
二品ともに、紛失との取沙汰。館にはあるまいがな。
鬼貫　イヤ、その儀は鬼貫が申し上げませう。紛失いたし
たに相違ござりませぬ。刀預かりは女之助。呼子鳥を失
ひしは、腰元の政岡でござりまする。
田村　モシ、左樣に御意なされては。

鬼貫　失なつた物を失なはぬと、管領の御前へ僞はりを申されうか。

勝元　こりや御尤も。然らば斯樣仕らう。一品の改めは、今宵暮れ方まで相延ばし、いよ〳〵紛失に極まらば、預かり主の女之助、腰元の政岡、兩人が首を受取り、それを以て寳詮議の日延べの願ひは、勝元推擧いたさう。ナニ、宗全公、如何でござりませう。

宗全　いんにや。そりやアならないと云ふならば。

勝元　關白殿下の上意を、先駈け召された趣意を糺しませうかな。

宗全　ムウ……然らば寳の檢めは

橋立　今宵限りの暮れ方まで。

鬼貫　とゞは討たるゝ入相の

外記　かねて覺悟の

宗全　奥の間へ。

勝元　御案内。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、橋立御前、鶴千代君を連れ、勝元、外記左衛門、八郎、藏人、女形、殘らず奥へ入る。宗全、鬼貫、次郎、殘る。

次郎　御兩所樣。

鬼貫　賢どの。

宗全　鬼貫。

鬼貫　相變らず勝元に氣取られては、落ちついては居られますまい。

次郎　こりや手短かにやるがよろしうござりませう。

宗全　コリヤ、これ程の事に彈正が、顏を出さぬは心得ぬ。

鬼貫　イヤ、彈正はまさかの時と、遠ざけて置きました。跡目極まつても、一品の寳がなけりや、家督は叶ひますまいかな。

宗全　例へ跡目が延びやうが、勝元があるからは油斷はならぬ。

鬼貫　お氣遣ひなされますな。兼ねて調べ置いたる南蠻流の毒を以て

次郎　あの鶴千代を。

鬼全　如何にも。

ト後へ、強寂法印、出て居て、この時

強寂　壁に耳あり、岩の物云ふ世の慣ひ。秘すべし〳〵。

鬼貫　こりや、太秦の

次郎　強寂法印。

宗全　さては鬼貫が話しの、修驗強寂法印にてあらうがな。

強寂　宗全公、初めて拜顔仕りました。兼ねてお聞き及びの通り、この度の大望、祈念修法怠らず、追ッつけ成就目のあたり。お氣遣ひなされますな。

宗全　イカサマ、奇瑞あらんなれども、首尾せぬうちは心元ない。

強寂　御尤も。その法力をお目にかけませう。習ひ覺えし我が妙術。

ト印を結ぶ。ドロ／＼にて、差し金の鼠、呼子鳥の一卷を啣へ出る。強寂法印、取上げる。

皆々　これは、

強寂　宗全公へ進上仕りませう。

ト宗全、取上げて

宗全　こりやコレ、紛失なしたる呼子鳥の一卷。

強寂　政岡が預かりしところ、賊難を慮れ、紛失と披露なし、外記左衞門が守護なせしを、我が行法にて奪ひ取りましてござりまする。

宗全　聞きしに勝る稀代の秘法。

強寂　まだ／＼、各々方にお目にかける法力。今宵のうちに鬼貫公の、大望成就の印は。

ト又印を結ぶ。ドロ／＼になり、關屋、腰元にて、結構なる蒔繪の膳部を持ちながら、うつとりとしてセリ上がる。

いま鶴千代に配膳の役目は、この女郎。我れ法力にて、誘き寄せてござる。兼ねての毒藥。

鬼貫　心得た。

ト岩戸になり、鬼貫、印籠を出す。次郎、椀へ毒を入れる。田村、出かゝり見て居る。また印を結ぶ。ドロドロにてセリ下がる。田村、これにて忍ぶ。

宗全　ハテ、稀代な術な

三人　あるものだなア。

鬼貫　今こそ大望時到れり。

宗全　コリヤ、鬼貫來やれ。

ト唄になり、宗全、先に、鬼貫、次郎、強寂、奧へ入る。時計鳴る。配膳の刻限と呼ぶ。管絃になり、橋立御前、鶴千代、宿木、外記左衞門、出て來る。

外記　勝元公の御厚情にて、鶴千代君のお跡目定まりますれば、吟味に吟味をとげましてござりまする。油斷ならざるこの時節。お膳はお側でお上げ下されませい。

橋立　ソレイナウ、この程館の鼠の妖怪、自らが附き添う

て、側を離さぬこの鶴千代。菓子果物に拘らず、家中よりの贈り物は、必らず君へは無用ぢやぞ。
鶴千　爺や、飯はまだか。
外記　ハッ。只今差上げまする。宿木、申しつけ召され。
宿木　畏まりましてござりまする。
ト宿木、立ち上がり
お膳を早う。
關屋　ハッ。
ト關屋、膳を持つて出て、後より八郎、附き添ひ出て
八郎　仰せに從ひ、配膳申しつけましてござりまする。
橋立　定めし檢めやつたであらうな。
八郎　今日の御膳番は、名和無理之助、田邊金兵衞、申しつけましてござりまする。
ト外記左衞門、蓋を見て
外記　斯樣に吟味いたせし上は、何事もござりますまい。
鶴千　食べてもよいかや。
外記　イザ〳〵、召上がりませい。
ト此うち管絃になる。鶴千代、膳に直る。奥より田村駈け寄つて
田村　先づ〳〵お膳、お待ちなされて下さりませ。
外八　ナニ、お膳を待てとは、
田村　そりや慥かに毒でござりませう。
皆々　ヤ、、なんと。
ト橋立御前、膳を突き退け
橋立　コリヤ田村、毒とはどうして知つて居る。
外記　始終八田八郎を附け置くに、毒とは一圓合點ゆかぬ。
八郎　某附き添ひある上は、吟味に吟味を遂げし膳部。殊によると大勢の難儀になる事ぢや。
橋立　毒と聞いては、迂濶には食べさせられぬ。田村、毒と云やるなら、なんぞ證據があらう。
皆々　サア、早く〳〵。
田村　只今廊下を來かゝりまする折から、夢か現か關屋どのが、配膳を捧げる折から、誰れとも知らず毒を入れましたと存じましたが、その後は夢中。只うつとりとなりまして、どう參りましたやら存じませぬ。
外記　大方夢でも見たのであらう。
橋立　例へ夢でも現でも、さう聞いては心がゝり。
外記　左樣でござりまする。もうこのお膳は上げられませぬ。
八郎　無理之助、田邊金兵衞、兩人ともに早うお來やれ。

無理　ハツ。
　ト無理之助、金兵衛、駈けて出て來り
外記　御用は何事でござりまするな。
訴へ。　何事ではない。只今のお膳には、毒があると田村が
八郎　コリヤ、其許達の越度は、附き添ひ居る八郎が越度。
兩人　サア〳〵、有やうに申されよ。なんと。
　ト兩人、恟りして顔へ
無理　拙者はお膳番の儀にござりますれば、其許より、この身に拘はりまする。毒と知りましては、なんとお臺所に居られませう。あの料理人の金兵衛を、御詮議なされませう。
金兵　コレ〳〵、無理之助どの、誠にそれが無理之助。某はアノお爼板。
外記　なんぢやと。
金兵　お爼板……お爼板に直りましたゆゑ、味方は無理之助。
外記　ナニ、味方は無理之助ぢや。
金兵　イ、エ、貴方は無理之助でござりまする。
外記　無理之助、定めて鬼役を致されたであらうな。

無理　ト無理之助、ウロ〳〵して
　へイ〳〵、鬼は、鬼は外でござりまする。
八郎　エ、お毒味の事でござる。
無理　致した段ではござりませぬ。五人前程下さりました。
外記　然らば爰で。
無理　毒と聞きましては。
外八　ならぬと申すか。
田村　誰れ彼れと申しませうより、田村がお毒味。
　ト田村、汁碗を取つてカッと呑む。
關宿　アレ〳〵。
　トはら〳〵する。
田村　これにて様子が知れますでござりませう。
橋立　コレ、田村、ひよんな事をして、ひよつと毒なら、なんとしやるぞいの。
　ト田村、血を吐き、苦しみ倒れる。皆々、恟りして
皆々　ヤア〳〵〳〵。
橋立　さてこそ、疑ひもなきこの場の仕儀。毒殺の詮議ぢや。
外記　お膳を据ゑしは腰元關屋。
八郎　三人ともに動くまいぞ。

闇屋　イエ〳〵、わたしは何も存じませぬ。御免なされて下さりませ。

外記　田村が即死なすからは、最前杣平が持ちし

ト序幕の狀を出して

この一通りの文體と云ひ、目當は三人。

八郎　尋常に白狀すればよし、その通り陳ぜぬに於ては、拷問なすが有やうに

兩人　申すまいか。

無理　ア、、申します。心當りはござりまする〳〵。

兩人　サア、その心當りは。

無金　心當りは。

ト奥より彈正、押取り刀にて出て來り、無理之助、金兵衛、闇屋、三人の首を打ち落す。皆々、思ひ入れ。外記左衛門、八郎、詰め寄り

外記　彈正左衛門、物に狂ふか。氣が狂つたか。

八郎　詮議なすべき三人の者を、物云はず討ち果し

兩人　何を以て詮議をおしやる。

橋立　兩人が申す通り、樣子知つてか知らいでか、搦めて詮議はしやらいで、何ゆゑ殺害なしたのぢや。

外記　落ちつくも事に依る。最前杣平が取違へたるこの手紙。開封なせば捨て置かれぬこの文通。

ト披き

「御狀拜見仕り候ふ、さて飛田剛藏を相賴み、一藥調合仰せつけられ、お試みの爲お試しなされ候へども、立ち所に即死致し候ふ由承り、大望成就の喜悅お察し下さるべく候ふ、君より彼の人にお賴み遊ばさるべく御覽の末火中〳〵」。

橋立　田村がこの場の即死と云ひ

八郎　外記どのゝ手に入りし書翰と云ひ、

橋立　鶴千代は危ふき命。毒殺詮議の三人を、何ゆゑ殺害おしやつたぞ。

彈正　さればサ。さほど大切な事ゆゑ、落ちついて居る彈正左衛門。心なうてウカ〳〵致して居られうか。お家の束ねをも仕る某。辨まへなうて三人を手にかけうか。御前樣にもお世話遊ばされまするな。御兩所も騷がせな。本人が知れてござるゆゑ、禍は下からと、この者どもを拷問なさば、如何やうな事を申して、御隱居なされし賴兼公の、お身にも拘はり、お家の沒落を存するゆゑ、口叩かせずに手にかけましたは、事穩便の計らひ。本人さへ知れてござれば、何も騷がつしやる事はありそもない

ものとでござる。

外記　して、毒殺の本人は、知れて

兩人　居りまするかな。

彈正　知れて居るゆゑ、この場に於て罪いたさねば、一味の者ども逃げ隱れ、手廣うなればお家の騷動。御前樣、御油斷遊ばされますな。外記左衞門、八田八郞、詮議あるぞ。

外記　ナニ、この外記左衞門に

八郞　この八郞に

兩人　詮議あるとは。

彈正　ヤア、恍けまい兩人、賴兼公の御遊興を、御諫言も申さず、とゞの詰まりはお身持ち惰弱と云ひ立てゝ押籠め奉り、鶴千代君のお守り役の事なれば、誰れあつて肩を並ぶる者なく、御殿の內を一ぱいにおしやる其許方。お膳は猶更お茶の間まで、心を附くべき身を以て、何ゆゑ怪しきお膳を進め召された。

兩人　なんと。

彈正　顯はれかゝる化の皮。御膳番や料理人へ、科を讓ると見たゆゑ、事大仰にせぬ彈正が計らひ。兩人ともに詮議があるぞよ。

外記　イヤ、彈正にこそ不審の一條。毒藥調合のこの文體。事を糺さば貴殿の返事であらうがの。

彈正　ヤア、名宛もなきその書狀を以て、我が身の罪を人に讓る。

橋立　論は無益。兩執權見えられしこそ幸ひ、鏡にかけて邪正を糺すが、その身の面晴れ。

彈正　それこそ彈正が願ふところ、對決の上、云ひ開きして見せう。

兩人　見事云ひ開きを。

彈正　おんでもない事。

三人　小癪な事を。

ト奧にて

勝元　山名細川、これに在り

宗全　方々靜まれ。

ト管絃になる。宗全、勝元、屋體の上に出て來り

勝元　委細の譯は、あれにて聞いた。兩人が辯舌を以て爭はんには、鷺を烏といつまでも果しはあるまい。山名どのもお出での事。理非明白に糺し得させん。

三人　有り難う存じまする。

宗全　對決の席へ、女儀は如何。女、退席いたせ。

宿木　畏まりました。
橋立　萬事は賴む勝元どの。
勝元　理非をキツと糺しまするでござりませう。
宗全　何も女儀の構ふ事ではない。奥へ入らせられませい。
橋立　宿木、參れ。
宿木　ハツ。
ト宿木、鶴千代を抱き、橋立御前、下座へ入る。
勝元　誰そある。
皆々　ハア。
ト藏人、次郎、泥之助、外二人、高股立ちにて出て來る。
勝元　兩腰を預かれ。
皆々　ハア。
ト藏人、泥之助、次郎、外二人立ちかゝり、彈正、外記左衛門、八郎が兩腰を預かる。外記左衛門、訴狀を出す。
勝元　藏人、讀み上げい。
藏人　ハツ。
ト藏人、取つて押開き
「恐れながら願ひ上げ奉り候ふ。足利鶴千代家來、斯波外記左衛門。
一、賴兼どの直ぐなるお心を惡道へ導き、美女を勸め、身持ち惰弱に致せし事。
一、義政公國阿上人に寄附ありし、伽羅の高木履、お廓通ひに召さるゝ事。
一、男達とやらんを召抱へ、供いたさせ候ふ事。
一、毒藥調合の手紙同筆の事。
右の條々御詮議の上、家治まり候ふやう願ひ奉り候ふ。
ト讀み上げる。外記左衛門、平伏する。
勝元　外記左衛門、この訴狀の通り相違はないか。
外記　ハツ。恐れながら、その箇條に漏れましたる不審は、二ケ條。
宗全　默れ外記左衛門。その箇條を、何ゆゑこれへ載せぬぞ。管領を輕しめるか。
勝元　イヤ、さな云はれな。その箇條は只今差かゝつたのであらうが。
外記　左樣でござりまする。鶴千代君、跡目の事につき、兩管領御入りの節、執權の身にありながら、お待請け申さぬ條。これ一つ。
八郎　まつた鶴千代配膳の折から、毒味の節即死いたせし

ゆゑ、毒殺に極まり、御膳番の者詮議の節、一言と申さぬうち、三人ともに誅伐いたしましてござりまする。

外記　それゆゑ、毒の詮議は、彈正にこそござりませうに却つて私しども兩人を疑ひ、只今口論に及びしを、管領のお入りなれば、箇條書には載せませぬ。その段幾重にも御容赦

八郎　遊ばされて下さりませう。

勝元　彈正、いま聞く通りの箇條。覺えあらん。仔細申せ。なんとぢや。

彈正　恐れながら只今の箇條、一つとして存じませぬ。尤も賴兼に美女を勸めましたは、相違ござりませぬ。常から多病の上、學問に凝り、心氣の疲れを助けん爲、君を存じての儀でござりまする。また伽羅の高木履を、廓通ひに用ひらるゝ事は、拙者草履は取りませず、存じませうやうはござりませぬ。賴兼が多病ゆゑ、館の政事は一人にて取計らひまするゆゑ、多きうちには一つ二つは、誤まりもござりませうが、毒殺の儀は一向に覺えござりませぬ。あの者兩人こそ、鶴千代君の附き人にござりますれば、吟味すべき筈。それを迂濶に君へ進めましたのは、怪しみの一つ。お膳の者即時に成敗いたしましたは、事を大仰に致さず、本人は却つて後悔いたせし段、忠臣のなすべき寸志でござりまする。我れに不忠の心あらば、御家門方一同にこそ申し上ぐべきに、あの者兩人の目にかゝり、恐れ多くも管領へお訴へ申す、愚昧なる者ども。これにて萬事は御賢察下されませう。

宗全　イカサマ、諂ひなき正道は、其まゝに顯はれる。其方の申す通り、遮つて訴へるは、執權職を恨み、無實の難を着せんと計りし事は明白。外記を贔屓の者は赤面でござらう。

勝元　こは、宗全どのゝ仰せとも覺えぬ御一言。天下の政事を計り、理非明白を心にかけ、依怙贔屓仕らぬを、面面の職とこそ心得あり。この席に誰れか贔屓いたす者がござらうかな。管領の職にありながら、諂らふ者を助け、疎き者を罪に取つて落さんとする者ござらば、キッと糺明、仰せつけらるゝがよろしうござります。ヤイ、彈正、賴兼公に美女を勸めたるは、心氣の疲れを助けん爲と申せば、どうやら主思ひのやうには思はるれど、殷の妲妃、周の褒姒。コレ、皆國を傾ける。心を養うても國を失ふが忠臣か。男達を抱へ廓通ひに伽羅の木履を穿きしを、知らぬとは云はれまい。

彈正　御意にはござりますれど、下々の事まで都度々々に、存じませうやうはござりませぬ。
勝元　默らう。執權職はなんの爲。若輩なればそれを補佐するのが第一。主人の心の亂るゝは、汝が科であるまいか。
彈正　ハツ。
ト彈正、つかへる。
勝元　毒殺の事はどうぢや。
彈正　その儀は外記左衞門、八田兩人こそ存じて居りませう。彈正は一向存ぜぬ事。
外記　ヤア、知らぬとは云はれまい。毒殺詮議の席に臨んで
兩人　何ゆゑ三人を切り殺しやつた。
彈正　お膳に始終附き添ひしはおてまへ方、その本人を殘し置き、殘りの者は刑罪いたした。その罪を我れに與へん憎くき兩人。但しは彈正が毒殺と云ふ、なんぞ證據があるか。
外記　證據と云ふは最前の手紙。
ト外記左衞門、勝元に出す。
御披見下されませう。

勝元、取つて披き
勝元　「お手紙拜見仕り候ふ、さて飛田剛敵を相賴み、一藥調合仰せつけられ、お試みの爲お試し遊ばされ候へば、立ち所に頓死いたし候ふ由、大望成就喜悦お察し下さるべく候ふ、亀君より彼の仁へお賴み遊ばさるべく、御覽後は火中々々」……誠にこれは毒藥秘法の書面なれど、名宛がなうて殘念々々。
彈正　反古同然の紙面を以て、彈正を罪に取つて落さんといふ、淺墓な謀り事。あれが證據になるものか。
宗全　兩管領を輕しめる無禮者。彈正が申す如く、執權をこばみ、我が誤まりを人に讓る外記左衞門。但しは外に明白なる證據があるか。あるなら早う
皆々　出し召されい。
ト下座にて
鬼貫　その本人は、外記左衞門に違ひござらぬぞ。
皆々　なんと。
鬼貫　坊主め、立たう。
ト時の太鼓になり、鬼貫、強寂法印を縛め、出て來る。
御兩所、お見やれ。この修驗こそ、太秦の強寂、館の妖怪を斥けんと、護摩の祈禱に驗しはなくて、日每の願ひ

ある孔雀明王の畫像を、逆さに掛けしは正しく咒詛。引ッ捕へて詮議いたせば、外記左衛門に頼まれしとの事。キット御詮議あられませう。

宗全　鬼貫、出かした。流石は宗全が程ある。サア、勝元どの、あれでは外記左衛門が科に極まるでござらう。

ト勝元、聞えぬ振りして居る。

外記　こは、情なき御諚。忠義に心をゆだぬる某。

鬼貫　ヤア、論は無益だ。坊主め、これにて一通り申せ。

强寂　ア丶、申しませいで、なんと致しませう。私しは太秦の貧僧。これに居らる丶外記左衛門、八田八郎のお頼みで、鶴千代君を調伏。仕事成就いたす上は、寺院の再興望みに任せんとあるゆゑ、祈念の折から、鬼貫公に搦められ、最早死罪は覺悟の前。お二人ながら、もう叶ひませぬ。白狀しておしまひなされませ。

外記　この賣僧め。おのれ、よくも企んだな。

八郎　いつ調伏をおのれに頼んだ。

强寂　頼まれん者が命を捨て丶、なに白狀するものか。こなた衆に頼まれたに違ひはないぞ。

外記　云はせて置けば。

ト立ちか丶る。

宗全　兩人扣へい。

皆々　御意ぢや。扣へ召されい。

宗全　なんぼ其方達が知らぬと申しても、兩人に頼まれたと、命を捨て丶の白狀が、これより外の證據はない。調伏なす程の事なれば、拷問せずと毒藥の企みも其方。訴狀も皆謀書。なんと勝元どの、仁木に疑ひはござるまい。科極まつたる兩人の者。獄屋へ引け。

ト皆々ハッと立ちか丶る。

皆々　兩人、立たう。

ト向う揚げ幕にて

逸友　調伏の主は、外にござりまするぞ。

皆々　なんと。

逸友　待つた〳〵。

ト逸友、白木の箱を抱へ出て來り

御詮議暫し、お待ち下されませう。

鬼貫　誰れかと思へば石堂兵庫

皆々　逸友どの。

逸友　お國詰めの石堂兵庫逸友、お館騒動の由、早打ちゆゑ、取る物も取り敢へず、御隱居頼兼公へお目見得仕り、跡目の儀につき、兩管領のお入りと承るより、直

さま參上仕つてござりまする。

勝元　足利の別家賴兼、多病につき、跡目は鶴千代と關白殿下の御諚にて、上使に來る細川勝元。先例に任せ呼子鳥の一卷、牛王吉光の刀、檢めの上取極めんと思ふ折から、定めて仔細聞いたであらうな。

逸友　調伏の本人は、外にござりまするゆゑ、評議を止めましたのでござりまする。

宗全　最早評定定まりし上は、今になつて罷り出て、裁許を破る兵庫逸友。

勝元　イヤ、お待ちなされい宗全どの。調伏の賴みは兩人と、强寂が白狀ゆゑ、科極まつたと申すものゝ、外に當人ありとの訴へ。其まゝに濟ませては天下の政事が立ちませぬ。逸友、これへ。

逸友　ハツ。

ト逸友、舞臺へ來る。

侍ひ　兩腰、これへ。

ト兩腰を、侍ひへ渡す。

逸友　この品御覽下されませう。

ト勝元の前へ差出す。勝元、蓋を開き、藁人形、陣扇を取出し

勝元　こりやコレ、正しく調伏の人形。

逸友　これへ參るお廣庭の茂みより、寢所を狙ふ怪しの曲者、捉へて見れば行くへ知らず、手に殘りましたる白木の箱、開き見れば願書はなく、添へたる品は陣扇。當時赤松風の陣扇を用ゆる者は外になし。それゆゑ調伏の本人は、餘人と知ろし召されませい。

勝元　イカサマ、願書代りに添へたる陣扇。赤松の門葉は……仁木直則、この陣扇、覺えがあらうが。

彈正　イカサマ、それは某が陣扇に相違ござりませぬ。

逸友　すりや、調伏の本人は、彈正、おてまへであらうがな。

彈正　いんにや、知りませぬ。

逸友　まざ／＼と貴所の陣扇と、云うたる口を引かぬうち、知らぬとは、えゝ云はれまいがや。

彈正　陣扇は身共が所持の扇なれど、紛失しました。

逸友　なんと。

彈正　盜まれました。察するところ、この彈正左衛門に意趣ある奴、人形に陣扇を添へたるは、この彈正を調伏いたすのでござらう。恐れながら兩管領、拙者が陣扇と明らさまに申し上げまする詞が、企まぬ明白。とくと御

吟味願ひ奉りまする。
宗全　成る程、こりや仁木が申すところ一理あり。勝元どの、彈正に疑ひあるまいと、この宗全は思ひまする。てまへは、なんと思はつしやるな。
勝元　願書なければ、彈正に意趣ある者の業とも見えず、また扇に願文があらうやら、いづれをいづれと會得いたさぬ。
強寂　外記左衞門さま、八郎さま、猶々證據が顯はれてはもう云つてしまはずばなりますまい。
外八　なんと〳〵。
強寂　願書は人形の、腹に籠めてござりまする。
宗全　ドレ。
ト藁人形の腹を檢め、一紙を取出し、勝元に渡す。
勝元　願文の趣意はなく、願主外記左衞門、八田の八郎。
皆々　ヤア〳〵。
勝元　外記左衞門、其方達は覺えあるまい。
兩人　仰せの通り、毛頭覺えはござりませぬ。
鬼貫　まざ〳〵と兩人の名が、書いてあるではござらぬか。
勝元　ハテ、斯樣な時に顯はれて、難儀になるべき調伏の人形へ、わざ〳〵我が名を書き入れる白痴者が、どこにござらう。これは全く拵らへ事。これにては結句、兩人に疑ひが薄うなりました。兵庫、毒藥の紙と云ひ、調伏の人形と云ひ、退引きならぬ證據なれども、悲運で是非ない事ぢや。
ト逸友、懷中より手紙を出して、差上げる。勝元、取つて披き
「在所御到來として、蜜柑一籠送られ、忝なき仕合せに存じ奉り候ふ、恐惶謹言、兵庫どのへ、仁木直則」。してこれが。
逸友　ハツ、彈正左衞門が手蹟なるや、お問ひ下されませい。
勝元　彈正、こりやおてまへの手蹟か。
ト彈正、ニツコリして
彈正　如何にも。去暮れ歳暮見舞ひの返事。何を存じまして斯樣の手紙を、勝元公へお目にかけましたやら。一兩年逢ひませぬうちに、記憶が薄くなりましたと見えまする。ハヽヽヽ。
トまた逸友、懷中より立て文を出し、勝元へ渡す。披き見て
勝元　「敬白、起證文の事。一つ、この度鶴千代方へ忍び

入り、彼の者を首尾よく刺し殺さるゝに於ては、約束の通り二千五百石知行宛て行ふべきものなり。應仁元年三月十五日、荒波太門どのへ、仁木彈正則判」。

逸友　なんと、その起證文。歳暮の手紙。毒殺の書面。三通ながら同筆でござりませうがな。

ト彈正、鬼貫、悧りする。

勝元　間違ひもなく、三通ともに彈正が手蹟。毒藥頼みは鬼貫の返翰も見ゆる。さては毒殺の企みは、兩人でありしよな。

逸友　サア、彈正、ふるなの辯を以て云ひ拔けるとも、この返答は。

彈正　三通の書面は、似せ筆でござる。

逸友　なんど。

彈正　謀書でござりまする。

逸友　ヤア、印形まで掘りし起證。謀書とはまざ／＼しき僞はり事。詞を巧みに罪を遁がれん大罪人。まこと人畜生と云はうか、頼兼公を押籠め奉りしも汝が業。尋常に白狀しまいか。

宗全　ヤア、待て兵庫。謀書とあれば詮議が殘つて居る。落着までは、其方の自由にはなるまいぞ。

勝元　然らば詮議はこの陣扇。水石を以て認めれば、一日にして文字顯はれ、また烏羽玉に書く言の葉。

逸友　糺すは扇面。

ト逸友、扇を取る。

勝元　詮議は修驗者。

ト勝元、八郎へ目配せする。

外八　心得ました。

ト兩人、强寂法印が側へ寄る。ドロ／＼にて、强寂法印をセリ下ろす。

逸友　詮議なすべき修驗者は、消え失せしか。さては館の妖怪も

三人　彼奴が仕業でありしよな。

ト宗全、スッと立つ。

勝元　宗全どのには、どれへござらつしやりまする。

宗全　べん／＼と埒の明かぬ長詮議。今日の評定は、マア、これまで。貴殿は爰にいつまでも居さつしやるがよい。身共は奥へ參る。

勝元　然らば某も、御同道仕りませう。仁木、石堂は休息せい。訴訟あらば申し出でられい。

宗全　外記左衛門、八郎、兩人は調伏の趣意立つまでは、

皆々　詮議あり。警固いたせ。
勝元　鬼貫どのにも、聞き合せあれば奥へ伴へ。
鬼貫　身に曇りなき某、いづこまでも參りませう。
宗全　勝元どの。
勝元　先づ、ござらつしやりませ。
ト管絃になり、宗全、勝元、兩人奥へ入る。舞臺は、鬼貫、八郎、外記左衞門を皆々取卷き、下座へ入る。逸友、彈正、殘る。
彈正　逸友どの、誠に其許はお家の忠臣、あつたらしき時のお國詰め。當地にござらば、これ程の騷動にはなるまいもの。誠は山名宗全公の御下知、鬼貫どのを跡目にせよと、密々のお頼み。お諫め申せどお聞入れなく、是非に及ばず、一味いたしてござる。只今管領の御前で、白狀いたす事は存じ居れども、鬼貫公のお身の上、道ならぬ事とは思へども、理を非に曲げて爭ひました。誠に貴殿の誠忠、驚ろき入つてござりまする。
逸友　惡人ながらも鬼貫公を庇ふとは、まだ心底に一つの取り得。併し僞はりでござらう。兵庫、左樣な追從、お髭の塵は、えゝ取りませぬ。

彈正　其許のお氣前では、左樣思し召すは御尤も。只今も申す通り、鬼貫公を大切と存ずるゆゑ、人畜生人でなしとのお腹立ち、口惜しうはなうて恥かしく、何ゆゑ侍ひには生れたぞ。
ト淚を呑み込み
心の內、御推量下されませ。
逸友　然らばこの陣扇に、密書が認めあらうがや。
彈正　サア、その密書の事を、具さに申せば主人の訴人。
ト懷中より立て文を出し
これに詳しく認めござる。御內見の上、勝元公へよろしくお執成し下され、某に切腹仰せつけられ下されませ。仁木彈正が手を下げまする。
逸友　何かは知らねど、密書とあらば披見いたさう。
彈正　お聞濟み下さるか。誠に武士のお情。とくと御披見下されい。
ト差出す。逸友、訴狀を取ると、訴狀の中に仕込みし短刀を拔いて
覺えたか。
ト逸友へ切りつける。逸友、切られながら、有り合ふ陣扇にてあしらひ、よろしくあつて、下座より、外記

左衛門、八郎、拔刀にてかゝる。逸友、彈正が短刀を引ッたくる。彈正、八郎が刀を取つて、外記左衛門、八郎を見事に切る。逸友、手負ひながら短刀を彈正が腹へ突き立てる。大ドロ〳〵になり、强寂法印、以前の形にて顯はれると、陣扇自然と開け、鼠飛び去る。

强寂法印、悔りして

强寂　血汐の穢れに、我が行法も消え失せしか。殘念ぢやなア。

ト逸友にちよつとかゝる。奥より橋立御前、薙刀をかい込み出て來り、强寂法印を切り殺し、落ちたる陣扇を取上げ

橋立　兵庫が忠死しやつたゆゑ、血汐の穢れに術消えて、陣扇に文字が顯はれたわいなう。

逸友　ナニ、文字が顯はれしとや。

橋立　父滿祐が恨みを報うとあるからは

逸友　仁木彈正左衛門は

彈正　赤松滿祐が落し胤、同名武者之助直則。滿祐が討死せしを寢耳に聞き、足利を沒落させ、父の恨みを晴らさんと、思ひし事も、石堂兵庫が手段にかゝり、露顯なしたか。エヽ、口惜しやなア。

逸友　敵とは云ひながら、幼な立より扶助されし、主君のお罰。思ひ知つたか〳〵。

ト扶り、刀を拔く。彈正倒れる。逸友、直ぐに乘りかかり、止めを刺し

嬉しやなア。

トがつくりする。橋立御前、介抱し

反逆の張本討取るからは、殘る敵は皆枝葉。疵は淺い。氣を慥かに持ちや。

逸友　鶴千代君のお跡目と、聞かぬうちは、死なぬ〳〵。

ト奥より勝元、銀の茶碗に湯を持つて出て

勝元　コリヤ、彈正相果てしゆゑ、牛王吉光手に入つて、足利は萬代不易。さぞ喜びであらうな。

逸友　ナニ、牛王吉光が手に入りましたか。

勝元　その短刀こそ牛王吉光。

逸友　ヤヽヽ。

勝元　其方ども居合さずば、奥へ踏み込み狼藉なさんもの。然らば鶴千代が僞ならず。死を以て防ぐゆゑ、計らず刀も戻りしは、忠良の致すところ。手製の藥湯、最期の水と心得よ。

逸友　上の御威光を以て、討ち負ふせしを却つて御賞美。

ト袖を引き切り、短刀を拭き、直ちに包み、橋立御前へ渡す。

當時英雄と聞えし勝元さまの、お手づから下し置かるゝお藥湯。死出の譽れ、有り難う存じ奉りまする。

ト藥を服み、懷中より連判を出し

これ御覽下されませう。

ト勝元、取つて披き

勝元　こりや、コレ一味徒黨の連判狀。

逸友　後より差上げんと存ぜしに、宗全公も御加入なれば差扣へて居りましてござりまする。

勝元　これさへあれば、鶴千代君のお跡目

逸友　有り難うござりまする。

ト奥より、宗全、出て

全宗　細川どの、これにござるか。彈正は相果てたと承る。ハテ、惜しい侍ひを殺しましたな。

勝元　反逆顯はれし上からは、跡目は鶴千代に申しつけるでござりませう。

宗全　紛失なしたる牛王吉光、呼子鳥の一卷、手に入らぬ其うちは、跡目は叶はぬワ。

橋立　紛失の牛王吉光も、卽ちこれに、手に入りましてござります。

勝元　呼子鳥の一卷は、盜賊の難を存じて、某預かり、これに所持いたして居りまする。

ト見せる。

宗全　ナニ、吉光の短刀も、呼子鳥の一卷も、手に入つたか。

ト懷中の一卷を出して

すりや、こりや似せ物か。いま／＼しい。

ト投げ出す。橋立御前、その一卷を取上げ

橋立　今こそ手に入る呼子鳥の一卷。エヽ、忝ない。

宗全　そんなら勝元どのゝ所持の一卷は。

勝元　仁木へ一味の連判狀。

宗全　ヤア。

ト寄らうとする。

勝元　いよ／＼跡目は鶴千代へ、申しつけまするぞ。

ト宗全、默つて居る。

御不承知なら連判狀讀み上げませうか。

宗全　跡目は鶴千代君と、關白殿下へ奏聞なさん。

橋立　跡目は鶴千代ぢやといなア。

ト逸友が耳の元で云ふ。逸友、キッとなる。

逸友　有り難うござりまする。

ト杜杯の肌を入れ、肩を直し、よろめきながら

めでたい〳〵。返す〳〵も正木のかつら。

ト下座へ取る。盛久の謠、一くさりあつて、バツタリと下に居る。宗全、拔きかゝる。橋立御前、中へ入り、勝元、逸友と顏見合せ、扇を開き、よろしく

幕

大詰　道哲庵の場

淨瑠璃「茂織悔睦言」富本連中

役名　土手の道哲實ハ浮田左金吾。團扇賣り、四季の庄兵衛實ハ嶌の嘉藤次前名豆腐屋庄兵衛。扇賣り、お靜實ハ高尾の亡靈。

本舞臺、三間の間、草土手。爰に富本連中、頭取口上居並び、上の方、茅葺きの亭座敷。伊豫簾かけてあり、見付けの柱、青き紅葉の立ち木。日覆より青葉の楓の吊り枝、下の方、枝折り口、柴垣に卯の花咲き亂れてあり、道哲庵の道具、綺麗に仕立て、時の鐘にて幕明く。

ト頭取、淨瑠璃觸れあつて、入る。直ぐに前彈き、日覆にて時鳥啼く。

〽流れは常に滔々と、盡きぬ眺めの宮戸川、東の間絶えぬ山谷船、誰れを待乳の山づたひ、日本堤を通ふ駕籠、憂きを悟りし左金吾が、世を遁がれたる草の庵。

トきつかけにて簾上がる。左金吾、かもの臺、腰衣の形にて經机にかゝり、高尾が位牌に回向して居る。

〽以前の姿引替へて、高尾が菩提の閼伽の水、身に住み佗びし墨染の、袖のかをりぞ奥床し。

左金　逢ふ事の、なきを浮山の森に住む、呼子鳥こそ我が身なりけり。二世と誓ひしその主は、浮世戸平が手にかかり、末の苦患を助けんと、この左金吾が手向けの黒髮。切つても切れぬ凡夫心。不便な最期であつたなア。

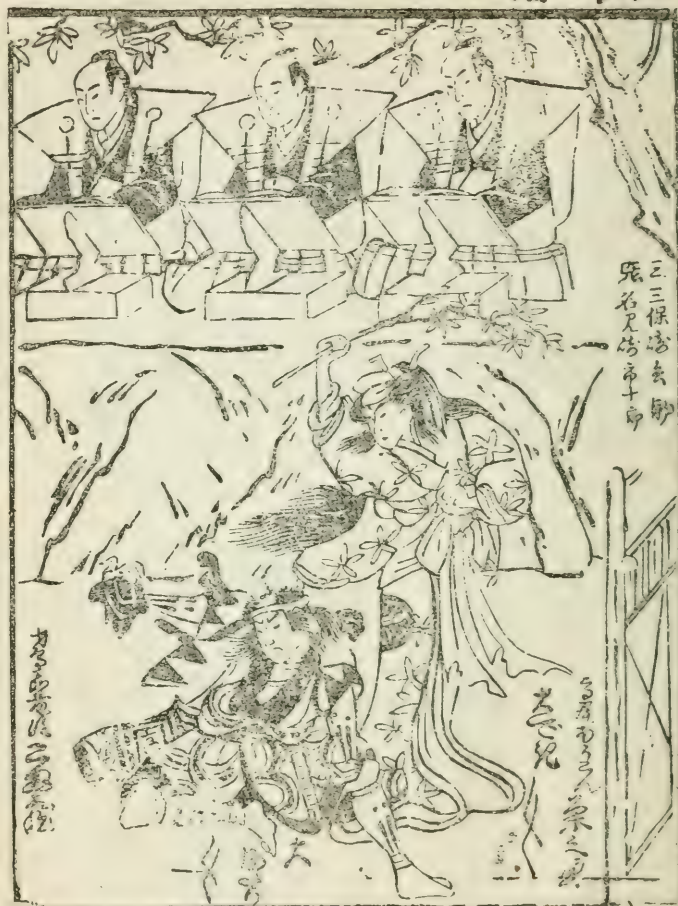
ト向う揚げ幕にて

しづ　扇召しませ〳〵。

ト摺り鉦入りの合ひ方になり、花道より、おしづ、手甲頬かむりにて黒塗りの地紙箱を肩に載せ、扇を持ち出て來り

〽粋な浮世の營みを、仇に暮らせし無常風の、間夫に扇と

初演當時の

大詰

謎かけて、浮氣な風に招かれて、色に要の手取り者、めぐり來る〳〵舞ひ扇、男扇も迷ふなる、女扇と御影堂。

トこの文句のうち、團扇賣り四季の庄兵衞、やつし白股引、手甲巾、草鞋にて、跳らへの兩掛け、團扇の荷を擔ぎ、澁團扇を持つて出て來る。

〽これも後から月に柄を、流石にかろき團扇賣り、我れも昔は色柄を、握つた腰の辨當も、しめねど邪魔に奈良團扇、心も有頂天地金、彼の文さへも今は早、反古團扇とも深草の、靡き安さよ風と風、時に扇と團扇賣り、かろい商賣氣もかろく、頭に宿る紙細工、はつて見る氣か乘りが來て、なんと結綿久し振り、割り花菱とはどでごんす。

しづ　エヽ、なんの事でござんすぞいなア。最前から後になり先になり、肝心の團扇は賣らしやんせいで、お前も餘ッぽど、なまくら者ぢやわいなア。

庄兵　なんの、なまくら者でごんせう。わしは久しく休んで居りましたに依つて、なんでもこれから精出さうと思ふ所へ、扇賣りのぼつとり者。名に負ふ粂の先生さへ、通を失ふは白股を見てからの事サ。殊に凡夫の團扇賣り、こなさんに引かされて、浮か〳〵と爰まで來ました。姐さん、お前はどこから出やしやんさる扇賣りだえ。

しづ　聞かれてなんと巖崎の、ほとりに一人隅田川、靜と云ふ扇賣りぢやわいなア。

庄兵　靜心なくとは奧床しい。わしやア箕輪の灰吹長屋、四季の庄兵衞と云ふ團扇賣りサ。

しづ　なぜに四季の庄兵衞とは云はしやんすえ。

庄兵　なんでも五條に替る際物商ひ。煤掃竹から削りかけ、團扇もやらず遁がさず、今は時分の團扇賣りサ……更紗團扇や澁團扇。

しづ　扇召しませ。

庄兵　團扇をお買ひなされて下さりませ。

しづ　イエ、扇をお召しなされませ。

庄兵　どうぞ扇を買うて下さりませ。

しづ　イエ〳〵、團扇を召しませ。

庄兵　コレサ、あんまりかつかちめくるから、賣り物が間違うた。

しづ　ほんにさうでござんしたなア。併し、團扇も扇も遁がれぬ仲。これから仲よう、一緒に商ひせうぢやないかえ。

庄兵　サア、それがわしが久しい願ひだわな。扇も爰へ一

緒にして、坊主持ちと出よう。

ト庄兵衞、一つに荷を擔ぎ

扇々、團扇々々。あんまり横ッ倒しのやうだ。

しづ　エ、モウ、どうなと云はしやんせいなア。

〽心も合ひし荷ひ賣り、打ちかたげてぞ歩み來る。

ト庄兵衞、お靜、本舞臺へ來り、庄兵衞、左金吾を見て

庄兵　サア／＼、これからこなた／＼。

しづ　なぜにえ。

庄兵　アレ、坊主々々。

しづ　ありや內に居さんす坊さんぢやわいな。行き合はぬうちは、お前ぢや／＼。

庄兵　行き合つても行き合はいでも、そこが坊主持ちのところサ。

しづ　イエ／＼、そりや無理でござんす。

庄兵　其方が無理だ。

しづ　イエ、お前が。

ト兩人爭ふ。左金吾、門口へ來て

左金　商ひ人達、何を其やうに爭ふのぢや。

庄兵　ソリヤ、行き合うたから否應は云はさぬ。

しづ　どうもこれでは、無理は云はれぬわいな。

左金　イヤ、最前から聞いて居れば、坊主が來たの、坊主持ちのと、愚僧に當てつけた二人の商ひ人。なんで其やうに、坊主々々と呼び立てるのぢや。

しづ　こりや、なんでござりまする。あなたに扇を行させませうと存じまして。

左金　アノ扇を

ト左金吾、お靜をキッと見て　愡りして

ヤア、其方は高尾ぢやないか。

しづ　エ、。

ト愡りして思ひ入れ。

左金　ア、、、迷うたり／＼。太夫はこの世に居やらぬもの。戀しい床しいと思ふ心の迷ひ。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

庄兵　モシ、御出家樣え。その身に似合はぬ、戀しいの床しいのとは、なんの事でござりまする。

左金　成る程、この身にそぐはぬ悔み事、さぞをかしう思やらうが、出家をしたのは後の世の爲でもなし、父母の爲でもなし、二世と誓ひしその人に、別れしゆゑの世捨て人。戀ゆゑ剃つた仇坊主サ。

庄兵　アヽ、成る程、土手の西應寺、高尾の紅葉のその下に、通ふ和尚ありと聞きましたが、お前樣でござりましたか。
左金　愚僧が土手の道哲といふ、色修行の道樂坊主サ。
庄兵　イヤモウ、お名は聞いて居りましたが、間違ひましてお目にかゝりませぬ。コレ〳〵、女中、内へ入つて、お近附きにならつしやい。
しづ　入りませいで、なんと致しませう。
庄兵　大入りに入りませう。
　ト兩人内へ入る。
兩人　マア、一服たべませうか。
左金　見たところが、扇賣りに團扇賣り。マア、どちらから求めやうぞ。
しづ　どうぞ扇から、お召しなされて下さりませ。
庄兵　イヤ、團扇からお買ひなされて下さりませ。
しづ　イエ〳〵、扇から。
庄兵　イエ、團扇から。
左金　コレ〳〵、其やうに爭ふより、マア、この世始まつて、扇が先へ廣がつたか、團扇が先へ始まつたか。なんでも先へ始まつた方から買うてやらう。どちらが先ぢや。

庄兵　サア、これはむづかしくなつて來た。扇が先か、團扇が先か、知りやアしまいが。
しづ　サア、それは。
庄兵　しやつとでも云つて見やれ。
しづ　東西々々。
〽扇は漢土が初めにて、世界の風を手の内に、ちつとしめたる情知り、一人寢る夜の閨の伽、てんと堪らぬ東海の、三國一の懷ろへ、置きまどはする月雪や、花の夕顏しろ〴〵と、色に扇の目せき笠、かざす音頭の口開き。
〽人の心の花の露、濡れにぞ濡れし鬢水の、はたちかづらの水際の。
〽立つや白地が淺黃地に、ざつと墨繪の一筆烏、戀の要めぢやないかいな。
〽いや〳〵、おしやますな、そもや團扇は天竺に、白月といふ美人あり、淸秋の三五夜に、心も澄みし月を見て、初めて團扇を製しつゝ、三伏の暑を拂ふ便りとて、法界の空理を悟る、唐土にては舜の李拂、日の本にては信濃なる、小柴の翁が皺苦茶に、澁い顏して貼つたゆゑ、澁團扇とは申すなり。
　トこの文句のうち、左金吾、お靜を引寄せる。

庄兵　ア、、コレ〳〵、こりやア、どうだ〳〵。
　ト庄兵衛、左金吾を引退ける時、はした錢を落す。
わしにばつかり口をきかせて置いて、出家の身の、あらう事か、あるまい事か、女を蕩らすと云ふ事があるものでござるか。と云ふは噓。ズッと其方へ寄つたり〳〵。
　ト庄兵衛、お靜を左金吾が側へ突きやる。左金吾、立ちあがり
左金　ア、、寄るまい〳〵。假にも佛の眞似をする道哲。なま中似た者の、顏を見ると思ひの種。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。とは云へ、ハテ、よく似たワ。
しづ　エ、。
　トお靜、恟りする。庄兵衛、落ちたる錢を探し、見物に見せて拾つてゐる。
左金　とりなりまでが其まゝぢや。
しづ　わたしが誰れに似ましたえ。
　ト左金吾、襠裲を持つて來り、お靜に着せ
左金　この道哲が、二世と誓ひし三浦屋の、高尾太夫に生寫しぢや。
庄兵　似たこそ幸ひ、あの女中を相手にして、高尾太夫に馴れ染めの、そのお話しが承はりたい。

左金　成る程、懺悔に罪も消ゆる道理。形見に殘る襠裲を見るにつけても思ひの種。
兩人　して、その馴れ染めは。
　ト左金吾、庄兵衛が持つて居る錢を取つて、錫杖にして
〽うけ給ふ、下は次第の天王なり、いでその頃は正月二日の事なりしが、廓は跡着の着衣初め、船乘り初めともやい解き、柳橋より押し出して、北へ〳〵と急がるゝ。
〽そも〳〵その日のいでたちは、羽織は羽二重、三所の紋日物日の嫌ひなく、通ひ馴れても衣紋坂、とつと云うて囃された。
〽もしやそれかと見返り柳、まだうら若き仲の町、茶屋が見附けて、これは〳〵旦那、ようこそ〳〵、先づは年始の御祝儀と、笑顏を重ね組重に、屠蘇の機嫌の睦まじく、打連れ立ちし揚屋入り。
左金　その大寄せは廓の名取り、端から端へ橋立の、數も千山、引連れて、茶屋の床几に立ち並び
庄兵　誰れを鶴町。
しづ　間夫を雛松。
〽松山に、花紫を染之助、打ちかけ九重綾しゝの。

ト庄兵衞、襠裲を取つて來て

庄兵　小褄をしやんと、斯う取つて

〽袖にかをりを瀧姫や、わたりに丁度瀧橋わたし、てんと玉菊たをやぎ姿。

ト　お靜、團扇の竹に通したる荷を提灯にする。

左金　その鶴の尾に釣られぬうち、さらばお暇いたさうか。

庄兵　コレ、待つた。

〽わしが心を疑はしやんすかお惡かろ、この陸奥は戀ゆゑに、細くやつれし絲瀧や、深くぞ思ひ深川の、いつか氣儘に花扇、逢はぬよたゞは一夜も千春、逢うたその夜は磯山瀬山、たんと話しも在原なれど、あれみさ山の明けわたり、空に一筋小紫、口舌篠原つい住の江の、又の御見を松の戸を、明くるは茶屋の朝迎ひ、寢覺めの顏とり機嫌どり、押しつけあなたの花妻と、瀬川たゝいて詞の八汐、連れて巣立ちの雛鶴や、賤機なりでばた〳〵と、廊下を傳ふ瀧川の、流れて深き山谷船、押せやれ男の子、二挺立ち三挺立ち、椎の木ぢや、合點ぢや、拍子とりどり下がり船。

〽見れば見渡す、棹さしや屆く、なぜに屆かぬ我が思ひ、ほんにさア。

〽さす手も汐に濡れ染めて、君の心を取り楫や、氣も重楫をわつさりと、ざつと騷いで座座敷、茶屋船宿に若い者、遣り手禿を取り込み勝負、マア〳〵爰へと無理やりばなしの取持ち顏。

ト庄兵衞、無理にお靜に襠裲を着せ、左金吾が側へ突きやる。

〽二枚屏風の風しのぎ、如何なる夢をや結ぶらん。

ト無理に庄兵衞、兩人を屋體の内へ入れる。簾下りる。

庄兵　ヤレ〳〵、草臥れた。さらば一服いたさうか。

ト煙草盆を引寄せ、煙草をのむ。下座にて、ヒイと笛の音する。

あの音色は、慥かに山鳥の印。

トきつとなる。

過ぎし永享の頃ほひ、播州白旗の城に於て、御落命なされし滿祐公の、妄執を晴らさんは山鳥の印。あの三浦屋の高尾こそ、太田道三の落胤なれば、死去の後は高尾に送ると聞きしが、山鳥の印は浮田左金吾に預けしと聞きしゆゑ、所々方々を尋ねしが、この家の庵主道哲こそ、正しく浮田左金吾。あの扇賣りの女に心迷はされしこそ幸ひ、閨へ忍んで、ソレ。

ト庄兵衛、行きにかゝる。屛風の内より、左金吾、以前の襠補を抱へ出て來り

左金　今の女は、どれへ參つた。

庄兵　コレ、お坊、どうさしつた〳〵。

左金　不思議なるは、扇賣りの靜とやらん。屛風の内へ入ると思へば夢現。手に殘りしはこの襠補。戀し床しと思ひしゆゑ、心の迷ひか。とんと合點がゆかぬわえ。

庄兵　そりやアとんだ事だ。得て、物に凝ると、狐や狸が、その人に化けて來ると云ふ事だ。オヽ、怖い怖い。そりやア狐だ〳〵。マア、氣をゆつくりと、落ちつけさつしやるがいゝ。

ト庄兵衛、左金吾が後に廻り、左金吾が胸を擦る振りにて、懐中へ手を入れて、山鳥の印を取出し

こりやコレ慥かに山鳥の

ト左金吾、悧りして

左金　イヤ、こりや山鳥とやらではない。さるお屋敷より布施物に貰つた品。佛の布施を剝がさうとは恐ろしい。地獄へ落ちるぞや。

庄兵　ヤア、落ちつくまい。道哲と云ふは浮田左金吾。此方に入用の山鳥の印。おれが目にかゝつちやア、猫に鼠、此方へ渡せ。

トちよつと立廻りにて、左金吾を引据ゑる。ドロ〳〵にて日覆より魂ひ舞ひ下がり、庄兵衛を引きつける。庄兵衛、苦しみ、バツタリと倒れる。

左金　さては疑ひもなき高尾が執心。生中形見の襠補や、預け置きし山鳥の印が、あるゆゑに浮まれまい。其方と思うて今までは、肌身離さず留め置きしに、我が身の誤まり。山鳥の印諸ともに、この荒川へ沈めしなら、我が執心も晴るゝ道理。思ひ切つて、それ〳〵。

ト左金吾、山鳥の印と襠補を一つにして、前の浪板の切り穴へ落し

所詮我が身にそぐはぬ物。流してしまへば思ひは殘らぬ……出離生離頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々。

ト回向する。大ドロ〳〵になり、魂ひ切り穴へ落ちる。左金吾、うつとりとなる。時鳥啼く。

〽冥途の道を敎へ鳥、死手の田長と聞く時は、實に味氣なき短か夜や、別れの鳥は里ばかり、啼いてぞ人に告げ渡る、去りし高尾が立ち姿。

ト寢鳥、ドロ〳〵、煙硝火パツと立つ。高尾、白の襠補衣裳にてセリ上がる。

〽消えず消えずみ水の月、うつり心はあるなれど、思ひ切る瀬と氣強うも、岩間にとんと碎かれて、流れ寄る淵の波枕、過ぎしかね言忘れてか、花は根本へ返り來て、現にまみえ、さむらふぞや。

ト大ドロ〳〵。

〽申し〳〵左金吾さん。

ト左金吾、起き上がり、恟りして

左金　ヤア、其方は。

高尾　高尾ぢやわいなア。

左金　コレイナウ、其方はまだ、迷うて居やるかいの。

高尾　迷うて居るとわえ。

左金　賴兼が計らひで、浮世戸平が手にかゝり、この世を去りやつたぢやないか。

高尾　サア、この世は去つても去りやらぬ、輪廻の絆、形見の小袖諸ともに、お前にお預け申したる、山鳥の印までも、なぜに川へ沈めて下さんした。恨みを云ひに來ましたわいなア。

左金　ヤ、、、。なんと。

〽哀れこの身は浮川竹の、沈みもやらず浮きもせず、變り果てたる三つ瀬川、昨日今日まで肌と肌、鴛鴦の衾の羽を並べ、塒放れぬ一つ夜着、重ね羽うとし二人寐て、未來は蓮の臺ぞと、筐に殘すから衣、着つゝ馴れにし甲斐もなく、この荒川の藻屑とは、添はぬ心か情なや、氣強いお方と身を背け、恨みかこつぞ誠なり。

〽よし我れとてもいつまでか、憂きを浮世に永らへん、あの世は上品淨土にて、二人暮らすが極樂と、引寄せられて心で笑ひ、例へ嘘でも其やうに、云はんす人を殘し置き、なんのこの身は浮かもぞえ、それゆゑ水に誘はれて。色の世界に隅田川、深い淺いはよう汲み分けて、庵崎の、いつか廓を花川戸、待乳に殘す里詞、三浦兵庫も投げ島田、結んで見たいが山の宿、無理な願ひも金杉の、毘沙門さんへ朝詣り、浮氣心に騙された、女子心はさうぢやないわいな、片時逢はねばくよ〳〵と、涙を隱す薄化粧、泣けばこそ向ふ鏡の影曇り、逢はうとすれど物云はず、見ずや知らずや味氣なき、心ぞ心迷はすれ。

ト高尾、左金吾に縋りつく。庄兵衞、透かし寄り、仕込みを拔いて

庄兵　左金吾觀念。

ト庄兵衞、左金吾に切りつける。大ドロ〳〵にて、庄兵衞、立ちすくみになる。

左金　さては四季の庄兵衛と云ひしは、赤松の餘類でありしよな。

庄兵　斯くなる上は聞かずとも、名乘つて聞かさん。山名細川が計らひにて、播州白旗の城にて亡びたる、滿祐が身内に於て、鷹の嘉藤次國連とは、おれが事だワ。

左金　さてこそな。

庄兵　兼て意趣ある足利家、滿祐公の弔ひ軍に、なくて叶はぬ山鳥の印。嘉藤次に渡せばよし、異議に及ばゞ目に物見せん。

左金　山鳥の印は、荒川へ沈めし上は、この左金吾は存ぜぬ知らぬ。

庄兵　ナニ、荒川へ沈めしとや、

高尾　左金吾さん、此方へござんせ。

ト高尾、左金吾を圍ふ。

庄兵　くたばつてしまへ。

ト嘉藤次、また切りつける。

〽ひらりと見せし電光石火、深山颪しに吹きおくる、冥途の迎ひの責め太鼓、悶え苦しむ有樣は、恐ろしなんども愚かなり。

ト高尾、苦しみながら、庄兵衛を投げ退け

高尾　左金吾さんのお身の上に、凶事があれば、この高尾が附き添ひ、冥途の道連れ。覺悟しや。

左金　心をかけし山鳥の印、沈めし上は、發起して心を改めよ。

庄兵　ヤア、事をかしや。山鳥の印、藻屑となせし上からは、幽靈ぐるめに地獄の罪人。覺悟なせ。

ト大ドロ〳〵にて立廻りあり

兩人　ドツコイ。

トとまる。

〽煩惱業火の苛責の杖、劍の山も今眼前、ありと見ゆれば水の月、雲を彩どる稻妻の、手にも取られず。

〽見れば又、昨日今日まで作りなす、牛王誓紙の血の烏、可あい〳〵と啼きもせず、吸ひつけ煙草焦熱の、焔となつて身を焦し、別れの酒は三途の流れ、白粉忽ち紅蓮の氷、紅は即ち阿鼻地獄、打てば飛び退き拂へば開き、くる〳〵くると、纏ひつけたる輪廻の絆、離れ難なき妄執の、冥途の罪を西方寺、彌陀の光りに晴れ渡り、印に一樹ぞ殘りけり。

ト三人よろしくあつて、高尾、山臺の上へ上がり、兩人並よく、ドツコイととまる。

左金 これより二番目追善狂言始まり左様。

ト打込みにて、チョン〳〵、

幕

全盛伊達曲輪入（終り）

解　說

渥美清太郎

歌舞伎の中で、書替への數の多い狂言はと言へば、どうしても「曾我」に敵ふものはない。江戸で毎年三座の新作、京阪での盆替り、兩方合せたら大した種類になるであらう。特殊な顏見世狂言は別にして、その次に多いのは「忠臣藏」それから「伊達騒動」である。忠臣藏に書替への多いのは尤もだと頷けるが、「伊達騒動」に書替への多いのは、ちよつと考へると不思議なやうである。併し、これも忠臣藏が持囃されると同じ理由からであらう。大きく云へば日本の國民性に、筋の根本が一致してゐるからであらう。

伊達騒動を狂言に仕組んだのは、いつが最初か、未だ明瞭でない。延享元年三月、江戸市村座所演の「開闢今川狀」は、慥かに伊達騒動だと信じられるが、これよりも前に脚色されてゐるといふ說もある。「鉢の木」や「義經記」の世界に組まれて、その以後度々出た事は慥かである。併し、これこそ伊達騒動だと看板打つて、正式に上演したのは、江戸では安永元年七月森田座の「けいせい紅葉襠」であらう。これには五世市川團十郎が、澤田縫殿（原田甲斐）の姦臣と、松ケ枝關之助（松前鐵之助）との忠臣を兼ねて大評判であつたが、再演はされなかつた。江戸で一の當りは、「伊達競阿國戲場」で、今日行はれる伊達騒動には、これが最も緣が深い。

京阪では本卷收錄の「けいせい睦玉川」が最も古いやうである。そして一番行はれてゐる。安永六年四月、中の芝居に上場された「伽羅先代萩」は奈河龜助の作であるが、名題は今日まで傳はつても、「政岡飯焚の段」以外は行はれず、しかもその件は本卷收錄の「伊達競」へ併合されてゐるので、今度は割愛する事にした。

伊達競阿國戲場

安永七年七月、中村座に上場された初世櫻田治助の作で、伊達騒動狂言中、最も上演數の多い、現今行はれる同狂言の根本をなしてゐるものである。伊達騒動を一番目に、累の傳說を二番目に組み合せたのは、この時が最初ではないが、何をいつても同種劇中の傑作だ。尤もこの初演の脚本は傳はつてゐない。本卷へ收めたのは、文化五年三月市村座で再演した時のものである。初演が當つたので、翌八年三月肥前座で操淨瑠璃に仕組み、その院本は勿論、節附の

一部は傳はつてゐるが、中村座の初演が、この院本の通りだとは云へないのである。

初演の役割を爰に記して置く。

山名宗全（中島三甫右衛門）黒澤官藏。羽生村の金五郎（大谷友右衛門）鳶の嘉藤太（澤村澤藏）大江の鬼貫（市川純右衛門）傾城高尾。持氏息女待宵姫（中村粂次郎）丁稚豆太。尤道理之助（大谷德次）井筒女之助（市川門之助）仁木彈正（大谷廣右衛門）妹累（四世岩井半四郎）豆腐屋三郎兵衛。足利頼兼（坂東三津五郎）絹川谷藏。渡邊民部（四世松本幸四郎）荒獅子男之助。細川勝元（五世市川團十郎）

再演の脚本が、初演とどれほど違ひがあるかといふ事は問題であるが、大體に於て同じであらうと云つて差支へない理窟はある。たゞ「政岡飯焚の場」は勿論再演から加へられたもので「伽羅先代萩」から取つて來たのであるが、原作は大坂出來だけに義太夫が使つてあるのを、江戸式に全部取拂つて、獨吟だけにとゞめたのは面白い。江戸としてはこの方が本格なので、弘化頃までは一切チョボなしなのであつたが、大坂俳優が江戸で巾を利かすやうになつてから、再び義太夫を加へるやうになつたので、しかも原作の文句は使はず、天明五年結城座の操淨瑠璃化された「伽羅先代萩」の方が、曲として流行するところから、これを持込んで使つてゐるのである。累の件にしても同じ事で、この頃やる累はいつも義太夫を地にしてゐるが、素で行く本巻の脚本の形式が本當なのである。義太夫を使ふのは人形の逆輸入なのである。

今日「伽羅先代萩」の名題で、いつも上演される伊達騒動の順序は「花水橋」「竹の間」「御殿」「床下」「對決」「刄傷」となつてゐるが、この形式は、大體この再演の「阿國戯場」に據つてゐる事は、お讀みになれば解る。たゞ「政岡飯焚の段」が、原作では源平の世界になつてゐるのを、東山時代の「伊達競」へ加へた爲、梶原景時が山名宗全となり、管領の使者が足利家へ乘込んで威張り散らすといふ不合理な筋が出來たのは是非もない。

再演の役割は左の通りであつた。

井筒外記左衛門（助高屋四郎五郎）細川勝元（澤村源之助）井筒女之助。羽生村の金五郎（尾上榮三郎）傾城高尾。左馬之助妻此花（芳澤圓次郎）無理之助妻雛波。園生の前。娘河内（市川團之助）當麻園幸鬼貫。山名奥方榮御前（市川宗三郎）丁稚豆太。鳶の嘉藤太。（坂東鶴十郎）笹野才藏。奴門平（市川門三郎）黒澤官藏（桐島儀右衛門）判人文吉（松本小次郎）傾城薄雲（中村春之助）傾城高崎（岩井龜次郎）傾城高窓（岩井瀧次郎）西川屋お作。泥之助妻磯野。百姓娘おそよ

（山下萬作）道益妻小まき。山中鹿之助（花井才三郎）足利鈋若君（坂東簑助）一子千松（岩井松之助）鸚鵡市兵衛。岩淵蓮八（尾上斧藏）奴梅平。佐渡島原八（嵐新平）荒獅子男之助。所化莿海（七世市川團十郎）彈正姉八汐。山名宗全（尾上松助）乳人政岡。妹 累（五世岩井半四郎）足利賴兼。豆腐屋三郎兵衛。渡邊民部逸友（三世坂東三津五郎）仁木彈正。絹川谷藏（五世松本幸四郎）

萬歳阿國歌舞妓（はんぜいおくにかぶき）

「伊達競」を伊達騷動劇の本流とすると、これは傍系である。江戸での書替へ物のうちで、ズッと後世に出來た、大分横道へ踏み込んだ例として爰へ加へたのである。文政十年四月、市村座に上演されたもので、二世櫻田治助の作にかゝる。土手の道哲が民谷與右衛門といふ役に變つて、四谷怪談の影響を見せたり、男之助が相撲になつてゐたり、政岡飯焚を世話場でしかも男で見せたり、大分南北好みの御趣向澤山であるが、「孫茶の丹助」といふ傑作の一幕があるので、有名になつてゐる。この幕だけは今でも時折上演されるのである。

土手の道哲と鳴神鶴之助が喧嘩の件は、當時旗本と相撲がこれに似た事件を起したので、當込んだものださうである。伊達騷動も三面記事を取入れるやうではもう末である。尤も明治になつてからの書替へ物では、相馬事件を持込んだ作すらあるが。

初演の役割は左の通りである。

金井筒外記左衛門。角力鳴神鶴之助後ニ松ヶ枝關之助。金谷金五郎實ハ渡邊民部逸友（三世坂東三津五郎）千東屋女房おせん。丹助女房およ（小佐川常世）大江の鬼貫（成田屋宗兵衛）荒物屋無理右衛門（坂東三津右衛門）尤道理之助（市川八藏）丁稚豆太（坂東大吉）大場宗益。大崎倉右衛門（桐島儀右衛門）川瀧屋文藏。高白金左軍太（澤村川藏）下女おやま（岩井辰三郎）高縄穴五郎（岩井長四郎）袖崎小文次（松本五郎市）蔦の嘉藤次（坂田半十郎）黑澤官藏（市川宗三郎）傾城高窓（市川三之助）仲居おとく（岩井春次）土子泥之助（市川友藏）下部茂佐八。森山長兵衛（坂東彥左衛門）奥女中沖の井（市川おの江）豆腐屋おくら（中山文五郎）木戸の嘉兵衛（市川友藏）三浦屋薄雲實ハ菊姫（中山龜三郎）奇妙院滿海。伊皿子大八（中島勘左衛門）岩手助八（津打門三郎）一子千松（荻野藤十郎）鶴喜代君（坂東三八）山中鹿之助（荻野伊三郎）山名宗全。遣り手おくま實ハ八汐（澤村しやばく）足利賴兼。山名

河内之助（坂東彥三郎）三浦屋高尾。豆腐屋娘累。嘉兵衞娘夕ぐれお六。金五郎女房小さん（岩井粂三郎）若黨汐澤丹助。土手の道哲實ハ島田十三郞。仁木彈正。細川勝元（七世市川團十郞）島田女之助（十二世市村羽左衞門）

豆腐屋娘累は、番附ではお谷といふ役名になつて居るのだが、脚本が累となつてゐるので、その方に從つて置いた。

けいせい睦玉川（むつのたまがは）

明和四年正月、大坂中の芝居に書き卸された狂言で、京阪での伊達騷動劇では一番古いといつてもよろしい。併し、後の「伽羅先代萩」よりもズツと流行つたもので、明治になつてさへ時には上演した程である。殊に「藤棚の場」は大好評で、この幕だけは江戸でもやつた事があるし、義士銘々傳の中へも取入れられ、默阿彌でさへ「小春穩沖津白浪」の中へ書き込んだ位であつた。

「先代萩」が源平時代「伊達競」が東山の世界を使つたのに對して、これは近江の佐々木家騷動に背景を持つて行つたのが珍らしい。後に出來た書替へでも、この世界に據つたものが大分ある。京坂の二の替狂言の特徵として、世界をウンと手廣く取つてお家世話兩境に跨り、筋を複雜に人物を多く活躍させたところ、正に大規模な書き方で、作の少ない並木十輔の中では殊に目立つて巧い作である。

「先代萩」が仙臺を利かせ「伊達競」が伊達家を當込んだに對し、これは「睦玉川」で陸奧を匂はせた名題の附け方も氣が利いてゐる。その爲にわざ〳〵玉川の場を出したり、高野山の毒水を出したり、名題の爲に大分苦勞をしたやうである。

初演の役割は左の通りであつた。

帶刀娘おぬひ（山下岩太郞）饅頭屋女房おせん（花桐豐松）渡井銀兵衞。澤井勘平（染川此兵衞）淺井兵庫。神原丹左衞門。山井養仙。二九屋源右衞門（坂東岩五郞）名古屋十三郞。弟銅吉（嵐三五郞）傾城高尾。勘平妹おるい（澤村國太郞）饅頭屋鐵八實ハ松島敵之助。民屋一角（嵐吉三郞）岩倉主膳（中村吉右衞門）奧方萩の方。玉川のおりく（中村玉柏）雷雲右衞門。神並庄九郞實ハ才原大藏（三桝他人）大館法印（芳澤十三）饅頭屋おとら。後室是妙院（山科新五郞）傾城葛城（中村八重藏）傾城遠山（淺尾虎吉）傾城和國妹千草（嵐仙之助）數高屋善七（中村瀧藏）佐々木六角。片桐彌十郞。一文奴三太兵衞（中村十藏）浮世戶平。秋塚帶刀（三桝大五郞）荒川浪之助實ハ玉川の小浪。惣嫁おきぬ實ハ帶刀妻淺香（中村富十郞）才原勘解由。豆腐屋

權兵衞（初世中村歌右衞門）

伊達染仕形講釋（だてぞめしかたかうしやく）

天明二年八月、中村座に書き卸された書替への一種で、初世櫻田治助の作である。この時代には、殆んど毎年のやうに伊達の狂言が上演されてゐる。これもその一種で、別に特殊な變つた點もないが、たゞ「不破名古屋」の世界が混合され、仁木彈正の代りに伴左衞門が活躍し、葛城が淺香になるといふ點が珍らしい。これは後世に至るほど、よく摘交ぜられたもので、本脚本はその初期の作であるからその方面の代表として收めたのである。

初演の役割を左に記す。

山三女房葛城（中村里好）荒川次郎時綱（市川升藏）斯波左門（尾上政藏）石川兵右衞門（市川綱藏）一藤太國景（中村儀藏）名和無理之助（松本大七）男之助妹初風（澤村晉川）石堂內記（市川門之助）小野のお通（山下萬菊）民部女房萩の戶（瀨川乙女）山名宗全（尾上松助）足利賴兼、細川勝元（三世澤村宗十郞）南都正庵（中島三甫藏）大江鬼貫（松本小次郞）奴團平實ハ渡邊民部（坂東又太郞）傾城高尾（三世瀨川菊之丞）不破伴左衞門（中村仲藏）名古屋山三（五世市川團十郞）

この狂言は、享和三年二月、中村座で再演された。本卷に收めたのは、この再演の時の脚本である。再演の折は、初演のを大分カットしたので、幕數は餘程減じてゐる。その上、底本にした臺帳に三幕目が缺けてゐるなぞ、頗る不本意なのであるが、前にも云ふ通り「不破名古屋」の世界を入れたのが珍らしいのに、一つは「高尾の提斬」の古い所がこれには出てゐるので、それをお目にかけたい爲に出したのである。

再演の役割は左の通りであつた。

名古屋山三。足利賴兼（三世坂東三津五郞）細川勝元（荻野伊三郞）大江鬼貫（松本國五郞）一藤太國景（坂東善次）石堂內記（尾上雷助）山伏高傳院（松本小次郞）民部妻萩の戶（芳澤民之助）石川兵左衞門（中村勝五郞）傾城高尾（瀨川路三郞）山中鹿之助（尾上紋三郞）荒川次郞（小川重太郞）山名宗全。南都正庵（嵐三八）土子泥之助（嵐新平）名和宮藏（市川仙藏）小野のお通（市川おの江）渡邊民部（坂東八十助）山三女房葛城（中山富三郞）不破伴左衞門（五世松本幸四郞）

全盛伊達曲輪入（ぜんせいだてくるわいり）

享和元年四月、市村座に上演した同じ書替へ物で、これとて特異な點は少ないが、たゞ、伊達騷動狂言中、特殊な地位を占めてゐる「高尾懺悔」の一幕が完全に收められてあるので、それを御紹介したい爲に加へたのである。「高尾懺悔」といふのは、高尾の亡靈が迷つて出て、男の前で在りし昔を物語るといふやうな意味で、既に延享元年正月、市村座で市村滿藏が勤め、その長唄は今日猶殘つてゐるが、その後も度々いろ〳〵な名題で豐後節で演じられ、高尾は代々の菊之丞が、家の藝としていつも勤めてゐるが、これもその一種で、なか〳〵後世に流行つたもの。現に今でも富本節に殘り、震災前に淺草蓬萊座で、尾上榮次郎が高尾を踊つた事もある。伊達狂言としては逸し難い一つなのである。豆腐屋庄兵衞のキビ〳〵した惡形は、五世幸四郎になつた高麗藏の藝を見て、作者の奈河七五三助が書き卸した役である。この庄兵衞と、淨瑠璃へ出る四季の庄兵衞とは、名前が同じだけに同一人のやうに見えるが、これは勿論別な役と認めるべきではあるまい。

初演の役割は左の通りであつた。

傾城高尾（三世瀨川菊之丞）荒獅子男之助（七世市川團十郎）豆腐屋庄兵衞。浮世戸平。仁木彈正。團扇賣り實ハ蔦の嘉藤次（市川高麗藏）足利賴兼（五世坂東三津五郎）醫者飛田剛敵（嵐冠十郎）土子泥之助（坂田時藏）刀屋石見（澤村元右衞門）名和無理之助（坂東傳吉）尤道理之助（澤村壽之助）多治見次郎（坂東辰藏）筑波婆ア（松本國五郎）鶴千代君（瀨川政之助）井筒女子助（尾上紋三郎）荒磯大右衞門。横山彌惣（富士川國藏）下部杣平（中村勘左衞門）田町の銀七。强寂法印（嵐他藏）丁稚豆助。下部砂利平。八田八郎（市川七藏）當麻圖幸鬼貫（市川染五郎）荒川藏人（中村鶴五郎）妹政岡（瀨川雄次郎）薄雲母お北。斯波外記左衞門（山科四郎十郎）傾城薄雲後ニ女房お國（瀨川菊之助）角力、小波勝之助。賴兼姉橋立御前（岩井喜代太郎）山名宗全（藤川武左衞門）豆腐屋三郎兵衞。細川勝元（荻野伊三郎）彈正妹田村（姉川菊八）石堂兵庫。浮田左金吾（市川八百藏）

○

以上五種の脚本、いづれも同じ材料の狂言だけに、似た場面が隨分ある。殊に高尾の件と對決の場とは、五種ともに共通してゐるが、併し、東西と隔り、年代が違ふと、筋も段取りもセリフも、すつかり變つてくる所を注意すべきである。比較研究には御便宜と思ふ。中に「伊達競阿國戲

場」が、今日から見れば本筋ともいふべきで、古いだけに現今のそれとは大分違つてはゐるけれど、洗ひあげない元のまゝに近い點が却つて重要なのである。「今盛伊達曲輪入」では高尾殿解が解り、「伊達染仕形講釋」は不破名古屋と混合した系統を代表し、「前岩嵜阿國歌舞伎」では末期の變態書替への調子が呑み込める。以上四つが江戸の作なのに對し、「けいせい睦玉川」が京坂での傑作で、全然行き方の違つた所がお慰みである。先づこの五篇を御覽になれば、歌舞伎で重要な世界の一つ、伊達騷動狂言の組織や變遷は、一通り御了解出來る事と思ふ。

○

例に依り、年代、役割、カタリ等の調べや、挿繪の材料調達に關して、山形の秋葉芳美氏に、一方ならぬお世話になつた事を、爰に記して謝意を表する。

編輯校訂責任
渥美清太郎
鈴木　侃

日本戯曲全集・第十六卷
伊達騷動狂言篇・第十一回配本

編纂者檢印

昭和四年五月廿八日印刷
昭和四年五月卅日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋三七八一・六四一
振替東京一六一一七八

製版所　新倉東文堂

（神田區・松下町・七番地・明治印刷株式會社印刷）